

&quot;Stay,  
Heaven&#39;s  
Blade&quot; Fate  
said. ☒「その天の刃、  
待たれよ」と『運命』  
は言った。☒

haru970

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

きが つけば まわりは ほのお。そして こえ こえ こえ。

おとこのひと、おんなのひと、こども、あかちゃん、いぬ、ねこ、とり。

みんな さげんでいた。でも だれも こたえてくれない。

わたしは——なに？

はじめて の こえ は

「初めまして、僕の名は——切嗣。『衛宮切嗣』というんだ」

これは『自分』を探す少女の旅の物語。

|||||

こんにちは、初めまして、作者のharu970です。

手に取って（画面に映して？）誠にありがとうございます。

この作品はもう一つの作品“俺と僕と私と儂”に出てくるキャラの外伝っぽいストーリーで、バカンス取ろうと誘ったからにはハッピーエンドを指す（自称）姉は言った”の前日譚っぽい作品ですが、読んでいなくても楽しめるように書いています。

興味がある方達にリンク：

バカンス <https://syosetu.org/novel/243278/>

俺と僕と私と儂 <https://syosetu.org/novel/2397>

83 /

よろしくお願いします！

1 / 5 / 2021 追記、タグとあらすじを修正しました

# 目次

本編

第1話 始まりは泥と火の海から

1

第2話 Welcome to 冬木

市 15

第3話 『家族』である故の苦難

25

第4話 カラスがガーガー鳴いて

……いなかっただ！ 45

第5話 雨の中のワカメと雨も滴る良

い女………の子 60

第6話 「That」 Fated N

ight 84

第7話 袖すり合うも他生の縁

112

第8話 虎口を脱し、竜穴に入る

131

第9話 セーフ？ アウト？ 158

第10話 Down the Hole

e We Go 179

第11話 籠鳥雲を恋う 205

第12話 血涙を絞る少女達、そして

夢は逆夢 232

第13話 怒れる拳、笑顔に当たらず

257

	第14話	一場の春夢(前編)	274		第21話	ばーさーかーはさいきよう	
	第15話	一場の春夢(後編)	295		なんだ!		432
	第16話	気に病むヒトの子等	315		第22話	弓を使わないアーチャー	
	第17話	Boy Visits Girl			第23話	「兄妹」と「姉妹機」と「姉妹」	478
	第18話	ポロリもあるヨ!(あり)	339		第24話	手探りでの探し物	499
	第19話	月下美人(達)	387		第25話	「ずれ」の捉え方	519
	第20話	夢と低血圧と中華と『お姉ちゃん』	412		第26話	「汚物は消毒すべきだ」	543
					第27話	(周囲の)悪意によって歪んでゆく(筈の)被害者達	562
					第28話	The Unknown	

			Scars Us All	578
			第29話 人外、怪物、怪獣、そして好き なモノ	593
			第30話 アーチャーと言う男(前編)	611
			第31話 アーチャーと言う男(中編)	631
			第32話 アーチャーと言う男(後編)	649
			第33話 さいこのガキ大将(前編)	670
			第34話 さいこのガキ大将(後編)	687
			第35話 正義の味方、Retry	713
			第36話 人外と破綻者	732
			第37話 赤と青、そして盗難……	755
			もとい(無断で)借りた車	772
			第38話 人間ビツクリ箱	791
			第39話 アルトリア、塗炭の苦しみ	829
			第40話 ホラー映画からコンニチワ	811
			第41話 Retry Again,	829
			「That」Fated Night	829

第42話	“救われた”破綻者		第52話	ソノゴ	
849			第53話	さようなら	1081
第43話	「大丈夫」の呪い	868	第54話	「挨拶」と共に出来ない子供	
第44話	義兄妹と蛮勇	889	にO・SHI・O・KIだ☆		1106
第45話	「頼み」の呪い	909	第55話	新たな夜明けの始まり	
第46話	セイギノミカタ		1126		
930			第56話	シシユンキ? 美味しい	1142
第47話	ユメカラサメル		の、ソレ?		
943			第57話	シアワセ? ナニソレ?	
第48話	ユメXガXミエタ	964	1161		
第49話	生の業	982	第58話	まったりな一日、そして最	
第50話	種の業	1005	後は		1188
第51話	『借り物』の呪い	1026	第59話	魔力供給♡、その	

第59話 ————— 訳が無かった

1220

よ、シロウラツシユ……

1242

第60話 いざ、チャレンジ!

(色々) —————

1271

第61話 「月は何時もそこにある」

1291

その後&エキストラ編

第62話 沈んだ『ロボット』だった

1317

『ピット』 —————



## 本編

### 第1話 始まりは泥と火の海から

静かさが残る夜の公園にフワリと一人の人影が突然、前触れもなく空から降り立つ。金髪に碧眼、小柄な体と整った顔にフリルドレスを着た十代前半のその子は暗い周りを見る。

人が一人も出ていない公園、そして街灯の明かり。

「……………よし！ 潜入成功！」

そして高らかに少女は笑いながら思う。

『何だ、聴いていたより簡単そうだ』と。

そう思いながら近くに『ある建物』へと音もなく、地面すれすれでホバークラフトのように進んでいった。

ピリピリした空気やボロボロの、まるで戦争の跡みたいな駐車場を無視し、落ちていた看板を通りながら見た。

『冬木市民会館建設場』。

「よし、後は——ほお？」

周りの空気に何かが集結するのを感じ、女性の苦しみから叫ぶ声が僅かに聞こえてきた。少女は思った、『ナイスタイミング』と。

だが次に起こった事によりその感心した気持ちは驚愕へと変わる。

何故なら――

「――しまった！ 『余波』の方向が――?!」

――光の壁と呼べるものが彼女に急接近し、その体を包み込むながら焼いたからだ。

「(不味い！ これは想定外、早く一時撤退――?!)」  
そこで意識は途切れる。

【深刻なエラーが発生しました。

プロトコル手に従い再起動を試みます。順】



%\$（\*—311視点

めを あける。

まわりは ほのお。

ほのお。ほのお。ほのお。

あかい、ほのお。

【視覚確認、良好。】

あつい。あつい。あつい。

これは なに？

いたい？

いたい いたい いたい。

【触覚確認、良好。】

「…………ケホツ！ ケホツ…ケホツ！」

むせる。 てつの においが あじが する。

【嗅覚と味覚確認、良好。】

「う……………」

仰向けに倒れていたのか炎の向こうの夜空がチラチラと見えた彼女は痛む体を起こ

し、立つ。

そして自分は火の海と化した何処かにいる事を認知する。

【知的機能確認、良好。 起動します】

そして彼女は問う。

『コレはなに？』と。

見る限りは破壊、蹂躪されたものの跡。

何も目的も、考えも無く、おぼつかない足取りで歩く。

足の裏にチクチクと、小石や他のモノで痛むがそのまま歩く。

その間に誰か達の声が聞こえる。

だがその誰かが叫んでいるのか、泣いているのか、怒っているのか、悲しんでいるのか、哀しんでいるのか、喜んでいるのか、吠えているのか………幾度とない数々の声かして何を言ってくるのか分からない。

雑音も良いところのような声だった。

やがて一人の子供が同じように歩き、フラフラと仰向けで倒れたのを見つけ、歩く。

だが最後の最後に彼女は力尽き、前のめりに倒れ始める。

ガシッ！

完全に倒れる前に誰かの腕が支える。  
 生きてる 生きてる 生きてる 生きてる

良かった

ありがとう

僕は

救えたんだ

救われたんだ

「……………(なにを して いるの?)」

【現地言語を観測。 エラー発生。 データ不足、サラなるサンプルが必要デス】  
 そこでまた彼女の意識は途切れる。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

彼女が次に目を覚ますと、そこは心地よいベッドの上だった。

終点がようやく合った目で周りをみると気付いた近くの看護師の人が何かを言って

くる。

が、未だに何を言っているのか分からない。  
看護師の人は喋るのをやめて、部屋を出る。

更に時間が過ぎていき、ようやく彼女は手を天井へと上げる。

そこは、雪のように真っ白い肌をした手と腕だった。

そして急に下半身の、ちようどお腹の下を襲ってくる圧迫感。

【体の尿意を確認、排水を推薦。】

彼女はベッドからフラフラと部屋を出る。

後ろから何かか聞こえるが彼女はとにかくこの圧迫感が不愉快でフラフラしながら  
ボンヤリと自分が向かうべき場所へと行き——

「——あら、そっちじゃないわよ？ ほら、女の子はここよ——」  
——近くの看護師さんは彼女の手を取り、女子トイレに放り込み、扉を閉めてし  
めた。

ここがどんな場所かは知らないが、やるべき事は知っている。  
用を足した彼女は手を洗う時自分の姿を初めて確認する。

白い肌に金髪碧眼の十歳未満ほどの少女が鏡の中から見返していた。

パチクリとまばたきを何回かした後、トイレを出て、看護師に元居た部屋へと連れていかれ、ベッドに寝かされる。

だが看護師が部屋を出ると、すぐさま彼女は立ち上がり窓を開けて外を見る。そこには街並みと、青い海が見えた。

その間「」の声の色々と何か同時に言い始め、頭痛から彼女は顔をしかめる。

「おい！ いい加減に俺を無視することはやめろ！」

今度は言葉が分かる。

彼女は声の持ち主の方へと顔の向きを変える。

「何してんだ？」

そこには赤みがかつた茶髪の少年が話し掛けてきていた。

「……………?!?! う……………あ……………ああああ」

少年を見た瞬間、さつき止まった無数の「」の声が聞こえ始め、彼女がまた苦しみだして頭を抱える。

声は男か女、はたまた子供か人でさえか分からない。

「お、おい！ 大丈夫か?!」

少年がベッドから降りて、彼女の手を取ると――

「あ、あああああああああああああああああああ!!!」





やがて薬に効果が出たのか、彼女の臉は重くなり、完璧に閉じる前に最後の一言が頭の中で少年の声で響く。

「——俺がなつてやるよ、代わりに。正義の味方つて奴にさ」

「(せいぎ)の みかたつて なに？」

彼女の意識が途切れる前にそう思った。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

彼女は声で次に目を覚めました。

「おや、起こしてしまったかい？」

彼女が眠りから覚めたのを気付いた男は草臥れている背広を着た無精ヒゲのおじさ

んだった。

少年との話がちょうど終わったのか、彼は少女のベッドの横に移動した。

「……………」

「こんにちは、僕の言っている事が分かるかい？」

「……………はい」

彼女はようやく返事をしたことに背広のおじさんははにかむ。

「君の、名前を教えてくださいませんか？」

「……………」

彼女はただ視線を返す。

「ああ、ごめんね。まずは僕から。初めまして、僕の名は——

——切嗣。『衛宮切嗣』というんだ」

「エミヤ……………キリツグ？」

「そう。君の名前は？」

「(なまえ?)」

彼女が考え込むこと数分。

「……………『三号』」

「ッ」

「『さんごう』？ お前、変な名前だな！」

衛宮切嗣はバツが悪そうに顔をしかめ、少年は馬鹿にしたように笑う。

彼女が『三号』と名乗った理由は彼女自身も知らず、ただそう言うのがしつくりきただけだった。

「……………それは……………『アインツベルン』の……………『個体名』か？」

「あいんつ……………べるん……………こたい……………めい？」

彼女は表情を変えず、ただオウム返しに切嗣に疑問形で声を返す。

「……………そうか」

そこから切嗣は色々と質問を続けるが彼女はただ首を横に振るだけで、正に『何も分からぬ』状態だった。

次第に日が沈みかかり、月が出る時間になったところで切嗣は提案をした。

「ねえ君、僕の養子にならないかい？」

「……………ようし？」

「うん。話をして見たところ、君には肉親はおろか、自分の事も分からない。だから

ら、分かるまで僕が君の面倒を見ようって話だ」

「……………」

彼女はコクリと首を縦に動かした。

「少しだけこのおじさんと話してみただけど他の人達と違い――」の声がうるさくなかつた。

「そうかい。よかった。ところで、『三号』という名前は好きかい？」

「『三号』……………私の……………わからない……………」

「じゃあ、僕が付けて良いかな？」

「??？」

「そうだね……………」

切嗣は考え始め部屋の中を見渡し、窓の外を見ると閃いたのか彼女を見る。

「君の名前は――」

――『三月』、何てのはどうだい？」

「……………『みつぎ』？」

「お、何かこいつにぴったりだな」

「士郎もそう思うかい？」

少年が——『士郎』が切嗣に同意するのを彼女は——『三月』はまたコクリと頷く。

別に彼女がこれを拒否する理由はなかった。

「うん。じゃあ、少し遅くなったけど家に行こうか？」

切嗣は嬉しそうに頬を綻ばせて二人の手を握り、部屋の外を三人で出た。

## 第2話 Welcome to 冬木市

衛宮切嗣 視点

『不思議な子だ』。

それが衛宮切嗣の第一印象だった。

その小さな体と、無気力な表情はどこかかつて会ったばかりの『彼女』を切嗣に連想させていた。

ただ『彼女』と違い、『外部の世界を怖がっている』事。現に『三月』は道中ずつと切嗣の後ろで隠れるようにひっそりといついできながら、小鹿のように震えていた。

いや、『外部の世界を怖がっている』という事ではなく極端に他者との『触れ合いが怖い』のだろう。

切嗣以外の者が三月の手を取ろうとすると、怯えている顔と共にその場からすぐに逃げようとする。なので手続きや移動中三月はずつと切嗣から離れなかった。

そして町の北寄りにある純和風建築の屋敷で、『調べものがある』と切嗣は言い、三月を説得して居間に置いて蔵からトランクを持ち出し居間へと戻ると中から子供二人分の声が聞こえてきた。

「怖がる気持ちは分かる。忘れろって言つて、忘れられるもんじゃないつてのも分かるさ。けど、いつまでも震えながら現実逃避してたつて仕方が無いだろ? ……まあ、

困つたことがあつたら何でも言えよ。一応……家族になるわけだし」

「……かぞく?」

「いや、だつて俺達二人とも養子になるわけだし」

「かぞく………」

「じゃあ、考えといてくれ」

士郎が居間から出て、入れ替わりに入ってきた切嗣が声を掛けた。

「ごめんね。士郎に先を越されたけど僕達は家族だ。だから、何でも相談して欲しい。僕に出来る事があれば、何でも言つてくれ」

三月はただ静かに切嗣の目を見る。長い沈黙が続くのならと思ひ、トランクを開けようとする切嗣に三月の次に言う言葉で止まる。

「……………えが、きこえる」

「『ええ』、かい?」



「おとこのひと、おんなのひと、こども、あかちゃん、いぬやねこ。みんな、みんななにかさげんでいるの」

「……………」

「てをつなぐともつとうるさくなる」

一旦止めた手を切嗣は動かし、ちやぶ台の上に置いて行く。

その数々の器具や無機物を見て三月はキョトンとする。

「?」

「質問ばかりでごめんね? でも、もうちよつと付き合つて欲しい」

---

士郎 視点

---

『人形みたいに綺麗な子だ』。

それが衛宮士郎の印象だった。

自分とは歳が一緒位の筈なのに、手足は細く、金髪と白に近い肌と寝ている顔も整つて『コレは等身大の人形だ』と言われても全く疑問に感じない程だった。

そして目を開けると、そこにはサファイアのような青い眼が周りを見回した。本当に、まるで人形の硝子の目みたいだった。

目が一瞬合った時にはドキリとした。

ただいざ起きると不可解な行動をしたり、急に叫んだり、震えたりと忙しい奴だったと、そして――

『ああ、こいつも俺のように“アレ”を生き残ったんだな――』

――と土郎は思った

そして彼は彼なりに気遣いをした後、切嗣が何か色々と三月と話し込んでいる間に土郎は屋敷を探検して、寝ようとすると隣の部屋からうなされる声が聞こえて、土郎が中を見ると布団の上で毛布の中で丸まり『カタツムリ状態』で震えている三月がいた。

「う……………うううう……………」

「おい」

ビクつと三月の体が反応して、毛布の下から彼女がジツと土郎を見る。

「大丈夫じゃなかったら俺達を頼っていいんだぞ？」

「……………」

それでもただジツと見ているだけの三月に土郎はイラついたのか、照れていたのか視線を外しながら頭をかく。

「じいさんも大人だし、お……………俺もお前の『お兄ちゃん』だからな」

「……………お……………にい……………ちゃん？」

「ああ。俺達は家族で……………俺が先に養子になったからお前より『上』だろ？」

『先に引き取られたから自分の方が上』。

大人からしてみればなんとまあ、子供らしい考えというか、何というか。

ただ、これは士郎なりの気遣いの一つだった。

何せ彼の前にいる少女は『何も知らない』。

自分の家族、親戚、故郷、好きなもの、嫌いなものも自分の名前も。

士郎も同じくあの大火災を生き残ったが彼にはまだそれより以前の『記憶』がある。

それに対して三月は『無い』。

「……………じゃ、じゃあな。おやすみ」

まだずっと見られるのは恥ずかしいのか士郎は踵を返して自分の部屋に帰ろうとすると、服が引つ張られる。

「え？」

士郎が後ろを振り向くと、三月が彼のシャツを後ろから摘まんでいた。

「……………」

「な、なんだ？」

「いつしよに……………」

「……………ちえ。しようがねえな、『妹』の頼みだからな。これは」

そう言い三月と一緒に添い寝する（渋々していると演技をしながら自分が照れているのを隠す為に）。

「……………あつたかい」

「そういうお前は冷たいな」

三月は背中同士を当てている士郎の温もりを。

士郎は三月の冷えている背中を。

そうして夜が更けていく中、切嗣は久しぶりにタバコを吸いながら夜空を見ながら考える。

「……………『アレ』は……………何だ？……………いや彼女はアイリ達と『よく似ている』が『根本的に違う』……………何なんだ？ この事を知っていたら僕は魔術をもつと……………いや、もしかして彼女<sup>三月</sup>をドイツのアハト爺に引き渡せばあるいは……………ツ」

そう考えたところで切嗣の胸がズキリと痛む。

「……………何を考えているんだ、僕は。それは『人間』のやる事じゃない筈だ」

タバコがフィルターだけになり、彼は携帯灰皿に捨てて夜空をぼんやりとただ静かに見続けた。

三月 視点

その日から何となく考えがまとまったのか、かなり落ち着いた。

次の日からの私にキリツグとシロウは動揺していた姿に少し……何と云うのだろう

？

……胸がポカポカした。

未だに「」の声は聞こえてくるけど、うるさくは無くなった。

せいぜいがひそひそ話程度だ。

これもおじさんのおかげだ。

お兄<sup>士</sup>ちゃん<sup>郎</sup>は切嗣を『じいさん』と呼び、私は『おじさん』と呼ぶ事にした。

そして同じ『小学校』を通うことになり、切嗣が言うには隣の藤村家のお世話になつたらしい。

「三月、味噌を出してくれないか？」

「白と赤味噌どっち？」

「両方」

「はい、お兄ちゃん」

「お、サンキュー」

ちなみに今はお兄ちゃん士と二人で料理している。

最初は料理ができないからおじさん切は外食などしていたけど流石に栄養が、とかお兄ちゃん冊が言い始めてから私たち二人で美味しいものを作っておじさんを喜ばせようって事から始まった。

「三月、洗濯物を見てくれるか？」

「うん」

後洗濯。お兄ちゃんとおじさんは洗濯機の使い方が不得手………とか言うレベルではなく、単純にお兄ちゃん冊は使い方が分からず、おじさん冊は適当すぎる。

流石に黒い靴下と白いシャツを一緒に洗濯するのは無いと思う。

そしてこれにも私はびっくり、何と洗濯機の使い方を手探りで説明書を手にとって読むと「一」の声のようにするりと情報が頭の中に浮かんできて、すごく助かった。

そこからは私が洗濯して、他の二人と一緒に洗濯物を干す。

この時も胸が干した布団みたいにポカポカしたのをよく覚えている。

「ふわぁ、おはよう」

「おはよう、おじさん」

「おはよう、じいさん」

丁度洗濯具合の確認から居間に帰ってくると欠伸混じりにおじさんが着物姿で入って来る。

最初に見た背広姿よりこつちの方が良いと言ったら苦笑いをしながら頭を撫でた。

「二人共、学校の宿題はやったのかい？」

「当たり前だろ。ちやくんと、終わらせたぜ。な、三月？」

「う、うん」

「？」

胸を張りながら元気に返事をするお兄ちゃんとは違って遠慮するような態度の私を見ておじさんは「？」を上げる顔をする。

それはそうかもしれない。だって言えないじゃん。

『教科書と宿題を手に取って読んだら、全部解った』って。

そう、ことごとく私は手に取ったものを知ろうと思えば理解してしまう。

あまりモノを知らない私でもこれは異常だとわかる。

だから何とかその場、その場で納得がいくような説明をする。

でも『天才』呼ばわりはちよつと……………

「そう言えば、お隣の大河ちゃん。今度の週末、剣道の大会に出るそうだよ」

「へー」

「すごいね」

『大河ちゃん』、もとい『藤村大河』。お隣の人の娘さんでまだ会った回数は片手で数えるくらいだけど、おじさんとは結構会っているみたい。

「僕らに応援に来て欲しいそうだよ」

「そうなんだ、じゃあ弁当を多めに作らないとなー」

「はは、そういう士郎は、予定は無いんだね。三月は？」

「無いけど」

「じゃあ、決まりだね」

「でも剣道かー」

「ねえおじさん、週末の大会までこの道場を貸したら？ 学校と部活の後でも練習と

か出来るように」

「ああ、それはいい考えかもしれないね。後で会った時にでも提案してみるよ、三月」

おじさんの顔がニコリと笑いを私に向けてと、何故か胸の奥がチクリとした。



## 第3話 『家族』である故の苦難

三月 視点

その次の日の夕方、私とお兄ちゃんが揃ってランドセルを背負いながら帰ってくる  
と、道場で奇声が上がっていた。

覗いてみると、驚いた事におじさんも剣道着を着ていて相手をしていた。

「メエエエエエン!!」

「ドオオオオオ!!」

バシイン!

そして謎の掛け声と共に二人が持つ竹刀がぶつかり合う。

【戦闘技術を確認。 写影シ備え付けマス】

「?!」

急に「」の音が頭の中に響きながら、対峙している大河とおじさんの姿がブレて、  
同時に違う攻撃や物事が半透明の幽霊のように見える。

大河を攻撃／に攻撃される切嗣。

大河の攻撃を弾く／躲す切嗣。

切嗣の反撃に横に飛ぶ／正面から受け止める／受け流す大河。

などなどの景色が私の目の前で繰り広げられる。

「すげえ」

時間にしてみれば一瞬だったのかもしれない。隣のお兄ちゃんの声でハツとした私の前には「」の音が聞こえる寸前の光景だった。

私はまだ若干混乱している頭を振り、お兄ちゃんと一緒に夕飯の準備に取り掛かる。何せ大河は大食いの上に運動後。

ただ、私の足取りはどこか危なっかしかったのか、お兄ちゃんが「具合悪そうだから休んどけ」って言われた。

「今日は商店街の魚屋さんが、美味しそうな鮭をサービスしてくれたからこれを焼いて足していいか？」

「うん、別に使う予定は無いよ」

「うわー！ 美味しそうー！」

入って来てテーブルの上の献立を見て今もポニーテールが頭の後ろで犬の尻尾みたいにブンブンと揺れ、瞳をキラキラしながら大興奮する藤村大河。

「もう、切嗣さんに道場を貸してもらえらるって聞いただけで有頂天だったのに稽古までつけてもらって……その上こんな美味い御飯まで！　もう、幸せ！　……いつそ、この家の者になろうかな？」

素晴らしいながら大河は切嗣の方を上目遣いで見ているのに対して切嗣は「ハハハ」と笑いながらあしらう。

……何だか胸がチクチクする。

「なあ、爺さん」

「ん？　なんだい、士郎？」

「俺も剣道やりたい」

「ああ、いいよ。ちゃんと士郎の剣道着と竹刀を用意してあるんだ。三月の分もね。

もし良かったらで、なんだけど」

「え？」

私は目を見開き、お兄ちゃんの方を見る。

「……………うん。やってみる」

そしてキラキラとした目をしているお兄ちゃんの顔に、胸がポカポカするので私もやってみようと思った。

その後おじさんに一本入れてしまったのが意外だったのか、何故か私は大河の相手を

させられた。

何だろう？ ただ見えていただけだからそのまま行動しただけなのに。

ただ興奮しながら「この子は天才……いえ神童よ、切嗣さん！」とおじさんに迫っていた大河はキラキラしていた。

でもお腹が空くからあまり動きたくないな。

……

……

……

……

……

……

……

「……………」

小学校での三月はお弁当を食べながら周りを見る。

少女達は小学生なのに誰が誰を好きで、誰が誰を嫌いとかがハッキリしていて、派閥も存在している。

化粧がどうか、最近のアイドルはどうだとか、三月にはついて行けなかった話題ばかり。

士郎はあっさりとクラスに溶け込む事が出来たのに対して、三月はそう出来なかった。

彼女の人見知りが以前よりかなり軽減されたというものの、完全ではなく、どこかビクビクとしているのも理由の一つだった。

もう一つとしては、彼女の見た目が周りと比べてあまりにも完璧過ぎて男子は声がかげづらいらしく、女子からは妬みなどの対象になり壁を作られ、距離を取られていた。

これを見ていた士郎は――

「――なあ、藤姉。友達って、どうやって作るんだ？」

「……………へ？」

剣道大会で圧勝してからも、変わらず衛宮家の道場で稽古に勤しんでいる大河に士郎は問いかける。

士郎は見かねて三月を自分の知人達との仲間に入れようとしているが、他の子達があからさまに嫌そうな表情を浮かべたり、腫物や壊れやすいものを扱うかのような態度を

取っていた。

「（確かにあいつらと会って間もないのに「昨日よりはいい日だと思う」とか「あれは気にしない方がいいよ」とか変な事を三月は言うし、その度に知人達はビツクリしたり嫌な顔とかするけどさ）」

「うーん、そうねえ………三月ちゃんはどんな子とお友達になりたいのかな？　後、どんな事が好きなのかな？」

「え？」

士郎はそこで気付く。三月の事を未だにほぼ何も知らない事を。

確かに会った当初と比べれば良く喋れるようになったし（士郎の口調に似てきているのは気のせいだ、ウン）、家では以前のようにただボーっとしているわけでもなく剣道の修行とかにも付き合ってくれている。

だが結局は全て衛宮家での話。ましてや必ず自分か藤姉か切いさん嗣と一緒に常にいる。

三月が自分一人になった所をほとんど見ていない上、自分から行動するのを見た事が無い。

「うーん、どうだろう」

「ねー、ちよっと難しいよねー。先ずはそこからだと思うの。三月ちゃんがまずどん

な人とお友達になりたいかを分かって、その次にそのお友達はどんな人と友達になりたいかを考えてみるの」

「うーん……………」

そのようなやり取りをしている間、三月は台所で下ごしらえをしながらテレビを見ていた。

ザクザクザクザクザクザク。

「——では次のニュースです——」

包丁でキャベツを千切りにしながらニュースを見ていた。

普通はとても危なくて誰もしようとも思えない事を三月は平然とやっていた。

この様に並行思考と行動が出来ること知ったのは先日、切嗣や土郎や大河や藤村組の人達といった大勢の人達の好物や弁当等を用意する時に『全部同時に出来たら時間を短縮出来るか?』とふと思い、やってみたら意外と出来てしまった。

こう、まるで自分が何人もいるかのように思えて、考えて、行動してしまうのだ（何度も誤作動で怪我をしたのは皆には秘密にしている）。

そこからは手探りで試してみるのが時間潰しに繋がり、今では家事全般の上現在のニュースや世間の話題をほぼ同時に一人で出来るようになっていた（タイミングさえ間違えなければ）。

と言うか、してしまふ。

何せ「」の声も並行思考で自動処理出来る事に繋がったのは良いが、まだまだ『雑音』として聞こえてくる上にあまりにも情報が多いときはダム崩壊の水のようにそれらが一齐に押し寄せてくる。

けど、それが無ければ後でログ記録として『検索』と『観覧』出来るのは大きい。

これの応用で以前『知りたいと思つて手にしたモノ』の『理解』を抑えられるようになった。

「やあ、三月。 精が出るね」

居間に入ってきた切嗣はどこかから帰つて来たばかりなのか、前に見た背広姿だった。

彼の顔は以前に増してやつれていて、痩せ衰えていた。

「お帰りなさい、おじさん」

「ああ、ただいま」

何故かこの人のこのような顔で陽気な笑みを浮かべるのを見ると三月の胸がザワザワとして嫌な気分になり――



——この人が死へ近づいていくのを理解していた。

何故かは分からないし、彼女は知りたいたとも思わなかった。

が、切嗣が何回か何処かへ出掛ける事を三月は知ってしまった。

以前洗濯物を士郎に任せていたら、手違いで三月の既に洗濯してあつた服まで回してしまつたのだ。

しかも発覚したのは士郎が「洗濯を回すから洗い物出してくれ」と言い、彼女が自分の部屋のドアからパジャマを渡した後、替えの服を着ようと思つた時に気付いた。

替えの服が無いと、パンツ姿のまま居間に入つてきた時は切嗣と士郎も動揺した。

三月は別段気にしていなかつたので「今日はこれでもいい」と言つたが二人に断固反對されたので三月は衛宮邸のダンスなどををあさり、女性物があるトランクの中で見つけてそれに着替え終わり居間に入ると——

「——あ——」

「わあ……………」

——切嗣が持っていたお茶を落としてお兄ちゃんと共に口をあんぐりと開けていた。

「大丈夫、キリツグ？」

何故自分は『おじさん』ではなく『キリツグ』と言つたのかは三月自身にも分からな

かった。

あえて言うのなら、ただ彼女の着ていた服から『そうしたい』という感情で感化されたからか。

この紫色の背広風トップに白いスカートはどこからそんな感情が出てくるのだろうか、と思う三月。

だが切嗣は落としたお茶などどうでも良く、気付けば泣きながら三月を抱きしめていた。

「う……………ううううう……………アイリ……………イリヤッ！」

「じ、じいさん？」

士郎は初めて見る切嗣に戸惑い、三月は何が起きたのか分からず、とりあえず慰めようと思い、切嗣の背中を撫でると様々な声と景色と感情が頭の中で流れる。

それはある男が辿った人生で——

——未だに後悔を続ける者の悲惨と悲哀に満ちた物語だった。

その同じ日に切嗣は「少し海外に用事がある」と言い、蔵で支度していると三

月が目撃して、「手伝う」と言ったところを作業中の切嗣に断れた。

だが切嗣の必死になっている姿に三月は意外に食らいつき、切嗣は思わずイラついた声で彼女に叫ぶ。

「君まで失いたくないんだ、イリヤッ!」と。

ビツクリして、怯える様子の三月に切嗣は自分が叫んだ事に気付き、やるせない表情で三月にひたすら謝りながら最後に出かける前に一言お願いをした。

「もう、あの服を着ないでくれ」と。

そこから切嗣は何度も出掛けるようになり、帰ってくる度に身体は弱って行き、やがて立って歩く事もやつとの事で短時間でしか出来ないようになった。

段々と彼が帰って来た後の彼の荷物などの整理を三月が自発的にやり始め、彼がそれを咎める声も弱々しくなっていた。

「じいさん、お帰り」

唇を尖らせ、お兄ちゃんはおじさんに魔術の事で愚痴を零していた。

おじさんが初めて海外から帰ってきて、お兄ちゃんが『魔法使い』のおじさんに魔術を教えてくれと迫った。

最初は断り続けていたけど、お兄ちゃんの熱心な言葉に折れて、今ではおじさんが片手間に教えてくれている。

お兄ちゃんの魔術は物の構造を解析と強化らしい。構造の解析は何処となく私に似ていたところを聞いたとき、私の顔が若干『笑顔』になつていたらしい。

自覚は全く無いが。

私はと言えば初めてここに着いた時におじさんが器具などのモノを使うと、私は優秀な魔術師以上の魔術回路があるとの事。

あとおじさんが使える魔術を一通り見聞きした後、私が黙りながらその場で再現してしまい、おじさんの目玉が飛び出しかけた。

「このような芸当は不可能」とか「自然の理を外れている」とかブツブツと独り言を言っていたが私に聞かれても困る。

『やってみよう』と思つたら『出来た』のだから。

あと「」の声とかの事でも色々とおじさんと相談して試してみたところ、ある程度は自分の意志とかで軽減出来る事が分かった。

おじさんを触つても「」は無反応だったけど、それは有機物だけに限らず無機物の者も反応する事が分かったのは幸いだった。

通りで何も触っていないのに「」の声が聞こえて来る訳だ。

最後に『起源弾』って何？と聞いたら固まりすぎて、その時タバコを持っていた指を

火傷してしまった。

だって、子供に『銃の弾丸』なんて物を握らせるのはどうかと思う。

しかもそれがおじさん特有の魔術礼装だったのを聞いて、私が今度はビックリした。とりあえずお兄ちゃんには悪いけど自分の事は秘密にして、お兄ちゃんはお兄ちゃんなりに成長させる方針でおじさんは行くみたい。

『君みたいな子は恐らく何百万、いや何千万に一人の才能だ。比べられたりしたら士郎がいじけてしまうも知れないからね』と言ったので、私はお兄ちゃんの成長具合に合わせる。「これも練習になるしね」とおじさんも言っていたし。

「お兄ちゃんのごはん、テーブルの上にあるから」

「お、サンキュー」

お兄ちゃんがダイニングへと移動し、おじさんが不意に私のいるキッチンまで来て、私にしか聞こえない小声で話しかけてくる。

「ごめんね、三月……………もしかすると、君は気付いているかも知れないけど——

——僕はもう、長くは無い」

三月はいつもの表情を変えず、ただ頷いた。

「私に出来る事はある?」

「士郎の事を頼む。彼は、僕から見ても少し危なっかしい所があるからね」

「恐らく原因の本人にそう言われても困る」

「ハハハ、手厳しいな」

お兄ちゃんはおじさんに憧れている。崇拜しているといつても過言ではない。

弱い者虐めをしている者がいれば例え上級生や中学生に高校生、果ては大人だろうと喧嘩を挑みに行く。

「でも出来る事はする」

「ああ、ありがとう。でも……………僕は彼が考えているような大人じゃないんだ」

これも知っている。

普通の家庭環境、ましてやこの国の『日本』に『銃』など必要ない。

私が『あの服を着た日』からおじさんは時々私に話をしに来る。

他の誰にも聞かせたくないようなものを。

「僕は、本当は彼に謝らなくてはならないんだ。彼が家族達を失ったのは僕の所為な

んだ。あの大火災の原因は僕にある。全部……………全部、僕が悪かったんだ」

おじさんはまた泣きながら膝を床に着き、私は何時ものように彼の頭を撫で、何時もの台詞を言う。

「うん、キリツグは頑張っているよ。頑張り屋さんだものね」

「グスツ……………がれは<sup>彼</sup>……………ぼぐを……………恨む権利がある」

「それは無いよ、おじさん」

「み……………つきゃ〜」

「お兄ちゃんは恨む事は絶対に無い。感謝はすれど、恨むことは無い。私は……………まだまだ何も良く分からない。ただこの思いを『表現しなくてはならない』とすれば……………『ポカポカしている』と思う。これはお兄ちゃんも感じている筈」

「ツ……………ありがとう……………三月」

おじさんは涙を袖で拭き取り、急に真剣な顔で私を見る。

「……………何?」

「何時か、君より白い髪で……………赤目の女の子が来るかも知れないし、来ないかも知れない」

「い……………」

「???」

「多分、会ったとしても友好的な対面はないと思う……………でも、もし会えたのなら……………どんなに酷い対面でも、どうか……………嫌わなくて上げて欲しい。彼……………」

女は……………僕の犯した大きな罪の一つなんだ」

「分かった」

あつさりと三月は頷き、切嗣は一瞬目を見開き、いつもの穏やかな笑みに戻る。

「本当に……………ありがとう、三月」

どこか諦めたような、少しだけ安心したような声で切嗣は感謝の言葉を告げる。

元より身寄りも無く、自分の事さえ何も分からない上、優秀な魔術師で切嗣の魔術を見よう見真似で行使出来るような、怪しい所満点の三月をほぼ無条件で引き取り、世話をしてくれた彼の頼みを三月が聞くのは簡単だった。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

それから数日後、月の綺麗な晩に三人で軒先に腰掛けて話をしていた。



「えええええええ!! そんな理由で名前を『三月』にしたのか、じいさん!!」

何と、彼が『三月』という名前は当時、夜になりつつある夜空に浮かんでいた『三月』から取っていた事が判明した。

「うん、僕も自分のネーミングセンスの酷さは分かっているつもりだよ。ごめんね、三月?」

「ううん、私は……………この名前を……………嫌ってはいないよ」

「そうか……………」

そこから自然と静かになり数分、お兄ちゃんはおじさんの昔話を聞いた。

「……………子供の頃、僕は正義の味方に憧れていたんだ」

「……………おじさん?」

不意に雰囲気が変わったおじさんの手を掴むと、酷く冷えていて生気が感じられないのに目を見開く。

まるで壊死した木の枝みたいな感じがしていた。

切嗣は三月に一瞬向き、弱々しく微笑んでから、士郎の方へと向き返す。

「なんだよそれ? 『憧れていた』って、諦めちまったのかよ?!」

「うん。『正義の味方』ってのは期間限定でね、大人が名乗るのが難しくなるんだ。

それに気が付いたのはごく最近なんだ」

——何で。

三月は胸の奥がザワザワとする感じが膨れ上がった。

「ふうん……それじゃしようがないな。でもしようがないから——」

——ダメ。

「俺が代わりになつてやるよ。じいさんは『大人』だから、もう無理かも知れ

ないけど……俺なら大丈夫だろ——！」

切嗣を掴む三月の手に力が入る。

「——だからじいさんの夢は、俺に任せろ！」

「そうか……安心、した」

そう言い残し、切嗣は座りながら静かに目を閉じる。

——ケリイはさ、どんな大人になりたいの？

——僕はね、正義の味方になりたいんだ

不意に知らない少女とおじさんの声が三月には聞こえた気がした。

——衛宮切嗣、享年34歳で息を引き取った。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

多くの人が大いに泣いた。

お兄ちゃんただ一人を除いて誰も皆、豪勢に泣いた。

『悲しみ』という感情に皆が浸ってそれが場に溢れて更に皆をもっと泣かせていた。  
そうに違いない。

だって、そうでなければ私の涙腺に重大な状態異常が発生していると言う事だから。

【告。 『衛宮切嗣』を入手しました】

## 第4話 カラスがガーガー鳴いて……………いなかった!

三月 視点

おじさんのお葬式から数年、中学に上がった私達の周りには色々と変化が起きた。

まず、私は出来るだけ『明るく、接しやすいい子』になった。

周りを笑顔に出来、笑えるように色々な知識や情報、髪型やファッションに至るまでメディアなどから『理解』して、組み込んだ。

色々な事を試した結果、『これ』が一番他者と付き合いやすい様子だった。

結果、『友』と呼べる者はいないが、大勢には『顔見知り』程度にはなった……………と思  
う。

おじさんが亡くなった『あの日』の感覚は不愉快極まりなかった。

後、お兄ちゃんとは別々のクラスになってしまい、お兄ちゃんはすっかり大人びた落ち着きを身に着けていた。

そして彼の頼み事に対して拒否しない性格を良い事に、周囲から便利屋扱いされてし

まっていた。

当時それを知り合いの女子生徒から聞いた時は胸がムカムカとして、頭の温度が上昇した（これが後に『血が頭に上る』という現象かとも『理解』した）。

未だに私と彼が全くと言って良いほど似ていないので皆、私達が義兄妹なのをよく忘れる。

が、その先でお兄ちゃんは嬉しくなりながら私に話した。

『間桐慎二』との出会いの事を。

その日、お兄ちゃんは文化祭の準備を押し付けられていた。お兄ちゃんはちゃんと自分の仕事をこなしていたのに皆、ただ『遊びに行きたいから』という理由でクラスメイト達が大物作りの仕事を彼一人に丸投げにした。

最初はその『間桐慎二』が手伝ったのかと聞いたが、そんな事はしていなかった。

彼はただずっとお兄ちゃんが作業するのを見ていたらしい。

そして文句を言っていた。

彼はお兄ちゃんが断れない性格の事を気に入らなかつたみたいだけど、完成した品を見たら彼はこう言ったそうだ——

「——あの出来は正に完璧だった。嫌々やっていたら、あんな物は作れないよ。正直、押しに弱い軟弱者だと思っていたけど、考えを改めさせられたよ」

それからお兄ちゃんとよくつるむようになり、早くも『親友』となった。

『間桐慎二』の事は噂だけは聞いていて、あまり他者とは関わらない人だったようだけど、お兄ちゃん衛宮士郎は別だったみたい。

衛宮邸にも良く来る事になって私も彼と顔を合わせるようになり、彼は意外と噂で聞くより『良い人』のように思えた。

別に話しをする訳でもなく、学外で会う時はせいぜい会釈をする程度。しかも、私からの一方通行。お兄ちゃんがいる時にちよつとつとつと話に混ぜてもらえる程。しかもお兄ちゃんが混ぜようとする時だけ。

それだけでも、『間桐慎二』は『良い人間』と推測できた。

何せ話や情報を総合すると彼には『裏』などなく、良くも悪くもまつすぐなほど『表』しかない。

そしてそんな彼が事前連絡もないのに急に衛宮邸に押し掛けてきた。

最初「士郎ならいませんよ」と言ったのだが「それでもかまわない」と言われて（自分で）上がってきた。

変だな、いつものなら「そうか、邪魔したな」で終わるのに。

勝手にお邪魔して何かと思つたが、お兄ちゃんの友人なので取り敢えず彼の話に相槌をしている。

「——とところで三月」

「はい?」

多分『衛宮』と呼んだらお兄ちゃんとか被る事になるだろうからそう言ったと思うけど……

急に何だろう?

「衛宮って誰か好きな子とかいるのか?」

……何その激突な質問は?

「えーと?」

「いや、君の顔は男性女性との間では結構広いからな、そのような事も知っているんじゃないかなって」

まあ、確かに努力の末に『顔見知り』は多くなっただし、情報源も広がったけど……やはり食べ物の力は偉大だ。おじさんが亡くなった後から弁当箱を二段にして、おかずを他の人達に分ける作戦は思ったより効果的だった。

「それに学校で『月の女神』って呼ばれているお前の周りにいる女子の誰かが衛宮の興味を引くと思っただが……」

なんだ、それ?

私は初耳やぞ?



「これは後で聞く必要があるな。」

『月の女神』って何だ?

「えーと、聞いた事ない…かな?」

「ふーん、やっぱりな。アイツもお前も男女の色恋には疎い感じだしな」

確かに色恋には疎い。

分らないのだから。

「ただいまー、ってあれ? 慎二?」

「遅いぞ衛宮! まったく…:茶は旨かったが正直待ちくたびれちゃったぜ?」

「いや、慎二が来ているとか予想外だし——」

「——うるさいな! 休日や学校後は僕がいつ来ても良いように自宅に待機しておけよ! 人に何も頼まれなかったら他に大した用事も無いような奴だろ?」

「…………それは理不尽すぎないか?」

私もそう思う。

「そうだ衛宮、暇なお前達を我が家へ招待してやるよ。 ついでに僕の妹にも合わせてやるよ」

「急だな、おい」

「ところで三月、ガイスバーガーマーチを頼む」

「無視かよ……って、毎度の事ながら何でお前が人の妹を当然のようにコック扱いしてるんだよ?！」

「分かったわ」

「……………三月は三月でそんな簡単に了承するなよ」

お兄ちゃんに言われたくない。

別に慎二がこのようにご飯を注文するのは初めてではない。

ただある日、私とお兄ちゃんが自身の弁当を自作していると聞いた日から何かと私に世界各地の料理を注文するようになった（二段弁当箱にしたのでレパートリーは自然と増えていたし）。

私は料理のレシピを『検索』する。

確かドイツのシウトウツトガルト州内のシチューだったつけ？

『ヨーロッパの食べ物紹介』で出てきたような……………

有った、番組の16:48のこれだ。

でも丁度家に食材が無いものもある……………

「じゃあちよつと食材買いに出掛けてくるね、お兄ちゃん」

「ああ、いつ——」

「ブフウウウウウウウウウ?！」

「うわ、慎二?! 大丈夫か?!」

何故か急に慎二が口に含んでいたお茶を盛大にぶちまけて、お兄ちゃんは慌てていた。

二人に留守を任せて私は町へと出ようと玄関で靴を履いていたら中から慎二の叫び声が聞こえた。

「お、お、お、お、『お兄ちゃん』だとおおおおおお」

ああ、そう言えば慎二の前で『お兄ちゃん』と呼ぶのはこれが初めてだったな。いつも何かとそう呼ぶタイミングなかったし。

……………でもそのあと彼の言った『イケる』との一言は何の話だろう?

そして商店街に入ると、ふと私は気付く。

「……………あれ? 『間桐慎二』に『妹』なんていたの?」

そう、今まで『間桐慎二』に『妹』がいるなど聞いた事もなかったのだ。

歩きながら『検索』すると確かに『間桐桜』と言う名前を見つけるがそれ以上の情報はコレといって何もなかった。

「……………フム、これはこれでナゾナゾね」

私は内心ウキウキしながら商店街を回り、この頃見ている探偵モノにハマっているの

が影響したのか、あるアニソンを鼻声で歌いながら食材を買った。

『二つの真実』の方じゃなくて、『混乱した記憶』をオープンニングにしている方だ。  
おじちゃんの名に懸けて全力を出そう。

そしてガイスバーガーマーチどころか、ドイツのフルコースディナーを作り、慎二を見返した。

数々のおかずを前にタジタジになった慎二を更にからかう為に長くなった金髪をポニーテールにしたままエツヘン！とエプロンを着けたまま胸を張った瞬間、吹き出しそうな慎二が顔を逸らす。

ガツガツ食べるのは構わないけど二人共お兄ちゃんと慎二が（明らかに）無理して食べようとしなくても良いのに……

ラップして、また次の日に食べたら良いと言ったら——

「——（三月の手料理に）そんな勿体ない事できるかツツ!!!」  
と何故か二人共叫んだ。

………なんでさ？

………

………

……………

……………

……………

……………

……

あれから数日後、慎二が私とお兄ちゃんを間桐邸に招待してくれました。  
恐らく完全な善意から招待したと思うのだけど……………

「ようこそ、我が家へ。衛宮に三月」

私はナゾナゾにウキウキしていたと言ったな？

前言撤回をしよう。

【警告。 異常地帯を感知しました。 身の危険、大。直ちに撤退を推薦シマス】

今すぐ滅茶苦茶帰りたい。

え、何このバイ〇ハザード感は？

いやゲームをプレイするんじゃないやなくて、まるで私がゲームの中に放り込まれてアー〇  
レイ山の洋館の前に立たされている感覚が一番しつくりくるか。

あとさつきから「」の声がピンツピンツにさつきから引つ切り無しに警告してくるんだが。

てか『異常地帯』って何？ バミューダトライアングルに私、今から突入するの？

……………生きて帰って来れるかな、私？

【告。現在の状態での生存率は——】

——うわー、聞きたくないなー。

そんなこんなで私達は間桐邸の中に入った。

……………ああ、ご心配なく。

カラスはガーガー鳴いていませんでしたし、犬もバウバウ吠えていませんでした。

鳴吠いていたらもうサバイバルホラーどころか、ホラー映画並みにお兄ちゃんを引き

ずつても全力疾走で逃げている自信があったよ。

鳴吠いて欲しかったよ、トホホ。

「妹の桜は居間にいる。僕から見ても可愛いからな、きつと三月と気が合う筈だ」

何言っているんだ、このアホワカメ？

まるで『可愛い者同士』イコール『仲良し』と本気で思っているのか？

乾燥してんのか？

いや、この屋敷内ジメジメしているからあり得ないな。

あゝ、全身鳥肌が総立ちするし、膝も笑っているー。

「衛宮、いいゲームを見つけたんだ。僕の部屋で遊ぼうぜ」

「おう!」

『おう!』じゃないよお兄ちゃんツツツ  
妹をこんなところで一人にする気?!  
?!?!?!

「ほら、こつちだ」

「ほら、こつちだ」

慎二がさらに奥に入り、お兄ちゃんも歩くと、私はヒシつと昔みたいにお兄ちゃんの

背中に引離れる付く。

「? どうした三月?」

「あ、いや、その〜」

「ああ! 慎二の妹に会うのに緊張しているのか! 大丈夫だって。きつと、慎二の奴

みたいにズケズケと物を言ってくると思うから緊張している暇なんて無くなるさ」

……………うん、緊張は緊張だけど度が全然違うよお兄ちゃん。

「桜! 紹介するよ。こつちが衛宮で、そつちが三月だ」

……………あゝ、慎二君? 私が見ているのは蠟人形か何かかな?

そこにいた『ソレ』には『感情が全くなかった』。

「ハハ、こいつ無愛想なんだ」

ペシッ。

慎二が桜の頭を叩き、桜は慎二を光の無い虚無の瞳で見つめながら感情のない声を上げた。

「……………いたい」

「じゃあ、もつと愛想良くしろよ!」

……………何だろう、胸の奥がザワザワしてチクチクして若干ポカポカして……………

こんなの初めてだ。

理解不能。

理解不能。

理解不能。

理解不能。

「じゃあ男子は男子で、女子は女子で別れようぜ! 行こうぜ衛宮!」

「ああ!」

うおい?! ちよつと待ていいいいいい!?

声に出す前に二人は階段を上がり、私の手は上げたまま宙ぶらりんになっていた。

「……………えーと?」



未だにのっぺりとした顔の桜に私は振り向かう。

「初めまして。『衛宮』三月です」

「……………初めまして。間桐桜です」

……………ん? さつき私が『衛宮』って言った時に目が揺らいだような……………  
気の所為かな?

よし。『明るく、接しやすい子』モード、全開!

「ねえ、趣味は何?」

「ありません」

「好きな事は?」

「ありません」

「嫌いな事は?」

「……………ありません」

お? 少し言い淀った?

でも『好きな事』は即答で『嫌いな事』はあるって……………

しかも明らかに年下のこんな子が……………

「ね、ねえ? 部屋でテレビでも一緒に見よっか?」

「無いです」

「無いんかい?!」

桜の体がビクツとする。

あ、やば。 思わず『ガサツ』と『ツツコミ』が同時発動してた。  
今は『待機』つと。

「ご、ごめんね急に大きな声出しちゃって? あ、あははは〜」

「……………」

『私』にどないせいっちゆうねん?!

頑張れ『明るく、接しやすい子』。

黙らっしやい『クールな子』! !

寧ろこのまま質問攻めにすればいいのでは?

それだああああ! ナイスだ、『理性的な子』!

「アイスブレーカー、ファイアースターター!」

「……………」

「……………」コホン、親友との一番の思い出は何ですか?」

「ありません」

「今まで誰かにした一番悪かった悪戯は何ですか?」

「した事ありません」

「お気に入り入りの服は何ですか?」

「ありません」

「好きなお菓子は?」

「ありません」

「土曜日の朝、起きたときに最初にすることは何ですか?」

「呼吸をします」

おうふ。

これは……

普通のゲームのハードモードどころか、『NINJA GAI DOO』のハートモードをクリアした時のレベルの難問だ。

ハイそこマニアックゲーマーなんて言わなーい。

これも立派とした話題共通情報ですー。

# 第5話 雨の中のワカメと雨も滴る良い女……………の 子

三月 視点

---

それから数時間後……………

三月は間桐邸から無事生還(?)し、士郎と帰り道を歩いていた。

「どうだ? あの桜つて子と友達になれたか?」

「……………色々と『重い』よ。(この数時間、完全に目が死んでいる人の抜け殻みたいな子なんて私、相手をした事が無いのですが)」

『政治家は無理難題を仰る』とはよく言ったものだ。

「(はい、『アニオタ』は『待機』ね)」

「ハア、そうか……………」

ため息混じりにそう言う士郎。

「え？ 何その失望感混じりの『ハア、そうか』は？」

「いや、その……慎二がさ、期待していたみたいで」

「期待？」

「うん」

『機体』って……………あのフルアーマーガン〇ム並の装甲は純度百パーセントのガ〇ダリウム合金やぞ？ ちつとやそつとの攻撃<sup>攻め</sup>では——

「——はい、『アニオタ』はしばらく『封印』ね！」

士郎曰く、慎二は桜を心配しての行動だったらしい。

家でも学校でも暗く、変わらない表情のまま、いつも俯いている桜を何とか元気づけてあげようとしていたようで、悩んでいたのを士郎が聞き、『昔の三月』を連想したらしく、『今の三月』を見てきた彼の推薦で三月と会わせる案が出た。

慎二は「へー、あの『月の女神』がねー」と言いながらも、三月の『学校での人となり』を知っている彼はこれを名案と受けて即行動に移ったとか。

「(成程。私を矢面に立たせたのが、まさかのお兄ちゃんだったなんて……………)」

ちなみに『月の女神』なんて二つ名が三月に付いた理由は見た目(白い肌)と近寄りたがたい雰囲気(普段の静かな態度と落ち着いている様)に反していざ話してみるとかなり接しやすく、博識で色んな事の質問に対して答えが返ってくるが積極的に自分から人

と関わらないからとか、まるで宇宙に浮いている月に着 ムーンランディング 陸したような感じだとか。

「まあ……桜の事は分かったし、慎二が心配しているのは分かった。そっか……じゃあ、間桐邸 あそこより、今度からは 衛宮邸 ウチに招待して良い？」

「ああ、慎二も喜ぶだろうしな」

「何でお兄ちゃんは私を見ながらニヤニヤしているんだろう？ というかこれって桜の為なのに、なんで慎二の名前が？ …………… ああ、私達が桜の為に色々している事が嬉しいって事か」

三月は取り敢えずその日の食材は激辛麻婆豆腐のみに限定して士郎を許す事にした。  
合掌。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

あれから一年ちよつとの時が過ぎ、衛宮邸に慎二と桜がよく来るようになった。

口では『仕方なく来てやった』など言うが、こつそり三月と大河と桜のやり取りを覗いているのは三人とも気付いていた。

そしてようやく一年が過ぎる頃に桜が初めて笑った。

『笑う』と言うよりは口の端っこがすこし吊り上がった程度だが。

その時の皆の大口を開けた間抜け面は三月は忘れられようがなかった。

「桜がッ！ 笑ったー!!!」

そして一番に歓声を上げながらガッツポーズをしていたのが慎二だという事も忘れられない。

「フハハハハハ！ 如何に純度百パーセントのガンダリ〇ム合金といえども、至近距離からそう何度も二連装攻撃は防げまい！」

そこから桜は更に変化していった。

何事にも無関心だった彼女が三月か大河、または士郎の後をつくようになった。

このトコトコ歩いて付いて来るのはどこか生まれたてのヒヨコを見ているようで、三月の胸はポカポカした。

あと、一方通行だった会話も桜はある程度出来るようになった。

なつたというか……………

衛宮家の三人自体が話題になるのだが……………

「(ま、まあ『友好関係』で『話題』は必要だからね！ うん！)と言う訳でお兄ちゃん、ポテト頼んだー」

「何が『と言う訳で』は知らないが頼まれたー。 ホワイトソースは良い匂いするなー」  
「ねー。 チーズ多めにしようー」

三月と士郎がエプロンをしながらグラタンの用意をしているのを外野は見守る。

「ああ、いつ見ても良い……僕は今、歓喜に満たされているッ！」

「そうねー、あの二人の料理すつつつつつごい美味しんだからー」

「……………はい、あたたかいです」

「僕も美味しいと思うがそれじゃない……………じゃなくて！」

「(通常運転の大河とワカメは放っておくとして——)」

最初はこの光景を見た桜はどこか理解出来なかったような感じで眉間にシワを寄せていたが、今ではすっぴんが楽しく(?) 頭を傾げて他の二人と待てるようになった。

……………

……………

……………



………

………

………

………

そしてジメジメする雨の日、あの慎二が傘を差しもせず、びしょ濡れになりながら衛宮家に突然来ていた。

三月は最初、『乾燥したワカメを濡らしていた』と思っていたが、彼の形相が余りにもよく『知っている』悲しみで、震える声で困惑している三月と士郎達に喋り始めた。

「分からない、僕は……………どうしたら……………どうしたら良いのか分からないッッ！」

彼は泣いていた。声と体を震わせながら。ビツクリしながらも士郎達は優しく声をかける。

「お、おい慎二…何かあったのか？」

「……………ああ。 あったさ。僕は、知らなかった。 知らなかったんだ！」

今までずっと……………ずっとずっとずっと、アイツは……………！」

慎二がギリツと歯を噛みしめて、床を拳で殴る。

「……………アイツは！ 僕を！ 哀れんでいたんだ！ 嘲笑っていたんだ！ 何も知ら

ない僕を！」

「えつと……………『アイツ』って誰？」

「ツ」

慎二は一瞬何かを怒りのまま叫ぼうとして、言葉を飲み込んで三月を睨んだ。

そんな彼の顔が、どこか痛々しくて、三月は自信の胸がチクチクした感覚を感じていた。

「ねえ、私達にはなsh——」

バキッ！

一瞬何が起きたのか分からなかった。

三月は慎二の方へと近づき、心配した声をかけると視界は次のとたん、玄関の天井を見ていた。

「……………？」

そして頬にじわじわと痛みを感じ始め、ジワリと三月の口の中で鉄の味をしたものが広がる。

【告。 頭部への損傷、軽微。 プロトコル手順に従い、修理を行いますか？】

「……………（ああ、これが『殴られた』痛みか）」

「……………は……………は……………ハハハハハハハ！」

未だに微動だにしない三月に慎二の笑う<sup>泣く</sup>声<sup>泣く</sup>が聞こえる。

「慎二いいいいいい!!!」

バキツ!

「グフウ!」

士郎の怒<sup>疾しみ</sup>りの籠<sup>疾しみ</sup>った声<sup>疾しみ</sup>が鈍い音と共に響き、慎二が息を素早く吐き出す。三月は起き上がって雨の中で慎二の胸倉を掴み、もう一度拳を振るおうとする士郎が見えた。

——ダメ。

「——ッ! 待つて!」

——ここで止めないとダメ。

二人が三月の声に反応してこつちを見ると同時に、彼女は立ち、そのまま出ようとして雨の中で倒れる。

「ッ! 三月!」

士郎は慎二を離してすぐに三月の元に来て、体を支える。

そして慎二は——

泣いていた。  
笑っていた。

「ハ、ハハハハハ！ ザマアないぜ！ 僕を、僕を嘲笑うからこうなるんだ！」

「慎二！ いい加減に——」

三月は手で士郎を制して、慎二の目を見た。

「……………私は、貴方を嘲笑った事など一度もありません」

「ッ！ う、嘘だ！ 僕は知っているんだからな！ お前は、僕の苦しむ姿を……………空回りする姿を内心笑っていたのを！ 何が『月の女神』だ！ お前は『悪魔』だ！」

慎二の言った言葉に三月の胸がズキリと頬以上に痛むのを感じながらも言葉を続けた。

「そんなことは一度たりともありません！ 私は……………貴方の——」

——まっすぐな、一途な生き方を誇りに思っています！ 決して！ 決してあなたを嘲笑うなどと考えた事はありません！」

三月のかつてない叫びを聞いた慎二と士郎両方は目を見開き、慎二の笑い顔が更に引きつる。

「あ、ああああ……………僕は……………ぼ、く、は——」

「慎二?」

慎二が笑泣きながらいながら、泥だらけのまま衛宮邸から走りだす。

「これで、良かったのかな? ちゃんと伝わったかな?」

若干の不安を残し、三月は気を失った。

士郎 視点

「三月妹が殴られた。

誰に?

慎二親友に。」

気が付けば士郎は怒りに身を任せて、慎二を殴った後だった。

「ハ、ハハハハハ! ザマアないぜ! 僕を、僕を嘲笑うからこうなるんだ!」

だが慎二は笑った。

「(笑いやがった)」

士郎が慎二の胸蔵を掴みながらも一度殴る前に三月が俺を止める。

「……………私は、貴方を嘲笑った事など一度もありません」

「(三月?)」

「ツ！ う、嘘だ！ 僕は知っているんだからな！ お前は、僕の苦しむ姿を……………空回りする姿を内心笑っていたのを！ 何が『月の女神』だ！ お前は『悪魔』だ！」

「(『悪魔』だと?)」

三月が？

ふざけるな！」

そう士郎が叫ぶ寸前に三月妹の次の言葉でグツと堪える。

「そんなことは一度たりともありません！ 私は……………貴方のまつすぐな、一途な生き方を誇りに思っています！ 決して！ 決してあなたを嘲笑うなど考えた事ありません！」

これに士郎はハツと気付く。

慎二の顔が、未だに雨以外の理由で濡れていた事に。

そして驚いた、三月が自分以上に信二を視ていた事に。

「あ、ああああ……………僕は……………ぼ、く、は——」

慎二が衛宮邸から飛び出して、三月が気を失った。

………

………

………

………

………

………

………

『こちら藤村組。 只今電話に出られませんので発信音の——』

——がちやり。

「……………ハア」

士郎は電話を切り、横になった三月妹を見る。

泥だらけで苦しそうに息をする彼女を。

寒い季節の中雨に当たった所為か、息遣いが荒く、汗を拭きだしながら苦しんでいた。

三月の身体は昔から弱く、突然体調不良になる事も小学生の頃は良くあったが、中学に上がって最近までは収まってきたというのはただ単に三月が無理をしなかった

だけらしい。

そして士郎も寒気を感じ始めていたので、三月を知人の女性に任せ、風呂に入らせた後に自身も入る予定だったが……今になって知っている女性の人達と連絡が付かなかった。

「……………クソ！」

歯がゆさで士郎は壁を殴り、拳に再度痛みが走る。

「(……………そういえば慎二を殴ってしまったな。俺を恨んでいるだろうか?)  
……………」

苦しんでいる三月を再度見て過去を思い出す。

士郎から見た『昔の三月』はどこかオドオドしていた為、一緒に手を繋いで出掛けたり、一緒に(背中を合わせて)布団で寝たり……………一緒に風呂にも入っていた事もあるが、それも全て中学に入る前だ。

『お兄ちゃん』呼びは未だに続いているが、まるで別人と思えるほどに中学に入ってから三月は本当に見違えるように変わった。

衛宮邸で士郎と二人の時だけの場合は甘えてくるが。

「(……………よし、現実逃避はこれぐらいにしよう。ここには泥だらけで汚れて、体が濡れて冷え切った三月がいる。そして今そばには俺しかない。覚悟を決



めるんだ！ 衛宮士郎！」

……

……

……

……

……

……

……

「フウ」

士郎は湯船に浸かいながら溜息を出した。

ちなみに三月の体は（目隠しをしながら）布とお湯で拭き、彼のジャージに着替えさせてから新しい布団と毛布で寝かせた。

三月のパジャマ：と思ったが、仮にも女性の部屋の中に入ってまでダンスを開ける勇氣は無かったそうだ。

体を拭く、その時チラリと目隠しがズレ——

「雑念退散雑念退散雑念退散雑念退散雑念退散雑念退散ツツツ!!!」

士郎は顔にお湯をバシヤバシヤと乱暴に洗って、他の事に気を逸らす事にした。でも着替えさせた時の感触、やわら——

「うおおおおおおお!!!」

湯船から出て、冷たくい水を頭からかぶり、頭顔を冷やす。

三月の下着？

士郎は脱がせなかったので、起きた三月は若干不満そうになったのは後の事となる。

そして結局この日から慎二も桜も衛宮邸に遊びに来る事は無くなり、彼らと知り合う前の状態に逆戻りしてしまった。

いや、寧ろ慎二が来なくなった分更に悪化したと言うべきか。

三月 視点

バシイン！

「あいた!!」

三月は鋭い音と共に手が痛み、顔をしかめる。

「うーん、やっぱり三月ちゃんは筋力が弱いかな？ 力はあるけど、あまり長持ちしないし…やっぱりもう少し体を作る所から始めようか。それまではゴム弓を引くのは控えめにした方が良いかも」

「でも、美綴には話ているでしょ？ 私はずっと『こうだ』って」

「もう！ 今更知らない中じやないんだから『綾子』って呼びなよ、『月の天使』さん？」  
「う。ま、まだ成長中だからね、『主将』！ これでも二段弁当箱一人で毎日食べているんだから！」

「はいはい、そういう事しておくね……………それにしても、アンタが羨ましいよ、あれだけ食べても太らないなんて…」

『美綴綾子』。穂群原学園の生徒。

そして三月の『兄さん』が所属している弓道部の主将だ。

あの『雨の日』から気を失った三月が起きた後、『お兄ちゃん』と呼ぶより『兄さん』と呼んでくれと土郎が彼女に頼んだ。

と言つても、外などでは『土郎』と呼ぶようになってしまったが（視線が痛かったらしい）。

特に嫌がる理由もないので三月は了承し、そして高校に上がってからは土郎と一緒に弓道部に入り、あの慎二に再開した時、二人はすごく驚き、彼ら二人を見るのが辛かつ

たのか、最初の頃に再開した慎二は部活動をサボっていたり、仮病で姿を見せなかったりなどしていたが『美綴綾子』がある日、校門からココソコと出ようとした慎二を（物理的に）無理矢理弓道場まで引きずって来て、（物理的に）無理矢理挨拶をさせた。

今では昔のように………とまでは行かないが、それなりに士郎とは話せる仲には戻った様かに見えた。

あと、『月の天使』の二つ名に関しては彼女の体格が関係してくる。

何故か中学に上がった辺りから身体がほぼ成長しなくなったのだ。

周りの人達の身長や他の部分等がグングン伸びる中、三月はそのままなので、体格が『女神』から『天使』に下がったらしい。

気にしていた三月はありとあらゆる行動で何とか改善しようとしたが………未だにあまり変化は何処にも表れていなかった。

「ハア……（牛乳飲んだり、鉄棒にぶら下がったり、兄さんの陸上部の真似までしたのに………いや基礎体力は上がったよ？ でも体は成長してくれなかったよ。食欲はそれに伴い増える一方だし……魔術で他人の前で自己強化を頻繁にする訳にはいかなしいし……）」

三月にとつてはトホホのホである。

そこで士郎が弓道部を進めて、何で加入したかの理由をある日三月が言う――

「——ええええ？ 成長した三月なんて『三月』じゃないよー！ 今のままでいてよー！」

「そうよー！ 何で私達が弓道部にいると思てんの?!」

「むしろお持ち帰りしたい。 ハアハアハア」

——などと他の部員から言われ、御覧の通り弓道部員よりは弓道部マスケットになつていた（最後の二人は美綴に怒られて反省は一応したらしい）。

三月的にはまあ、内心複雑ではあつたが悪い気はしなかつた。

「何だ何だあ？ まーだゴム弓を卒業出来ていないのかよ、三月い？」

何時ものニタニタとした笑顔で慎二が三月たちに言い寄る。

「や、弓持てば一応引けるけど、長時間するのは危なっかしいって綾子が言つてさ」

「はー、兄が『お人よし』なら、妹は『言いなり』か?」

そして何かと多い慎二からの『文句』と取り巻きの女の子達がクスクスと笑う。

これも多分、慎二なりの気遣いなんだな—と思う三月。

「ただ、彼の取り巻きガールズの反応と態度がその印象をずらしてしまうから、他人からは『嫌な奴』になつてしまうけど。」お気遣いありがとう、慎二君」

「あ……………チッ！」

三月がいつもの通りに笑<sup>言葉スワール</sup>顔でそう答えると慎二がタジタジしながら舌打ちをして道

場の別の方へと歩き、美綴がジト目で見ると、

「アンタ、分かっていてやってんの？ それ？」

「????? 何を？」

「?????……ハア、流石『月の天使』様ね。これで衛宮のように弓も百発百中だったら『月のアルテミス』に改名できるのになー」

「なんでさ？」

だが『この時も』長くは続かなかつた。

この後の週間後、士郎がバイト先で肩に火傷を負い、慎二が「火傷の痕のある奴が礼射をするのは見苦しいのでは？」と指摘した事を士郎は真に受け取ったのか、彼は弓道部を辞退する事となる。

元々体作りの為に三月も弓道部に入っていたので、彼女も辞めると宣言した時は皆からの反応に胸が変な感じだったのが三月にとっては印象的だった。

だが流石に宣言をした同じ日に他の部活からの誘いが来るとは思わなかつたので、次の日から一応『弓道部の助っ人』みたいなポジションと、『時間があつたら来る』と、美綴に条件を付けた。

「まあ、片手を使えない兄さんの面倒を見るからその様な時間は当然無いと思うけど」

そう思い、『あの時』のように雨が降る日――

—— 『間桐桜』が衛宮邸に一人で訪問して来た。

以前の死んだ目と感情の無い状態で。

傘も差さない彼女を見ると、何時かの慎二の事を二人は思い出しすぐに彼女を中へと招き、取り敢えず体が冷えないようにお風呂に入れて、彼女は三月の……………ではなく、士郎のジャージに着替えさせた。

「悔しくないわよ。悔しくないんだから！桜に私の服のサイズが合わないなんて〜！」

そして士郎の調子を見に来た藤村先生に士郎のジャージを着た姿の桜を見て、士郎に迫って盛大に怒った。

「いや、何が『三月ちゃんと言うモノがありながら！』なのかが分からないよ、藤姉。」  
その日は何とか怒るタイガー大河をなだめてから桜を見送った。

だが桜は来る日も来る日も、平日も休日も、晴天も雨の中でも関係なく訪問しに来た。

「(う)くん……………『私』から見た彼女は何か『自分から訪問』をしているんじゃないかと、『訪問させられている』感じがするから、慎二の気遣い……………なのかな?」

このままでは埒が明かないと悟ったのか、三月と士郎は桜を招き入れ、その日から家の家事などを手伝わせた。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

更に一年が過ぎ、三月と士郎の二人は晴れて穂群原学園の高校二年生になり、桜は一年生の、彼らの後輩となった。

そして彼女はその一年の間に徐々にかつて以上に感情を見せ始め、『人の抜け殻』から『人』へとすくすく成長していき、今では立派に毎日衛宮邸の家事を手伝ってくれて、そ



のおかげで士郎は以前よりもっとバイトを増やし、土蔵で『修行』する時間などが出来た。

勿論、魔術を知らない桜に隠れながらだが、あまり進歩は捗っていない、三月も直接助けたいが、以前切嗣に言われたのだ。「君は有能すぎる」らしく、「他の人に悪影響を及ぼせかねないから極力他の人には秘密にして、助言をするのは口頭で」と。

ただあまりにも進歩が無く、士郎は「自分には才能ないかもな」と苦笑いをしていたが、三月に言わせてみれば、士郎の魔術は『強化』ではなく別の『何』かと感じた。

彼女自身、正式に魔術を一から習ったわけでは無いのでこれを単なる『違和感』として認識を処理していた。

後、三月は何気に薬や包帯の使い方が更に上達した。弓道部の頃から他人の怪我などの治療や、桜が何時の日か家で家事をしている時に怪我をしているのを見て手当をするようになった。

桜は「先輩士郎に何も言わないで」と言ってくるが、明らかに殴られたりされた跡に三月は酷く動揺し、モヤモヤとした気分で桜の意思を尊重していた。

毎度必ず「どうしたの？」や「誰なの？」と三月は訊くが桜は何も言ってくれないので、ただ静かに怪我を見た都度に手当を施す。

話が少し逸れたが、桜は今では衛宮家の家事全般を自分から担おうとしているので、

三月にも時間が出来た。

ただ、何故か彼女が士郎の様子を見に行くと桜もついてくるので士郎の邪魔にしかならない。

なので見に行けない代わりに普段は新聞や本を読んだりなどをしている(『知ろう』と思わず単純に読んでいるだけ)。

そして剣道の素振りなどし始めたなら何処で聞きつけたのか未だに突つかかってくる大河に試合を申し込まれるので三月は控えている。

「あ〜ん！ 士郎も私と試合するの嫌だって言うし、私はどうすればいいの〜?!」  
と嘆く大河だった。

ちなみに今三月は『理論書』と呼ばれている物などを読み始めて、家だけでなく、教室で休憩時間の合間(二段弁当を一人で食べた後)に続きを読み続けている最中に話しかけられた。

「そう言えば三月って『ミス・パーフェクト』と会った事ある?」

「……………?????」

「え、三月は知らないの?!」

「やーね、三月には多分眼中にないのよ。チャームポイントも方向性が違うし」

「う〜ん? (そんなんじゃないなくて、ただ興味が湧かないだけなのだけど…)」

「私達の学校はいいなー、文武両道の美人と小さくて可愛い子がいて……この二人が——おっとヨダレが……」

いつも三月の周りに来る女子生徒たちが『ミス・パーフェクト』と呼ばれる人と彼女を比べ始める。

曰く彼女と似ている部分があるのだとかなんとか。

「……………か最後の奴、『小さくて』の一言は余計だ！　せめて『小柄な』と言え！」

そして士郎は未だに『人助け』を積極的にしていて、時には朝早くから登校して夜遅くまで帰って来ない。

過ぎる日々に度が上がって行くような気がするのは三月だけでなく、大河が彼女と心配する桜の分まで説教はしてくれるが効果は無かった。

ただ三月の胸がこの頃余計にザワザワし、ニュースで見る殺人事件やガス漏れに行方不明者事件等を見て『違和感』が更にそれを引き立てた。

「……………物騒だ。これからは兄さんと一緒にいなくてはならない」

そう思った次の日、三月と士郎は久しぶりに弓道部にいた。

## 第6話 「That」 Fated Night

三月、士郎 視点

「士郎………人助けは良い事なのは理解しますが、何も所属していない弓道部の後片付けまでしなくても良いと思うけど…」

「まあ、頼まれたものはしようがないだろ？ それに三月と一緒に終わるさ」

「士郎が、そう言うのなら…」

そう、もう所属していない弓道部の後片付けを慎二が士郎に頼んだのだ。

何だか新しく入ってきた新人達に慎二が無理難題を押し付けて、彼らのやる気をへし折ったらしく、人手が足りないそうで、これには流石の三月もムツとしたから士郎を手伝い始めたなら、その時にまだ弓道部に残っていた男子達が彼女に言い寄ってきた。

「よう、三月！ 後片付けなんかは衛宮に任せて、俺達とゲーセンかカラオケに行こうぜ！」

「御免なさいね。兄さんの手伝いをした後でならいいと思いますけど……ね、兄さん。」

普通、士郎の事を学校や衛宮邸外で『士郎』と呼んでいる三月だけに『兄さん』を強調しながらこうやって話題を彼士郎に向けると大抵の相手は呆気に取りられるか、顔が引きついて諦めるかの二択だった。

「(……同じ『衛宮』なのにこうも忘れるってどうなのよ？ 前にも道場で女子三人に兄さんが『ワカメ』、もとい『間桐慎二』、と思われて襲い掛かりそうになるし、よくこの学園の生徒には物覚えの悪い人達が平気で部活をやっていけるな……仕方ないか、穂群原学園は『文』より『武』に重みを置いているようだし……)」

三月は拭いていた布を絞り、作業を続ける。

「(とういかあの褐色肌の『蒔寺楓』、やっぱり陸上部だったんだ。かなりキレの良い『棒術』だったからメインの部活は武術方面かと思っただけど……でも突然襲ってきたのには胸がムカムカしたので、私が兄さんの妹として名乗り出た時に三人とも口が開きっぱなしになったのには少し胸が躍ったな。特に『衛宮三月』です、いつも陸上部員の皆さんには良くされています』と言ったら『蒔寺楓』は土下座をしてきた(『良くさされている』と言ってもたまに顔を出す度にお菓子とか飴をくれる程度にだけ)。あと、兄さんが『穂群原のブラウニー』と呼ばれるのは……なんか……胸がこそばゆいか

な？　ただそれも白い髪の『氷室鐘』が学園近くの殺人事件の事を話している間に兄さんの目が変わったからプラマイゼロになったけど、結局」

三月は床拭きをしながら取り敢えず、今はちやつちやつと片づけを終わらせて早く学校から出たい気分です。いっばいだった。

今も薬で我慢はしているが、この頃学校敷地内に入ると眩暈と頭痛、そして吐き気が常時三月を襲うので用事がなければすぐに帰っている。

弓道部を辞めて自宅部になり、他の部活などに顔を出す日以外から何も変わっていないが。

そう思い、床を拭いている士郎の手を三月が見ると――

「――ッ。　兄さん、その手の痣は何ですか？」

士郎の手の甲に痣みたいな模様を見た三月は息を吸い込み、尋ねた。

「ああ、これか？　今朝も桜に聞かれたけど分からないんだよな。　どこにもぶつけていない筈なんだけど……」

「そ、そうなの……（ああ、今日そう言えば桜が珍しく皿を割っていたつけ。　それが理由か。　いや〜ビックリしたよ、居間で大河の相手をしていたら急に「パリン！」って音がしたし。　桜には「お皿の事は気にしないで」と言っただけ全然元気がなかったし……あれ？　そう言えば桜って珍しく私にお願いしていたな、「学校が終わったら

先輩兄さんを出るだけ早く家に帰らせて」って——」

——ギイン！

突然日の落ちた頃に弓道部の道場に響いた金属音に三月の考え事が横切られる。

ギイン、ガアン、ガキン！ ガアン！

金属と金属がぶつかり合う音に二人は釣られ、道場を出る。

そこには赤と青の男性が、武器を持ちながら衝突していた。

「何だ……あいつら？」

士郎が見入るように目の前に独り言を漏らす。

「う……………あ……………」

三月も息を漏らす。

だが士郎と違い『関心』からではなく『痛み』で。

何故なら、今かつてない量の『情報』が『自動処理』出来ない程、言語化も出来ないほどに「——」の声や半透明のイメージなどが三月の頭の中に入って来る。

以前の切嗣と大河の修行など比べようもない。

比べれものがあるとしたら彼女が以前、試しにアクション映画を視た時に主人公達が様々な拳法を使う時、『理解しよう』としたら自分自身の頭にそれが直接叩き込まれるような感じがして、その日は熱を出して寝込んだ程。

あの時の情報がDVD一枚分と例えたとしたら、今度はDVD二、三枚分の量だった。さつきから抑え込んでいた頭痛に眩暈に吐き気がぶり返し、彼女の体が倒れそうになる。

「ッ！ 三月！」

兄さんが倒れる三月の身体を受け止め、恐怖からその場を逃げる。

士郎、三月、??? 視点

士郎が三月を抱えながら校内を走る。

先程から感じる恐怖が士郎を焦らせる。

「ハア、ハア、ハア！（逃げなきゃ！逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ！）」

士郎は走る。

走る。

走る。

走る。

ただひたすら走る。



「——ッ！ ブハー！」

遂に肺が欲する空氣に息が追い付かず、士郎は盛大に息を吐きだして、足がもつれて転ぶ。

転んだはずみで三月が先の廊下へと落ち、士郎は後ろからの足音に振り返るが、誰もいな——

「——よう」

「ッ?!」

そして真後ろから声がして、士郎が再度振り返ると——

「——あ？」

気が付けば、青いタイトスのような服を着た男性の赤い槍に心臓を貫かれていた。

「運がなかつたな、坊主」

槍が引き抜かれ、士郎が倒れるのを三月が体を起こして見ていた。

「お…兄ちゃん？ え？ お兄ちゃ——」

——三月は青いタイトスの男を無視して士郎の元へと校内の通路の床を這い、そして青いタイトスの男は彼女の心臓も後ろから貫く。

「——あ…」

三月は士郎を自身の身体で覆うように、彼の上に倒れ、青いタイトスの男はただ静かに

見下ろす。

「『死人に口なし』ってな。嫌な仕事させてくれるぜ……つたく、いけ好かないマスターだこと……」

そう言い残し、タイツ男はその場から文字通り溶けるかのように消えて、別の誰かの足音が廊下に響く。

「……………(俺は……………死ぬのか?)」

「心臓をやられていちや助からない……………え?! な、何で?! やめてよね?!」

「(正義の味方になれず……………誰も救えず……………守れずに…死ぬのか?)」

「(……………冷たい。背中が……………胸が……………痛い)」

【注。 背部、及び胸部?に深刻な生体ダメージを感知。 プロトコル手に順に従い、迅速な修理を行います。】

「(『修理』? これって『修理』出来るの?)」

「なんだって、あんた達二人が……………こんな日に……………こんな時間に……………私は……………私は、あの子になんて言えば良いの?! ……私……………いいえ、まだ……………手はある!」

【○□を確認しました。 『修理』を開始シマス】

「(ああ、これは……………)」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

先に気が付いた士郎は苦しみながらも起き上がり、近くにあった赤いペンダントのよ  
うな物をポケットにしまい込み、よろよろと同じく起きた三月に肩を貸しながら学校を  
後にする。

道中、二人は人っ子一人も見えない夜道を歩き、衛宮邸の中へと転がり込む。

「.....痛いですが、兄さん」

「.....ごめん、でも.....あれは何だったんだ？」

「夢.....ではないですね、制服に穴も開いているし、血が付いている.....洗い落とせるか  
な？」

「ハハ……三月は少し変わったと思っていたけど、全然だな」

「?????」

「未だにマイペースだと言う所とかさ……なあ……俺達、殺されたんだよな？」

「……うん、多分」

「だけど……俺達は生きている。誰かが後から来たんだと思う……誰だったんだろう

? 礼ぐらい言わせて欲しかつ——」

——カランコロン——

「——兄さんッ!」

簡易結界

木の音がすると、三月が士郎にタツクルをかませて、先程の青タイトの男が天井から床の畳に槍を突き刺す。

士郎と三月の二人が転がり、近くに落ちた丸めたままのポスターを一本ずつ、剣のよう士郎と三月が構えた。

「ハア……つくづく運の無え奴らだ。この俺が一日に同じ人間達を二度殺す羽目になるとはねえ」

「トレース、オン。構成材質、補強!」

「再構築、開始!」

士郎はポスターに強化を施し鉄のように、三月はポスターの炭素の原子構造を弄り、

ダイヤモンド並みの硬さに。

これを見た槍を持ったがニヤリと笑う。

「へえ？ 微弱だが魔力を感じる。魔術師か。『心臓を穿たれて生きています』ってのはそういう事か」

「(こいつ、強い!)」

さつきから何度も脳内で様々なパターンや想定を三月はしているが、逃げようと何処を何しても結果は二人とも殺される末路のイメージしか浮かび上がらない。そんな彼女は――

「――はあああああ――!」

「――へえ?」

三月は自分が時間を稼げばいいと思い、二人共死ぬのではなく、一人が生きる為にもう一人が死ぬ。

正に論理的な判断だった。

【戦闘を確認。武器の特徴により『剣道』及び『剣術』を備え付け、最適化ヲ開始】  
『士郎の事を頼む』

かつて、切嗣が亡くなる前に三月に頼んだこの一言が彼女を今動かしていた。

槍の持った青いタイトの男は三月が戸惑い無く向かってくるのが意外だったのか、彼

は笑みを上げながら槍で対応する。

「いいねえ、そうなくつちやな！ 二人共々かかって来やがれ！」

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

ただここで三月にとつて誤算だったのは『衛宮士郎』の『正義の味方』への執念だった。

確かに二人とも倒れるより、一人が生き残った方が良い。

だが果たして『正義の味方』はそんな事をするだろうか？

否。『正義の味方』は救おうとする、皆の命を。

青タイツの男の相手を試みる三月と士郎。初めての命を懸けた共闘の筈が共に生きてきた年月の長さの幸いしたのか、はたまた二人とも同じ剣道の師をもったのが功を表せたのか、士郎が青タイツの男に切り込み、三月が防御をフォローする。

「ハッ！ 人間にしちやあやる——ねえ！」

だが青タイツ男の圧倒的技量の前に数秒足らずで二人は中庭に吹き飛ばされて、手に持っていたポスターは二つともへし折れていた。

二人は命からがら土蔵へと逃げ込むが、すぐ青タイツの男に追いつかれる。

「もしかして、お前達のどちらかが七人目だったのかもな。じゃ、死ねや」

「ふざけるな！ 助けてもらったからには、簡単には死ねない！」

「あ?」

士郎が青タイツの男に叫んでいる間に三月はとあるトランクを目で探す。

「(おじさんのトランクは何処——?!)」

「俺は生きて義務を果たさなければいけない! こんなところで意味もなく、平気で人を殺す…お前みたいな奴なんか!——!」

「ッ」

ズキリと三月の胸が痛み、風と光が場に荒れ狂い、青タイツの男の驚く声が響く。

「七人目のサーヴァントだと?!」

「問おう——」

青い衣装の上から銀色の鎧を身に纏い、黄金の髪を持つ少女はその凜とした翡翠の瞳を士郎達に向けて、言葉述べた。

「——貴方が私のマスターか?」

「……………マスター?」

突然の出来事にただオウム返しをする三月を士郎に黄金の髪を持つ少女は言葉を続けた。

「…………サーヴァントセイバー、召喚に従い参上した。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した。マスター、指示を」

二人は呆気にとられている間、少女が何かに気付いたように後ろを振り返り、蔵から飛び出して、先程の青タイツ男と戦っていた。

【告。『西洋剣術』を確認、写影シマス】

「ッー」

今日だけで何度目か分からない『自動処理』仕切れない情報に三月はまた頭痛がするが、士郎はただただ戦っている少女を見ていた。

火花が散り、地面が抉れ、常人ではありえない跳躍を双方が為し、二つの影が交差しながら衝突する。

それは、すこし前に見た赤い男と青タイツ男の戦闘に近かった。　　が、あろうことから少女の方が男をじりじりと追い込んでいた。

それは単なる技術の差、あるいは力、もしくは他の要因もあつたのかも知れないが、決定的な違いに、少女の武器は『見えない』。

『見えない武器』というのは厄介なもので、間合いが掴めず、軌跡も読みづらい。「どうした、ランサー？　止まっていますは槍兵の名が泣こう」

青タイツの男——ランサーと呼ばれた男は忌々しげに少女を睨みつける。

「その前に一つ聞かせろ。貴様の得物<sup>武器</sup>……………それは剣か？」

「さあ、どうだろう？　斧、槍、いや……………もしかや弓と言う事もあるかも知れぬぞ？」



「ぬかせ、セイバー………なあ、お互い初見だしよ。　　ここら辺で『分け』って気はねえか?」

「断る。　　貴方はここで倒れる、ランサー」

ランサーは溜息を出しながら、赤い槍を構えると、槍の放つ禍々しさが増大する。

「そうかよ……『その心臓もらい受ける!　　刺し穿つ死棘の槍!』」

一瞬だった。

槍がセイバーに当たったと思ったランサーは怒りを露にして――

「――　　躲したな、セイバー。　　我が必殺の一撃を」

「グッ……今のは因果の逆転……それにその槍術……御身はアイルランドの光の御子か」

「は、名が知れているのも考えもんだぜ……うちの雇い主は臆病でな、『帰ってこい』なんて吐かしやがる」

「逃げるのか?!

「ああ、逃げるさ。　　元々様子見だけだったしな。　　次会う時は決死の覚悟を抱いてこ

いや」

「待て、ランサー!!!」

左腕の付け根に傷を受けたセイバーはランサーを追おうとすると――

「――　　うわ、ちよつと待て!」

「な?! マスター、何をする?!」

我に返った土郎がセイバーを後ろから羽交い締めにして止め、これに対してセイバーが目見開きながら驚き、三月が遠い眼をしながら見る。

「(うわー、懐かしいなー。前に兄さんが外でボコボコにされて帰って来た時に私がムカムカしていたら、ああいう風に兄さんに止められたなー)」

暴れるセイバーから土郎が降り落とされ、セイバーが土郎を睨む。

「マスター! 何故止めたのですか?!」

「落ち着けて! お前は一体何なんだ?!」

「(うんうん、私もそこが聞きたかったのよ)」

「? 見た通り、セイバーのサーヴァントですが? ですので、セイバーと呼んで下さ

い」

「(それ答えになつていねえよ!)」

内心ツツコミから先に意識が帰って来たのは土郎だった。

「あー、俺は土郎。『衛宮』土郎だ」

「衛宮? (まさか……………)」

「あ、私は——」

「——ッ!」

セイバーは三月を見た瞬間、驚きの顔になる。

「あ、貴方は……」

「え？（……………何その顔？）」

「あ、ああ。こいつは『衛宮三月』。俺の義妹だ」

「……………そうですか、初めまして。（やはりそうそう都合良く召喚はされないか…）」

「あ、ハイ。初めまして、セイバー」

「して、どちらが私のマスターなのですか？」

「「え？」」

「どちらかに『令呪』がある筈なのですが」

「その、『令呪』って何だ？」

「あ！ 兄さん、手の痣が！」

士郎はさつき痛かった手の甲を見ると、痣が何かの模様に変わっていた。

「成程、では貴方が私のマスターですね。ですが貴方は正規のマスターではない。

ですがマスターはマスターです」

「（ちよ、何この子？ ……『ズンズンとゴーイングマイウェイのスタイルで我先にと行

きながら他者の手を無理矢理引っ張るタイプの子』と見た）」

士郎の愛称が『マスター』から『シロウ』に変わった時、三月の胸がチクリとしたの

を感じる。

「ところでシロウ、傷の治療を——」

「——え？　悪いけど……俺、そんな難しい魔術は——」

「——あ、私出来ると思う」

「「え？」」

セイバーと士郎が三月の方を見ると、彼女がセイバーの近くに行き、掌から光を発するとセイバーの肩の傷がみるみると塞がって行く。

「「……………」」

「はい、これで良いと思うけど……どうかな？（初めて人間相手に使ったけど……違和感なくて良かった）」

「……ありがとうございます、治癒は効いています。（やはり、似ている……）」

「よかった。（ホ。効いて良かった。流石に猫や犬と人間は違うからね）」

「ところで三月殿はどこで治療を学んだのですか？」

「へ？（ど、殿お？）　あ、ああ。これはちよつと独学で……」

これは以前、桜の怪我などの頻度が上がった時に昔のように「出来るかな？」と思い、こつそりと近所の犬や猫に鳥など傷ついた生物に何度も試行錯誤を重ねてようやく編み出した魔術の一つだった。

これのおかげでその動物達になつかれ、それに気付かず学校へ登校し、校門前の教師に「ペットは家に置いてきなさい」と笑われながら三月が後ろを向くとブレイメンの音楽隊のように犬や猫が大人しく三月の後を付いて来ていた。

この動物達を散らせる事に苦勞した三月は一時的にだが二つ名が『ハーメルンの笛吹き天使』になって、からかわれていた。

「そうですか」

納得したのか、セイバーは追及しなかった。

だがこれを見た士郎は内心驚いていた。

彼の知っている範囲内では三月の魔術は自分と似た『解析』と『強化』と思っていた上に同レベル程の筈だった。

さっきのポスターの強化時は意識がハッキリしていなかったので気付いていなかったが、いざ少し落ち着いてもう一度見返してみたらどうだ？

『解析』と『再構築』、そして『治癒』。

だが士郎の記憶によると切嗣は『治癒』を知っていなかった筈だ。

何せ自分もそう言うのを知っていたら教えてくれと頼んだが、切嗣は『自分にその素質が無いから教えられない』と答えていたからだ。

「では何故、何処で三月は知った？」と言うような質問ばかりが士郎の頭の中をグルグ

ルと回るが、彼はそれらを全て一先ず置くと――

「――外に敵が二人います、迎撃に――」

「――ちよつと待てつて、セイバー！　こつちは何も分からないんだ、少しは説明してくれ！」

「敵はもうそこまで迫つてきています――」

セイバーが塀を飛び越える。

「……………ああ、もう！　何なんだよアイツ?!」

「兄さん、私はセイバーを追うわ！」

「え?!　おいちよつと三月――」

そして三月も頭痛を我慢して、自身の足腰を強化して塀を超えて、士郎が頭を掻きむしりながら玄関へと走る。

「待つて、セイバー！　その赤い人も待つて下さい！　つてあれ？　貴方は――」

「止めないで下さい三月殿、今なら仕留めれます！」

「ハア、ハア、ハア、ま、待つて…くれ…セイバー」

士郎が息を切らせながら言うのと、どこかで聞いた声<sup>こゝろ</sup>が答える。

「あら、これは意外ね。　取り敢えずこんばんは、衛宮君に三月」

そこには赤をモチーフにした独自の服を着ていた穂群原学園で『ミス・パーフェクト』

と呼ばれていた『遠坂凜』がセイバーと対峙している赤い男の後ろで立っていた。

士郎、三月、凜 視点

遠坂凜を衛宮邸に上げると、彼女は目についた割れたガラスなどを瞬く間に直して行き、士郎と三月が生身でランサーと対峙していた事に驚愕した。

「うわー、それは無いわー。 普通は瞬殺よ？ 分かる？ 瞬殺」

「仕方ないだろ、突然襲って来たんだから。 でも流石遠坂だな、立派な魔術師だ。 ガラスの修理とかなんて俺には無理だ」

「ハア〜？ アンタだって魔術師でしょうが？ これなんて初歩の初歩よ？」

「へー」

「いや、俺達は『基本』とか知らないからさ」

凜の肩をガクリと項垂れてブツブツと独り言の文句を言う中、三月は必死に彼らのやり取りを見ていた。

何せさつきからずつとセイバーと赤い男が彼女の事を見ているのだから尋常ではな

いプレッシャーが彼女を襲い、冷や汗を掻かせていた。

「(えー? 何で何で何で何で? 何でお二人さん私を見ているの? 私何かしたっけ?)」

居間に入り、凜と士郎(そして彼の後ろにセイバー)が座り、三月がお茶を入れようとすると、手がさつききの赤い人の手と重なる。

「あ、すみません」

「……………」

赤い人は何も言わずにただ延々とお茶の準備をして、それが終わり次第すぐに消えた。

「…あー、ありがとうございます?」

『…………別に感謝の言葉などいらぬさ』

「はへほっはっ?!」

何処からともなく帰って来た返事に三月はびっくりして変な声を出す。

「ちよつとアーチャー! その子に何か変な事してないでしょうね!」

「…変な事って?」

聞き返す士郎と三月に凜が頭を抱えそうになる。

が、一旦落ち着きが戻ると彼女は色々と話し始めた。



『マスター』の証として『聖痕』<sup>令呪</sup>を持っている事。

『サーヴァント』も自分の意志があり、『令呪』が『サーヴァント』を制御する絶対命令権である事。

そして『聖杯戦争』と呼ばれる魔術師の殺し合いの儀式と『聖杯』という儀式達成の報酬。

最初、士郎と三月も信じられそうになかったが、凜に今日だけで何があつたのかを言われ納得せざるを得なかった。『事実は小説よりも奇なり』のことわざを実感した感覚だった。

そして凜自身、マスターであると。

サーヴァントは『使い魔』であると同時に英雄と呼ばれる過去の人達や架空の人物が元になる時もあると。

〔成程……じゃあ、あのランサーって人はセイバーに『アイルランドの光の御子』と呼ばれていたから……えーと……『在った』、これね。『クー・フリーン』、か……って、本当に大物じゃない?! それにあのヒヨロンとした髪の毛、なくんか気になるな〜〕

サーヴァントの『霊体』と『実体化』。

そして今は凜のサーヴァントのアーチャーが周りの警戒をしている事を告げる。

何故なら既に聖杯戦争が始まっている上、士郎がマスターだと少なくとも一つの運営に

分かってしまったから。

この時、セイバーは極僅かに不満に聞こえるような事を言う。　士郎から魔力の補給が無いと。

これには凜もビックリした。　明らかデメリットを自分からさらけ出したようなものだ。　車で例えるとガソリンスタンドからガスの補給が無いような状態でエンジンを走らせているに近い。

だがこれはセイバーがただ単に自分のマスターである士郎に危機感を持たせる為であった。

凜は更に愚痴を零し始め、「何でこんな奴がセイバーなんかを引き当てるの?!」などと、学校ではありえない姿と言動を発する凜に三月と士郎はどんな顔をすれば良いのか分からなかった。

内心、三月は笑いそうになるのをこらえていたが、士郎から小声で自分に言葉が来てそれが無駄に終わった。

「あいつ凜の性格、どこか問題がある気がしてきたのは俺だけか?」

笑い出すのを抑える為に唇を噛みながら三月はゆっくり頷いた。

『明るくて接しやすい子』の三月は内心爆笑していた。

これは他も同じような状態だった（度合いが違うだけで）。

そしてセイバーが過去の存在からして現代の事は良く分からないかも知れないと心配した士郎に、セイバーからある人にして見たら爆弾のような宣言が出てきた。

「サーヴァントはあらゆる時代に適応します。ですから、この時代の事も良く知っています」

「……………(え?)」

三月がドキリとする。

彼女にはこの様な事が割と身近に感じたからだ。

「それに、この時代に呼び出されたのも一度ではありませんから」

「(つまり、さっきの彼女の反応からすると……………『私』に『見覚えがあるかも』という事?)」

最後に、士郎は聖杯戦争についてもっと詳しい話を聞く為に凛と共に隣の町にある協会へ行く事となる。

セイバーは霊体化が出来ないらしく、季節外れだが大きめのレインコートで体を覆い、士郎は傷と血が付いた制服から着替える。

三月も自宅で着替え始め、上着とインナーシャツを脱ぐと鏡の中を見て溜息をしながら自分の胸に浮き出ていた模様を見ながら、手でそれを触る。

「……………(やっぱり、これって『令呪』って奴……………かな? という事は私も『マスター』

なの?)」

三月はただ静かに鏡の中の自分を見て、数秒後には着替えを動きやすい服装へと再開する。

そして着替え終わった三月を見た土郎が不安そうに声を上げる。

「あー、三月? それでいいのか?」

「だってこれが動きやすいんだもん」

三月が制服から着替えたのは季節の割に軽装な灰色のフット付きパーカーに青い短パン、そして黒のタイツとニーハイブーツ、そして肩にかけたポシエット。

そして今では腰に届くか届かない程長くなった金髪を編んで、パーカーのフットの中に丸めたまま入っていた。

知らない人から見ればどこからどう見ても『子供が近所を一周するお散歩状態』だった。

「だからってこんなに寒い夜遅くにはどうかと思うんだが……遠坂はどうなんだ?」  
「うえ?!」そこで私に振るの?!」

「だから今から隣町に行くだろ? 冷えないか、あの格好だけじゃ?」

「あ、そこはコアラの子供みたいに『ヒシッ!』ってお兄ちゃんに引っ付いて——」

「————おい、それは無いd————」

「——ウグツッ!! ゲホツゲホツゲホツ!」

そこで三月が士郎の事を『お兄ちゃん』と呼んだところでお茶を飲んでいた凜がむせて、咳をした。

「お、おい遠坂? だいじよ——」

「——ちよつと、今のつて衛宮君の趣味なの?」

「へ? 何が?」

「いえ、何でもないわ……………まさか衛宮君にこんな……………紳士系男子どころか、まさかの『お兄ちゃん』呼びフェチ持ちだなんて——」

「——お〜い、遠坂?」

ブツブツと一人事を始める凜を士郎が現実呼び戻し、隣町の新都郊外の丘の上にある教会を目指し出発する。

ちなみに『コアラ抱き』を士郎に拒否されてブルー言う三月は士郎の厚めのジャケット（丈が長く、袖が多少ブカブカのサイズ）を一つ借りて満足していた。

彼女曰く、自分のサイズの服の多くは『機能よりファッション』向けらしく、寒さを防ぐためには何重にも着こまないダメらしく、それなら士郎の男性ものを一つ借りた方が良いという話で決まった。

決して（三月の合うサイズの服が）子供っぽいからという理由などではない。

あと『お兄ちゃん』呼びは再度士郎の頼みで封印され、凜の誤解は一応解けているかのように思えた（何の誤解かは知らないが、凜が士郎を見る目がそれまで厳しかった）。

「♪」

「おい三月、かなりご機嫌だな？」

「だって兄——『士郎』とこうやって外出掛けるのなんて久しぶりだもん」

そう、こうやって三月と士郎が買物以外で外へ出かけるのは下手をすると小学校以来なのだ（士郎が何時も学校に居残りやバイトをしている為、そして家では最近桜か大河がいる為、なかなか二人だけの時間が取れなかった）。

そして三月はその頃を懐かしむように鼻歌と共に笑顔になっていた。

士郎も口では文句を言っているが…満更でもないのか、内心安心したのか、それかただ面倒くさいのか、ずっと三月のやりたいようにやらせている。

「ハイハイ、手も昔みたいに繋ごうか？」

「うん♪」

「いやいや、今のは流石に冗談のつもりだったんだが」

「なーんだ、士郎のケチ」

「……………私が何でこれに付き合わないといけないのかしら？」

「ん？ 何か言ったか遠坂？」

「な、何でもないわよ！ ほら、キリキリ行くわよ！」

新都への移動中、セイバーが凜へと問う。何故士郎はセイバーが戦うのに遠慮していたのかと。

これに対して凜はジト目で士郎の方を見ながら、彼は「恐らくマスターやサーヴァントや魔術師など関係なく、それは彼が『士郎だから』だ」と説明する。

セイバーと士郎と三月には全く答えになっていないが、凜にはそれで充分と判断したのかそれ以上何も言わずただ歩く。

## 第7話 袖すり合うも他生の縁

---

三月、セイバー 視点

---

「あー、冷えるねー。寒いねー」

「……………」

「セイバーは寒くないの?」

「私はあらゆる戦場にいましたのでこれ位は平気です」

セイバーは何故か頑なに教会の中へと同行せず、三月は「まーた何かバ○オハザード感どころかサイレント○ル感がピンピン来ているからパス」と（凛には）意味不明な事を言い、結局教会内には士郎と凛だけが行く事になった。

「三月殿は——」

「——『殿』は勘弁して、むず痒い」

「では、三月は『アインツベルン』という名に覚えはありませんか?」



「『アインツベルン』？ ……………はて？ 何処かで聞いたような……………：うーん？」

「では、『キリツグ』には？」

「あ！ 『衛宮切嗣』？ おじさんの事？ うん、知っているよ？ てか、おじさん切が私達の親代わりなんだけど？」

「……………（キリツグ、貴方は…）」

「？」

急にセイバーが黙り込み、三月が頭を傾げて彼女の目がセイバーの頭へと行く。

「そう言えばセイバーの髪の毛ってサラサラだねー。それってシニヨンだっけ？ それも可愛いけど髪を下したセイバーも見たいなー、ツインテとか」

「そんな事より早く聖杯戦争に勝ち、願いを叶えたいです」

「『そんな事より』だって?! セイバーはもとが良いんだから、もっと——」  
「——あんた達、何やってるの？」

凜の呆れた声が教会の門で待っていた二人にかかる。

セイバー運営、アーチャー運営 視点

『何でも望みが叶う願望氣』。

それが聖杯。

そのための聖杯戦争。

そして士郎はその聖杯戦争を総括に終わらせ、人が命を落とす前に自分の勝利で終わらせる事をセイバーに宣言する。

そして聖杯へかける願いの話が変わった。

「私なら体の成長を願うかな？」

「ハア？」

衛宮邸に帰る中、三月の何気ない一言で凜がさらに呆れたような声を出す。

「や、だつてさ。信じられる？ 私って小学生からほとんど身長とか変わってないのよっ。」

「そんな事を言ったら俺なんてまだ167cmだぞ？ 男子にしたら低い——」

「——ヘー？ ほー？ ふーん？ 悪かったわねー。140cmの私が文句言つて。どうせ140cmの私は遠坂さんに色々敵いませんよーだ」

「あんた達ふざけているの？ 聖杯をそんな事に使つて……………」

「え？ じゃあ遠坂さんは何を願うの？ 身長も胸も顔も良いから…お金とか？」

「あ、それも良いわね——じゃなくて！ いい？ 聖杯は魔術の神秘に匹敵する代

物なのよ？ それをそんな気軽に——！！」

「——そんなに怒るとシワが増えるわよ、凜。　こんばんは、『お兄ちゃん』。　会うのは二度目だね？」

士郎達に声をかけたのは雪のように白い髪と、血のように赤い瞳の愛らしい少女と彼女の後ろに立っていた浅黒い肌の巨人が禍々しい殺意を放ちながら彼らを正面から見つめていた。

「私の名前はイリヤスフィール。イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。　ずっと、こうして貴方に会える日を待っていたわ」

「ッ?!　ガッ——」

イリヤスフィールの言った事に引つ掛かりを感じると同時に三月は頭を抱え、股を地面に付き、士郎が駆け寄る。

「三月?!」

「い、痛い?!　痛い痛い痛い痛い痛い痛い!　頭が………痛いいいいいい!」

三月は今日で何回目も分からない頭痛に顔をしかめ、目を閉じ、あまりの痛みから涙が流れる。

まるで内側から何かが力づくで出ようとしているかのようだった。

「……ふーん、そういう事なんだ。　やりなさい、バーサーカー」

「■■■■■■!!!」

「ツ！ ハアアアアア！」

「アーチャー、距離を取って援護射撃！」

セイバーはレインコートを脱ぎ捨てて咆哮を上げ、迫り来るバーサーカーに真つ向から立ち向かい、アーチャーは援護射撃に移行する為に距離を取りながら矢を射る。

「アハハハ！ 彼女は死にくいかからまず四肢をもいだから犯しなさい！」

「ハア……ハア……ハア……」

士郎は肩で荒く息をする今日二度目の発作で苦しむ三月を支えながら目の前の戦い……と呼ぶには遠い、バーサーカーとの闘いを見ていた。

セイバーが攻撃を流し、アーチャーの矢をバーサーカーが払い落とし、凜が魔術で捌め手で場を有利にしようとするが――

「――あいつ、なんて化け物なの?！」

士郎は凜の切羽詰まった声からも、自分も本能で感じていた。

『バーサーカーは規格外』だと。

先程セイバーとアーチャー、そして凜まで強力な一撃を入れた筈なのに、傷一つ無いどころか動きが加速する一方のバーサーカー。

「……さん……さん……」

士郎は自分の力の無さに歯をギリツと噛む。

「そうね、セイバー達はバーサーカーに任せて、こっちはこっちで用事を済ますとしましようかしら？」

「ツ！ 衛宮君、避けて！」

「え——？」

凜が叫び、士郎達の身体を押す。途端に凜の身体に細い糸のような物が手足と首に巻き付き、拘束し、首を絞め始める。

「グ……………かはあ！」

「遠坂！」

「フーン。意外ね、凜。でも貴方にまだ用は——」

「——Shape……ist……Leben——」  
形骸よ、生命を宿せ

「——え？」

笑っていたイリヤの顔が弱々しい声に顔を驚きに変えて、ワイヤーで作られたレイピアのようなものが宙を舞い、凜を拘束していた周りの糸を切る。

「ケホッ！（これは『錬金術』ツ?!）」

「何？ 何なの、貴方は?! 何で貴方がソレを知っているの?!」

戦いが始まって以来、余裕の表情を初めて変え、不愉快さを露にするイリヤスフィー

ルが叫ぶ。

糸で作られたレイピアは宙を浮遊して、士郎の前へと飛ぶ。

「ハア……ハア……ハア……もう……やめて……やめて……イリヤ——」

「——三月？」

「——だ、黙りなさい！」

息使いが荒く、声も絶え絶えな状態で士郎によつてまだ立っている三月のそばの、糸のレイピアが待機するかのようにジツとする。

「切嗣は、貴方を——」

「（——じいさん——？）」

「ツ！ うるさい！ うるさいうるさいうるさい！！！」

イリヤスフィールが自分の髪の毛を十本程抜き、糸状のエペに変形させてから士郎に背負われている三月へと次々に飛ばす。

「消えなさい！ 私の前から、消えなさい！」

「クー！」

大量の汗を掻く三月の前にレイピアがクルクルと回り、飛んでくるエペの軌道を火花を飛ばしながら僅かに逸らし、エペは士郎と三月の横を通る。

だがエペの数が七本目となる時にはレイピアの形状はポロポロになり、エペとの衝撃

で碎け散る。

「……あ」

エペがそのままの勢いで三月の顔へと飛来して、イリヤスフィールは安心したように怒った顔を緩める。

「……御免なさいね、イリヤ」

「……え？」

「……三月いいいい！」

三月が目を閉じて、彼女の口調と諦めたような声で呆気にとられるイリヤ、そして士郎の叫ぶ声。

そして三月の視界が赤く染まる。

「……え？」

彼女を突き放してワザと前に立ちはだかった士郎に、飛んできたエペが彼の腹部に突き刺さった。

「ゴハア」

士郎が吐血して、地面へと倒れのを三月がただ見る。

「……兄さん？」

「衛宮君?!」

「……………何よ、これ？ 何なの……………不愉快！ 帰る！」

最初は困惑し、そして次に見た目通りの姿のまま駄々をこねてイリヤスフィールは怒り、そばまで戻ってきたバーサーカーに抱えられ、バーサーカーがその場から飛翔して消える。

「シロウ！」

酷くやられているセイバーは自分の傷を物ともせず、士郎のそばへと駆けると、士郎を揺すっている三月を見る凜がいた。

「三月、衛宮君から離れて頂戴、診れないわ」

「ねえ、起きて兄さん。こんなところで寝たら風邪を引くよ？」

「貴方ね——ッ！」

凜が痺れを切らして三月の肩に捕まると、三月の首がグリーンと凜の方へと機械的に向き、そこで三月の表情を見た凜は息を吸い込み、背中にゾクツと寒気が走る。

「ねえ、遠坂さん。兄さんが起きてくれないの」

そこには口が笑っているだけで、光の無い眼が瞳孔を開き、生気が全く感じられない顔のした三月が凜を見返していた。

この状態を見たセイバーでさえ息を吸い込む程の異様さだった。

「ねえ、どうしよう？ 起きないの。兄さんは寝坊なんかしないのに」



凧が士郎の傷口を見ると、傷が独りでに塞がっていくのを確認してから脈と呼吸を確認する。

「……………平気よ、気を失っているみたい」

「……………そつか。そうよね。よk——」

三月が喋り終わる前に気を失い、崩れ落ちる。

「……………あー、もうー！ 何なのよ、もうー！ まったく……………アーチャー！ セイバーと一緒にこの二人を抱えて——！」

「ツ……あれ、遠坂？」

そこで士郎が起きると、ボンヤリとしている意識でポロポロの周りを見渡す。

「あの子とバーサーカーは？」

「衛宮君、説明する前に私から一つ言わせて」

「な、何だ遠坂？ 急に真剣な顔になって？」

「三月の前で絶対にあんな事をしないで」

「『あんな事』って……………何だよ？」

「……………衛宮君、最後に何を覚えている？」

「何って……………何か糸で作られた物同士がぶつかり合ったところ……………かな？」

そこで凧が士郎に何があったのか説明する。

まず、凜が士郎達を押しつけてイリヤスフィールの魔術に捕まり、糸状のレイピアがそれを切る。

そしてこれを見たイリヤスフィールは次々と自分の糸状のエペを飛ばし、三月に刺さりそうなのを士郎自らが間に入り、代わりに刺された。

「ハア?! 俺がか?! つつても覚えてもいねえし、傷も無いぞ……」

「貴方の腹部あたりにぽっかりと服に空いた穴に手を置いてもう一度聞いて見なさいよ。傷は何かひとりでに治ったわ。意外ね、衛宮君にそのような魔術が使えたなんて」

「え? 俺がか? 前にも言ったように俺にはそんな才能は無いぞ」

「なら………考えられるのはセイバーから何らかの恩恵がある事ね、そんな話聞いた事も無いけど」

「………そうか。遠坂がそう言うんだつたらそうなんだよな」

「シロウは身を挺して義妹を守ったのですね。行動自体は問題ありますが誇り高い行為です」

「フ、私にしてみれば愚か者がする行為だがな」

そこに姿を消していたアーチャーが姿を現し、士郎を見下す。

「今のは聞き捨てなりませんね、アーチャー——」

「——もし彼がそのまま死んでいたらお前も消えるのだぞ、セイバー？ その上、後に残されて哀しむ者が少なくとも一人はいる。これが愚か者のする事でなければ何なのだ？」

アーチャーの身も蓋もない言い方に士郎がムツとする。

「そりゃあ、俺のしたことは褒められた事じゃないけどさ……」

「悔やんでいるのなら力をつける事だな。さもなければ聖杯戦争からとつと身を引け」

そう言い残し、アーチャーは消える。

「……ま、アイツの言い方はアレだけ什么的を射ているわ。衛宮君がさつき経験したように力のないものが戦闘に巻き込まれたら死ぬわ。戦えなければ策を練るなり、逃げたりしてサーヴァントを使い、勝つ。それに、サーヴァントは強力だけどそれはマスターがいる前提。それが聖杯戦争よ。今のあなたは半人前……いえ、なまじ魔術を中途半端に知っているからこそ半人前以下よ。私に言わせてみれば、貴方よりよっぽど妹さんの方がマスターとしては優良物件ね。ま、令呪とセイバーを誰かに引き継がせるなら私が貰うけど？」

「ハア？ そんな事する訳がないだろ?! 俺はセイバーと約束したばかりなんだ！ お前に引き継ぐって事は約束を俺から放棄するのと同じだ！」

「シロウ……………」

「けど、何で遠坂は俺にいろいろしてくれているんだ？」

「当たり前じゃない。私からしてみれば衛宮君は隙だらけで何時でも誰からでも狙われやすい状態なんだから。一応、遠坂家の当主として最低限のルールや基本を知ってから同じ土俵に立つ前に誰かが脱落するなんて私のポリシーに反するわ」

「そうか。ありがとうな、遠坂。お前はやっぱり良いやつだよ」

「んな?! わ、私は当然の事をやったままでよ!! べ、別に礼を言われる事じゃないわ! と、とにかく! 明日から貴方と私は敵同士なのだから覚悟しておきなさい!」

呆気に取られ、赤くなった凜はそう言い残し、その場から素早く離れる。

「……………シロウ」

「ああ、行こうかセイバー。三月は俺が背負って帰るから、周りの警戒をしてくれないか?」

「承知しました」

士郎は三月が借りていた上着で破れたシャツを隠して三月を背負い、セイバーはレインコートで自分を覆い、衛宮邸を目指す。

「そういえば、セイバーの傷は大丈夫なのか?」

「一応は。ですが完璧とは程遠いです。できれば三月の治癒を受けたいのですが…

流石に気を失った彼女をその為だけに起こすのは悪いかと」

「ああ、三月は心配性だからな。 けど、俺が刺された瞬間気を失うとはな………余程のシヨックを受けたんだろうな」

「……………ッ」

セイバーは士郎に言えなかった。

三月の先程の状態の事を。

余りにも自分達の知っている三月からかけ離れていて、話題に出し辛かったのだ。

「けどあの『アインツベルン』って子…あんな小さな子供まで聖杯戦争に参加していると  
は——」

「——シロウ、誰かが近くで魔術を使っています。 指示を」

一瞬さっきの死闘を思い出す士郎、だが相手がバーサーカーやランサーではない事をセイバーから聞き、様子だけでも見に行こうと移動を開始する。

そして、士郎はどこかで感じた事のある空気を不思議に思いながら——

「——へえ、驚いたな。 まさか、あの『衛宮』がマスターになつてるとはね。

それに都合よくサーヴァントも連れている」

そこに現れたのは『間桐慎二』とバイザーを掛け、黒を基調としたボディコン服を着た紫色の髪の毛の長身の女性が立っていた。

『美綴綾子』を腕に抱きながら。

「美綴?! 慎二、お前まさか……聖杯戦争に——?!」

「——ああ、安心しろよ衛宮。こいつが僕に付きまといつていたから眠らせているだけだ。何もしちやあいがない。ところでさあ、僕と手を組まないか?」

「何?」

「僕が聖杯にかけたい願いは『魔術師として認められる』事。そしてお前の事だから聖杯に願いなんで無いんだろう? それにあつたとしても、僕にはあまり問題は無い。

聖杯戦争で生き残ればそれでも『認められる事』にはなるんだし。後はサーヴァントの願いだけ……それはそれで他のマスターやサーヴァントを殺した後で彼らに決着を付けさせればいい。どうだい? 悪くないだろう?」

「………何でだ、慎二? 俺なんかより遠坂とかの方が良いんじゃないか?」

「ああ、アイツにも話を持ち掛けたけどキツパリと断られたよ。確かにお前はアイツに比べるまでもない素人だ。だけど僕と君——『君』との中だから提案しているんだ」

「………ごめん、慎二。今は答えられない……考えさせてくれ」

「ま、それが普通の返事だな」

「ただ一つだけ聞かせてくれ慎二、お前は一般人を巻き込んでいるか?」

「いいや、僕からはそんな事をしない」

「そうか、悪いな」

「フン、分かったのならとつと行けよ。風邪を引いてしまうぞ?」

「ああ。セイバー、悪いが美綴を抱えてくれないか?」

「……承知」

セイバーが綾子を片手で抱え、土郎の後を歩く。

「……………ここであのサーヴァントを倒さないのでですか?」

バイザーを掛けた女性が慎二に問いかける。

「『倒せ』と命じたら倒せるのか?」

「……………難しいでしょうね」

「だろ? だから爺さんの言ったようにまずは力を蓄える。だが僕のやり方でだ。」

罪の無い奴らは巻き込まないが、その他はオーケーだ。ゴミクズの探索を続けるぞ、

ライダー」

「……………はい」

ライダーと呼ばれた女性のサーヴァントは少々不服なトーンの入った返事をし、慎二は苦笑いを浮かべた。

「それに、今のアイツ衛宮には気を失っている二人を守りながら戦うのは難しい。今襲い

掛ければ、『衛宮』はそんな不意打ち行動みたいな卑怯な手が嫌いな節があるからな。仕留めるなら確実に邪魔が入らない所だ。行くぞ、ライダー」

慎二とライダーは夜の街の中へと消え、士郎達は衛宮邸へと再度向かい始め、セイバーもまた士郎に慎二のサーヴァント今倒さないのかと問う。

「いや、今の俺達には気を失っているこの二人を守りながら戦うのは難しいんじゃないか？ 下手をすれば美綴か三月を巻き込んでしまう可能性がある。慎二は表面じゃ『気にしない』とか言うかも知れないが、アイツは内心泣くだろうし。言動と違って根は優しい奴だからな。もし戦うとしたら、他人が巻き込まれない所を選ぶだろ」

「……………」

ここに意外と考え方が同じようで、微妙にズレていた親友同士がいた。

……………

……………

……………

……………

……………

……………



…

「三月……………三月」

「……………ん」

三月が身をよじり、目を開けると見慣れた天井と土郎の顔が目に入った。

「あれ？ 私……………いつ家に？」

「ああ、起こしてすまない三月。でも美綴の様子が——」

「——綾子が？」

三月は起き上がり、隣の部屋で苦しむ綾子を見て血相を変える。

「え?! 何これ? どういう事?! え? 呪詛? ううん、これは残滓?」

「やっぱり三月には分かるか」

「あ」

三月がジト目で見ている土郎を見て、三月は目を逸らしながら笑う。

「あ、あはは〜」

「今は聞かないでよく。だからお前から話すのを待つ。でも今は美綴の事を診てくれるか? 最初は遠坂かあのエセ神父に頼ろうかと思ったんだがセイバーがやめておけて」

「セイバーが？」

「はい、仮にも他の運営のマスターと得体の知れないものに借りを作るのはどうかと」  
「……………な、何か複雑だけど……………やってみるわ」

そう言い三月は美綴の首に痣のようなものがあるのを見て、それが胸へと続き、もつとよく見る為に美綴の制服の上着とシャツを脱がせ——

「——うおわ?! お、俺！ 部屋の外に出ているから！」

——士郎が急に赤くなりながら、部屋を退室するとセイバーが後を追う。

「??？」

三月は何故士郎の態度が急に変わったのか分からず、そのまま美綴の治療を再開する。

「あら、意外と可愛いブラ」

他意は無く三月は治療を続ける。

「83cmか……………良いな〜」

……………他意はほぼ無く三月は治療を続ける。

## 第8話 虎口を脱し、竜穴に入る

アーチャー運営 視点

「ここも同じのようね」

遠坂凜は士郎と離れ、新都のガス漏れ事件を調査していた。

確かにガスはガスだが、魔術を含んだお線香が原因だった。

「しかも霊力がすべて柳洞寺へ向かっているとみると、いきなり『当たり前』をもう一つ引いたかしら？」

これだけの条件で『サーヴァント』と決めつけるのは早計かもしれない。

凜が骨で出来たゴーレム達を撃退し、その出来の良さが現代の魔術師に無理な物でなければ。

「相手はキャスターか……………」

『どうするのだ、凜？ 相手は恐らく用意周到なタイプと見た。手強いぞ』

「…………アーチャー、狙撃は可能かしら？」

『無理…………とは言えないが、場所が高所なだけに大雑把な範囲攻撃になるが…………それは君が攻撃を許さないだろう？』

「ええ、やるなら確実に、かつ正確に…………なら、柳洞寺へ直接行かないとダメか……………」

凜は忌々しく、ビルの窓の外にある、離れた円蔵山中腹に立つ寺院らしい場所を覗む。

『凜、セイバーのマスターはまだ泳がすのか？』

「…………そうね、今はそれより先に片付けないといけない案件が山積みだから」

『だが奴から令呪、またはセイバーを得ればかなり優位になるぞ？ それこそ柳洞寺のキャスターなど障害にならない程のメリットが』

「あんな奴、いつでも片手間でやれるわ。寧ろアイツ相手にこちらの手が他の運営に

バレル方のデメリットが大きいわ」

『だがもし、奴が聖杯戦争の何たるかを未だに理解せずにノコノコと君の前に立った場合はどうする？』

「……………」

凜は黙り、お線香を場内から換気する為に開けた窓からの風が彼女の髪の毛をなびかせる。

『凜?..』

「……………その時は、倒すわ。 そんな無鉄砲な奴、鬱陶しくて敵わないわ」

凜は何とも言えない表情でアーチャーに答えながら街の夜の様子を見る。

---

バーサーカー運営 視点

---

景色と場所が変わり、冬木市の外れにある森の奥にある古城の内部へと移る。

ここではバーサーカーのマスター、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがむしゃくしゃしながらベッドの上で爪を噛んでいた。

彼女の心は揺らんでいた、いやどちらかと言うと荒れていた。

彼女の両親は前回の聖杯戦争の参加者で、聖杯を手に入れるあと一步と言うところまで勝ち残ったが、最後の最後に『聖杯を壊す』と言う行為を行い、『聖杯を持ち帰る』というアインツベルン家との契約を破るだけどころか、『絶対に帰って来て迎えに来る』と娘であるイリヤスフィールとの約束を裏切ってまでのうのうと日本で生き残ったのだ

と情報が上がっていた。

あれから数年経ち、この聖杯戦争にマスターとして選ばれたイリヤスフィールはバーサーカーを召喚して、日本へと飛び出た。既に両親は亡くなつてはいると情報があつたが彼女には関係なかつた。

何故なら前回の聖杯戦争後、両親の生き残つた一人は養子を取つていたからだ。ならば復讐すべき本人がいなければ、その子供に償いをさせば良い。

余りにも無邪気で、子供っぽい考え方だつた。

だがいざ相対してみると一人どころか二人も養子にしている、一人に至つては自分と似ていた。

以前から燻ぶっていた怒りが爆発し、当初の計画していた『相手をゆつくりといたぶる』を怒りから瞬時に『自分に似た偽物をもう一人の目の前でなぶり殺しにした後にいたぶる』に変えた。

ただ途中でうるさい虫速坂が邪魔して、駆除前に『ソレ』が起こつた。

自分の死んだ母親の魔術を使って来たのだ、よりにもよつて偽物が。

しかも自分の死んだ両親のように愛称の『イリヤ』と声を掛けながら。

怒つていた上に不愉快極まりないこの出来事で彼女は文字通り激怒した。怒りに任せて本来の魔術師としての余裕や格下の筈の彼らを見下す事や戦術すら忘れ、ただ眼



これにはセラとリズと呼ばれた二人が目を見開き、セラは明らかに動揺を顔と声に出し、リズは目に未だに光が籠っていないが口を半開きにしていた。

「そんな……………それは……………アインツベルンの、お嬢様特有の魔術の筈！」

「セラ、私もビツクリしたわ。しかも、髪の毛じゃなくて糸を使つて来たのよ？」

「そ、それは……………まさか、先代の……………」

「イリヤはリズ達にどうして欲しいの？」

「リーゼリット！ 貴方は毎回お嬢様の名をそのように——！」

リズ——リーゼリットと呼ばれた無表情&人形らしき目をした給仕の彼女は主のイリヤを愛称で呼ぶ事にセラは異を唱えていたが、イリヤは気にしていない模様だった。

「どうもして欲しいんじゃ無くて、興味が湧いたの。何故彼女が『エルゲンリット天使の詩』を知つて

いて、使えたか知りたいの。それに……………」

「それに？」

「リーゼリット！」

「……………ううん、今は取り敢えずそれが知りたいだけ。もしかする他にも分かつてい

ない事があるのかも知れないし」

「分かりました、お嬢様」



「イリヤがそう言うのなら」

セラとリズが部屋を出ると、イリヤは体育座りになり、抱えた膝に頭を乗せながら考  
える。

「……………それに、『あの子の言っていた続きが聞きたい』、なんて言ってもセラ達は  
多分理解してくれないわ」

《切嗣は、貴方を——》

「——私を、何？」

荒れていた心を落ち着かせるように、先日の出来事らを頭の中で何度も自分を冷静に  
しながら、思い返していた。

セイバー運営 視点

「士郎。説明しなさい」

「や、だから誤解だつてふじ——」

「——三月ちゃんは黙つてて。で？ 士郎？」

時は次の朝で場所は衛宮邸。

士郎は正座をさせられて、目の前に竹刀を片手に持っている大河が怒っている形相と組んだ腕で彼を睨んでいた。横ではオロオロしている桜、気まずい美綴、そして冷汗を流している三月がいた。

「(どうしてこうなったのさ?!)」

美綴を治療した後、三月は安定した彼女のそばにいる事に決めた(彼女が起きて混乱を避ける為に、他意はない)。その間、士郎はセイバーから聞かされていた。

第四次聖杯戦争の事を。

そして――

――彼女の知っている『衛宮切嗣』と言う名の男の事を。

彼が『アインツベルン』という一族に雇われていた事も。

そこで『妻』を娶って、『子』を成した事も。

その子供の名は『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』。

先程対峙したバーサーカーのマスターと同じ名だった。

そして、『衛宮切嗣』が最後には聖杯を手に入れることが出来た位置にいたのに自ら手放して、あまつさえ令呪全て使つてまでセイバーに聖杯の破壊を命じた事も士郎に伝えていた、一切の私情などなく。

セイバー自身、シロウ達の言動から推測できるキリツグと、先程会つたばかりのイリヤスフィールが自分の知つているキリツグとイリヤが同一人物かどうかは自信がなかった。

何故ならセイバー自身を知っているイリヤと対峙した『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』はあまりにも性格も態度も違つた。

なのでもしかするとさつき会つた彼女はイリヤをベースにした『アインツベルン』の人造人間——『ホムンクルス』の可能性があるかも知れないと思つていた。

キリツグに至つては、何故あのような目的の為ならば手段を選ばない男がアインツベルンとの契約を破つてまで聖杯を破壊したのかが理解出来なかつた。

勿論、士郎もセイバーの話を一応聞いてはいたが、とてもじゃないが自分の知つているじいさん舅からは程遠い人物像と言動だったので、にわかにセイバーの話が信じられなかつた。

だが参考程度に士郎は受け取り、自分がやるべき事は変わらないとセイバーに伝えた。

そこで疲れが一気に押し寄せたのか、過労がピークまで達したのか、士郎は気を失うように座りながら寝てしまった。

その次の日の朝、起きて想像通り混乱していた美綴を三月が「衛宮邸の近くの道端で気を失っているところを保護した」と説明した。

朝起きた士郎はいつの間にか自分の部屋で寝ていて、昨日の出来事を夢かと思い始め、過労からかボーっとしながら布団から出て、その頃には朝の支度を済ませた美綴が（来客用の着物や日用品を使って）三月と朝食を取っている所に桜と大河が家に入り、夕イミングの悪い事に士郎もそこへ来た。

これを見た大河は瞬時に竹刀を近くから取り出し、士郎へと詰め寄せて説明を求めた。

「だから言っただろ?! 『美綴が気を失っているところを三月と見つけた』って! そりゃあ、連絡していなかったのは悪いけどさ、夜遅くに連絡は迷惑かと思っただんだよ!」

「ほー? じゃあ士郎達はそんな夜遅くに何をしていたのかなー?」

「(うげ。 考えてなかった)」

士郎と三月は目を合わせる。

『「これどうすんのさ?!」』

『誤魔化すのは無理、でも真実は言えない』

『だからどうすんのさ?!』

『士郎! 君に決めた!』

『なんでさ?!』

このアイコンタクトの会話にかかった時間は一瞬、だが思わぬ助け舟がそこで出てくれた。

「あーと…それ、私の所為なんです、藤村先生」

「(美綴? / 綾子?)」

「へ? どういう事、美綴さん?」

これが意外な事は大河も同じだった。『美綴綾子』と言う女性とは男勝りで有名だが決して夜遊びなどをするようなタイプでは無かったからだ。寧ろ彼女は積極的にそんな行動をする者達を止める側だった。

「実は私、ちよつとウチの生徒たちがなんか変な奴らに絡まれていたのを見て、私が首を突っ込んだんだ。その時イザコザがあつて、ウチの生徒たちが逃げている間に気を失つて、どつか連れていかれるその所にし——『衛宮達』が私を助けてくれたんだ」

「へ? そうだったの士郎、三月ちゃん?」

「う、うん。何時も見える藤村——藤村先生の『知り合い』達ではなかったのですが、同じ雰囲気を出していました。だから彼らはもしかすると誘拐の罪を擦り付けよう

としていたんじゃないでしょうか? (これで行けるか?!)

「なああああああんですつてえええええええ?! 何処もんの者じゃそいつらああああ?!

藤村組  
ウチらに喧嘩売ろうつてなんざ、ふてえ野郎共だ! 血祭りにあげらああああああ

!!!

大河の突然な豹変ぶりに美綴どころか桜までも目を見開きながらパチクリとしていた。

そして内心ホツとする士郎と三月。

更に三月は内心、これからいる筈のない『敵』に総動員される藤村組全員の行動が無駄骨になる事を謝っていた。

「(ゴメンね藤村組の皆、マジで)」

「こんな悠長な事しちゃいらねー! すぐに爺さんに言いつけて若わけえ者もんを総動員、緊急招集だあああああ!」

大河は竹刀を持ったまま、沸騰した怒りのまま衛宮邸を全力疾走で後にした。

外から聞こえてくる竹刀の音と大河の「そこをどきやがれボケえええええ!」と門番を務めている男性達の断末魔の「お、お嬢?! その竹刀は——ぎやああああああ?!」はきつと空耳だろう。

ウン、ソウニチガイナイ。

「ほんつとうにゴメン、藤村組！ 今度出来たら、皆が大好きなぼたん鍋&カルビパーティーにするからー！」

「……あー、ありがとうな美綴。マジで助かった」

「あ、ああ。安いもんさ。けど……さっきのあれは何だったんだ？」

「藤姉って家族絡みになるとたまに暴走するだろ？」

「そ、そうなのか？」

「うん、だから気にしないで綾子」

「私、あんな先生を初めて見ました」

「さ、桜も初めてかよ」

「ま、まあ……ここ数年、俺も見ていないからなー」

「見るとしたら相撲を見る時……とかかな？（あとさっきみたいに興奮した時とか？）」

その後、美綴は自分の家に帰る前に士郎と三月にまた礼を言いながら手を振り、朝の住宅街へと消える。

「………ねえ士郎。私、今もう一件の問題を思い出したんだけど」

「………奇遇だな三月、俺もだ」

そして二人は溜息を出して次の難問と大河が戻ってきた時の騒動に備える。

一難去つてまた一難である。

「どうしたのですか、シロウ？」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

今はまだ朝が訪れたばかりの衛宮邸。美綴が自分の家に帰りまだ間も経っていない時。

ここには虎が二人の男女を恐怖に陥れていた。

「で？ 士郎はまた女の子を連れ込んでいたわけ？」

「ま、またつて事は無いd——」

「——三月ちゃんの良いわ、義妹だもの。桜ちゃんもまあ、未だに教師的にはアウトだけど健全な関係だからまだ良しとする。でも事情があつたからとは言え、昨日は美綴さんでしょ？ そして今度は金髪外人だとおおお?! 独り身たちをなめとんの





「ああ、だから今日からウチで暮らすから仲良くしてくれ」

ピシツと場の空気が凍るのをそこに居た誰もが感じた（士郎本人以外が）。

「うえええええええ?!」

大河と桜がこれに対して素つ頓狂な声を上げる。

「……………（兄さんのバカ！ アホ！ マヌケ！ そんな言い方じゃダメでしょう

がああああ?!）」

そして大河がまたもや士郎の胸倉を掴み、立たせる。

「士郎は毎度毎度毎度毎度！ 一体何人の女の子を誑かせば気が済むのよ?! お姉ちゃんも士郎をそんな子に育てた覚えはありませんよ?!」

「え? え? え? 先輩?」

「まあ、本当の事を言えば私達二人がおじさんの死後藤姉の面倒を見てただけ……………余計話しがこじれるからここは黙つとこ)」

「お、落ち着けて藤姉! そんなんじゃないから!」

「でもでも! 『ここで住む』って事は、士郎つてはこの誠羽<sup>セイバ</sup>亜ちゃんと同居するって事でしょう?!」

「そうなんですか、先輩?!」

「……………今何か大河が面白い事言ったような気がする……………タイミング的にまだかな



「はう♡」

満面の笑みで抱き付いて来る三月にだらけ始める大河の顔に毒気を抜かれた空気が場を漂う。

その後、大河は桜と話す事があるという事で士郎と三月に今日のご飯の用意などを頼んだ。

………

………

………

………

………

………

………

その日は士郎と三月の二人が腕によりをかけて、皆の好物の大量オンパレードの昼ご飯と晩御飯を作っていた。

普通ならワイワイと騒ぐ大河だったが食べる間一言も何も言わず、ただ延々と昼ご飯を食べていた。

そして大河と桜は昼ご飯を食べ終わると、どこかで用事があるのか、二人で出かけた。

その間、セイバーは青いドレスから来客用の着物に着替え、衛宮邸内の警戒をし、晩御飯の準備と支度をする士郎達。

帰って来た大河と桜は何か買って来たのか、デパートのショッピングバッグ等を持って来て、セイバーの為に日用品などを買って来ていた。

ただ荷物の半分ほどだけがセイバーの為だったの対して疑問を一瞬浮かべた士郎達だがあえて何も言わず、丁度時間的にもタイミング的にも良かったので晩御飯の支度をして皆食べ始める。

そしてまた一言も誰も何も言わず、ただ延々と食べていた。

二(物静かな藤姉が怖いッ！)二

時計の針が9時頃を指し始めようとした時、まだゴロゴロしている大河を不意に士郎はお茶を飲みながら見ていた。

何時もなら桜の見送りを言い出す彼女がまだ動かない事に。

とはいえ、この頃物騒なので桜には泊まって貰うか士郎は一瞬迷った。

が、桜の安全第一の為、彼は大河に声をかける。

「藤姉？ そろそろ桜を見送らなくて良いのか？ もし問題があるようなら桜をここに泊めてもいいか？」

一瞬士郎が何を言ったのか分からない桜の目が遅れて見開き、士郎を見る。

「……………え、先輩？ ど、どうして私が泊まる前提なんですか？」

「あ、ちょうど良い話ね。 今日から私もここに泊まるからヨロク」

「ブツ?! いや、桜は良いとして！ 何で藤姉まで?!」

飲みかけのお茶を危うく吹き出しそうになる土郎、そして未だに何を言われたのか良く分からない桜。

「え？ せ、先輩？ そ、それはどう言う——?」

「——あ、ああ。 違うぞ桜。 この頃物騒だろ？ その上、慎二も最近は忙しいらしいし、家にあまりいないと思ったんだ。 桜を迎えに来ないからさ。 だから実はと言うと、前から余分に日用品とかは常に備えてあるんだ。 このぐらい遅い時間だと、夜遅く家に歩いて着くよりはもう泊って行かないか？」

「え、で、でも……………私……………」

「あ、桜ちゃんの家には今日の昼にもう連絡と許可取つてあるから」

「ええええええ?! せ、せ、せ、先生?! で、でも服とか……………」

「今日買ったのとかがあるじゃない?」

「ま、まさか藤姉……」

「フン、そのまさかよ三月ちゃん。 私だって時にはやるんだから！ 『備えあれば患いなし』よー!」

「えええええ?!」

「(あー、この流れはアカン。何いうても止まれへんな、この藤姉は)」

大河の強引さを心中悟った三月だった。

「それに、『部屋も布団も余ってる』んでしょ? 誠羽<sup>セイバ</sup>亜ちゃんも私と一緒に良いわよね?」

セイバーは視線でメッセージを土郎を送る、「本当にこれでよいのですか?」と。

土郎は「諦めてくれ、セイバー」と返す。

だが桜は未だに困っているのか、オロオロとした末に部屋の用意などをして来ると言い、余程テンパっているのかまだ閉まっているドアに頭をぶついたり、何も無い所で転びそうなどしたりして見かねたセイバーが桜に付き添う。

この一連の出来事を見ていた大河はニマニマと笑顔になりながら土郎を見る。

「土郎? 今の桜ちゃんに対しての『泊めてもいいか』って、もしかして彼女<sup>妹</sup>に誤解させたくなかったとかかな?」

「ハア? 何でそうなるんだよ?」

「(あ、あの顔は藤姉がなんか悪巧みしてる時だ)」

これをのほほくんと見ながら自分のお茶を入れて飲む三月を大河はチラツと見てから話を再開する。

「ふくん、そつかく。 そうなんだ。 士郎も男の子だものね」

「だから何の事だよ藤姉？」

「ズズズ——（性別と桜に何の関係が——？）」

「——桜ちゃんつてさ、E—カップなんだつて——」

「——プフウ?! ゲホ！ ゲホッゲホゲホ！」

三月が盛大にお茶を吹き出す。

士郎は呆れた顔と共に肩をガクリとしながら大河を困った目で見ると。

「な、何を言っているんですかね。 この『自称保護者』は」

だがその空気も束の間で、セイバーが早足で戻り、桜が倒れたと皆に伝えてきた。

……

……

……

……

……

……

……

その日の夜遅く、三月は桜の部屋を静かに訪れた。



彼女が急に倒れた事が気になり、自分に何か出来ないかと思つたからだ。

桜の身を案じた土郎も看病すると言つたが桜が頑なに断り、ただ急な事ばかりが続いて眩暈がしたと土郎經由で皆に伝わっていた。

だが桜の寝ている部屋に入った瞬間、三月を強烈な違和感が襲つた。

「??? (何だろう、これ? ……………長い間使っていない空調からの匂いかな?)」

そう思いながら壁で作動している暖房機を見ながら桜のそばに行き、手をかざすと――

「――何をしていますのですか?」

「ピャツ?!」

急に背後から女の人の声がして三月はビクツとする。

「動かないで下さい。もう一度聞きます。何をしていますのですか?」

「あ、えつと、桜が心配で何かしてあげられないかと――」

「――ゆつくりと振り返りなさい」

「ひゃ、ひゃい」

三月は嘯みながらも指示された通りに振り返ると、そこに信二のサーヴァントのライダーがいて三月を見下ろしていた。

そして三月は彼女を見上げて――

「――ふわあ、可愛いな」

「ッ」

何も考えずに三月から出た第一の言葉が『可愛い』だった。

普通の考え方を持つ者ならライダーのような長身でスタイル抜群でボディコン服の女性は『可愛い』より『美人』、『綺麗』、あるいは『セクシー』や『色っぽい』等がすぐ頭に来るような見た目だった。

だが三月は普通とは違い、見た目だけでモノを判断したりなどしなかった。

彼女はただ、ライダーが三月に声をかけたのは「(桜に)何をしているのですか?」と桜の身を案じた言葉と「ゆっくりと振り返なさい」は三月の確認の為、と取っていた。

少し余談だが慎二の事を『良い人』などと感じていたのもこの考え方のおかげであり、これがあったから会う人達に対して自身の行動や言動などを調整し、外や学校での『顔見知り』の人達は増えていった。

そして未だに自分をキラキラとした目で見る三月にライダーは数秒ほどの沈黙後に口を開けた。

「……………貴方は私が怖くはないのですか？」

「へ？ 何で？」

これもまた常人からしたらズレた三月ならではの回答だった。

何せ三月にとってはほぼ初対面であつてライダーの事は『知らない』。

「……………」

「あ、私『衛宮三月』と言います」

まだ寝ている桜に遠慮して三月はいつもより下げたボリュームで頭をペコリと下げながら話しかける。

「……………立ち去りなさい」

が、ライダーはそう短く言つた後にその場から消える。

「……………また会えるかな？」

頭を傾げながらそう言い残し、三月は部屋を出て自室へと鼻歌をしながら向かい、就寝する。

その間、衛宮士郎は夢を見ていた。

彼にとっては良く見知っている場所で、酷くりアルな夢で——

——女性との性行為をしていた。

士郎は彼女を知っている。

その髪も、声も、体も、何もかもを知っている。  
ただ士郎はふと思う。

「(何であんな顔なんだろう?)」と。

何故ならその夢の中の彼女は——

顔が無かつた。

## 第9話 セーフ？ アウト？

## セイバー運営 視点

士郎は朝日で目を覚まし、さつきまでナニかをしながら揉んでいた手が天井へと向けていたのを目で追いながら見る。

内容はさっぱり覚えていないが――

「――ッ（ヤバイ奴か、これ?!）」

本能的にナニがあつたのかはわかつていた。彼も普通の男性、しかも思春期真っ只中。

ただ人一倍は気を使っているのだ。

何せ洗濯は今は女性がほとんど担っている状態。

失態など犯せば彼女らも勿論、士郎自身も気まずい事この上ない。

というか恥ずかしさで死ぬる自信はあつた。

彼は布団をバっとめくり、下半身を確認する。

「……………安全セーフだ」

「ハイ。敵は確認していません、シロウ」

「ああ、セイバー。そつちじやな——あああああああ?!」

士郎の半分寝ぼけていた頭がフル作動して、横で正座していたセイバーから毛布と一緒に後ずさっていた。

「せせせセイバー?! 何でここに?!」

「シロウ、私に宛がわれたあの部屋はここから離れすぎています。この結界は優秀ですが、ただ招かれざる者の警告だけをするものです。私達は同室で休むべきです」

「え。 (それ無理、俺が精神的に持たないッ!)」

士郎がジト目でセイバーを見ていると桜の声が部屋の外からしてきた。

「せんぱーい? 大丈夫ですか?」

「士郎ー、藤姉はもう先に出たよ? 早くしないと遅刻するわよ?」

「あれ、もうそんな時間か」

「シロウ? 彼女らは何の事を言っているのですか?」

「あ。ああ、今日は学校なんだ」

「……………はい?」

セイバーの目が細めていき、士郎を冷たくい目で見る。

土郎、桜、そして今日は髪をツインテにした三月が通学路を横並びで歩くと、力強い風が吹く。

「うー、さっぶい！」

「ハイ三月さん、手袋です」

「うおー！ ありがとう桜！ 通りで何か忘れていたと思っていたんだー！」

「ふわあ〜」

「先輩？ どうしたんですか、朝から欠伸を出すなんて珍しいですね？」

「あ、ああ。ちよつと中途半端な起き方をしてな」

「この頃冷えるからねー、私も冷え性じゃなかったらグツスリ寝られるんだけどな〜」

「三月のは体質だろ？ 仕方ないって」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....



「はあ、士郎は良いよ。寒さで夜遅くに起きたりなんてしないから」

結局学校へはいつも通り登校する事になった。セイバーも最初は異を唱えていたが、魔術師の戦いは基本人の目に触れない夜や人が来ない場所で行うもの。日中や人が密集する学校が戦いの場になる筈がないと士郎は押し切った。

ただセイバーの言う事も一理あり、士郎は明日の朝からこそセイバーに稽古をつけてくれと頼んだ。これで――

「――どうしたんですか、先輩?」

「何でもないよ桜。ただの考え事だ」

そのまま三人は学校へ登校して、士郎達はまず桜と離れ、階段を上る。

その時にふと三月は思う、「あれ? 何時もの吐き気とか眩暈とか頭痛が何時もより酷くない?」と。

そして――

「――ンゲツ」

士郎と三月の姿を見て、カエルが潰れたような声を遠坂凜が短く上げた。

「よ、遠坂おはよう」

「おはようございます、遠坂さん」

未だに「マジか?」または「アホか?」の表情で驚愕する凜。

それに対して何時も通りの挨拶をする土郎と三月は凜の表情に「どうしたんだろう？」と思う。

「…大丈夫か、遠坂？」

「あの、具合が良くないようでしたらお薬ありますけど？」

凜は何も返事をせず、苛ついた顔をしながら踵を返して反対方向に通路を歩く。

「……………私の顔にご飯粒付いてないわよね？」

「ああ、ない。俺の顔にもパンのカスとかなないよな？」

「うん、ない」

「……………何だったんだろう????」

そして周りの生徒達も休みに羽を伸ばし過ぎたのか、何人かが欠伸を出したり、ウトウトして眠気が抜き取れていない足取りで挨拶をする。

その日、お昼の休憩時間に弁当箱を開けると土郎はびっくりする事になる。

何と中に入っていたのが全てお腹に重い物ばかりだった。

「鶏肉のステーキの上に溶けたチーズと五目御飯とその他のおかず……………食べきれるかな、俺？」

同時刻、別の教室では三段弁当箱を軽々と一人で完食する三月の姿があった。

昔から大食いの彼女が二段から三段箱にグレードアップしたのを見た周りの人達は

「あの量のモノは一体どこに行くのだろう」と思っていたそうだ。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そして時は放課後の下校時間となり、三月がまだ生徒会室にいる士郎を呆れた目で見ていた。

「士郎。何をしているの?」

「みりやあ分かるだろ? 各部活の暖房設備修理だ」

「.....もう私は口を挟まないけどほどほどにね? 私は商店街に寄ってから帰るか  
ら」

「ああ、すま——ん? 商店街?」

「うん、食材をね。人が増えたし、安売りをしているものがあるから少し多めに」

「分かった、気をつけて早く帰るんだぞ?」

「うん、ありがとう」

三月はそう言い残し、士郎は暖房機の修理へと戻り、気が付けば夕焼けの光が生徒会室を満たしていた。

「ヤバ、もうすぐ夜だ」

下校するために学校の校門に降りようとすると、上の階段から遠坂凜が腕を組みながら士郎を見下していた。

「あれ、遠坂？ 何してるんだ、早く帰らないと——」

「——呑気なものね、呆れを通り越して怒りにまで達したわ。 貴方、自分の立場を理解しているのかしら？」

「ハア？ お前、何言つて——ッ！ 魔術刻印?！」

凜は左腕の袖をたくし上げると、緑色の線のした模様が浮かび上がる。

『魔術刻印』。 魔術師の家系が持つ、『積み上げた遺産』とも呼べる血統研鑽の歴史を具現し、固定化した代物。 数代に渡る魔術の家系で、優秀な血筋であるほど複雑化して行く『模様』はその魔術師の家の結晶。 そして大抵の場合、魔力を通すだけで魔術をワンアクションで行使出来る、一般的に言えば『常に弾倉に弾丸が装填されているダブルアクション銃』に近い。

「お前正気か?! 夜になりかけとはいえ、学校だぞ?! 聖杯戦争中、マスターは人の目に

「触れない所で戦うんだろ?！」

「じゃあ聞くけど、貴方の言う『人の目』は今どこなのかしら?！」

士郎がハツとして辺りを見渡すと、周りに人影が無い事に気付く。学校は最近の事件などの影響で部活は全て中止になり、普段は遅くまでいる筈の警備員や管理人もこの頃は下校時間の数時間後になつたら家から学校に来て、一回り確認した後に学校の戸締りをすると言う、かなり消極的な業務に変わっていた。

「な、遠坂…お前、まさか——」

「——『ガンド』って知っているかしら? 北極に伝わる呪いで、相手を指差す事で体調を悪くして病気にするという、一種の呪術。ただし、私の場合はちよつと威力があるから打ち所が悪ければ——死ぬわよ、衛宮君」

---

### 三月 視点

---

「うゝん」

三月はその時悩んでいた。

するべきか、するべきではないのか。

二つに一つ。

自分との戦いが——

「決めた！ おねえさ〜ん！ そのケーキ下さ〜い！」

—— 始まる前に終わった。

三月はホクホク顔で買ったばかりのロールケーキのバッグを腕からぶら下げながらご機嫌に歩いてた。

「買ったちゃった、買ったちゃった〜♪ でも仕方ないよね？ バーゲンだったんだし。でかいし。サービスされた食材の分お金浮いてたし」

既に両手には数々の食材が入っているショッピングバッグを持っていて、そこにケーキが更に足された。

だが楽しそうに歩いている三月の背後から影が落ち、これに気付いた三月は振り向かえると——

「へ？」

—— 誰かの手が自分の首に目掛けて飛んで来た。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「リーゼリット! 貴方、どこに行——いいいい?!」

不機嫌そうな声が次第にビックリしたようになるセラ。

「セラ? どうしたの、そんなに慌——わわわわ?!」

不思議そうな声が次第にセラと同じようにビックリする声に変わるイリヤスフィー  
ル。

「持ってきた」 ↑棒読み

相変わらず感情の籠っていない声と顔で答えるリーゼリット。

「あ、どもー。持ってこられた衛宮三月でーす」

そしてリーゼリットに首の根っこを体と買った食材ごと持ち上げられて、手足を宙ぶ

らりんにしてている三月がビクビクしているイリヤスフィール達に挨拶をする。

正に『首根つこで持ち上げられた子猫』状態のようだった（持ち上げられていたのは毛皮ではなく上着だが）。

「リーゼリット！　ここ、こ、こ、こ、こ——?!」

「——ニワトリのコケコッコ？」

三月のジョークで彼女をセラは睨んだ。

「違います！　これは一体どういう事です?!」

「見つけたから拾って来た」　↑棒読み

「はい、確かに（物理的に）拾われました」

「貴方は貴女で少しは危機感を持ったらどうなのですか?!」

「えく？　そんな事言われてもな」

「セラ、うるさい。近所迷惑」　↑棒読み

「私も同感」

「フ、お前は分かっているな」　↑棒読み&変わっていない表情

「貴方もね」

そして見詰め合う三月とリーゼリット。

「ここに奇妙な出会いが——」



「——わあ、リズが私たち以外と仲良くなるの初めて見たわ!」

「お、お嬢様……それはいかがなものかと……:……:……:ハア」

「セラ、溜息良くない。幸せが逃げる」 ↑ 棒読み

「あとシワも増えるって聞いたよ?」

「だ・れ・の・せ・い・で・す・か?!」

「……:……:アハハハハ!」

……:……:ここに奇妙な出会いが一つ、それもほぼタイミングと偶然が完璧に一致していなければならぬ状態でそれは成った。

まず、イリヤスファイル達がいるアインツベルン城には必要なものが一通り揃っているので町へ出る必要はほぼ無いと言っている。

そして主からの『我儘』か『気まぐれ』が無ければリーゼリットは拠点から動く事は無い、何せ彼女は一日に『活動時間制限』があるのだから。

次に、出掛けるとしてもほとんどの場合、イリヤスファイル単体か、セラとリーゼリットのどちらかになる。このように三人で出かけるのは余程の事が無い限りか、主人であるイリヤスファイルが頼む以外ない。そうだとすると並大抵の場合、世話係のセラが反対している。

そして最後に、イリヤスファイルは余程の事でなければ興味を示さない。彼女はあ

の遠坂凜やセイバーでさえ『駆除すべきお邪魔虫』としてしか認識していない。

だがこれらがすべて、偶然に偶然を重ねたような出会いがあった。

後になって、これが『運命』との出会いと考えられるような出来事の一つだった。

「あのー、降ろしてくれませんかね? いい加減、上着が伸びちゃうと思うので」

リーゼリットがパツと手を離して、三月が地面に着地する。

「うわわわわ!」

だが突然の事と持ち物の重さで後ろへと自然に倒れ始めて、頭の上を何かポヨポヨしたものが当たって、リーゼリットの腕が三月を支える。

「大丈夫?」 ↑棒読み

「あ、ありがとう」

「そう」 ↑棒読み

「あ、お詫びにこのケーキはいかが? 皆さんで楽しめるサイズだと思います」

「お前、良い奴だな」 ↑棒読み

未だに笑うイリヤスフィールとは反面に、セラはずつと頭を抱えていた。

だが途端にイリヤスフィールが笑うのをやめて、真剣な顔で三月を見る。

「ねえ、少しお話をしないかしら?」

場の空気がイリヤスフィールの出す殺気にピリツとして、その場にいたセラとはリ―

ゼリットは体を瞬時に何時でも戦闘態勢に入る。

「??? 良いよ? ウチ衛宮邸に来る?」

この三月の言葉にセラが思わずズッコケ、リーゼリットはイリヤスフィールの殺気が薄れると同時に態勢を解く。

「セラ、大丈夫?」 ↑棒読み

「私の二年間で一番精神的に疲れて来る日だわ」

結局場所は近くの公園と移り、リーゼリットが周りの警戒、セラが人払いと簡易認識  
 阻害の結界を張った。

「はー、凄いなー」

【告。『アインツベルンの結界術』を解析、写影シマす】

「ハア、何だかな」

三月はベンチにイリヤスフィールと座りながら溜息を出し、イリヤスフィールはその溜息を（セラと三月の）実力の差からだと思ひ、ドヤ顔で（無い?）胸を張った。

「フフン。セラはそこら辺のお粗末な魔術師なんかとはケタが違うわ——でもそれは貴女にも言える事ではなくて?」

そう言い、イリヤスフィールは一本の髪の毛を『小鳥』に変えて肩に乗せる。

「あ、凄い! アオガラ? 可愛い♡」

三月は制服のカバンに手を入れて裁縫中のモノから毛糸を一本取り、それを驚に変えてから頭に乗せる。

「う〜ん、どうしても驚になるな〜」

「……やつぱりね。それは本来、アインツベルン家で私の先代が使っていた魔術よ」

イリヤスファイルが魔術を解き、三月も同じくしてから、毛糸をカバンに入れ戻す。

「ん？ 先代？」

「そう、アイリスファイル・フォン・アインツベルンという名よ、聞き覚えはあるかしら？」

「んんんんんん？ (アイリスファイル？ んん、どこかで………あ。この子もしかしておじさんが言っていた——?)」

「——告。 検索結果に出マシタ。」

《何時か、君より白い髪で………赤目の女の子が来るかも知れないし、来ないかも知れない。 多分、会ったとしても友好的な対面はないと思う………でも、もし会えたのなら………どんなに酷い対面でも、どうか………嫌わないうで上げて欲しい。 彼女は………僕の犯した大きな罪の一つなんだ。》

「(ああ、そうだった！ え？ じゃあおじさんは——?)」

「——貴方はどうしてその魔術を使えるの？ 貴方は………貴方はアイリスフィー

ルと『衛宮』とはどんな関係なの? 教えて頂戴」

「うくん、何処から始めようか……………」

三月は腕を組みながら唸る。

「さして、何処から話そうか?」と三月は考えながら、情報を整理する。

「バーサーカーという規格外のサーヴァントを持って恐らく今判明している運営の中でトップの戦闘能力を持つサーヴァント。イリヤスフィール自身もかなりの魔術師で、大層な名前から推測して代々続いている一族の聖杯戦争の代理として日本へ来ている……………」

「ここで『実は私も優秀な魔術師で、色々な魔術が使えます』と言ったなら……………」  
 「何か嫌な予感がするからパス。あ、ちなみに嘘を付くとかはぐらかすのは論外ね。多分だけど即殺されるから……………」  
 「うくん」

ならばと思い、三月がとった行動は——

「——おじさんが…………『衛宮切嗣』が私に教えてくれたの」

「……………え?」

「私が小さい頃にね、身を守る為に彼に頼んだの。最初彼は嫌がっていたわ、『その所為で身近な人達を苦しめた』って」

「……………」

イリヤスフィールはただ静かに三月の次の言葉を待つ。  
無表情のままです。

「それでも私は彼にずっと頼んでね？　彼が私の魔術の素質を診ると『錬金術』に向いていたのを見たら、彼は嘆きながら泣いたわ。『神様、何で僕を未だに苦しめるのだ』って。それから聞いたんだけど、おじさんは年に何回も海外に出て、私は一度彼に訊いたの。『何処に行くの？』って。　そしたら彼はこう言ったわ、『僕はせめて、この約束を守りたい』って。（こういう時は全部嘘にするんじゃないやなくて、真実と嘘をコンクリートミキサーにぶち込んだ様に混ぜて話すに限るわ）」

確かに三月は『錬金術』も教わったから嘘ではなく、切嗣が海外に出てから帰って来て泣いていたのも嘘ではなかった。

そこから三月は掻い摘んでイリヤスフィールに色々と話した。

切嗣はずっと前回の聖杯戦争からの呪いを受けた体を引きずりながら苦しみ、悔やみながら『家族』を迎えに出たのに、相手のところが『契約違反』とみなして門前払いを何度も食らった事を。

「（これはおじさんの言っていた事と、兄さんがセイバーから得た情報を掻き混ぜた想像なので良い線は行っている………筈）」

切嗣が毎回海外に出て、呪いに体と精神共々食われ、身を文字通り犠牲にしながら

帰ってくる度に部屋に籠って泣いていた事を。『ごめん、イリヤ』って何度も何度も繰り返しながら。

「(これは本当。あの時、様子を見に行つた私に感謝ね)」

「嘘」

イリヤスフィールが三月の話を『嘘』と感情を表に出さずに即否定した。

「(デスヨネー。だがこれも想定済み。だから——)——じゃあ、一緒に見る？」

『衛宮切嗣』を？」

「え？」

ここで初めてイリヤスフィールの顔に変化が応じ、目を少し見開く。

「(まあ、無理もないか。) えっと、これは『遠見』とか『憑依』の魔術の応用なんだけど……私には身近で私が接触しながら亡くなつた人の人生で強く残つた記憶を視れるの。そしてそれを他人に見せれる」

「そんな……嘘。聞いた事も無いわ、そんな魔術」

「(ハイ、半分嘘というか大博打なんだけど。多分こうでもしないとイリヤスフィールは納得しないでしょ。) もし私を信じられないんだつたらあの二人に私を見張つて貰つて、イリヤスフィールに異変が起きた瞬間に私の首を刎ねて貰つても良いわ」

三月が出た博打は『自分が理解しよう』と思ひ、その通りに成つた事を逆に『情報を

他者に見せる』という、普段（と言うか常識）とは違う形でイリヤスフィールを説得するという賭けに出た。

勿論そんな事はした事が無いし、試した事も無い。ましてや赤の他人に。

ただ三月は以前、切嗣の魔術を『『やってみよう』』と思つたら『出来た』』現象が今度も働いてくれるのを心底祈っていた。

「（でももし……………もしこの人達を『敵』から『仲間』……………まで行かなくても、せめて『敵対者』でなくなるのなら兄さんの生存に繋げれる……………（答。）」

「いいわ、その挑発乗ってみようじゃない。セラ、リズ——」

イリヤスフィールがメイドの二人を呼び、事情を説明する。

「お嬢様！ 危険すぎます！ それならば私かりーゼリットを先に——！」

「——私もしたいのは山々なんだけど、これは亡くなつた人に余程親しい人でないと拒絶反応を起こして術が失敗するの。（ちゃんと出来るかどうか云々の前に、お前に見せれたとしても無駄なんだよ！）」

「聞いた通りよセラ。それに……………私は知りたい」

「お嬢様……………」

「セラ、安心して」 ↑ 棒読み

「りーゼリット？」



「最近手刀でガラスの瓶数本を斬れるようになったから人間の首を刎ねるのは出来る筈」 ↑棒読み

「こわっ?! リーゼリットさん怖い!」

「エツヘン」 ↑棒読み

「ハア……………分かりました。その貴方! 変な事をお嬢様にしないよう私がお嬢様の状態を管理します! 覚悟なさい!」

「あ、うん。別にいいよ。じゃあ、まずは額を合わせてから始めるわ。(ウオオオオオ!」

頼みます、イリヤスフィールにおじさんの事を〜! 私から〜! 見せれるように〜!」

そして三月は『衛宮切嗣』を思い起こし、イリヤスフィールの意識が三月の思考に釣られて来るのを何となく感じた。

「(おおお!! 何か行ける感じじゃん? よっしやあ!)」

『何、これ? 真っ暗…』

イリヤスフィールの声が三月の頭の中で響く。

『もうちよつと待ってね。後少して〜』

「————『衛宮切嗣』が検索結果に出来ました。『写影』しマス」

闇の中に景色が映り————

「ケリイはさ、どんな大人になりたいの？」

——僕は夜空の下で、優しく微笑む『彼女』に見惚れていた。

## 第10話 Down the Hole We Go

イリヤスフィール 視点

私の名はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。聖杯戦争の為だけに鍛え上げられ、第五次聖杯戦争におけるバーサーカーのマスター。

とは表の事情と建前。

本当は約束を破って私を迎えに来なかったキリツグに仕返しをする為には私は日本という極東の島国に私自らが来た。

そこでキリツグはもう死んでいて、彼には養子がいた事を知っていた私は深い怒りと……興味を持った。

何せ血は繋がってはいないけど私の『家族』に当たる人達になる。

私の………

『お兄ちゃん』には冬木市に着いて割とすぐに会えた。

だけど余りにも無防備だったから忠告はしておいたけど理解していなかったみたい。

まるで何も聞いていないかのよう。

次に会った時には少し驚いた。

何せあのセイバーを召喚していたのだから。

キリツグと同じサーヴァント。

『壊しがいがある。』

それを考えただけで胸が高鳴り、ゾクゾクしたわ。

でもあの子は少し違った。　すぐく体調が悪く見えて、今にでも死んじやうような、

弱そうな奴。

私によく似た奴。

許せない。

許せなかった。

本来ならそこには私<sup>が</sup>いた筈なのに！

何で?!

何で何で何で何で何で何で何で?!

何でお母様と同じ魔術を使うの?!　何でお母様のように私の名を呼ぶの?!

何で?!

不愉快だった。

消えて欲しかった。

そして偽物を庇う『お兄ちゃん』。

分からない。

分からない分からない分からない分からない分からない。

分からない事だらけ。

そう思い、再度リズとセラ達に『衛宮士郎』と『衛宮三月』の情報を集めるように言った。

何か見落とした事があるのか？

何か私の知らない事があったのか？

何か。

何か何か何か何か何か。

そして次に会ったと思ったらリズが『衛宮三月』を文字通り持って来て、『衛宮三月』は危機感を持っていなくてセラに怒られて、リズが意外と私と話すときみたいになつて

.....

不思議だった。

不思議でしょうがなかった。

思わず笑ったほかに。

だって可笑しかったのだから、色々と知りたくなって。話をして——

——私はムカムカした。

私の聞いた事が無いキリツグの話。

私を何度も迎えに来たらしい。

信じられなかった。

「嘘」と思わず声に出して否定した。

私はそんな事を一度たりとも聞いていないからだ。

そうしたら——

「じゃあ、一緒に視る？ 『衛宮切嗣』を？」

——と答えが返って来た。

何の事か分からなかった。

『遠見』とか『憑依』の魔術の応用？

『亡くなった人に余程親しい人でないと拒絶反応を起こして術が失敗する』？

いいわ、敢えて私達アインツベルンが得意とする魔術で私に何かをしようと言うの？

しかも首を刎ねても良いですって？

上等よ、偽物の貴方の首を生きたまま部屋に飾ってやる！  
 そこで過保護なセラを説得して、私は偽物の言うとおりにして…

暗かった。周りは見渡す限りの闇。上も下も、右も左も、自分の手足さえも見えなくて体の感覚が無くて、まるで『私』しか存在しないような、暗くて寒くて酷く寂しい深海の中にいるような……

その様な場所に、光が現れて私を包んで——

イリヤスフィール(?) 視点

僕私は『衛宮切嗣キリツグ』だった。

知らない場所知らない場所キリツグのお父さんで

父元凶とと言う『悪』を殺した。

でないともっと犠牲者が出るから。

知らない女性育ての女性に出会って一緒に暮らして学んだ。

魔術師達のような者の所為で、世界

中に『アリマゴ島』が起きていた事を。

育ての女性ナタリアを殺した。大を生かす為に小を捨てた。今度こそシャーレイを殺せた。

それだけだ。

僕は死ぬ理由の無い者達を理不尽な死から救うため、死ぬしかない誰かを殺した。

そののどろが間違っているというのか？　それが「正義」でなくて何だというのか？

僕は殺した。

殺して殺して殺して殺しまくった。　来る日も来る日も、相手が誰であろうと『悪』が

いれば僕は殺した。

そしてイリヤが生まれた。

幸せだったと同様に悲しかった。

全てを救う為に全てを捨てる事を決意したはずなのに、妻と娘を本当に心から愛して

しまったから。

そして僕は心を殺し、敵を殺し、『理想』の為に妻をも捨てて聖杯を手に入れて――



——絶望した。

聖杯は壊れていた。『破壊』でしか望みは叶えられない。望みを掛けなくてもこいつは『破壊』と死をまき散らし始めようとしていた。

ならば僕<sup>私</sup>の取る行動は一つ。

「第三の令呪を以て、重ねて命ずる——！」

「——やめろおおおお——！！！！」

僕<sup>私</sup>の決意に反して、『彼女』は悲痛な声で叫んだ。

「やめてくれ」と。「何故」と。今まで見せた事のない色々な感情を露にしながら。時間があれば話は別だが、今は一刻を争う。

もう既に良くない物<sup>泥</sup>が溢れ始めている。

ごめん、アイリ。君の決意を無駄にして。

ごめん、イリヤ。君のお母さんを殺してしまつて。

ごめん、舞弥。君の期待に応えられなくて。

ごめん。

ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん。

僕<sup>私</sup>は何度も心の中で謝りながら、嫌がる『彼女』に命じた。

「——セイバー、聖杯を破壊しろ！」

「ツ——ウワアアアアアアアアアアアア——!!!」

そして僕は死に至る呪いを受けた。

体の痛み慣れたつもりだがこれは別格だ。

町は燃えた。

いつか見た紛争地帯などに等しい。まさかこんな光景を『日本』で見るとは思わなかった。

人が大勢死んだ。

男も女も子供もみんな黒焦げに焼け、灰になる寸前。手に取れば原形を留めずに塵

へと崩れ去った。

僕は結局、何一つ救えなかった。

僕の所為だ。

ごめん。

いや、訂正しよう。

若い子供二人を見つけた。

まだ生きていた。

生き地獄の中を。

僕が作ってしまった地獄の中を。

ああ、生きてくれてありがとう。

そこから断片的に僕は視<sup>感じ</sup>た。

ボロボロになって行く身体に鞭を打って、イリヤを迎えに養子の二人に「旅行」と偽り、ドイツのアインツベルン城を訪問するが彼らを裏切った僕は森の結界は決して通さず、娘のイリヤとの再会は二度と叶わず、時が過ぎる度に弱っていく様を、視界と共に精神が徐々にぼやけていった。

そして最後にほとんど何も見えない状態で声が聞こえる。  
キリツグの声を。

「僕はね、正義<sup>ヒー</sup>の味方<sup>ロー</sup>になりたかったんだ」

イリヤスフィール、三月 視点

「……………」

イリヤスフィールが気付いて目を開けると、冬木市の公園のベンチで三月と額を合わせた状態のままのよう……だった。

何せ周りが未だにぼやけていて、音もどこかノイズ交じりに聞こえた。

まるで、深い水中の中にいるような感覚でイリヤスフィールには感じた。

「お嬢様?! 〴〵無事ですか?」

徐々に視界と聴覚が元に戻り、セラの焦った声と顔がイリヤスフィールには見え初めた。

「お嬢様?!」

「……………あれ? セラ? 私……………」

イリヤスフィールは寝ぼけているような感じで心配して顔を覗くセラを見る。

「急に黙り込み、さつきから声をかけていたのに返事をしなかつたものですから心配していたのですよ?!」

「私……………あれからどの位の時間が経ったの?」

何せ断片的には言え、イリヤスフィールは男一人の半生を経験したのだ。

数時間後だったとしても不思議ではない。

「何を言っているのですか？ 額を当てたばかりで、私がお嬢様の状態を確認しようとして声をかけたところ、返事が無かったのでリーゼリットがソワソワし始めたのが今ですか？」

「え？」

イリヤスフィールは周りを見て、公園に設置してある時計を見ると針は動いていなかったように見えた。

「そう……ほとんど時間は経っていないのね」

イリヤスフィールは視線を半開きで、焦点の合っていない三月の目を見て一瞬寒気が思わず走った。

光の無い目の奥が——

「——ハッ?! あ、あれ？ 終わった？」

パチクリとしながら三月は？ マークを頭から発する。

「……………ええ、そうみたい。気が付かなかったの？ (今のは何だったの?)」

「いや、これってかなり特殊でさー。(よっしゃあ！ 上手くいったっばい！ 全然内容は分からないけど……)」

「そう……………何で私にあんな物を見せたの？」

「へ？ 『なんで』って……………強いて言うのだったら『おじさんの事

を知って貰いたかったから』、かな？」

「……………セラ、リス。 帰るわよ」

「うえ？ お嬢様？」

「分かった」 ↑棒読み

イリヤスフィールが立って、帰るのをメイドの二人に宣言すると三月は声をかける。

「あ、イリヤスフィール——」

「——イリヤで良い」

「あ、じゃあイリヤで。 おじさんのお墓参りに実は近い内に行くつもりなんだけど、一

緒にどう？ 例えば明日とか」

「……………考えておく」

振り返らずにイリヤスフィール——イリヤ達は公園を後にし始める。

「……で待つてるから——」

三月はベンチから降りてイリヤ達に言う、が彼女は振り向きもせず場を後にした。

セラはイラついたような視線を三月に送り、リーゼリットは三月へ振り返って手を

振った。

「……………やっぱり……………駄目だったのかな？ ………………ハア、緊張した」

三月がため息混じりにトボトボと帰宅し始めると金髪の青年に道ですれ違う。

一瞬見惚れたのは別に金髪で整った顔の所為ではなく、血のような赤い眼が珍しかった。

「ほう？ 貴様、面白いな」

そして急に上から目線バリバリで三月に話しかけた。

「……………ハイ？」

「『奇を銜う』のは程々にしておけよ

??????」

一瞬立ち止まった青年は歩き出すと三月は頭を傾げていた。

最後の方、金髪青年は何か言っていたような気がしたが吹いた風に遮られたのか、三月は上手く聞き取れなかったようだ。

「変なの……………あ！ 食材が時間的にヤバイ！」

三月はいそいそと帰るのだった。

イリヤは帰りの車の中でただ静かに窓の外をぼくつと無表情に見ていた。

普段なら車を運転したがる彼女が「帰りはリズに任せても良い？」と言い、メイドの二人はそれなりにビックリした。

そして帰り道の間、不自然な程に黙り込むイリヤに、セラやあのリズでさえ不安を感じ、何とか会話をしようとしてもイリヤからは茫然とした生返事しか返ってこなかつ

た。

「……………ねえ、セラ？　ちよつと、ぎゅゝつて抱きしめてもらつても良いかな？」

「ツ！　も、もちろんですともお嬢様！　さき、こちらへ！」

ここでやつとイリヤらしい仕草をした事に対して、いつもは甘やかすのに躊躇うセラはホツとした笑顔でイリヤを躊躇無く抱く。

「……………ウエ……………ウエ……………ヒグツ……………ヒツ……………グ  
スツ……………ウエエ……………」

セラを力いっぱい抱きしめ返して、顔を深く埋めたイリヤは声を殺し、すすり泣いていた。

アインツベルン城の帰りの道をずっと、セラを強く抱きしめながら泣いた。

### 三月　視点

そして今、衛宮邸に腕を組みながら仁王立ちをしている三月とセイバーの二人の前に



ボロボロの士郎は正座して、横で見ている凧からすればなんともシユールな絵図だった。

「で？ 申し開きはあるのですか、兄さん／シロウ？」

「め、面目ない……………」

士郎は帰つて来るなり、ボロボロになつていた制服と腕の傷でただ事では無いと悟つた三月はそのまま玄関で彼に正座をさせてセイバーを呼んだ。

そして士郎は一緒に来た凧と共に事情を説明された。

学校にほとんど人がいない状態でマスターの自覚がない士郎にイラついた凧が襲い、あと少しと言つたところで僅かに残つていた生徒の一人が悲鳴を上げてライダーに迫られていたのを見た士郎は生徒を凧に任して、ライダーの後を追つて交戦、そして危ない所を凧に助けられ、帰り道がてら凧と士郎のマスター達は当面の間、敵対せずにお互いをフオローするとの事で収まつた。

「なぜ令呪を使い、私を呼ばなかつたのですかシロウ?」

「いや、最初は優戦してはいたんだ。ライダーはどこか、俺を本気にしていなかったというか、アーチャーやランサーと比べて迫力が無かつたと言うか……………」

士郎は黙つていた、信二がライダーのマスターである事を。日頃から遠坂凧と間桐慎二の性格を考えて、士郎を襲つたのが信二のライダーだという事が判明したら凧が何

をするか分からない。

最悪自分の時の場合みたいに問答無用で襲い掛かってしまうかも知れない。

この考えから士郎は慎二＝ライダーのマスターとは凜には言っていないかった。

「あのね衛宮君、サーヴァントは契約したマスターの魔力を糧にして存在し続けているの。マスターの貴方が死んだら、セイバーも消えるんだから元も子もないでしょうが?!」

「でもそういう遠坂も俺を『殺す』よりは『マスターの任から退散させる』って動きだったじゃないか?」

「そうなのですか、リン?」

「それはまあ…余りにも衛宮君が格下だから……言うなれば『心の贅肉』よ」  
『心の贅肉』? 遠坂が太っているという事か?」

ピシリと空気が凍って、温度が下がったような感じがして、青筋がピクピクと凜のこめかみに浮かび上がる。

「衛宮く——」

「——に・い・さ・ん?」

そしてそれを横からピシヤリと遮る、冷たい三月の声に士郎は固まる。

「な、なんd——」



な、良い振りかぶりの仕方でした。やはり彼女も武術の心得を持っていたのですね」  
アーチャーは衛宮邸の屋根の上に座りながら片手で頬を覆い、退屈そうな顔で周りの警戒を静かに続けていた。

そして後に衛宮邸でお邪魔していた凜を見た桜は酷く混乱した。三月同様、桜は食材を買っていたので帰りが遅くなっていたらしい。

そして結局その夜、凜が遅くまでご厄介になったのに対抗する為か、桜はまた泊まる事を決めた。

前回の大河の間桐家への連絡は『度々桜が衛宮邸で泊まるかも知れない』と含めていたからこそ可能だった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そして深夜近くの時、三月は静かに桜部屋に入り、寝ている桜の身体に手をかざし――

「——また貴方ですか」

「あ。こんばんは」

「またもライダーに声を掛けられ、止められる三月。ただ三月は予想していたのか、今度はビックリせずに対応する。」

「それと簡易防音結界を張ったから余程の事が無い限り声は漏れないと思うよ。(アイツベルンの結界魔術、使えて良かった)」

「……………貴方には危機感と言うモノが無いのですか？ 例えば——」

「ライダーは一瞬の内に三月の背後を取り、鎖付きの短剣を彼女の首筋に刃を立てる。」

「——この様に貴方を人質にしてセイバーのマスターに自害をさせるか、セイバーを操れるようにするか……など」

「うーん……………危機感と言うか、貴方のような方が理由も無くそのような事をするとは思いませんから。あと、礼を言いたいんだけど」

「礼？ 可笑しな事を言うのですね貴方は。何に對しての礼でしょうか？」

「士郎を…………『兄さん』を本気で殺そうとしないでくれてありがとうございます」

「……………どうして、そう思いいになったか聞いても？」

「あー、兄さんからの説明から推測しているんだけど……………貴方がもし本気で殺そうと

していたのなら、きつと五体満足ではなかったと思うし。あと慎二に伝えてくれる？  
多分、桜の事を心配して貴方をここに送って来ているんでしょ——？」

プツリとする音と共に三月の首筋に小さな傷が出来、血がゆつくりと首を滴る。

「——ここから立ち去りなさい。次は——」

「——あ。それに前は言いそびれたけど、私は可愛い貴方と『友達』に——あ」  
ライダーが三月の首に口を立てて血を出来ていた傷から吸い始めると三月は黙りこんだ。

時が静かに過ぎ、唾と血混じりでネツチャリとしたライダーの口が三月の首から離れ、唇に付いた血を舐めとる。

「このような私と、『友達』？ ふざけているのですか？」

「ううん、本気。で、桜を診ても良いかな？」

「何故そうなるのです」

「や、だつて血を吸ったじゃん。それ位はしても良いんじゃないの？ それに何か……嫌な感じがするのよ。だからね、心配するの」

三月がまた桜に向かい、手を翳すと優しい光が部屋を灯す。

「そう言えば桜つてよく眠るわね。『寝る子は育つ』って言うけど、まさか桜の秘密はそれじゃないでしょうね——ん？」

三月の顔がほんわかとしたモノから、困惑したモノへと変わる。

「何これ？ この○イオハザード感、何処かで……それに桜の中で何か動いている？  
もしかして………寄生虫か何か？ 嫌な感じの正体はこれ？ だったら取り出  
さないと——」

三月が力を込めた瞬間、何か黒い影のような物が無数に床を伝って、桜の体中から三  
月を目掛けて飛び出て——

——三月の意識はそこで途切れた。

【告。 プロトコールに従い——】

## 士郎、セイバー 視点

土蔵で寝ていた士郎は夢を見た。

冬木市の道。

船の上の景色。

階段を上る。

船から降りて――

――気が付くと、士郎は柳洞寺の敷地内で立っていた。

「……………あれ？　ここは柳洞寺の庭？　何でここに……………」

「ようこそ、セイバーのマスター」

士郎は紫をメインカラーとしたローブの女性に声を掛けられる。

「私はキャスターのサーヴァント。貴方をここに来るように糸を使って体を操ったの。単刀直入に言うわ、令呪とセイバーを私に渡しなさい。私の方が両方とも有効活用できるわ」

士郎はその女性――キャスターの『提案』に驚愕し、怒りを露にした。



「そんな事、する訳が——!」

「——ああ、ごめんなさい。既に貴方には拒否権は無いのよ?」

「な——ガアアアアアアア?」

キヤスターの魔術行使に無理矢理体を動かされ、苦しむ士郎が叫ぶ。

無数の矢が辺りを埋め尽くし、キヤスターを襲う。

「貴様は、アーチャー!」

「エミヤシロウ、このまま逃げろ……と言いたい所だが逆に動かない方が良い。少し荒

事になるからな」

途端にアーチャーとキヤスターが衝突して、士郎は見て感じる。キヤスターの魔術

師として格上の戦いを、アーチャーのアーチャーらしからぬ接近戦。

後に士郎は窮地をアーチャーに救われ、二人は「馬鹿」の言い合いをする。

キヤスターが呆気に取られるほどのコントだった。

そして衛宮士郎は目撃する。

アーチャーの『偽・螺旋剣』カランドボルグーを。

キヤスターはボロボロになりつつも、一命を取り留めていた。

アーチャーが止めを刺さず、ただ衛宮士郎を目的としていたとの宣言にキヤスターは

笑った。

「その坊士郎やは無関係の人間を糧にする私のようなサーヴァントが許せない、そして貴方は無意味な殺戮は好まない。似た者同士ね、貴方たち」

これにムツとするアーチャーと士郎は反論する。

「誰がこんな奴と一緒になもんか!」

「同感だ。平和主義者であることは認めるが、根本が大きく異なる」

「どこが平和主義者だ、お前!」

この二度目のやり取りにキャスターはまた笑い、交渉を持ち掛ける。

「気に入ったわ、貴方達は力もその在り方も稀少よ? 私と手を組みなさい。私にはこ

の戦いを終わらせる用意が出来つつある」

「断る」

同時に断った士郎がアーチャーを睨み、アーチャーは見返しながら舌打ちをする。

「あらそう。残念ね」

キャスターのローブが翼のように広がり、宙へと舞い、士郎とアーチャーを見下す。

「私をこのまま見逃すの、アーチャー? 貴方のマスターは町の事件絡みで私を追って

いると言うのにな?」

「もとより私は独断でここに来た、それに個人的に貴様を討つ気はない。ここは痛み

分けという事で」

「なッ?! おいアーチャー!」

「フッフ、本当に残念……坊や」

キヤスターが不意に声を士郎にかける。

「な、何だよ?!」

「気に入ったから一つ忠告をしてあげるわ。今の貴方では余りにも未熟よ。体も心

も精神もね」

キヤスターが紫色の光となり、夜空へと溶けて行く。

「……何でキヤスターを見逃した、アーチャー? あいつは町の事件と関係しているん

だろ?!」

「そんな事、私には預かり知らぬ事だ。むしろ奴にはこのまま続けてもらいたいくらい

だ」

「何だと?!」

「キヤスターは人々から生気を吸い上げ、その力で恐らくこの聖杯戦争で一番の妨害のバーサーカーを危険視している。となると倒すか無力化するのは先ずバーサーカーの筈だ。私達はその後でキヤスターを倒せばいい。仮に標的がバーサーカーで無

かった場合、その時に打ち倒せば良い事だ」

「そんな戦い方、お前のマスターの遠坂なら絶対に了承しない！」  
「そうだな。 キャスターに手早く事を済ませて欲しいものだ。 人間など結局は死ぬ生き物だ。 誰にどう殺されようが、結果的には変わるまい。 ならば最小限の犠牲で、最大限の効果を発揮すれば良い」

士郎はそんな事を言うアーチャーを睨み、アーチャーは無表情に士郎を見て、如何に士郎が持つ理想が「理想」でしかありえない事を。

これに対して士郎は反論する、「やって見なくては分からない」と。  
こうして、夜の寺で二人の男が『議論』をする。

一人は理想論を掲げ、もう一人は現実的で確実な言葉を並べる。

## 第11話 籠鳥雲を恋う

## セイバー 視点

時をほぼ同じにして、場所は柳洞寺の山門へと変わり、そこでは激しい金属音が響いていた。

士郎の姿が無く、柳洞寺にてマスター<sup>士郎</sup>のパスを察知し、追ったセイバーは紺色の陣羽織に長大な太刀を構えた、耽美な青年剣士と対峙していた。

彼は自分の事を『アサシンの佐々木小次郎』と名乗り、セイバーを少なくとも剣術では凌駕していた動きで彼女を翻弄していた。

「くッ！」

「む。上は上で思惑通りとはいかぬらしい。主の危険故、手の内を隠す余裕はなくなった」

アサシンは階段を下りて、セイバーと同じ場所へと立つ。

「頭上の有利を捨てて、何のつもりだアサシン」

「何、無名とは言え劍に捧げた我が人生だ。未だに死力を尽くせぬのならその手の内を隠す信念——力付くで決じ開けようか」

アサシンのひょうひょうとした、昼行灯のような怠惰は一気に真剣な物へと変わり、セイバーは直感で悟る。

死力を尽くせねば死ぬ、と。

「秘劍、燕返し！」

セイバーは同時に繰り出された三つの斬撃を（無傷ではないとは言え）凌いだ。

「我が秘劍を凌ぐとは、いやはや大したものよ」

「今のが宝具か、アサシン?！」

「そのような大した物ではない。偶さか燕を斬ろうと思いつき、身に付いただけのものだ。線にすぎぬ我が太刀では 空を飛ぶ燕は捕らえられんが、その線も二、三本なら話は違う」

アサシンは話を懐かしむような声で話を続ける。

「しかし連中はやはり素早くてな。事を成したければ、一呼吸のうちに重ねなければならなかつたが…そのような真似は人の技ではない。だが、生憎と他にやることもなかつたのでな。一念鬼神に通じるといふヤツだ。気が付けばこの通り、ほぼ同時に斬撃を繰り出せるようになった」

これに対してセイバーは内心苛立ちを感じる。

何故ならアサシンが言ったように確かにただの斬撃ではあつた。

あつたがほぼ同時などではなく、アサシンが繰り出した斬撃は三つ同時にあつた。

それは『魔術』のレベルの芸当ではなく、『魔法』の空域に達していて、『次元屈折現象』に酷似していた。

アサシンはただの剣技のみで『魔法』という現象に酷似した技を『宝具』の域に達していた。

「黙れ！ 俺はお前なんかとは違うう！」

不意に頭上から士郎の叫ぶ声がセイバー達に届く。

「シロウ？」

「ふむ？」

「俺は勝つ為に！ 結果の為に！ お前みたいな奴なんかには周りを犠牲にするなんて絶対にするものか——グア！」

そして体に新しい切り傷を負った士郎が階段に投げ出されて落ちる。

「シロウ！」

セイバーはすぐに階段を上り士郎の元へと行き、体を支える。アサシンはこれを見た見えていた。

「ぐ……………」

「しぶといな、エミヤシロウ」

「アーチャー?! 何故ここに?!」

「何、簡単な事だセイバー。アーチャーは根本的には狩人や弓兵、狙った非力な獲物がノコノコと目の前に出て来たところを見逃すほど甘くはない。それにマスター達同士が『当面の間は敵対しない』という事にサーヴァントは入っていないかと思うが?」

「貴様!」

「アーチャー……………町の人間に危険が迫っていると分かっている、見捨てるのか?!」

「英霊とて全ての人間を救うことは不可能だ。誰かを救うということは、誰かを助けないということなんだ。無関係な人間を巻き込みたくないと言ったな? ならば認めろ、一人も殺さないなどという方法では結局誰も救えない末路だけが待っている。

そして自分の為ではなく誰かの為に戦うなどただの偽善だ。エミヤシロウ、貴様の望むものは勝利ではなく平和だと言っていたが、そんなモノはこの世の何処にもありはしない」

「アーチャー……………貴方は……………」

そこで今まで黙っていたアサシンが間に入り、アーチャーを見る。

「横槍は入れたくはなかったのだがな、一応この門番としていいるからにはそうもいか



ん」

「何が言いたい、サムライ?」

「何、立ち去るのか否か聞いておきたいだけよ。そして立ち去るなら女狐目が返って来る前に早々にする事だな」

「アサシン……………」

「今宵はここまでだセイバー。見たところ、其方のマスターはまだ意識はあるが傷は深い」

「アサシン……………何故?」

「何、門番故にここは酷く退屈だな。良い好敵手と出会うなど私にとってこれ以上の

事は無い」

「感謝する——」

セイバーがアサシンに感謝の言葉を贈ると同時に、アーチャーが士郎を切りつけるのをアサシンは刀で流していた。

「邪魔をするつもりか、サムライ?」

「私はこの門番、そして行きと帰りの者たちに対して義務があり、セイバー達は立ち去る事を決めた。貴様がその邪魔とするのなら、それを止めるだけの事」

「フン、キャスターの手駒風情が」

「貴様こそな。あの女狐めの肝を冷やそうと見逃したというのに、我が身可愛さで逃げ帰るとは失望した——!!!」

そこでアサシンとアーチャーの激しい衝突に見入りながら体をセイバーに支えらるる士郎は体を引きずりながらその場を後にした。

???

視点

そこはキイキイというモノがひしめく、暗くてジメジメしたところだった。

何処にも自然な光源は無く、不気味な緑色の光を体内から発する何かで天井も壁も床も覆っていた。

そこで不意に老人の声が響く。

「おおおー！」

この喜ぶ声の持ち主は間桐臓硯。本名は「マキリ・ゾオルケン」で、元々は日本人ではなくロシア系の出身の魔術師であったが日本に根を下ろし、以降は現在の名の「間桐」に変えているマキリ家の500年前の当主であり、戸籍上では鶴野と雁夜兄弟の父、桜と慎二の祖父に当たる。

そして陰ながらに間桐家の当主を担っている。

魔術の力で肉体を人のものから蟲に置き換える事で数百年も延命を重ね、既に「人ならざる者」と成り果て生き続けてきた文字通りの「人外」。

200年前の御三家の遠坂、間桐、そしてアインツベルンによる聖杯戦争の立ち上げにも実際に参加して立ち会っており、サーヴァントと令呪のシステムを考案したのも彼である。

それも全ては『悪の根絶』後の『理想郷』を創立する尊い夢の為だったが、自らの身体に施した延命の処置が200年と言う年月を経て現在では目的と手段が逆転し、自身が生き延びる事に固執する「不老不死」を求めるモノに変わってしまった。

言うなれば長すぎた時が彼の夢を歪めてしまったのだ。

「素晴らしい！ 素晴らしい素晴らしい素晴らしい！ 待った甲斐があるとは良く言ったモノよのう！ クカカカ！」

そして男か女、果ては大人か子供かも分からないような、様々な声帯が混じりあった声がどこからともなく答える。

「気に入って貰えた？ でも完全には程遠くてね——」

「——わかっておる。此度の聖杯戦争は予期せぬ時期に起きた事もあり、慎二達も使い物にならんとお思い、見送るつもりだったが気が変わった」



して来た。だがバーサーカーの時にも、昨日にも感じた無力さが士郎を焦らしていた。

いざという時に防御もロクに出来ないのであれば誰も守れないからだ。

そこでセイバーが意外な人物を誘う。

「へ？ 私？」

「はい、三月は大河のように武術をある程度心得ているかと思つたのですが」

「あー、うん。確かに剣道やつていたけど………何で私？ セイバー滅茶苦茶強いじゃん」

「失礼ながら、私は他人に教授した試しが無いので実戦形式になるのですが、シロウは戦闘で使える型と言う型も無いので、基本から学ばした方が良いかと。それに二人の自衛能力が上達するのは時間稼ぎにも繋がる筈」

「うーうーん」

「俺からも頼むよ、三月」

「士郎？」

「三月は体を使う運動とかはあまり好きじゃないのは分かっている。でも昔からお前は『天才だ』、『神童だ』っていう藤姉達の事を真に受けるんだったら、これ以上ない師が俺には二人いるように思えるんだ」

「『神童』？ それは真ですかシロウ？」

「え？ ちよ、なに——」

「——ああ。それに子供の頃、三月はじいさんに一本入れたんだぜ？」

「キリツグに?! しかも子供の頃?!」

「ちよ、私の話を——」

「三月、試合をお願いします！ 力量を確かめるにもそれが良いかと！」

セイバーが何時の間にか『戦士の目』から『新しい玩具を見つけた子供の目』で期待に満ちていた。

「……………ど、どういう事なの〜これ〜？」

私服に着替えたセイバーと半分諦めた三月が対峙する。

「では、良いですか三月？」

ピリピリとした空気が辺りを埋め尽くし、士郎は戦場の緊張感に包まれ、三月も構え

「——あ、ちよつと待ってセイバー」

セイバーと士郎が三月の日常ペースの声にガクリと肩を落とす間、三月は防具を脱ぎ取り、私服姿となる。

「よーし！ バッチコーイ！」

「み、三月…何で防具取ったんだ？」

「いやー、これって実戦形式でしょ？ だったら想定が『とつぜん てきに おそわれ た』とかになるじゃん」

「そうですか、では遠慮なく——！」

……

……

……

……

……

……

……

「おはよう桜」

「おはようございませす、先輩」

士郎の声が朝ごはんの用意をしていた桜に聞こえ、桜は返事をする。

「さくくらくらくおははは」

「ハイ、三月先輩もおはようございませす——ッ?!」

そして何時もとは違う三月の声に振り返りと、グツタリとしながら元気のない三月を

背中に乗せた士郎を見てびっくりする。

「——おはようございます、桜」

「え？ セイバーさん、三月先輩はどうしたんですか?!」

「も、もうダメ……………ゴメン、桜……………」

「え?! 三月先輩?!」

「私…………私……」

グウ~~~~~。

ビツクリする桜に返事したのは誰かの胃が豪勢に鳴る音だった。

「あー、三月がお腹が空き過ぎて……な」

そして——

「桜ちゃん！ 特盛おかわり！」

——そこは三月がご飯を自分の口に込めてすぐにおかわりをキョトンとした桜に頼む姿と、士郎が苦笑いを浮かべていた。

「あ、はい」



「み、三月。何時もよく食べるのは良いとして、今日はどうした?」

もつきゆもつきゆもつきゆもつきゆと食べ続ける三月。

いわゆる「口に食べ物を詰め込むハムスター」状態だった。

「だって——もつきゆもつきゆ——久しぶりに——もつきゆもつきゆ——

——剣道、朝から——もつきゆもつきゆ——したんだから! 褒めても——

——もつきゆもつきゆもつきゆ——良いぐらい!」

ゴクゴクとお茶を飲んで喉に詰まりそうなものを流し込み、また食べ始める。

「弓道部の朝練とかの時はどうしていたんだ?」

「菓子パン三つ」

「朝から?!」

三月の『菓子パン三つ』の答えに驚く士郎と桜。そしてこれをじつと見ていたのは

セイバーだった。

「……………桜、私もおかわりです」

「え?」

「ちよ、セイバーまで?!」

そしてその朝炊いたご飯は無事(?)二人の大食いモンスターによって蹂躪された。

朝の内に。

「……………バ、バイト増やして貯金していて良かった」

ホクホク顔でお茶を飲む三月とセイバーを見ながら独り言を言う土郎だった。

朝の実戦形式の稽古については、三月が最初割と善戦していたものの、途中で動きが鈍くなり、瞬間にセイバーに（ポコポコに）やられた。

理由は至極単純。

三月の身体が動きに付いて行けなかっただけの事。

技術が幾ら有っても、身体がソレを活用出来なければ意味が無い。

時々忘れそうになるが、三月はそもそも体作りの為に以前から土郎に付き合っていたのだ。陸上部並みの走り込み然り、弓道部然り。

そして朝早くから過激に動いたのが良くなかったのか、お腹を空かせ、三月は目を回しながら（セイバーにポコポコにやられながら）道場で倒れた。

セイバー曰く「三月は大変素晴らしいモノを秘めています。ですが、まずは体作りからですね」と暖かい眼で見られ、土郎は「ああ、短距離走特化した陸上部員みたいな感じか」と同情の目で見た。

三月はこの視線に対してヤケ食い＋空腹を満たす為にたらふくご飯を食べた。

「よおーしー！ おっ昼♪ おっ昼♪」

そしてその日の学校でのお昼休み、ウキウキしながら三段弁当箱を開けようとする三

月。

「三月ちゃんホント小さいのに体のどこにこれ全部なくなるの?」

「うっさいよそこ! 『成長中』と言いたまえチミイ〜!」

「ハハア! ……で? 今回のおかずは世界のどこの——?」

教室の扉がガラガラと空く音がして、ドア付近にいた生徒達から次第に教室が静かになる。

「あら、三月。やっと見つけたわ。 ちよつと一緒にお昼をしないかしら?」

「???」

三月が弁当箱を再度開けようとしたところに、自分のクラスに遠坂凜が現れてお昼を誘われた。

これに対してヒソヒソ話で情報が一気に広がり、「遂にあの『ミス・パーフェクト』から『月の天使』と接触した〜!」との事だった。

士郎も自分の弁当を食べようと何時もの生徒会室へ移動する為にドアへ向かうと、ドア付近りに食堂組が何故か戸惑い、人だかりを作っていた。

「おう、お前からどうしたんだ? 食堂に行かないのか?」

そこに士郎の近くにいた生徒が答える。

「いやオレ達も行きたいのは山々なんだが、珍しい光景を見ている途中でな?」

「珍しい光景？」

士郎が廊下の方へ出ようとすると同じ生徒が事情を説明する。

「ほれ見てみる。我が学園内でも指折りの女性の二人がおるでござ——」

そこではどこか遠慮しているのか、どうしたら良いのか分からなくて慌てている遠坂凛を無理矢理引つ張ろうとする三月がいた。

ただ体格差によつて無駄に終わっているの、脳内フィルターを使うと『お姉ちゃんを引つ張る妹』絵図になっていた。

「——だ、だからここで待ってれば何時か出て——！」

「——そんなん！ 言っていたら！ 何時まで経つても！ ぐぎぎぎぎ——！」

「——あれ？ おーい！ 三月——！」

士郎は何事もないように凛を説得しようとしている三月に声をかけると周りの人達がギョつと目を見開く。

「「「(衛宮が行ったー?!)」「「「、と思った男子生徒たち。

「「「(うわ！ 衛宮君、大胆〜!)」「「「、と思った女性生徒たち。

だが彼らは知らない。

更なる爆弾宣言が待っていた事に。

「あ、やっと出て来た。兄さん、ヤッホー！」

「「「「兄さんツツツツ?!」」」」」

何を隠そう、普段三月が食べ終わる頃には自分のクラスから出ずに昼休みが終わってしまうのだ!

と言うか終わらせてしまう。

無理もない、完食出来るとは言え、口自体が小さいので食べるスピードが知れている。なので彼女がおかずを誰にもあげずにただ静かにご飯を食べている時は「ノータツチ状態」になるのが暗黙のルール。話しかけて良いのはおかずを分ける時、または食べ終わった時だけに行っている。

これを覆せると言えば余程の人物でない限り不可能(例えば教師とか)。

以上の事により殆どの生徒は未だに士郎の『衛宮』が三月の『衛宮』と同じなのを知る生徒は少ない。

何せ士郎は士郎で生徒会室にすぐさま行って弁当を食べているのだから『衛宮士郎』  
Ⅱ『衛宮三月の兄』とは結び辛い。

今日までは。

「あれ? 遠坂まで? 余計に珍しいな」

「ほら、遠坂さん!」

三月が凜の後ろに回り、押そうとする。

「ウエ?!　そこで私いいい?!　あ、え、衛宮君、三月っていつもこうなの?!」  
「え?　そうだけど?」

「あー!　もうー!　休憩時間無くなるから行くわよ二人とも!」

三月が二人の手を引っ張ろうとして(体格差で)失敗するが士郎も凜も目を合わせ、観念したように歩き出す。

「「「「「あの『月の天使』が『兄さん』って……………」」」」」」

と驚愕しながらも、「やはりご飯を食べている三月は『ノータッチ状態』だな」と再確認する。

先頭で歩く凜と三月、そして後から付いて来る士郎はどここの通路へ行っても誰もが止まり、視線を集める。

無理もない。『ミス・パーフェクト』と『月の天使』が一緒にいるだけでも珍しいのにそこに『学園の便利屋』と有名な士郎までいた。

「おい、遠坂。どこに行くんだよ?」

そして『学園の便利屋』が気軽に『ミス・パーフェクト』に話しかけていた。

「お昼なんだから、昼食を取りに行くに決まってるでしょう?」

「駄目だよ遠坂さん、そんなんじゃ伝わらないって」

「じゃ、じゃあどうしたら良いの?」

『オウ、衛宮ンとこの小僧。面あちつたあ貸せや』とか?」

「それ、藤姉に聞こえていたら竹刀が飛んでくるぞ……取り敢えずここまで来れば屋上だろ?」

「あ、ナイスよ士郎! 良く分かったね」

「もう階段までくりやあ俺でも分かるさ」

「ね? こんな風に誘えばいいのよ、遠坂さん」

「な、なんだか釈然としないわ」

屋上上がった三人のうち一人はすぐさま弁当箱を開けて、猛スピードで食べ始める。

「ガツガツガツガツガツガツガツガツガツ!」

「え、衛宮君? あれって大丈夫なのかしら? 喉詰まらないのかしら?」

「まあ、俺も最近見ていないが、中学からずっと二段箱だぞ?」

「一人で?! しかも今は三段箱よ?!」

「ああ、そうだな」

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグ!」

『『そうだな』って、衛宮君の分も入っていないくて?!』

「だからそうだってさつきから言ってるだろ?」

「ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ！」

「で、遠坂は何で俺達を誘いに来たんだ？」

「え？　な、何で——？」

「フウー、次の段を——」

「嘘?!　早?!　もう?!」

「アイツは後にすればいいから」

「あ、ああ。　その……昨日の事を衛宮君に謝りたくて……アーチャーに襲われてごめんね？　アーチャーには令呪を使ってまでもこの敵対しない状態を取り敢えずキープしたい事を伝えたわ。　当面はね」

「それは……遠坂は悪くはない。それに俺も認めたくないが、アーチャーあいつがいなければ俺はセイバーと令呪を奪われていた。　下手すりゃ命もだ」

「でも、彼のマスターとして責任は私にあるわ」

「遠坂がそう言うんだつたらそれで良い……アーチャーであいつは？」

「……家に置いてきた」

「ゴクゴクゴクゴクゴク……ぷはー！　ぐちそうさまでしたー！」

「「早いよー」」

「え？」



士郎達がまだ自分たちの弁当をようやく半分食べ終わったところに三月は完食した上に全てを胃に流し込むように500mlのペットボトルのお茶を飲み干した。

「呆れた……………この子、本当に面白い性格しているのね」

「そういう遠坂だって」

「ウツ」

「それで、遠坂さんは私に何を聞きたいの？」

「そう言い、三月はチョココルネの封を開けて食べ始める。」

「ハムハムハムハム」

「ちよ、そのチョココルネはどこから出て来たのよ？」

「デザート袋」

「そう言い、三月は弁当箱とは違う袋を指さした。」

「……………ま、まあいいわ。三月。貴方は先日、『アインツベルン』と酷似した魔術を使ったわね？ あれはどういう事？」

それは初めてバーサーカーとそのマスターと対峙した夜、凜を助けた魔術の追求だった。彼女はその事を忘れた訳では無く、ただ聞くタイミングを見計らっていた。

彼女から見たところ、士郎はその事を知らずに一緒に生きて来たと言う感じに取れた。

これは同じ『衛宮』と言う名字から普通、部外者である凜が言う立場では無いし、追及するべきではない事情かも知れない。

だが、今は聖杯戦争。そして『衛宮士郎』はマスター。ならば『衛宮三月』は何だ？

これを凜は知りたかった。

「ああ、あれ？ おじさんから習った」

「は？（そ、そんな？ あっさりと……）」

「おい、俺はそんなの聞いていないぞ?!」

「まあ、おじさんが『秘密にしろ』って言っていたから。それに今まで言う必要なかったし」

「（『おじさん』？ いえ、それより今は——）——じゃあ参考までに聞けど、貴方が使える魔術は何？」

「えーと、遠坂さん？ それはちよつと言いくいと言うか——」

「——何だったら衛宮君と貴方に同盟を正式に組んでも良いわよ。貴方、私から見たら衛宮君より腕は立つてしょ？」

「ツ。悪かったな、遠坂」

「あ、じゃあそれで良いわ。私が使えるのは『治癒』、『解析』、『強化』、『錬金術』、『再

構築』——」

「——え、ちよつと待って。最後のは、何て？」

『再構築』

「……………私……………聞いた事無いんだけど」

「え？」

三月と士郎が驚く。

何せ切嗣曰、『再構築』は『強化』の分点の一つと二人に説明していたからだ。

別に切嗣は間違っていないが、三月が使う『再構築』はどちらかと言うと『錬金術』と『強化』を混ぜたような魔術であり、本来の魔術系統には当てはまらない。

ただ切嗣は普通の魔術師よりは柔軟な考えが出来たので、名称として彼自身が『再構築』と呼んでいた。

「……………そ、それで『再構築』ではどんな事が出来るのかしら？」

「ん、例えばこのプラスチックバッグをプラスチックスプーンに変えたり、このナプキンに含まれている炭素の原子構造をダイヤモンド並みに変えるとか……………つて、どうしたの遠坂さん？」

三月が見ると凜は頭を抱えていた。

「……………あのね、一応言っておくけど前者の例えは立派な『錬金術』よ。でも後者は

『強化』の範囲を超えているわ」

「ええ？ そうなの（か）？」

「良い？ 衛宮君に三月、そもそも——」

凜の言葉が昼の休み時間の終了のチャイムに遮られる。これを聞いた三月と士郎は立ち上がって教室に戻ろうとするが凜が「たまには良いじゃない？」といい、魔術の話続ける。

そしてそこで如何に自分が魔術師として並外れているのを三月は理解し始めた。

やはり切嗣が言ったように秘匿したのは正解だったと痛感し、凜と士郎の話の静かに（菓子パンを食べながら）聞いた。

三月は自分が使えるのが『治癒』、『解析』、『強化』、『錬金術』、『再構築』などというモノに対し、凜は簡単な力の蓄積、流動変化、色々なものに魔力を転換して保存しておく事が出来、士郎は『強化』のみ。

これだけでなく、三月は昨日イリヤに使った魔術や『結界術』なども使えるので三月自身、少し自分の事を久しぶりに不思議に思った。

先程凜が言ったように、三月の『再構築』は『錬金術』に似ているが原子構造を変える事はその物質の本質を変えることに等しい。本来の『強化』ならばナプキンは『紙』としての能力が強化される。だが三月の『再構築』の場合、見た目は紙だが炭素の部



エセ神父から聖杯戦争の説明があつたあの夜、凜と別れてから慎二とライダーに会つた事を。

「……………衛宮君、ちよ……つと正座してくれる?」

「え?」

凜の問い詰めに士郎は説明した。しようとした。

先日、ライダーに襲われたのは何か理由がある筈だと。

三月は三月で士郎から説明があつたものの、士郎の行動原理は理解していた。何せ凜ならば躊躇なく慎二を襲いかねないからだ。

そこで三月は何か気付いたかの様に(三つ目の菓子パンを食べ終わった後)、未だに続く尋問に横から言葉を挟んだ。

「ねえ、もしかして慎二君は遠坂さんみたいに士郎にマスターとしての自覚を持たせたかつたんじゃないかな? だつて話を聞いたところ、ライダーは手加減していたんでしょ?」

「あ、慎二ならあり得るかも」

「え? あの『間桐』よ? 『慎二』よ?」

「まあ、アイツは昔から素直じゃないからな」

「うんうん、良く皆に間違われるけど彼は説明不足なだけだから」

「……………貴方たち、意外とアイツの事を高くかっているのね。でもアイツはマスタージャやないわよ。そもそも魔術師でもないわ」

「え？」

これに士郎と三月はビツクリする。凜いわく、『間桐』は魔道の家としては廃れていて彼女の父親によれば魔術師としての血脈は既に途絶えているとの事。

そこで凜は士郎に持ちかける、キャスターと門番を務めているアサシン達の打倒を。

この話を聞き、士郎はアーチャーの言った言葉が頭をよぎる。

『誰かを救うということは、誰かを助けられないということだ。無関係な人間を巻き込みたくないと言ったな？ ならば認める。一人も殺さないなどという方法では結局誰も救えないという事を。そして自分の為ではなく誰かの為に戦うなど……………ただの偽善だ』。

三月はと言うと、午後に行く切嗣のお墓参りには何を持って行けばいいのか迷っていた。

## 第12話 血涙を絞る少女達、そして夢は逆夢

## 三月 視点

学校が終わり、三月は商店街で買い物をした後、前日イリヤ達と会った公園のベンチで足をブラブラしながら待っていた。

「♪」

そして今回歌っていたのはとあるアニメのOVAでインサート曲として出て来た、「Watching You」だった。

『You're looking for how they live、その痛みを分かちあい』（あのテーマと雪が降るシーンは良かったな）

「バアー！」

「ハピャア?!」

突然後ろから声を掛けられながら、肩を掴まれた三月は心臓が口から出そうな感覚で素っ頓狂な声を出すと、後ろから笑い声が聞こえた。



「アハハハ！ 何、『ハピヤア』って？」

「ちよ、ま、まって！ い、今のは駄目でしょうがイリヤ?!」

未だにドキドキとうるさく鼓動する心臓に手を当てて、未だに笑うイリヤへと振り向く三月。

「つてあれ？ 他の二人は？」

「車で待っているわ。 さ、行きましょ」

イリヤを先頭に三月が付いていくとメルセデス・ベンツ・GクラスのW463型の外に待機していたセラとリズが見えた。

「おー、昨日ぶり。 こんにちは」

三月が片手をあげながら挨拶するとセラはムツとした顔を出すが無言のままだった。

「……………こんにちは」 ↑ 棒読み

リーゼリットの方は多少躊躇いしつつも、三月を真似て挨拶を返す。

そしてお約束と言うばかりに『キッ!』と睨むセラ。

「あ、こちらはお世話になりますのでお詫びのケーキとクッキーです」

「……………ありがとうございます」

「うん。 昨日のロールケーキは美味しかった」 ↑ 棒読み&わずかなホクホク笑み

「わあ。(リーゼリットさんの微笑み顔、ゲットだぜー!)」

「…何？」 ↑ 棒読み

「ううん、何でもない」

「それじゃあ、行きましよう。三月はどこか知っている？」

「あ、うん。柳洞寺の裏手の霊園」

「これを聞くとセラは体を固くしてイリヤに向く。

「お嬢様、私は反対です。あのような場所に——」

「——そう。リズ、運転をお願いね」

「分かった」 ↑ 棒読み

イリヤはセラの言葉を最後まで聞かずにメルセデスに乗り、セラは観念したかのよう  
に溜息を出し、イリヤの後に車に乗る。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

…

そして柳洞寺へと続く石の階段を前に車が止まり、三月とイリヤが車から降りる。

「お嬢様、やはり我々もご一緒させてください」

「リズは車を待機していて。セラはリズが変な事しないように。恐らく何もないと  
思うけど念の為にね」

「念の為？」

「……ここには『魔女』がいるの。私達が無しなければ何もないと思うけど、一応ね」

「ふくん。じゃあ、いこっか。」

三月は鼻歌を再開しながら、シヨツピングバッグを持ちながら階段を上り始め、イリヤはその後を追う。

そして山にある柳洞寺の山門では――

「――あ、お疲れ様です！ 先日は兄がお世話になりました！ こちら、お詫びの品です」

三月はセイバーに『アサシンの佐々木小次郎』と名乗っていた青年剣士に保温の効いた熱燗と弁当セットの袋を渡していた。

「おお！ これはかたじけない。だがはて、『兄』とは？」

「ああ、赤がかかった髪の毛の青年です」

「何と！ あの者にかような可憐な妹がいたとは！」

そして何故か上機嫌なアサシンと三月が仲良く話し始めた。これを見ていたイリヤは困惑しながらも黙って距離を取っていた。

「して、今日は何用かな？ 見た所、面妖な主に似たものを連れて来ているようだが？」

「あ、今日は親のお墓参りに来ただけです」

「……………何？」

流石のこれにはアサシンも戸惑い、三月を疑いの目で見る。

「あれ？ 駄目、ですか？」

不安そうになる三月に対してアサシンはイリヤの方も見るが——

「——まあ、良いだろう。まだ夜ではないとしても、用件を終えた後は早々に立ち去るがよい。でなければ何も保証は出来ん」

「ありがとうございます！ と言う訳で行こう、イリヤ！」

三月はいそいそと座りながら熱燭と弁当を取り出すアサシンに頭を下げ、イリヤと共に柳洞寺の裏手の霊園へと歩きだす。

「ねえ、三月。さっきのは何だったの？ もしかしてサーヴァント？」

「ん？ ああ、うん。そうだと思う」

「……………へ？」

イリヤはビックリしながら振り返り、ご機嫌なアサシンが弁当を食べながら熱燗を飲んでいられる山門の方を見てみるが、三月から離れすぎないようにすぐに彼女の後を追う。

「その、良いの？ 襲ってこないのかしら？」

「ん？ 何で？」

「だって最後のサーヴァントはアサシンの筈、なら——」

「——ああ、大丈夫だと思う。彼は義理堅いらしいから。（セイバーから聞いた兄さん曰くだけど）」

そして三月とイリヤは柳洞寺の裏手にある墓地へとやって来た。イリヤは目の前に在る墓石に刻まれた文字を見たまま動かず、三月はただ彼女を見守る。

ここは何年も前から何度も三月が墓参りに来たところある墓石の前だった。

『衛宮家之墓』

イリヤはただ真っ直ぐ、無表情に墓石を見ていた。時が止まったかのように動かず、世界から彼女だけが切り取られた光景がそこにあった。

数秒か数分、あるいは数時間にも感じられるような、周りの音は何もなく、ただただ静かな時間だけが過ぎていった。

「……………お墓を綺麗にして、お供え物をするわね」

三月は未だに微動だにしないイリヤの横を通り、布を出して墓石を拭き、買ってきたお供え物を置く。

缶コーヒーに菓子パン、そして野菜ジュースとタバコだった。

タバコは藤村組経由で切嗣が吸っていた物を昔から取り寄せていた物の一つで、先程アサシンに渡した熱燭もお供え物と称して昔から良く行っている酒屋さんで買ったものだった。

ライターの炎でお線香に火を付け、タバコの一本にも火を点けた後、手でお線香から炎を消し、タバコと共に供える三月はイリヤの方を見るが、一向に動いていなく、視線も未だに墓石を見つめていた。

三月がイリヤの隣で手を合わすと、ここで初めてイリヤが動き、三月同様手を合わせた。三月が目を閉じると風が優しく過ぎ去って、お線香の匂いと共に切嗣が吸っていたタバコの匂いも来て、三月は一瞬懐かしい気持ちになり、これはイリヤも同じだったらしい。

「……………グスツ……………スン……………」

三月は隣から来るすすりながら泣くイリヤに声をかけた。

「……………私的には、おじさんはイリヤとやつと会えて嬉しがついていると思うよ？ イリヤの考えも声に出してみたらどうかな？」

「……………キリ……………ツグ……………」

そこからイリヤはポツリポツリと切嗣への、生前にかけてかかった言葉を言い、最後はダムが崩壊したような勢いで涙を流しながら嘆いていた。

『キリツグの嘘つき』。

『どうして自分に会う前に死んじやったの』。

『また会いたかったよキリツグ』。

『キリツグが嘘つきでも良いからもう一度会いたい』。

『もう一度一緒に雪ダルマを作りたい』。

『もう一度一緒に笑いたい』。

『もう一度一緒に雪の中を散歩したい』

等を延々と震える声で次々と言い、最後に――

『我儘な子でごめんなさい、パパ』

——と言った後、イリヤはただ泣いた。

気が付けば何時の間にか三月の目からも涙が流れていて、これに三月自身も驚いた。何せ最後にこうなったのは切嗣の葬式以来だったのだから。

……

……

……

……

……

……

……

冬の曇り空の下、暫くの間涙を流すイリヤ達が泣き止んだのは辺りがこんがり赤がかかった夕焼けから黒のかかった赤の、夜になる寸前頃だった。

柳洞寺の山門へと戻る二人は手を繋いでいた。

イリヤが頼んだのだ、「せめて、階段を下りるまで手を繋いで欲しいと」。

山門を通りながら空になった弁当箱などをアサシンのいる場所から三月が回収する



と、イリヤが彼にペコリと頭を下げた事にアサシンは目を一瞬呆気に取られるが、優しく微笑んだ。

階段を下りる道も二人は一言も喋らず、ただ手を繋いで歩いていく。

「…ねえ」

「うん？」

「貴方は……………『何』？」

不意に中段辺りで足を止め、イリヤが三月に問いかける。

「えーと、『何』って…何？」

「……………」

イリヤはただ静かに三月を階段から見下ろし、ジツと三月の目を見ていた。

その間に三月は考える。

「(『何』、か……………)」

今日の昼、遠坂凛の話から推測すると自分が行使、会得できる魔術は規格外も良いところにある。

それに世の中には『人間』<sup>ヒト</sup>以外の種が存在する事も切嗣から聞いた事もある。

『吸血鬼』、『使徒』、『真祖』、『精霊』、その他。

そしてこれまでの出来事を考えると、恐らく自分はセイバーが言っていた『アインツ

ベルン』が造るような『人造人間』が一番当てはまると三月は思い始めていた。

ただ三月は「それがどうした？」と思い、今まで生きてきた。

何故ならもしそうだったとしても、土郎を頼まれた事に変わりは無い。

一度は死にかけた命、恩人に恩を返す為に使えればそれで良い。

ならば――

「――私は『衛宮三月』。それ以外なんでも無いわ」

三月はイリヤの目を真つ直ぐ見返しながらそう答え、数秒後にイリヤは溜息を出す。

「そう、ならいいわ。でも、ちよつと悔しいかな」

「え？ 何が？」

「だって貴方、私の魔眼に対して無防備と思わせるよう感じがするのに、何のリアクシヨ  
ンも無いんだもの」

「え？ ちよ、『魔眼』つて――」

「――私のは耐性のない者を注視するだけで拘束可能な、簡単な奴よ」

「そ、そうなんだ。（ホ、何か『右手から竜が出てくる』な奴じゃないのか）」

「さ、セラ達が待っているわ」

イリヤは階段を下り、三月を通ると――

「（ありがとう）」

——とイリヤの声がしたような気が三月にはした。

その後ケーキのクリームとチョコチップクッキーの後が頼つぺたに若干付いているセラ達とイリヤ達が合流して、分かれる前にイリヤが三月に伝言を頼む。

士郎や三月、セイバー達がアインツベルン城に来たいのであれば、客人として何時でも迎えると。

「えと、遠坂さんは？」

「どっちでも良いわ、でも条件はアナタかシロウが必ずいる事よ」

「ええ、伝えるわ。何か欲しいものでもある？」

「リズはケーキーホール、セラはクツキー」 ↑棒読み

「ちよ、リーゼリット?!」

「あ、じゃあ私もケーキー！」

「お嬢様まで……………」

「分かった」

「貴方も貴女で、そんな簡単に了承しないで下さいよ……………」

三月は運転をするイリヤを見送り、手を振る。

「(おお、あれは慣性ドリフト！ すごーい)」

そう思い、夜になってきた道を歩く。

「ううううう！ さつぷ！ それに何か頭痛と吐き気もする……風邪かな？」

そう独り言を言いながら手袋をして急いで帰る事にした三月はある男と会う。

「あ！ 葛木先生、お疲れ様です！」

「三月か」

葛木宗一郎、穂群原学園の教師で遠坂凜のクラスの担任でもある彼は何かと藤村大河と三月に縁があつた男。

縁と言つても、大河が何かと彼に助けを求めたり一緒に居ようとする。

そして三月とは意外と彼が頼みごとをする時も多く、昼休みのごはん中の三月に声を掛けられる例外の一人だった。

彼は口数が少ないが必要な事は言う性格な為、三月も彼と持っている『ビジネス関係』を割と気に入っていた。

「こんな時間遅くにどうした？」

「あ、お墓参りに少し」

「そうか。この頃は物騒だ、早く帰ると良い」

「は～い」

三月と葛木宗一郎が別れて、夜道をそれぞれ歩く。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

その夜、三月は夢を見た。

そこはどこかの荒原で、彼女一人が大きな道の交差点を一人でポツンと立っていた。

周りは静かで、風も無く、人が住んでいたと言う痕跡も見当たらない、色も無い灰色

の世界。

その中で立っている三月は不思議と寂しくは思わなかった。

あったのはたった一つの思いだけ。

「ああ、またか」

と、なんともドライな感じがした。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

次の日の朝、三月は学園の屋上でまたお昼ご飯を食べていた。

「お、おい衛宮。み、三月はいつもあの位の量を食べているのか？」

「あれ？ 慎二に言わなかったっけ？ 昔から三月は大食いだぞ？」

「あー、私の反応を思い出すわー」

そして今度は慎二が加わっていた。

事は慎二がライダーのマスターだと先日士郎が言ってから始まった。

これに対して遠坂凜が律義に礼を言いたいの事で士郎が三月に頼んだのだ、「慎二を屋上まで誘って欲しい」と。

そして士郎は三月に「慎二を誘ってくれ」と頼んだ。

「え？ 何で私が？」

「その方が慎二本人、喜んで来るからだよ」



「まあまあ、私の弁当分けてあげるからさ」

「ああ、やはり良い——じゃなくて貢げる事に感謝しろよ！」

「あ、だから今日は四段弁当箱だったんだな三月？」

慎二は三月から弁当箱の一段を取り、食べ始めると土郎は周りを見て何故か隠れている凛に声をかける。

「おい遠坂！ 何端っこで隠れているんだよ！ 慎二来たぞー」

「ブウグオアアアアアアアアアアにいいいいいいいい?!」

突然食べている物を嘔き出しそうになる慎二は無理をして耐えているのか、変な叫び声がかかる。

そして不機嫌そうな凛が不機嫌な慎二の前に出る。

「な、何で遠坂が?! ……あ!」

そして慎二は何か気付いたのか三月の方を（正確には三段弁当箱を）チラツと見てニタニタと笑う。

「成程ね、あの遠坂も三月に弁当を分けて貰っているのか。流石経済難の遠坂家

—— 違うからハッキリ言うわ。 気味が悪い『間桐』に言われたくないわ」

「何だと！」



「何よー！」

立ち上がる慎二に凜が迫って――

「二人とも食べないの？ モグモグモグモグ」

のほほんとした声で三月が凜と慎二に話しかけると二人は渋々とは座り、食べ始める。

丁度凜、士郎、三月、慎二の並びで皆それぞれの弁当を食べ始め、慎二が士郎と凜が自分の弁当を持って来ている事に気付く。

「??? お前ら、三月から弁当箱貰わないのか？」

「？ 三月は何時もあの位は食べているぞ？」

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ」

そして以上の状況へと至る。

丁度三月が一段目を食べ終えて、二段目の半分まで食べたところだ。

「お、おい衛宮。 み、三月はいつもあの位の量食べているのか？」

「あれ？ 慎二に言わなかったっけ？ 昔から三月は大食いだぞ？」

「あー、私の反応を思い出すわー」

「ハグハグハグハグハグハグハグハグハグハグハグハグハグ」

静かに弁当を食べる三人＋食物を口に掻き込める約一名。

「……………で？ 遠坂は何でここにいるのさ？ もしかして僕と共闘する気になったのかい？」

「誰が——?!」

「——ああ、何か遠坂がお礼したいんだって」

「はえ？」

「もつきゆもつきゆもつきゆもつきゆもつきゆ」

慎二は土郎の言葉で呆気に取られ変な声を出し、凜は気まずそうに視線を逸らし、三月は未だに弁当を食べる。

そして土郎が慎二に確認を取り始める。

この頃ライダーと共に夜の街で犯罪者の人達を討伐していないかと。

これを聞くと慎二は得意げそうに髪を弄りながら肯定する。

「(何でこつち見てんのかな、ワカメ。今三段目食べて——まさか一段だけじゃ足りなかったとか?!)」

肯定する慎二に土郎が言う、「そのおかげで遠坂は柳洞寺にいるキャスターを突き止めて、妨害に出ている」と。

そして慎二の行っている事がソレの助けになっていた事も。

「へー、あの遠坂が僕にお礼をねー」

ニタニタとした笑いの上にネツチャリとした視線が凜を襲い、彼女は自分の身体を抱きしめながら土郎の後ろに隠れる。

「な、何よ！ 御三家の、遠坂の当主として当然の事よ！」

「んんんんんん？ その『礼』がまだなんだけどね〜」

「うッ」

凜が目を逸らす、慎二の笑いがさらにデカくなる。

が、ここで三月の三段目を食べ終わったところで菓子パンを食べ始める事に慎二は驚愕した。

さらにチャイムが鳴ったのに微動だにしない三人にも。

慎二は教室に戻るため、立ち上がるとここで三月が慎二の制服を引っ張り、彼が座っていた場所に手をパタパタとして、慎二は座りなおした。

「って、まだ食べるのかよお前は?! そもそもその量はどこに消えているんだ?! 質量保存の法則に喧嘩を売ってんのか?!」

「えー? だってお腹空いているんだもん。 あ、もしかして欲しかった? ワカメ入りご飯パンあるけど?」

「あ、じゃあ貰っておこうか」

そして上機嫌になる慎二を見た凜がコソコソと土郎に話す。



そこに居る皆に提案をする。

キャスターとアサシンの打倒を。

冬木市の管理者としてキャスターの行為とルール違反は見過ごせないと。

「お、おい遠坂」

「何よ慎二？ まさか文句がある訳ないでしょうね」

更に苛ついた声で凜が返事をする。慎二は三月の方を一瞬見て、凜は理解する。

「ああ、その子なら大丈夫よ。下手したら私までは及ばないけど、かなり良い線行くわ

よ？ 何処かの誰かさんよりわね」

「なッ?!」

慎二がビツクリしながら幸せそうに五つ目の菓子パンのチョコチップメロンパンを食べている三月を見る。

「ま、それはあくまで魔術師としての話ね。サーヴァントがドンパチするところに本

格的に関わったら一溜りも無いわ」

「……………」

「だから提案しているの。キャスターとアサシンを打倒するまでは一時休戦を」

「遠坂、バーサーカーは後回しで良いのか？」

「そうね、バーサーカーは脅威だけどキャスターと違ってちゃんと聖杯戦争のルールは

従っているわ」

「僕としては先にバーサーカーを——」

「——ダメだ」

ここで今まで黙っていた土郎が強くキャスターを後回しにするのに強く拒否したのに凜と慎二、そして三月は驚きに目を見開く。

「二衛宮君？／衛宮？／土郎？」

「アイツは……キャスターは冬木の町中から生気を吸っている。今はまだ犠牲者は出ていない。けど、何時かは出てしまう。なら、早くて手を打った方が良い」

「衛宮……お前……」

「（兄さん……）」

「……ま、と言う訳でこの提案よ。別に争うなどは言わないけど——」

「——いや、僕も賛成しよう」

「二慎二？」

今度は凜と土郎がビックリした。何せさつきまでキャスター打倒にはあまり気乗りしていなかったように見えたからだ。

「生気を吸っていたのは知っていた。けどそれが遠坂の言うような規模なら……」

「（え？ 何でワカメはこつちをチラツと見たの？ このアンパンあげないわよ？）」

「どういう心境の変わり？ さっきまでバースカーを打つ気だったのに」

「何、少し興味があるだけさ。 キャスターと言う魔術師にね——ッ」

慎二が顔をしかめて、苛ついたような声を突然出す。

「あああ?! 何叫んでいるんだよライダー?!」

そして学園は突然、雲の影に入ったかのように辺りは暗くなる。

「な、何だこれは?!」

「慎二! 貴方、結界を発動したわね?!」

「慎二、お前…」

凜が怒りながら慎二に迫って彼の胸倉を掴み無理矢理立たせ、士郎は「信じられない」といった顔で彼を見る。

「し、知らない! ぼ、僕は知らない!」

何故凜と士郎が慎二を攻めているかと言うと先日、凜が士郎を襲った後日、二人は学校に結界の呪刻が設置されていたのを発見して、次々と消していたのを慎二に注意された。

一応「保険の為の結界」と称した慎二の事を凜は全く信用していなかったが、慎二は確かに範囲が巨大だったのを認めて規模を小さくすると言い、次の日から結界の呪刻が確かに「攻撃的」から「防衛戦」向けの規模に変わったのを確認した。

「ほ、本当なんだ！ あの日に僕はちゃんとライダーに変えさせたんだ！ こ、こんな――

――」  
そこでドサリとした音がし、三人が見ると三月が悪い顔色をしながら震え、歯をがちがちと音を鳴らしながら自分の体を抱きしめながら気を失っているのを見た。



## 第13話 怒れる拳、笑顔に当たらず

衛宮士郎、遠坂凜、間桐慎二 視点

地面に倒れた三月の身体を凜が起こし、診る。

「お、おい三月は大丈夫なのか遠坂?!」

「前から体は弱かったけど、ここまで酷いのは——」

「——正直あまり良くないわね。体が冷え切っているのに、脈が早い。それに、

魔力も……このままだとヤバイわ。慎二! この結果は貴方のモノじゃないのよね?!」

「そ、そうだ! これは学園全部覆っているが、僕のは本校舎だけの筈だ!」

「ならば、考えられるのは——ああ、もう! 先ずはこの子<sup>月</sup>ね! 衛宮君! この子を背負いながら魔力を常時発動、少しでも魔力をこの子に流すように! 慎二はライダーを呼んで!」

「わ、わかった!」

「よ、よし! ライダー、来——!」

「マスター、これは——？」

「——おわあああああ?!」

突然現れたライダーに慎二は尻餅をつきながら叫び、士郎が三月を背負いながら身構える。

「単刀直入に訊くわライダー、この結界は貴方の仕業？」

「……………」

「ラ、ライダー！ 答えてくれ！」

「違います」

「そう。でも見た所、結界の拠点が以前の呪刻の場所なのだけど？」

ライダーは慎二と士郎の方を一瞬向き、凜の問いに答える。

「…確かに以前設置した呪刻が発動しています。ですが、これは恐らく他の誰かが発動したモノかと」

「ハ、ハア?! ど、どう言う事だライダー?!」

「成程ね、じゃあこれはライダーの結界を利用した別の何かよ」

「ハイ、ですので私やマスターは弱体化の対象外となっているのもその所為でしょう」

「ハア…ハア…」

士郎の頭のすぐ横で浅く息をして弱っている三月を見ているかのように思えるライ

ダーの視線に士郎は身構えたまま睨む。

「お前の結界を利用していいのなら、お前に解除も可能な筈だろ?!」

「いいえ衛宮君、恐らくこれはキャスターの仕業。そして彼女ほどの魔術師がそんな穴を術式に空けたままにする訳が無いわ。でも利用しているから効果と解除条件は似ている筈よ。それを教えて、ライダー。でないとこのままじゃこの生徒全員いずれ死んでしまうわ」

「な?!」

「……………」

士郎と慎二は驚きの声を上げ、ライダーはただ黙っていた。

「どういう事だライダー！ お前に命じたのはそんな危険な——!」

「——待って慎二。これも私の推測だけどこの結界は本来のモノより強化されていると思うわ」

「いいから解除条件を言ってくれ！ このままじゃ三月が危ない!」

士郎が痺れを切らしたのか苛立ちから話を遮る。

「……………元となった結界の名は『ブラッドフォート・アンドロメダ他者封印・鮮血神殿』。内部の人間と地形を溶解し——」

「——」

「な?! ライダー、おま——!」

「——魔力として使用者に還元する結界を張る対軍宝具。ですがこれは宝具では無いので恐らくは内部の人間を魔力に変換しているだけみたいですね」

「じゃあ早い話が『巨大生物の胃の中』ってところね。で、核となる呪刻は？」

「……………」

「そ、それは位置が動いていなければ一階の化学教室の筈だ！」

「おい、遠坂！ 三月はどうなんだ?! さっきから魔力を流しているが何も変わらないぞー！」

「やっぱり衛宮君じゃ……………でも私の両手が塞がって……………」

「えええい！ 令呪を以って命ずる！ 『セイバー、来い！』」

「え?!」

「な?! 衛宮?!」

士郎のそばに光が輝き、甲冑姿のセイバーが現れ、士郎は掻い摘んでセイバーに結界の事を説明し、ライダーと慎二は今敵ではない事を宣言した。

「シロウが、そう言うのなら……………」

「驚いた、今度は躊躇無しで令呪を衛宮君が使うなんて……………」

「当たり前だ、こんな局面で出し惜しみなんてしてられるか。三月もだがここには桜も、

藤姉達もいるんだ！（それに、正義の味方なら尚更だ！）」

「ッ。ライダー、聞いた通りだ。セイバーと一緒に一階の化学教室で結界を解除するぞ」

「分かりました」

「遠坂、それでいいか？」

「うえ？ え、ええ」

何時も以上に切羽詰まった状況の中で延々と行動を起こす士郎に凜が驚く。

「しつかりしてくれ遠坂！ ガンドで雑魚を蹴散らして、デカイ奴らはセイバー達に任せよう！ 慎二、俺のそばにいてくれ」

「衛宮のくせに僕に指図するな！」

「いざとなったら三月を頼む、慎二」

「……………ハ！ 頼まれてやるよ！ おら、行くぞ凡骨共！ 僕に続け！」

「貴方こそ私に指図するな、このワカメ！」

「ワカメって言うな！」

そして四人十二騎のサーヴァントは校内の通路を塞ぐ竜牙兵を蹴散らして行った。

行ったが――

「数が多すぎるわよ、まったく！」

――一体壊せば二体がその穴を埋めるかのように、文字通りウジャウジャと、次

から次へと竜牙兵が前後から迫る。

殿を務めるライダーを凜が援護し、セイバーは大振りな剣さばきで前を投げ払い、打ち漏らしを士郎が片手で強化した棒で粉碎していた。

さつきからこの状態が続き、凜が苛つき始め――

「――もうあつたま来た！ 慎二！ 私が道を開けるからその隙にライダーと一緒にこの結界を壊して！」

「な、僕に指図――！」

「慎二！ ライダークラスは機動力に長けているんだろ?! 頼む！ ここは俺と遠坂が暴れまくる！ お前しか出来ないんだ！」

「え、えみ――」

返事を待たずに、凜は宝石を何個か投擲して手榴弾のような爆発が起きる。

「――マスター、行きますよ！」

「おわああああああ！ ラ、ライダー~~~~~！」

何時になく気合の入っているライダーが慎二を（物理的に）引きずりながら通路を駆け抜ける。

「（頼むぞ、慎二！）」

「（まさかあのワカメの為に宝石を使う羽目になるなんて！ 金庫の中身が……いや、

今はここを切り抜けないと!」

間桐慎二、ライダー 視点

「ふひゃあああああああ?!」

「……………(まったたく、何故私が)」

勿論慎二は慎二で、まるでF1レーサーの車体に首の根っこから体を後方に引つ張られている感覚に恐怖から叫んでいたのは誰もが理解できよう。

ただその素っ頓狂な声を上げる慎二に対してライダーは内心苛ついていた(自分の所為だとは微塵も思っていない)。

そのまま(乱暴に)慎二を引きずったまま、一階の化学教室の扉を(ライダーが投げた慎二が)体当たりで壊し、中へと突入する。

「あら、意外ねライダー」

そこには愉快そうなキャスターの姿がいて、ライダー達へと振り返った。

「キャ、キャ、キャスター本体だと?!」

体を起き上げた慎二がキャスターを見ると後ずさる。

「ちようど良いわ、戦うのはやめなにかしら？ 貴方、魔術師になりたいのでしょうか？」

私は貴方の魔術回路を『起こせる』事が出来るわ」

「戯言を——」

「——『待て』、ライダー！」

「ッ」

腰を低くしたライダーを慎二が制し、ライダーの動きが急に止まる。

「どういう事だ、キャスター？」

「ふふ、賢明ね。 貴方は魔術の家系で、『魔術回路は完全に失われている』と言われて

いた症状よ」

「症状……だと？ 何が言いたい！」

「貴方の魔術回路は眠っているだけの事。 古来の時代ではこれを『魔路昏睡』と呼んで

いたわ。 要するにその者の回路が生まれつき閉じたまま、自己の意志やちよつとの

刺激では起きる事は無い。 だけど私なら治療出来る。 どうかしら？」

「……………何が条件だ？」

「簡単な事よ、ただそこで見ていければ良いだけよ」

「……………」



衛宮士郎、遠坂凜 視点

「まだか、慎二！」

「衛宮君、やっぱり慎二は——！」

「——いや、後もう少し粘れば——！」

ライダーが抜けた事で士郎、凜、セイバーは苦戦していた。

本来ならこのメンツで乗り越えられるような局面。

だが本来と違い、衛宮士郎は自ら前線で活動できず、背中の子を守りながら消極的に戦っている。

本来と違い、遠坂凜は先程慎二達に道を開ける為に宝石たちをいつもより使い、魔力もいつも以上に消費していた。

そして本来と違い、セイバーはこの三人を守る為に前後を歩き来していた。

「——シロウ！ やはり先程からライダーは動いていません！ 彼らは————！」

「——言うな、セイバー！」

怒りの籠った声で士郎がセイバーを黙らせる。

「で、でも衛宮君——！」

「アイツは、慎二は捻くれた奴だけどやる時はやる奴だ！」

「ウ……………お……………にい……………ちゃ……………」

「どりゃあああ！（早くしてくれ、慎二！）」

士郎自身焦りながら来る敵を粉碎していく。

間桐慎二、ライダー 視点

「アツハツハツハツハツハ！ 傑作よ、これは！ あの坊や、私の『提案』を受けなかっただけにこんな事になっているなんて思ってもいないでしょうね！」

キャスターが『遠見』を施した床の水溜まり経由で士郎達の事を見聞きしていた。

それは彼女の後ろで壁に背中を預けている慎二と、そばで立っているライダーも同じだった。

「へー？ 衛宮にも声をかけていたのか？」

「ええ、セイバーと令呪を私に寄越せと言ったのよ。でも今更そんな物、どうでも良いわ」

「ん？ どういう事だ？」

「だって、そんな物よりもっと価値のあるモノが見つかったんですもの」

「……………それがこの結界か？ よっと——」

慎二は近くの冷蔵庫の中から缶を数本取り出すと、数本が床に落ちて中身が零れると慎二は舌打ちをする。

「チツ、勿体ない事をした……………一つどうだい？」

そう言いながら慎二は一つの缶を開けて、飲み始める。

「ツプハー！ 炭酸飲料、最高だな！」

「遠慮しておくわ。後もう少しで終わるし、貴方の『魔路昏睡』の治療準備も出来るわ」

「へー、もしかしてこの結界で得た魔力を使うのかい？」

「あら、意外と鋭いわね」

「伊達に魔導書など漁っていなかったさ。となると、この結界で得た魔力量は凄いな

だろうね」

「ええ、今は柳洞寺なんて目じゃない程ね」

「そうかい……………とここでさー、僕、思っていたんだよねー。この結界、いつまで

張っているのかな？」

「そうね、少なくともあの坊やと小娘が干からびるまでになるわね」

「へー……………それにさー、僕って魔術師じゃないんだよね」

慎二の言葉に違和感を持ち、キャスターは彼を横目で見る。

「何を今更——」

「——だからさー、さつきも言った様に本を漁っていたんだよねー」

ニタニタとした笑みを浮かべる慎二にキャスターは憎悪がぐつぐつと煮え始めるのを無理矢理心の奥に押し込めた。

あの男と同じ顔だった。

かつてのアルゴー号の船長が悪巧みをする時のような——

「——面白いよねー、『鍊金術』ってさー」

「だから何を——ツ?!」

そこでキャスターは気付く。

床に広がる液体とその匂いに覚えが——

「——やれ、ライダー」

ライダーは素早く短剣を投げ、床の液体に飛び散った火花が合図になったように、液体全体が着火し、すぐさまキャスターへと燃え移る。



神代で『水さえあれば燃え続ける火』などのような芸当は子供騙し止まり。水さえ無くせば終わってしまうのだから。

では魔力そのものを燃やせばどうだろうか？ 神代は魔力と神秘に溢れていた時代、余程の事情でなければ誰もが魔力に満ちていて、『裏』の『ギリシャの火』はこの事実を逆手に取っていた。

「ハハハ！ どうだいキャスター?! 『魔女狩り』に会っている気分は?!」

「グアアアアア！ ナ、ゼ——」

「『何故』？ なくに、簡単な事さ——」

—— 貴様は僕を怒らせた」

ヘラヘラと笑っていた慎二が静かな怒りを持つ者の形相へと変わり、キャスターを見る。

「お前は僕の大切なモノ達を亡き者にしようとした。それは万死に値する。こんな僕を信じ切る、馬鹿たちをな——」

「マスター!」

ライダーが急に慎二を掴んで投げると、何者かの打撃で彼女の肋骨がメキメキとヒビが入る音を立てて、身が慎二近くに投げ出される。

シユバー!!!とすると音が聞こえ、辺り一面が白い粉状のモノで満たされる。

消火器の消火剤、炭酸水素ナトリウムが場の空気を一時的に吸い取り、火が収まってい  
いく。

「ラ、ライダー?! ケホツケホ!」

「無事か、キャスター」

「も、申し訳ありません」

慎二は咳をしながら男の声とキャスターの声が聞こえる方向を見る。

「引くぞ」

「ですが」

「気は逃した、引くぞ」

そこで慎二が見たのは転移魔術で消えて行くキャスターと

——教師である、葛木宗一郎の姿だった。

## 衛宮士郎、三月 視点

あの後キャスターが姿を消したあと、結界は崩壊し、救急車や警察達が生徒に殺到して来て、衰弱していた生徒や教師達の治療と事情聴取を始めていた。

「スウー……………スウー……………スウー……………」

場所は校舎近くの森の中に移り、背中で静かに寝息をしている三月を見ていた士郎は慎二の話に戻った。

キャスターのマスターは自分が何とかすると。

勿論、士郎と凛は反対した。そしてもしキャスターのマスターを知っているのなら教えてくれと。

だが慎二は断った。

かつてないほどの怒りを露にしながら「僕にやらせるよ」と言った彼に、あの士郎でさえ狼狽えるほどに。

そして凛は士郎を褒める、「よくあんな状況で頭が回るわね」と。「自分だったら倒れている生徒達とかで頭が回らなかった」と。



「ああ。俺、死体を見るのは慣れてるからさ」

士郎のこの一言で凜、慎二、セイバーはビックリする。何故なら士郎の表情がまるで何でもない、当然な事を言う感じで顔色一つ変えていなかったのだ。

これにはどう声を掛ければ良いのか分からなかった凜と慎二達と別れ、士郎は三月を何時かのように背中を負ぶって衛宮邸へとセイバーと共に帰った。

帰り道すがら、セイバーは未だに士郎に迫っていた。

「やはり自分がシロウの部屋で寝た方が良い、今の部屋ではシロウが危ない」

「なんでさ?! 駄目だ! (危ないけど、そっちの意味で俺が危ない!)」

結局は士郎の隣の部屋に落ち着いた(と言うか士郎が無理矢理落ち着かせた)。

その夜、士郎はやはり意識して眠れなかったが。

## 第14話 一場の春夢（前編）

士郎、三月 視点

そしてその次の日の朝、いち早く昨日の夜に退院した大河は士郎とセイバー、そして同じく早く退院した桜に愚痴を零していた。「自分も患者の筈なのに『健康体の模範そのものですから献血してみに行ったらどうですか?』ってどういう事よ?!」と。

昨日の出来事があったというもの、学校は閉鎖されずに次の日には普通に開いていたので、皆学校へは登校する準備をしてから朝御飯を食べている最中に大河は愚痴をした。いた。

それに苦笑いを浮かべる士郎は大河の隣にいた三月を見る。

昨日病院で見て貰ったら?と提案したところ、三月は頑なに断り「家でお腹一杯にご飯を食べてグツスリ寝たらきつと治る」と言い、今に至る。

確かに顔色は多少良くなったものの、何処か元気が無いように見えた。

それは大河と桜も気付いた様子で、いつも以上に彼女に気を使っていて、ワザと元氣

に二人は振舞っていた。

三月はと言うと――

「……………（ア、ア、ア、ア、だーるーいー。ねーむーたーいー。頭もボくつとするー。変な夢もまた見るし最悪。休みたーい）」

――と寝ぼけながら考えていた。

今回の夢は誰もいない廃墟を延々と歩生きながら「（またか）」と考えていた物だった。そして昨日寝る時に髪の毛を三つ網ポニーテールにしたまま寝ていたので、今日の朝解いたら立派な金髪ウェーブにあら不思議。

「……………ハァー…（あゝ、もうこのままでいいやゝ）」

そう鏡の前で思いながら髪型を軽く整えて、三月は土郎達と共に登校すると視線を集めていた。

何せ三月は基本的にストレートをベースにしたヘアスタイルを今まで衛宮邸の外ではほとんどしていた。

だが今日はいつもと違う儂げな表情（疲れ気味＋憂鬱な気持ち）と落ち着き（体のダルさ）のおかげで『お嬢様』っぽい雰囲気が増していた。

ただここで遠坂凛がお構いなしに二人に話があると言い、校舎裏の方へと引つ張り、『柳洞一成』がキャスターのマスターとして怪しいと言い、そこで土郎が言いだした。

「——なら俺達が確かめてやるよ」

「え、？（俺達って、私も入っているの？ 昼休みが……）」

三月はその日珍しく昼休み中、仮眠を取ろうか考えていた。余談で年に一度あるかないかの頻度だが、その寝顔は貴重で学園の『裏マーケット』ではその写真は高く売れるのだそうだ。

「なあ、三月？」

「……………あー。ウン。ハイ、ソウデスネー。（さようなら、私の昼休み……ハア）」

「で、どうやって確かめるのよ？ 衛宮君の事だから、『おーい、一成。おまえマスターか？』なんてストレートに問い質す訳じゃないでしょうね？」

「安心しろ遠坂、そんな事しなくてもマスターかどうか確かめる方法ならある！」

「……………ま、いいわ。衛宮君なら嘘を付かないでしょうし。と言うか付けないし」と言う訳で三月、今日の昼は生徒会室で——」

「——あー。ウン。ハイ、ソウデスネー」

そしてその日、三月は何時もと違う雰囲気と言動で注目される中、土郎は「妹を紹介してくれ！」と迫る男子&女子生徒に隙あらば殺到してきて絡まれた。

先日の「兄さん」宣言とその日の登校した様子の効果である。

これまでも「妹を紹介してくれ！」と士郎に迫った人たちはいたが、今回は何時もより大勢の上にほぼ全員の目が（何故か）血走っていたので純粹に士郎は引いた。

「なんでさ?!」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そしてその昼休み、三月は生徒会室にある二つのドアの内の一つの前に立っていた。

『柳洞一成』。穂群原学園の生徒会長であり、柳洞寺の住職を代々務めている柳洞家の次男で、寺育ちらしい独特の口調を使い容姿端麗、頭脳明晰とくる実直で真面目な好青年だが堅物で遊びのない性格。

ただ筋さえ通れば融通が利くところもある人物で、猫を被っていた凜の本質を見抜くなど、鋭い洞察力の持ち主でもある。

三月との接点があるとすれば、それは同じく柳洞寺に住んでいる葛木先生と顔をよく

合わせ、葛木先生の頼み事を聞く時などだった。

ただ直接言葉を交わした事は少ないので、三月からすれば『……………ああ！生徒会のメガネ！』程度の認識であつた。

もしこれを一成本人が聞けば外見と中身同時に落ち込むだろう。

何せ彼自らが苦手なものは「女性」と挙げているが、これは女性特有の強かさやねちっこさ、小悪魔な部分を忌諱しているためであり、さっぱりした性格の持ち主に対しては特に悪印象は抱いていないし、場合によつて好意に思える事もある。

そしては三月その例外に当てはまっていた。

色々な人に対して言葉や行動を若干変える三月だが、以上の『女性の強かさやねちっこさ、小悪魔な部分』と言う『裏』などの部分が三月からは感じ取れなかつたので、一成は意外と普通に接する事が出来た。

それこそ『顔見知り以上、友達未満』と言つた具合に、と一成は思っている。

そんな彼女が用事もないのに土郎と一緒に生徒会室に来た為、一成は内心ビツクリしたが、三月は四段弁当箱のおかずを分けに来たという事で彼の期待は滝登り具合だった。

何しろ士郎の料理は旨いものだから（三月の手作りとはまだ知らされていない）。

後はいつもと違う三月の髪型に何か感じたからかも知れない。

カチリ。

「??」

ただ何故か三月は二つの出入り口の内、一成に一番近い一つに鍵をかけ、そこを封鎖するかのよう立っていた。

そして士郎はもう一つのドアに鍵をかけた。

「……………衛宮?」

「…（あー、早く終わらないかなー。兄さん曰く『ただもう一つのドアに鍵をかけて立っていれば後は俺がやる』って言っていたけど……………」

「一成……………何も聞かずに裸になれ」

三月の目は見開き、今日で一番頭が覚醒した。驚きで。

「……………へ?」

一成はと言うと――

「――な なんですとー?! 正気か、貴様! あ、あれか?! 新手の押し問答か?!

そもさんなのかッ――?!?!」

――身の危険を感じ、三月の方をチラッと見る。

そして彼女も心底ビククリしている顔に一成は更に焦っていた。

「そ、それに貴様!ここ、ここ、ここには女子がいるのだぞ?!」

「そう、せつばせつば。てか三月は俺が呼んだ」

「んなつ?! き、貴様よもやその様な趣味があつたとは?!」

「あ? ああ、大丈夫だ一成。三月は義妹だ」

「尚更悪いわ、戯け! ま、まさか! こ、これは義妹の趣味ではあるまいな!」

「へ?! (え? 何? どういう事? てかお兄ちゃん、何を——?)」

「——そんな事はどうでもいいから脱げ、一成!」

「ひやああああああ?! お、おとおおとおおお兄ちゃん?!」

士郎が一成に迫り、飛び掛かった瞬間、三月は顔を両手で覆う。

指の隙間から事を見ながら。

「やめぬか、戯け! 貴様それでも武家の息子かあああ?!」

「良いから脱げつて!」

「……………(ふわあ、柳洞さんの身体つて……………男の人つて

鍛えると、ああいう風になるんだー)」

ポーっとしながら一瞬、その場に見惚れた三月だった。

デュフフ。まさかこのような場面に出くわすとは! しかも兄者が『攻め』で学友



が『受け』——

「（————良く分からないけどヤな予感がするので『腐女子』は再度『封印』ツツツツツツ!!!）」

そして他人から見れば士郎が文字通り、一成に追いはぎ行為を行っているかのような状況が過ぎていった。

最後に上半身と下半身と共に身に纏う物が無くなった一成はただ赤くなり、床に座りながら自身の身体を出来るだけ隠す。

「良かった、良かった！ いや、本当に良かった！」

上機嫌な士郎がホッとした顔で満面の笑みで笑う。

「何が良いものか！ こ、こんな辱めを受けて何もないとはどういう事だ?!」

そしてブチギレ寸前の一成が叫ぶ。

「あ、ああそうだな。三月、弁当渡してくれるか？」

「いらんわ、この馬鹿者！ 大体——」

一成が三月の方を見ると、彼女は顔を両手で覆っていて、耳まで赤くなっていて、ドアを向きながら俯いていた。

「……………」

「み、三月？」

「……………お、終わった二人共？」

「ああ、終わったぞ。だから弁当を一成に渡してくれ」

「あ、うん。ど、どうぞ…柳洞さん…」

三月が顔から手を離し、弁当箱の一段をいそいそと服を着直す一成に渡す。

彼女の顔は『心ここに在らず』と言った感じと共に視線を合わせず、茹蛸みたいに真っ赤になっていて、この状態の三月を見た一成も顔を更に赤くしながら視線を逸らし、弁当箱を受け取る。

「あ、ああ。か、かたじけない」

「いや、わりい三月」

「衛宮。悪い事をしたと思うのなら、一体どういう事なのか俺に理由を説明してもらおうか?!」

「いや、詳しくは言えないがどうくしても調べたい事があったんだ」

「それで裸にされたのか俺は?!」

「ご、ごめんなさい柳洞さん！」

「三月？」

「じ、実は昨日のガス事件の影響で変な痣が浮き出た人達もいるみたいで、それで兄さんは心配していたんです！お寺の人なので尚更……………その……………ごめんなさい」

「いー」

そこで三月は頭を一成に深く下げた。

「……………いい、いや頭を上げてくれ。もしそうならそうと前もって説明さえしてくれれば良かったものを」

「その……………兄さんは昔からたまに暴走するのを柳洞さんならご存じだと思いますが」

「おい、お r———ッ」

反論しようとした士郎に「ギッ！」とした睨みで三月が黙らせる。

「まあ、確かに衛宮は時々その節があるからな……………」

「ごめんなさい柳洞さん、後もう一つ聞いてもいいでしょうか？ 今日葛木先生を見なかったのですけど……………もしかして昨日の影響でしょうか？」

「ああ、そう言えば三月は宗一郎兄とは顔を何度か合わせていたな」

「ん？ どういう事だ三月？ 何で葛木先生の事を一成に訪ねているんだ？」

「あれ？ 衛宮には話していなかったか？ 数年前から宗一郎兄とは柳洞寺で一緒に住んでいるぞっ」

「な?! それ本当か、一成?!」

「あ、ああ。あと、三月の質問だが昨日とは別件で、柳洞寺にてお世話になっている宗一郎兄の婚約者が料理中、火傷を負ったらしくてな。看病を…って、どうした衛宮？」



その帰り道、三月は覚醒したままの頭で士郎に伝える。

イリヤの伝言を。

「ハア?! お、お前もイリヤと会っていたのか?!」

『も』って、士郎も会っていたの?」

「あ、ああ。 何度か、な。 そこで森の中にあるアインツベルン城も前に『見せて』貰ったんだ」

「へー、お城かー。 何か楽しそうだな。 それはそうとイリヤが私達二人が『来ても良い』って言っていたから——」

「——ん? 遠坂?」

士郎の視線を辿ると凜が先の道で物陰から誰かを尾行していたのが見えた。

士郎達は凜のそばまで来ると声をかける。

「お、い、とおs——」

「——黙って!」

小声かつキツイ言い方で凜は士郎と三月を歩道から物陰の中へと引つ張る。

「ん?」

凜が尾行していたと思われる金髪青年が振り返り、これを見た凜は士郎達を更に物陰の奥へと押す。

「ちよ、遠坂さ——ムギユツ」

「少し黙ってて」

丁度ビルの壁、士郎、三月、凜の順で物陰に隠れる三人に気付かなかつたように金髪青年は歩みを再開する。

「ど、どうしたんだ遠坂？ あの金髪が気になるのか？」

「あの人、この頃ずっと間桐邸を彷徨っているの」

「もがもがもがもがもが」

「ずつとつて——？」

「——ここほぼ毎日よ。ほら、移動するわよえみ——いいいいいい?! な、何

で衛宮君がここに?!」

「……………」

「何でつて、遠坂が見えたからさ。一成と、葛木先生の事で話があつたのにもう学校を

出たつて言うから」

「……………」

「え？ も、もう分かつたの?! つてあれ、三月は——？」

「そう言えばさつきから——」

士郎と凜が自分達の間を見ると二人の身体にギユウギユウ攻めに会い、顔が空気の無

さから紫色に変わりつつあった。

すぐ二人は離れると三月は大きく息を出して、新鮮な空気を吸う。

「———ブハア！ スーハースーハースー！ ……し、死ぬかと思つた……………」

「ご、ごめんなさいね三月」

「す、すまない。大丈夫か？」

「つ、漬物の気分だったよ」

「え？」

「重石とお味噌の間の野菜———」

「———あ」

「……ここで士郎と凛は何となく分かつた。士郎||固い重石、と凛||柔らかいモノ。

「ほ、ほら！ 行くわよ、二人とも！」

ズカズカと赤くなりながら先を歩いて行く凛に、何となく気になつた士郎と三月は付いて行き、三人は間桐邸の近くまで来ていた。

「てか金髪って珍しいな、三月以外で」

「うん、そうね」

「ふーん、そうなの？（先日会つたような気がするけど……………」

金髪青年は数分ほど間桐邸を見ると来た道に戻り、士郎達はまた隠れる。





「ッ！ そ、それってまさか?! 葛木先生が、キャスターのマスター?! でも、そんな事  
.....」

「ああ。だから遠坂、今夜は世話になってくれないか?」

「.....」  
「え?」

これを聞いた凜がキョトンとした数秒後に「信じられない」と言つた表情で顔を赤くしながら声を出した。

「え、え、え、え、衛宮君? そ、それって...」

「??」 俺は今夜、セイバー達と共に柳洞寺で弱っているキャスターとアサシンの襲撃を提案したつもりなんだが.....都合、悪かったか?」

「.....な、な、な、な、なくんだ! そ、そうだったの! も、もちろんそうなのよね  
く! オ、オホホホホ!」

不自然に笑う凜を?マークで見える士郎と三月たちは今夜の為にセイバーとアーチャーに話をつける為に各自の家に戻り、その夜柳洞寺の階段の前で合流する事となつた。

「(何で遠坂さん最後の方赤くなっていたんだらう?)」

着替えながらそう思う三月だった。

## キヤスター運営 視点

そう時間も過ぎていない夜が更けた円蔵山の柳洞寺にて、葛木宗一郎はキヤスターの帰りを待っていた。

前日、慎二に『ギリシヤの火』を付けられたキヤスターは傷を癒す為、貯めていた魔力を使い、補充と霊脈の確保の為に新都へと飛んでいた。

この頃遠坂凜と間桐慎二の二人の独自の行動でキヤスターの予定は狂いつつあった。本来なら目的を果たす為に新都までわざわざ出向かなくても良かったのだが最近の出来事などがキヤスターを焦らせていた。

『このままでは間に合わない』。

なのでリスクはあるものの、新都へすぐ向かい、霊脈の保持をしなければなくなったのでキヤスターは自信のマスターである葛木宗一郎に今日は学園に行かないように言

い、  
ありつたけの魔術防御や補助に結界などで柳洞寺を要塞化して、

寺にいる坊主達に暗示をかけて、『何があっても葛木宗一郎を守る』という生きた盾達

にした後、

キヤスターはアサシンに令呪を使い、『何人たりとも自分の許可なく誰も柳洞寺に入るな』、

とガチガチの防御を施した後、最後に葛木宗一郎にはキヤスターに異変がすぐ分かるような瓶を彼に渡した。

瓶の中身は特殊な魔術の籠った液体で、瓶が割れて床に液体が溜まるとキヤスターを強制的にそこへ転移させるという限りなく『魔法』に近い代物だった。

門番を務めているアサシンに良く言い聞かせた後、キヤスターは新都へ向かった。

『アサシン』。彼は日本において最も名の知れた剣士の一人の「佐々木小次郎」――

——ではない。彼は「佐々木小次郎」という英霊を形作る上で、「佐々木小次郎の伝承」に最も条件の当て嵌まる無名の剣士の亡霊が選ばれただけの事。

なのでセイバーと対峙した時、自分を「ただの無名」と語っていたのは本心からであった。

『サーヴァントによるサーヴァント召喚』が彼のような異例、否、特異な存在を可能としていた。

そして特異な存在である彼の願いは「強者との真剣勝負」。「我が秘剣、どこまで通じるか試さずして何が剣士と言えようか。」

ただそれだけだった。

ただそれだけであつたのに——

——カランとドライな音が夜に響く。

金属と石がぶつかる音。

アサシンが自身の得物の「物干し竿」長大な太刀を手放して落とす音。

「よもや……………蛇蝸磨羯だかつまかつの類とは……………」

ボタボタと設置された堆積岩の道に血が落ちる。

アサシンの口から流れ出る血だった。

アサシンは令呪の補助もあつた事により、いつもよりも気配などが敏感に察知でき、良くない何かが出来ていたのを警戒し刀を抜刀していた。

だが彼もまさか自分を媒体にサーヴァントを召喚するなどと言う行動を仕掛けてくるのは夢にも思っていなかった。

アサシンは膝をつき、彼の身体を中心に爆散すると中から血を浴びた黒いローブを纏い、特徴的な髑髏を模した白色の仮面を装着した人型のナニかが現れ、何処とも分からない所から老人の声が響く。

『クカカ、元気が良いのお』

どこか可笑しそうに笑っていたアサシンの無残な体が仰向けに地面に落ち、ゆっくりと闇の中へと消えて行く。

「ああ、何とも…短く、儂い夢であつた……………すまぬ、セイバー。再戦は……………果たせぬようだ……………だが……………最後に可憐な……………女性達と会つて……………」

良かつ………た………)

後に残ったのは先日、その可憐な女性の一人に貰った、懐に入れていた熱爛の徳利とっくりセツトだった。

【告。 『佐々木小次郎の幻影』を入手シマシタ】

## 第15話 一場の春夢（後編）

キャスター運営 視点

円蔵山の柳洞寺で、葛木宗一郎は何か気付いたかのように山門の方へと視線を素早く移す。

「宗一郎兄？」

一成が彼の動きに気付き、宗一郎はそこにいた一成と他の者達に部屋を出るなとくぎを刺してから出ていった。

場は変わり、魔力の温存をする為に空を舞いながら焦るキャスターへと変わる。

新都での細工を終えてから魔力を温存しつつ、最高速度で柳洞寺へと戻る途中だった。

さて、キャスターが施した柳洞寺の魔術的拠点防御のおさらいをここでしようと思

・・ありつたけの魔術防御や補助に結界などで柳洞寺を要塞化。  
 ・・寺にいる坊主達に暗示をかけて、『何があつても葛木宗一郎を守る』という生きた盾達に

・・キャスターはアサシンに令呪を使い、『何人たりとも自分の許可なく誰も柳洞寺に入れるな』

・・葛木宗一郎本人には液体の入った瓶が割れて床に液体が溜まるとキャスターを強制的にそこへ転移させる『魔法』に近い代物

以上の事を部外者から見ればマスターから一時的に隣町への遠出で離れるとは言え、オーバーキル気味かも知れない。

が、魔術師としてはこれ以上の無い即席の魔術的防御処置で、どれだけキャスターが優れた魔術師か見せていた。

キャスターがここまでする事には理由があり、その理由が「何とも魔術師らしくないものだ」と第三者の魔術師が嘆きながら卒倒していただろう。

何故ならキャスターは以上の処置を全て『愛』からしていたのだから。

『キャスター』。その正体、真名はギリシャ神話におけるコルキスの王女の「裏切りの魔女メデア」である。

元々は故郷のコルキスで家族と国民に愛され平和に暮らす箱入り王女であった。し



かしイアソン船長率いるアルゴ船一行の上陸により、女神アフロディテの呪いによってイアソンに妄信的な恋をさせられた幼きキャスターは追つ手を退けるために自らの肉親の弟を文字通りバラバラに殺害し、アルゴ船に乗り込む事となった。

その後もイアソンに言われるがままで、己の魔術で多くの非道を働き、英雄や人間達両方から「裏切りの魔女」として非難、中傷を受けていく。

しかもそこまでしてイアソン船長に尽くすものの、彼はメデイアを一度も労わることなく、最終的にイアソン船長に裏切られ、捨てられた。

呪いにより正気を失った状態で非道を働かされた末に、全てを失うことになったキャスターは真正正銘の『魔女』へと堕ち、その後はイアソン船長に復讐を誓ったが、その復讐は終ぞ叶わなかった。

ただ箱入り王女だったため、本来は清純な女性で根はきちんとした良識と道徳を持つ『お嬢様』。今回の聖杯戦争に召喚され、聖杯にかけたい願いは至極純粋な「自分の愛した故郷コルキスに帰ること」だった。

今回の第五次聖杯戦争に参加する予定の魔術師によってキャスターは聖杯戦争開幕前の早い段階で召喚されたが、「自身を召喚したマスターが魔術師としてサーヴァントに嫉妬する」という異例の事態に陥る。

またキャスター自身もそのマスターの考え方がかつてのイアソン船長に似ていたので反

感を抱いたため、マスターの意に反する行動を取り、激怒の中で令呪を全て消費させ自由の身となると、直ぐさまマスターを殺害した。

そこに残ったのはマスターを無くしたサーヴァントだった。

マスターは魔術師としては最優に近いが、所詮はサーヴァント<sup>使魔</sup>。自分の存在を保

つ魔力を提供してくれる依り代を失ったことで消滅するしかない彼女を、何の因果か偶然雨の中で出会った葛木宗一郎に拾われ、偶然冬木市最大の霊脈である柳洞寺に連れ込まれたことにより、マスターはその身を保つ事が出来た。

その後、葛木宗一郎がマスターの役割を引き継ぎその後の行動は全て彼の為であった。

自分を『魔女』や『魔術師』など見ていなく、ただの一人として彼女を見た葛木宗一郎を。

そしてマスターは真の『愛』を知った。  
知ってしまった。

遙か過去に真の愛と想っていた『贗作』<sup>呪い</sup>ではなく、『本物』を。

それを知った今の彼女の願いは「自分の愛した故郷<sup>コルキス</sup>に帰ること」から、「自分の愛する者<sup>マスター</sup>と共に生きること」だった。

マスターの願いはそれはそれは、何とも尊く、純粹で——



強い風が吹き「カチャリ」とした乾いた音にキャスターの視線は釣られる。そこにあったのは――

「――確かあれは先日貰った酒器だったかしら？」

最近墓参りに来たイリヤと三月の事はキャスターも視ていた。

何せこの聖杯戦争で愛する宗一郎様に次ぐ興味を引くもの達。

最初はどうか捕獲しようかと悩んだキャスターだが、三月の言動などが余りにも幼い『自分』を見ているかのようにキャスターは戸惑い、もう少し様子を見てみる事にした。するとどうだろうか？

サーヴァントであるアサシンを警戒する所か彼に労いの言葉とお土産を渡し、来た理由は「親のお墓参り」。

そして涙を零すイリヤと彼女自身の父へと向けた言葉。

共に涙を流す三月。

思わずこれをずつと『遠見』で見て聞いていたキャスター自身も心が揺れ、貰い泣きをしていた。

自分と自分の終ぞ会えなかった家族をイリヤ達と『親』を重ねてしまつて、心の中で「よかつたね」と言葉をキャスターが彼女らに送っていた。

そうこうしている内に、キャスターは三月とイリヤをそのまま見逃してしまつた（正

確には見逃したのだが。

メディアに課せられた『運命』の反動によつて冷酷、残忍、目的のためには手段を選ばず、奸計を得意とする真正正銘の「悪女」となつてしまつたキャスター。

必要とあらば非道な手段も辞さないものの、その一方で根は純真で不要ならばそうした手は控え、現にキャスターの行動に死者は一人も出ていなく、魔力の貯め方は彼女ほどの魔術師にしては非常に効率が悪いのもその証拠だつた。

彼女がその気があれば冬木市は瞬く間に死都に変わり、魔力は目的の為には十分程に貯まる。が、彼女はそれを最後の手段としていた。

「あの憎たらしいまでに恩に義理堅い堅物が何故この様に酒器を？」

そこでキャスターは気付く。

柳洞寺の異常に。

冬だと言うのに山の中で蟲が鳴いていて、柳洞寺自体からは何の音もしなかつた。

「ツ！ 宗一郎様！」

キャスターはすぐに柳洞寺の本堂の中へと突入した。

魔力が枯渇寸前の自分の工房へと辿り着くと、目が虚ろな葛木宗一郎と寺の坊主達が彼女に襲い掛かつた。

「小細工を！」

キャスターは以前、士郎に使った系の魔術で全員の身を拘束し、坊主たちの意識だけを刈り取り、宗一郎を診始める。

「……………（ホ、脳も心臓も動いていて破壊されてはいない。この侵食しているのは……魔蟲まぢゅうの類ね。）……………成程、そういう事。ふふ、魔術に耐性の無いマスターを操るのは簡単な事でしょうね。でもこれだけでこのキャスターである私を出し抜けると思つて？」

そこでキャスターは自身の短剣状の宝具を取り出し、葛木宗一郎の胸目掛けて刺した。

キャスターの宝具、『破戒ルすルべきブ全レてイの符カ』。

それは「裏切りの魔女」としての伝説が象徴として具現化した宝具。攻撃力は普通のナイフと同程度しかないが、「あらゆる魔術を解除する」という特性を持つ最強の対魔術宝具で、令呪の契約をも打ち消すほどの能力を持つ。

あらゆる魔術に対してのほぼ絶対的な『チートアイテム』である。何故彼女が宗一郎にこれを使用したかと言うと、彼を操っている魔蟲まぢゅうのコントロールと侵食を食い止め、解除する為である。

本来の『魔術師』の彼女ならばこんな短気な行動に出る事はまずない。というかあり得ない。

彼女ほどの魔術師であればまずは状況の把握と正常化、或いはこれを行った侵入者の排除が宗一郎の無力化と共にこの場を離脱、といった行動が王道。

だが『愛』と言う感情が彼女を『魔術師』としてではなく、愛する者の心配をする『女性』へと変えていた。

故にキヤスターは躊躇なく宗一郎を呪縛から解放する為に刺した。

刺してしまった。

パン！

「……………え？」

何かが破裂する音と共にキヤスターの視界は真っ赤に染まった。

何かが力なくキヤスターの前にドサリと倒れた。

何かが口を動かし、彼女を呼んだ。

「……………キヤ……………ス……………ター……………」

何か。

「……………あ……………ああ……………ああああああ……………」

「……………あ……………ああ……………ああああああ……………」

……………一郎……………様……………」

「シロウ、こちらにキヤスターが……………」

「なッ?! こ、これは何?! 衛宮君、近すぎないで!」

「あれは……葛木先生?! ツ! セイバー! あの短刀に触れるな! あれは良くないものだ!」

「セイバー、凜。あれは魔術破りだ。如何なる魔術をも無効化するシロモノだ」

「アーチャー、アレを知っているの?!」

「多少、な。成程、キャスターは『裏切りの魔女』だったか。ならばあの死体は彼女の――」

キャスターの耳がとらえる。

五月蠅い外野を。

キャスターの目がここで見る。

自分の断罪者たちを。

「……………ウフ……………アハハ……………アハハハハハハハ! 私が?! 宗一郎様を?! 殺したですって?! アハ、アツハハハハハハハ!!」

そしてキャスターは、『彼女』は『愛』故に狂った。

また狂ってしまった。

「そうね! そうよね! もしこうなるのだったらその方が良かったわね! どうせ私は『裏切りの魔女』のメディアですものね! アハハハハハハ!」



絶望。

恐怖。

不安。

その他の負の感情がキャスターの心を埋め尽くしていた。

「全ては結局無駄だったのね」と――

「――ならば壊してしまおうかしら！ この茶番のような世界を――！」

――キャスターはそう思いながら、壊れた。

そして力の限り、怒りの限り、悲しみにまみれながら自分自身の全てを『世界』へとぶつけた。

セイバー運営、アーチャー運営 視点

時間は丁度キャスターが新都から戻る途中まで遡る。

円蔵山の柳洞寺まで続く階段の前で士郎、三月、セイバー組は凜、アーチャー組と合流した。

「アーチャー、道はどう？」

「問題ない。だが、何かよくないものが山の中にいる」

「? それってどういう事?」

「『どう』と言われてもな、説明しがたい。言うなれば『直感』に似たものだ」

「ハア?」

「シロウ、彼の言う通り私も何かを感じます……三月、大丈夫ですか? やはり顔色が優れないようですが?」

「……………え? あ、うん。大丈夫……………」

そこでの三月は以前の私服姿で、顔色が何時もより青白くなっていた。

衛宮邸を出る前までは何時も通りの三月だったが、柳洞寺のある円蔵山へ近づけば近づくほどに彼女の体調は明らかに悪くなる一方だった。これを見た士郎は最初、彼女に衛宮邸で留守番をするようにと言ったが三月は断り続けた。

無理でも彼女を家に戻そうとしてもこつそりと士郎達の後を追うのをセイバーが士郎に言うのと彼は仕方なく三月に同行させた。

こつそりと離れて後を付けられるよりも、そばの方が安心するからだ。

三月が「クツ! フルーツが入っていたダンボールさえあれば!」と言っていたが、三月の小声の独り言でしかも聞いたのがセイバーだけだったので何を言っているのかセイバーは分からなかった。「そもそも彼女は<sup>三月</sup>何故ダンボール箱で尾行に気付かないと思っただのか?」とセイバーが思ったほどだった。

三月自身、体調で言えば胸の内がザワザワする程度だったので、まさか自分の顔色までが悪くなっていたのは思っていなかった。

【告。『佐々木小次郎の幻影』を入手シマシタ】

「えツ?! きゃあ——へブツ!」

三月が久しく聞いていない「」の声と共に突然の胸の高鳴りから驚き、足が滑つて前に転ぶ。

彼女は目を回しながらヨロヨロと立ち上がる。

「ちよ、三月大丈夫?」

「やっぱり、帰った方が……」

「だ、だいじようぶ! ちよつほこけただけ  
「ら、らいじようぶ! ちよつほこけはらけ!」

三月は痛む鼻を抑えながら階段を（恥ずかしさから）駆け上がる。

そしてアサシンの襲撃を警戒しつつも山門へと駆け抜ける士郎達は不思議に思った。

「遠坂、なんか変だぞ」

「ええ、分かってるわ」

「あのサムライ、何処にいるのだ?」

アーチャーとセイバーが山門を抜けて彼の言う通り、アサシンの姿も気配さえもどこにもなかった。

あつたのは地面に落ちていた徳利セットだけだった。

「まさか奴め、飲んでそこら辺を酔いながら彷徨つてはいまいな」

「アーチャー、彼はそんな愚行を犯すような者ではありません！」

「そうよ！ あの人が貰い物をポイ捨てする訳が無いわ！」

若干不愉快になつたセイバーにプンプンと怒る三月たちの言葉にアーチャーはニヒルな笑みを浮かべる。

「フ、軽い冗談のつもりだったんだが」

「てか、ここに来てアサシンに物をあげるつてどういう神経しているのこの子？ つて、衛宮君の妹だからか」

「ちよ、その言い分は無いだろ遠坂?! でも遠坂の言う通り、何で三月はここに来たんだ？ キヤスターの根城なのに。下手したら——」

「——イリヤと墓参りに来ていた、おじさんのね」

「じいさんの？ それにイリヤつて——」

「——話はそこまでよ皆。異常事態よ」

そこで柳洞寺内に入ると、彼らを待つていたのは完璧な沈黙だった。

人の声や物の動く音など一切聞こえなかつた。

今までの山は蟲の音でうるさかつたのに。

「…妙だな」

「何がです、アーチャー？」

「先日来た時には様々な魔術的結界などが施されていて、魔力が留まっていた。だが今は違う。まるでもぬけの殻になった工房のようだ」

「まさか、キャスターの奴……ここから引き払うんじや——」

「——ッ！ 兄さん、遠坂さん！」

三月が周り角から声をかけて、他の皆が見るそこには気を失っていた一成などの人がいた。

「どうだ、遠坂？ 町と同じ状態か？」

「……………ええ、同じよ」

「そ、そんな……………じゃあ柳洞さんや、ここにいた人達は——？」

「シロウ、こちらにキャスターが——！」

周りの状況を見る為に高い対魔力値を持ったセイバーが他の皆を呼ぶ。

そこは柳洞寺の本堂で、部屋の中にいたのは数人の気を失った坊主と——

「なッ?! こ、これは何?!」

「ッ」

「衛宮君、近すぎないで！」

士郎の耳じ朶だに凜の聲は届いていない。  
響くのは心の像の鼓動だけ。

ドクン、ドクン、ドクン、とうるさく。

「あれは……葛木先生?!」

中の状況を見た三月は息を短く吸い込み、士郎は思わず中へと駆け出しそうなのを凜が物理的に制止した。

——真つ赤な血溜まりの中で横たわっている葛木宗一郎と、手に血が付いていた歪な短刀を持ったキャスターの姿。

「ッー」

ナイフを見た瞬間、酷い頭痛が士郎と三月を襲い、士郎はほほ直感で「アレは危険だ」と理解した。

「セイバー！ あの短刀に触れるな！ あれは良くないものだ！」

「セイバー、凜。 あれは魔術破りだ。 如何なる魔術をも無効化するシロモノだ」

セイバーと共に前に出るアーチャーが二人に声をかける。

「アーチャー、アレを知っているの?!」

「多少、な。 成程、キャスターは『裏切りの魔女』だったか。 ならばあの死体は彼女の

——」



キャスターはただただ高らかに笑いながら周りどセイバー運営とアーチャー運営達に攻撃を次々と放つ。

だが――

「――キャスターアアアアアア！」

「何?！」

セイバーが何もせずとも魔術は独りでに弾かれて行く。

サーヴァントを比べやすく、個々の能力にランク値を付け加えるでしょう。

キャスターは魔術師にとって必要なスキルはすべてAランク。神話や伝承においてなんの偉業も成し遂げていないが、魔術師としての技量は最高位とも言える（凜がそう言ったように）。

しかし、対するセイバーの対魔力スキルは同じAランク。つまりこれを持つセイバーにキャスターは魔術の攻撃で傷一つ付ける事が出来ない。

「あ――！」

そして新たな術を練る間もなく、キャスターはセイバーに決して浅くは無い傷を付けられる。

キャスターは地面に落ちながら、宗一郎の遺体を見て涙を流す。

「そう……………いち……………ろう……………さ……………ま……………」



徐々に体が薄くなってゆくキャスターは身を地面によじりながら、宗一郎の遺体へと向かうが、途中で力尽きて闇の中へと消える。

この一連の出来事を見ていた士郎達はそのままセイバーを見た。

何せ彼女が活躍するのを見たのは今回が初めて。その他の場合が場合だけにそんな余裕が無かった。

「ス、スゲエ」

「……………」

「……………やっぱりセイバーは強いわね」

「悪かったな、凜。自分は冴えない英霊でな」

「シロウ、寺の者達は？」

「この惨状では生存者は望み薄だが？」

「それでも俺は探す。アンタがやりたくないのなら邪魔だけはするな！」

アーチャーを睨む士郎、そしてそれを受け流すアーチャー。

「もう、あの二人何なの？ ………………三月？」

士郎とアーチャーのやり取りが殺気満ちたもの……………と言うよりは士郎が何か張り合おうとしているのに呆れる凜。何せ対するは英霊、普通の人間が叶う訳が無い。

その凜が三月の様子がおかしいのを感じ、彼女を見ると――

「——ちよ、三月！ 貴方、大丈夫なの?!」

——三月が物凄く汗を掻きながら、深く息をして、体を近くの柱に寄りかけていた。

「……………だい……………じよ……………ちよつと……………体……………熱——」

三月の身体がペタリと床に落ちて、彼女は氣を失った。

【告。 『メディア』を入手シマシタ】

## 第16話 氣に病むヒトの子等

セイバー運営 視点

キヤスターが消え、士郎の提案で生存者を探そうと行動に出る直前に三月が倒れて、士郎が三月の状態を見る。

「三月?! これは……………昔の発作か?!」

三月は深く息をしながら、酷い熱を出していた。

「待つて下さいシロウ、それはどういう事ですか?」

「この子、昔からこういう事があるの? 私はそんなの聞いた事ないけど」

「あ、ああ。 中学に上がるまで、昔は結構このように突然熱を出していたんだ。 中学からは最近までこんな事無かつただけど……………」

「衛宮君、彼女を医者に見せたのかしら?」

「あ、ああ。 最初の頃はじいさんが何回か、な。 で、薬を出してもらっていた」

「その薬は?」

「場所を変えていなければ家の薬箱の筈だ」

「分かったわ、じゃあアーチャーと私は彼女を衛宮君の家まで連れ戻してエセ神父に連絡を入れるわ。その間衛宮君たちは生存者を探してちょうだい」

「な、それだったら俺が三月を家に——」

「私の方が素早く行動出来るし、アーチャーの索敵で敵の撃破も回避もしやすいわ。

それにここには昔から山自体に施された結界がまだある。いざとなればセイバーに帰り道一点突破はアーチャーより彼女の方が向いているわ——それにアーチャーは生存者を探すのにあまり気乗りしていない見たいだしね」

最後の言葉を凜は士郎の近くに行き小声で伝えたと、士郎が観念したように彼女を見る。

「……………分かった。じゃあ三月を頼むぞ、遠坂」

「貸し一つよ、衛宮君。行くわよ、アーチャー——」

「やれやれ、今に始まった事ではないが君の我儘っぷりには骨が折れるよ」

アーチャーは肩をすくめ、そこで凜たちは三月を連れて衛宮邸へと移動をし始める。

その後、士郎とセイバーは驚く事に柳洞寺の敷地の端で気を失った一成や寺の坊主達などが一か所に集められていたのにびっくりした。

「これは、一体どういう事だ？」

「成程……………こういう事だったのでね、キャスター」

セイバーが何かに築いたかのような一言に士郎は彼女に問う。

「どうしたんだ、セイバー？」

「実は先程キャスターと対峙した時に最初の魔術行使の際に魔術が放たれていなかったのです。最初は動揺などからの行使失敗、または大きな魔術の布石だと思ったのですがそのようなものを使ってきました。ですので、考えにくいのですが……………」

「まさか、キャスターが皆を動かしたって言うのか？」

「……………はい。今更なのですが、彼女は魔術を最初の一撃こそはシロウやリン達を狙っていたものの、その後は全て私とアーチャー目掛けて撃たれたものでした。その時は脅威である私達の排除を優先したと思ったのですが……………」

「……………『もしかしてキャスターが躊躇していた』、か」

「……………はい」

シロウとセイバーは眠っている生存者達から視線を宗一郎の遺体のある本堂へと変えた。

『もしかしてキャスターが生存者達を戦いに巻き込まれないように動かした』。

『もしかしてキャスターはマスター達を本気で狙っていなかった』。

『もしかしてキャスターが躊躇していた』。

等の考えが二人の頭を過ぎった。

だが考えても真意は分からない。

どんなに堕ちてもキャスターはキャスター、『裏切りの魔女』で『コルキスの王女』。そしてそれを知っている者達は喋れないのだから。

アーチャー運営 視点

アーチャーと凜は素早く円蔵山の麓まで降り、近くの公衆電話を使って新都の境界に  
いる言峰綺礼に連絡を入れて、再度移動を開始する中、三月を背負い移動をする凜は  
アーチャーに話しかける。

「……………ねえアーチャー、少し聞いていいかしら？」

『何だ、凜？』

「貴方、衛宮君に何か恨みでもあるの？」

『……………そうだな、彼の考え方に苛つくのは君も同じかと思ったんだが？』

「ングツ……………痛い所を突かれるわ、貴方と話していると。ま、気持ちは分からない

でもないけど……………」

『「けど」、なんだ?』

「嫌いなれないかな? 何と言うか……ちよつと『理想的』っていうか、『子供』っぽいつていうか……そう言うところとかが気になるわね」

『……………』

「??? どうしたのアーチャー? 珍しいわね、貴方が黙り込むなんて」

『何、そのような考え方で奴の事を思っていただけだ。だがやはり好きにはなれん。』

それに本題に入ってみたらどうだ、凜?』

「『本題』って、何の事?」

『とぼけても無駄だ。君がこの様に話の話題を私に振るといふ事は、何か尋ねにくい事を私に訊きたい時だろう?』

「流石私の召喚したサーヴァントね。もうそこまで理解しちやっているか。じゃあ聞くけど、この子どう思う?」

凜は道を歩きながら、体温がこの冬の夜の中でも感じ取れるほど熱を出して、背中にいる三月を見る。

『「どう思う?」、とは?』

「この子、性格や姿は違うけど何処となく『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』に似ていると思つているのは私だけかしら?」

『つまり「ホームクルス」だと?』

「もしくはそれに酷似した『何か』よ」

衛宮邸に着き、扉を開けると――

「――あ、お帰りなさいせんp――え?」

「あら、こんばんは桜。三月が具合悪いみたいで連れ帰ったのだけど、薬箱を持って来てもらえないかしら?」

「え? え? え?」

戸惑う桜をお構いなしに衛宮邸に凜は上がり、三月を近くの部屋に連れ込み、部屋の布団などを探している凜に桜が薬箱ごと持ってきた。

「取り敢えず、全て持って来ましたけど――」

「――ありがとう、お水を持って来てもらえるかしら? 私は薬を探すわ」

「三月先輩、病気なんですか?」

「んー……衛宮君曰く、昔あった発作のような物がぶり返したみたいね」

「え?」

凜の発言に対して呆気にとられる桜は目を見開き、汗を掻きながら息をする三月を見下ろす。

「私………知らなかったです」



「まあ、元々小学生の頃は結構こういうのあったみたいよ？ 衛宮君から聞いた話だけ  
ど」

「……………あの、先輩は？」

「何か気になる事があるから調べるって言っていたわ。 お水、まだかしら？」

「あ。 い、今持つて来ます！」

桜が立ち上がり、キッチンの方へと早歩きで向かうとアーチャーが薬箱の中身を漁つ  
ている凜の名を呼ぶ。

『…………凜』

「何？」

『…………さっきの話の続きだが、君の言う通りそこに居るものは私から見ても『アインツ  
ベルン』の娘と似ている』

「……………そっか」

『だが似ているというだけで、在り方の系統は違うように感じる。 恐らくは『アイン  
ツベルン』とは違う出所だろう。 推測に過ぎないがね』

「なら別の魔術師一族の産物……………か」

『そうだな、そうかも……………知れん……………』

「あら、貴方にしては齒切れが悪いわね？ 何か思う所があるの？」



三月が気付くとそこはどこかの平原で、自分は立っていた。

「……………こんな場所、冬木にあったかk——？」

シュボボボボボーン！

何処か乾いたような、水中の中で銃声を聞くような音が次々と聞こえたと同時に三月は痛みを体中感じる。

「あ……………え……………？」

自分の身体を見ると所々穴が開いており、赤い染みが服に広がって行く。

「(私……………さっきのは……………?)」

彼女がの視界は地面に向かって落ちて行き、体が倒れると後ろから数人の人の声が聞こえてきた。

「We got her! We got the witch——！」

そこで視界の横で見えたのは数人の男や女たちで、服装はボロボロで彼ら自身も小綺麗とはお世辞にも言えないような状態だった。

そして手にはマスケット銃、16世紀から19世紀辺りまで使われていた前装式銃に似た物や、西洋<sup>ピッチフォーク</sup>の熊手、鎌などの物をもって、怒りと錯乱と恐怖の形相で三月を見下ろしていた。

「Don't let her speak——！」







? 5 6 f 7 0 6 c 6 5 7 7 ? 6 8 ? 7 ? 9 6 4 6 ? 9 6 4 7 ? 4 6 8 6 ?? 5 7  
 ? 9 6 1 7 4 7 ? 4 6 1 6 ?? 3 ? 6 ? b 6 5 6 d ? 6 ? 2 7 5 ?? 7 2 6 ? e 6 d  
 ? 6 5 7 ? 7 ? 6 8 7 ? 9 ? 7 7 ? 6 8 7 9 ? 7 ? 7 6 8 7 9 ? 7 ? 7 6 8 7  
 9 7 ? 7 ? 6 8 ?? 7 9 ? 7 7 6 8 ? 7 9 7 7 6 ? 8 ? 7 9 ————」

そこで桜が急に三月の頭を抱いて、撫でながら優しく声をかける。

「———大丈夫、大丈夫ですよ」

かつての自分に三月がしてくれた様に。第5話 “雨の中のワカメと雨も滴る良い女

”

あの頃の桜は間桐邸で魔術の鍛練に疲弊していながら、兄である慎二に衛宮邸での暖かさを一度体験し、衛宮邸に行くのを禁止され、士郎が怪我をした口実でまた「衛宮邸に通い続け」と命令されて、間桐邸と衛宮邸を行き来する時に何度も思わず体が酷く震えた。

その度に三月がこうやって桜を落ち着かせたのを今でも覚えている。

そうすると三月は震えるのをやめ、寝息が聞こえてきた。

三月を寝かせた後、熱があるものの今更彼女を起こしてまで薬を飲ませるのは忍びないので薬とお水を近くに置き、桜と凜が部屋を出て、気まずい静寂が二人の間に流れる。

「……………」

そのまま二人は衛宮邸の廊下を歩き、この沈黙を先に破ったのは凧だった。

「でも意外ね、桜がああいう事を咄嗟にするなんてね」

「あ……その……昔、三月先輩にしてもらった事があったので……」

「ッ……」

桜の言葉に凧はどこか複雑な顔を桜が見えない所で浮かべ、玄関へと着くと丁度士郎とセイバーが帰って来た時だった。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさい先輩にセイバーさん。ごはん、温めてきますね」

「ああ、ありがとう桜」

桜がパタパタと家の奥に消える間、凧は靴を履きなおした。

「じゃ、お邪魔したわね衛宮君」

「あれ？ 遠坂はもう出るのか？」

「ええ、三月も今は寝ちやっているし……調べたい事もあるし」

「調べたい事？」

「こつちの話。あと、生存者は見つかったかしら？」

「……………それが——」

士郎とセイバーが目を見合わせ、凧に柳洞寺の生存者が思ったほど多く、恐らくはほ



ぼ全員気を失っていたとの事を説明した。

これには凧も驚き、何故キャスターほどの『魔術師』がそんなミスを犯したのか思わせた。

そう思いながらも柳洞寺の事を言峰に任して、明日また学校で会おうと話し合っている内に、士郎は思った。

「そう言えば慎二達はどうしたんだろう?」

「さあ?」 彼も準備中なのをキャスターが察知して今日のように引き払う準備をしていたとか?」

「でも、これで事件は減る筈だ。 そうだろ、遠坂?」

「ええ、冬木の<sup>セカンドオーダー</sup>管理者として礼を言うわ。 じゃ、また明日。 おやすみなさい、衛宮君」

「ああ。 お休み、遠坂」

凧はその夜、遠坂邸に戻るとポケットの中から衛宮邸で見つけた錠剤を何個か出し、それに昔父親<sup>時臣</sup>が使っていた器具などで調べた。

その結果、彼女は信じられない物を見ているかの表情に顔が染まった。

「……………何よ、コレ?」

凧は思わず声を出すほど「得体の知れないモノの塊」を覗いていたのだった。

士郎は衛宮邸にて、セイバー達と一緒に晩御飯を食べていた。

「……………先輩？ 大丈夫ですか？」

「ん？」

「その、何時もより難しい顔をしているもので……」

「あ、ああ。 ちよつと、な。 (まさか桜に『キャスターの事が気になっていた』とは言えないしな)」

「……………そう言えば遠坂さんともこの頃仲が良いんですね？」

「まあ、割とこの頃会う機会が増えて、自然にな。 どうしたんだ桜？ 浮かない顔をして？」

「……………私はあまり……………その……………」

「??？」

モジモジと、何かを言いくそような桜を士郎はただ見ながらご飯を食べていた。

《自分の為ではなく誰かの為に戦うなどただの偽善だ。 エミヤシロウ、貴様の望む

ものは勝利ではなく平和だと言っていたが、そんなモノはこの世の何処にもありはしない》

あの夜から、アーチャーの言葉が頭から離れず、夜は遅くまで起きていて、今日も天

井を見ていた。

アーチャーは嫌いだ。

「アイツの考えは駄目だ」と思っていた。

何が「諦めろ」だ。

何が「絵空事」だ。

《英霊とて全ての人間を救うことは不可能だ》。

セイバー達を見ると嫌でも分かりそうになる。

《誰かを救うということは、誰かを助けられないということなんだ》。

本当にそうだろうか？ 方法はある筈だ。それが力か時間か何かの要因不足故か

らではないだろうか？

『そんなものはやってみなくては分からない』。これが士郎の考えていた思考だった。

だがこの頃、彼は『正義の味方』と言う、切嗣に託された夢の事を考えていた。

『やってみなくては分からない』。でもそのやり方が『分からない』。

これが士郎を悩ませていた。

さつき思った様に何かの要因不足の筈なのだが、一向に糸口が見えない。

この聖杯戦争で、『何かを掴めるかも知れない』という希望も未だに実っていないように士郎は思えた。

その様な考えがグルグルと土郎の頭を回り、彼は眠りに落ちた。そして就寝した土郎は夢を見た。

それはアーチャーとアサシンの戦いだった。

「……………」

アーチャーの人柄は嫌いだが、白と黒の短剣を使うその技術はどこか親しみやすさがあつた。

今まで土郎はこの事を考えないようにしたが、今日の夢で確かに見たのだ。

戦いの最中に、土郎を見下すような視線をアーチャーが時折送っていたのを。

まるで『貴様に付いて来れるか?』と言っているような――

「――やってやる。やってやるさ!」

何事も始めなければ見えてくる道も見えない。

そんな考えで土郎は深い眠りに落ちた。

三月はその夜眠り続け、夢を見ていた。

何時もとは違う夢。

さつきとも違う夢。

自分は素振りをしていた。

そこは何処かの山奥で、今は亡くなつた老人の置き土産であるものを手に、ただただ素振りを続けた。

そして春が夏に、夏が秋に、秋が冬に、そして冬がまた春にと延々と四季が変わつてゆく。

最後に刀の素振りを続けて手がシワだらけになつていった日に、やつとあの鬱陶しい鳥を落とせた。

悔いがあるとすれば――

士郎、三月 視点

次の日の朝、セイバーとの稽古を士郎と三月は行つていた。そこでは士郎が何時も竹刀ではなく、素振り用の竹刀を二刀流風に使つていた。本来より短い竹刀だがその分軽くて小回りを利かせていた。本来より短い竹刀だがそ

それはまるで――

「アーチャーの戦い方ですか」

「ああ、別にセイバーの戦い方が悪いとかじゃない。だけど今は好き嫌いなんて言っている場合じゃない」

「へー。確かに今日の兄さんは何時もよりもっていますね」

「確かに、一刀でも以前より動きに無駄が無くなってきました。ですがそれは三月にも言える事です。まさかあれほど上達しているとは思っていませんでした」

先程までセイバーと打ち合っていたというのに、三月は少々の汗を掻くだけでかなりの進歩を見せていた。

「あ、やっぱりそう思う？ 何かグツツツツスリ寝たような気分でもう今かつてないくらい最高のな！ 『ハイ』 ってやつよおおおおお！」

「……………最後のは何だ、三月？」

「表現の表し方？」

「何で疑問形なのさ？」

そこでセイバーがプイッと顔を士郎から逸らしながら頬をぷつくりと膨らませた。

「ミツキは私の剣技を使い、シロウがアーチャーですか」

「わあ、可愛い〜(っつてあれ？ もしかしてセイバーっつて、妬いているの？ 兄さんが自分でではなく、アーチャーを見本にしているのを？ それとも——？)」

「あ！——べ、別に俺はセイバーを蔑ろにしている訳じゃ——！」

「——いえ、シロウが彼の戦い方が合うと思つて居るであらば、私からは何も」  
そう言い残し、セイバーは道場を後にして、士郎は三月を見る。

「……………セイバー、怒つていたよな？」

「どつちかと言うと『不満』？ 『不服』？」

「あちやあく、やつぱりそうか……………三月がそう言うのなら、そうなんだよな」

「セイバーはアホ毛を見ると良いよ、兄さん」

「へ？ あ、アホ毛？」

「彼女の感情を映してくれるから」

そして三月が士郎と同じく素振り用の竹刀を二つ出し、構える。

「あれ、三月？ その構えは——」

「——私も興味があるから、ね？ それにさつきも言つた様に気分最高の感じなの！  
まだまだ動けるわよ？」 私ほ」

そして士郎は二かツと笑い、二人共稽古を再開する。

一人はアーチャーの戦い方を真似ながら。

もう片方はアーチャーの動きに沿いながら。

このおかげで士郎の腕はかなり上達した。目の前にまるで小柄のアーチャーと対

峙しているかのようだったので見本としてはこれ以上ない事もあった上に何故かすんなりとアーチャーの戦い方が頭に浮かび、体がそれを実行するのだ。

ちなみに今日の三月はストレートに戻した髪を簡単に頭の後ろで畳んで、バレッタで留めていたので激しく動いても後ろ髪が邪魔になる事は無かった。

三月としては何とか自分の身体能力のみに見合つた戦い方を探していた。いくら魔術が良くても、セイバーのように対魔力を持った相手やそれが通用しない状況の時の為。

一応その他の手を三月は所持しているが、出来ればソレには頼りたくなかった。

そして手応えはあつた。セイバーの剣筋は同じ小柄の体格で真似しやすいのだが如何せん、一撃一撃に入れる腕力が足りていなかった。これは魔力で『強化』を施せばある程度解消出来るが、三月はそれ以外の戦い方を探していた。

アーチャーの使う二刀流スタイルはセイバーとは違い正面からのぶつかり合いを主流としていなく、あまり腕力を必要としない相手の攻撃の捌き方を中心に、カウンターや足腰を駆使するヒット&アウェイ系だった。

ただやはり元から身体能力があまり高くない三月に長時間の戦いは向いていなかった。なので最後の方はやはり『強化』を自身に使い、双方に有意義な稽古は終わった。

そして朝ご飯を食べている間、凜から士郎への電話があり一成達の状態が伝わる。



葛木宗一郎以外の者たちは全員衰弱していたか、昏睡状態に陥っていて死者は一人もいなかったと。これにホツとしている士郎とは別に、ダイニングでは――

「……………ちそうさまでした」

「……………え？」

三月の食事が終わった宣言で桜はお釜の開ける手を止めた。

まだ四杯目だというのに三月は食事を終えていたという事に桜は目を見開く。

普通なら後二、三杯は食べるのにも思いつながら三月に確認を取ると、どうもお腹が空いていないとの事。

あまり三月の事を知らないセイバーからすれば「ふーん？」と思いつながらバクバクと食べ続けていたが、桜は多少ショックを受けながら今日の朝御飯に何か問題があるかどうかを彼女に聞いていた。

が、本当にお腹が空いていないだけとの事だった。

「や、すまないな。食事中に席を立てて……………つてどうした、桜？」

「それが、三月先輩がもう食べ終わったんですよ」

「え？ 俺ってそんなに長く電話に出ていたっけ？」

「士郎、流石にそれはちよつと傷つくんだけど」

「先輩、私も同感です」

「モグモグモグ」

「でも大丈夫なのか？ 昨日の事もあったし、今日の朝も——」

「——それが本当に不思議なくらい調子良いのよ。さてと、ちよろしくと土蔵に籠つてくるね〜！ ♪〜」

そう言いながら三月はご機嫌のまま居間を出て、桜に今日はセイバーと用事があるので留守と三月を頼むと士郎は言い残し、衛宮邸を後にした。

歩いている途中、セイバーと柳洞寺の昏睡状態の人達の事を話すと、キャスターがいなくなつた今、その人達は時期に目を覚ますだろうとセイバーは言っていた。

ただ士郎は安心しながら心の中では悔しかった。

葛木宗一郎あの死体は助けられなかった、と。

恐らく彼は『行方不明者』として生死不明のまま人々の記憶から忘れられるのだろう、と。

キャスターの件もどこか違和感がある、と。

そしてそれらを考えれば考えるほど、とてもやるせない気持ちに士郎は染まって行く。

## 第17話 Boy Visits Girl

セイバー運営 視点

「あら衛宮君、早かったわね」

士郎が着いたのは冬木市にある公園だった。かつてあった辺りのビルは十年前の火災でほとんど焼け落ち、公園に変換された今の日中でも人気はあまりなく、どこか人や生物を寄せ付けない雰囲気だった。

「どうしたんだ、遠坂？ わざわざ俺達だけに聞かせたい事って？」

「じゃあ聞くけど、貴方と三月はどういう関係？」

「これに対して士郎は困惑する。

「???? 『どう』って、義妹だけど？」

「じゃあもうちよつと回りくどくない聞き方をするわ。貴方と彼女と貴方達の親はど

うやって会ったの？ 彼女と貴方が義兄妹なのは見れば分かるわ、でも経歴は？」

「何だ、そんな事か。丁度ここにもいるし、ちよつと長くなるから座らないか？」  
ベンチに座つた後、士郎は凜に説明し始める。

自分と三月は十年前の火災からの孤児同士で、衛宮切嗣が二人の後継人になり、住処と戸籍を提供し、世話をしてくれたと。

「そう……………何だ。ごめんね、そんな事聞いて……………」

「いや、別に構わないさ。別に不満があつた訳でも無いし、その前の事はほとんど覚えていない俺や三月でも生きて来たんだ」

「それって…………『記憶喪失』って事？」

「『解離性健忘』。確かに『記憶喪失』の類だが、俺の場合はまだ覚えているモノもあつた。だけど三月の場合、余程のショックだつたのか何も覚えていなかった。それこそ言葉とかもな。だから最初の頃は苦労したよ。俺も、藤姉も、じいさんも」

「そうなの？ 彼女を見たら想像しにくいけど…………」

「ああ。最初は何にでも怖がつていて、必ず俺か藤姉かじいさんにピッタリくつついて行動したり、オドオドしていた。表情もほとんど変わらなかつたし、自分からは何も言わないとか、色々な」

「ツ……………御免ね、衛宮君。話しを途中で止めて。でも私にそんな事喋つていいの？ 自分の事だけならともかく……………」

「良いさ、それは。それに三月なら多分笑いながら『あ、そんな事もあつたなく。ハッハッハ』とか言うさ、きつと。話を続けるけど——」

そして士郎は衛宮切嗣の話をする。

彼から魔術を習っていた事を——

「——待った。じゃあ何？ 彼は魔術刻印を二人に継がせなかつた訳？」

「ん？ ああ、継がせなかつた。じいさんは俺達に魔術とは無縁の人生を生きて欲しかつたんだと思う。最初は俺達がどれだけ頼んでも首を縦に振るまでかなり時間がかかつた」

「それは………彼は本当に魔術師なの？」

凜からしてみれば、衛宮切嗣は魔術師としては失格者のように感じた。

彼の言動が余りにも異質で、それは衛宮邸の結界も見れば分かる事だつた。

本来結界とは住人を守るか、他者を拒む者、或いは何かの障害。

だが衛宮邸は『招かれざる者に反応する』だけの結界だつた。

「リン、私の話を聞いてもらえますか？」

「セイバー？」

「シロウ、リンに前回の事を話しても宜しいでしょうか？」

「??? 前回？」

凜は『前回』と言う単語を不思議に思い、士郎は頷いた。そしてセイバーは掻い摘んで話す。

自分の知っている前回の第四次聖杯戦争の事を。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

セイバーの話が終わり、凜は複雑な顔をしていた。

本来ならセイバーは士郎、ましてや凜に第四次聖杯戦争の事を話してはいなかった。

だが本来とは既に事と事情が違っていて、セイバーからすれば凜は優秀な魔術師。

ならば第四次聖杯戦争の事を魔術師らしく、論理的に分析してくれると信じた結果で

彼女に話した。

「そう.....だったの.....でもおかしいわ。もしその聖杯戦争が以前のものだ

したら、本来のサーヴァントは再召喚されたとしても記憶は引き継がない筈よ？」

ここは士郎も疑問に思っていた。

前回のセイバーの説明ではこの事に触れていなかった。

と言うか今まで知ろうとは思わなかった。

ただ単に「セイバーは聖杯戦争の経験者なんだな、頼もしいや」程度に思っていたが、凜が言った事で気付いた。

聖杯戦争で召喚されるサーヴァントは保存されてある『本体』の『コピー』の筈。

つまり召喚される度に新しい『コピー』が呼ばれる筈なのだ。

「……私は特殊なケースです。恐らくは私が生前に『世界』と契約した為、私は聖杯戦争で勝てなかった場合生きたまま契約を成す前の瞬間に戻ります」

「な?!」

これに士郎と凜両方がビックリする。

つまりセイバーは聖杯戦争に召喚される度に聖杯を得なければ繰り返す事になるのだから。

自分が死ぬ前の瞬間を。

「それとシロウ……………私は……………謝らなければなりません。十年前のあの日、私は……………私はこの地にて、『あの火災』を——」

——セイバーの声はどこか何時もの彼女と違った。

まるで目の前には英霊ではなく、人々——

「——やめてくれ、セイバー。もし……もしもじいさんがお前に令呪を使つたとしたら何か理由がある筈なんだ………」

「……衛宮君、一旦貴方の家に寄つてからアインツベルン城に行きましょう。話の続きは歩きながらするわ」

凜は突然立ち上がる、士郎を無理矢理立たせる。

「アインツベルン城に？ 急にどうしたんだよ、遠坂？」

「もしセイバーの言つた聖杯戦争が前回の聖杯戦争で、その時に異常があつたのなら今回もあるかもしれない。そして聖杯に異常があるかどうかの話、アインツベルンなら調べられる筈よ。あと、衛宮君には話しておくわ。今日新たな昏睡状態と行方不明者が数人、新たに出たわ」

「な?! でも、キャスターはもう——!」

「——つまり今日のは彼女以外が原因という事よ。それにキャスターの件では色々と考えないといけない事があるのよ。衛宮君は違和感とかないかしら？」

士郎は黙り込んだ、それこそ自分が昨夜考えていたような事だったからだ。

「あと、もしさっきのセイバーの話が本当なら、この聖杯戦争はお父様から色々聞いたのとは違う上に通常のとも違うケースも十分あり得るわ。キャスターはもういないけ



れど、敵対しないのをアインツベルンとの話が終わってからまで延長しないかしら？」

「俺は別に問題は無いが、セイバーはどうだ？」

「確かに聖杯に何らかの異常があるのだとすれば、アインツベルンと話を付けた方が良いでしょう。聖杯に願いをすることも、聖杯自体の機能に異常が来ていればまずそ

ちらに対処をしなければなりません。（やはりキリツグ、貴方は説明不足です！ア

イリスファイルにも、イリヤスファイルにも、私にも！何故説明せずにあの時令呪を

使ったのですか、キリツグ?!）」

「アーチャーもそれでいいかしら？これは聖杯戦争が根本から歪んでいる可能性があるわ。ならば律義に歪んだ儀式を進める事に私は反対よ」

『もし私が『反対だ』と言つても、それこそ今回は令呪を使う気なのだろう？ならば

それは取つて置け、凜。だが一応忠告はして置こう。力のない者との協力はダメ

リットが大きいぞ？それを忘れるな』

「忠告ありがとう。士郎、最後に貴方の義妹……三月の事なのだけれど……」

凜は小さなガラスの小瓶に入っている錠剤を士郎に見せる。

「これが、彼女が摂取していた薬で間違いないかしら？」

「あ、ああ。つてか三月から聞いていないのか？良く分かったな？」

「当り前よ、これは——」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

セイバーとアーチャーは（恥ずかしがる）士郎と（なんともない）凜を抱えながらアインツベルンの森を駆け抜けていた。

「——きやああああ♪ 早〜い♪ 景色が変わるのはや〜い♪」

そして三月はセイバーの首に手を回し、腰に足を回し、背中に『コアラ抱き』をしていた。 勿論手足は『強化』済み。

「この子、衛宮君みたいね」

「どういう事だよ、遠坂？」

「そのままの意味よ？」

「人の事をまるで能天気のように——」

「——あら、違ったのかしら？ 無防備で『のほほん』とした態度で私に襲われただ・

れ・か・さ・ん?」

「グツ」

「それにしてもミツキは大丈夫なのですか?」

「ほえ? どゆこと?」

「いつもなら体の調子が——」

「——まあそうなんだけど、今日は絶好調よ!」

セイバーが心配するのは無理も無かった。

あの後、凜と共に士郎達が衛宮邸に戻つ

たら三月が何やらお守りを作っていたのだ。

人数分を。

三月は三月で先日得た結界術などの魔術の応用や工夫に付与の試行錯誤で作ったのだが……………

「(どないしょ、これ?)」

三月が自分の前を見るとお守りが他のお守りのパーツとして組み込まれている物体達がトランプカードのパッケージ状で出来上がっていた。

「(……………やっぱりこれって規格外よね。どう考えても)」

そのお守りは某ゲーム風に呼ぶのなら『パッシブスキル』を追加する装備。

とはいえ欠点と言えばそれらは所詮魔術礼装なので、魔力が無くなればただの物置以

下。そして効果は『毒あるものの無効化』という物。これは（三月の理論上）軽い食中毒からオオベッコウバチの毒までのような毒に効く（筈）。

今の三月は今までにないような気分で、前からして見たかった事を次から次へとしてみた結果の一つがこれだった。

あと士郎と凜がアインツベルン城に向かうと伝えると糸状の鷲の足に書いた手紙を取り付けて、先行させていたりと色々やっていた。

そして移動前に三月は魔術礼装お守りを家にいた桜、帰って来た士郎と凜に渡した。

「何だこれ？ トランプカードの箱か？」

「え、衛宮君……これ、凄く精密な魔術礼装なのだけれど……これって貴方たちの親の『衛宮切嗣』が作ったものかしら？（これならば彼の異質性が多少説明されるわ）」

「あ！ ウン！ そう！ そうなの！ 何かこの頃物騒だからさ！（その手があつたかー！ って、今遠坂さんがおじさんの名前を言った時に違和感あつたな。何だろう？）」

「へー、じいさんがねー………って遠坂？ 大丈夫か？」

士郎が見る凜はブツブツと独り言と受け取った魔術礼装を睨んでいた。

「ですがよろしかったのですか、ミツキ？ そのようなものを凜に渡して？」

「あ、大丈夫よセイバー。桜にも渡したから」

「いえ、そういう意味では——」

——その時、糸状の鷲とアオガラが三月の前に降り立った。

それは御三家アインツベルンの聖杯戦争代表からの正式な招待状だった。

士郎と三月宛の。

「あれ？ ここに遠坂の名前が無いぞ？」

「ん？??? 私、確かにイーちゃんに三人の名前書いた筈なんだけど」

「……………三月、その『イーちゃん』って……………まさか」

「??? イリヤの事だけど？」

「……………アイツ、イリヤスフィールワザと書かなかったわね」

「???」

「上等じゃない！ これなら否が応でも行つてやろうじゃない！」

何故かヒートアップする凜を士郎と三月は？マークを浮かべながらアインツベルン城に向かった。

---

間桐桜 視点

---

『頼れるお姉ちゃん』。

それが間桐桜の、三月に対しての印象だった。

昔に兄<sup>慎</sup>さんが連れて来た友人の妹。

《初めまして。『衛宮』三月です》

そして彼女は義妹だった。

初めて会った時、明らかに『衛宮の兄君』と容姿が違った。

その事を理解した桜の挨拶はワンテンポ遅れた。

《……初めまして。 間桐桜です》

そこから『衛宮』三月は何かの話題を探すように幼い桜に色々な話をしてきて、時間が経ち、衛宮邸で桜の顔が引きついた時その場にいた者達の嬉しい気持ちで死んでいた心に温かさがやっと戻り始めた時に――

――兄<sup>慎</sup>さんにバレた。

桜が間桐家の正式な後継者として育てられていたのを。

その日から慎二は変わった。

彼が桜を衛宮邸に連れていく事はもう無くなり、態度も急変した。

以前では何処か気にかけていたのも、「勝手にしろ」と放置するようになった。

そして桜が中学の時、ある人達が目についた。

その二人は何度も何度も跳べもしない高跳びをひたすら跳ぼうとしていた。

その兄妹は本当に楽しそうに、何度も何度もチャレンジしていた。

これを見ていた桜は久しぶりに何とも言えない気持ちになり、二人に言葉を心の中で送った。

『諦めろ』、『やめてしまえ』、と。ただただ心の中で言いながら二人を見ていた。

だが時間が経てば経つほど、桜の気持ちは大きくなっていった。

何故ならその兄妹は笑いあっていた。

失敗しても笑いあい、互いを励ましていた。

気が付けば桜は涙を流しながら、その場を去った。

そして辛い時にはこの暖かい風景を思い浮かべて、まるで自分がその輪の中にいるような事を妄想していた。

それから時間が経ち、ある時お爺様が桜に命令した。

「衛宮の所に通い、何としてでも自分をそこに居させろ」と。

桜は嬉しい反面、恐ろしかった。麻痺していた心が動くほどに。

お爺様が笑っていたのだ。

あのような顔は、桜が知る限り自分の調整などでしか浮かべない類のものだった。

あの二人に会えることは内心嬉しい、だけど同時にお爺様の命令だったのが恐ろしかった。

あの二人を巻き込みたくなかったが、自分に従う以外の選択肢はない。

そして出掛ける前に兄さん<sup>慎</sup>が入り口で立っていて、何かをされる覚悟をしながらも、桜は横を歩き通ろうとすると兄さん<sup>慎</sup>が抱き着き、桜の耳元で囁いた。

「あの二人は良い奴らだ。怖くなったら妹の方にこうやってして貰え。母さんの感じがするからな」

ただそう言い、兄さん<sup>慎</sup>が桜から離れ、何事も無かったように自分の部屋に籠った。

桜には不思議な事ではなかった。

何時もなら自分が兄さん<sup>慎</sup>に迫ると彼に殴られたり、蹴られたりはしたが、今の様に優しく抱くのは彼女が覚えている中で初めての出来事だった。

そしてその日から桜は何度も衛宮邸に通い、何時か夢にまで見た輪の中にいた。

それは想像以上に暖かく、心地が良いもので、自身の体が間桐邸と衛宮邸の温度差や過去の事を思い出しながら震えると、衛宮家の妹君が優しく声を掛けながら体を抱きしめる。



兄さん<sup>慎二</sup>に言われた通り、こうして貰えるとかつてのお母様と同じように暖かかった。

更に時が経つと、衛宮家の兄君から合いかぎを渡され、兄妹二人から笑顔を向けられ『いつ来ても良い、家族なんだからさ』と言われた日の桜は帰り道中、恥む事無くただひたすら合鍵を胸の近くで抱き、泣きながら歩いていた。

それから更に時が経ち桜は知った、聖杯戦争の事を。

そして、自分の大好きな先輩が殺される対象となるのを。

桜は恐怖した。

絶望した。

自分の所為で兄妹二人に迷惑が掛かってしまうと泣いた。

その時、珍しく兄さん<sup>慎二</sup>が自分の部屋を訪ねた。

「提案がある」と。

それからは（桜が見えている範囲でだが）どうやら聖杯戦争で兄さん<sup>慎二</sup>は『先輩』に危害を加えるどころか、別の方法で聖杯戦争で勝とうとしていたようだった。

そしてそれは正解に近い。

何しろ兄さん<sup>慎二</sup>から直接聞いている話なのだから。

衛宮邸で。

「いや〜。苦勞したけど…何とかかなりそうだよ、桜」

ここは衛宮邸の居間。衛宮家の二人はどうやら遠坂先輩と出掛けたようで、それを確認した兄<sup>二</sup>さんがお邪魔してきた。

「お疲れ様です、兄さん」

桜がお茶を入れると、慎二は嬉しそうに飲みながら出された菓子を食べていた（三月手作り苺タルト）。

「ライダーもどうですか？」

「いえ、私は大丈夫です桜」

部屋の隅で立っていたのはライダー。索敵能力は高くは無いが、人間よりは優れているので衛宮家やセイバー、遠坂凛やアーチャーの警戒をしていた。

間桐慎二は衛宮邸に桜一人になると時折、こうしてお邪魔してきてはお茶や菓子を楽しみ、桜に愚痴などを零していた。

聖杯戦争開始直後に慎二の態度は昔みたいになっていったのに桜は内心嬉しかった。

「それで、どうですか兄さん？」

「ああ、最初は大変だったさ。何せ僕は正式のマスターではない上にライダーの弱体化を補うなんて普通の奴なら無理さ。でもこの僕にかかれはどうって事は無い。

それと桜——」

急に慎二が何時ものヘラヘラした顔から真剣なものに変わる。

「体の調子はどうだ？」

桜は赤くなりながら慎二から目を逸らした。

無理もない。たとえ慎二が心配からこの質問をしていたとしても、それに答えるのは女性としてこの上ない恥ずかしい気分。何故なら間桐で受けた調整の所為で魔力は高まったが、性欲を通常以上に増進させられ、それをどうにか一人で解消していた苦勞を慎二は知っていた。

と言うか最初の頃、桜はお爺様に言われ慎二に迫っていた。

「それ位の才能しかない」と言い。

その所為で暴行じみた行動にも桜は会っていたが、それを見つけたのが先輩士郎で無く三月だったのが桜にしてはせめてもの救いだった。

もし先輩士郎が知ればどうなっていたかと思うと桜の身体が震える。

「……………」

「言いたくないのは分かる。だけどお爺様が言うにはため込めば、ため込む程反動が酷くなるって言っていた。だから——」

「——大丈夫です、マスター」

そこでずつと黙っていたライダーが慎二に答える。

「??? どういう事だ、ライダー？」

「時々様子を見に来ていましたが、桜の状態は以前より安定しているかのように見え  
ます」

「ツ?!?! そ、それは?!! よ、良かったじゃないか、桜!」

慎二は心から安心したような笑顔に一瞬なり、それに気付いたのかすぐに顔を逸らし  
ながら言い直す。

「よ、良かったな、桜。 で、でもどうしてなんだ? 何か変わったのか?」

「……………」

「ライダー?」

ここでライダーが顔を逸らし、何か後ろめたい事を隠しているかのような雰囲気  
に桜が気付く。

昔の自分のようだったから分かる空気だった。

「……………いえ。 何でもありません」

「……………そうだな、桜の調子が良いのならそれでいい」

「兄さん……」

「後もう少しだ桜。 もう少しなんだ……………これが終わったら僕達は……………幸せ  
になれる筈なんだ」

セイバー運営、アーチャー運営、バーサーカー運営 視点

『アインツベルンの森』。

冬木市から西へ外れたところにある森でアインツベルンが管理する結界に覆われており、魔力と気配を遮断しない限りすぐに見つかり、迷いの森としての機能もあるので毎年迷い込んだ人が何人か消息を絶っている。

突然凜が立ち止まり、士郎と三月に先を歩いてくれと頼み、二人はそうすると――

ビリッ！

「――のわ?!」

「――わきゃ?!」

「プッ。『のわ』に『わきゃ』って何、二人とも?」

その森の結界を通った瞬間士郎と三月は溜まった静電気に似たビリつとした感覚が体を走り、声を上げると凜が吹き出しそうになる。

「わ、笑い事じゃないぞ遠坂! い、今のは何だ?」

「あ、多分これって『結界』って奴なんじゃないかな?」

「その通りよ三月」

「…………でも俺達、招待されているんじゃないのか？ それに家のとは訳が違うぞ？」

「これが普通の結界よ、衛宮君。寧ろ衛宮邸のは優しすぎるくらいよ——」

——そこで凜が通ろうとすると——

バリリリリリリリリリリリリリリリリリリッ!!!

「——ウギャアアアアアアアアアア?!」

普段の彼女……………と言うか女性から聞くような叫び声とは言い辛いものと共に凜の身体に高圧電流に似た物が流れ、何某ギャグアニメみたいに彼女の骨格が浮き出たような幻覚が士郎と三月達には見えるようだった。

プスプスとした音と体から湯気が出ながらヨロヨロと士郎達のいるところに歩いた凜のツインテールの髪の毛は立派にボワツと広がっていた。

「…………（あ、どこぞのミッ◯ーマウスの耳みたいだ……………それともダ◯ボかな〜?）」

「……………」

「と、遠坂?」

「……………やってくれるじゃない、あのクソガキヤア！ 今笑ったの確かに聞こえたんだからね——」

怒りながら叫ぶ凜の最後の「ね——」が森の中で鼓動し、場所はアインツベルン城で

とある部屋へと移る。

そこには『遠見』の水晶玉經由で士郎達側の出来事を見ていたイリヤが笑っていた。

「アハハハハハハハハハ！ 引つかかった、引つかかった！ リンのような奴でも、こうすれば面白いわ！」

「うん、確かに面白い」 ↑棒読み

「お嬢様。あの二人は良いとして、三人目は如何なされますか？」

「勿論、楽しむ為——じゃなくて玩具——ン、ン、ッ！ 勿論彼女が相応しいか『試す』のよ。セラ、リズ。客間の準備を」

「ジー」

「??? どうしたのですか、リーゼリット？」

リーゼリットが水晶玉の中を見ていたのを、セラは声をかける。

「イリヤ、ケーキとかはあのリュックの中？」

「うん、そうだと思う」

「ホクホク。 楽しみ」 ↑棒読み&僅かなホクホク顔の微笑み

「うん、私も！」

そこには三月が何時ものポシエットと更に背中に背負っているリュックサックが水晶玉によって映されていた。

「……………ず、頭痛薬の残りが……………」

そして部屋では目を光らせているイリヤとリーゼリットとは反面にドヨーンとした  
疲れるセラの姿が。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

…

「皆さまアインツベルン城へようこそ。城主のイリヤスフィール・フォン・アインツベ

ルンと申します。 歓迎するわ」

「アインツベルン城にお招き頂きありがとうございます。 日頃のお心遣い、心より感

謝申し上げます。 私は衛宮三月と言います。 しがなない者ですが宜しくお願い致し

ます」

イリヤはスカートの裾をちょこんと持ち上げて一礼し、これに対して三月は短パンの  
裾をあげて、同じように一礼する。



このやり取りに呆気にとられる士郎に表情の変わらないセラとリーゼリット。

そして普段ならこのような場面で真っ先に反応する筈の凜がボロボロで、まだ落ち着かないイリヤへの苛立ちを御していた。

「……………プツ」

そこでイリヤと三月が同時に吹き出し、共に笑い始める。

「今のな〜に、『イーちゃん』？」

『『ミーちゃん』こそ急に畏まって』

「だつて〜」

「ねー！♡」

意気投合する少女二人であつた。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

そしてリーゼリットとイリヤが睨んでいた通り、三月のリユックの中からロールケーキ2ホールと三段箱クッキーセットがお土産として出て来て、一つの客間で皆はお茶をしていた。

「ところでイリヤ、何で俺と三月の場合罨が発動しなくて遠坂に反応したんだ？」

「ああ。それは彼女がここに来る辿り着くに相応しいかどうか試していたのよ」

「「え」」

「ングツ（いえ、ここは我慢よ遠坂凩。『何時如何なる時も常に余裕を持って優雅たれ』。お父様を思い出すのよー）」

士郎と三月の動きが一瞬止まりイリヤを見るが、彼女はどこ吹く風のように振舞っていた。

凩はと言うと今にでもイリヤに飛び掛かりそんな心を精神で御していた。

「それで？ 皆がここまで来たのには理由がある筈よ？ 用件は何かしら？」

「じゃあ聞くわね——」

そこで凩はイリヤに今回の聖杯戦争の不可解な部分や前回の第四次聖杯戦争の説明をし始める間、士郎はケーキとお茶を楽しむ三月を見ながら今日の朝、凩に話された事を思い出す。

『三月は人間ではない。』

三月が昔摂取していた薬の全てを調べられなかったとはいえ、凜が判明出来た部分だけでも魔力を含んだ強力な治癒薬で、人間であれば一粒服用しただけで即死に至る程の劇薬だった。

そんな薬を三月が平気に服用していたのを見ていた士郎はかなり動揺したが、最近の三月を見た彼は少し納得した部分もあつた。

そして凜に士郎は忠告を受けた。

「三月には注意、警戒しろ」と。

この世界では人ならざる者達が人と接触するのは例外中の例外以外では人に何か求められているか、奪うかの二択。

前者であれば選択や対策の余地があるが、後者の場合で人ならざる者が強者であれば

「————忠告ありがとう遠坂。でも三月は三月だ」

と、忠告&脅し中の凜に対して士郎は言った。

「それがどうした？」と言う態度で。

彼からすれば三月は昔から一緒に住んでいる義妹で、所々ズレている時もあるが面倒見のいい子で努力家。

「呆れた……じゃあ何、衛宮君？　もし彼女が『血を寄越せ』とか『臓器が食べたい』と

か言ってきたら『ハイどうぞ』と言う訳？」

「そんな事は無い」

「ホ。良かった、そこは割と——」

「——まず『どの位欲しい?』とは聞くし、臓器に関しては『代用になれるモノはあるか?』と聞くさ」

「.....」

そこから凜は何か諦めたみたいに衛宮邸に戻り、三月からお守りを受け取り、アインツベルン城の今の状況に至る。

ちなみにセイバーとアーチャーは部屋の端で立っていた。

丁度凜が説明し終わったところらしく、イリヤは何か考えているようだった。

「.....そうね、もし聖杯に異常があるのなら律義に聖杯戦争を続けている場合じゃないわ。でも調べるにはサーヴァントを何騎か消滅させるかももう少し時間が経ってからじゃないと出来ないわ」

「??? それは大丈夫じゃないかしら? 現にキャスターとアサシンは倒されているのだから」

凜の言葉にイリヤは若干反応し、イリヤは彼女を見る。

「リン、それは本当?」

「え？ ええそうよ。 アサシンはともかく、キヤスターは衛宮君と私が見ていたし」  
「……………」

イリヤが疑うような目で凜を見ると士郎が反応した。

「待ってくれイリヤ、遠坂の言った様にキヤスターは消えた。 どうして疑うんだ？」

「……………」

「？ イーちゃん？」

イリヤが黙り込み、三月が彼女の表情に築き、声をかける。

何時もの『悲しみ』ではなく、あれは『諦め』だった。

「それは……………私が聖杯だからよ」

## 第18話 ポロリもあるヨ！（ありません）

セイバー運営、アーチャー運営 視点

士郎、凜、三月達とセイバー、アーチャーは静かな夜の中でアインツベルン城から冬木に戻る森を歩きながら、イリヤの言った事を思い出していた。

《それは私が聖杯だからよ》

それからイリヤはそこに居た者達に自分と、『アインツベルン』の事を話した。

自分がホムンクルスと人間の混血ヒトでありながら、『聖杯の器』だと。

そしてサーヴァントが倒され、魔力が満ちていく度に『器』は満たされ、『聖杯』は実体化する事も。

『器』の機能が増す度に『イリヤ』と言う余計な部分も上書きされることも。

これを聞いた士郎達は酷く落ち込んだ。何せイリヤのような幼い子はそれを悲しむ事無く、ただ平然と喋っていたからだ。

セイバーに至っては拳を更に強く握り、血が鎧ににじみ出るほどだった。かつて自

分が仕えていた姫君、『アイリスフィール』と目の前の『イリヤ』を連想して。

アーチャーはただ腕を組みながら眼を静かに閉じ、何時もの表情だったので話が聞こえていたのかどうかわからなかった。

ただこの性質上や、アインツベルンの事情などを何故イリヤが説明したかと言うと、彼女は違和感を感じていたから。士郎達の言うようにアサシンとキャスターが消滅したのならば彼女の聖杯は満たされて行く筈。

だのにイリヤは何も感じていなかった。

ならば、二騎分の魂は何処に行つた？

これがイリヤをアインツベルンの機密事項を部外者である凜達に話させる程の異常な事だった。

そして一時的にだがイリヤも聖杯戦争を中断し、この異常事態の調査に取り掛かる事を士郎達に伝えた。

ただ資料や報告などの整理があるので改めて何か分かり次第、士郎達に連絡をいれると言ひ、その日は分かれる事になった。

連絡係としてイリヤか三月の『天使の詩』エルゲンリート、または遠坂邸に置いてある連絡用の魔術道具、そして電話等を使う事にした。

電話がアインツベルン城に設置してあるのに凜はビックリした。

しかも携帯電話で、フリックフォンタイプをイリヤがドヤ顔をしながら説明したのを士郎は苦笑いで相槌を打ちながら、凜は『気にしていない』と言う態度を意識しながら取り、そして三月は――

「士郎！ 私も欲しい！」

「無茶言うな！」

「……………駄目？」

と、三月に上目遣い十潤んだ目で見られた士郎は咄嗟に顔と目を逸らしながら震える声で念押しに「駄目だ！」と言った。

若干膨れながらも三月はその後もしりやと他愛ない話をして、士郎と凜を巻き込み、時は過ぎていった。

そして夜になり、三月が厨房を（ほぼ無理矢理に）借り、カレーを振舞うと言い（監視と言う名のお手伝いさんのリーゼリットを連れて）部屋を出ると凜はイリヤに自分が感じていた三月の疑惑を話した。

「フーン、リンって意外と小心者なのね」

「んなっ?! 人が親切で言っていると云うのに――」

「――私だってそんな事、とつくの前に気付いていたわ」

「え？」



これに士郎と凜が驚く。

「だつてそうでしょ？ そんな事に気付かないなんて、余程のお馬鹿さんか鈍感か三流だけだもの。で、私は聞いたの、『貴方は“何”？』つて。すると彼女はこう私に言ったわ」

《私は『衛宮三月』。それ以外なんでもないわ》

それを聞いた士郎は納得したような表情を浮かべながら「三月ならそう言うと思つた」と声に出し、凜は「それ答えになつていいのかしら？」とツツこむ。

「やつぱりリンは頭が固いわね。つまり彼女は『何がどうあつてもシロウの兄妹』とハッキリと言つた事は、少なくとも心がまだ人間ヒトという事よ」

それはそうだろう。この世界の人外ヒトは人間ヒトを（良くて）ただの家畜として見ている事が多い。

つまり自分達と同一目線で物事を取り、感じるのはほとんどの場合いない（異例外を除いて）。

その夜、三月達が作つたカレーライスに皆感動した。

ふんだんに使われたダイス状の牛肉。

一口に収まるサイズのほっこりとしたポテト。

様々な形（星、月、等々）をした、甘みのあるニンジン。

切り刻んだトマトとセロリに隠し味のココアパウダー、ハチミツ、おろしたリンゴ、醬油等々。

そしてカレーはブロック状のルーとカレーパウダーや何種類かのスパイスが混ざったもの。

強いて呼ぶのなら『本気で凝った家庭のカレー』だった。

ちなみに嬉しく食べる皆（特にイリヤ）を見てセラはレシピを三月に貰いたいと言い、彼女を手伝ったりーゼリットが「自分が分かる」と言った時、セラは珍しく「でかしたわりーゼリットツツツ！」と褒め称えていたそうだ。

後でカレーを食べたセラとリーゼリットも楽しみ、またもセラがリーゼリットを褒めるのをイリヤが見たそう。

そして時を現在に戻すと、士郎、凜、三月、そして霊体化出来ないセイバーは静かに夜の冬木を歩き、深山町に辿り着くと凜が声を出す。

「今日はここまでね。衛宮君、気を付けて帰ってね？」

「遠坂？」

「あ、おやすみなさい遠坂さん！」

「ツ……………三月もね」

歯切れの悪いような返事で凜は遠坂邸へと向かう背中に三月そのまま手を振る間、士

郎は凜が「何であのような言い方をしたのだろう」と考え、すぐに答えに辿り着いた。恐らく凜が言っていた気を付けては「三月に気を付けて」の意味だったと。

「……………」

「ん？ どうしたの、兄さん？」

士郎の視線に気付いた三月がキョトンとした顔で、頭を横に傾けながら士郎に聞くと、士郎が笑いながら三月の頭を撫でる。

「わぷ」

「…………いや、『今日のカレー旨かったな』って思っていたただけだ」

「はい、大変美味でした」

「あ、やつぱり？ 今日ほちよ〜つと本気を出してみたの♪（よっしやあ！ ビツクリコップス作戦は成功だあ〜）」

「そうか。アーチャーもそう思わないか？」

「へ？ 『アーチャー』って…………？」

『…………少し見直したよ、エミヤシロウ。 霊体を感じ取れる程度には心得が出来たか』

そこに士郎達の後ろにアーチャーが声と共に現れ、前を歩きだす。 衛宮邸の方向へと。

「あ、先程ぶりです」

呑気に声をかける三月をアーチャーは首を若干だけ回して、横目で見ながらセイバーは彼と士郎の間に入った。

「シロウ、下がっててください」

「これはあの夜の続きか？ やる気だつていうなら相手になつてやる！ 俺だつて魔術師の端くれだ！」

「シロウ！」

「お前を見送れという凜の指示には従うさ。それに己惚れるなよ、エミヤシロウ。

血の匂いがしない魔術師など半人前以下だ。聖杯戦争のマスターでありたいと言うのなら尚更だ。成果のためには冷血になるのが魔術師。その点では遠坂凜はやや甘い所はまだあるが、心構えは立派だ。彼女を見習うことをおススメする」

「じゃあ良かったな、遠坂がマスターで。聖杯を手に入れるのがその分近いじゃないか」

そこでふと士郎と三月は思う、アーチャーの願いは何だろう？と。

だが士郎がセイバーに聞いてもただ「自分の悔いを直したい」と言うだけで詳細は言ってくれなかつたので恐らくアーチャーは同じだろうと思ひ、士郎は聞かなかつた。

「ねえ、アーチャーさんの願いつて何？」

だがここには三月と言う、常人から少しズレた者が躊躇なくアーチャーに聞いた。

「……………フン、悪質な宝箱など、他の奴にくれてやる」

「???（『悪質な宝箱』?）」

「何だと?」

アーチャーの答えに三月は? マークを浮かべ、セイバーは目を細めながらアーチャーを睨み、士郎は驚きながら更に聞く。

聞かずにはいられなかった。

「いらないうって、サーヴァントは叶えられなかった願いを叶える為にこの戦いに参加しているんだろう?!」

「ハ、何を言うかと思えば。いいか、エミヤシロウ? 私達サーヴァントに自由意志などない。自らの意志で呼び出しに応じる物好きなど、そのセイバーぐらいだろうよ。英霊など使い捨ての道具。他者の意志によって呼び出される者達だ。そんなサーヴァントが心の底から人間ヒトの助けになりたがっていると本気で信じているのかね?」

「……………」

「でも……………それは……………」

黙り込む士郎と、何か言いたそうな三月にアーチャーは言葉を続ける。

「いいか？ 英霊とは装置にすぎない。不都合があれば呼び出され、後始末をして消えるだけの、な。自由意志を剥奪され、未来永劫、人間の為に働き続ける単なる便利屋。それが英霊と呼ばれる、都合のいい存在達だ」

「なッ?! アーチャー、貴方は……………それはあまりにも……………」

「……………」

今度はセイバーが反論の声をあげ、三月が黙り込む。

「何が装置だ！ セイバーは違う！ やりたくない事は突っぱねるし、自分の意見もバンバンと言って来るし、嫌な事や嬉しい事があつたら顔に出るし、何処からどう見て一人の人間だ！ それに、召喚されてからの選択肢だつてある筈だ！」

「シ、シロウ……………」

士郎の言葉を聞き、セイバーは頬を僅かに赤める。

「確かにサーヴァントという殻を与えられた英霊はその時点で元の人間性を取り戻せる。だがそれはかつての執念や無念と共にだ」

「無念？」

「ッ……………」

士郎と三月が同時に声を出し、セイバーは何とも言えない表情に一瞬なる。

「想像でもしてみろ。自身の思いを遂げられず死んでも、死してなお人間共のいいよ

うに呼び出される者達の感情を。それもこれも、『聖杯』などと言う物を求めるが故だろうか。」

「でも………先程アーチャーさんは『そんな物くれてやる』と言っていましたね？」

「私には叶えられない願いなどなかった。私は望みを叶えて死んでから英霊となった。故に叶えるべき望みはない」

「そんな………そんな事って………」

「三月？」

「さて、お喋りはここまでにしようか。私もお前達も暇なわけでは無いのだろうか？」

三月が言い続ける前に、アーチャーは姿を消す。

セイバーが周りを見ると衛宮邸の近くの道と知り、警戒を続けながら声を士郎達にかける。

「あまりアーチャーの事を気に病まないで下さい、シロウ。彼の言い分は極端すぎま

——ミツキ！」

セイバーが前方に歩きながら言葉の途中で振り返ると、黒いローブをまとい、鬨體を模した白色の仮面をしたサーヴァントが左手の短剣を電柱柱の上から既に三月へと投擲した後だった。

「へ？」

三月がセイバーの言葉、表情と視線に気付き振り向かえると既に短剣が迫っていた。  
「あ、これヤバイ。二節も間に合わない」

「三月初い初い初い!!!」

気付いた士郎も叫びながら手を盾にするように前に腕を出すそこで彼は悟った。  
「距離があと少し足りない」と。

そこで彼は考えた。

必死に考えた、時間が遅くなるかのような幻覚だった。

「どうすれば守れる」と。

そこで士郎は思った。

「武器さえあればこの足りない要因を補えたのに」と。

「何かないか?! 何か何か何か何か! 守る為の武器がある!」

そこで士郎の脳裏を過ぎったのは先程まで喋っていたアーチャーの双剣だった。

「(トレース、オン!)」

士郎がそう考え、念じた瞬間、途方もない程の痛みと熱が彼の体中を駆け巡り、彼の手の内が光る。

ガキイン!

「ギッ?!」



「なッ?!」

「ほへ?」

金属と金属が激しくぶつかる音が士郎の手の中の何かで髑髏の仮面をしたサーヴァントの短剣の軌道がずらして三月の頬を擦り通る。

髑髏の仮面をしたサーヴァントが舌打ちにも似た声を出し、セイバーが驚きの声を上げ、三月は状況に追い付いていないかのような腑抜けた、意味不明の声を出した。

「ギギッ!」

「待て貴様!」

セイバーが待ったの声をかけるも髑髏の仮面をしたサーヴァントはすぐさま闇の中へと消えて、士郎は安心の息を出しながら手の中の物を手放した。

「ま、間に合った……………」

「に、兄さん……………あ、ありが——え?!」

三月が士郎に再度振り返ると、士郎は彼女の体を覆うかのように寄りかかり、そのまま倒れる。

体格差で三月は士郎の下敷きになるような事に三月は驚いた声を上げる。

「……………（え、えー? な、何これー?）」

【告。 心拍数急激上昇。 安定させマスか?】

「……………お、お、お兄ちゃん? (えー? ちよつとちよつとちよつとー? 何何何何何何?)」

【再度告。 心拍数、更に上昇。 安定させますか?】

三月の耳朶には某漫画で出てくるような「ドドドドドドドド」効果音が鳴り響いていた。

「うゝ……………」

「お兄ちゃん?!」

「シロウ?!」

士郎の苦しそうな声でセイバーと三月は士郎の体を起こし、三月が手を翳し、優しい光が辺りを照らす。

「ミツキ、どうですか?」

『『どう』と聞かれても……………怪我は無いみたいけど…』

そこでホツとするセイバーは士郎の身体を支えながら衛宮邸へと再度歩みを続けた。  
「さっきのはサーヴァントでした」

「へ? で、でも、クラスは? だって、聖杯戦争に呼ばれるのは七騎の筈で…」

「あれは恐らく『アサシン』……………」

「え?! でもでも、アサシンはあのお待さんの筈だよね?!」

「ええ、ですから不可解なのです。帰ったらリンカイリヤスフィールに連絡をする事を推薦します」

そして衛宮邸に変えるなりぐったりしたりした士郎を見た桜は気を失いそうな勢いで倒れかけ、三月がまた体を支えようとして下敷きとなった。

ただ士郎の時と違い色々柔らかかったたのでそれ程苦にはならなかったし、心拍数も極端に上がる事は無かった。

その夜、士郎は突然目が覚めて起きた。

「……………（あれ？俺の部屋の天井？いつ、俺は———）ツ?! グツ……………オ  
ワアアア?!」

とてつもない痛みと体の熱さに目を覚ましたのだった。

このおかげで意識は一気に覚醒し、深夜だと分かった彼は迷惑にならないように枕を噛みながら、くぐもった叫びを夜ずっとあげ続ける。

……………

……………

……………

……………

……

……

……

次の朝、士郎は気が付くと何時の間にか寝ていた（と言うか気を失った）らしく、かなり体が動いたのか毛布と布団が滅茶苦茶だった。

だが痛みは引いていたのには感謝していた。

隣のセイバーの様子を見る為に静かに立ち上がろうとして――

「あれ?」

――ドサリと、士郎は尻餅をつく。

「……??? (おかしいな、体に力が入らない?)」

そう思いながら隣の部屋で誰かが起きる気配を士郎は感じて、起きたセイバーと話そうと開いた襖を見ると――

「ああ、おは――よおわああああ?!」

士郎は咄嗟の事に目を瞑りながら顔を逸らす。

「???」

そこにはパジャマが開けた<sup>はだ</sup>三月がトロロンと、明らかに意識が起きていない顔で士郎の部屋を覗き込もうとしていた。彼女の上半身の白い肌が見えた。



——うまく動かない体に苦戦していた。

「あ、おはようございます先輩」

「あ、ああ。おはよう桜」

「おはようございます、シロウに桜」

「おはよう、セイバー」

「おはようございます、セイバーさん」

「ふわぁ、おはよう」

「ッ！ お、おはよう三月」

眠たそうな三月の声に士郎は顔をプイッと逸らしながら挨拶し返す。

「???」

三月（本日はツインテールスタイル）は？マークを上げながら朝御飯の用意を士郎と桜と共にしたが、士郎の動きが何時もより違う事に他の二人が気付き、士郎には居間で休んでくれと言われた。

その朝もずっと士郎の行動に違和感を持った他の皆に聞かれるが、士郎はただ「体がだるい」とだけ言い、あまり三月の方を直視できなかった。

そしてそのまま学校に登校している間もフラフラしていた士郎を心配した桜と三月だった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

その日、士郎の状態を見かねた三月は凜を探し――

「――衛宮君の調子が悪い？」

「うん。何か朝から動きがぎこちなくて、私を見るのを躊躇しているというか、見ないようになっているというか」

「.....ふん？」

凜が何か面白くなさそうな表情で三月を見る。が、無反応の三月に飽きたのか、溜息を出し中ながら次の質問をする。

「で、昨日は何かあったのかしら？」

と凜が声を変えず聞きながらジュースを飲み――

「アサシンに殺されかけた」

——三月が何もないかのように答えた。

「ブフウ?! ゲホツゲホツゲホ!」

凧は飲んでいたジュースを（とうとう）吹き出してむせて、三月は何事も無かったようにハンカチを貸す。

「ちよちよちよちよ——!」

「——上手く点かないストーブの真似?」

「ちつがーう! どうしてそんな大事な事をもっと早く言わないのよ!」

「え? だって失敗したし。あ! この場合は襲われたって言うんだっけ?」

凧は頭を抱え、数秒後三月に説明を求める。

三月出来るだけアーチャーと別れた後の事を凧に言った。

自分に短剣が投げられ、当たる直前に士郎が短剣を作り、それを弾いたと。

「……………遠坂さん?」

またもや頭を抱える凧に三月が声をかける。

「……………三月、衛宮君って『強化』以外に魔術が使えたのかしら?」

「さあ???」

「さ、『さあ』って……………」

「士郎はあまり魔術の事を話したからないから。『自分には才能が無い』って、前に低



い自己評価宣言していたから励ましていたけど」

「……………今日の昼、少し衛宮邸にお邪魔するわね」

「へ？」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……

「ただいまー」

昼ご飯の準備をしていた士郎が玄関に出る。

「ああ、お帰り三月……………に遠坂？」

三月と共に衛宮邸に来た凜に士郎は困惑する。

そして凜が笑っているのに何故か怒っているような雰囲気には彼は更に困惑する。

「衛宮君、ちよつと良いかしら？」

「え？ おい遠坂何——」

ドオン！

凜が所謂『壁ドン』を士郎にし、青筋をこめかみに浮かべながら笑う。

「『オウ、衛宮ンとこの小僧。面あちつたあ貸せや』第1話にて、三月のアドバイスよ  
り」

パチパチパチパチと見事な壁ドン＋ドスの効いた声に拍手する三月。

「おおお〜」

「……………ハイ」

ちなみに桜は買い出しに出ていて衛宮邸に今はいない。

## 第19話 月下美人（達）

セイバー運営、アーチャー運営 視点

居間にて士郎は正座を凜にされていた。

三月は凜の怒りが少しでも収まるならと思ひ、高級な方のお茶と茶菓子の用意をいそいそとしていた。

「で？ 昨日アサシンに襲われたと聞いたのだけど？」

「あ、ああそうだな——」

「——『ああそうだな』じゃ！ ないわよ！」

「で、でも失敗に終わったんだし、これからはより警戒——」

「———そういう問題じゃない！」

「リン、気持ちは大変良く分かりますが落ち着いてください」

「遠坂さん、遠坂さん！ 落ち着いて！ ほら、ほら！ 高級な方のお茶葉を使いました

!! それに茶菓子も！」

「ハッ?! そ、そうね。一瞬我を忘れたわ。お父様を思い出すのよ、『常に余裕を持つて優雅たれ』。優雅たれ優雅たれ優雅たれ優雅たれ優雅たれ——」

最後の方をぼそぼそと深呼吸をして、お茶を啜りながら凜は独り言を続けてから士郎をもう一度見た。

「で? 本当にアサシンだったの?」

「えっと、実は…俺は見えていないんだ」

「見たのは私です、リン。そして前回と特徴が合っていました」

「という事はアサシンが再召喚された? でもそんなのって——いいえ、元々この聖杯戦争には不可解な事が多い、『そういう事もあり得る』と考えた方が良いわね。何せ、アーチャーの言っていた『サーヴァントによるサーヴァント召喚』もあつたくらいだし。それはそれとして衛宮君、体の調子が悪いんですって?」

「あれ? 俺、遠坂に話したっけ?」

「三月が相談しに来たのよ。それにあんた、昨日何かしたでしょ? 『強化』以外に」  
士郎がジト目で三月を見ると『ごつめくん☆』と言うような困った顔をし、手を合わせ、士郎に頭を下げていた。

士郎は朝の出来事を思い出し、顔を赤くして三月から目を逸らして凜に答える。

「ツ…………『投影』だよ。昨日は短剣を『投影』したんだ」



るわ！ 主にネチネチとした仕返しを！」

『うげ、それはそれでメンドイ』

『もう一人分の食事で済むのなら安いでしょ?!』

アイコンタクトは一瞬、そして決断(?)も一瞬。

『触らぬ神小悪魔に祟りなし』。

「……ま、今更もう一人分増やしても大差ないか」

「私も手伝うから！ と言うか桜なかなか帰って来ないね？」

「ん？ ああ、今日は遠出するって言っていたから昼は別々だ」

「ふーん？」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そしてお昼ご飯の後、士郎達は未だに続く昏睡者と行方不明者事件の事に話し合っ

いた。

状況の整理と、今後の方針について。

「キャスターがいらないのにこの事件が続くという事は、彼女以外にこれらを行っていた。

今の状況で考えられるのはキャスターのしようとしていた事を誰かが引き継いだ。

または何か別の理由でしている。聖杯戦争と関係しているか否かはまだ不明だけ

どぼ関係しているわね、タイミング的に」

「そうだな……魔術でこんな事をするのは確か足りない魔力を補う為だろ？」

「そうね。それが単なる『貯蔵』か、『行使』の為かはまだ分からないけどこの事件すべてがそれと関わっているのなら厄介な事に変わりは無いわ」

「事件は全部夜の間起きているんだっけ？」

「ええ、だから私とアーチャーは夜の巡回に回っているのだけど……」

「あ、そう言えば慎二君に声をかけたら？」

「ああ！ そう言えば慎二達も夜、遠坂みたいな事をしているんだっけ？ アイツにも

協力して貰おう」

「え、」

「??? どうしたの、遠坂さん？ 何か物凄い顔になっているけど」

「いや、相も変わらずあのワカメの事を高くかっているなーって……」

「それほどアイツの事嫌いなのか？」

「嫌いと言うか、苦手と言うか……………」

「……………わかった、取り敢えず俺とセイバーも明日からは夜の巡回に回る事にしよう。もし事件の犯人らしき奴がいたら対処するか、互いを呼ぶかにして。そして慎二に会ったらこの事を伝えるってどうだ？」

「そ、それなら……………まあ良いかな？」

「あ。 士郎、私は？ やっぱりコアラ抱き？」

「え？ 何でそうなるのさ？ そもそも三月には——」

「——一緒に連れられた方が良いわよ？ 昨日のサーヴァントを『アサシン』と仮定して、一度狙われたのならばまだ狙われている可能性大よ。同じサーヴァントの近くにいた方が良いわ。 それにある程度衛宮君よりは魔術が使える三月がいた方が戦略的に有利よ」

「よし。 じゃあ時間も時間だし、晩御飯の用意を」

士郎はチラチラと凜の方を見る。

「時間も遅くなって来ているようだし、晩御飯の用意を」

士郎はまたチラチラと凜の方を見る。 が、彼女は依然と動く気配が無い。

「（あ、ヤな予感）」



「あら、私にお気になさらずに衛宮君。　　と言うか手伝いましょうか？」

「ちよ、どういう事だ？」

「もうお昼もご馳走になったし、この時間だから晩御飯もご一緒してもあまり変わらな  
いじゃない？」

「いやだから……………後で桜が帰って来て、その上に藤姉が来る予定だからな？　二人  
の説得は遠坂がやれよ？」

「あら、そんなの想定内よ？」

「兄さん」

士郎は声をかけた三月の方を期待の目で見る。

もしかしてこの状況の打破を——

「——胃薬持ってくるわ」

そしてガクリと肩が落ちる＋胃が痛くなる士郎に三月が胃薬を持ってきて、晩御飯の  
用意を手伝う。

そして玄関が開く音に、凜が迎えに行く——

「ただいま……………あ、誰かの靴——え？　と、遠坂…先輩？」

「あら、お帰りなさい桜。　　バッグ持つの、手伝いましょうか？」

「な、何で……………」

玄関から聞こえてくる桜の痛々しい声に士郎は胃を手で押さえる。

「三月……俺また胃が痛くなつてきた」

「兄さん、私が目意しておくから休んでいたらどう?」

「……わりいな、三月。お言葉に甘えるよ」

そして居間で休む士郎は時折三月の方を見ると、彼女の背中姿で金髪のツイントールがキツチンでユラユラ動いていたのをボーッと見る。

ガタン!

ダイニングの襖を勢いよく開けながら士郎に桜は迫る。

「あ、あの、先輩?! 遠坂先輩が——」

「——あ、ああ。おかえり桜。遠坂は俺の体調が悪いつて三月から聞いたんだ」

「ええ。そういう事で、今日の晩御飯は私も一緒にするわ」

桜は納得しているような、納得していないような顔で士郎、凜、三月、士郎、と視線を動かしていた。

「あ! で、でも今日は藤村先生も——」

「————— たつだいまく!」

「あら、『噂をすれば何とやら』つていうのかしら?」

三月が鍋をダイニングのちゃぶ台に乗せるといふタイミングで、機嫌な大河がそこ

に姿を現す。

「お帰り藤姉〜」

「は〜い、三月ちゃん！ 今日のメニューは何〜？」

「お帰り藤姉、今夜は鍋だよ」

「うおっほー！ やった〜！ 土郎最高〜！」

「お、お帰りなさい…藤村先生」

「うん、桜ちゃんは今日も可愛いな〜」

「お邪魔しています、藤村先生」

「ええ、遠坂さ…ん…も？」

座った大河がギギギギギと言う効果音を出すような動きで首を回し、ぎごちなく凜の方を見る。

「……………」

「………またもギギギギギと言う効果音が出そうな首の回し方で今度は土郎の方へと向く。

「……………し・ろ・う？」

「は、話せばわかる藤姉！」

「土郎はもう毎度毎度毎度——！」

「——藤村先生、それを続ける前に。無礼を承知で申し上げるのですが、今日は夕

飯をご馳走になつてゐるだけなのですが？ 藤村先生こそ、衛宮君の家にチャイムも無しに上がるのは教師としてどうかと」

「わ、わ、私は……私はこの家の監督役なんです！ 土郎とみと——衛宮君達のお父さんから任されてゐるんですから、家族も同然なの！」

「そうなんですか。あと先生？ 呼びにくいのでしたら無理をなさらずに。別に先生が衛宮君をどう呼ぼうと私には関係ありませんから」

「……………えー、遠坂さん？ も、もしかして桜ちゃんや三月ちゃん達から色々聞いています〜？」

「先生のご想像にお任せします♡」

狼狽え始める大河に対して、凜はニツコリと、実にいい笑顔と共に大河に答えた。

そして桜を見る大河に、桜はブンブンと首を力強く横に振り、次に大河は三月を見た。そして三月の目は泳いでいたのだった。

『三月ちゃん、後でお話があります』

『自分は無実です！』

『だまらっしゃい、後で面貸せやゴラアアア！』

『ひいひいん！』

と言うアイコンタクト会話が三月と大河の間に流れた。

そして夕食後、少なくとも皿洗いはしたいと言う土郎が皿を割る。このような事は大河もビックリで、「もしかして遠坂さんと言う部外者がいるから緊張しているのでは？」と挑発的に大河が凜に向けて言った。そして見かねていた凜が変わると言い、土郎と桜は断るが凜は「ご馳走になったのだし、せめてこれ位はしたい」という事で話は終わった。

その後、三月がガミガミと大河に説教を受けている間に土郎は風呂から暗い、月光で照らされた廊下に出ると庭の近くで外の雪を見ていた凜の姿があった。

やはり『ミス・パーフェクト』の二つ名は伊達ではなく、土郎は思わずその姿に見惚れていた。

そして女性の部分らに視線が行きそうになり、目を閉じて頭を振った。

「何なんだ今日は？　今までこういう風に考えた事なかったのに………やっぱり朝のアレで意識したのか？」

「？　あら衛宮君。そろそろ帰ろうかと思っていたんだけど……少し話をしないかしら？」

そこで土郎と凜は話す。

魔術師として育った凜。

一般人として育った土郎。

「自分は快樂主義者」で楽しくなければやらない、と主張する凜。

「自分はじいさんのような『正義の味方』を目指していた」と自分の夢を凜に話した士郎。そして彼にとって魔術は『楽しい』ではなく、『正義の味方』になる『手段』として見ていた事を凜は知る。

そして彼女は驚愕する。

「じゃ、じゃあ何?! 貴方は自分の為に魔術を習ったんじゃないの?!」

「え? あ、いや、自分の為じゃないのか結局これって? 誰かの為になれば、俺だって嬉しいんだから」

「……衛宮君、良い? それは『嬉しい』であって『楽しい』とは違うのよ? 貴方自身は『楽しい』って思った事とか無いの?」

「……………」

士郎は考える。深く考える。

自分が『楽しい』……………」

それは……………」

『考えては駄目だ』と子供の頃は思っていた。

あんなに大勢の人が死んで、自分だけが楽しんで生きるなんて、虫の良すぎる話と思っていた。

でも今いざとなつて、面と向かい、そう聞かれると……………

「……………分からない。分からないよ、遠坂。俺に、そんな資格はあるのか？」

「衛宮君……………あーもうー！ どうして貴方達はこうも似

ているのよー！」

「と、遠坂？」

「『似てる、似てる』とは思っていたけど、ここまで来るともう『同じ』よ！ 見ている

こつちが痛いわ！」

そう言い残し、凜はドスドスと何処に行く。

困惑し続ける士郎を残して。

「??？」

その後、士郎は何時も通り、夜の訓練に励んでいた。『強化』の最適化と速度上昇を。

ただ、三月が以前にも言った通り進歩は前から芳しくなかった上に、今夜は体の動きが鈍かったので『強化』をする物体を持つ事もままならなかったほどに。

「シロウ、今夜も魔術の鍛錬ですか？」

そこにセイバーが現れた。

「まあ、欠かさずやれつて言うのがじいさんの教えだったからな。 とうか教えてくれたのはそれだけだったから…」

「何？ では、キリツグは魔術師としての知識も在り方も教授されてはいないのですか？」

「ああ、本人は言っていた。『自分は魔術師らしくない』って。ほんと、初めて会った時は『頼れる大人』の雰囲気か不思議なくらい子供っぽい部分があった。『楽しむ時は思いつき楽しめ』なんて言って、子供みたいにはしゃいでいたし……でも、自由で全然魔術師っぽくなくても……俺にとってはじいさんこそが本当の『魔法使い』だったんだ……うん、言葉にするなら『憧れていた』かな？」

「シロウ、貴方の身体の調子は？」

「……………やっぱり気になる程、か。恐らく、昨夜の『投影』の反動だと思う」

土蔵の入り口にアーチャーが現れ、セイバーはすぐに自分を彼と土蔵の間に入れ、警戒する。

『『投影』をしたと凜から聞いてはいたが、やはりそうか』

「何用だ、アーチャー？ 我らはまだ不可侵の条約を結んでいる筈」

「凜に頼まれ事をされて帰って来たら話し声が聞こえたものでな」

「用件はなんだよ、アーチャー。お前の事だから『話し声が聞こえて来たからただ挨拶しに来た』って訳でもないだろう？」

「珍しく話が早いな。何、力になれるかもしれないだけの事。感覚が鈍く、胴体感覚が



動く度にずれているのだろうか?」

アーチャーが士郎へと歩くが、セイバーは微動だにせず、警告を出す。

「生まれ、アーチャー。それ以上進むのならば相応の覚悟をしてもらおう」

「良い、セイバー。もしこいつが俺に害を成すのならワザワザ声何か掛けたりしないさ」

「フ、つくづく今日は珍しく話が早いな。何かあつたのか?」

一瞬今日の朝の三月と、さつき会った凜の姿達が脳裏を過ぎる。

「な、何でも無い!」

「??? さて、背中を見せて貰えないだろうか?」

士郎はシャツを脱ぐと、アーチャーは自分の手を士郎の背中に合わせる。

「ほう、やはりしぶとい奴だな。壊死していると思つたが、単に閉じていたものを開いただけか。お前の状態は一時的なものだ」

「グツ…閉じていたものが…開いた?」

「要するに、本来使われる筈の回路がお前の中で今までずっと眠っていて、放棄されていたのだ。そしてその回路に全開で魔力を通した結果、回路そのものが驚いている状態。

これでお前の回路は現役に戻つた、という事だ。フン!」

「ウグツ?!」

アーチャーが魔力を士郎に流すと、緑色の線みtainな模様が一時的に士郎の身体を巡り、消える。

アーチャーは「自分の仕事は終わった」と言うかのように土蔵を後にしようとする。「数日もすれば回復するだろう。そして体が万全に動ける頃には以前よりは幾分マシな魔術師になっているだろうさ」

「……………詳しいのですね、アーチャー」

セイバーの言葉にアーチャーが歩みを止める。

「似たような経験が私自身にあつて、な。初めは片腕を持つていかれそうになった」

「アーチャー……………」

「礼は……………言わねえぞ……………」

「それこそこちらにとつてはいい迷惑だ……………エミヤシロウ、お前の『理想』は何だ？」

「アーチャー？」

「……………」

「……………いや、良い。忘れてくれ」

「待て、アーチャー！ お前は…お前は何の為に戦っているんだ？」

そのまま歩こうとしたアーチャーが振り返らずにまた止まる。

「お前は『願いは無い』と言った、でもこの聖杯戦争に召喚された。

だつたら――

！」

「——知れた事。私の戦う意義はただ己の為のみ。そういうお前はどうか、エ

ミヤシロウ？」

「……俺の……」

「お前の欲望が『誰も傷つけない』という『理想』であるのなら勝手にしろ。ただしそれが本当に『お前自身』の欲望ならばな。自分の意志で戦うのならその罪も罰も全て自分が生み出したもので、背負う事すら『理想』の内だ」

「俺自身の…………」

「だがそれが借り物の意志……『欲望』であるのなら、お前の唱える『理想』は『空想』に堕ちるだろう。どんな戦いには理由がある。だがそれは『理想』であつてはならない、決して。何故ならその為に戦うのなら救えるのは『理想』だけだ、そしてそこに『人』を助ける道はない。戦う意義とは『何かを助きたい』という『願望』だ」

ここで初めてアーチャーは士郎に振りかえり、彼の目は士郎の目を見る。

「少なくともお前にとつてはそうだろう、エミヤシロウ？　だが『他者による救い』は『救い』ではない。そんなものは金貨と同じで、使えば持ち手が変わるようなだけだ。

確かに誰かを救うなどという望みは達成出来るだろう。だがそこに『お前自身を救う』という望みが無い。よつてお前はお前のものでない、『借り物の理想』を抱いては

死ぬまでその行為を繰り返す。だから『無意味』なんだ、お前の『理想』は。人助  
けの果てには何も無い。結局他人も自分も救えない、偽りのような人生が待っている  
だけだ。そんな者には理想を抱きながら溺死する末路が待っている」

アーチャーは今度こそ土蔵を後にし、姿を消し、士郎は拳を強く握る。

「……………そんなの…」

「シロウ？」

「そんなの、結局何が足りないからじゃないのか?！」

士郎は半分八つ当たりのように叫び、半分はアーチャーの指摘した「借り物の理想」こ  
そ『要因不足』の一つと彼は感じ始めた。

そしてこの後、凜も衛宮邸に泊まる事になったと知る士郎。

「何でさ?! というか何時の間にかそんな話になったのさ?！」

そこには凜が私服姿で腕を組み、勝ち誇ったような顔で士郎を見ていた。

ドヤ顔とも言う。

「アーチャーに宿泊道具一式を持ってこさせたの。それに藤村先生の許可もちやんと  
貰ってあるから」

「え? ちよ、待てって——」

「——私は右の客間を借りるわ」

肩をがつくりと落とす土郎。

そして二人からは見えない周り角では不服そうな桜がこの会話を聞いていた。

彼女は拳を胸近くで握り締めながらその場を後にした。

三月は流石に疲れが感じ始めていたのか就寝する用意を既に始めて、土郎は今夜の魔術の鍛錬を続けるのはやめた方が良いと感じたのか、土蔵で修理していたストーブを地味に魔術無しで取り掛かっていた。

《私の戦う意義はただ己の為のみだ。　そういうお前はどうか、エミヤシロウ？》

未だに土郎の頭をグルグルと回るアーチャーの言葉を一旦忘れようと始めたストーブ修理だが、逆に土蔵だった為考えさせられる土郎。

《お前はお前のものでない、『借り物の理想』を抱いては死ぬまでその行為を繰り返す。　だから『無意味』なんだ、お前の『理想』は。　人助けの果てには何も無い。

結局他人も自分も救えない、偽りのような人生が待っているだけだ。　そんな者には理想を抱きながら溺死する末路が待っている》

これにより彼は更に集中してストーブを何とか修理する事に成功し、試していた所に閉まっていた土蔵の扉に誰かがノックをする。

コンコン。

「あれ？　三月かな？　はい？」



『一度何かすると決めたらやる』って感じですよ」

「……………三月先輩も頑固だったんですね」

「『も』って…もしかして俺か?」

「そうですよ? 物分かりが良いようで、実は頑固で強引なんですよ? それこそ……………それこそ私みたいな引つ込み思案を無理矢理引つ張るような……………」

「あー、確かに。三月が色々とすまなかつたな、桜」

「あら、私は三月先輩だけではなく先輩の事も言っていたんですけど?」

「え? 最後の方もか?」

「そうですよ?」

桜がクスクスと笑う、士郎は恥ずかしそうに苦笑いする。

「……………私、昔は『本当の気持ち』を言わなければ周りは全部上手く行くと、思っていたんです。でも……………先輩達のおかげで少し勇気をもらって頑張れたんです」

「桜?」

「先輩……………藤村先生に昔聞いた事なんですけど……………三月先輩だけじゃなくて、先輩も養子なんですよね? この家に他所から引き取られて……………」

「? そうだけど?」

「その……………先輩……………達は気にしていないんですか? 知らない家に貰われ

て、嫌な事もあつたんじゃないですか？」

「……………『解離性健忘』」

聞きなれない単語に桜は顔を士郎に向け、キョトンとする。

「か、かいり…?」

「『解離性健忘』。医者が言うには『記憶喪失』の類だそうだ」

桜の目が見開いて士郎の顔から視線が外されず、ただ彼を見ていた。

「そ、それは——」

「——俺の場合はまだ覚えているモノもあつたけど三月の場合、当時何も覚えていなかったんだ。自分が誰かも、肉親も、友人も、思い出も、言葉とか何もかもな」

「……………わ、私……………知らなかった……………です……………」

「まあ、言いふらす事でもないからな」

「でも……………その……………楽しかったんですか？」

「ん? この家の事か？」

「……………はい」

「(あれ、これって遠坂にも聞かれたな?) そうだな……………分からない。俺にはその資格があるのか分からない。だけど俺はじいさんのようになりたい」

「……………正義の味方、ですね」



「ああ……………子供っぽいかな？」

「いいえ、私には……………『かつこいい』ですよ？」

それから二人は黙り込み、桜がまた口を開ける。

「もう一つ、訊いていいですか先輩？」

「ああ、いいぞ」

「先輩は……………皆の幸せの為に自分の知っている誰かが大怪我したりして、それが無ければ皆が不幸になるとしたらどう思いますか？」

「俺は怒る」

士郎がほぼ即答して、話を続ける。

「それで皆が幸せになるのは嘘だ。だって、少なくとも『俺』は不幸だ」

「え。で、でもそうしなければ——」

「——なら他の方法を探すまでだ」

「……………それでも……………方法が無かったら？」

「だったらそうさせない為に頑張るだけだ」

「先輩？」

士郎が多少の苛立ちを込めた声に桜が気になり声をかけるが、士郎はただストーブを見ていた。

「自分の出来る事を全部やって、頑張れば必ず方法はある筈なんだ。（そうだ、諦めたらそこで全部終わりなんだ！ だったらそうなら無い様に立ち回るだけだ！

『正義の味方』だってそうだ！）」

「先輩……………」

ストーブを力強く睨む士郎を桜はどこか切ない表情で沈んでいたのを士郎は気付かなかった。

「……………（ああ、やっぱり先輩はそう言うんですね）」

そのまま静かな時間が通り、流石に夜遅くなってきたので桜は何時もの様に衛宮邸に泊まり、士郎は自分の部屋に戻り就寝する前にセイバーに声をかける。

「セイバー、いるか？」

襖を士郎が開けるとそこには二の布団があり、ババ抜きをセイバーとしていた。パジャマ姿の三月がいた。

「あ、兄さんヤツホー」

「お疲れ様です、シロウ。 どうしたのですか？」

項垂れる士郎をセイバーが心配する。

「……………何で三月がここに？ というか今朝もそうだったな？」

「ああ、うん。セイバーがこうした方が良いつて」

「……………何でか聞いていいかセイバー？ 朝はビックリしたぞ？」

「ハイ。アサシン…またはそれに類する程の気配を遮断する敵がまだいると分かった以上、マスタであるシロウと一度は狙われたミツキも守らねばならないと思つての事で、私が彼女に提案しました。伝えるのが遅れて申し訳ない、シロウ」

「そ、そうか。(今朝のはセイバーの所為だったのか……………)」

「ごめんねセイバー、私つて寝相悪かつたでしょ？」

「…(いや、あれは『悪い』どころじゃなかつた気がする)」

「いえ、気にする事はありませんミツキ。寧ろ健康の証と思つていきますので」

「…………(確かに前よりは健康的な肌——じゃなくて!)こ、今度からは先に言つてくれないかな?!」

「ハイ、もちろんですシロウ」

「じゃあお休み、兄さん！」

そしてその夜、隣でキヤツキヤツと騒ぐ三月の声が気になつて士郎はその夜も寝るのが遅くなつたが不思議とその間アーチャーの言葉が頭に浮かび来なかつた。

## 第20話 夢と低血圧と中華と 『お姉ちゃん』

## アーチャー運営 視点

凜はその夜、衛宮邸の結界が優秀な割に明確な外敵に対して余りにもお粗末だったのを、「せめて自分の借りている部屋は」と思い、新たに結界を施している最中にアーチャーから連絡が入った。

『凜、いつまで遊んでいるつもりだ？』

「あら？ 魔術師たるもの、自分の身を守る結界ぐらい——」

『——そうではなくて今の状況の事だ。他の者と協力関係になる事自体は悪くない。だが君の場合、選んだ手段と工房場所が悪すぎる』

「前にも言ったけれど、衛宮君なら何があっても裏切らないと思うし、裏切ったとしても程度が知れているわ。私の能力範囲内で充分対処可能よ。それに場所に関してはあの二人がいるもの、出来るだけ近くに居れば——」

『———そうかな？ ここには「アレ」が有るのが大体の理由かと思ったのだが、見

当違いか?』

ピクリと凜の作業する手が一瞬止まる。

『魔術師の君の事だ。 “アレ” を解析し、応用出来れば君の立場はかなり有利になるのではないか?』

「……………そうね。興味が無いと言ったら嘘になるわ。でもまずは遠坂の当主としてこの異常な聖杯戦争を調べるのと起こっている事件を止めるのが先よ。幸い、キャスターという厄介な魔術師は排除できた。あと、アーチャー——」

凜が作業を再開する。

「——三月を『アレ』呼ばわりしないで頂戴」

『私は治癒薬の方を話していたつもりだが、はて?』

のらりくらりと答え続けるアーチャーに凜は嫌味たつぷりの声で答えた。

「どうだか。貴方が言うと、どちらにも聞こえくるわ……………アーチャー?」

アーチャーから予想していた答えが返ってこない事に凜は頭を傾げる。

だがそんな日もあるだろうと思つた凜は結界の作業を終えて、就寝する。

三月は夢を見た。

何時もの、自分一人だけがいる景色ではなく。

何時もの、自分が何度も酷い目に会う経験ではなく。

今回は、少し違った。

『体は——で出来ている』。

知らない声で復唱していて、知らない場所で、知らない人達が死んでいった。

それはどこかかつてのおじさん切の見た風景のようだった。

今では遠い、遠い記憶。胸の奥に閉まった記憶が呼び起されたのかと三月は思っ

た。

だが場所も時代もその人達の装備さえも関連性は無く、バラバラで、終わりが来るとすぐさま次の場に居た。

その有様が余りにも機械的で、どこか親しみさえ覚えた。

だがそう思った瞬間、ザワリ付くような感覚に三月は目を覚まし、何時も通りに寝相の悪さで布団から出ていて部屋の端の壁側に横たわっていた。

「……………ぎゅー」

そして寒さで一気に意識は覚醒していた。

せめてもの救いは今回、パジャマが開けていなかった事か。

衛宮士郎 視点

士郎は夢を見ていた。

自分はどこかの緑に満ちた平原で立っていて、目の前には不毛な地が続いていた。

それはまるで極端に世界自体に『線』が引かれて、自分がいるのは『生きている地』で線の『向こう側』が『死んでいる地』のようだった。

後ろに心配がすると思えば振り返ると、そこには自分の知っている友人達や知り合いの姿があった。自分は何でこんなところに立っているのだろうかと思う中、不毛な地の方へと再度視線を送るとそこには自分の知っている人の後ろ姿があつてその地を一人で歩いていた、士郎は手を伸ばし――

――士郎は目を覚ました。

「……………何だったんだらう？」

「……………ささぶー！」

隣の部屋から三月の声が聞こえて、士郎は体を起こした。

「……………三月？」

襖が開いて、士郎は先日の姿を思い出して顔を逸らし、襖がまた閉まる音がした。

「おはよう、兄さん。 って、何でこつち向かないの？」

「……………この間、お前の寝相凄かったぞ？ パジャマのボタンが外れるくらい」

「あれ？ そうだっけ？ ……………でも今回は大丈夫よ？」

そして士郎は思い出す。

「その……………三月って……………」

「うん？」

「下着履いていないのか？」とは言えなかった。

「じゃあ、私先に出ているね。 時間になったら道場に行くから」

三月の気配が士郎の部屋を出ていくと、彼はセイバーがまだ眠っているのを確認した

後、何時もの朝が――

「――ほら遠坂さん！ シャンとして！」

「ん……………後……………五分……………」

訂正。何時もの朝では無かった。

リボンのしていない黒髪がぼさぼさしていて、明らかに寝起きに状態の凜を三月が支



えていた。

「あの………私は朝御飯の用意をして置きますから」

「助かる〜！ 桜ちゃんほんつと良い子になったわ〜♪」

「いえ、これも先輩達のおかげですから」

「んあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

未だに全然意識の覚醒していない凜を連れて次々と朝の支度をさせる三月に桜が苦笑いを浮かべていた。

「おはよう桜、すまないな朝から色々と」

「いえ。 私は……大丈夫です」

聖杯戦争が活発的に行われていないとは言え、アサシン（またはそれに類する者が健在の事）や、初日からほぼ姿を見せていないランサーなどの不確定要素がまだあるなか、稽古は継続していた。

夜の予定してある巡回もあるので自衛手段と戦いの中で冷静な考えが出来るように。

そしてその朝の稽古にセイバーが士郎達を褒めていた。

「二人共には驚きました。 まさか数日の間にこれだけ腕を上げるとは」

「え？ そうか？」

「はい。 昨日の稽古より数段腕が上がっていたので思わず少し本気を出しそうになっ

たくらいです」

「あ、じゃあやつぱりあの『ブワツ!』ってした風の流れはセイバーなの?」

「はい。あれは内側に貯めてある魔力を一気に放出し、一時的に自分の能力を上げる手段です」

「あ、じゃあ『プチ瞬間激強化』みたいな?」

「な、何か三月の思い浮かぶネーミングセンスって安直だな」

「それはおじさん切の所為■とと思って」

「ですが三月、本当に身体の様子は大丈夫ですか? 私が言うのも何ですが、無理はしていませんか?」

「だーいじょうぶだつて! もうほんと全然調子が良いから! 何なら第二回戦行つても良いくらい!」

「ほう?」

三月の宣言に目を細めるセイバー。

そして再開される二回戦――

「――でやああああ!」

「フーン!」

ドオン、ドオンと重い音が道場から響き、飛ぶ風圧に道場の窓と扉はガタガタ音を立

てて、士郎の髪の毛は揺らいでいた。

「(あー、何かセイバーが二人いるみたいだー)」

若干現実逃避をし始める士郎の目の前には金髪の少女(?)が二人激しい攻防を交えていた。

竹刀とは思えないほど重い一撃を両方が繰り出し、笑いながら。

「流石セイバー! 凜が羨ましがる訳ね!」

「ミツキこそ! 良く私の剣筋をここまで再現しています!」

「実際には流している方が多いんだけど、ねツツ!!」

流石に場所を二人は意識をしているのか、道場自体は傷ついていない。

だが――

バキイ!

「――あ」

セイバーと三月が同時に声を出して、手の中の竹刀だったモノを見る。

「あちやく、遂にやつちやつたか」

「(ご、ご)めん兄さん!」

士郎に体が申し訳なきように畏まり、顔がシヨボシヨボし始める三月。

「申し訳ないです、シロウ」

そして同じく申し訳なきように頭を下げるセイバー、そして前回三月が言った様にハナハナと項垂れるセイバーのアホ毛が彼女の心境を表していた。

「い、いや良いんだよ。竹刀なんてまだあるし、買えば良いからさ」

「み、皆さ〜ん。あ、朝御飯の用意が出来ました」

道場の外から来た桜の声にセイバーのアホ毛はピンツ！と跳ね上がったブンブンと元氣よく動く。

「では本日の稽古はここままでどうでしょうか、シロウ？」

「あ、ああ。先に行つてくれセイバー。三月と相談したい事があるから、皆には先に食べててくれて言つてくれ」

「そうですか。ではそのように皆に伝えてきます」

セイバーが道場の後をすると彼は竹刀の片付けをしていた三月に声をかけた。

「三月、少し相談に乗つてくれるか？」

「んー？ なーにー、兄さん？」

「朝御飯の後、俺の鍛錬に付き合つてくれないか？」

「セイバーじゃなくて？」

「ああ、そつちの鍛錬じゃなくて——」

土郎の頼みを（何時もの様に）受けて即答する三月と彼はその後久しく嗅いでいない

香辛料に頭を傾げる。

「あれ？ 何の匂いだこれ？」

「……………ラー油？」

ダイニングの方に行くとか何か勝ち誇ったような凜がドヤ顔で立っていた。

そしてテーブルの上にはありとあらゆる中華料理。

「さあ！ たーんと召し上がりなさい！」

「これ……………遠坂が作ったのか？」

「は、はい……………」

「そうよ！ 先ずは——」

士郎がどこか落ち込んでいるような桜に聞くと肯定の答えが来て、凜が士郎に作ったものの説明し始める。

そして桜の様子に気付いた三月は何か彼女に耳打ちをしていた。

「え?! で、でも」

「いいじゃん！ ちょっとした仕返しよ！ 良い——」

「？」

凜の後ろで話していた二人に気付いた士郎だが未だに喋り続ける凜。

そして——

「あ、ありがとうございます、姉さん」

「ウエ?!」

突然後ろから抱いて来る桜に戸惑う凧は必死にニヤつく顔を止めようとしていた。

「ありがとう、お姉ちゃん♡!」

「ハウ?!♡」

そして二撃目の三月が抱きつき、元気よく声をかけると凧の抵抗が空しく敗れる。

「どう皆? 遠坂さんのにやけ顔?」

三月の注目で皆が見た凧の顔が『ミス・パーフェクト』や普段見る彼女からは程遠いだらけ顔があった。

「「……………ブフウ?!」」

「……………ハツ?!」

凧のあられもないだらけ顔に士郎、桜、セイバーまでもが吹き出し、これによつて凧は現実に戻る。

「(フ、如何に強固なATフィールドとは言え——)——アガツ?!」

三月の頭が凧の両手に掴まれ、ニッコリとした凧の顔が三月の顔に迫った。

「三月ちゃん、ちよ〜つとあつちで話し合いますか?♡」

「きよ、きよ、拒否権——」

「——なんて無いに決まっているじゃない♡」

凜はそのまま三月を（体を頭から持ち上げられて）ダイニングの外に連行される。  
『……………ぎいいやあああああああ！』

「じゃ、じゃあ冷める前に食べようか？」

「そ、そうですね」

「ハイ」

苦笑いを浮かべながら士郎がご飯を食べ始め、桜とセイバーも同じくする。

以前三月が作った激辛麻婆豆腐の印象があつたが驚く程凜の中華料理は美味で、味わいが楽しめた。

帰って来た凜は肌のツヤが良くなっており、逆に三月は若干ゲツソリしていたが料理を食べ始めると何時もの（？）調子に戻った。

衛宮士郎、三月 視点

そしてその後、三月と士郎が薄暗い土蔵で何かをしていた。

「じゃあもう一度行くわよっ？」

「ああ」

土蔵の中が一瞬光、三月の手の中にはアーチャーの双剣が握られていた。それを土郎が手に取るとずしりとした重さが帰って来た。

「やっぱり俺のとは違うな」

「え？ そうなの？」

「ああ、俺のは重みが無いんだ」

土郎は自分と三月の『投影』を比べていた。

今朝の稽古の最後土郎には珍しく、三月に「魔術の鍛錬に付き合ってくれ」と頼んでいた。

三月は一瞬「どうしたものか」と考えたが土郎が大抵の場合こういう風に面と向かって頼むときの彼は『余裕が無い時のみ』と理解していたので（躊躇なく）承った。

そして朝ご飯の後、土蔵に籠ると言った土郎が同時に凜や桜に「邪魔しないでくれ」と頭を下げた時、桜はすぐに同意したが凜は不服だった。

それでも土郎は三月と土蔵に入り、セイバーに見張りを頼んだ。

ちなみにそのセイバーは報酬として三月特製手作りピスケットをポリポリと食べていた。

なおアホ毛はミョンミョン動いていたのでかなり気に入っていたのは誰にでも分かっていた。



土蔵の中で士郎は恐らく三月は『投影』も使えると思い、「アーチャーの双剣を『投影』して見てくれ」と頼むと案の定、三月は士郎が思った通り『投影』をした。

三月は先日見た士郎とアーチャーの剣の出し方を「記録」のログを検索すると割とすぐに『投影魔術』が出てきて、行使した。

そして不思議な感覚に三月が包まれた。それは以前どの魔術を行使した時でも感じた事のない既視感に似ていた。

以上が事の出来事の順番である。

「あ、待って兄さん。体の調子はまだ万全じゃないんでしょう?」

士郎が『投影』しようとするのを三月が止めた。

「まあ、体の痺れは引いたし今は意外と体の調子が良いんだ。一回ぐらいは良いだろ。」

『トレース、オン!』

そして士郎の手には双剣の内一つの片割れが表現されていた。それを士郎はよく見ると溜息を出し、三月に手渡す。

姿形はひどく似ていて、ほぼ同じ。だが敢えて言うのならやはり士郎が言うように重みが違った。

「うーん……………何だろう? 『何が違う』って聞かれたら困る」

「だろ? 何かが違うんだ……………やっぱり俺には——」

「——そんな事ない。兄さんは昔から自分を過小評価し過ぎ。弓何かは兄さんほど上手く射てる人はいない、私も含めてね」

「でもあれは……違うんだ」

「違う???!」

「あれは、魔術の鍛錬の応用だ。弓道で自分を殺して、自分を『無』にするんだ」

「自分を……殺す?」

三月の胸がざわつき始めたが、彼女はそれを振り払うかのように士郎の作り出した短剣を両手で握る。

「私になら……もしかすると分かるかも知れない」

「三月?」

「……………」

三月はただ眼を閉じて集中する。長年意識して使っていないモノを。

「……………告。『干将・莫耶』の模造品が魔力不足にて更に劣るコピー版」

「キタキタキタアア! これだあああ!」

「うわ?! な、何だ三月?! どうしたんだ!」

びっくりする士郎に三月はニカツと笑いながら言う。

「兄さんはただの魔力不足なんだって!」

「……………ハア？」

「これなら遠坂さんに相談すれば何とかかなるかも知れない！」

三月の言葉で気付いた土郎は徐々に笑顔になり、三月を抱きしめた。

「わ?! わ?! わ?!」

「でかした三月！ 流石だ！ これで俺も役に立つかも知れない!!」

【告。 心拍数上昇。 安定させますか？】

「あー、お兄ちゃん？ ちょろつと近い。かな？」

「ん？ うおわ?! す、すまん！」

土郎はすぐに三月を手放して、振り返る。

だがさつき抱きついた時の、一つの違和感が彼の脳裏を過ぎつた。

「……………そう言えば三月ってブラしていなかったな」

「え？ してるよ、私？」

サアーつと血の気が引く土郎の顔は暗い土蔵でもハッキリと分かるくらい青くなっ

ていた。

「……………お、俺……………もしかして声に出していた？」

「ん？ まあ厳密に言うとう——」

そして別にも無い様に延々と言葉を続け、土郎の後ろではシユルシユルと布の擦

る音とかが聞こえた。

「これはブラじやなくてk——」

「そこまでの説明はしなくて良いから！」

「???'」

三月はただ？マークを飛ばすだけだったのだ。

それから糸状のアオガラが二人のいた土蔵に降り立った。

……

……

……

……

……

……

……

太陽が落ち始めた頃に土郎達はアインツベルンの森までタクシーで近づき、森を歩いていった。

朝、イリヤから連絡がありアインツベルン城に来て欲しいと。ただ時間もあり、霊体化出来ないセイバーも居た為、いつも以上に時間を要していた。

前みたいにサーヴァントに支えられ高速で移動するならそこまで時間はかからない。が、少なくとも人目が付く可能性の午前で派手な動きは出来なかった。

もし魔術の秘匿が出来なかった場合、聖杯戦争中であれ魔術協会がすぐに『秘匿』と言う名目上の武力で攻め込み、聖杯戦争関係者全員を殺すかホルマリン漬けにされて標本にされるだろう。

文字通りの『証拠隠滅』と『確保』である。

「怖っ?! 魔術協会怖い!」

これを愚痴っていた三月に説明した凜はジト目で彼女を見る。

「当り前よ。だからマスターは人目の付かない所で戦うのよ」

「そうだったのか。てか、流石に今回は結界や罫に遠坂が巻き込まれる事は無い筈だよな?」

「.....」

「な、無い筈だよな?」

「.....」

「遠坂さん?」

『何故黙る凜? 正直に“あの娘ならやりかねない”と言えば良いだろうに』

「うっさいアーチャー!」

『それより凜、気を付けろ。結界に異常がきているらしい』

「え？」

「そうなの、アーチャーさん？」

聞く三月をアーチャーは答えず、ただ話し続ける。

『先程結界の境界線を越えたがピクリとも反応していない』

「そう言えば……………」

アーチャーが突然姿を現し、すでに双剣を両手に構えていた。

「セイバー、剣を構えろ」

セイバーが私服姿から甲冑に変え、アーチャーとは反対の方向を警戒していた。

「方向が上手く読めません、恐らくはアサシン……………」

「…………凜、ここは私に任せていけ」

「アーチャー？」

「私はこの中で囿に適している、違うか？ それとも——」

「(何であいつ、こつちを見ているんだ?)」

「——他の誰かを囿にするかね？」

「癪に障る言い方。いい、アーチャー？ 深追いはしなくて良いわ。私達の目的を

見失わないで」

「勿論だとも。 走れ！」

アーチャーは双剣をそれぞれ別の方向に投げ、迫って来ていた黒い短剣ダクを叩き落とすと同時に凜達は走り始めた。

残されたアーチャーは双剣を再び両手で握ると笑いながら襲撃者に声をかけた。

「標的を追わなくて良いのかな？ 余裕を持っているのかな？ それとも追えないのかな？」

「……………」

帰って来る沈黙にアーチャーは軽く舌打ちをしながら気配を感じ捉え始めた。

彼の認識ではアサシンは追えなかったのではなく追う必要が無い。

つまりアーチャーが匣を買って出たように、襲撃者も匣、『足止め』だった。

「(ならば早急に終わらせる！)」

アーチャーは弓を出して歪な剣に似た矢を次々と放ち、周りの木の上部部分を吹き飛ばし始めた。

周りの遮蔽物の除去と同時に敵を炙り出す為の行動に彼は出た。

## 第21話 ばーさーかーはさいきようなんだ！

セイバー運営、遠坂凜 視点

士郎、三月、セイバー、凜が走り、城が見えた所で後方から爆発音にも似た音が聞こえて来た。

「後ろはアーチャーに任せて、私達はイリヤスフィールと合流するわよ！」  
「分かった！ セイバーは三月を——」

士郎の言葉が、突然横に飛翔しながら剣を振るうセイバーの動きに遮られる。

セイバーの剣が見えない何かを弾き飛ばすと、鎖のジャラジャラとする音が聞こえた。

「この武器、ライダーか！」

「慎二のサーヴァントが何で?!」

「………忘れたかしら衛宮君、休戦はあくまで『キャスターとアサシンを打倒するまで』。アサシンはともかく、メインのキャスターがいなくなった今無効になっているわ」



『……驚きましたね。聞いていた話よりもっと熱い方と想定していましたが、そのように冷静に考えられるのですね』

「あら、褒めても何も出てこないわよ、ライダー？ 精々ガンドの乱れ撃ちぐらいね」

「あ、久しぶりでーす」

「「三月?! / ミツキ?!」」

三月の何時ものマイペースでのほほんとした姿をまだ見せていないライダーへの挨拶で士郎、凜、セイバーは驚愕する。

『……………』

「貴方、何呑気に挨拶なんかしているの?!」

「そうだぞ三月！ 時と場合を考えろ！」

「え？ でもでも、あんなにかw——」

『——私の受けた命令はサーヴァントの足止めです』

「「……………へ？」」

ポカンとする士郎と三月に凜はセイバーを見る。

「だ、そうよセイバー？」

「分かりました。ではリン達は先を」

「ええ。行くわよ、衛宮君！三月！」

凜が他の二人を引つ張り、セイバーはその場に残る。

「ありがとうございます、ライダー」

『……………何の事ですか？ 私の獲物は貴方——』

「——ですが無用な足止めをあの人々にせずに済みました」

『もう勝った気でのすね……………では——』

先頭を走る凜に土郎は声をかける。

「遠坂、あれは一体何だったんだ?!」

「多分だけどライダーはサーヴァントの足止めを命令されているのを遠回りに私達に伝えたかったのよ! それを理解した私セイバーはとつとと決断しただけ!」

「それって、ライダーは俺達を見逃したかったという事か?」

「多分ね! (それだけじゃないと思うけど……………あのタイミングの事を考えれば——)」

アインツベルン城の城壁に着いて、いざ中へ入ろうとすると途端に中から様々な武具が飛び出て城は瞬く間に穴だらけになっていく。

「イリヤ?!」

「チツ、敵はもう既に中に入っているなんて!」

「イーちゃん!!」

士郎達三人はボロボロになっていくアインツベルン城の中へと突撃する。

バーサーカー運営 視点

時間はその日の昼頃へと戻る。

イリヤスフィール達は過去の聖杯戦争の書類を漁り、同じような異常事態、または通常から外れている文章などを探していた。

そこで見つけたのは第一次から前回の第四次聖杯戦争の結末などだった。

第一次では明確なルールなど無かったものの参加者たちは純粋に聖杯の降臨を目指していたので何事も無く聖杯は出現した。だがいざ完成した聖杯が降臨するとルールが想定されていない上に令呪のシステムの無かった為に冬木市は混沌へと変わり、聖杯は自然に経過時間によって消滅した。

第二次では先の聖杯戦争の教訓からサーヴァントを御する令呪のシステムが第一次の生き残りの一人、マキリ・ゾオルケンが提案し、採用する事となったが聖杯戦争は結

局失敗に終わる。新しい令呪のシステムをよく理解していなかった為、令呪を三画すべて使用するなど、サーヴァントを強要するなどと言居た行為が犯され、サーヴァントの反逆などが出てきて聖杯戦争どころではなかった。

第三次ではさらにルールが細かく決められ繰り広げらるものの、第二次世界大戦直後だった為に、当時の大日本帝国にとって重要な港町の一つであった冬木市の屯駐地の帝国軍とナチスが町の異常に気付き戒厳令を宣言、そして介入した。これにより魔術協会と聖堂教会と共に後に介入し、そして聖堂教会から監督役を配置する事で折り合いをつける事となる。

ここでイリヤには違和感が出た。

第三次聖杯戦争はこれだけ細かく資料などがあるのに、聖杯の器提供者アインツベルンの書類にはただ『聖杯の器が途中で戦闘に巻き込まれ破壊され、聖杯戦争は無効となった』とだけあった。

各運営のサーヴァントの情報や推測、長所短所の推測などがあるのに第三次に至ってはまるでアインツベルンが参加していないような報告書だった。

だがこれはシステム上あり得ない。何故なら聖杯を降臨させる聖杯戦争システム設立当初には「七人のマスターと七騎のサーヴァントを用意、優先的に御三家からマスターを選択し、他四名が選択される」となっている筈。

では第三次にアインツベルンは何を召喚した?

少なくとも「聖杯の器」の報告書があつたという事はアインツベルンは参戦していた筈。

そして遂に第四次聖杯戦争、衛宮切嗣が「聖杯の器」の護衛役と共にマスターとしてアインツベルンに雇われる。

最後には聖杯を手に入れられる一歩手前で衛宮切嗣は聖杯を手放し、アインツベルンを裏切つた。

そう報告書や書類には書いてあるが、イリヤは以前に三月から話を聞かされ、衛宮切嗣を経験した事により、衛宮切嗣の裏切りの原理や聖杯戦争中の行動をある程度解釈できた。

そして彼の降臨した聖杯に対しての圧倒的恐怖と抹消の決意。

これを十年前、冬木市に大きな爪痕を残している「冬木大火災」を照合すると――

「セラ、リズ。アハト翁に大至急連絡を取つて。『第三次聖杯戦争に何を召喚したのか聞くまで聖杯戦争は中断する』、と」

これを聞いたセラは目を見開く。

目の前のイリヤがアインツベルン当主に愚痴どころか、「苦情」を出すと言つたのだ。

それも「役割」に対してストライキレベルの。

「お、お嬢様?! お気は確かですか?!」

「本気よ、セラ。 貴方がやらないのなら私がやる。 こんな状況で聖杯戦争を続けるなんて馬鹿げているわ。 もしかしたら……いえ……とにかく、連絡を送って」

イリヤはささっと何かを紙に書いてから立ち上がり、近くの窓を開けて髪の毛から作った糸状のアオガラにその紙を括り付けると糸状のアオガラは飛び立つ。

「セラがやらないのなら私が送る」 ↑ 棒読み

「リーゼリット?! 貴方まで!」

「イリヤは本気で怒っている。 激おこぶんぶん丸」 ↑ 棒読み

「……………何ですか、それは?」

「三月曰く『すごく笑えるくらい怒っている』という事」 ↑ 棒読み

「クツ、またあの娘ですか?!」

三月の事を思い出したセラの頭に半分反射神経のように痛みが走り、彼女は顔をしかめる。

何せ三月と会ってからのイリヤはともかく、リーゼリットもかなりの影響を受けていた。

自我の希薄な筈の彼女は三月と会ってから生氣と言うか、未発達だが『感情』さえも

芽生え始めていたかのように思えた。

『リーゼリット』。アインツベルンの『ホムンクルス』に似た何か。本来は聖杯として作られたが「失敗作」と印を押され、廃棄処分だった運命を「イリヤの侍女」の役割に収まり延命。ただ元々人間性などを持たせる事を前提にしていなかった為、『ホムンクルス』として機能などの欠陥が目につくほどで、以上に並べた「希薄な自我」も「イリヤ」と言うアインツベルン最高傑作の副産物だった。

始めはリーゼリットの変化はイリヤの変化に由来していたとセラは思っていたが時間が経つにつれ、イリヤとは違うと感じた。

天真爛漫かつ計画的なイリヤに対して、以前のリーゼリットは良く言えば「マイペース」。悪く言えば「イリヤイエスウーマン」。

その様なリーゼリットが自分から「ケーキが欲しい」や、「今日のイリヤにはこっちの服の方が似合うと思う」等々の『意見』を出し始めていた。

この変化に純粹に喜ぶイリヤと違い、セラは三月の事を危険視していた。

「あれだけアインツベルンの『ホムンクルス』に（しかも失敗作に）ただ話すだけで影響を与える存在は何だ？」と思わせるほどに。

しかも主のイリヤは彼女が（自分達が言うのも何だが）人間ではない事に気付きながらも気軽に会おうとしている。

イリヤが良く三月や士郎の事を良く話すのが面白くないのは（あまり）セラには関係が無い（筈）。

「お嬢様。重ねて申し上げますが少年の方はともかく、彼の妹君の方は危険です。距離をもう少し取った方が——」

「——セラ、たまにはイリヤのさせたいようにさせた方が発散になる」 ↑ 棒読み

「ほらー！ リズもこう言っているんだし！ 少しくらいいいじゃない！」

「……………（あの娘、どうにかしないと）」

「それはそうとリズは次彼女が来たときは何のケーキだと思う？」

「シフォンケーキが良い」 ↑ 棒読み

「ええく？ 私はチョコフォンデュ！」

「どちらでもワクワクする」 ↑ 棒読み

「（……………本当にどうにかしないと私が持たないわ！）」

「ズンツ」とした、お腹に来るような感覚が三人を襲い、彼女らは即座に同じ方向を向く。

「お嬢様——」

「——招かれざる客が来たみたいね。リズ、武装を用意して。セラは素敵の遠

見を——」

「ここにいた誰もが想像していなかったであろう、神話の対決に幕が上がる事を。



.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

『遠見』の向こうでは金髪の青年がアインツベルンの森をただ歩いていていた。

「これは?！」

しかしただの森とは訳が違うアインツベルンの森を金髪青年は平然と歩き、罨などをことごとく破るところか無視していたかのように見えた。

発動はしているのだが攻撃が当たる前に何かに対処されていた。

そして青年は『遠見』しているセラを睨むかのように見て、槍が水晶玉を突き抜けてセラの頬を掠る。

「きゃあ?！」

水晶玉は砕け、槍はそのまま部屋の壁に突き刺さって数秒後に光の因子になってから

消える。

「セラ、大丈夫?!」

「わ、私は大丈夫ですお嬢様。私とリーゼリットが時間を稼ぎます。ですから――」

「――」  
さっきの「ズンツ」とした感覚が数回三人を襲い、破られた結界に再度負担がかかるのを彼女らは感じる。

「新手――」

リーゼリットは近くに立てていたハルバードを手に取る。

「イリヤとセラは……………私が守る」

そこには何時もの「棒読みトーン」ではなく、しっかりとした覚悟の籠っていた声で、イリヤとセラは驚く。

「リーゼリット、貴方――」

「だから、逃げて」

「……………嫌だ」

「お嬢様?」

かすかに笑うリーゼリットがイリヤに逃げてと言い、イリヤはそれに異を唱える。

「……………さっき、シロウ達に連絡を送った。だから、私達はここにいるべきよ! 三人

で皆を迎えるの! それに……………バーサーカーが守ってくれる!」

ドゴオン!

イリヤが喋り終わると外から大きな音がした。

まるで壁が粉碎されたような音だった。

「では、この無礼なお客……………いえ、『賊』を城主としてもてなしましょう! 行くわよ、セラ! リズ!」

城の庭園にイリヤ達が着くと、そこには先程水晶玉で見た金髪の青年が屋根の上から懐かしそうな目で下にある庭園を見ながら座っていた。

「十年の時を経ても変わらぬ、か」

イリヤ達はこの青年の放つ空気だけで本能的に感じていた。

この男は圧倒的強者だと。

「イリヤ。セラ。逃げて——」

「む?」

青年が初めてイリヤ達に築いたかのように見て、笑顔になった。

イリヤ達には恐怖の元でしかない笑顔であったが。

そしてセラとリーゼリット、そしてイリヤに対して言葉を送る。

「何かと思えばホームンクルスか。悪くない出来のようだ、人型でありながら自然の嬰

児として成立している。余程良い鑄型で作られたのだろうよ……ん？　ほう、そのお前が聖杯の器を持つ人形か？　ホムンクルスと人間の混ざりものとは………ハ、また酔狂なものを作ったな」

「何と言う血なまぐさい男——！」

セラの苦し紛れのような文句に青年はただ笑う。

「何、そう怯えるな。その畏怖をもつて我への不敬を免罪とする。　そんな二人の召使、命が惜しくば疾く失せよ。　十秒の猶予を与えてやる」

「その言葉は聞けませんね。　お嬢様を外敵からお守りするのが我ら二人の役割——」

「それにイリヤを置いて逃げるなんて死んだ方がマシ」　↑棒読み

「セラ、リズ………」

「フ、魔術師共も学ばぬな。　道具に人の心をつけるなど………所詮人間共では、お前たちの純粹さに報いられんと言うのに——」

「——ッ！　バーサーカー——！」

青年の周りの空気に歪みが生じると、イリヤはほぼ本能的にバーサーカーを霊体化から呼び出す。　すると空気の揺らぎからあらゆる武器が放出され、正面に立ったバーサーカーによって払い落とされる。

「バーサーカー、私達を守って——！」

「お嬢様?! / イリヤ?」

「三人で……………皆でシロウ達を迎えるの!」

青年の笑顔は更に大きくなり、彼が屋根の上で立ち上がる。

「だそうだ。では来るがいい、大英雄! 貴様が相手ならば私の倦怠も晴れるかも知れぬというもの!」

「■■■■■■■■■■!」

ばーさーかーが答えるように咆哮を上げる。

「神話の戦い、ここに再現するとしようではないか!」

青年の周りから様々な武器が飛べ出てばーさーかーへと飛来する。これらをばーさーかーは払い落とす事無く、自らの巨体を盾代わりに使つて後ろの三人を体で守る。

「……………ほう? ではこれはどうか!」

次に放たれた武器をばーさーかーは払い落とす事に取り掛かるが、量が多かつた為、今回はばーさーかーの身体に次々と突き刺さり始め、武器は光の因子になり消滅する。

そしてまだ健在であるばーさーかーを青年は面白そうに見ていた。

「よもや、死から蘇る者がいようとはな。成程、貴様の人生や逸話を宝具として昇華したのか。その様な宝具だけは私の手にはない。業腹だが、貴様には最上級の武器しか通じぬらしいな」

「ここで青年は屋根から庭園に飛び降りるとイリヤはセラとリスに小声で喋る。

「セラ、リス。 シロウ達をここに連れて来て着て頂戴」

「お嬢様を置いて——！」

「——セラ。 私たちは邪魔、行くよ」

「え?! ちよ、ちよつとリーゼリット降ろしなさい——ああああああ?!」

リーゼリットはセラを担ぎ、無理矢理その場から猛スピードで連れ去る。

「……………あの二人を見逃すの?」

そしてイリヤは青年に挑発的に言う。

「もとより俺は退屈しのぎの為にここに来た。 それだけだ」

イリヤはギリつと奥歯を噛む。

『退屈しのぎ』。

この青年は自分のバーサーカーとの戦いをそう呼んだのだ。

それを——

「——曰く、ヘラクレスは十二の難行を乗り越えてその末に神の座に迎えられたという」

イリヤの身体がビクリとする。

何故ならこの青年は先の出来事でバーサーカーの真名を当てていながらも素振りや



イリヤの言葉に自分も入れたのはその小さな方に乗っている期待という言葉から。

イリヤはアインツベルンが千年の生産を継いで完成した「最高傑作」。

もうこれ以上の無い、一族の技術の結晶であり到達点。

だがイリヤは知った。知ってしまった。

自分と言う作品の為に何百、何千と言うホムンクルスが犠牲になったのを。

そして「最高傑作」である為に、その捨て場に出くわしたイリヤは破棄されたホムン

クルス達の残留思念達を拾い上げ、知ってしまった。

イリヤ  
自分の後継機は存在しない。存在しあり得ないと。

イリヤはこの時今よりまだ幼く、ひどく混乱しながら悲しんだ。

何故なら自分が失敗すれば『ホムンクルス製造』と言う研鑽に意味は無く、アインツ

ベルンは時代遅れの技術に千年も命を無駄にした費やしたという事実だけが残るからだ。

それを知り、理解したイリヤは覚悟を決めたつもりだった。

「今度こそ聖杯戦争で完成した聖杯を表現させてみる」と。

「最高傑作である自分は最強だ」と。

イリヤ  
自分そうでなければならぬ、と。

以上、士郎達が城の近くまで接近するまでの出来事だった。



セイバー運営、遠坂凜、バーサーカー運営 視点

ボロボロになっていくアインツベルン城に士郎達は正面の入り口の前に出るとセラ  
(グロツキー状態)を担いだリーゼリットに会う。

「あ、こんちやーす」 ↑棒読み

「こんちやーす、リーちゃん!」

それは何時かの挨拶第12話よりを、三月とリーゼリットは交わしていた。

「衛宮君」

「ああ、流石の俺もこれは駄目だと思う」

「こつち来て。 イリヤが戦っている」 ↑棒読み

「分かった」

答える三月がリーゼリットの後を走り、士郎も同じようにしようとする。凜が彼の肩  
を掴む。

「??」

「衛宮君、良い? 誰かを助けるなんて、まず自分を助けてから考える事よ。 自分第一

よ。 例えそれが……身内の者だったとしてもよ」

凜は何処か悔しそうな顔を作りながら唇を噛み、左腕を右腕でぎゅつと力強く掴む。

「遠坂？」

「……………追うわよ、衛宮君！」

士郎と凜は三月の徒歩に合わせていたリーゼリット達に追い付き、入り口付近に着くと、何かを体で守りように丸まっていたヘラクレスが串刺しされた後なのか、体中に穴が開いていて、血を流していた。

「(アイツ、桜の家を彷徨っていた奴か?!)」

「(まさか、アイツもサーヴァントだったって言う訳?! あり得ないわ!)」

「(イーちゃん!!)」

士郎、凜、そして三月は目の前の出来事はあまりにも現実離れしていたのに思考だけが動いていた。

以前あのセイバーとアーチャー、そして凜も参戦していたのに三人を翻弄していたバーサーカーとイリヤが今回は一方的にやられていたのだ。 たった一人の青年に。

「貴様の敗北は決定した、ヘラクレス。 どうあれ死ぬのなら最後に荷物を捨てろ。 全力の貴様ならまだ我を仕留める余地があるぞ？」

「■■■■■■■■■■！」

ヘラクレスはイリヤの前に立ち、咆哮を上げる。

「では主ともども死ぬがいい！」

青年の周りの空気がゆがむとリーゼリットはセラと持つていたハルバードを捨ててイリヤへと走り、これに気付いたイリヤと三月が同時に声を出す。

「リズ?! / リーちゃん?!」

「イリヤは、守る!」

「フン、やはり人形は所詮人形か」

「■■■■■■■■■■!」

「バーサーカー?!」

「何?」

青年は初めて表情を若干崩す。ヘラクレスがイリヤを掴み、リーゼリットへと投げたのだ。

本来、バーサーカークラスのサーヴァントは大幅な全ステータスブーストを得る代わりに「理性が失われる」、「一部の能力が劣化、または使用不能になる」、「魔力消費量が膨大になる」などというデメリットが多く、並のマスターであれば、三回の出陣が限界な程の暴れ馬クラス。

というのにヘラクレスはイリヤを安全の為に投げると言う、バーサーカーでは考えられない行動を取った。

その間にも彼は様々な武具に串刺しにされていく。

「バーサーカー！」

「イリヤ、近づくのは駄目」

イリヤをキヤッチしたリーゼリットは腕の中でもがき、涙を流す少女をしつかりと掴んでいた。

「イリヤ！／＼イリヤスフィール！」

士郎と凜もリーゼリットの近くに走ろうとするが――

「――ふん」

青年が鼻で笑い、一つの出した剣を手を取って振るうとリーゼリットと彼女が抱えていたイリヤが引き寄せられたかのように彼の前へと移動していた。

「「「え――」」」

「――邪魔だ、人形」

ザシュ！

青年がまた剣を振るい、二本の腕が宙を舞う。

「リズ?!」

「イリヤ、逃げて」

リーゼリットは青年が剣を振るう前にイリヤを後ろへと投げると彼女の腕が両方とも切断されていた。

「イリヤ!」

「衛宮君、あそこに行ったら死ぬわよ!」

駆け出そうとする士郎を凜は物理的に止める。

「■■■■■■■■■■!」

ヘラクレスが青年へと突進し、武器が次々と飛来し、文字通りヘラクレスは串刺しにされながら青年はまた剣をイリヤの方向に振るおうとしていた。

「■■■■■■■■■■!」

そしてハリネズミ状態になったヘラクレスは股を着きながら鎖に拘束され、剣を振るった青年の前にイリヤは落ちていた。

「フン、早々に主を見捨てておけば勝ち目はある事を捨てるとは。同じ半神として期待していたがよもやそこまで阿呆とはな」

「あ……………あ……………バースーカー! 『引き千切りなさい!』」

「■■■■■■■■■■!」

イリヤの身体が一瞬赤く光り、令呪が使用されたのを語る。

だがバースーカーは鎖に拘束されたままだった。

「どうして?! どうして、バースーカー?!」

「無駄だ人形。それは天の鎖。この鎖に繋がれたものは神であろうと逃れる事はで

きん。寧ろこの男の様に神性が高いほど効果がある。そんな鎖が令呪による足掻きなど許すものか」

そして駄目押しというばかりに巨大なハーブーンでヘラクレスの脳天をぶち抜き、その返り血が未だにショック真つ最中のイリヤに降り注ぎ、ヘラクレスの目が死んでゆく。

「バー……………サーカー?」

「な、何なんだあの男…圧倒的じゃないか?!」

「何なの、何なのよアレは?! 本当にサーヴァントなの?! 規格外も規格外なのだわ?!」

「イリ……………ヤ……………に……………げて……………」

啞然とする士郎に驚愕する凜、そして床ではリーゼリットが肘から先の無い腕の体でイリヤの方へと這いつくばりながらも動こうとしていた。

イリヤは信じられない光景を見ているかのように目を見開いたままバーサーカーのそばにより、彼の身体を小さな腕で揺すっていた。

「……………やだ……………やだよ、バーサーカー……………バーサーカー!!! ハッ?!」

イリヤが青年の方を見ると、彼は剣を振るう途中だった。

「イリヤアアアア! 離せええ遠坂アアアア!!!」

そこに一人の声が静かに上がる。

「タイムアルター固有時制御・スクエアアクセラ四重加速」

## 第22話 弓を使わないアーチャー

セイバー運営、遠坂凜、バーサーカー運営 視点

「固有時制御・四重加速」  
タイムアルター スクエアアクセル

その声<sup>タイムアルター</sup>が士郎と凜に聞こえ、目の前のイリヤは文字通りブレた後に消えた。

『固有時制御』<sup>タイムアルター</sup>。それはかつて衛宮切嗣の父の衛宮家四代目継承者の衛宮矩賢という稀代の天才が魔術協会から封印指定されるまでに至った小因果の時間操作に特化した家伝の魔術を衛宮切嗣がさらに改良し、『体内』に限定したうえで戦闘特化させた。

何某ゲーム負風で言うとう『ヘイスト』<sup>タイムアルター</sup>がしつくりと来るだろうか。

「ほう、体内展開した固有時制御とはまた珍妙なモノだ」

青年は笑顔を崩さずに部屋の端を見るとイリヤを両手で所謂お姫様抱っこで支え、片膝を床に着いていた。

「少し待って、イリヤ」

「……………ミツキ？」



三月はイリヤをおろしてから頭を垂れ、声を続ける。

【告!! 即座に撤退を再度——】

「——うるさい! 黙れ!」

三月は先程から「」の声から来る、今までにない警告を無理矢理ねじ伏せていた。  
「お初にお目にかかります。 王よ」

三月の最初の行動にビックリした土郎、凜とイリヤが更にビックリした視線を送る。  
「フン、今更挨拶をされてもな……だが我は寛大故、その敬意を表してやろうではないか」

「……………」

三月は何も言わずにただただ吐き気と頭痛に眩暈、喉から出ようとする物を無理矢理捻じ込みながら思考をフル回転していた。

「次はどうする?」とだけ考えていた。

先程の『固有時制御』は昔、切嗣に引き取られて間もない頃彼が魔術師として三月の事を診ようとした時に彼女が会得した魔術の一つだった第3話より。

そして先程この青年の周りから飛び出していた武器から発する「」の声の情報量は三月はさつきから気を失いそうなのを必死に我慢していた。

何せ一つ一つが神話やお伽話などに出て来る武器その物やその原点になった物ばかり

り。

情報量は未だかつてない程で、三月は自分の脳が焼きついて頭が燃えるかと錯覚したほどだった。

そして両腕を切り落とされたリーゼリットとイリヤの悲痛の叫びに朦朧としていた意識が目覚めて、虎の子の『固有時制御』を発動している間に何度も脳中でシミュレーションを行っていた。

そして今取っているこの行動以外すべてはこの青年に少なくとも自分と士郎とイリヤが串刺しにされ、殺される末路しか浮かんでこなかった。

『数多の武器の保有者』。

『面貌に溢れんばかりのオーラ』。

『圧倒的強者』。

以上の事からだけでも目の前の青年が何処の『支配者』である事は明白。

そしてその様な者は（三月推測ではあるが）堂々と物を言いかつ最大の敬意をもって接すれば興味を持つ。

だが思考はそこまでで三月の脳内達は『どないしよ』や『えらいこっちゃ』状態。

今はただ昔の王や皇帝の謁見などの情報を漁っていたり、最大限の礼儀作法を駆使して時間稼ぎをしていた。

「……………」

三月は青年の許したかのような態度に頭を上げず、ただ頭を下げたままだった。礼を尽くし、目の前の者から許可が出るまでは決して声を出さない。

この未だに切羽詰まった空気と威圧感に他の者達はただ息を潜めていた。

「……………そこそこ芸達者のようだな。面白いぞ? 許す、面を上げよ」

「勿体無きお言葉、感謝致します」

三月は初めて頭を上げると青年は頭を傾げる。

「ほう? 先日会った時もそう思ったがやはり貴様は面白い。故に我の所有する槍に

触れる事を光栄に思え」

青年が方手を上げて空気が揺らめき、一つの槍が姿を現す。

「(ヤバイ! もう少し時間を————!)————発言を申してもよろしいでしょう

か、王よ?」

「話せ」

「ありがとうございます。かの王は何故このような事を自ら行うのでしょうか?」

「何、簡単な話だ。今の我の家臣共では話にならないのでな、当世で言う所の散歩だ」

「(考えろ! 考えろ考えろ考えろ考えろ! 今私達が生き延び————!)」

「————(こ)まで我を享受した礼だ。褒美を受けよ」

「ッ」

「「ミツキー！／＼三月！」」

三月は自分の後ろの空気が動いたと思い、振り向こうとした瞬間何かが彼女の背中日掛けて飛来するのを横目で見た。

「(固有時制御・二重加速！)」  
タイムアルター ダブルアクセラ

三月は反射的に『固有時制御』を行使して横の飛んでその大剣を躲して内心ホツとする。

「(ホ！ 体が小っちゃくてよk——ハッ?! 私は何を——)——イリヤ?!」

「——」

三月がイリヤの方を見ると青年は何時の間にかイリヤの胸を手で抉って何かを取り出していた。

「——え」

「「セイバー！／＼アーチャー！」」

そして血を胸から吹き出しながら倒れるイリヤを真っ白になった頭で見る三月と、怒りの籠った士郎と凜の声が響く。

「『来い！』」

青年は手の中で鼓動するナニカから視線を動かし、令呪によって現れた二騎のサーヴァント達を面白おかしく見る。

「ツ！ 貴様は、まさか?!」

「奴を知っているのか、セイバー?」

「ほう！ これはなんとまあ、久しい顔だ！ 十年ぶりだな、セイバー?」

壁が破壊された一つの穴へと青年は歩く。

「逃げるのか貴様?!」

「勘違いするな。 我の用が済んだ故、見逃してやろうと言うのだ。 だが次こそお前を我の者にしてやるぞ、セイバー」

青年は笑いながらその場を後にするとセイバーとアーチャーの視線は横たわっているイリヤの胸を手で押さえていた三月の方へと向ける。

「イリヤスフィール…」

「アレはもう駄目だな、心臓をやられている。 もう…助からんだろう」

「三月！ イリヤ！ 遠坂、何とかならないのか?!」

「馬鹿言わないで！ 貴方の時とは違うのよ?!」

「イリヤ！ イリヤ、イリヤ、イリヤ!」

士郎は凜に何か出来ないかと悲願するが、凜の言った通り士郎の場合心臓は破壊され

たが修復可能な状態だった。

だがイリヤの場合、心臓自体が抉り出されていた。治療以前に修復する心臓自体が無くなっていた。

そして三月は未だにただイリヤの名前を何度も呼びながら、昔切嗣が亡くなったあの夜を思い出していた。

「イリヤ、目を閉じるな！ 閉じないでくれ！」

「ん……………一体、何が——お嬢様?! リーゼリット?!」

士郎達の叫びで気を失っていたセラが目覚まし、アインツベルン城の惨状の目に混乱しながらも、イリヤとリーゼリットの容態で完全に目が覚める。

「(何とかならないの?! 何とか——?!)」

「……………告。修復に部品を要シマス」

「え? どういう事?」

【修復可能デス。が、部品を要シマス】

「……………」

「三月? どうしたの?」

三月は周りの人達を見、虫の息である近くのリーゼリットを見る。

【修理に部品を要シマス】

「……………リーゼリットさん、イリヤを助けたい」

「……………う……………ん……………良い……………よ……………」

リーゼリットは絶え絶えの息で三月に若干微笑みながら答える。

「リーゼリット?! 貴方、何を……………?!」

「ツ……………ありがとう」

三月の手が光り、その輝きは部屋全体を白く変える程だった。

「何ですか、これは?!」

「何、この光?!」

「うおわ、眩しい!」

「クツ!」

セラや凜、士郎とセイバーが声を出し、目を圧倒的な光源から守る。

数分後、光りが徐々に静まっていき横たわっていたイリヤの胸の傷は塞がっていたかのように見えた。

これを見た三月は——

「ツ! や……………つた〜?」

——元気良く勢いの付いた万歳をした瞬間、力が体に入らずそのまま受け身も取れずにその場で倒れた。

「衛宮君、三月を！ 私はイリヤスフィールを診るわ！ セイバーとアーチャーは周りの警戒を！」

「わ、分かった！」

「ツ！ 分かりました！」

凜はイリヤの傷などを――

「――え？（何これ？ どうなっているの？）」

凜が見た所、服だけがボロボロで下の肌やイリヤの身体は不自然な程健康に見えた。

そして士郎は倒れた三月を抱き上げて――

「――お、おい三月！ 大丈夫か?!」

「うん。大丈夫じゃない」

「え?! ど、どこが調子が悪いんだ?!」

「……………体中痛いし、力入らないし、吐き気はするし、眩暈はするしで……………もうい

い加減寝たいから寝る」

「そ、そうか」

セイバーは未だ微動だにしないアーチャーを不思議に見ていた。

何時も余裕と言うか、物事を冷静に見ている彼が目を見開いたまま立っていたのだっ

た。



「……………アーチャー?」

「……………」

「衛宮君、そつちはどう?」

「あ、ああ。取り敢えずは大丈夫。 だと思っう」

「『だと思っう』? どういう事?」

「何か体中が痛くて気持ち悪いみたいだ」

「……………そう。 こちらも大丈夫みたいよ。 イリヤスフィールはただ眠っているみたい」

「ああ、お嬢様! 良かったです! ……………ハッ?! リーゼリットは?!」

最後に泣いていたセラがホッとすると周りを見る。

あそこまですなつたリーゼリットが見当たらないのだ。

そして床にあつた彼女の服はまるで身体だけが消え失せてしまったかのようだった。

「リーゼリット、どこなのです?! リーゼリット!」

……………

……………

……………

……………

……

……

…

結局リーゼリットは見つからず、士郎達はイリヤをボロボロになったアインツベルン城に残すのは得策ではないとセラに言い聞かせ、衛宮邸へと連れていく事となった。

森の中で士郎は三月を背中に負ぶって、セラはイリヤを。

そして何故か凜がイリヤとセラの荷物が入ったトランクを。

「ちよつとー、何で私が荷物を持つのよ?!」

これに対してセラがムツとした顔で凜へと振り向く。

「何を今更。サーヴァントを失った我々を守るのは同じサーヴァント。そしてそ

この少年は妹君を背負い、私はお嬢様を。ならば自然と荷物を運ぶのは貴方ではなく

て?」

「遠坂、俺が変わろうか?」

「……………ハァー、良いわよ。三月を背負っておきなさい。その代わりに、セイバー

はあのサーヴァントの事を知っているんでしょう? 話してくれないかしら?」

「……………」

あの金髪青年が現れた時からセイバーは浮かない表情だったので士郎も気になって

いたが、無理矢理に聞く事も躊躇していた。

《久しい顔だ！ 十年ぶりだな、セイバー？》

そう青年は言っていた。

「……………奴は前回の……………第四次聖杯戦争のアーチャーでした」

「な?!」

「そ、それじゃあ何？ 十年前のサーヴァントだっという事セイバー?!」

セイバーはただコクリと驚きを隠さない士郎達に頷いた。

「そ、そのような事はあり得ません！ サーヴァントは聖杯の援助無しでこの世に居続けるのは至難の業！」

セラが眠っているイリヤを背負っているのにも関わらず声を上げて抗議するが、凜が答える。

「だけどそれも不可能事では無い……………でしょうか？」

「確かに、理論的にはそうですが……………」

「どういう事ですか、リン？」

「……………」

セイバーの問いに凜はただ黙るがそこでアーチャーの声がグループに聞こえてくる。

『察しが悪いなセイバー。それとも考えないようにしていたか？ サーヴァントは依

り代と魔力のセットさえあれば存在し続けられる使い魔だ』

アーチャーの説明で何かに気付いた士郎は足を止める。

「……………まさか」

『そのまさかさ、エミヤシロウ。 “魂食い” だよ』

「つまり町の仕業はアイツって事か?!」

「……………ええ、盲点だったわ。最近になって行方不明者や昏睡事件の数などが急増加して話題になっていたけれどこの十年、確かに行方不明者などが出ていたわ」

「ま、マジか……………あれ? でも俺この町に住んでたけど、そんな話は最近まで聞いた事が無いぞ?」

「当たり前よ。行方不明になったのは犯罪者とかホームレス。消えても誰も気にしない奴らばかりよ」

凜の冷たいような言い方に士郎は足を止めたまま啞然と立ち尽くす。

『どうだエミヤシロウ? これでもまだ貴様はほざくか?』

「……………アーチャー?」

「……………俺が……………知っていれば——」

『——お前が知った所で死体が一つ増えていただけだ』

「だからと言って何もしない訳にもいかない!」

『それはどうしてだ?』

「何だと?」

『言葉通りの意味だ、エミヤシロウ。お前は周りの人間を救うと言ってはいたが、現にその小娘も救えなかった。その点ではお前の義妹の方が立派だったな』

「黙れ」

『どうした? 真実だろうか? それとも——』

「黙れ!」

「アーチャー! いい加減にして! 今はこんな事をしている場合じゃないわ! 衛宮君も落ち着いて!」

『“こんな事”? 今だから言っているのだ。このバカには……………凜、君は聖杯戦争を続ける気は無いと言ったな?』

「え? も、もちろん今の状況では無いわ」

『そうか』

それ以来、アーチャーは黙り込み、士郎はイライラしていた。

……………

……………

.....

.....

.....

.....

.....

「あの、先輩？ その方達は何方ですか？」

衛宮邸に戻るとイリヤを背負ったセラを見てキョトンとする。

「ああ、桜。 丁度良かった、この人達は——」

「——貴方がこの少年のご婦人ですか？」

「んな?!」

「え？」

セラの言葉に固まる桜とビックリする士郎。

「あらおめでとう衛宮君」

そして悪戯つぽく笑う凜に更に赤くなる士郎。

「ち、違う！ 桜は家事を手伝いに来ているだけだ！」

不定をした士郎に桜はしゅんとし、これを見た凜が恨めしそうに士郎を睨む。が、彼はセラの方を向いているためこれらに気付く事はなかった。

「あら、これは失礼しました。私の名はセラと申します。今背中でお眠りになられているのは我が主のイリヤスフィール・フォン・アインツベルンです」

そしてシレットとするセラの話の流し方に一瞬戸惑う桜だった。

「あ、えつと……間桐桜です」

「と、とにかく！ 彼女達のsh——屋敷がちよつと大変な事になって少しの間だけここに世話になるから！」

「え」

桜と凜が同時に声を出して、セラが士郎を睨む。

「と、取り敢えず部屋の用意とかしてもらえるか？ 来る途中三月とイリヤが疲れちゃって」

「は、はい………わかり………ました」

パタパタと衛宮邸の中へと消える桜の気配が遠くになってからセラが口を開ける。

「一体これはどういう事ですか？」

「あ、いや。別に深い意味は無くて——」

「——ではなぜ勝手にお決まりなられるのです？ それにここはあまりにも無防備すぎます。確かに優秀な結界ですが——」

「——ここで良いの、セラ」

イリヤの声にセラがビツクリしながらホツとする。

「お嬢様！ 良かった、意識が戻られたのですね。ではこのような粗末な場所から――」

「――ううん。ここが良い。ここに居させてくれる、シロウ？」

「な、ですがお嬢様。ここはあまりにも無防備すぎます！」

「セラと私が頑張れば少しマシになるわ……それにマスターでなくなった私にセラは聖杯戦争を私達だけで続けさせると言うのかしら？」

「……………」

「シロウ。リン。話はミツキが起きてからにしましょう……………セイバー」

呼ばれたセイバーは体を若干固くなる。

「……………何でしょうか？」

「少し遅いけど、キリツグが貴方にさせた事は間違っていないと思うわ。だから気にしないで」

「ツ……………ありがとうございます……………ごぎいます」

眠っている三月は夢を見ていた。

見ていたと言っても周りには何も無い平原と、様々な色の花畑の中に立っていただけ



だが。

「（これはまた久しぶりに平和な夢だなー）」

そうボンヤリと三月は考えていた所に声何処からとも聞こえてきた。

『ありがとう。イリヤを助けてくれて』

「……………ん？ リーちゃん？」

声の主に三月は覚えがあり、彼女のあだ名（命名者は自分）を口にした。

『私は後悔していない。イリヤが死んだら私も死ぬ。でも私はイリヤの中で生き

続けられる』

「え、ちよつとまってリーちゃん。今なんて？」

段々と聞きにくくなった声に三月の胸はザワザワし始めていた。

『胸がどきどきした。これは……………そう、"楽しかった"と言うのね。さよう

なら。イリヤとセラにもよろしく』

「ま、待ってリーちゃん！」

『後、セラに謝っておいて。セラが楽しみにしていたクッキーをコツソリ食べちゃっ

たから』

「リーちゃん！」

気付けば三月は布団の中で泣いていた。そして自分の上には知っている天井。

「……………あれ、私は何時自分の部屋に……………と言うか夢だった？」

「あら、お目覚めのようね」

「…遠坂さん？」

三月は寝ながら横にいる凜に気付くと、凜は三月が倒れた後の事の説明をし始める。

士郎達はアインツベルン城から衛宮邸に移動中、セイバーとアーチャーの相手をしてきたサーヴァント達は未だに健在という報告。イリヤとセラは住んでいた住居に問題が出来て、知り合いである凜を頼ったところ衛宮邸を薦められ、少しの間お世話になると言う事を桜と大河に話したと。

「そっか、イーちゃん無事だったんだ。良かった」

ホツと息をする三月を凜が眼を細む。

「ええ、無事よ。貴方のおかげで」

「遠坂さん？」

トーンが変わった凜に対して三月は？マークを浮かべながら疑問形で彼女の名を呼ぶ。

「貴方は……………いいえ、これは後で聞いわ。それより今はイリヤスフィールの話を聞きに行きましょう。立てるかしら？」

「……………無理。体が全然動かない」

「そう、なら肩を貸してあげる……………わ？」

三月に肩を貸して彼女を立たせる凧は何か呆気に取られたような声を一瞬出す。

「??? どうしたの、遠坂さん？」

「三月、貴方……………ううん、何でもないわ」

「じゃあ、お世話になりまーす」

凧が三月を支えて（と言うか凧がほぼ立たせながら）まだ起きて居間にいる士郎、セイバー、（服を着替えた）イリヤスフィールとセラの所へと着く。

「おー、みんな元気ー？ 私は元気じゃなーい」

あつけらかんとした、マイペースな口調で言う三月に、そこに居た者達はそれぞれ複雑な表情を浮かべていた。

「ま、まあそこまで言えるのなら疲れているだけじゃないか？」

「ミツキ、体調が優れないのでしたまた後日に改めますか？」

「そうよミーちゃん、無理は良くないよ？」

「……………そうですね。今の貴方にきちんとお嬢様の事で感謝しようにも迷惑に終わるだけなようですし」

「いや、照れるなく……………でも体が動かないってだけで意識は結構はつきりしているから良いよ」

「「良くない！／良くありません！」」

そこに居た人達のツツコミが一斉にハモリ、三月はただ笑う。

「……………彼女が良いと言っているからとつとと始めるわよ。アーチャー、桜はもう寝たかしら？」

『ああ、グツスリとな。余程疲れたと見える』

「何か変化が起きた時に伝えて頂戴。イリヤスフィール——」

「——イリヤで良いわ、リン。じゃあ、話す前に——」

イリヤが立ち上がり、一礼する。

「アインツベルン城の城主として礼を言うわ、エミヤシロウにエミヤミツキ。助けて

くれてありがとう」

「あ、ああ。気にするなイリヤ」

「そうよく？ 寧ろ遅れた事にごめんね」

凜が士郎の横に座らせた三月の身体が重力によって彼の肩に寄りかかる。

「み、ミツキ？」

「これは……………不可抗力で……………意識ははつきりしているけど……………超ダルイ感じなの——」

「そ、そうか」



## 第23話 「兄妹」と「姉妹機」と「姉妹」

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤスフィール運営 視点

士郎達にイリヤが第一次から第四次聖杯戦争をアインツベルン城で調べた物を話  
中、セラはお茶と茶菓子の用意に苦戦していた。

何せホームクルスとイリヤの侍女としてプライドの高い彼女は主の為にと行動をし  
たは良いが如何せん、他人の家でしかもアインツベルン城とは違い洋式の分別ではなく  
和式。そして同じくプライドの高い彼女は家に詳しい士郎や三月には聞けなかった。

これを見た士郎と三月は一瞬だけ見つめ合い、何の変哲もない会話を急に始める。

「あー、そう言えばこの前買った紅茶の葉っぱは上の右端から二個目の棚だっけ？」

「そだよー、んで私がこの間作ったタルトが左の冷蔵庫の中にあつた筈だよー」

「紅茶にもうちよつと高級感出したい時のメープルシロップは何処だっけ？」

「左の下の棚だよー」

などと話し始めた二人の声を聞いたセラの耳はピクピクと反応して、何も言わずに

さっさと紅茶とタルトを人数分用意し始める（食器などはさつきワタワタしていた時に見つかった）。

士郎と三月は自分達の思惑が成功したのにニカツと笑いあい、他の人達が黙り込んだのに気付く。

セイバーの表情は変わっていなかったがアホ毛がミヨンミヨンと期待で激しく動き、イリヤは若干プクッと不満に頬を膨らせながら「私だつて！」とブツブツ独り言を言い、

凜はニヤニヤとイリヤの反応を見ながら面白がっていた。

「……………えーと、どうした皆？」

「イーちゃん、どうしたの？」

イリヤがプイッと二人から顔を逸らす。

「べっつに〜？」

凜はにつこりと笑顔を送りながらイリヤに声をかける。

「イリヤ、話の途中なのだけれど？ どうしたのかしら？」

「遠坂？／遠坂さん？」

タルトや紅茶をセラが持って来て、イリヤは（タルトと紅茶を一時楽しんだ後に）話を続ける。

ちなみに感謝した三月はセラにこの間買った駄菓子味見を頼んだ。

「そうですね。味見ですものね」

「そうそう。イリヤの口に合うかどうか分からないからさ」

「では仕方ありませんねッ！」

嫌々言っていた割にはセラの口はムズムズと笑い顔になっていたそうだ。

……

……

……

……

……

……

……

イリヤの長い話が終わり、タルトの後に出て来た数々の駄菓子ミックスを食べていた。

これを出したセラは大層ツヤの良い肌で「お嬢様、味見は完璧ですよ！」と言ったとか。



「成程ね、第三次に何か起きたと考えるのが妥当ね」

「でもそんなに長く聖杯戦争は続いていたのか……………」

「士郎」

「ああ、悪い」

「モグモグモグ」

士郎が文字通り動けない三月に次々と食べさせたり、紅茶を飲ませたりしていた。

「……………ミーちゃん、本当に動けないのかしら？ フリとかじゃなくて？」

「フリじゃないフリじゃない、本気の本気。何なら私の手作りマカロンにかけても良

い」

ジト目で睨むイリヤに三月が答えるとイリヤ、凜、そしてセイバーの目が一瞬だけ光ったような錯覚に士郎は目を擦る。

「あ、あれ？」

「どうしたのシロウ？」

「いや、何か皆の目が——」

「——あら衛宮君、貴方の後ろにあるストーブをちよつと動かしてくれないかしら

？」

「ん？ いいぞ」

「あ、兄さんちよつと待——」

三月が言い終わる前に士郎が動く。彼女の頭はそのまま床に落ちる。

ゴンツッ!

「あいた?!」

「あああ、三月すまない! 大丈夫か?!」

「いゝ、いゝ、だいゝ よおゝ」

涙目になる三月とアタワタする士郎。

そして咄嗟には言え「手作りマカロン」という悪魔(?)の囁きに負けていたイリヤと凜は気まずそうに声をかける。

「だ、大丈夫イーちゃん?」

「あの……………氷持つて来ましようか?」

「グスツ……………それも良いけど、『遠方』に行きたいんだけど……………」

「え」

「ハツ?」

三月の言葉の意味に気付いたのか、イリヤと凜が互いを見て士郎は?マークを飛ばしていた。

「『遠方』って…動けない体でどこに行こうってんだ?」

「あー、衛宮君？ それはちよつと違うわ」

「セラ、お願いできるかしら？」

「……………お嬢様がそう仰るのなら」

セラがもの凄く嫌な顔をしながら三月を乱暴に担ぎ、今を出る。

『あーちよ！揺らさないで!!!』

外から三月の声が響き、遠くなつてから凜は口を開ける。

「さて、彼女の事を少し話しましょうか？」

「話すつて……イリヤの城で先日話したばかりじゃないか」

「シロウ、あの子は私から見ても異常よ」

「イリヤ？」

「私は心臓を……………『聖杯』をあの手で取られたわ。それは間違いない事

よ。でも私は『生きています』

「え？ でも遠坂は——」

「——城でも言ったけど、貴方の場合心臓に傷があつて私はそれを修復しただけよ。

でもイリヤの場合修復する物が無かつた」

「恐らくだけど、アレはリズを使つたと思うの……………あ、リズって言うのはもう一人の侍女の事よ。見当たらなかつたのは、多分……………」

「そうなのか……」

「リン、あのサーヴァントについてですが――」

「――後ね、少し見せたいものがあるの」

そう言い、凜は立ち上がる。

「見せたいものって、何だ遠坂？」

「衛宮君、貴方は三月の部屋を見た事あるかしら？」

「え？ ないけど……それがどうかしたのか？」

「ついて来て、イリヤとセイバーも」

……

……

……

……

……

……

……

「ありがとう、セラさん！」

「……………」

セラは何も言わずにただ三月を担ぎ、皆がいる筈の居間に戻る。襖を開けるとそこ  
の空気はどこか重く、通夜のような雰囲気漂っていた。

「あれ？ どうしたの皆？」

三月の声に士郎、凜、イリヤとセイバーはビクリとする。そして最初に口を開けたのはイリヤだった。

「お、お帰りなさい！ ミーちゃんの事ありがとう、セラ！」

「あ、え？ は、はあ？」

明らかに何か後ろめたい事をしていたような感じのイリヤ（そして不慣れな褒め方）に少し戸惑うセラは三月を士郎の横に下ろして部屋の端に立つ。

「えへへ、ただいま」

「あ、ああ！ お帰り！」

「??？」

士郎もどこか無理をしているところがあるのか、ぎこちない言い方に三月はキョトンとする。

「……………それでセイバー、話してもらえるかしら？ あのサーヴァントの事を」

「……………はい」

セイバーは先の青年が第四次聖杯戦争のアーチャーである事を説明し始め――

——彼の元マスターが「遠坂時臣」だったと言うとそこに居た全員の視線が凜へと注がれる。

凜はただ眼を見開いて、『信じられない』と言った顔でただ前を見ていた。

「アイツが……………お父様の……………サーヴァントだった？」

「と、遠坂?！」

「ハイ。そして、彼は以前の聖杯戦争でも実力は飛び抜けていました。前回の戦で

キリツグはあのサーヴァントを一番警戒していました——」

セイバーの言葉は既に凜には届いていなかった。

彼女の目の前は今より視点が低く、雨の日だった。

目の前には凜の父親、遠坂時臣の墓石で様々な人たちと巡礼していた。

後ろからはエセ言峰神父が結礼神父として掛ける言葉。

左腕にはジンジンと熱い痛みが走る。

魔術刻印の移植された腕が疼く。

だが、凜は決して弱みを見せない。

「自分が新たな遠坂家の当主なのだから」と自分に言い聞かせる。

エセ神父言峰綺礼が何か言葉をかけてくるが、そんなものどうでも良い。

父が優秀なのを凜は知っている。

「そろそろ、お母上を連れてきてはどうかね？」

「ええ……そうする」

幼い凜はぶつきらぼうにエセ神父言峰綺礼から車椅子に乗った自分の母親、遠坂葵に振り返る。

「さあお母様、お父様に最後のお別れを言おうね？」

「まあ、今日は誰かのお葬式なの？」

「ええ………お父様が………死んだのよ」

「あらまあ、それは大変。早く時臣さんの喪服を出さなくちゃ」

「ッ」

車椅子を押し始める凜はキュツと唇を噛むが、母の言葉は続く。

遠坂葵の死んだ目がボンヤリとただ前を見る。

「ねえ凜、桜の着替えを手伝ってあげて」

幼い凜は頭を俯き、目が前髪に隠れ、彼女の身体が震え始める。

「私も支度しなくちやいけないのに……ほら、時臣さん。ネクタイが曲がってますよ。」

「ッ………ウツ………」

凧の足取りはヨロヨロとし始めると――

「――しつかりしなさい。」

「ッ！」

凧は顔を上げる。その顔はさっきまで静かに泣いていて、目は真っ赤だった。

「母親が今の自分に気付いてくれた」。凧はそう思いながら極僅かな希望と期待で遠

坂葵を見る――

「――時臣さんは凧と桜の自慢のお父様なんですよ？」

「……あ………」

凧は両手を車椅子から離し、口を覆い、上がってくる吐き気に涙を流しながらも静かに耐える。



凜の母親の遠坂葵は聖杯戦争に巻き込まれ、酸素欠乏症によって脳に重大な障害を負いながらも一命を取り留めたが、精神が崩壊してしまっていた。

彼女の心は既に現実世界から切り離され、夫の時臣が健在で凜の姉妹である桜がまだ家族であった頃の時間で止まり、生きながら幸せだった時代の『夢』の虜となり幻想の日々を彷徨い続けた末に病没した。

この時、遠坂凜は十代の歳になる寸前だった。

「……………」

「遠坂？ 遠坂?! 遠坂!」

「ちよつと、リン?!」

「遠坂さん!」

「……………あ、あれ?」

凜が記憶から現在に戻ると心配で彼女の顔を覗き込むのに気付く。

「あ、あらやだごめんなさい。ちよつと思ひ出に浸っていただけよ。私は大丈夫だから——」

「——嘘言うな遠坂! 無事な奴の顔色が土色になるものか!」

「……………え?」

凜は気付いてはいないが、彼女の顔色は青を通り越して土気色だった。

『遠坂家の当主』で『ミス・パーフェクト』はおろか、『何時もの遠坂凧』でさえそこにはいなかった。

そこに居たのはボロボロの精神の母の看病で同じく精神を擦り減らしていた『遠坂凧』だった。

「あ……………ご、ごめんなさい！」

凧は立ち上がると、早足で居間を出た。

そして三月は見た。

彼女が最後居間を出る直前に声を殺しながら泣いていたのを。

「兄さん、遠坂さんを追いかけて」

「み、三月？ どうしたんだよ？ それに、今の遠s——」

「——早く追いかけないと肩を嘔むわよ。首と口は動くんだからね。十秒。

九、八、七」

「ハア?! ちよ、ちよつと——?!」

「——六、五、四、三——」

「——わ、分かった！ イリヤ、セイバー！ すまない！ 詳しい話は後で！」

「……………うん、分かった」

「ではシロウ、またあとで」

士郎は三月を居間のちゃぶ台に寝かせると凜の後を追う。

「……………ごめんねイーちゃん？」

「ううん。リンがあんなになるなんて思わなかった。でも、どうしてシロウを追い

かけさせたの？」

「……………遠坂さんは泣いていた。それに……………士郎は話しやすいからね。あ、それと

リーちゃんから二人宛の伝言。『楽しかった、さようなら』」

「「え？」」

「あと、『セラが楽しみにしていたクッキーをコツソリ食べちゃった。ごめん』だって」

「リズ……………リズの……………分からず屋……………」

「リーゼリット……………貴方は本当に……………どこまで人に迷惑を！ う……………ううう

……………」

泣くイリヤとセラにティッシュ箱を取ろうと三月はするが未だに首だけしか動か  
なつた。

「……………御免ね二人とも？ リーちゃんをその……………勝手に使っちゃって？」

「グスツ……………ううん……………良いの、三月……………あれって、『錬金術』だったんでしょ？」

「ん、私は『再構築』って呼んでいるけどね？ それに、リーちゃんも『良いよ』って

言ってたから。それ以外方法が無かった」

「でも、どうして私を命懸けで救ったの？ 私が……………私が『アインツベルン』だから？ それとも……………」

「ああしないと皆死んでいたから」

「……………そっか。ありがとう、ミーちゃん」

「ええ、お嬢様の命を救ってくれて……………誠にありがとうございます」

「どういたしまして、イーちゃん。セラさん」

三月は二カつと二人に向かつて笑った。

そしてこの一連の出来事を見ていたセイバーは何とも言えない気持ちで胸の中で燻ぶっていた。

士郎は凜が借りている客間の前で足を止めた。

何故なら中からすすり泣く声が聞こえて来たからだ。

あの遠坂凜が泣いていると分かった士郎はやるせない気持ちでただ静かに凜が泣き止むまで待つ事に――

「――何の用かしら？」

士郎の身体がビクついた。まさか気が付かれているとは思わなかった。

「あ、あー遠坂？ その……………入るぞ」

「取り敢えずそのまま立っているのも」と思った士郎はドアノブに手をかける。

「え、衛宮君?! え?! ちよ、ちよつと待って!」

「分かった」

そう言い、士郎が扉の前で待つ事数秒間。

「……………入って良いわよ」

士郎は入って様変わりした客間を見る。

明らかに「魔術師の工房」と言う雰囲気 of 器具などが一か所にあり、もう一か所には小道具などが置いてあった。

「な、何よ。そんなに人の部屋が珍しい? キョロキョロするより座ったら?」

「まあ、な。少し前まではただの客間だったからな。よつこらつせつと」

凜の目は腫れていたが取り敢えず涙はもう流していなかったようで士郎は椅子に座りながらホツとする。

「で? 衛宮君は何でここに?」

「え? あ、ちよつと…:な」

「もしかして三月かしら?」

「う」

「つて凶星か……………本当呆れた。」

衛宮君より頑固かも知れないわね、流石『兄妹』つて

所かしら……」

「はは、桜にも言われたよそれ」

「……そう……あの子が……ねえ衛宮君。 何で三月は貴方に私を追うように言ったのかしらねえ？」

「え？」

「こんな嫌な性格している女の子をさ」

『嫌な性格』って、どこが？」

「……前に少し、衛宮君に私の事を話した事があるわよね？」

遠坂凜はポツリポツリと自分の家庭の事を掻い摘んで士郎に話す。

父は前回の聖杯戦争で死んで、母は狂ってしまった、遠坂邸では自分一人で生きて来た  
と。

「でもね……言っていない事があるんだ……ねえ、衛宮君と三月はこの養子なんだよね？」

「あ、ああ」

「前にその、訊きそびれたんだけど……もし……もしもよ？ 本人の意思とは関係なく、余所の家に養子にやられたその子はどういう気持ちで育つのかな？」

「どうって……そんなの貰われた先の家に左右されるだろ？ でもどうしたんだ急に

？」

「衛宮君達の立ち入った話も結構あの時公園で聞いたから」第17話より

凜が黙り込み何か迷っているかのように目が泳ぎ、士郎はただ静かに待つ。

「わ、私ね……………遠坂家に子供は実は私一人だけじゃなくてね——」

「——な?! どうしてもっと早く言わないんだ?! 今すぐ遠坂の所に行つて——」

「——」

「ち、違うの!」

凜の言葉で士郎はてつきり遠坂邸でもう一人の子が一人で待っていると思った彼は立ち上がり、それを凜が制止する。

「そ、その……………その子はね——」

—— 『桜』 つて言うの」

「……………ええ?」

「瞬間を言われたのか分からない士郎はただ「ええ?」としか返せなかった。

「そりゃあ……………凄い偶然だな」

何故なら別の部屋で寝ている土郎の後輩の名も『桜』だった。

「それでね……………『桜』はね……………『間桐家』の養子に——」

土郎の耳朶に自分の心臓と「キーン」とした音だけが聞こえ始めた。

彼の思考はまた一瞬止まり、凜の顔を見た。

彼女の顔は酷く苦しみと不安に歪んでいた。

「その……………お父様がね、『間桐家』の養子に『遠坂桜』を……………提供したの……………『間桐の血筋が途絶えない為に』って……………そんな事を、私は『仕方ない』って思ってた！でも……………でも！今の幸せそうな桜を見たら私……………どう接したら良いのか分からなくて！だから私は『学校の私』を演じて……………『聖杯戦争のマスター』として……………『魔術師』として……………ただ逃げていた……………」

「遠坂……………」

そこで凜は土郎に笑いながら涙を目に浮かばせながら喋り続ける。

「でもね……………さっきのセイバーの話で……………私、ちよつと疲れちゃった」

「……………前に、言ったっけ？ 三月が何も知らないって」

「??? え、ええ」

「最初俺は……………彼女がちよつと苦手だったんだ」

「……………え？」



凜が信じられないと言った顔で照れている土郎を見た。

彼曰く、三月の最初の印象は『綺麗な子』が『不可解な行動をする子』に変わり、その日はずっと震えていた。

そんな彼女の「兄」と土郎は自称して色々世話をしている内に彼は気付いた。

「三月が優秀過ぎる」と。

例えば説明書をチラッと見ただけでその機械等の使い方が分かったり、一回見た番組や新聞の内容を把握していたりと、普通の小学生なら考えられない様な事を三月は平然とやっていった。

三月が何も知らない子だったのに瞬く間に「兄」と自称している自分が三月に勝っている要素と言えば人とのコミュニケーションスキルと体を使う作業位だった。

しかも後者に至っては単に三月の体力が追い付かないだけだったので「何時かはこれも追い抜かされる」と土郎は思っていた。

だが衛宮切嗣の死で三月の性格が一変し、徐々に今の三月に収まった。

「衛宮君…どうしてそんな事を？」

「まあ、遠坂の愚痴を聞いたのに、俺の愚痴を聞かないつてのはフェアじゃない…だろ？」

それはかつて、凜が土郎に言った言葉に似ていた。第7話より

「……………ハハ、何よそれ」

「ま、まあ。取り敢えず、桜に遠坂は何がしたい？」

「……………こう面と向かって聞かれると色々ありすぎて……………と言うか、今更姉妹の様になんて……………私がどの面下げて——」

「——じゃあ先ずは、さつき遠坂が俺に言った事を、桜に言う事だな」

「……………え？」

そして士郎は驚愕する凜に更に言葉をかけ、話が終わる頃には深夜遅くになり、その夜はお開きとなった。

## 第24話 手探りでの探し物

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤスフィール運営 視点

次の日の朝、暴食家の姿があった。

「バクバクバクバクバクバクバクバクバク！」

「ねえ、シロウ……喉に詰まらないかしら、あれ？」

「いや？ 三月は昔から大食いだぞ？」

「(あー懐かしい)」

ご飯とおかずをバクバクと食べる三月を見ていたイリヤは心配して士郎に聞き、彼は何時もの様に返事をする。凛と桜が同じ事を考える。

三月が次の日起きたのは眠気が覚めたからではなく、お腹のグウグウ鳴く音からだつた。

最初はセイバーかと思ったが、セイバーとイリヤも音で目が覚めたのか三月を見ていた。

ちなみにイリヤはセラの猛反対を押し切って三月と添い寝する我儘を押し通した。ただイリヤにとつて誤算だったのは三月がセイバーと同じ部屋で寝ていた事か？

これを知ったイリヤは最初物凄く戸惑っていたが、隣の部屋が士郎の部屋と知った瞬間手の平を返すかのような振る舞いだった。

「あ、三月先輩？ 次も特盛ですか？」

三月が頬張りながらお茶碗ではなく井を桜に私ながらコクコクと首を縦に振る。

「ねえリン？ 本当に大丈夫なの、アレ？」

「まだマシな方よ」

「え」

次の井を頬張り始める三月を見たイリヤは凜の反応に驚愕する間、士郎は昨日の事を思い出しながら三月を見た。

昨日士郎、イリヤ、セイバーが凜に連れられた部屋にはタンス一つ以外何も無かった。

正に空っぽの和式の部屋。

長年誰も住んで居ない空き部屋。

「???」 リン、三月の部屋を見せると言いましたがここは空き部屋なのでは？」

「……………違う。 違うんだセイバー」

「シロウ？」

声を出しながら固まった士郎を見たイリヤが心配で彼を呼ぶ。

「違うんだセイバー……………ここが、三月の部屋なんだ」

『部屋は心境の表し』。

そう皆は子供の頃や今になっても聞いた事があるだろうか？

全体的な表現としては間違っていないとも当たっていない場合もある。

だが誰かが住んでいる部屋に何も無いのは異常ではないだろうか？

士郎自身、部屋にあまり物は置いてはいないタイプだが少なくとも机や時計に小道具箱や雑誌とかを置く本棚ぐらいはある。

凜や桜も一時的な泊りがけとは言え、何らかの私物を部屋に持って来ている。

それが魔術道具やぬいぐるみや家の枕などなど。

「ええ、そうよ。ここが三月の部屋。そしてダンスの中には衣類と学校の制服と

カバンと鏡一つ。それだけよ」

「そんな……………」

「私も驚いたわ。昨日衛宮君に連れて来られた部屋がこんな状態だったもの。最初は『悪趣味な悪戯か』と疑った。ダンスの中で三月のカバンや学生手帳を見つけるまではね」

士郎は初めて三月の部屋の中に足を踏み入れる。

一言でその部屋を現すのなら「空虚感」。

「ですがリン……信じられません！ この部屋は……あまりにも……」

「ええ。 刑務所の独房の方が物を置いてあるわ。 私は思わずぞつとしたわ。 必要最低限の物しか置いていないと言うのも遠慮したいぐらいにね」

「シロウは……知らなかったの？」

「……………」

イリヤの問いに答えない士郎はただこの部屋を見ていた。

「その様子だと衛宮君も知らなかったみたいね……あと、シヨック中の三人に追い打ちをかけたい訳じゃないけど、士郎は三月が『軽い』って感じてはいなかったかしら？」

「え？」

「イリヤ、少し衛宮君に背負って貰われないかしら？」

「いいけど……リン何が言いたいのか？」

「なツ?!」

「シロウ？」

イリヤを士郎が背中に乗せた瞬間、彼の表情が強場る。

ズツシリと来る重さだった。

三月よりも。

「……………イリヤの方がおm……………」

「……………待った。衛宮君、この状況でも流石にそれは無いわ。でも三人に私が言いたい事は分かったかしら?」

「……………」

イリヤはこれが何を意味するのか考え、このような事に直結するのは「自分を瀕死の状態から救った」事だった。

セイバーは以前「コアラ抱き」をされた時、三月が軽いと思ったのは自分がサーヴァントであるからと思っていた。

士郎もセイバー同様だったがそれは自分が余り他の者を背負ったりした事があまりなかっただけで、三月を標準としていた。

そして凜にはこの事が心底恐ろしかった。三月が人間では無いのはほぼ確定していたが先日のイリヤの「少なくとも心がまだ人間ヒトという事」で一時は納得した。第18話より

だがこの部屋の有様を見た凜は再度考えさせられ、ある一つの可能性が出た。「もしかして三月には執着しているモノが無い?」と。

これは普通の人間でも異常だ。

ましてやそれが人外ともなると。

「成程ね……リンが言いたい事が分かったわ」

「ええ、これは由々しき事態です」

「どういう……事だ？」

未だにシヨックを受けている土郎はそこまで考える余裕が無く、ただ聞いた。

「衛宮君。例えは……例えばの話よ？ 未知数の力を持った何か、何の執着も無

く、ある日に『そうだ、何かしよう』と思つて行動する。果たしてどんな想像が浮か

んで来るかしら？」

『暴君』。

その一言が土郎の頭を過ぎり、これはイリヤやセイバーも同じようだった。

「それは、ただの自由気ままに生きる暴君の一手手前ではないですか?！」

何せセイバーはそのままの事を言ったのだから。

「ええそうよ。皆はこれで分かったかしら？ その事を私は恐れていたのよ」

「……………」

皆が黙り込み、次の言葉を見つけようとする。

だが上手い言葉が出ず、ただ静かに時は流れ、凜は口を開ける。

「衛宮君は、ずっと三月と住んでいたんでしょ？ 何かないかしら？」

「何かって……………何だ？」



「彼女<sup>三月</sup>自身が何か興味などを持った事は無いかしら？ 家事など以外で」

凜はこう考えて士郎に聞いていた。

「もしかしたら衛宮君なら何か知っているかも知れない」または「何か三月が興味の事を分かればもつと色んなモノも探せるかも知れない」。

自分第一で考えていると凜は思つて行動しているが、これには若干無意識にかつて聞いた事がある幼い頃の『間桐桜』の噂等も関与していた。

『間桐慎二の妹』。

『人形のように変わらないう表情で兄の間桐慎二とは対照的な妹』。

『何時も暗く、俯いている間桐の妹君』。

等々の噂を凜は幼い頃から聞いていた。

「……………分からない」

士郎の答えは凜達が欲しがっていた答えとは程遠かった。

「え？ で、でも一緒に住んでいるんでしょ？」

「そう言われてもな……………」

そこで士郎は凜たちに説明する。

確かに小学生から一緒に住んではいるが、その頃の三月は今とは程遠い性格をしていて中々クラスに溶け込めずに居た。

そして彼女に変化あつたのは衛宮切嗣の死からで、三月はもつと他の人達の接し方を探すかのように努力をした。

勉強ができる子達には知的に、オシャレの好きな子達には今風や次のビッグファツションウェアの予測など、いつも同じおかずの弁当に不満を持っている子達には世界中のおかずを分ける等々。

そして中学生に上がると士郎と三月はクラスが別々になり更に一緒にいる時間が無くなった。一緒にいる時などは体作りや食材の買い物メインとなり、更に時間が経つと――

「――あ」

何かに気付いたかのようには士郎はハツとする。

「どうしたの、シロウ?」

「そう言えば、桜なら知っているかも知れないと思つて。二人とも女性だからさ、結構一緒にいる時間が長いんだ。それになんだかんだ言つて昔の桜は三月の似ていたからさ」

「ッ」

「リン、どうかしましたか?」

「何でも……ないわ」

結局その夜、次の日に士郎達は三月と桜にそれとなく聞く事にしたがこの後、イリヤの心臓を抉り取ったのが十年前の、凜の父親遠坂時臣のサーヴァントと判明した事に凜が動揺してその場から去ったのだが。

「んんんん!!! 漬物美味しいんんん!!!」

そして今日の朝、三月は以前同様の暴食ぶりを発揮していた。

この三月を見ていたイリヤは不思議に思っていた。

「本当にこんな子があの部屋の主なのか?」と。

「ねえミーちゃん?」

「んん? 何、イーちゃん?」

「ミーちゃんって何か欲しいものとかある?」

「二(イリヤがいったー?!)二」

イリヤのそれとなくかつ直球じみた質問に士郎、凜、そしてセイバーがモキュモキュと食べる三月を見る。

「んん? じゃあイーちゃんの沢庵一つ貰っていい?」

「いいよ——じゃなくて! あ?!」

「ポリポリポリポリ」

ガクリと肩を落とす士郎、凜、そしてセイバー。

「そ、そうじゃなくて。それ以外の物。ほ、ほら服とかぬいぐるみとか」

「んゝ???  
んゝ……………」

口をモグモグとしながら目を閉じる三月に土郎達はゴクリと――

「――あ！　そういえば小麦粉が減っていた！」

「……………」

朝御飯の後、皿洗いを手伝うと言った三月に病み上がりという事で凜に代わってもらい、お茶を飲みながらテレビを見ていたがセイバーに稽古に誘われた。

「え？　土郎はともかく、何でイーちゃんもここにいるの？」

「あら？　いけないかしらミーちゃん？」

「そう言えば、ミツキはこの稽古の事を楽しく感じていますか？」

「（今度はセイバーが行ったー?!）」

「え？　んゝ???」

三月が首を横へ傾げる。

「んゝ……………まあ、体作りとしての運動と自衛手段としてかな？」

「では、体を動かすのは嫌いでは無いと？」

「え？　まあ……………お腹空くから動くのは好きじゃないけど、死んだりするのはもつ

と嫌いで……………あ！」

「「?!」」

「やっど何か来たか?!」と思った三人。

「昨日マカロンを皆に出すのを忘れてた! 後で出すね」

「では稽古の後に楽しみましょう」

セイバーは嬉しい顔をする反面、アホ毛がへなへなとしなれていくのを士郎は見た。

その間キツチンでは気まずい空気が凧と桜の間に出ていた。

「……………」

これによって桜は何時もよりビクビクしていたのを凧は気付いていた。

「ね、ねえ? さ、桜?」

本来なら勇気を持った桜が凧へのアプローチを心試す場面だが、昨夜士郎と話し合った凧が先に桜へ歩もうとした。

ただ桜もこれを予期していなかったので身体と声を固くしながら答えた。

「は、はい?」

「……………あ……………う……………」

「??」

全く『遠坂凧』らしくない感じの凧に桜は? マークを出しながら凧から続きの言葉を待つ。

「その……………私の事、嫌いでしょう？」

「……………え？」

桜にとってそれは全く夢にも思ってもいない話の始まりだった。

「だって……………知らなかったとは言え、お父様が『これは必要な事だ』って言い聞かせていたとしても、一人になった私は貴方に会えた筈なのに、会うのが怖かった——」

そこからポツリポツリと、ぎごちない言葉遣いで桜に次々と話していった。

本来ならこれらの言葉は『遠坂家当主』、または『魔術師の遠坂凜』として心を固く閉ざしながら桜に接していた。

現在そこに居たのはただの人間性が色濃く出ていた、『遠坂凜』と言う一人の女性だった。

その上本来桜がこのような事を聞く状況は既に全てが手遅れになり、桜はただの命乞いや言い訳としか取っていないかった。

だが幼い頃に慎二が士郎や三月を桜に本来より早く引き合わせた、慎二が本来程捻くれていなかった、などの要因が桜の助けとなっていた。

本来の展開等とは違う事が今起きていた。

色々な過去の出来事がまたも『運命』を変えていった瞬間の一つだった。

道場では以前までとは違う雰囲気だ漂っていた。

それは士郎にはまだ数回しか経験した事の無い「殺気」だった。

彼の顔に湧き出てくる汗とは対照的にイリヤはただ眼前の場面を涼しく見ていた。

その二人の前にはセイバーと三月が互いに竹刀を構えながら睨んでいた。

「……………」

ヒュツとした音が聞こえるとセイバーの姿が消え、一瞬の時間差後に爆音に似た何か  
が士郎たちに聞こえ——

バキーン！

「——あ」

部屋の反対側に何時の間にか立っていたセイバーと尻餅を付いた三月が手の中で  
握っていた竹刀だった物を見る。

「またk——」

「——いや〜ん！ お兄ちゃんイリヤ怖〜い♡」

イリヤが士郎に横から抱き着き、士郎が苦笑いする。

何故ならイリヤの口は笑っていたが、目をそうではなかったからだ。

「ごめん士郎——」

「すみませんシロウ——」

「いい、いや良いって。後片付けは俺がやるから先に着替えてきな」

「ホイホイ」

三月が何時ものノリで手を振りながら道場を後にした後、イリヤがセイバーを見る。

「……………セイバー、どう思う？」

「彼女は異常です、イリヤ」

「……………だな。昔から『神童』、『天才』とか言われていたから、俺もてつきりそうかな  
と思っていたが……………」

先程のセイバーは現在の全力の動きで三月に斬りかかり、三月は力押しには負けたが  
反応出来ていた。

これが人同士であれば何も問題ない。

が、セイバーは英霊。人々に祀り上げられた存在。

そのような存在と張り合えるような高校二年生がこの世界にいるだろうか？

『三月は人間ではない』。

もし凜が恐れているような事があればとイリヤと凜は見極めたかった。



そして結果はほぼ最悪の想定に近かった。

これを見たイリヤは何とか三月と『敵対』するのだけは阻止する事を考える。

半面、士郎は内心焦った。

凜に話していた事が現実になりつつあった。

自分より優秀な三月を目の前に、『自分は何が出来るのだろうか?』と思い始めていた。

『正義の味方』。自分に託された夢。

最初は何かが自分に足りないかと士郎は思っていた。

だが三月を見てみるとどうも違うような気が最近はしていた。

確かに三月は強い、見違えるほどに。

確かに彼女は博識、思わず何でも知っているかのように。

だが彼女は果たして『正義の味方』になれるだろうか?

『正義の味方』って、何なんだろうな」

「シロウ?」

シロウの独り言を聞き取れなかったセイバーとイリヤが彼の名を呼ぶ、が士郎はただ立ち上がって後片付けをしながら考える。

「果たして自分の思っている『正義の味方』とは?」と。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「こ、こうかしら?」

「はい。でももう少しお水が透き通る位までお米は洗ったほうが良いですよね、姉さん」

「えっと、ナニコレ?」

三月が戻ってきた居間の隣にあるキッチンには凧にお米の洗い方を教えていた。

しかも桜が凧の事を「姉さん」と呼びながら。

「あ、三月先輩お疲れ様です。今ちよつと遠——『姉さん』に和食に合うお米の洗い方を教えているんですけど良いですか?」

「良いんじゃない?」

「え? さ、桜? どういう事?」

「あれ? 遠——『姉さん』に言いませんでしたっけ? 私に料理を教えたのは先輩

達ですよ？ 途中からは三月先輩メインになりましたけど」

「え、……………も、もしかして家事とかも全部？」

「そうですよ？ 三月先輩って凄いですから！」

「いや、それほどでも？ 見ていた番組とか雑誌とか料理の本とかを参考にしているだけなんだけどね？」

「……………」

「ん？ どしたの遠坂さん？ とうか桜、『姉さん』って何？」

「あ、えと、その——」

アタフタしながらも三月に桜は問いをはぐらかし、家事のコツとかのおさらいを三月に頼んでいる間、凧は思っていた。

「(三月の目的は、何？ 血？ 魔力？ 人間？ いったい何？)」

未だに三月の行動の原理が読めなかった。

『自分と似ている子』。

それが遠坂凧という少女が中学生の頃に聞いた噂だった。

曰く凧と同じく博識。

曰く凧と似ていて近寄りがたいけど、接してみると話しやすい。

曰く凧みたいに見た目も整っている。

『似ている』、『似ている』、『似ている』、『似ている』。

それが周りからの噂だった。

「(もう、何なのよ?! それ程似ているって言うのなら見てやろうじゃないの?!)」

『凜が似ている』であつて『その子が凜に似ている』ではなかったのに凜は苛ついた。

そして猫を被りながらも、他校の中学校に見学に行き、目的の少女を自身の目で見るのは夕方となつていた。

そこで凜が見たのは『衛宮三月』という小柄な金髪少女と、赤がかかった髪の毛の少年が交代で何度も何度も跳べもしない高跳びをひたすら跳ぼうと赤い夕日の中でしていた。

「(ふーん、確かに見た目はいいけど聞くほどより賢くないわね。何で無駄な事をしようとして時間の無駄遣いをするのかしら?)」

凜が見ている間に彼女は二人のお互いに対しての親しい態度に気付いた。

「(え、何? もしかしてあの三月つて子の彼氏? うっわ、ありえないわー。あんな凡骨、どこが良いのよ?)」

少年が三月の彼氏と思ひ、『まさか彼氏持ちだから凜が三月に似ていると言われているのか?』と言う思考に凜はさらにイライラする。

だが時間が過ぎていき、凜はある事に気付く。

二人の接し方は好意を寄せあっている男女や恋人のそれなどでは無く、互いを異性として意識したのではなく、肉親同士のものだった。

凜も、かつてはそう接せる姉妹がいたから分かる事だった。

二人は楽しそうに何度も何度もチャレンジし、失敗しても笑いあい、お互いを励ましていたことに凜は衝撃を受けた。

「(失敗しているのに、笑う? 何度でも挑む? 励ます? それが……………『楽しい』ですって?)」

それは今までの『遠坂家当主』の考え方からは程遠い考え方だった。

『無駄な事に時間を割くな』。

『魔術師は時に冷酷でなければ何もなせない』。

『身内桜が他家間桐に引き渡されたのは交渉遠坂家にとつて必要不可欠な事だ』。

気が付けば、凜はずっと二人が高跳びにチャレンジしていたのを終わるまでずっと見ていた。そして自分の家の遠坂邸に帰ると、凜はモヤモヤとした気持ちになりながら就寝したのをよく覚えている。

その気持ちの所為で「桜はどうしているのかな?」と思い、次の日から毎日『間桐桜』の事を聞き回り始める事となり、ショックを受ける。

昔、良く共に笑いあっていた『遠坂桜』は微塵も見当たらず、生きながら死んでいる

よ  
う  
な  
『  
間  
桐  
桜  
』  
だ  
け  
の  
姿  
が  
そ  
こ  
に  
あ  
っ  
た  
。

## 第25話 「ずれ」の捉え方

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤスフィール運営 視点

その日の昼ごはんは所々歪な和食系中華だった。

「……………これって和食系中華？」

「ち、違うわよ！ 和食よ?! ね、桜？ 確かに中華っぽく出ちゃったけど…」

三月の疑いの目十声で半ギレになる凜が桜に同意の言を求める。

「は、はい。 そうですね、姉さん」

だが桜はただ苦笑いするだけで完全な同意はしなかった。

「ウ……………え、衛宮君から見てからどうかしら？」

「ん？ 旨そうだなと思うけど？」

「でしよう?! 分かってるじゃない衛宮君！」

「でも何か『初めは中華を作り始めたけど気が変わって和食にした』無理感が出ている」

「ングッ」

士郎の言葉に一瞬安心した凜だが三月の全く悪気の無いツツコミでその笑顔がヒキつく。

「多分リンの事だから気ままに料理し始めたなら何時もの癖でうっかり調理し始めたんじゃない」

「ええ、お嬢様の言う通りです」

「カハア?!」

イリヤとセラのトドメの二連撃に凜の笑顔は崩れる手と膝を床につける。

結局セラはイリヤの侍女十世話係と言う事で衛宮邸に二人が止まっている間、家事などの手伝いをする事となった。

最初はブツブツと不満そうにやっていたので三月がこつそりと「主の為の毒見」という名目で買ってあった駄菓子などをほぼ全て貰う事に。

基本的に駄菓子類は来客用の為に買ったものだが何故か手作りの方が圧倒的に減っていたので衛宮邸ではずっと持て余していた。

三月の「美人北欧系成人女性ツンデレのホクホク顔ゲットだぜー!」宣言も聞こえていなかったほどその時のセラは浮かれていたらしい。

「モグモグ……………あ、やっぱり美味しい! さすが遠坂さん♡」

だが三月の満面の笑顔と「美味しい」と「さすが遠坂さん」宣言によって少し凜の心



が救われた事実を彼女は胸の奥にしまった。

更に「昨日と稽古の汗を流す」と言い残し、居間を後にした三月は服を脱ぐ途中、鏡を見て一瞬動きを止めた。

「??? 『令呪』が変わった?」

三月の胸には前より着替え中に鏡の中で見た痣模様が以前よりハッキリと映り、若干大きくなっていたかに見えた。

「(『令呪』って変わるものなのかな?)」

三月が一通り頭と体を洗い、お風呂に入っている間彼女はボンヤリと天井を見ながら気の抜けた声を出し、今日の朝の事を考えていた。

「フニャ〜……………(うーん、やっぱりこの行動する前に行動が『見える』ってのは便利ね〜)」

今朝三月がセイバーの斬りかかりに対応できたのは超人的な反応速度からではなかった。

単純に三月には事前に行動がブレて見える。

これは以前切嗣と大河が稽古をしていた時視た現象の応用で、集中さえすれば行動がある程度見える。

なので三月はセイバーが打ち込んでくるであろう一撃の軌道に竹刀を構えただけな

のだが……まさか竹刀が壊れるほどの勢いで来るとは思わなかった。  
「やっぱ見るだけじゃ駄目か〜」

同時刻の頃、桜に士郎たちは三月の趣味とか興味の引くものを聞いていた。  
が、結果はあまり芳しくなかった。

「趣味や興味を言われましても……私達がほとんど喋る事と言えば家事や料理ですし」  
「それ以外の物とか無いの？」

「う〜〜ん……………」

「あ、じゃあ苦手な物とか嫌いな物とかがってあるかしら？」

「え？ どうしたんですか皆さんいきなり？」

「あー、そのー」

士郎と凜が言い淀み、イリヤが溜息を出しながら代わりに答える。

「ミーちゃんに私がお礼したくてお兄ちゃんと同じに相談したんだけど良く分からなくてー」

「あら、そうだったんですか？ 嫌いや苦手なもの……………確か……………」

「あるの?!／あるのですか?!／あるのか?!」

凜とイリヤ、セイバー、そして士郎の迫り込むような勢いに桜の体は「ビクウ！」と

する（桜の髪の毛が一瞬「プワツ！」とするほど）。

猫であるなら天井に張り付くような勢いと言えば分かりやすい例えだろうか？

「えっと……幼い頃、三月先輩とお買い物でお出かけになられた時にその……帰り道の道路照明灯が壊れていて私は迂回しようかどうしようか迷っていたんですよ……その時は暗闇が少し苦手でした」

「……………」

桜の表情が一瞬暗くなるのを凛は見逃さず、凛は気まずそうに唇を噛む。

「でも、三月先輩は臆する事無くただ暗闇の中を突き進もうとしたんですよ」

「え？　こう、止まらずとも何も？」

「はい。　びっくりしましたよ。　そして急いで三月先輩の事を思わず抱き着きながら聞いたんですよ、『怖くないんですか？』って」

「そ、それで？　どうだったのサクラ？」

何故か怪談じみた空気になっているのに桜は若干（？）楽しみを得ていたのを他の皆に気取られないようにしていた。

「そしたら三月先輩は顔色一つ私の方を見て『ああ、ごめんなさい。　桜は怖かった？　私、そういうのって良く分からないから。　次からは気を付けるね？』と」

「……………」

士郎達には思う所などがあるのか、黙り込み、桜は気ままずくなりモジモジとしていた。  
「……………あ、あのー？」

凜が突然桜の肩をガツシリと掴む。

「桜、他には何か無かったかしら？」

「え？　ね、姉さん？」

「お願い、桜」

「ハ、ハイ……………えっと……………同じように出かけていた時、車か何かに轢かれた猫が道路の隅にあつて、三月先輩はそのまま持ち上げて近くのゴミ箱に捨てたんです」

「ウゲツ、それは……………ちよつと」

「え？　そうですか？　手はちゃんとその後三月先輩は洗いましたよ？」

更に顔色が悪くなる凜に桜の背中がゾクゾクしたのを桜は胸奥深く埋める事に決めた。

凜の表情を脳内記憶に焼き付けて。

それから桜は更に先程のような、三月の常人からすればズレた言動を話し始める。

「瀕死の犬は助けようと必死になり、自分の服が汚れるのを恐れず近くの獣医に持って行った」。

「コケて膝に怪我をした見知らぬ子供の看病をした」。

「道ですすり泣く少女を素通りした」。

「親からはぐれて泣いていた子供をあやし、親と一緒に探した」。

「探偵ドラマや映画は退屈そうな表情で観るが逆に政治家達が出る議論などは面白そうに笑っていた」。

等々といった具合だった。

そこに士郎が入り、二人の言い分を凜とイリヤが聞いていった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「ねえ、桜はどうする?」

「.....え?」

三月が風呂から出て皆が静かに居間で寛いでいると三月は居間から凜と桜の声が聞こえてきた。

「何だろう?」

「今日も衛宮君の家に泊まるのかしら?」

「えつと……」

「俺は別に構わないぞ? 藤姉も、多分まだ学校での事で忙しいさ」

「(あ、成程。 葛木先生絡みでまだ帰り遅いのか藤姉)」

「で、でも——」

「と言うか留守を頼んでくれるか?」

「……………え?」

「いやこの頃物騒だろ? 俺はちよつと見回りをするだけさ」

「……………セ・ン・パ・イ?」

「ういえ?! な、何で私いい?!」

三月がタイミングを計らったかのように居間に入ると怖く笑い顔をした桜が青ざめる凜を見ていた。

ちなみにイリヤは桜に弄られる凜が楽しくて静かに紅茶とお菓子をポリポリと食べていた。

「えつと……………どゆ事、これ?」

## 間桐慎二 視点

「ど、どういう事ですか?! 爺さ——お爺様?!」

同じ日に同じ問いだが場所は変わり、冬木市のとある地下室に変わる。

「何、簡単な事じゃよ。僕は聖杯を手に入れればその他に文句は無い」

「けど、それがどうして遠坂達を倒す理由になるのですか?!」

間桐慎二は青くなりつつある顔色で、前に立っている臓硯に何か乞うような声を上げていた。

『桜達を巻き込みたくなければマスターとなり、魔力を間桐邸に捧げろ。それで事は済む』。

これが聖杯戦争直前に慎二が受けた頼み<sup>命令</sup>で、それをせっせと今までずっと励んでいた（留守の衛宮邸で時々休憩を挟みながら）。

臓硯は例としては広範囲の魂食いなどを進めたが慎二は居なくなっても社会が困らない人達を優先的に贄として狙っていた。

大抵の場合、そのような奴らの周りにも同類がいるからだ。

要するに一匹叩けば30はいると言う様な芋づる式で贄がわんさか出てくる。そしてついさつき、臓硯が慎二に言つて来たのだ。

『魔力も順調に溜まりつつあるので頃合いかも知れん。遠坂の娘を脱落させる』と。

これに慎二は震えた。間桐家の現当主の臓硯がこの聖杯戦争で誰かを明白に脱落させると言つたのだ。

そして慎二の知る限りでも臓硯は念には念を入れるタイプで宣言した事はほぼ成功する。

「何もお主がやれとは言つておらんだろうか？」

『だからお前はそのままが良い』。

最後の方はそう慎二に聞こえていた。

まるでそれしか出来ないだろうか？な言い方で。

「え、あ、でも」

それでもまだ何か言いたい事を探していた様子の慎二に臓硯は目を細めた。

「ほう？ 貴様の頼みでキャスターを始末して、やる気を出したこのご老体では不満と？」

慎二の身体がビクリと反応する。

実はキャスターがライダーの結界を利用して慎二がどうキャスターのいる場所にど



う攻め込むかブツブツ言っていた独り言を臓硯が笑いながら聞き、声を慎二にかけた。『キヤスターは儂に任せろ。お前はそのままライダーと魔力を回収しておけい』

慎二がその夜、間桐邸に戻ると何時もよりおぞましい空気に満ちた間桐邸にアサシンを連れて笑っていた臓硯がいた。

『良い拾いものが出来た』と笑顔で臓硯を見た慎二は思わず体の震えが止まらなかったほどだった。

「お、お爺様。ど、何処で彼らと事を構えるつもりなのでしょうか?」

「む? なんじやお主、やはり手伝いたいのか?」

ニイーつとおぞましく笑う臓硯に慎二は全力で否定した。

「い、いえいえいえいえいえいえ! お爺様の邪魔になりたくないだけです! 巻き込まれたら、僕は一溜まりも無いですから!」

「……………フン、良かろう。それにもうここまで来れば儂だけでも——」

最後のぼそぼそとした臓硯の言った事がイマイチ聞こえなかった慎二に臓硯は大体の場所を伝える事だけにした。

魔力は幾らあっても良いモノなのだから。

そしてその地下室の影からしっかりと彼の言った事を全て分かったモノがいたのを

慎二やライダー、臓硯や彼のアサシンでさえ気付かなかった。

「フフフ。大丈夫だよゾオルケン。聞いちゃったからさ、君にはちよ〜つとお灸をすえないとね〜♪」

セイバー運営、アーチャー運営 視点

その夜、出掛けようとした士郎、三月、セイバーは話し声を玄関の方から聞こえてきた。

「」

「！」

「？」

「」

声だけしか聞こえなかったが、二人の女性と士郎は聞き取り、通路の角を曲がると玄関には予想通りの二人がピタリと話を止める。

「あら衛宮君、遅かったわね」

「あ、先……………輩……………」

そこには私服姿の凜と、桜がいた。

「どうしたんだ二人とも?」

士郎の問いに、表情の沈む桜と答える凜。

「桜が『衛宮君に危ない事を強要するな』って言うて来てね、私は『寧ろ心配で付いて行っている』と説明していたのよ。衛宮君って頑固だからさ」

「そうなのか、桜?」

「……………はい」

桜の更に沈む顔に士郎は安心させるように、張り切りながら言葉を続ける。

「大丈夫だつて桜! ちょっと夜の様子を見に行くだけだ。それに、遠坂つて頼りになるからさ!」

「え?」

目を見開き、士郎を見る桜。その顔を見た三月は——

「——(ん? あれつて、『失望』? 『恐怖』???? 何だろう?)」

「だから俺達が安心して帰つて来れるように留守を頼む、桜!」

「あ……………は……………いい」

「ハア……………桜、これだけは信じて頂戴。これは衛宮君が望んで出て行つてい

て、私達はこのバカが暴走して無茶しないように見張る為に付いて行っているの」

「……………遠坂、何か怒っていないか?」

「うっさい、バカ！ とつとと行くわよ！」

「お、おい待てよ遠坂！」

ズカズカと玄関を出ながらコートを羽織る凜を土郎が急いで靴を履き、セイバーと共に曇るつつある夜の中で後を追う。

三月も同じくブーツを履こうとすると桜が三月の腕を強く掴んだのに三月はビツクリする。

「??? 桜？」

そして泣きそうな顔と、悲痛の満ちた声で桜は心苦しく口を開ける。

「三月先輩……………先輩を……………先輩達を頼みます」

「うん、分かった」

殆ど即答した三月に桜は一瞬呆気に取りられそうになるが、桜はすぐに頭を三月に深く下げた。

「ツ……………お願い……………します……………」

それはかつての切嗣の頼みと三月の受け答えの状況にどことなく似ていた。第三話より

三月を見送る桜の表情は居間に帰って来ても暗かった。

「大丈夫よ、サクラ」

「えっと……イリヤスフィールさん？」

「イリヤで良い。留守を任されたからにはどっしりと構えましょう？」

「……………でも……………私は……………」

「お兄ちゃんの事が心配？」

「え？ ……………『お兄ちゃん』って……………」

「……………私の母親の名前はアイリスフィール・フォン・アインツベルン。そして、父

親の名は……………」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

そして空がさらに暗くなった町を土郎達は歩きながら話していた。

「なあ、三月？ お前怖い物とか無いかな？」

「んえ？ 何か激突だね」

「まあ、暗闇が怖いとか無いかなって」

「(衛宮君、いくらなんでもどつ直球過ぎるわよ)」

「ええと、桜がさ」

「え？ 桜が？」

「あ、ああ。少し前に三月が怖いもの無しみたいな話をしていたからさ」

「いや、別に暗闇が怖いなんて事は無いけど」

「そっか」

「じゃあさ、グロいモノとかはどう？ 例えば死体とか」

「え？ ん？ どうだろう？ 出来たらゴミに捨てる」

「「え？」」

「え？ 何その反応？ だって迷惑じゃないかな？」

「「……………」」

凜とセイバーが黙り込み、士郎が次の問いをし始めた。

その日の昼、桜から話を聞いた皆はこっそりと互いに三月に確認を取ろうとする事に決めた、彼女の行動原理を。

そして以下の返事が返ってきた。

「え？ あああの死にそうだった犬ね。 だって必死に生きようとして助かる命を救い

たいと思うのは当然じゃない？」

これに土郎達は共感できた。

「え？ 膝を怪我した男の子？ よく知っているね、あの子が泣こうとしないから

ちよつとお節介したかったの。もし泣いたとしても消毒液の所為に出来るでしょ？」

「(何だ、意外と普通じゃない)」

そう凜も思い始めていた頃だった。

「じゃあさ、すすり泣く少女を無視したのは？」

「え？ 泣いてなんかいなかったわよあの子？」

「「「「」」」」

「だってあの子、ただの『かまってちゃん』でウソ泣きしてただけだし？ 言動、表情、

泣き方と声の使い方が本当の泣き方と違ったから無視したの。あの子、女優を目指せ

るわよ」

「……………で、では迷子の子供の親を探す事はどうなのでしょう、かミツキ？」

「別に良いと思う。それが本当に迷子で、事情があつて親か子供が意図的に置いて行

かなければ良いんじゃない？」

三月の段々とズレる説明にさすがの土郎も違和感を覚え始めていた。

「それは違うんじゃないか？」と。

「そういう見方もあるわね。 あ！　　そういえば三月つて探偵ものとか好きそうね！  
何かおススメとかあるかしら？」

「え？　　あんなの止めたほうが良いわよと遠坂さん」

「え？　　何で？」

「だって面白くないじゃん。　あんなネタバレだらけの番組に何で皆ワアワア騒ぐのかが分からない。　あんなのすぐに分かっちゃうじゃん」

「そ、そうか？　　その割には議論とかは面白く無きそうじゃないか？」

「えー?!　　士郎こそ何言っているのよ！　　あんなに良い茶番劇がタダで観られるのよ!」

面白いいじゃんー！」

「ちや、『茶番劇』い？」

「ふわく、今日は降るのかな？　　雪かな？　　寒いし」

三月が空を見ながらセイバーの隣で独り言を出す。

「……………そうね」

凜が士郎の近くに行き、身体を寄り添うかのように近付づく。

「と、遠坂?!」

「黙って聞きなさい。　見張られているわ」

凜がセイバーの方を見ると彼女は頷き、同じく三月にこの事を伝える。



そして皆が冬木中央公園の開けた一部に出ると凧が口を開ける。

「姿を現したらどうかしら、間桐の（ご）老公？」

誰にでも向けていない凧の問いに、土郎達の前に大勢の蟲「キイキイ」と鳴き声を出しながら集結し、一人の老人がその中から姿を現す。

「ほう、流石は遠坂の娘。 優秀よのう」

先程アーチャーから凧に連絡が入ったのだ。

「誰かの蟲に見られている」と。

この何者かを釣る為に凧達は敢えて人氣が無く、開けた場所に歩き出ていた。

勿論、アーチャーが『蟲』といった時点で間桐臓硯と当たりを付けていたので半分ブラフのつもりで凧は彼の名前を言った。

「あ、アンタは間桐臓硯?！」

土郎の驚く声で今まで「誰このお爺ちゃん?」と?マークを出しつつ放しの三月が聞く。

『間桐臓硯』って、慎二君や桜の……えっと、誰?」

「フム、こうして会うのは初めてか」

「あ、ああ。俺も前に桜を見送った時に一度だけ会ったから詳しくはないが、慎二達の祖父だそうだ」

「ええ。そして『間桐』の中で唯一魔術が使える正真正銘の魔術師よ」

「クカカ。この老いぼれに何を期待しておる？ 儂はただの死にぞこないじゃ」  
 「で？ その『老いぼれ』が何で私達の監視をしていたのかしら？ 恐らくは慎二絡みでしようけど」

「成程。あのご老体が間桐家の魔術師メイカスならば、ライダーのマスターに加勢し、聖杯戦争を有利に進める筈」

「ハツハツハ、確かにアレ絡みだが的を射ておらん。何、ただ可愛い可愛い甥の学友達が気になっただけよ」

一瞬だけ笑っている間桐臓硯の視線が三月を見た瞬間、彼女の背筋に冷たい感覚と身体が思わず「ゾクリッ！」と震え、咄嗟に土郎の後ろに隠れる。

グループの前にアーチャーが突然現れ、セイバーが土郎の隣に立ちながら甲冑姿に変わり、警戒を続ける。

「ほう、変わった風習だな。自分の甥の学友達をただ見る為だけに殺気も放つとはな」  
 『アーチャー、動きを見せたら牽制。仕掛けてくるようなら即座に戦闘開始よ』

『分かつている、凜。君も気を付けろ。このご老体、油断ならない相手だぞ』  
 「殺気、じゃと？ ハ、これはただの挨拶じゃよ」

カッーン！

臓硯は笑いながら持っていた杖を地面に叩くと耳を劈くような音が発され、異様な空

気が場に満ちていく。

「殺気とはこう言う物じゃよ」

この空気は士郎や三月、ましてや凜でさえ初めて経験するような、まるで自身の身体が地面に上から押しつぶされるような感覚から股を着きそうになった。

それは「今から殺す」と言った生ぬるい物ではなく、「もう既に死んでいる」と錯覚させるぐらい異質なものであった。

「あ……………グツ……………」

「おも……………たい……………」

「シロウ、ミツキ?!」

「なん…なのよ……………これ……………」

「慌てるな、セイバー。これは呪詛の類、気を失わなければどうという事は無い」

「ほう?」一瞬で見破るとは。そこなサーヴァントはかなりの場数を踏んでいると見た、クカカ」

「黙れ、妖物」

フツとするとの場の空気が正常に戻り、士郎達はよろめきながらも立ち上がり、一足先に回復した凜が口を先に開く。

「……………それで間桐最後の魔術師の貴方がどうして夜分遅く、こうして出迎えたのかし

ら?」

「何、簡単な事じゃよ——」

臓硯はニイーと笑う。

「——お前達にはここで敗退して貰う」

アーチャーがすぐさま動き、セイバーは空中を薙ぎ払うかのように見えない剣を振るう。

ガキキキキーン!

金属音と共に土郎達の周りに黒く塗りつぶされた短剣が落ちる。

「これは、先日の子!」

「黒く塗りつぶした短剣ダーク! やはりアサシンか!」

「フム、流石はセイバー」

セイバー叫びに未だに笑う臓硯は面白いものを見るかのように言う。そして突進してくるアーチャーの前に突然数十名の人達がゾロゾロと現れ、彼は目を細める。

「死霊ネクロマンサー魔術師の真似事か」

「え?」

土郎達がその人達を見るとボロボロの服の下の肌は腐りかけ、生気が全く感じられず、目が虚ろの上に動きがぎこちなかった。

所謂『ゾンビ』だった。

「左様。 お主等サーヴァントに魔術は聞かぬ故、他の方法を取るとしよう——」

「——ッ！ 皆しやがめ！」

「え?!」

「アレは?!」

「ういえ?! 旧ロメロタイプじゃないの?!」

驚く凜と士郎、そして別の理由で驚く三月。

何せゾンビ達はそれぞれ『銃』を構えて、引き金を引いていたのだから。

ダダダダダダダ!

文字通りマスター達である士郎達を狙った銃弾の雨の中、アーチャーが次々とゾンビ達を斬り伏せて、セイバーは士郎達の前に出て弾を見えない剣で弾いていた。

「さて——」

「——フン！」

ゾンビ達を斬り終わったアーチャーはすぐに臓硯の首を刎ねる。

だが臓硯の身体は蟲の群れへと変わり、同時に動かぬ死体と戻ったゾンビ達の身体が爆発し始め、辺りは土煙と死臭に包まれる。

「奴はまだ近くにいる！」

アーチャーの叫びにセイバーは後ろにいる士郎達の周りを気にかけて――

「――シロウ！」

「え？」

セイバーが煙の向こうで見たのは士郎の頭上に群れた黒い何かの塊。

そしてその塊が臓硯の形を取っていた。

無数の蟲が土煙に、翅の音は爆発音に紛れて集まったのだ。

そこで三月の声が響く。

「――汚物は消毒だああああ!!!」

## 第26話 「汚物は消毒すべきだ」

セイバー運営、アーチャー運営 視点

「――汚物は消毒だああああ!!!」

「ぬううう?!」

臓硯は三月の手から出た炎から逃げないようにまた蟲に戻り、虫達が拡散する。

凜は一瞬、自分の父の魔術と連想する。

「つて、三月! 火傷していないか?!」

という士郎の声で三月の手の中にはライター（お墓参りに使った物と同じ）と催涙スプレー缶（ミニチュア）だった。

「まあ、睡付けとけば大丈夫でしょ?」

セイバーが三月を押して迫って来ていた短剣<sup>ダーク</sup>を払い落とそうとするが、先程の三月の即席火炎放射という光源で虹彩が少し縮み、何本かの短剣<sup>ダーク</sup>が後ろにいる士郎達へと迫

る。

『トレース、オン!』

士郎は一步前に出て短剣を『投影』した双剣で払い落とし――

『『ガンド』!』

――凜がガンドで漏れを撃ち落とし――

「行つけー、プチイ○コム達!」

――三月はイリヤが以前、三月の前で使った『天使の詩』の髪の毛状の鷲達で士

郎と凜の周りを守った。

「まさかこれで終わりの訳ないわよね、臓硯!」

凜の挑発のような言葉に臓硯の声はただ暗闇の中で響く。

『フッフッフ、流石は遠坂と衛宮の子達よ――』

急に臓硯の言葉の終わりと同時にアーチャーが凜の首近くを切り払い、彼女を突然退去させる。

「ちよ、アーチャー?!」

「虫と上空だ、バカ共!」

士郎、三月は上を見る前に反射的に首から来た、針に刺されたような痛みに手を上げると虫の死骸が掌にくっついていた。



「うわ！ 汚い！」

「虫？ 蚊か何かか？ (でも今アーチャーが——)」

半面、セイバーの顔は青ざめながら土郎と三月を担ぎ、アーチャーのようにその場を離れようとした瞬間空から数多の武具などが文字通り雨のように降って来た。

「二人とも掴まっついて下さい！」

「おわ?!」

「きゃあー！」

セイバーは風王鉄槌ストライク・エアと魔力放出を同時に発動し、普段よりも更に素早くその場を離脱し、後ろからガラスの割れるような音が三月の破壊された『天使の詩』から来ていた。

だがアーチャーより一足遅かった為セイバーと彼女が担いでいる土郎と三月の周りに爆発ダークが起きる。

更に無数の短剣ダークが針の穴を通すかのような神業でセイバーたちを襲い、彼女は回避するの更に更に爆発に巻き込まれていた(両手が土郎と三月で塞がっている為)。

武具が落ちていない、開けた場所の周りである林まで着くとセイバーが倒れ込むように落ちて、土郎達は投げ飛ばされる。

「ぶわ！ クソ、あの前回のアーチャーは出鱈目過ぎる！ ……大丈夫か、二人とも？」

「……………」

地面では苦しそうに顔をしかめる三月と――

――深い傷を背中に負い、三月同様に苦しむセイバーがいた。  
爆発などからセイバーが敢えて士郎の『盾』となったのだ。

「……………あ」

士郎は短い息を吸う。

士郎はまた助けられた。

助けられてしまった。

《誰かを救うということは、誰かを助けないということなんだ。》

「うるさい」

《ならば認めろ、一人も殺さないなどという方法では結局誰も救えない末路だけが待っている。》

「うるさい！」

《英霊とて全ての人間を救うことは不可能だ。》

「ッ」

「シロウ……ご無事……ですか？」

セイバーが見た士郎の顔は何時もの彼とは程遠い、悔しそうな表情だった。

### 間桐臓硯 視点

人外とは言え人型である以上、その皮と同様か同じような物理法則制限などがある。そして間桐臓硯の場合、彼の体は蟲で出来ていた。

「おのれ、時臣め！ 死して尚、儂の手を煩わせておつてからに！」

彼は若干焦っていた。先程の攻撃はかつて遠坂時臣が前回の聖杯戦争で召喚したアーチャーで、計画としては臓硯が陽動をかけ、遠坂凛と彼女のサーヴァント共々殺すつもりだった（そして臓硯は死体を二つ得る）。

ただ攻撃が聞いていたものより遙かに広範囲だったので、臓硯の内包していた何割かの蟲も巻き込まれた上に『衛宮兄妹』がまさかあそこまで魔術を駆使出来るとは知らな



制的に止まっただけなのだ。

『(な、何じゃ?! ま、全く動けぬ!)』

『やあゾオルケン、最近はどうだい?』

『ツ?!』

男か女、果ては大人か子供かも分からないような、様々な声帯が混じりあつた声はどこからともなく臓硯の考えている事に答えるかのように響いた。

『“久しぶり”、と言った方が良いのかな?』

『……………何故、あなた様がここに?』

それは敬語で喋る臓硯だった。

『嫌な事を小耳に挟んでね、“時”と“状況”を無断で先行する悪くい虫がいるとか』

『はあ、存じ上げませんが。(クツ、さっきの仕業はこ奴か!)』

臓硯は必死に考え、久しく感じていなかった『焦り』を思考の奥底に放り込んだ。

ここで死にたくは無い。

「自分の追い求めていた不死がもうそこまで来ていたからこそ、『順序』を自分の判断で早めたと言うのにそれがこうも簡単に捻じ曲げられ自分の仇になるとは!」と思いがながらもある筈の無い話し相手の視線は鋭く、問答を間違えれば今にも殺されそうな空気だった。

『まあ、そう構えないでくれよ。私達は同盟者ではないか？ 失敗の一つや二つ、いつも言っている様に誰にでもある、人であればね。それに君と君の孫の働きぶりは実に良い』

『……………ありがとうございます』

『ただねえ、ゾオルケン——』

「ズンツ！」と空気自体が重く、息苦しくなるような場に臓硯は搔く筈の無い汗が噴き出すような錯覚に落ちそうだった。

『——君は何をしているのかな？』

『…いえ、儂は…何も……………』

『そつか。じゃあ私は許そう』

フツと空気が軽くなり、臓硯は内心ホツとする。

『まあ、もう少しだけ待ってよ——』

——後は時間の問題だからさ♪』

間桐臓硯は周りの気配を出来るだけ隠密に探り、何も無い事にもう少し安心し、間桐邸の門の前に人となり、立っていた。

「(だが油断ならん。もう既に儂を消しても良い位まで進んでおる、本体と予備の確保をせねば!)」

間桐臓硯が急いで家の中に入り、蟲蔵の扉を開けようとする——

——間桐邸は地獄と化した。

この間桐家が地獄で無い事など、間桐臓硯がいる限り住人達にとって一度たりとてなかつた。

しかし、今日のそれはいつもとベクトルが全く違う。

それは衝撃波だった。

あらゆる家具や壁が吹き飛び、当然臓硯の体も衝撃を躲す為<sup>ため</sup>に蟲の群れへと還る。半ば砕かれた家は、残りの部分から崩れ落ち初め、建物全体がきしむ。

『(な、何じゃ?! い、一体何が?!)』

間桐邸は燃えていた。そして臓硯は急いで蟲蔵に向かった。

燃えている間桐邸は所詮地上にただ置いてあるのは臓硯が用意したカモフラージュ。彼にとつての本命は蟲蔵である。それさえあれば彼は――

『――あ、ああああ! 燃えている! わ、儂の可愛い虫達が! も、燃えてい  
るううう?!?』

もはや彼に信仰などほとんど残っていないが、その場に誰かがいたとすれば「まるで神罰が下ったかのような光景だ」と思うだろう。

そしてあなたがち間違っていないのが怖いかも知れない。

「流石虫だけに、良く燃えるではないか」

『き、貴様ああああ!!』

その火の海になりつつの蟲蔵で立っていたのは黄金の髪に紅の瞳。何時の日か三月を「面白い」と称し、「散歩」の花摘みの代わりにとイリヤの心臓を抉り取った青年がいた。

この煉獄の中にありながら、汗一つ垂らしていない彼を臓硯は知っていた。

何せ十年前の第四次聖杯戦争、遠坂時臣が当時何のサーヴァントを呼ぼうとしていたのかは取り寄せた聖遺物を確認すれば一目瞭然。



そしてそのサーヴァントが世界の誰にも制御など出来ぬ事も理解した。

それも要因の一つとして臓硯は前回の聖杯戦争を諦めていた。

間桐雁夜をバーサーカーのマスターとして参加させたのは単なる「楽しみ」の「道化」役、「気紛れ」として。

「随分と風通しが良くなったぞ？ 匂いはまあ、何れ塵となつて消えて行くだろう」

『ギルガメッシュ！ 何故だ?!』

『英雄王ギルガメッシュ』。十年前、遠坂時臣のサーヴァントだった者は「人類最古の英雄」とも呼ばれ、かつてこの世界の全てを統べ、贅と快樂とを貪り尽くし、全ての宝を所有した王であり、強烈な自我の持ち主。

そして第四次聖杯戦争の実質的な「勝者」でもあつた。

本来の臓硯ならば彼の機嫌を損ねないようにあしらうが、混乱と動揺が彼の思考を鈍らせていた。

『我々は同盟者ではなかったのか?! ま、まさかこれはあの方の——?!』

「——勘違いをするな。歳で頭が耄碌したか？ たかだか500年生きただけと言うのに。これは私の『散歩』だ」

「散歩」。マキリ家から間桐家の数百年作り上げた魔術工房と臓硯が大切に育て上げた虫達が崩れ燃えていくのが「散歩」と聞いた臓硯は激怒した。

『散歩？ 散歩じゃと?! 間桐家の！ 儂の悲願を——!』

「——まあ分らんでもない。 快楽を求めるのは人の証だ」

『ならば何故——?!』

「——『何故』だと？ 我は豪勢なモノを許す。 裝飾華美などもつとも愛でるべき

ものだ」

これは人外になった臓硯も共感できる、何せ今は燃えているが彼の蟲がそれに値していた。

「だが我は余分なものに与える意義などない。 臓硯よ、我は昔十人の奴隷を選び、その中でいなくとも良い者を殺そうとした事がある。 どうなったと思う?」

臓硯は必死に生き残っていた蟲を安全な場所へと誘導しながら出来るだけ時間稼ぎを考えていた。

未だに自分に攻撃が来ないのはギルガメッシュの気紛れにすぎない。

『……………どうだろうか。 その者達の生い立ちや家族、社会への利益などの配慮——』

「——そこだ、臓硯。 一人も殺せなかったのだよ。 いかな人足とは言え、無駄な者などいかなかったのだ。 かつての我の世界には」

臓硯は内心舌打ちを打ちながら、冷静に戻りつつ、次の手を考えていた。

「だが今この世界には余裕が溢れているではないか！ 十人どころか、何千、何万といった人間を選んだ所で殺せない人間など出てきまい！ それに多いと言う事はそれだけで気色が悪い。 臓硯、貴様は私の物に許可なく手に掛けようとしたな？」

ギルガメツシュが笑いながら臓硯の蟲を睨む。

『な、何の事だ?! 儂は——!』

「——貴様は罪を犯した。 ならば法である我が裁く必要がある。 ただそれだけだ」

セイバー運営、アーチャー運営 視点

ある程度セイバーの自己治療が進み、歩けるようになる間に別の方向に離脱したアーチャー運営が士郎達を見つけた。

「衛宮君！ 三月！ セイバー！ 皆無事かしら?!」

「遠坂！ 三月の様子が変なんだ！」

凜が三月の状態を見ると以前、学校でキャスターが結界を発動した時と同じような症状が出ていた。

「学校の時と同じ？ いえ、今のこれが更に容赦無いように見えるわ。 結界が無いの  
にどうして——？」

「凜、少しいいか？ 彼女の首を見ろ」

「アーチャー？ ……………何、これ？」

士郎が三月の首を見ると、以前イリヤとバーサーカーに会った夜の帰りに慎二が眠ら  
せた美綴と似た痣が出来ていた。

「これは、美綴の時の？」

「美綴？ どういう事、衛宮君？」

「あ、ああ。話が長くなるんだが——」

「——取り敢えず、移動しましょう。今ここでは襲撃されては我々が不利です——」

「クッ！」

セイバーが気丈に振舞おうと立ち上がるが、痛みに顔しかめ、体がよろける。

「無理をするなセイバー！ お前の背中、ズタズタだったんだぞ……………」

「なら私がお前の妹君を担ごうか？」

「気安く三月に触るな」

「……………ハ」

アーチャーの提案に士郎がきつい警告をアーチャーに出すと彼は呆れた顔をしながら

ら士郎を鼻で笑う。

「な、何だよ?! 文句あんのか?!」

「……………いや、少々思う所があつてな。ここまでのバカとはオレも呆れたよ」

「な?! バカとは何だ、この馬鹿!」

「何だと?!」

「シロウ! アーチャーも! まずは移動を開始してからにして下さい!」

「チツ」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

士郎は三月を背負い、凜はセイバーに肩を貸し、アーチャーは霊体化したまま周りの警戒をする。

その間に士郎は美綴の件に関して凜に話し、その時の美綴を診たのも三月だったと言  
い出し、「遠坂なら何かできるのではないか?」と聞いた。

「別に私が診ても良いけど、変に刺激したくないのが本音ね。イリヤスフィール達と  
一緒なら彼女の知識とかも当てに出来るわ」

これに凜は半分本音と嘘を掻き混ぜていた。凜が診ても呪詛の類らしいので治療  
は多分出来る自信があった、リスクは十分あるが。

だがこれは三月をイリヤ達と一緒に調査できる機会でもあった。

つい先日、士郎と桜に「自分の性格が嫌い」とカミングアウトしただけに心は揺らい  
でいた。だが安全第一の元、凜は敢えて「悪役」は自分がなろうと一人で決めていた。  
「そう言えば学校の時とは違って衛宮君、魔術師としての魔力が各段階違うわね。一  
体何をしたの?」

「あ、ああ。『投影』をして、眠っていた魔術回路が開いたんだ」

「……………」

「と、遠坂?」

凜はまたもや頭を抱えそうな勢いと、「またか?! こいつめ!」といった目で士郎を見  
る。

「……………衛宮君達といると私の『魔術師』としての常識が日々塗り替えられるわ」

「え？　そうか？」

「そうよ！　魔術回路つてのはね、減るのは簡単だけど増えるのは普段難しいのよ?!  
普通はモノスツゴイ苦痛を耐えて手術をやったり移植したりとか！」

「へー、魔術つてやつば凄いなー」

三月がこのセリフを聞いてツッコむ余裕があったのなら「違う兄さん！　そこは『魔術の力つてスゲエ！』つて言うのよ！　小太りで細目なら尚更良い！」と言つていたに違いない。

マサラタ○ンではなくてここは冬木市だが。

ただ当の本人は衰弱していく様子だったので余裕などは無かった。

「あなたね、どうして私と衛宮君が平気なのか知ってる?!　貴方も刺されたらしいわよ、三月と同じようなモノを……アーチャーは私の方を阻止したけど」

「そうなのか？」

「呆れた、本当に気付いていないなんて……」

「でも俺、何とも無いぞ？」

凜は片手でトランプカード箱状の物を取り出した。

それは三月が土郎、凜、桜達に渡した魔術礼装だった（あと仲間外れにするのは嫌だったのでイリヤとセラにも三月は動ける次の日に渡していた）。

「……………恐らくこれよ……………そしてこれ、とんでもない代物よ？ 貴方の……………貴方達の養父が作った物なんですつて？」

「そう三月が言っていたな」

「これ、三月は『毒あるモノを無効化する』つて言っていたけど違うわ。恐らくこれは

『浸食を無効化』するわ」

「?????」

そしてイマイチ付いて行けない士郎に凜は苛つきそうになるのを抑え、説明する。

呪詛は今の時代という所のウィルスで、他生物の細胞を利用して自己を複製させる。

ただこの場合は他生物の魔力を利用している。

本来ならある程度の魔術師であれば魔力を体中に流しておけば対処は出来る（魔力があればの話だが）。

ただ三月のように急に具合が悪くなるのは普通、何の対処も無意識な防御も出来ない一般人の様子だった。

「でも、俺が言うのもなんだけど三月は魔術師として結構いい方なんじゃないのか？」

「まあ、『野良』としてはマシな方ね」

凜が「野良」と言った瞬間、士郎の頭に猫耳＋尻尾コスをした三月が過ぎった。

「……………（何か普通にハロウィンでするような勢いだ）」



「??? どうしたの衛宮君?」

そして凜が覗き込み、今度は凜が猫耳＋尻尾コスしている所を――

「――ブフ!」

「え? ちよ、ちよつとどうしたの急に?」

「い、いやちよつと……お、思い出して……」

「ハア?」

余りにも妄想が似合い過ぎた事に噴き出した士郎は急いで衛宮邸に帰る事にした。

## 第27話 (周囲の) 悪意によって歪んでゆく(筈の) 被害者達

セイバー運営、アーチャー運営 視点

士郎達が衛宮邸に戻り、塀の隣を歩いているとセイバーが急に立ち止まり、アーチャーが実体化する。

「セイバー」

「はい、一体だけ感じます。 足手まといにはなりません」

「アーチャー、敵は何処かしら?」

「な、もしかして——」

「——サーヴァントだ。 この感じからすると居間辺りか?」

士郎達が玄関を潜ると中からトーンの高い悲鳴(?)の様な声が聞こえていた。

「ヒイヒイヒイ?!」

急いで居間の方へとドタドタと(士郎は三月を背負いながら)皆が居間に突入するとそこには数多の髪の毛の鳥に囲まれている慎二が腰を抜かしながら顔を恐怖に染めながら冷や汗を流し、イリヤはモグモグとチョコタルトを食べていて、ライダーは桜の隣で座っていてその桜は気まずそうな表情で下に俯き、セラは呆れたような顔尚且つ頭が痛いのか何時もよりも顔が固かった。

以上のカオス的な場面に出くわした士郎達の思考は一瞬止まった。

「あ、お帰りなさい—— ツ?! せ、先輩達どうしたんですか?! ボロボロじゃないですか!」

「あ、ミーちゃんどうしたの?!」

「と言うかこの状況を説明して」

士郎と凜が同時に聞き、セイバーは不可解な顔を未だにしながら冷静(?)に座っているライダーを見ていた。

---

### ライダー運営 視点

---

時はその夜、士郎達が臓硯と対峙する前まで戻る。

慎二とライダーはまたもや裏世界の掃除を終えたところで間桐邸に戻る途中だった。そして不意にライダーから慎二に話しかけた。

『……………マスター、今日も妹君の所へ寄るのですか？』

「いや、アインツベルンのマスターと召使が今は居るらしい。衛宮の事を考えたら『保護した』と言う所か」

『そうですか』

本来とは違い、慎二はそれ程捻くれてはいなく、桜の虐待も（それ程）していなかった。

この上、慎二は直接言つて来てはいないがライダーは知っていた。

今までの行動が全て愛しい妹の桜を助け、彼女を危ない戦い事柄から遠ざける為だと。

本来ならこの二人の性格はズレていて、相容れない者同士の筈だった。

だが本来とは違う事がこのズレを緩和し、互いに「桜」と言う大切な人物の助けをしないとという明らかな動機がこの二人の行動を円滑にしていた。

『ライダー』。真名を『メドゥーサ』と言い、ゴルゴン3姉妹の末妹にしてギリシャ神話で登場し、勇者ペルセウスによって退治された怪物として有名である。

が、彼女の生い立ちを知る者は少なく、更にメドゥーサがギリシャの神々によって一方的に運命を歪められたのは広く知られていない。

メドゥーサは生前、ポセイドンの一方的な求愛を断つたが為に神々達に迫害され、怪物になる呪いをかけられ、『形のない島』へと追いやられる。その後は付いてきてくれた姉たちと静かに暮らそうとした。

だが武勲と神の寵愛を求め、「我こそは！」という猛者達が次々と島にやってくる。怪物退治の大義名分の下にメドゥーサと彼女の姉妹たちを殺す為に。

そのような猛者達から姉達を守る為に撃退している内に、メドゥーサの姿と性質は徐々にだが真に呪われし怪物へと変化して行き、ついには守るべき存在の筈だった姉たちでさえ認識できなくなり、その存在と後から来る者達を捕食し続けた。

勇者ペルセウスによって退治されるまでずっと。

この様な、まさに「悲劇のヒロインが怪物へと成った」のがライダー、真名メドゥーサであり、正式な英雄ではなく、「反英雄」とも呼べる者だった。

そんな彼女が召喚されて初めて見た間桐邸の状況、慎二と桜、そして臓硯を自分の生前と連想させていた。

間桐邸と言う「世界」の「神」、臓硯によって苦悩する慎二と精神だけでなく物理的にも苦しむ桜と言う「兄妹」をメドゥーサは自分の姉妹達を。

本来ならそんな事を知らず気にせずの慎二がサーヴァントをただの「使い魔」魔術師の道具として見ていたのも要因の一つで、慎二の命令を仕方なく遂行していたのを彼女なりにちよつ

とやる気を出して魔力を間桐邸に持ち帰っていた。

そして時々桜だけが居た衛宮邸で休憩を挟むのもライダーは内心嬉しかった（主に桜と慎二の仲が良いであつて可愛いか手作り菓子はあまり関係していない………筈。）

慎二とライダーが間桐邸に入ろうとすると――

『――マスター、サーヴァントです』

「……この者か？」

慎二が後ろからの声に反応して振り返ると、そこにはお爺様の知人が立っていた。

「これは王よ、お爺様をお会いにわざわざ来られたのでしようか？」

本来なら「サーヴァント魔術師の道具に使い魔魔術師の道具」の考え方をした慎二は相手がギルガメッシュだと

しても「所詮は使い魔」としか彼らサーヴァントを見ていなかった。

だが今の彼はそんな極端な偏見を持たず、サーヴァントをちゃんとした「個体」として見ていた。

まあ、ただ単にお爺様が知人として慎二達に紹介され、「ちゃんと敬意を払えなければ首が物理的に飛ぶぞ」と言われたのも大きいが。

「あの老体か。確かに、奴絡みだが………貴様はシンジとか言ったな？」

「はッ。覚えて貰い、光栄です」

「この屋敷、少々荒事になる。十分待つ」

慎二はゾクリと冷たい感覚が背中を走り、彼は間桐邸の中に走り込む。

「ライダー！ 桜の物を集めてくれ！」

ライダーが実体化し、慎二は自分の部屋の物を次から次へと旅行トランクやバッグ等に放り込む。

魔道具や錬金術の本、液体の瓶や材料の入った箱。

そして十分経とうとする時、ライダーと慎二の両手はトランクやリュックにカバン等で塞がっており、ギルガメッシュの周りに空気の歪が無数に既に出ていた。

「五、四、三——」

ギルガメッシュの声を聞いたライダーはその長い髪を束ねてそれらに蛇の形を取らせ、蛇となった髪で床に置いてあったカバン等を持ち、慎二を乱暴に担ぎながら近くの窓を破ると無数の武器が間桐邸を粉碎し始めた。

「うわああああ?!」

そこからライダーは叫ぶ慎二を無視して考えた。「次はどうする?」と。

無論、桜の安否がライダーにとっては最優先だった。慎二はオマケ。

なら桜のいる場所に行けば良いと思った。

そこにはちょうど良く、バーサーカーのマスターだったイリヤ<sup>魔</sup>ス<sup>カ</sup>フィール<sup>ダ</sup>ク<sup>ク</sup>がある。

確かに彼女は優秀な魔術師、だがサーヴァントであるライダーなら何も問題は無い。

ふとそう考えていると急に衛宮邸で以前聞いた少女の声がライダーに聞こえた。

《ふわあ、可愛いなー》

その声の持ち主は暗い部屋の中で自分を怖がるどころか、期待の目を向けていたので「自分が怖くないのか？」と聞いた。

《へ？ 何で？》

数ある言葉を慎二と共に贅を探す時に「囚役としてライダーは色々な言葉をかけられ、表現されたが「可愛い」や「怖くない」とは一度たりともなかった。生前も含めて二人からしか聞いたことが無い言葉。

かつて「形の無い島」で静かに暮らしていた姉達の言葉と一緒だった。

「……………」

「な?! さ、サーヴァント?! な、舐めないで下さい! 私だつてアインツベルンの——」

そしてライダーは考えている内に衛宮邸に何時の間にか着いて、騒動を聞き、玄関に出てきたセラに驚かれながらも魔術を行使する事にライダーは一瞬反応が遅れた（考えに耽っていた為）。

『セラ』。アインツベルンの『ホムンクルス』でイリヤの教育係と世話係を兼ねている



メイド。 ホムンクルスだけあって優秀な魔術回路を持ち、イリヤの教育係だけあって魔術師としても優秀。

「——ああ違いました！ これではなくて——！」

もしここでセラが攻撃的な魔術を行使すれば如何に思いに耽っていたライダーと言えどもかつての猛者共を葬った反英雄。 反射神経のみでセラの首を跳ねるのは造作もない事。

ただセラはリーゼリットと違い、ホムンクルスとしては珍しく暴力に対して耐性が無い為戦闘には不向きであったのがライダーと、セラ自身に幸いしていた。

まあ要するにセラは「おつちよこちよい」で、争いごとになるとテンパって実力が出せなくなるのだ。

「セラさん、どうかしたんだ——ライダー?!——それに見さんまで?」

「セラ、さっきの——ライダー?!」

「桜、事情が変わりました」

玄関のごたごたを聞いて調査に出たセラがなかなか帰ってこないのが様子を見に来た桜が驚き、イリヤは瞬時に魔術を使い、セラを引かせ、数匹の髪状の鳥が周りを飛び回る。

「ま、待ってイリヤさん!」

桜がライダー達とイリヤ達の間に入ったのにライダー、慎二、イリヤは全員びつくりした。

基本的には穏やかで控えめで怖がりの桜が自らが危険な場面に立ったのに。

そこから桜と慎二はイリヤに話し始めた。

聖杯戦争で間桐家は臓硯の方針の元で魔力を備蓄する事を同盟者から任されていた。

そして本来ならマスターとして選ばれた桜がそれを行うのを慎二が良しとせず、彼女の代わりにやると臓硯に言い――

――臓硯は『魔力も順調に溜まりつつあるので頃合いかも知れん。遠坂の娘を

脱落させる』と言った事も。

ガタツ！

イリヤが急に真剣な顔になり、ちやぶ台が酷く揺れて上に置いてあったお皿などが音を出すほどの勢いで立ち上がった。

このようなイリヤを始めてみる桜と、このように小さな子がこれ程の殺気を出せるこ

とに内心驚いたライダーにイリヤはもつと詳しい話とチョコタルトをセラに要求した。勿論そのチョコタルトが手作りだと慎二が聞いた瞬間、彼も要求したがイリヤの優しいお断りによつて却下された。

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤ運営、ライダー運営 視点

三月の具合を診ると言つた凜、イリヤ、セラ、そして一応の護衛としてセイバーが凜の部屋に行き、居間には士郎、慎二、桜、ライダー、そしてライダーの監視役としてアーチャーがいた。

そして慎二は何時もの様子はなく、彼にしては珍しい貧乏揺すりをしていた。

最初こそニマニマと笑いながら士郎達を小馬鹿にしてはいたもの、三月の状態を見た瞬間すぐに顔が真剣になり、彼は聞いた。

「虫に刺されたのか？」と。

突然慎二の豹変ぶりに呆気にとられていた凜の代わりの答えるアーチャーの言葉に慎二は廊下にまだ置いてあつたトランクを開け、アーチャーが制止する前に一つの瓶を士郎たちに見せて彼らに言う。

「これが効くはずだ、使つてくれ」と。

慎二は慎重に、慎重に臙硯に勘付かれないようにさまざまな鍊金術の実験の中で一歩だけのアレンジをしながら何度も何度も研究の中に更に隠した研究を重ねていた。

どうすれば桜を自由に出来るかを。

慎二が桜の事を気付いてから彼は魔導書などの勉強に没頭した。桜はこの頃を「兄に放置された」と思っていたが全て慎二の言動は桜の為だった。第17話より

《私は貴方の真つすぐな、一途な生き方を誇りに思っています！》

そして彼の行動はとある女性の影響を色濃く受けていた。

ある日、間桐慎二は知ってしまった。

「自分は要らない存在」だと感じていた事に。

どれだけ魔導書を読み、魔術を行使しようとしても失敗する。

唯一の成功例は『鍊金術』。

だがそれでも自分の父や祖父は目向きもしてくれないどころか自分を「邪魔者」として嫌悪していたかのようだった。

「間桐家の長男である自分が正当な時期間桐家当主」。

そう信じ込んでいた。信じ込んでいたが故に「自分は要らない、嫌悪される存在」と感じていた事に酷く心を痛め、更に自分が初めて「親友」と呼べる『衛宮士郎』と会う為に衛宮邸と言う心が安らぐ場所とのギャップで彼はある日、衛宮邸の帰り道すがらに

人がいない所でひっそりと留め込んでいたストレスの所為で木の陰で一人泣いていた。

《よしよし、大丈夫だよ慎二。》

訂正。 慎二が気付くと自分が隠れていた木の上から飛び降りてきた少女が彼の頭を抱き、優しく頭を撫でながら声をかけていた。

それは、慎二にとっては遠い、遙か遠い過去に一度、たった一度だけ感じた「女性の温もり」だった。

そしてその日からだろうか、その少女を意識し始めたのは？

その日まで慎二にとって女性は（妹以外）全員暇つぶしとしてしか見ていなく、気にも留めていなかった。

だが時が経つほど彼は彼女の事が気になり、このような事は妹でさえ感じた事が無く、慎二は知りたくなかった。

そこである日、『衛宮士郎』に自分の妹の事を相談すると、親友はこう言った来た。「何だ、三月と同じようなもんじゃないか」第4話より

慎二はこれをチャンスと思い、二人を間桐邸に招待する事にした。

そこからは士郎や三月から見た通り、徐々にだが桜は人間性を取り戻しつつあった。あの雨の日、慎二が真実を知るまでは。

慎二が次期当主ではなく、桜が次期後継者。 慎二は自分の父や祖父からすれば何の

価値も無い小僧だったと。

そして彼ががむしやらにただ走り、気が付くと衛宮邸にて士郎達に助けを求めていたが、慎二は差し出された助けの手を振り払うどころか、自分が気になっていた少女を殴ってしまった。

このように少女を慎二は殴ったのに、その後慎二に氣遣う様な振る舞いと彼女の言葉が慎二の心をまたもや酷く動揺させた。

「慎二を誇りに思う」。

「誰かが僕に誇りを持ってくれている」。

これのお陰で慎二は大いに救われ、より一層自分ができる『錬金術』に励んでいた。そんな彼を救ってくれた少女がよりにもよって自分の祖父の蟲に刺され、苦しんでいた。

桜のように。

本来なら桜の為にと思い、作っていた薬達がまさかこのように役立つとは思っていない、慎二はかなり焦り、自分の調査し、渡した試作品に不安を持ち始めていた。

この様子の慎二を見た士郎と桜はどう接したら良いのか分からなかった。

あのズケズケと物をハッキリと言う慎二がここにいるのに何も言わないのは二人にとって初めての事だった。

昔から士郎は知っていた、慎二が三月に好意を寄せていたのを。

しかもそれが何時も学園での女子に向けるような、薄っぺらい好意ではなかった事も。

「……………三月の事が心配か、慎二？」

だから士郎は取り敢えず慎二に話をさせたかった。

人は普段している事を止めるとストレスが高まり、慎二の場合は暴力的になるのを士郎は昔見て経験した。

そして恐らく三月のあの様子に慎二が動揺し、何時もの調子が出ない事もあったので三月を話題に出した。

「……………当たり前だ」

ようやく慎二は口を開けると、そこには余裕を持ちながらプライドの高い『間桐慎二』ではなく、ただの『慎二』がいた。

「私もです、兄さん……………」

これに便乗するかのように桜も口を開けた。

「……………聞かないのか？ 俺と……………桜の事を」

「ッ」

慎二の言葉で桜はギュッと手を胸の近くで握り、二人は士郎の方を見る。

「……………いいき、二人が話してくれるまで待つ……………ありがとうな、慎二」  
「え？」

「先輩？」

慎二と桜は士郎に根掘り葉掘り聞かれるのを覚悟していた。

だが以外に帰ってきたのは「お礼」だった。

「ありがとう、慎二。 やっぱりお前は昔から良い奴だよ」

「ツ……………衛宮は馬鹿だな！ 居間の掃除ぐらいちゃんとしろよな！ 埃が目に入っ

てしみるじゃないか！」

顔が俯き、肩が震えながら慎二はそう叫び、心の中で思った。

衛宮兄妹はやはりこんな自分でも認めてくれている。

それが彼にとつて人前で、妹の前で泣くほどの衝撃を与えていた。

「兄さん……………もう、話しましょう？ いいよね、ライダー？」

「桜がそう言うのなら」

「……………そう……………だな……………」

襖がスーッと開けられ、顔が真っ青になつていた凜とセラ、複雑な顔をしたイリヤが居間に戻ってきて、慎二はゴシゴシと自分の目を袖で乱暴に拭いた。

「ど、どうだ?! 薬は効いたか?!」



「……………ええ、流石は腐っても間桐ね」

凜はヨロヨロとして座り、イリヤも座るとセラが未だに震える手でお茶の用意をしていた。

「ど、どうしたんだ遠坂？ 顔が真っ青だぞ？ それにセイバーはどうしたんだ？」

「……………姉さん？」

心配する士郎と桜の声に凜は反応せず、ただぼーつと前を見ていた。

「凜、君が話せないのなら私が代わりに話すか？」

「……………そうね、お願いアーチャー……………今はちよつと……………」

凜が頭を抱え、イリヤは複雑な顔のまま士郎を見た。

「シロウ、その二人は信用出来るかしら？」

「当たり前だ、俺の親友と家族だぞ？」

「衛宮……………」

「先輩……………」

「……………ほんと、シロウは甘いんだから。でも、私はそう言うところが好きだよ♡」

そこでまずイリヤは慎二に向けていた殺気を緩め、慎二たちから聞いた話を再度聞きなおし、詳しく説明させる。

## 第28話 The Unknown Scars U

S A I I

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤ運営、ライダー運営 視点

慎二と桜、あとライダーが時々横から付け加える情報は士郎と桜の実姉の凜には衝撃的な内容ばかりだった。

慎二に魔術回路はあるが発動できない状態なので魔術は『錬金術』しか出来ない。

桜は魔術師であり、今回の聖杯戦争のライダーのマスターでもある。

だが聖杯戦争と言う殺し合いに関わりたくない桜の代わりに慎二が令呪の裏技を使ってライダーの疑似マスターになり、聖杯戦争中は同盟者から間桐運営は魔力の備蓄を任せられ、慎二はこの行為に全力を注いでいた。

そうしなければ桜がまた幼少期のように臓硯から虐待を受けるからだ、昔のように毎日ではないにしても、慎二は苦しむ桜が嫌だった。

バキッ！

セラミックの割れる音が凜の持つていたコップから発し、セラと彼女はいそいそと割れたコップの後片付けをした。

無理もなかった。

まさか自分の妹が養子に出された後の生きながら死んでいた様子がまさか父の時臣の急で冷酷な『魔術師』としての判断で他家の養子に出されたからではなく、その上にそんな事情が桜にあったとは夢にも思わなかった。

まさか養子に出された先で、毎日『魔術の訓練』と称した拷問じみた虐待を受けていた事を誰が思うだろうか？ 自分の尊敬しているお父様ならそんな事を見過ごすのだろうか？ 自分の父、時臣はこれらを知っていて敢えて何も自分に言わなかったのだろうか？

さつき三月の検査を終えて気分の悪い凜の心境はグチャグチャだった。

士郎はと言うとこんなに身近な家族が苦しんでいて、自分はその様子を見ていた筈なのに気付かなかった事に自分に静かに腹を立てていた。

「どうして気付かなかった？」

「どうして自分をもっとよく慎二と桜を見ていなかった？」

「どうして二人は自分に相談してこなかった？」

「どうして」、「どうして」、「どうして」、「どうして」。

そして先程までイリヤが慎二に殺気を放っていたのはその様な些細な事ではなく、慎二の『鍊金術』の腕からだった。

忘れがちだがアインツベルンは元々『遠見』や『憑依』に『鍊金術』に長けている一族。

だが正当な『魔術師』ではない慎二が『鍊金術』に関しては自分とドッコイドッコイの実力を先の葉から知り、多少だが『嫉妬』を慎二に感じていた。

こんな、ちよつと脅しただけで腰を抜かしたり、ビクビクする小物が……

自分が最高傑作である筈なのに、こんな極東で魔術回路も発動できない『野良魔術師』以下の者が……

イリヤの感じていた事はセラも同一だった。しかも自分はなまじイリヤの「教育係」だったので慎二の『鍊金術』が如何に異常だったのか更に感じていた。

それはもう「天才」と言うレベルではなく、「鬼才」とも言えた。だがイラつく半面、セラは一瞬思った。

「これはお嬢様にとって良い刺激になるのでは？」と。

身近に自分の才能と同等か（一部だけとは言え）それ以上の人物を置けばお嬢様も上進するのでは？

そこで慎二は士郎達に伝えた、臓硯は『魔力も順調に溜まりつつあるので頃合いかも

知れん。遠坂の娘を脱落させる』と宣言した事を。

そしてそこからは慎二は臓硯の同盟者の一人であろうギルガメッシュの事を話し始め

「——さて、今ギルガメッシュと言ったか？」

アーチャーが珍しく会話を遮った。

「あ、ああそうだ。爺さんが任された『魔力を集める』というのはそいつから聞いたんだ」

「成程な……通りで奴はあれだけの武器を保有している訳だ」

「どういう事だ、アーチャー？」

「少しは自分で考えろ、エミヤシロウ。と言つてもそこまで私は意地が悪くない——

——」

「(「どうだか」)」

内心ツツコミを入れられるアーチャーはジト目に気付かずそのまま説明する。

「——奴が『英雄王ギルガメッシュ』と仮定し、アーチャーである事から推測できる事は彼の神話や伝承が関わってくる。彼はかつての世の全てを統べ、贅と快樂とを貪り尽くし、そして一番厄介なのが全ての宝を所有した王と言う事だ。とその前に——

——」

アーチャーが慎二達を睨む。

「——君たちがここに居るのは彼やあの妖物の差し金の陽動か？」

「違います」

そこでライダーが口を開け、事情を説明する。

恐らく凜達が臓硯の襲撃に合った後、ギルガメッシュは間桐邸を破壊しに来ていたのを慎二とライダーはバツタリと会い、十分の余裕で荷物などを出来るだけまとめ、時間ジャストに間桐邸は破壊された。

「ですので私達は現在住居無しの状態です」

「成程な、これからお前達はどうするつもりだ？ 聖杯戦争を続けるのか？」

「どうするのかは桜に私は一任しています。マスターはどうなされるのですか？」

「……………僕は桜と……………ゴニョゴニョが無事でいればもう良い」

「え？ 今真ん中の方、何て言ったんだ？」

「『三月が無事で良い』とマスターは言いました」

「グツ?! ラ、ライダー?!」

「ふ~~~~ん？ 慎二、あんたそんな趣味があつたとはね〜」

「え？ やっぱりそうなんですか兄さん？」

「セラ、この男の刑は撤去で良いかしら？」

「ではお嬢様、手術用器具の用意をして来ます」

少し調子を取り戻した凜が慌てる慎二をからかい、全く悪気の無い問いを桜が投げ、真顔になったイリヤとセラが（男性にとつての）死刑宣告をする。

「な?! ちよ?! ま、待て!」

「もういい加減はつきりしたらどうだ慎二?」

「え、衛宮まで?!」

「俺でもお前が三月の事が気になるぐらいわかっているさ。むしろどうして三月が気付かないのかが分からなかったけどさ」

「二二(気になるレベルじゃないと思うだけだなー)二二」

慎二がみるみると赤くなりアタフタと手で不定する。

「ち、違う! そ、そんな風に俺は彼女の事を思っていないからな?! 勘違いだからなお前ら?!」

明らかに怪しい慎二を士郎、凜、桜、イリヤはジツと見て、凜が彼に聞く。

「じゃあ何よ? 明らかにあなた、三月の事となると嬉しくなったり、気にしたりするじゃない?」

「ウツ」

「そうですよ兄さん、私が先輩の話をする時は興味無さそうにそっけなく振舞っています

すけど三月先輩の事となると明らかにソワソワし始めるじゃないですか？」

「そ、それは…」

「そうだと慎二、付き合うってんなら俺は別に止めはしないぞ」

「だ、だから違うって言っているだろうがお前ら?!」

士郎の宣言を最後に慎二は立ち上がり、周りの人達を睨む。

「三月は俺にとつてか——んぐー！」

慎二は思わず叫びそうな言葉を飲み込みながら座りなおす（顔を俯いたまま）。

「『『『か？』』』」

「と、とりあえず！ 話を戻すぞ！ ぼ、僕は別に聖杯なんかいらない！」

「ふむ、そちらのお嬢さんはどうかね？」

アーチャーが話題を桜に振る。

「わ、私は……………その……………戦いたくないです」

アーチャーのジツとした視線に桜は視線を逸らしながらモジモジとする。

「……………嘘ではないようだな。では『英雄王ギルガメッシュ』と仮定し、彼が全ての

宝を所有した王と言うのがどれほど厄介かここにいる者達はわかるかね？」

アーチャーの漠然とし過ぎた問いに誰も声を上げず、凜が溜息を出す。

「つまり、彼はあらゆる神話や伝承の元になった原典や宝具の元になった武器を持って



いてもおかしくはない。奴の宝具は『武器』そのものではなく、生前に集めた財宝を収納した『倉』こそが奴の宝具だろう」

「「な?!」」

そこにいた誰もが驚愕する。そしてイリヤも洩々と理解した。

彼女のバーサーカーが敵わないのもその過程が視界だとすれば当然の結果とも言える。

もしアーチャーの推測通りにギルガメッシュがすべての宝具の原型を持つのなら、その英霊の弱点となるものをその倉から撃ち放てば良いだけの事だからだ。

バーサーカーが何回も死から蘇るのなら『不死殺し』の武具を何度も叩き込めば良い。ライダーなら彼女の直接の死因になったハルペーやその原型を。

そしてギルガメッシュは今現在負傷しているが最優とされているセイバーとは顔見知りなので恐らく彼女の弱点になるモノも知っている。

そして元からマスター狙いを生業としているアサシンクラスに彼が後れを取るとは考えづらい。

となると――

「――アーチャー」

『どうした、凜?』

『もう一度聞くわ。まだ記憶は戻らないの?』

それは凜がアーチャーに向けて発した念話だった。

以前、凜がセイバーを触媒無しで召喚しようと自分の魔力が一番高まる時期に召喚を済ませたが、うっかりによって時期がずれてアーチャーを呼んだ。

しかもそのアーチャーは生意気な態度で凜を子ども扱いした上に何もできないような馬鹿にしていた口調から、凜はカツとなり「絶対服従」の令呪を使った。

その後、凜が一流の魔術師の才能があるのを分かったアーチャーは凜にさらけ出す。

「記憶に混乱が見られる、名前や素性がどうも曖昧だ」と。

つまりは「記憶喪失」。

当初、凜はこれをデメリットではなく「他の誰もアーチャーの正体が分からない」と取っていたがこのように大半のマスター達と交流を持つことは想定していなかった。

だが相手はギルガメッシュという、反則に反則を重ねたような英霊。

ならばもう四の五の言っている場合ではなく、アーチャーの正体が分からなければ良し作戦の立てようが無い。

『すまんが、未だに靄が掛かっている状態だな。だが君が睨んだとおり、私はセイバーと面識があるみたいだ。彼女の事を覚えている』

これは以前、凜とアーチャーが士郎と三月を襲うであろうランサーを止める為に衛宮

邸に着き、セイバーが突然打って出た時のアーチャーの行動に違和感があったからだ。  
第6話より

その時の彼は初めてセイバーを見た時、ほんの一瞬動きを止めた。

「不意打ちだったからな、凜と同じく、予想外の展開には弱い」とアーチャーははぐらした  
たがランサー同様に敏捷を頼りにスピードを生かした戦い方をする弓兵が不意打ちと  
は言え、動きを完全に止めるだろうか？

答えは否。

『だがあちらは私を知らないようだから、あまり深い関係ではなかったようだ』

『……………そう』

『だがそう悲観する事も無い。対抗手段はある』

「ういえ?!」

「??? どうしたんだ遠坂?」

「う、ううん! 何でもないわ!」

「ではギルガメツシュの話は先ずここまでにおいて、アレ——いや失礼、『三月』と  
言う少女の振りをした何かの話をしようと思うが」

「ここで士郎、慎二、桜が混乱するような顔を作る。

「ちよつと待て、アーチャー。今のは幾らなんでも聞き捨てならないぞ?」

「衛宮の言う通りだ、しつかりと説明して貰おうじゃないか？」

「少女の振りつてどういう事ですか？」

「そのままの意味よ」

イリヤが出されてお茶を飲みながらそう答える。

「あ、イリヤ………さん」

「イリヤで良いわ、サクラ。シロウやリン達にはある程度説明しているからもう一度初めから説明するわ」

そこからイリヤは以前、アインツベルン城で凜と士郎に話した内容と、今朝のセイバーとの稽古の事もおさらいと共に慎二と桜にも話す。第18話と第24話より

これに慎二と桜の二人は黙ったまま互いを見る。

まさか自分達の知っている三月が人間ヒトではない。それ所か魔術師としても、サー

ヴァントの斬りかかりに反応出来るなど規格外。

三月がここに居れば「いや、あれはただ軌跡が視えていただけだから」と言い、場は更に混乱していただろう。

そして先程イリヤと凜、そしてセラの助けで三月を検査したところ――

——何も分からなかった。

「ハア？ あの遠坂とアインツベルンが『分かりません』と来たか」

「に、兄さん！」

「お嬢様を侮辱するとは貴方、死にたいようですね」

「別に良いわ、セラ。ワカメが揺れているだけだもの」

「だからワカメって呼ぶな！」

「遠坂にイリヤ。それはどういう事なんだ？」

「どうもこうもないわよ衛宮君。彼女は明らかに人外。かと思いきや人間ヒトとしての

体や臓器、血肉がちゃんと全部ある——」

そこから凜とイリヤは話し始めた。

三月が人外と仮定して様々な検査をしたが精霊、真祖、使徒等々の現時点で判明しているあらゆる種と何処か似通った部分や特徴はあつたが明らかに違う個所なども出た為、故に何も分からなかった。

だがこれはある一つの結論を新たに生み出した。

「今までの人外に対しての観測や常識が当てはまらない何か」と。

「つまり今ここにいる人達は全く未知のモノと関わっていると言う事よ」

「ええ、そしてこんな事は神秘などが薄まった今では本来不可能な存在よ」  
 「??? どういう事だ?」

「前に言った魔術協会もだけど、三月の存在彼らか聖堂教会にバレたら即封印指定どころか、存在抹消ものよ、こんな訳の分からないもn——子。 どう? これで分かったかしら、私の悩みが?」

「二……………」

改めて三月と言う者がどれだけ訳の分からないものを知らされた皆は黙る。

アーチャー以外。

「凜、あの『三月』と言うのは解剖しないのか?」

ガタツ!

士郎と慎二が同時に立ち上がり、アーチャーに迫る。

「もういつペン言ってみるこの野郎!」

親友同士、息はぴったりだった。

そしてこれに臆する事も無く、ただ呆れた顔で彼らを見下す。

「お前達、事の重大さを分かっていないのか? もし『三月』が暴走などしてみる? 聖杯戦争どころか『日本』と言う国が阿鼻叫喚と化すかもしれないのだぞ? それに比べ、体の解剖など、安いモノだろうに——」

「——アーチャー、『黙りなさい』」

「ツ……………ならば聖杯の異常はどうする?」

凜の命令で「瞬然るアーチャーだったが次の問題に取り掛かった。

「……………あの金ギルガメッシュ髪が持っているわ」

「成程。では奴から聖杯を取り戻し、その発動を阻止せねばならんな…………」

「どちらにせよ、ギルガメッシュとの対決になるわね……………」

「いや、待ってくれ遠坂」

「慎二?」

「もし僕達が彼と交渉できる材料などあれば戦う必要はないと思うんだ」

「じゃあ聞くけどワカメさん、私達にそんなモノがあるように見えるかしら?」

そしてイリヤまで「ワカメ」呼びになる慎二はこの時点で密着してしまったあだ名と

彼の提案をへし折る言葉に項垂れた。

セラがまだ震える声でイリヤと凜に小声で話しかけた。

「お嬢様と……………リン。あの事は伝えなくても宜しいのでしょうか?」

凜とイリヤは互いを見て——

「——後から一人一人に話す」

とだけ彼女らは言ったのだ。

それはそうだ、聞く人によれば卒倒する、気絶する、動揺する、説明出来ないものを「もっと詳しく説明しろ！」と言う様な情報だ。

気を見計らって個人個人に伝えた方が混乱も時間少なくて済む。



## 第29話 人外、怪物、怪獣、そして好きなモノ

セイバー運営、アーチャー運営、イリヤ運営、ライダー運営 視点

「え？ 私のお好きなもの？」

その後一時間ほどで目を覚まし、晩御飯を食べている間三月に士郎が聞いた、「好きなものはあるか」と。

以前の、三月の執着するもの（または行動原理）を探っていた。

「ああ、なんでも——」

「——そんなの士郎に決まってるじゃん」

「——「ブフ」——」

「へ」

それを聞いた瞬間その場にいた何人かが飲んでいた味噌汁やおかずを嘔き出すか吹き出しそうになった。

士郎はと言うとポカンとした顔と気の抜けた声を出していた。

三月はと言うと皆のリアクションの訳を分からずただ晩御飯を食べながら「何分切り切ったことを」と言う様な顔をしていた。

ちなみに目を覚ました三月には「聖杯戦争の所為で家がボロボロになった間桐邸から衛宮邸に慎二と桜が泊まる」と説明したら「じゃあ今夜はパーティーね！ やった♪」と三月が笑顔でセイバーの手当てをしながらはしゃいだ。

「じゃ、じゃあ僕の事は?!」

そして盛大に嘔き出した味噌汁の付いていた顔を拭き、慎二が次に聞く。

「勿論慎二君も好きだよ——?」

「え」

三月は慎二の顔に急に迫り、彼の髪の毛に付いた味噌汁からの引っ付いていたワカメを摘み取り、言葉をそのまま続けた。

耳まで赤くなつて固まった慎二を残して。

「私は士郎や藤姉、慎二に桜に凜にイリヤにセラにセイバーにアーチャーにライダーに

——」

そこから三月は身の回りの人達やサーヴァント、藤村組や学園に商店街の人達の名前を一人一人名乗り上げて行く。

「——に渡辺さんに田次郎さんに土井さん達も私はみーんな好きだよ？」

「……………じゃあ私が士郎と付き合おうと言ったならどうかしら？」

「「遠坂?!／遠坂先輩?!／リン?!」」

凜の言葉にびっくりする士郎本人に慎二、桜、そしてイリヤ。

「んー…お赤飯の用意、家に在ったっけ？」

「……………じゃあ貴方が誰かと付き合おうとしたら、誰にする？」

「これにピクリとその場にいた皆が反応する。」

「付き合おうって……………私が？」

「そうよ。三月が」

「……………」

ポリポリポリポリポリポリポリ

長くくくく沈黙の後に三月は漬物を食べながら考えているように見えた。

だが数分経った後でも返事が来ない事に慎二は痺れを切らし、また三月に聞いた。

「で、どうなんだ？」

「ん？ 分かんない」

「「「え？」」」

三月の答えに頭を悩ませる士郎、凜、慎二、桜とイリヤだった（色々な理由で）。

そしてその夜、凜とイリヤは三月がお風呂に入っている間に一人一人に三月のまだ伝えていない事を言うために回る。

それは土蔵でセイバーが見ている所で魔術の鍛錬をしている土郎もその一人だった。

「ん？ 遠坂か？ ああ、丁度良かった、これをずっと遠坂に確認したかったんだ——」

「——ッ?! え、衛宮君?! どうしてそれを?!」

土郎がポケットから出したのは三角の形をした大きな赤い宝石の付いたペンダントだった。

数日前に土郎達がランサーによって心臓を貫かれた時に、土郎がそれを見つけてそのまま持つて帰った物だった。第6話より

「あ、これってやつぱり遠坂のだったんだ。 ずっと宝石とかで魔術を使っていたからそうかなと思っていたけど……ありがとう遠坂、俺達を学校で救ってくれて」

それは凜にとつては土郎が初めて心からの笑いをしていたかのように見え、彼女は顔がにやけるのを必死我慢しながら気まずそうに逸らす。

「ふ——ん？ リンつてば見かけによらず、そういうところもあるんだね？」

「あれ、イリヤ？ 二人してどうしたんだ？」

土郎はペンダントを何時も入れているポケットの中に戻すと、目が泳いでいた凜は土

蔵のある一か所に目が行く。

「……………それ、何かしら衛宮君?」

「それって全部、『投影』魔術?」

凜とイリヤが数多に土蔵の床の一か所に転がっている包丁や短剣にナイフ等の刃物の類がある場所を見ていた。

「ああ、体の調子が良くなっていたからどうすれば実戦に使えるか色々試していたんだ」「私から見てもシロウは『投影』を始めてからメイカス魔術師の腕が上がっていますが、お二人にはどうでしょうか?」

「……………その前に衛宮君とセイバーにはまだ話す事があるのよ。三月の事で」

「え?」

「あれ以外に……………ですか」

セイバーも三月の看病と言う名目の監視から解放された後、士郎が三月の事で凜達が新たに分かった事を彼女に説明した。

だがここに来てまだ話があるとは士郎もセイバーも思っていないなかった。

「ええ。シロウにセイバー、ちよつと魔力を流すからびつくりしないでね?」

イリヤが言い終わると、彼女の体中にまがまがしいまでの数の赤い線が浮かび上がり、士郎はその正体を分かった瞬間微かに息を呑んだ。

「イリヤスフィール……それは——」

「——ええ、セイバー。これは令呪ではなくて私自身の魔術回路よ」

セイバーの心苦しい顔にイリヤの涼しい顔。

これを見た士郎は以前、凜から聞いたことを思い出させていた。

《魔術回路つてのはね、減るのは簡単だけど増えるのは普段難しいのよ?! 普通はモ

ノスツゴイ苦痛を耐えて手術をやったり移植したりとか!》第26話後半より

「私の体の七割ほど魔術回路で占めているわ」

「……………そして憎たらしい程に魔術師としては私より上ね」

「遠坂よりもか、凄いな」

フフン!とドヤ顔をしながら胸を張るイリヤに凜は嫌々顔色を上げるが話を続ける。

「じゃあ単刀直入に言うわ。イリヤが怪物としたら、三月はそれ以上の怪獣よ。彼

女の体自体が巨大な魔術回路の塊みたいなものよ」

それはイリヤからしても異常なものだった。

そんな事になれば人体が内部崩壊してもおかしくない状態で三月の体は成り立っていた。

「後、彼女に魔術刻印らしきモノがあったわ」

「な?!」

これには流石の士郎の顔も強ばる。

以前並べた通り魔術刻印は魔術師の家系が持つ、『積み上げた遺産』でそれが多い程であればあるほど大きくなる。第9話

そんなモノを三月が持っていた事は士郎にとつては寝耳に水だった。

「そんな馬鹿な! 三月にそんなものは無い筈だ!」

「でも実際にはあった、ちょうど胸の辺りにね」

「シロウ、キリツグは魔術刻印を受け継がせてはいないのよね確か?」

「あ、ああ。最後までずっと断っていたよ。(『胸の辺り』って……………小さい頃は無かった様な気がするんだが)」

「……………そう」

「士郎、一応可能性として言うわね? 魔術刻印は代々造り上げられるもの以外にも、幻想種や魔術礼装の欠片の一部などを核としても成り立つものだわ」

「つまり……………ミーちゃんの体に何かがある可能性ね」

「それにそうだとしたら彼女の服用していた薬も納得いくわ。こんな彼女みたいな無茶に人体が耐えられるなんて奇跡以外の何でもないわ」

「……………」

士郎は今聞いた情報と自分の知っている三月を考えていた。

だがこの数日間、彼女のやった事と周りの人達を比べると確かに三月は異常に思っていたが、少なくとも魔術刻印に関しては切嗣が亡くなった後からも無かった筈。

こう、一緒に風呂に入ったりした時にジロジロ見た訳では無いが何せ三月は全然隠すそぶりも無かったので不可抗力と言うか幼い頃の無邪気さと言うか「着替えを手伝つて」とせがまれる時に目に入ってしまうというか――

「(――つて、俺は一体誰に言い訳をしているんだ????)」

「アーチャー、ここでなら話せるかしら?」

そこでアーチャーが実体化し、土蔵の中へと入る。

「ようやくか」

「アーチャー、何故あなたがここに?」

セイバーが立ち上がり、何があってもいいように体制をとる。

アーチャーがここにいたのは先程、彼がギルガメッシュに対して「対抗手段はある」と言う宣言だった。

「では聞こうエミヤシロウ。貴様に望みを捨てる覚悟はあるか?」

「え? アーチャー?」

凜は驚く。いつも冷静沈着のアーチャーが、聖杯戦争が始まって以来憎しみを持つ



て喋った事に。

そして士郎は何時もの様にアーチャーに対してのイラつきが出た。

「そんなの、捨てられるか！ 俺は……俺は助けなくちゃならないんだ！」

「シロウ？」

「それは何故だ？」

「俺は……俺は十年前に助けられたんだ。 切嗣 じいさんに。」

「そして貴様はその時、何かを要求されたのかな？」

士郎が床から立ってアーチャーを睨む。

「じいさんは……切嗣は俺を助けてくれただけだ！ 無くしたものなんて何も無い！

ただ、切嗣は嬉しそうだったから……その姿に憧れた」

「ほう？ それで？」

「俺は助けられて、その感情しか浮かばなかった。俺はそういう者になりたかった。

だから……この次があるのなら！ あの時見捨てて来た全ての代わりに今度

こそ、全ての人を助けなくちゃいけないんだって……そう思ったんだ」

「衛宮君……」

「俺の望みはそれだけだ。そうじゃないと……あの時を生き残った意味がないん

だ！」

「だったら貴様自身はどうする？　そこに貴様自身の救いはあるのか？」

「違う。だって、『誰かの為になりたい』っていう思いが間違いの筈がないんだからな！」

「全く話にならないな。　貴様は以前『何か足りないからじゃないのか？』とほざいたな」第19話より

「そうだ！」

「だったらいい直してやろう。　貴様に足りないのは確固たる『夢』だ」

「アーチャー！　これのどこがギルガメツシユの対抗手段なのよ?！」

「アーチャー、お前は俺に何が言いたい？」

「衛宮君？」

「もう一度聞くぞ。　エミヤシロウ、貴様にとっての『正義の味方』とは何だ？」

「何だって？　そ、そんなの……………」

士郎はここで以前自分が考えていた定義を思い出していた。

「『正義の味方』は皆の命を救う」。

「『正義の味方』は出し惜しみなどしない」。

「誰かを救うという事は、他の誰かを救わないという事」。

だが今まで『やってみなくては分からない』や『要因不足』だと感じていた事も、ど

ここで自分でも違和感を感じ初めていた。

そして少し前までは『何事も始めなければ見えてくる道も見えない』事も三月と言う、自分よりも優秀な人物を見ていると違うように思えてきた。

だが諦めたらそこで全て終わる、故に今更引き返さない。

「もし、貴様が未だに『全ての万人を救う』と思っているのならそれは間違いだ」

アーチャーがその言葉を最後に土蔵から出る。

「エミヤシロウ、アインツベルン城で待っている。お前は自分が間違っていないと思っているのならそこに来い。正しセイバーが一緒なのが条件だ」

「ま、待ちなさい、アーチャー！ 何を勝手な事をしているの?! 私が——ツ！」

アーチャーが何かで自分の胸を貫くと凜の手の甲に鋭い痛みを感じ、それが彼女の言葉を遮る。

「アーチャー！ 貴方は今一体何を——?!」

「エミヤシロウ、明日まで待つ。それ以来は保証しかねない」

アーチャーはそのまま土蔵を出て、衛宮邸を後にし、セイバーは土蔵の外に出ると彼が衛宮邸の扉を超えるのを見た。

「リン、大丈夫ですか?」

「嘘、どうして……どうやって?」

「リン？」

「アーチャーとのパスが……消えて——」

「——先輩！」

外から桜の声が聞こえ、彼女の言った事で士郎は次の日アインツベルン城を目指す事になる。

---

一寸の虫にも五分の魂 視点

---

「キ……キイ……」

「ギギギギギギギギギギギツ——！」

一匹の虫が鳴き、周りの蟲達がすぐさま弱っていた虫を食い破る。

その蟲達は冷たい冬の中、数が減っていた。

その蟲達等は身を薄めて、分散し、他の虫や動物の屍肉を漁って一時の命を取り敢えず凌ごうとする。

慎重に、慎重に。

何者にも気付かれぬように。

決して、決して派手な行動は起こさぬ様に、細心の注意を払いながら。  
彼は死にかけていた。  
間桐臓硯

500年間もの間の人生、このように死の淵に立たされてこれほどの屈辱を感じたのは初めての事だった。

力も工房も圧倒的な力に蹂躪され、光を恐れて這いずる。

これも全てあの忌まわしきサーヴァント、ギルガメツシユの所為だ。

アレのたつた一瞬の気まぐれが全てを瞬く間に碎き去って行つた。

魔術工房は物理的に半壊され、内包していた蟲も9割死滅させられた。

アサシンが機転を利かせて臓硯の残つた身柄を匿つて間桐邸を離脱していなければ、  
そこで終わり、アサシンが自らの体を差し出していなければ臓硯は既に生き途絶えていた  
ただろう。

だが今の臓硯には人の姿を維持する力さえも無い。

それどころか早く食人間を食せねば、自分という魂が滅んでしまうのもそう未来の話ではなく  
なつた。

普段であれば、その辺の人間達を取つて食らつてしまつても問題は起きない。

だが今の時期が悪かつた。

聖杯戦争が始まつて以来、臓硯は間桐家に持ちうる力で悲願の為にひたすら魔力をた

め込んでいた、同盟者の頼みで。

その同盟者は冬木市の魔力を欲している。派手な真似をして、それでまた目を付けられれば今度こそ一巻の終わりだ。これは、隠蔽を上手く行えようが行えまいが関係ない。

もし隠蔽が下手であれば、魔術の秘匿を蔑ろにするとして情報が魔術協会に行き、早々に処分対象と指定されるだろう。

上手く隠蔽を行おうとしても、今の状態の臓硯で完璧なものは無理だ。それなりに上手くやれたとしても、年々増加している行方不明者や昏睡者を知って真実の勘づいている魔術師であれば確実に感知し、発見するか魔術協会などの組織に連絡が行くだろう。あの遠坂の娘も優秀だがそれは日本国内、時計塔や彼らの様な魔術師は保養に冬木市にも来ている（極東である割に霊脈が強いので）。

臓硯の現状は殆ど詰みに近かった。

自分が死ねば間桐の未来は潰えたも同然で、それは決してあつてはならない事だ。

『（おのれ……時臣の小僧めが。見栄を張って不相応にも余計なものを召喚しおつてからに！ そのツケが儂に回つて来ているではないか?!）』

毎秒ごとに臓硯の魔力が穴の開いたペットボトルのように、漏れるように零れていく。それに乗って、少しずつ命も失われていった。その命の危険が、臓硯を焦燥に駆

り立てて彼の思考を更に焦らした。

『(い、嫌だ……死に……死にとうない……)』

臓硯はもう一人の同盟者の所へと向かっていった。

慎重に、慎重に。

『ギ…………ギギ…………』

体が錆び付くかのように、動きがどんどん鈍くなる。

また、魔力が減っていった。

また更に蟲を脱落させねば。

もはやそれは、ただの妄執の塊でしかなくなっていた。積み上げて来たモノの損失の

事実がさらに彼を追い詰める。

だからこそ、臓硯は微かな希望にも縋る。

そしてそれを知る事が出来たのは単純に運とタイミングが良かったただだった。

気付かれなかったのは、それほど弱っていたからだった。

それは遠坂の娘のサーヴァントのアーチャーと、衛宮の小僧達がしていた会話。

臓硯は常に蟲を使って衛宮邸を監視していた。

それは今でも変わらず、見張らせていた。

衛宮の小僧にセイバーと遠坂の娘がアーチャーを追って、明日アインツベルン城を目

指すそうだ。

つまり衛宮邸には桜とライダー、アインツベルンの聖杯の鍵と失敗作が残される事になる。

『(天はまだ儂を見放してはおらぬ!)』

ギルガメッシュは知っているかも知れないし、敢えて知っていたとしてもワザと心臓だけを取ったのかもしれない。

だが200年前に聖杯戦争を立ち上げた張本人の一人として臓硯は知っていた。『アインツベルン製の聖杯は心臓と魔術回路のセットになっている』と。

つまり心臓だけを取っても聖杯は真に降臨しない。

ただ残るのは暴走した魔術儀式の成れの果てである。

目的の場所に着くとチャリチャリとした金属音がする。

ロザリオの鎖が発していた音だった。

「これはこれは間桐のご老体。 久しいですな」

臓硯は急いでガワだけでも人型に戻る。

「うむ。 久しいな、言峰綺礼よ」

『言峰綺礼』。 遠坂凜曰く「エセ神父」。 そして第五次聖杯戦争の監督者であり、今は

もう広く知られていないが第四次聖杯戦争の参加者で、生き残りでもあった。



「かなり手酷くやられたようですね」

「ふん、アレのマスターである貴様に言われてもな」

「いえ、少々勘違いされておりますがアレのは私の同盟者です」

「その割には、貴様の頼み事には耳を貸すようだが？」

「耳を貸すのと聞くのとは明確な違いがあります。して、こんな夜分遅くに何の御用

ですか？ 協会は迷う者は拒みませんが今は聖杯戦争中、ここは中立地点ですので」

「では御託を無しにしようではないか。お主、聖杯の降臨に興味はあるかね？」

「ここで僅かな笑みを浮かべていた綺礼の顔がスンと無表情に変わる。

「成程、ギルガメッシュが怒っていたのはその事か。間桐のご老体、貴方は独断で事を

成そうとしたのですね」

ちなみに今更だがこの男、言峰綺礼はあのギルガメッシュのマスターでもある。

「フッフッフ、もうここまですれば後は魔力の問題と思い、先走ったのは確かに儂の独断じゃが事を思つてからの行動じゃ。ここで一つ、良い情報をお主に提供したいと思つてな」

「間桐のご老体よ、何故私が貴方の様な者を助けるリスクを犯すと思うのですか？ 聖

杯はギルガメッシュが——」

「——それは器の事じゃろうて。それだけでは真の聖杯は降臨せぬ」

僅かに、極僅かに綺札の目が泳ぐのを臓硯は見逃さず、「やはりな」と思い、にやけるのを必死に胸奥へと押しとどめた。

「儂はその情報を提供する代わりに、ほんの少し魂を貰う。何、少しばかりこの姿を維持するだけの微々たる量じゃ。支障をきたす事は無い。後はお主の監視の下、事が起きるまでひっそりとこの老体を休めるとしよう」

「……先も言ったように、ギルガメツシユは私の頼みを聞いてはくれますがそれに従うとは限りませんか？」

「結構、結構。儂は不死させ手に入れば良い」

「では地下に来てもらえますかな？」

臓硯は蟲の姿に戻り、綺札の後を追う。

『(まだじゃ！ まだ儂は終わらぬぞ！ クカカカカ！)』

そして彼が歓喜に浸っている間、彼は目の前の綺札がニヤリと笑っているのに気付かなかった。

「(全く、未恐ろしいものだ。ここまで話された通りに事が運ぶとはな。フフフフフ

！ 面白い！)」

内心愉快さに笑う二人であった。

理由はそれぞれ違うが。

## 第30話 アーチャーと言う男（前編）

衛宮三月 視点

三月は夢を見ていた。

その夢の中ではまるで自分が幽霊になったかのようにフワフワと浮遊感を持ちながら舞っていた。

「おー！ すげえ、ピーター・オンじやん！」

そして景色が見えた。

かつて自分が見ていた夢とそれはどこか似ていた。第12話と第20話より

「何だ。またか」

明確な違いがあるとすれば、それは集中的に一人の男が後始末を義務付けられ、任されてポロポロになって行く様を見ていった事か。

『体は——で出来ている』

以前聞いたような言葉に不思議な感覚が沸いた。

ただし前回より今回はもつとハッキリと聞こえた。

だがその言葉の後に続くのはある男の成れの果てだった。

「アーチャーさん……………」

そして景色が様変わりし、今度は目覚めた凜がアーチャーと話す。

どうやらさつき見ていたのは凜自身が見ていたもので、これはバーサーカーと対峙した夜の事みたいだった。

あの激戦の後、凜は流石に消耗して疲れ切ったのか、近くの公園で一眠りしてアーチャーが警護を務めていたらしい。

律儀にもアーチャーは厚手のコートを『投影』して仮眠する凜に被せていた。

「あー！ ブカブカコート！ 温そうだな〜」

そしてそこで凜とアーチャーのコント（？）が始まり、普段見ない微笑ましい出来事に三月は笑う。

《ねえアーチャー？ 自分のやって来た事を後悔したって考えた事ある？ 私はできれば最後までしたくないけど、それつてきつと難しいんでしょね。私が考えている以上に》

《……………出来る者もいれば出来ない者もいる。凜。鮮やかな人間と言うものは、人より眩しいものを言う。そういった手合にはな、歯を食いしばる時など無いん

だよ。そして君は間違いなくその手合だ。『遠坂凜』と言う人間は、支えさえあれば最後まであっさりと自分の道を信じられて生きていけるさ」

《じゃあ貴方は最後まで、自分が正しいって信じられるのかしら？》

《……………その質問は無意味だな。忘れたのか、マスター？ 私の最後はとうの昔に終わっている》

そこでまた場面が変わり、今度は現代の何処かの工場のような場所に――

「――あれ？ ここって原子力発電所？」

何故三月はここが何処かの原子力発電所と分かったのはテレビやドキュメンタリーで似たような構造のした場所を以前見ていたからだ。

そしてそこにはボロボロになりながらも、体に鞭を打って引きずっていた兄さんがいた。

「(うわ！ 兄さん凄い傷！ え？ あれって……………撃たれた跡?!)」

そしてその夢の中の士郎は倒れそうになると、目の前に魔力の塊のようなものと話していた。

「……………それで……………誰も泣かずに済むのなら……………受けよう」

何かと契約を成して、少年は幾度の危機に応じてその場へと跳び、元凶達を殺した。

それが救いに繋がると信じて。



三月が目を開けると目の前には――

「――知らない天井だ」

「三月?! だ、大丈夫か?! ど、どこか痛むのか?!」

そしてすぐそばには心配していた慎二がいた。

「あ、慎二だ……つてあれ? ここは?」

三月が身を起こし、周りを見ると仮眠を取っていたかのようなアーチャーがキツイ目で三月を見ていた。

「あ、アーチャーさん。おはようございます」

「何故君は泣いている?」

「え?」

三月が手で顔を触ると確かに涙を流していたような跡があった。

「……………分からない」

グウ~~~~~。

「あ、もしかしてお腹空いたからかも?」

「ツ！ ま、待つてくれ！ 僕が何か探してくるよ！」

慎二が立ち上がって物置か小屋らしき建物から走り出る。

「……………」

「どうしたの、アーチャーさん？」

「君は随分と肝が据わっているな。それとも状況を理解していないのかな？ 君は拉

致され、明らかに違う場所に移されているというのに」

「へー」

三月の気の抜けた答えにアーチャーの毒気が若干抜かれたかのような空気になる。

「もう一度聞く、何故泣いていた？」

「夢を見ていた」

そこで三月は先程の夢をアーチャーに話し始めると、彼の顔がみるみると険しいモノへと変わる。

「……………妙だな。マスターとサーヴァントは時折パスを通してマスターはサーヴァントの記憶を見ると言うが……………もしかして、君は相当霊やその類などに余程敏感なのかもしれない」

「サーヴァントも夢を見るんですか？」

「サーヴァントは夢を見ない」



「へー、そうなんですか？ あ、そう言えば、さつき『拉致』と言いましたけど、誰が拉致されたんですか？」

「君だが？」

「誰に？」

「私に」

「へー……………何で??？」

「？マークを出すマイペースな三月に、アーチャー溜息を出す。

「私は知りたいのだよ。 そのために君を利用した。 幼い君に、こんな事もどうかと思うが——」

「——幼いってどういう意味？」

「……………女性に無礼で承知の上だが見たところ、君はイリヤ嬢とそんなに体格が変わらないからな。 十歳かそこそこの年齢だろう？」

「え？ えーと……………私、兄さんと同年なんだけど？」

「????? 飛び級……………ではなかったのか？」

「全部断った」

三月ほどの子ならば学校で飛び級もおかしくない話だが、彼女は過去にそれらの誘いを全て断っていた。

「でなければ士郎の面倒を見るのがややこしくなるから」と思い。  
「……………」

アーチャーが「お手上げだ」と言ったような感じで苦笑いをする。

「ねえアーチャーさん？ 無理、していいのかな？」

これを聞いたアーチャーの表情は固くなり、三月を睨む。

「どういう意味かね？」

「何か、最初見た時からずつと張り詰めている様子だったから……………心配で……………」

「……………別に……………本当に……………君達は似ている」

「??？」

アーチャーが何か小声で言うが、三月には聞こえなかった。

「ねえ、さつきアーチャーさんは『知りたい』って言ったわね？ それって何？」

「……………言っても良いが、一つだけ条件がある」

「何？」

「私の邪魔をしないでくれ」

「これって兄さんの為になる事？」

「……………ああ、エミヤと言う男の為だ」

「うん、分かった」



チャーが三月と慎二両方を担いでアインツベルン城まで連れて行った。

余談だがアーチャーは慎二を脅したのに、三月だけを連れ去ろうとした瞬間慎二が頑なに「自分も彼女の連れ去られる場所に連れて行け！」と言つて来たのでアーチャーが彼も連れ去つた。

「それは勘違いと言うものだ。その方が合理的にかつ、実質的な人質が二人に増える」

「それにしても私と慎二が拘束されていないのは何故？」

「君を拘束しようと思えばそれなりに魔力を消費しなければいけなくなるし、たとえそうしたとしても本当に君を拘束出来るか分からないからな。ならば慎二と言う小僧を君に対しての人質に取つた方が合理的だ。彼を拘束しなかつたのは、彼には何も出来ないからだ」

そう、アーチャーの言うのは確かに理にかなつて、合理的な言い分。

ただ一つの事を除けばだが。

「それにしては彼の気配を察知し続けるんじゃないやなくて、私に神経を集中しているみたいだけど？」

「……………本当に、鈍感なのか鋭いのか分からなくなるよ」

グウ~~~~~。

三月のお腹がまた鳴り、アーチャーが近くの袋からラップされたおにぎりを何個かと

水のペットボトルを三月に渡す。

「ほら、少ないとは思うが——」

「——バクバクバクバクバクバクバクバクバクバク！　ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク！　ごちそうさまでした」

「早いよ?!」

「え？」

ものの数秒で全てのおにぎりを平らげる三月にアーチャーは彼らしくない言葉とツッコミを発した事に三月は頭を傾げ、アーチャーは顔を逸らす。

「あ、いや、すまない………食べ終えるのが意外と早くてな」

「ごめん。今滅茶苦茶お腹空いていたから」

「らしいな。ほら、これも一応手渡しておくぞ」

「おー、私が昔呑んでいた薬。ありがとう♪」

さつきから調子が狂うアーチャーに三月はそれを知らずのまま笑顔を向ける。

そこに息を切らしながら袋を持っていた慎二が現れた。

「あ、アーチャー！　彼らが来たぞ！　三月、ここにソーセージとチーズやリングなどを

——

「——あ、じゃあそれも持って行くから付いて来て、慎二君」

「あ、ああ……………て、え？」

「……………付いてくるのか？」

その場を離れようとしたアーチャーの後をトテトテと付いて来ようとした三月が？  
マークを頭から飛ばす。

「ダメ???'」

「……………さっきの条件さえ守ってくればな」

「分かった」

「お、おい！ 条件って、何の事だよ?!」

「アーチャーの『邪魔をしない』っていう条件」

後を付いてくる慎二に三月が答え、三人は物置から出てアインツベルン城の中へと入る。

---

セイバー運営、遠坂凜 視点

士郎、セイバー、そして凜はアインツベルン城に向かっていた。

昨日、桜が兄の信二から士郎宛の置きメモを部屋で見つけたのだ。

「三月はアーチャーに連れて行かれる」と。

そこで三月と慎二が衛宮邸にいない事を確認して、明日の明朝にアインツベルン城にアーチャーに指定された士郎とセイバー、そして凜が行く事となる。

最初は全員で行こうとイリヤが言っていたが流石に団体ともなると移動速度が遅くなり、あまり無い時間を更に割いてしまう。

そこで凜が士郎とセイバー以外に今衛宮邸にいる人員で自分が士郎達と行くといい、行きたがつっていたイリヤを凜が（珍しく）言い負かす。

「私のサーヴァントの失態だから私が責任を取るわ。それに悪いけどイリヤの体格と能力を考えれば遠征や攻撃より拠点防御に向いているから衛宮邸を任す」と。

イリヤは不満そうにだが了承し、桜は目撃した。

裏取引が行われたのを。

凜が澁々と自分の分のマカロンとカスタードプリンとエクレア全てをイリヤに譲り、それでイリヤが手を打ったのを。

余談だが、衛宮邸ではいつの間にか女性軍の間で通貨となっていた手作りの菓子が保管されている冷蔵庫は以前三月に買取(?)されたセラによって結界が何重にも張られ、イリヤでも手こずるような、規模が小さい要塞と化していた。

衛宮邸の拠点防御はイリヤ、セラ、桜とライダーに任せ、士郎達がアーチャーから三月と慎二の奪還を試みる。

後、凜自身には何か思惑があるみたいなのもイリヤは気付いていたので凜の分の菓子で手を打ったのもその理由の一つだった。

道中、士郎達は黙っていたが凜が口を開ける。

「ねえ、衛宮君。昨日見せたペンダントだけど——衛宮君？」

「……………ん？ ああ、すまない遠坂。どうしたんだ？」

未だに考え事に耽っていた士郎は凜の声に少し遅れて反応する。

「昨日のペンダントなんだけど、貴方はあの夜からずっと持っていたのかしら？」

「ああ。まあ、お守り変わりだよ」

そこで凜は自分のポケットからペンダントを出す。

「な?! と、遠坂いつの間にな?!」

士郎が自分のポケットに手を入れてペンダントを出す。

「……………え？」

「やっぱり、ね」

士郎が歩みを止めて、凜と士郎達が手にあるペンダントを見比べ、同じに見えた。

と言うか、その二つは同一の物だった。

「同じだ……………」

「リン、これは一体どういう事ですか？ 何故貴方がこのペンダントを？」



士郎の言葉にセイバーは凜に聞くと、凜は何かを考えて頭を上げる。

「衛宮君。セイバー。私の手にあるこれはアーチャーから手渡された物よ」

「……………え？」

「私はてつきりアーチャーが学校に戻って拾ったのかと思っていたけど……………」

「……………遠坂？」

そこで凜は今までの情報とアーチャーのパスを通じた夢を思い返していた。

そこで彼女は一つの仮定によって結論を見出し、士郎を見た。

「まさか……………アイツ……………」

「……………なあ、遠坂。俺、思ったんだけど……………英霊を記録する『座』って——」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

士郎達はアインツベルン城に入るとアーチャーが階段の上で座っていた。

「早い到着だな、衛宮士郎。もう少しウジウジしているかと思つたが、違つて何よりだ」

「三月は何処、アーチャー？」

「心配するな凜、あそこだ」

アーチャーが広い玄関の横にある二階のバルコニーの一角に指さすと床に座りながらモグモグと口を動かしながら手を振っている三月と隣に寝不足の慎二がいた。

士郎達からは見えないがブルーシートを敷いており、ピクニックの様な感じがした。

これに士郎がホツとして、凜が呆れる。

「何、私の用事が終わるまでお前達が手を出さなければ私も何もしない」

「アーチャー、貴方は一体何がしたいの？」

「その前に一つ。衛宮士郎に凜……私に何か聞きたい事があるのではないかな？」

「そうだな。ここに来る途中、遠坂がペンダントをもう一つ見せたよ。お前から手渡された奴をな」

「……それで？」

「それでようやく遠坂に言われて気づいたんだ。あのペンダントが二つある筈が無い

と。あれは——」

「———そうだ。あれは命を救われたお前が生涯持ち続けたもので、遠坂凜の父の遠坂時臣が娘に残した遺品の一つでこの世界に二つとないモノだ」

「アーチャー、やはり貴方は———！」

セイバーの言葉を遮ってアーチャーは喋り始める。

「———英霊の召喚には触媒が必要とされているが必ずしもそうでは無い。遠坂凜は呼び出す為の触媒がなかったと思ひ込み、故に彼女は呼び出したサーヴァントには何の縁も無いと思ひ込んだ。だが偶然に呼び出される英霊などいない。何故なら召喚者と英霊には必ず縁がある」

アーチャーが立ち上がり、階段をゆっくりと下る。

「英霊を記録する『座』に時間の観念は無い。それはセイバーの一件でも理解は出来るだろう？ 過去も未来も関係無く、英霊となれば等しく扱われる。つまり———」

アーチャーが士郎達のいる一階に下りて、士郎を真つすぐと見る。

「———未来に現れる筈の何者かを召喚する事もある、と言う事だ。出来れば、凜がここにいなければオレとしては都合が良かったのだが……………」

「おあいにくさま！ 暴走した自分のサーヴァントを他人任せにするほど私は日和っていないわ！」

凜がキツとアーチャーを睨むのに対してアーチャーはその視線を受け流し、士郎は

「やっぱり」と何処か納得したような顔をする。

「それに貴方、どうあつても衛宮君を殺すつて言うつもりよね?!」

「フン、その様な甘い男は今の内に消えた方が良かっただけだ」

「アーチャー!」

「待つてセイバー。私に話させて頂戴」

「頼む、セイバー」

「……………分かりました」

「アーチャー、確かに衛宮君が甘いつて事は言われなくても周知の事実よ——」

「——おい遠坂、それはいくら俺でも無い——」

「——シロウ、本当の事なので今は黙つていて下さい」

「……………」

「ありがとう、セイバー……………そんな衛宮君でも『ああでなくちやいけない』つて思えて、

『ああ言う奴も居ても良いんだ』つて私は救われている!」

「と、遠坂?」

「けど、アンタ自身はどうなの? アンタは『身勝手な理想論を振りかざすのは間違つて

いる』つて思うわけ?!」

「遠坂、何を——?」

「——何度も何度も他人の為に戦つて！ 何度も何度も裏切られて！ 何度も何度もつまらない後始末をさせられて、それで『人間』<sup>ヒト</sup>ってモノに愛想が尽きたつていうの?!」

それは凜の心からの叫びだった。

「……………成程、君もそこまで視ていたとは予想外だったよ」

凜は先程の三月の様にアーチャーの記憶を召喚当初から時々見えていて、今まで感じていた事が今一気に押し寄せてきていた。

心がムカムカして、心底腹が立つて、悔しかったのだ。

アーチャーは誰かの為になろうと、ずっと道を歩んで最後でさえも「それで人々を救えるのなら」と死後さえも手放した。

「では君の言葉に少々付け加えようか？ オレはこう思った、『生前は力が足りなくて救えなかったが、英霊としてならあらゆる悲劇を打破出来る』と信じて死後の安らぎを売り渡した。聞き覚えが無いかね、セイバー？」

「そんな?! それではまるで——」

「——そうだ、セイバー。お前の様に、オレはもつと多くの何万人という命が救える<sup>と</sup>と信じ切つて戦つた。だが、最後の最後に唯一信じた理想にさえ……………オレは裏切られた。『トレース、オン』」

アーチャーの両手に双剣が現れ、セイバーが身構える。

「衛宮士郎！ 私はお前に一騎打ちを申し込む！ 受けて立つか?!」

## 第31話 アーチャーと言う男（中編）

セイバー運営、遠坂凜、三月 視点

「衛宮士郎！ 私はお前に一騎打ちを申し込む！ 受けて立つか?!」

「な?!」

これには凜とセイバーがびっくりする。

まさかあのアーチャーが「一騎打ち」などと騎士道精神めいた事を言うとは考えもしなかった。

「ああ、受けてやるさ！」

そして即答して了承する士郎にもびっくりした。

「衛宮君?! / シロウ?!」

「やらせてくれ、遠坂にセイバー」

「おい衛宮?! 正気かお前！」

「頼みよ、慎二」

「み、三月も何か言えよ?!」

そこで凛達は食べ終わった三月が階段の所で座っているのを見る。

「ミツキ! 貴方はこれで良いのですか?!」

「うん」

三月の答えに顔が引きつる凛。

「う、『うん』って……………貴方ねえ?! これで衛宮君が死んだらどうするのよ?!」

「遠坂さんとセイバーと慎二君達は士郎を信じていないの?」

「?!」

アーチャーがキザな笑いを正面にいる凛とセイバーに向ける。

「と、言う事だ。良かったな、衛宮士郎。お前を心底信じきっている者が少なくとも

ここには一人いる」

「……………わかりました」

「セイバー?!」

「ですが一つ……………いえ、二つほどだけ聞かせてください。アーチャー、貴方はエミヤシ

ロウと言う人間が英霊になった者ですね?」

「そうだ」

「貴方はシロウの理想の姿の筈、何故その理想が自信を殺したいのです?」



「オレはなせイバー、君の様に自らの光だけで英雄になった者じゃない。さつきも言ったが『死後の自分』を売り渡す事で英霊になった『守護者』だ」

「『守護者』？」

士郎と凜の疑問にアーチャーが答える。

「『守護者』は死後、抑止力となつて人間を守る者……とは表側の単なる綺麗事だ。

実際には『掃除屋』、単なる霊長の抑止力として世界のバランスを崩す者の始末を任された存在だ。この様にオレは『正義の味方』になつた訳だが……オレはそれが間違いだと知っている。こんな人生に何の価値も無く、後悔しかなかつたよ。来る日も来る日も殺し尽くした。人命など、もうどうでもよくなるぐらい殺して、殺した人間の数千倍の人々を救つた」

「アーチャー、それは——」

「——君になら分かるだろう、セイバー？ 誰よりも過去を……過去の『選定』をやり直したいと願っている君、かの『アーサー・ペンドラゴン』なら？」

「『?!』」

士郎、凜、セイバー、そして慎二が全員セイバーの真名宣言に驚く。

「何だ？ 彼女から聞いていなかったのか、何故こんな不毛な殺し合いに身を投じてまで 聖杯を欲するのかを」

「……………シロウ、私は……………私はある選択を無かつた事にしたかつた……………初めは歴史を変えろと思ひ、聖杯を求めたのですが……………今では……………私は『王』になるべきではなかつたと……………」

「それを人は『後悔』と呼ぶのだ、衛宮士郎。お前はまだ『すべての人間を救う』とほざくか？ そんな事は不可能だ。『大を救う為に少の人間を見殺しにする』。多くの人間を救うと言うのが『正義の味方』なんだろう？ だから、『誰も死なさないように』と願つたまま大勢の為に一人には死んでもらい、『誰も悲しませないように』と口にしながらその陰で何人かの人間には『絶望』を抱かせた。それがこのオレ、『英霊エミヤだ』

「……………何で……………こんな事を……………俺に……………」

「……………生前、オレは『エミヤシロウ』で……………『衛宮切嗣』の唯一の養子だったからだ」

「……………」

アーチャーと士郎はチラリと三月を見たが、彼女の顔に表情はなかつた。

「オレの人生に『エミヤミツキ』と言う少女は存在しなかつた。だからと思ひ、今まで様子を見ていたが……………ガツカリしたよ」

「何だつて？」

「今のお前ではまた『守護者』になるのが容易に想像出来る。いいか？『守護者』は『人』など救わない。『守護者』がする事はただ既に起きてしまった事や作られてしまった『人間の業』をその力で無にするだけの存在だ。霊長の世に害を与えるであろう人々を『善悪』の区別なく処理する大量殺戮者」

「アーチャー……………」

「故に俺は考えた、『どうすれば消える事が出来るのか？』と。もしオレが消えられるとしたら、それは英雄となる筈の前だった人間を殺してしまえばその英雄は誕生しない」

「それは無駄です、アーチャー。貴方は既に『守護者』として我々の目の前に存在し、時間の輪から外れているのです！今のシロウを消滅させたところで、あなた自身は消えない！」

「かもしれない。だが可能性はゼロではない。ならば試すまでだ」

「……………お前は……………俺を認められないんだ……………俺が、『未来の俺がお前だ』って事を認めない様に」

「そうだ」

「なら尚更この戦い、俺は引き下がる訳には行かない……………それに……………俺は三月達を連れて帰ると約束したんだ！彼女らの帰りを待っている人達がいるんだ！『トレース、



あった。

三月は遠くなる気を無理矢理に引き止め、荒い息をしながら慎二の腕を力強く掴んで自身を立たせながら久しぶりにアーチャーに渡された昔呑んでいた薬を服用した。

「グツ……………フウ、フウ、フウ……」

三月が服用するとやはり効き目が早く、頭痛が引いていくのと、体の調子が良くなるのを実感した。

「告。 ■■■条件を満たしマシタ」

「こ、固有結界ですって?!」

「知っているのですか、リン?」

「禁術の中の禁術、心象世界を具現化して現実を侵食する大禁呪……………」

「では、アーチャーの宝具は——!」

「——私には生前、聖剣も魔剣もそのような類の物を持っていなかったからな……………オレが持ち得るのはこの世界だけだ。これがオレの宝具、

『Unlimited Blade Worksの 剣 製』。武器であるのならば、オレはオリジナルを見るだけで複製

し、貯蔵し、引き出せる。それが『英霊エミヤ』としての能力だ」

「アーチャー……………あんた、まさか……………」

「さて、試してみるかセイバー?」

「何をです？」

「何、お前の聖剣を確実に複製してみせようと言っているのだ」

「な、そんな事が『投影』で可能なのですか?！」

「こちらも自滅を前提にした『投影』だが、真に迫る事は出来る。相打ち程度にオレは持つて行けるだろう。だがこれは一騎打ちの為の場を用意しただけだからな、お前にその気が無いのならお前と争うつもりは無い」

「アーチャー……………」

「来い、衛宮士郎。オレはお前を殺す。もし自分が間違っていないと思うのなら、貴様の成れの果てのオレを倒してみせろ！」

「ウオオオオオオオ！」

士郎がアーチャーに走り、彼との戦いが始まる。

衛宮士郎、エミヤシロウ 視点

けたたましい金属音が響く。

ジャリツとした荒野で踏ん張る音が其処彼処でする。

少年と青年の二人の雄叫びが時折聞こえてくる。

歯がゆい気持ちで凜、セイバー、慎二は彼らの中心で斬り合おうとする二人を見ていた。

三月も視ていた。

兄が何度も倒れ、立ち上がる姿を。

アーチャーは初手では油断していた。だが戦いが始まってすぐに彼は本気を出し、内心焦っていた。

衛宮士郎が想定より遥かに強かったのだ。

「又ツッ！（馬鹿な、何故奴がこんなに強くなっている?!）」

アーチャーがチラリと三月を見る。

「（やはり彼女の存在が関係しているのか。未恐ろしい存在だよ、君は！）」

アーチャーは生前努力を積み重ねていた。

『今度こそ救う為に』と。

彼が『Unlimited Blade Works無 限 の 剣 製』を初めて使い始めて10年、ただひたすらに修行を重ね

て基礎を埋めて、そこから更に10年かけて使いこなせるようになった。

つまり合計20年間ほどの時を使い、アーチャーは『Unlimited Blade Works投影』と『Unlimited Blade Works無 限 の 剣 製』

を今のレベルに持ってこられた。

だが目の前の少年はどうだ？

「(思わず笑つてしまふ様なレベルだよ、全く!)」

アーチャーの前にいる士郎は魔力量や実戦経験がアーチャーと比べて圧倒的に不足しているものの、『投影』の早さと『双剣術』に関してはアーチャーとやや下…いや、ほぼ互角だった。

つまり悔しくもアーチャーの修行に費やした時間の何割かを吹き飛ばしたような感じだった。

「チィ!!! (ふぎけるな! これでは意味が無い!)」

アーチャーは力任せに士郎の魔力不足の『投影』を次々と壊していき、傷を負わせていった。

丸腰では話にはならないので士郎はいち早く『投影』しなおし、それをする度に魔力がごっそりと持つて行かれ、体の傷が軋む。

「(このままじゃ駄目だ! 俺とアイツとでは能力とかが元から違う! もつと効率よく『投影』を——!)」

そこで士郎は目の前に自分がいるかのように錯覚する。

「(そうだ! 真つ向から挑んで勝てないならば!) ハアアアアア!」

「む?!」



士郎の戦闘スタイルが変わって行き、アーチャーは持ち前の戦闘経験で対応する。

「!! ああ、あの剣筋は?!」

「何、何なのセイバー?!」

「なるほど、考えたものだな。力と魔力量でオレに敵わないと悟った瞬間、攻撃を受

け流し始めるとはな!」

「(力と力のぶつかりあいを最小限に! 敵の攻撃後の隙にカウンターで相手の隙を更

に作る!)」

士郎の戦闘スタイルがアーチャーのより更に攻撃を受け流し、捌くタイプになる。

かつて彼と三月が稽古をした日の、彼女のスタイルだった。第16話後編より

「お兄ちゃん……………」

「ならこれはどうだ!」

アーチャーが士郎から少し離れ、彼の周りに剣が出来上がり、それらが士郎へと飛来する。

「クッ! (『トレース、オン』!)」

飛んでくる剣を弾きながらそれらを士郎が『解析』する。

そして次に同じような剣がアーチャーから放たれると、士郎はそれらを躲してアーチャーに接近戦をまた挑む。

「何?! (馬鹿な?! もう軌道を見切ってきただ?!)」

「ウオオオオオ! (剣の『解析』すればどの様に飛んで来るのか分かる!)」

それは一つ一つの剣の僅かな特徴や重量のバランスなどを『解析』して取るであろう軌跡を読むと言った、アーチャーでさえ数多の戦闘経験からと持ち前の洞察力で導くような計算。

このような斬りあいアーチャーと士郎の二人の間で長く続き、その間にも士郎は成長していった。

「貴様! 何処でこの剣筋を覚えた?!」

「お前自身が言った筈だ! 俺には『衛宮三月』がいる! それにここには俺の相棒が、憧れが、親友達がいる! そんな奴らの前でかっこつきたいと思うのは悪いか?!」

そう啖呵を切った士郎だがやはり自分よりはるかに修羅場を『英雄』、『守護者』、『英霊』として潜り抜けたアーチャーに徐々に追い詰められ、士郎は息を荒くしながら膝が地面に着く。

「これで分かったか? お前は俺に——」

「——『やってみなければ分からない!』」

「フン、結局お前はオレと言う事だな。敵わないと知って尚、ここに現れる愚かさ。

生涯くだらぬ『理想』に囚われて、自らの意図を持ってなかつた紛い物。それが……

自分の正体だと理解したか？」

「ッ」

「ただ『救いたいから救う』など、そもそも感情として間違っている。『人間』として故障しているお前は、初めからあつてはならない『偽物』だった。そんなものに生きている価値はない」

「……………三月？」

慎二は隣で自分を抱えている三月に声をかけるが答えは返つて来ず、三月はただアーチャーと士郎を見続けていた。

「オレはお前の『理想』だ」

「うるさい！」

士郎が立ち上がり、更にボロボロになった双剣を『投影』で新しいものに変えて、アーチャーにただ斬りかかる。

「ウオオオオオオ！」

そこには先程までの技術を使っていた士郎の姿は無く、ただ斬りかかる士郎がいた。

そしてアーチャーは涼しくこれを真っ向から受け止め、膠着状態になった剣達からはギリギリと音と火花が飛ぶ。

「決して敵いはしないと理解出来ている筈だが……………お前は本当に『正義の味方』になり

たいと思つているのか？」

「俺は『なりたい』 んじゃなくて、絶対に『なるんだ』よー」

ギリツと士郎が歯を噛み締めて、膠着状態を無理やり解除する。

だがアーチャーがまた膠着状態へと戻す。

「そうだ。『絶対にならなければならぬ』。それが衛宮士郎にとって唯一の感情だからだ。

例えそれが自身の内から表れたものでないとしてもな」

「ッー」

士郎の体が僅かにビクリと反応する。

「その様子では感づいてはいたようだな。オレの記憶はおぼろげで、かつての記憶で

覚えているものなどほとんど無い。だが、それでもオレはあの光景だけは覚えている

——」

アーチャーの『あの光景』と言つた言葉で士郎と三月の二人の前に10年前の景色と場が蘇る。

『冬木市大火災』。

炎の海の中で充満し、焼け焦げた死臭。

士郎はそんな絶望的な状況の中で助けを請い、叶えられた時の感情を思い出す。

そして「衛宮切嗣」という男が自分達を助け出した時に見せた安堵の顔を。

「それがお前の原点だ。助けられた事への感謝は後から生じたもの。お前はただ、お前を助けた顔があまりにも幸せそうだった衛宮切嗣正義の味方に憧れ、自分もそうなりたいと思っただけだ！」

今度はアーチャーが膠着状態を外し、士郎を蹴る。

士郎はボキボキと何かが折れる音を耳朶で聞こえながら咳をし、咳をする度に唾液と血が混ざっていた液体が吐き出されていた。

「アーチャー……………」

凜の声にアーチャーは一瞬だけ彼女の方を見た。

「ゲホ！ ゲホッゲホッゲホ！（そうだ……………あの時救われたのは俺の方じゃない。

誰一人生存者のいないような大火災。助かる筈のない子供達と、いる筈の無い生存者を見つけた男……………この二つの内、どちらが奇跡だったかと言えば——）」

「——子が親に憧れるのは別に変な話ではない。だが養父衛宮切嗣の奴は少なくともお前には呪いを残した。そしてお前はあの時から正義の味方にならなくては行けなくなつた。お前のその『理想』はただの借り物。『衛宮切嗣』が取りこぼした『理想』で、

『衛宮切嗣』が正しいと信じたものをお前はただ真似ているに過ぎない」

「そ、それは……………違——」

「——違わないさ。『正義の味方』？ 笑わせるなよ。『誰かの為になる』とそう

繰り返し続けたお前の想いは決して自ら生み出したモノではない。そんな存在が他人の助けになるなどと、思ひ上がりも甚だしい！」

アーチャーは力尽くで構える士郎の双剣をまた壊し、その勢いのまま士郎の足を刺した。

「グオアアアアアア?!」

「二シロウ!／衛宮君!／衛宮!」

「ッ」

セイバー、凜、そして慎二が士郎の名を呼び、三月は息を短く呑む。

「アーチャー……………お前——」

「そうだ! オレは『誰かを助けたい』と言う願いが『綺麗』だったから懂れた! 故に、自身からこぼれ落ちた気持ちなど…無い!」

アーチャーが怒りを露わにして士郎に斬りかかり、その度に士郎の『投影』した双剣は壊れてはまた『投影』して迎え撃ち、徐々に真正面から追い詰められる。

「これを『偽善』と言わず、何というか?!」

「グウウ?!」

「この身は『誰かの為にならなければ』と! 強迫観念に突き動かされて来た! 傲慢にも走り続けた!」

「ヌグアアアアアア！」

「だが所詮は『偽物』だ！ そんな『偽善』では何も救えん！ いや、元より何を救うべきかも定まらん！」

アーチャーの言葉に気を取られた士郎の腹にグサリとアーチャーの短剣が刺さる。

「ガツ?!」

「士郎！」

士郎が痛み顔に顔をしかめ、閉じそうになる瞼を気力と三月の声で何とかその衝動を抑える。

アーチャーが片手から短剣を消して士郎の頭を無理やり自分へと向けさせる。

「オレを見ろ、『衛宮士郎』！ 走り続けた結果が『コレ』だ！ 初めから救う術を知らず！ 救うものを持たず！ 醜悪な正義の体現者がお前の成れの果てと知れ！ その『理想』は破綻している！ 『自身より他人が大切だ』という考え、『誰もが幸せであつて欲しい』という願いなど空想の御伽噺に過ぎんだ！」

士郎の足から力が抜けて、アーチャーは士郎の頭を離して彼の顔を蹴り飛ばす。

「そんなものが夢でしか生きられないのであれば——！」

「——その『理想』<sup>夢</sup>を抱いたまま溺死しろ！ 衛宮士郎！」



## 第32話 アーチャーと言う男（後編）

衛宮士郎、エミヤシロウ 視点

士郎の足から力が抜けて、アーチャーは士郎の頭を離して彼の顔を蹴り飛ばす。

「そんなものが夢でしか生きられないのであれば！ その『理想』<sup>夢</sup>を抱いたまま溺死しろ！ 衛宮士郎！」

士郎の力が入っていない体が荒野の地面をゴロゴロと転がり、数メートル先で止まると彼はほぼセイバーと三月の稽古からの反復で立ち上がるうとして、体の傷から血が噴き出しながらも何とか膝を着き、立とうとした。

士郎は遅く、長い息を吐き出しながら麻痺していく体の感覚と思考でアーチャーの言いつ分を自身の中で思い返していた。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

士郎の目の前が霞み、出血多量からの幻覚か何かを視ていた。

それは断片的にアーチャーの記憶か、以前三月と一緒に衛宮邸の居間で魅入った紛争

地帯に關してのニュースかドキュメンタリーの場面などか、士郎には見分けが付かなかつた。

ただハッキリとした事は、自分の目の前に青年になり始めた少年が立っていた事だ。その背中は何処か力強く、大きく見えた。

「……」

「……」

「それは士郎が思わず声を出す程の違和感喪失感を与えていた。

「アンタは、多くのモノを失ったように見えるな」

目の前の青年に成ったばかりの存在が振り向かずに答えた。

「それは違う。私は何も失わない様に意地を張ったから、ここにいます。何も失ったモノは無い。お前達はどうなのだ？」

「え？」

「え？」

士郎は隣を見ると、幼い三月が彼の袖をギュツと掴んでいた。

それはまだオドオドと『人見知り』と言う言葉が控えめな表現の頃だった、かつての少女。

少女。

小鹿の様にプルプルと震えている彼女は士郎を見上げていた。

「……………おにいちゃん？」

「（そうか、俺は……）」

「……………」

「……………」（『兄』、か……………」）

《おい、大丈夫じゃなかったら俺達を頼っていいんだぞ？　じいさん切も大人だし、俺もお前の『お兄ちゃん』だからな。俺達は家族で、俺が先に養子になったからお前より『上』だろう？」第2話前半より

彼は自分を彼女の『兄』と言った。

『彼女の為に』と思っただからこそと、ずっと自分に言い聞かせながら。

だが、「果たしてそうだろうか？」と言う疑問が士郎の中に最近芽生えていた。

そしてそれはアーチャーとの闘いの中である事に気付いた。

「俺は……………」あの日全てを失ったんだ。（そうだ、俺はあの地獄の中で、父さんや母さん、友達や人見知りも家も何もかも全部失ったけど、俺の方はまだそれらを覚えていた。

けど、彼女は……………」

「……………」お前は認めるのか？」

「……………」ああ、認めるさ……………」でも、俺はその同じ日に誰かを必要としている奴を見てたんだ」

士郎は歩き始めて、前に立ち止まっていた青年を横道る。

足取りがおぼつなく、幼く小さな手をした三月の手を取りながら彼らの前にある丘の頂上を一緒に目指した。

その時に背後から青年が声をかけた。

「その先はオレにも分からない道だ。この先、どうなるか分からないぞ?」

「……………」

「??」

士郎は一瞬立ち止まり、隣でキョトンとした幼い三月を見て、彼女に微笑んでから歩みを再開する。

「それが茨の道でも、暗闇の道でも、未知の先でも……………俺達なら乗り越えてみせるさ」

「じゃあ士郎は『正義の味方』を捨てるのかい?」

「ッ」

士郎がその懐かしい声で思わず振り返りそうになるが、何とか自分を止める。

見てしまったら「また逆戻りするのでは無いか?」と言う気持ちから。

「……………捨てないさ。でも……………多分だけど切嗣の言っていた『正義の

味方』とも違うと思う」

「……………そうかい……………そうだね……………僕の時とは違うかも知れないし、結局は同じ

になるかも知れない」

「ああ。だから行って来るよ、切嗣親父」

「行ってらっしゃい、士郎息子よ」

士郎達が丘の頂上に着くと、そこには一本の剣が地面に刺さっていた。

士郎が三月の手を握っていない片手でそれを引き抜こうとしても片手である為、上にく力が入らなかつた。

「仕方ないな。じゃあ『1、2の3』で引くよ、士郎！」

「ああ！」

隣から自分の良く知っている少女の元気良い声が聞こえ、これに士郎の胸が温かくなつた。

「1！」

士郎の隣から少女の手が地面に刺さっていた剣のグリップをガツチリと掴む。

「2の——！」

二人の両手にギュツと力が同時に入り、剣のグリップと、お互いの手を握る。

「——3！」

息が合つた行動に剣が抜かれると、曇っていた空が割れて優しい陽光が差し込み、炎が荒れ狂う荒野が剣の抜かれた場所から徐々に豊かな緑色の草が生え始め、

色とりどりの花が咲いて瞬く間にそよ風に揺れる花畑が士郎の周りに広がり始めた。その景色は眩しく、美しく、士郎は思わず瞼を閉じてまた開けると何時の間にかアーチャーと相対していた場に戻っていた。

士郎の体の痛みは引いていて、傷口はもう既に閉じ始めていたのを見たアーチャーは小声で舌打ちを打った。

「チツ。時間をかけ過ぎだ、戯け」

「衛宮の傷が塞がって行くだ?! 何だよそりゃ?! ゾンビかよ?!」

「(ははは、そりゃあ無いだろ慎二)」

「シロウ! 立って下さい!」

「(ああ、分かっているセイバー。せっかく稽古とかを付けて貰ったんだ。それに比べればこんなの……………)」

「衛宮君、立って! 一発アーチャーに入れないと私がアンタをぶっ飛ばすわよ!」

「(分かっているよ遠坂。ここまで来て倒れるのもお前にも殴られるつもりも無いや)」

「士郎」

「(……………三月)」

「負けないで」

「……………そうか。 そんな声かけられちゃあ、意地でも立たないとなー!」

士郎が立ち上がると、アーチャーは彼の傷がほぼ完治しているのを確認した。

「……………（切嗣が彼の命を救う為に埋め込んだ聖遺物。 やはり、恐るべしだな彼女アヴァロンの鞘は）」

『体は——』

「——ッ?!（まさか?!）」

「剣で——!」

「フンッ!（さすがにここまでは予想外だ!）」

アーチャーが双剣を士郎に目掛けて投げる。

「——出来ている!」

士郎の両手に現れたのはアーチャーの双剣の『干将・莫耶』に似た別の何かだった。

それはまるで自由を求める、翼のような形をしていた。

士郎は両手の中にある双剣を振るい、アーチャーの投げた短剣がバキバキと音を立てながら割れる。

「俺は……………ここで立ち止まれない!」

「……………ようやくか。 だが私とお前の実力差は未だに歴然だ」

「……………」

「それを骨の髄まで理解出来た筈だが……………まだ足掻くか？」

士郎が笑みを浮かべながらアーチャーを見る。

「理解したさ……………けど……………『それがどうした？』第12話前半と第17話後半より

「……………何？」

「聞こえなかつたか？ 『それがどうした』と言ったんだ。確かに、お前に言っている事は正論だ。それに強い。でも……………『それがどうした』?!」

士郎はまるで「仕切り直しだオラア！」と言う様な勢いでアーチャーに傷を負わせていった。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………



士郎の啖呵から更に30分ほど経ち、未だに彼とアーチャーの戦いは続いていた。

勿論この間、士郎自身も無傷ではなかった。

寧ろアーチャーよりも深刻だ。

彼がまだ生きているのはひとえにアーチャーが言っていた『彼女の鞞』のお陰だった。

『アヴァロン』全て遠き理想郷

それは本来、セイバーである『アーサー・ペンドラゴン』の持つている宝具、『エクスカリバー』と対を成すもう一つの宝具だった。そして効果は

「セイバーの魔力に呼応し、持ち主に不老不死と無限の治癒能力をもたらす」と言われている。

つまり何某ゲーム風に言うところ「パッシブリジエネレーション」と言ったところの装備が士郎の中に埋め込まれていた。

士郎の羽をモチーフにしたような双剣は最初の内は次から次へとアーチャーの双剣を壊していった、先程アーチャーが士郎にしていたかのように。

だがやはりアーチャーが長年『守護者』としての『英霊』をやっている年月は伊達ではなく、徐々に士郎の形成が不利になってゆき、これにつれアーチャーが明らかに不機嫌になって行く。

「くだらん………くだらん、くだらん、くだらん!!! もはや見るに耐えん！ 愚昧ここに極まったな、衛宮士郎！ 『それがどうした』だど?! 子供か、貴様は?! これなら

ばまだ衛宮切嗣の言っていた『正義の味方』の方がマシだ!」

「なら、お前の担げる『正義』は何だ?!」

「『正義』とは『秩序』を示すものだ!　そして全体の救いと個人の救いの二つは別のモノだ!　その二つは絶対に両立しない!　オレは正しい救いを求めれば求めるほど、自己矛盾に食い尽くされ、ただの殺し屋に成り下がった!　それが分からないのなら、その『思想』ごとく砕け散れ!　何も成し得ないまま燃え尽きて死ね!　そうすればオレの様な『間違い』も誕生も存在もしなくなる!」

「それはお前の言い分だ!」

「それがオレの『正義』だ!」

そこで両者はまた激しい攻防を繰り広げる。

士郎は攻撃を受け流しながらカウンターを狙い、アーチャーはヒット&アウェイで士郎を殺そうとする。

「グッ!」

アーチャーは自身の存在は気薄になって行くのを本能で感じる。

とうとう自身の存在を保つ魔力が無くなって来たのだ。

本来、サーヴァントはマスターを失った短い時間の後に消滅する。

これは現世の依り代を無くし、存在を維持する魔力が尽きた事を意味する。

だが稀に『単独行動』と言ったスキルを持つサーヴァントがいて、これはマスターからの魔力供給が断たれてもしばらくは自立できるスキル。

これがあればマスター無しでもある程度は自分を保てるが、限度がありそれがアーチャーに迫って来ていた。

「（こいつは、何だ?!）」

アーチャーが士郎を突き放し、彼をまた蹴り飛ばす。

が、士郎は立ち上がり、また接近戦をアーチャーに挑む。

「（こいつは本当に衛宮士郎なのか?! 何故限界が訪れようとしぬ?! 何故迷わない?!）」

「ウオオオオオー!」

「ツッ!（こいつは『勝てぬ』と……………『意味が無い』と思って尚、オレに挑み続けるその姿は……………やはり同じだ! オレと! それこそがオレの過ちに他ならないと何故気付かない?!）」

アーチャーがまたもや士郎を無理矢理引きはがすと、今度は士郎の双剣の刃が壊れ初め、残ったのはボロボロでヒビが入った双剣だけ。

「……………限界が来たか。」 皮肉だな衛宮士郎。 気力より先に魔力が尽きたか。

お前に残された武器はそれだけだ」

アーチャーが更に宙に数本の剣を『投影』する。

「(少し………極僅かに残念だよ、衛宮士郎<sup>エミヤシロウ</sup>)。どうあれ、『衛宮士郎<sup>エミヤシロウ</sup>』の戦いはこれで終わりだ!」

「さっき………お前の言つた事は確かに正論だ………以前の俺ならお前を正しいと感じて、同意もしていたかも知れない………だけど………それでも………『誰もが幸せであつて欲しい』と言う願いを、俺は『美しい』と感じたんだ。そしてその感情は、限りなく本物の筈だ」

「グツ」

アーチャーは士郎の言葉で綺麗な月が出ていた夜の景色が頭を過ぎつた。

『誰かを助けると言う事は誰かを助けられないと言う事』なら………俺は………『俺の周りの人達を守る』! それが俺の『正義』で! それは………『間違いじゃない筈』なんだ!」

そう士郎が宣言した瞬間、彼の足元から緑の草と花が生え、彼の周りに曇つた空から陽光の光が差し込む。

それは何処か、幻想的な、奇跡のようで——

「クツ?! (何だ、これは?!)」

——アーチャーの頭に年若く幼い自分が、

やつれながら痩せ衰えていた着物を着た男性と、

月の綺麗な晩に二人で軒先に腰掛けて話を――

「――ッ！ 消えろおおおおおおおおお！」

酷い頭痛に顔をしかめながらアーチャーは士郎に向けて剣を放つ。

まるで脳裏と眼前の物を共に消し去りたい様な勢いで。

そして士郎が走る一歩一歩ごとに、彼の踏んだ地面のから鮮やかな色の花達と緑の草が生えて行き、陽光が曇った雲から所々差し込む。

「いけえええええ！ 衛宮あああああ！」

「（――い！）」

士郎は残された双剣の刃の部分で真正面から斬り落としながらアーチャーに突進していく。

「シロウ！」

「（――かない！）」

一つの双剣の刃が崩れ落ちて、士郎はもう片方で斬り落とし始める。

「消えろ、消えろ、消えろおおおおお!!」

「———なんかいない!」

「衛宮君、いつけえええええ!」

もう片方の剣もボロボロになって行きながらも士郎はそのまま走る。

「士郎!」

「俺は、間違つてなんかいないんだああああ!!!」

最後にアーチャーが放った大剣達を払い落とすとついに士郎の羽の様な双剣に限界が来たのか両方とも粉々に砕け散り、士郎は丸腰ながらもアーチャーに向かってがむしゃらに走り、アーチャーのおぼろげな灰色の記憶の一部が脳裏に蘇る。

!>>> 《オレが代わりになってやるよ! 任せろつて。 じいさんの夢は、オレが———

アーチャーは双剣を握っている両手に力を入れた。

そして彼は見る。

士郎の顔が『それがどうした』と笑い飛ばそうとしながらも、自分が不安に押し潰されそうな顔をしていた。

それは何処か機械的な衝動からではなく、  
純粋な子供ががむしやらに不器用ながらも自分なりに答えを得たような、

ヒト  
人間の顔表情だった。

そしてアーチャーは思う。

「ああ、オレも独りでは無かったら、そんな表情顔を過去にしていたのかもな」と。

## セイバー運営、遠坂凜、間桐慎二 視点

士郎、凜、三月、セイバー、慎二たちが気付くとボロボロのアインツベルン城に戻っていた。

「ここは……アインツベルン城？」

「その……ようですね」

「……………まったく。お前には驚かされてばかりだな、衛宮士郎。まさか英霊を

素手で殴り倒すとは流石に思わなかったぞ」

「……………俺だって、お前を殴り倒せるとは思わなかったさ」

凜達の前には床に仰向けになりながら笑い、頬に殴られた跡があるアーチャーと、息の荒い士郎が流石に過労が追いついたのか、尻餅を付いて呆然とした顔でアーチャーを見ていた。

「……………何故私を刺さなかった、衛宮士郎」

「単なる魔力切れだ。それに今のは、遠坂に頼まれた一発だ」



「……………私の運も、まだ捨てたものではないな」

「……………俺の勝ちだ、arch——」

ドゴオン！

「——ウゴオ?!」

何かが二階から士郎目掛けて飛び降りてそのままの勢いで彼は横に倒れる。

俗に言う、プロレスのプランチャに似ていた。

「士郎、大丈夫?! 意識ある?! アーチャーさんも、私の指は何本に見える?!」

士郎の上半身を持ち上げてゆすり続け、アーチャーの事も心配していて指を二つ彼に向って上げる。

「……………それはピースサインのつもりかね?」

何時もの調子が出たのか、アーチャーが立ち上がりながら皮肉めいた言葉を返す。

そして三月のお陰で士郎は白めになりながらも声を出す。

「……………ほ」

『ほ?』

「……………星が」

『星が?』

「星が、見えたスター……………ガクリツ」

「士郎、ダジャレ言っている場合じゃないでしょう?!?! 面白いのは認めるけどさ?!?!」

三月がそのまま士郎の体をガクガクと揺すり、士郎の顔色は更に青くなっていく。

「全く………本当に、君にはどうしたものか………」

「み、三月! それ以上したら衛宮が本気でヤバイ!」

慎二が士郎から三月を手放せて、彼に肩を貸す。

「ありがとう、慎二………」

「何さ、これぐらい。 帰ったら二人の旨い飯を僕にたらふく奢れよ?」

その間、立ち上がったボロボロのアーチャーを凜が見上げていた。

「どうしたのかね、凜? 私を殴らないのか?」

「もう良いわよ、衛宮君が一発入れてくれたし。 それよりさつきまでの三文芝居はも

う終わりな訳?」

「フ、君にそんな事を言われるとはな」

「貴方ね、私が何年世間を相手に猫を被っていると思っっているのよ?」

「そうかね? 私はてつきり君がカマをかけたのかと思っただので逆にカマをかけただけ

だが? まあ君が猫を被っているなど今更——」

「——よしやっぱり一発ぶん殴ってから続きをするわ。 歯あ食いしばれ!」

凜の拳をアーチャーが躲す。

「この！ ジツとしてなさい！」

「やれやれ……（やはり慣れない事はするものでは無いな）」

「アーチャーさん！」

「ん？ 何だね？」

凜の拳を躲し続けるアーチャーに対してペこりと頭を三月が下げる。

「ありがとうございます！」

「……………私は別に何もしてないが？（本当に、君は鋭いな……………全く……………）」

「え？（あれ？ でもアーチャーさんはワザと……………？）」

「—— ツ！ アーチャー！」

セイバーが何かに気付き剣を構え——

「『熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七つの円環<sup>ス</sup>』！」

—— アーチャーが展開した光の盾が士郎、慎二、三月を数々の武具から守り、アーチャーは凜を体で庇うかのように前に出て何本かの剣や槍などが彼の体に突き刺さる。

「グウ！」

「「アーチャー！／アーチャーさん！」」

士郎と凜と三月が彼の名を叫ぶと二階の通路から愉快そうなギルガメッシュが歩き出る。

「流石は雑種、私の『散歩コース』と分かっていながらもこうもズカズカと断りも無しに土足で踏み荒らすとは……………だが面白い茶番だったぞ？　そこは褒めてやろうではないか」

「ギルガメツシユ！」

「ええええ?!　お、お、王よ、何故ここに?!」

「ん？　ああ、海を漂うワカメではないか。ここは私の『散歩コース』とやらだぞ？

しかしまあ、面白いと言つても贗作者共の独り相撲では、な」

ギルガメツシユの後ろに数々の武器が宙の歪にて姿を現す。

アーチャーは凜の方をチラリと見て口を動かす。

「……………え？」

そう凜が眩いた瞬間、アーチャー双剣の一つを『投影』して姿が消え、ギルガメツシユの横へと表れて斬りかかった。

「ちよんぎいな」

だがギルガメツシユは慌てる事無く、眉毛を動かす事も無く用意していた武器がアーチャーを更に串刺しにして爆発が起きる。

「アーチャー?!」

爆風の中、何か飛び出て凜の足元に突き刺さり彼女は見た。

それはボロボロになり、中身が空っぽのアーチャーがさつき『投影』したばかりの短剣の刃の部分だった。

## 第33話 さいこのガキ大将（前編）

セイバー運営、遠坂凜、間桐慎二 視点

「……………アー……………チャャー?」

「まさかフエイカ!奴が最後の最後まで『他人を救おう』とは、大した道化よな」

だがそれも束の間、アーチャャーの持っていた刃の欠けた短剣は光の粒子となり消え去って、凜は三月達の声が聞こえる。

「うわ?! ぎ r —— ぐへ?!」

「ちよちよちよ —— ガハ?!」

凜がハツと見上げるとギルガメツシュは以前出した剣で三月と慎二を士郎から引き離して、意識を刈り取っていた。

「三月! 慎二!」

「ギルガメツシュ! 貴方は二人で一体何をしようと言うのです?!」

士郎達の中でも運動神経抜群のセイバーならギルガメツシュが剣を振るうよりもい

ち早く反応出来ていた筈。

だが彼女は彼の持っていた剣がどのような物か知らなかったので一瞬判断が遅れた。そしてその過ちの所為でギルガメッシュは人質を二人（？）入手してしまった。

「ん？ 分からぬか、セイバー？ 我は願いを叶えたいだけだ」

「?!」

『願いを叶えたい』。それはサーヴァントにとって――

「貴方は聖杯を求め、手に入れると言うのですか?!」

「セイバーよ、たった10年だぞ？ もう忘れたのか？ 以前言った様にあれは元より我の物だ。それに聖杯の降霊などもうとうとに済んでいる」

「なっ?! う、嘘よ！ だって、聖杯戦争はまだ――!」

「――時臣は貴様に何も伝えていなかったと見る」

「……………え？」

こゝで凛がまた知らないお父様時臣を匂わせる言動にビクリとする。

「今度は何を明かされるの？」と半分好奇心、半分ザワザワとした恐怖の心境で。

『聖杯を呼ぶ為の儀式』なぞくだらぬ戯言よ。『七人のマスターによる生存競争』？

『最後の一人となったマスターのみが聖杯を得る儀式』だと？ そんなものは隠れ蓑にすぎんと言うのに」

「ギルガメッシュ、貴方は聖杯が何であるか知っていますのですか?」

「やれやれ、バカな女とは思っていたが………良いか? 魔術師共は毎回、聖杯を用意してから七人のサーヴァントを呼んだ。奴らが必要としたものは聖杯そのものではなく、その中身だ。魔術師共は『聖杯』を作りはしたがその中身を用意できなかった。故にまずはその中身となるべきものを召喚したのさ。事情を知らぬマスター共々サーヴァント達を謀つてな」

「そんな………まさか………」

ギルガメッシュがニヤリと笑みを浮かべる。

「ほう? 理解が早いな、遠坂の娘よ。 そうだ、聖杯をサーヴァント達で満たす最高純度の到底使い切れぬ魔力の魂こそが、奴らが求めた聖杯なのさ。 だが我はそんなものに興味は無い。 私の願いは『この時代の人間の一扫』だ」

「な?!」

「お、 お前! 正気か?!」

「この世界は楽しい。 が、 同様に度し難いものだ。 凡百の雑種が生を謳歌するなど

『王』に対する冒険に過ぎん」

「………まさか?! 貴方は『聖杯』の異常の事を———?!」

「——— やっとお前も理解したか、セイバー。 そう、10年前の大火災は『聖杯』か



ら零れ落ちた一部の呪いが炎となつて街を焼き払つたに過ぎない。なら一部だけでなく全てが出たとしたらどうだ？」

「そんな事をすれば人間が種として途絶えてしまふではないか、ギルガメツシュ！」

「ならば是非も無し。自らが犯した罪で死に絶えるのならば生きる価値などあるまいて。我が欲しいものは有象無象では無く、地獄の中ですら生き延びられる者こそ支配される価値があると見る。その点で言えば前回は落第だったぞ？ あの程度の炎で死に絶えるなど、今の人間は余りにも弱すぎる」

「アンタが欲しているのは『聖杯』で、イリヤの心臓の『聖杯』はもう手に入れた筈。ならその二人をどうしようって訳?！」

「理解が早いと先程評したが撤回しよう、遠坂の娘。『聖杯』の起動には莫大な魔力が必要でな。そこはそれ、自己で補えなければ他人から奪うのが世の摂理。幾らでも手はあるが、もつとも適しているのがこいつらだ」

「何だと?! どういう事だ?!」

「言葉通りの意味だ。少々興が欲しくてな、退屈しのぎと言う奴よ」

ギルガメツシュが三月と慎二を担ぎ、土郎達へ言葉をただ続ける。

「我は今から『聖杯』を起動させる、柳洞寺でな。もつとも、我の聖杯は急造の欠陥品だ。こいつは十年前より質が悪いぞお？」

「「!?!」」

「来るなら来い。　そこで我らの決着もつけようではないか、セイバー。　フハハハハハハハハハハ！」

「待て、お前——!！」

「——雨には気をつけろよ?」

様々な武具がギルガメツシユの言った様に雨みたいな憩いで落ちる場を後にして、彼はそこから去る。

土煙が収まるとセイバーが叩き落とし、凜が切り札の宝石達を使つて結界を張つていた。

「……………リン、シロウは?」

「俺は大丈夫だ……………けど、三月達が——」

「——ええ、時間が更に無くなつたわ。　あの『金髪』……………じゃあ三月と被るから『金ピカ』が慎二の言つた様に臓硯の『同盟者』としたら、これまでの昏睡者や行方不明者の魂を『聖杯』の実体化に使つてもおかしくない……………それに……………」

「それに……………何だ?」

「いえ、もうここまで来たら文句を言つていられないわ。　ここにあるモノを拝借して、今は自分達の手当てなどを済ましてすぐ移動を開始しましょう。　柳洞寺ならば一度衛

宮君や私の家によるより直接ここから向かった方が早いわ。（アーチャー、まさか貴方はこの状況を見通してワザと命賭けの稽古を衛宮君に付けさせていたの？）」

凜は速足で歩きながら先程のアーチャーの言葉を思い出す。

『奴はお前達に任せる』

それは死にゆく者の言葉ではなく『バトンタッチ』をする者の言い分だった。

確かにアーチャーが『未来の士郎』の可能性ならば理論的に士郎に同じ事は出来る筈。だが彼とは違い、士郎は技術的にはともかく圧倒的に魔力が足りない。

ならアーチャーはどうやってそれを士郎に克服させるつもりだったのだ？

アーチャーは運任せなどに頼るような者では無い。

何処かにヒントがある筈。

凜はそう思い、セイバーは士郎の体から鉄の破片などを取り出しながら手当てをし、士郎は近くに置いてある保存食などを次から次へと食べていた、少しでも体力と魔力を戻す為に。

凜はポケットの中に手を入れて、ペンダントを出す。

「……………やっぱり魔力は貯蔵されていないか……………」

それは士郎の持っていた方ではなく、アーチャーから渡された方だった。

もしやと思い、凜がそれを取り出して魔力を感知しようとするが、ペンダントの魔力

は枯渴したままだった。

後は――

「――ッ！」

凧はそれを取り出して、土郎を見る。

「……………衛宮君、貴方の『投影』は魔力が足りない。確かに三月は言っていたのよね？」

「……ああ」

「……………衛宮君……………申し訳ないのだけど、貴方は命を賭ける覚悟はあるかしら？」

「それが三月達を守る為ならば、賭けるさ」

「シロウ?!」

「……………ハ？」

凧がジト目で未だにむしやむしやと食べる土郎を見る。

「……………衛宮君? こういう場合、もう少し相手に詳しい説明を聞いて頂戴な?」

「三月と慎二が危ないんだ。命を懸けるなんて安い物だ……………アイツに言った通り、俺

は俺の周りの者達を守る。俺はどうすれば良いんだ、遠坂? ………………つて遠坂?

どうしたんだ?」

そこには涙腺が緩くなり、凧の目に涙が留まっていた。

「馬鹿! アンタもアーチャーも結局、頑固者で馬鹿同士ね?!」

先程の士郎の言葉で凜はアーチャーを彼の上に連想してしまった。

そしてアーチャーの結末も。

「もう一度言うわよ衛宮君?! まず自分が第一よ! それが約束出来なかったら私人でもギルガメッシュをぶつ倒すんだから!」

「お、落ち着け遠坂!」

「リン、聖杯はどうするのですか?」

「……………アイツが言った様に十年前の大火災が聖杯の呪いって言うのならそんな物、あつては駄目だわ」

「では——」

「——壊すんだな遠坂、聖杯を」

「ええ」

「ですが、リンは良いのですか? 聖杯を得るのは遠坂家の悲願では?」

「……………そういうセイバーこそどうなの?」

「以前アーチャーは言っていました、聖杯は『悪質な宝箱』と。今なら彼の言おうとした事が真に分かるような気がします」

「そっか……………私は初めから叶えたい望みがあつた訳じゃないし、壊すのならそれはそれですつきりするわ。それに私自身は『聖杯の為』じゃなくて『勝つ為』に聖杯

戦争に参加したんだし……『聖杯』を得るなんて私にとっては次いでよ、次いで」  
 「何か……『さつぱり』しているな、遠坂」

「でなきゃやつてられないわよ、こんな事。と言うか半分はあんた達兄妹の所為なんだけど、ブツブツブツブツ」

「え？ 最後なんか言ったか遠坂？」

「な、何でも無いわよ！ じゃ、じゃあ作戦会議、移動しながら始めるわよ！」

凜のゴニョゴニョした独り言（愚痴？）を聞こうとした士郎に凜は誤魔化すように話題を変えた。

### 衛宮三月 視点

三月はまた夢を見ていて、以前のアーチャーの時のように浮遊感があり、飛んでいた。それは太古の景色で、まだ世界に緑が溢れていた時代のようなだった。

「（あー、何かホツとするな……羊羹とお茶が欲しい〜よ〜）」

人間、魔物や魔獣、そして神。

それらが跋扈していた時代のような風景に三月はととてもとても——

——懐かしい気分になつた。

「うゝん、平和だね」

その時、一つの都市にあるジググラトを見つけてそこへ三月は向かつた。その中に大きな見晴らしの良いバルコニーから入ろうとすると——

「——貴様、許しも無く我の中を見るのも大概にせよ」

「うきやあああああ?!」

ドスの効いた、耳に来る怒りに満ちた声で三月はガバつと起き——

「あわわわわ——プゲ?!」

ドサリ!

——上がろうとして体がぐるぐる巻きに縛られていたので見受けの体制も取れず、横に倒れて頭を打つ。

「いたたたた………鎖?」

三月が痛みに顔をしかめた後、周りと自分の体を見るとどこかの森の中で鎖によって体が拘束されて横になっているのに気付く。

「フン、ここには我しかない。何時までふりをしているつもりだ？」

「ん？ 『みつきは はねる をつかった』！」

「ジャラ！ジャラ！ジャラ！」

三月の後ろからギルガメツシユの声がしたので、三月は頭と首、そして体が跳ねながら回転する。そしてそれをする度に鎖のジャラジャラする音が辺りに響く。

正にコイ〇ングのアレだった。

「……………」

そこにはイラついているのか、呆れているのか、近くの倒れた木の上に座って退屈そうな表情で三月を見るギルガメツシユがいた。

「……………」 『しかしこうかはなかった』

「『奇を銜う』のは程々にしておけよと以前、我は言った筈だがな？ ………………まあ良い、さつさと済ませるか」

ギルガメツシユが立ち上がって空中の歪みから一つの黒い槍を取り出し、三月の方へと歩く。

「あゝ？ その刃がなんか私に向けr——」





## セイバー運営、遠坂凜 視点

士郎、凜、セイバー達は柳洞寺へと向かう為に山の中を上がっていた。

以前の騒動で円蔵山の結界はかなり乱れていたのもその中でもサーヴァントが行動出来る道を歩いていた。

「衛宮君、体の調子はどうか？」

凜が心配そうに士郎の方へと見ると、彼はダラダラと汗を掻いていた。

冬の夜の中で。

「大……丈夫だ、遠坂。 少し……息苦しい……ぐらいだ。 気を付けないと……魔

術を思わず行使してしまう……ッ……ッ……」

「シロウ……」

凜達の作戦は至って単純だった。

柳洞寺にある『聖杯』に山の中を登山し、セイバーの宝具で消し去る……

と思わせてギルガメッシュを打つ。

だがそう簡単に奇襲をさせるようなのはいくら彼でも無い筈なので彼の注意を引き、セイバーが不意打ちをかける。

これは最初セイバーも反論するのかと凜は内心ドキドキして遠回りの言い方をした

のだが、意外とセイバーは了承したのだ。

「自分が現状の状態で宝具を撃てるのは二回、良くて三回」だと。

これならば二回を目安に一回はギルガメッシュ、二回目は『聖杯の器』の破壊という作戦になるのだが……………

《衛宮君。申し訳ないのだけど、貴方は命を賭ける覚悟はあるかしら？》

先程の凜の提案で士郎は使い切れない程、莫大な魔力を得る事が出来るかもしれないという賭けに出た。

これによってセイバーが『宝具を撃てるのは二回、良くて三回』から、『士郎の人体が耐えられる間、何回でも撃てる』といった具合に変わった。

これは自己治療力を持ち、かつ魔力をほぼ全て使い切った状態で、もし凜の推測があつていれば『固有結界』を使える士郎だからこそ取れた手段。

それは——

「体の奥からマグマが溢れ出ているかのようだし、頭がぼくつとするし、気を付けないと体と魔術回路がウズウズして独りでに暴れそうだ！ 三月が小さい頃、こんな薬に頼らないと生きて行けなかったのを知らなかつた自分が…………許せない！」

——『三月の薬』の服用だった。

以前凜とイリヤが解析しようとした結果、全て分かつた事では無いが少なくとも莫大

な魔力を貯蔵した塊であると同時に強力な治療薬であった事が判明した。

彼女達の見立てでは錠剤であるものの、あまりにも一気に魔力が増えるので人体の崩壊を防ぐ為に強力な治療薬の機能も据えた、何某風に言う「MP全快薬」がしつくりくるだろうか？

あと凜にセイバー、士郎自身でさえ気付いてはいないが、士郎の「自己治療力」体内アヴァロンもあつて初めて成立した無茶であった。

「そのような爆弾を、衛宮君に背負わせる私は……………ほんと、自分が嫌いになるわ」  
「遠坂の……………所為じゃない……………効率……………だ……………あー！」

士郎が倒れそうになり、近くの凜が彼を支える。

初め、凜は自分が薬を服用しようかと思つたが遠坂家の魔術は寶石などの貴重なものなどを媒体にするので基本的に効率の良い魔術しか使つていなかった。

車で例えるのならエコ車に普段より数十倍デカイガスタンを追加で詰めるようなもの。

長期間の走りは問題ないが今すぐ必要なのは高い威力が出るような、燃費の凄く悪いスーパーパフォーマンスカーだった。

それに、どちらかと言うとセイバーのマスターである士郎が服用すれば自身とセイバーの使える魔力が増える方が戦力の上昇に繋がる。

1を10ではなく、1・1を11にした方が効率が良い。

その上、イリヤから聞いた話も照合すると恐らくだが『聖杯の器』の核として使われるのは『魔術師』ではない慎二。

その方が、自身聖杯を御できずに暴走しやすいからだ。

つまり三月は魔力源として使われる筈。

これも士郎自らがリスクを背負う要因となった事に凜は彼の心配する半面、自分へのリスクが減少した事に自己嫌悪をしていた。

「(本当に、自分が嫌いになるわ……………でも、これで何とか行ける筈！ セイバーの宝具、私の秘蔵の寶石達と魔術師としての腕、そして衛宮君の『投影』と……………まだ使えるかわからない『固有結界』は無い物としてもあの『金ピカ』と腐りきった『聖杯』の破壊ぐらい——)」

その時、凜は久しぶりに前向きに物を考えていた。

『キキ』

突然冬の山の中で虫が鳴かなければ。

「ツ！ シロウ、リン！ ハアアアアア！」

セイバーが力任せに剣を振るうと地面を抉り、その上を走っていた蟲共々吹き飛ばし、返しの剣で短剣達ダクを落とす。

「これは、臓硯とアサシン?!」

「二人とも先に行ってください!　ここは私が食い止めます——!」

「——わかった!　合図を送ったら戦闘離脱するか、しながら宝具をぶっ放して!」

「遠坂、飛ぶぞ!」

「ういえ衛宮く——きゃあああああああ?!」

士郎が凜の手を取ると同時に少し体の中の衝動を解き放つとそれは一流の『強化』を施した一步に近かった。

これに度肝を抜かれそうになった凜に悲鳴がすぐさまセイバーからは聞こえなくなっていく。

これは別に距離が開けたからではなく、蟲達の音が更に騒がしくなったからだ。

## 第34話 さいこのガキ大将（後編）

衛宮士郎、遠坂凜 視点

二人は息を切らせながら柳洞寺の池に着くと――

「――ほう？ セイバーも連れずにその不出来な顔を見せるとはな、フエイカー贗作者」

池の中の異界の塊のようなグロテスクな物を池岸から見ていたギルガメッシュが士郎と凜に振り返った。

「ギル……………ガメツシュ」

「『王』を付けんか、不敬者めが」

「あれが…………『聖杯の器』？」

「おっと、そうだ。これは返すぞ――？」

ギルガメッシュが手に持っていた物を士郎達に投げると、凜はそれが何だったのか見えて、それを拾い上げる。

それは小さなトランプカード箱状の魔術礼装だった。

以前に三月が「体の調子が良い」と言つて人数分作り、身近な者達にあげていた物だつた。第17話より

「誰が製作者かは知らぬがかなり腕が良い。何せ『聖杯の器』の侵食をあつたワカメから弾ける程だったからな。まあ……貴様らをただ殺すだけでは芸がないのでな、ここまで辿り着いたその生に僅かばかりの猶予をやろう」

「……………猶予ですつて？」

「聖杯も見届ける者が我だけでは寂しかろう？ この行く末を共に見届けると言うのなら雑種と言えど、その生にも意味があるでは無いか」

「……………貴方は、人類の大量虐殺なんて本気で考えている訳？」

ギルガメツシユがピクリと反応する。

「小娘が。殺される程度の覚悟で我に問いを投げるとはな…恐ろしく『人間に優しい世界になつた』とは良く言つたものよな。だが、それこそが答えだ娘。このように有象無象の無駄が跋扈する今の時代はあまりに醜い。かつての我の世には無駄なものなどなかつた。奴隷であろうと、家畜であろうと、魔の類であろうと、全てに役割はあり意味はあつた」

「今の世の中じゃあお前は『駄目だ』と言いたいのか？」

「今の世の中を見る。役割も価値も席も全てが埋まつてしまつて、種が『雑種』から『寄



生動物』に変わろうとしていないか！ そんなもの達を我が手ずから間引いてやろうというのだ。10年前は数百人足らずだったが、此度はこの世の全てに災厄が降りかかり、余分なものが淘汰された後、どれほどの『人間』<sup>ヒト</sup>が生き延びるか、我には楽しみでしかない」

「この……とち狂った変態野郎が——」

「——衛宮君。私がアレの核になつていている慎二を取り出しに行くわ。 あんなでも……桜達を助けようとしていたし」

凜は聖杯戦争中に三月が慎二を屋上まで誘うまでの印象は最悪だった。

それこそ間桐家の魔術系統と彼と桜の噂しか知らなかった『女性に対してクソみたいなヘラヘラ笑うお調子者のチャラ男』としか認識していなかった。

だがこの間、学園の屋上から彼の言動を見た凜は少しだけ理解した。第12話前半より

「ああ、こいつも素直じゃないだけなんだな」と。

これは（自分は決して認めないが）ある意味捻くれた性格の者同士だからこそくる「同族嫌悪」から自分と慎二の互いにイラつく要素だったと最近になつて感じた。

そんな彼が桜達をひたすら助けようとしていたのを桜本人から聞き、慎二に対しての考えを改めていた。

凜が池岸に近寄り、中のドロドロ口になった液体を見ながら覚悟を決めるとギルガメツシユは鋭い目で彼女を睨んだ。

「この受肉した呪いの中を進む決死の覚悟か、魅せるが………：………：我の前から去る事を誰が許した？」

ギルガメツシユから数本の武器が突然、凜へと飛来する。

「『トレース、オン』！」

士郎の両手に双剣が現れ、ギルガメツシユの放った武器を弾く。

「お前の相手は、俺だ！」

「衛宮君——」

「——ここは俺に任せろ。慎二達を頼む」

「ツ………：………：分かった」

凜が持ってきた宝石を一つ飲み、三月から貰った魔術礼装に魔力を流しながら池の中に充滿した泥の中に足を踏み入れる。

するとどうだろうか？ 泥が独りでに凜を避けるかのように引き下がる。

かのモーゼスの伝承みたいに。

「(ほんと……：状況が状況じゃなかったら、こんな神話めいた場面に私が直面している事に感動しているところなのに——！)」

「ほう？ 中々やるではないか、あの小娘。 決めたぞ、奴は——」

「——遠坂に手を出すな！」

ギルガメツシユは自分の言葉を遮った士郎を鼻で笑う。

「フン、貴様なぞセイバーを迎える前の余興だ。 だがそこまで死にたいとは………その身をもつて真偽の違いを知るのがいい、贗作者！」

士郎はギルガメツシユが放つ武具を受けながら思う。

「アーチャーとの戦いをなんとなく思いださせる」と。

そう思いながらも士郎は抹消面からギルガメツシユの武具を弾き落とすのではなく、時には受け流し、時には躲すといった、芸術めいた動きを見せていて、闘いの場所はボロボロの柳洞寺の敷地内へと変わった。

士郎の動きがギルガメツシユは大層気に入ったらしく、彼がバテ始めていた士郎に宣言していた。

「存外に面白いぞ、贗作者！<sup>フエイカー</sup> 故に一分の休憩を挟んでやろう！ 光榮に思えよ？ この時代、退屈と思っていた矢先に貴様らの様な者達が我の前に現れようとはな！ フハハハハハ！」

士郎は荒い息を何とか深呼吸に切り替え、出来るだけ新鮮な酸素を取り込もうとする。

『いくら技術があつても、体が付いて来なければ意味がない』。

それは三月がこの前セイバーと初めて稽古を始めた頃感じていた事を士郎は今感じていた。第12話後半より

その間ギルガメッシュは面白そうに池の方を見ると、空にはぽつかりと穴のようなものが出来ていて、そこから池の中にあつたような泥が溢れていた。

「小僧、あれが何か分かるか？ 聖杯が汲む願いだ。今の人間の悪性そのものだ」

士郎がチラリと見ると先程見たものより更に大きな穴が空に出来上がり、冬木市の様々な場所から光の『魂』みたいなモノが飛来し、穴に入り、おぞましいほどの空気と共に『泥』が辺りに溢れ出ていた。

「『あらゆる願いを叶える願望機』。それは『全てのあらゆる苦しみから解放される』のではなく、『全ての苦しみを克服する為』にお前達は『聖杯』を作り上げた。平等も平和も幸福も同じ事、『肉体』と言う『皮』に囚われたお前達では永遠に満たされる事は無い。世界を革新する程の強い欲望など、人間の悪性において他に無い。そしてその手段は自滅となり、あの『聖杯』の在り方こそがこの時代に即した願望機だ」

ギルガメッシュの宣言した一分はとうに過ぎていたが、彼は気付かなかつたのか敢えて自分の言葉を士郎に言いたかつたのか、ただ喋っていた。

「だから喜べ、雑種。あとは時間の問題であるが故に我は本気にならん。本気になつ

た時点で我の敗北よ」

《奴ギルガメッシュはお前達に任せる》

凜から移動中に伝えられたアーチャーエミヤシロウの言い残した言葉が士郎の頭をよぎった。

「あの野郎、俺にどうしろと言うんだ?! 待てよ——」

その時、ギルガメッシュの『武器を放つ』戦い方をアーチャーがアインツベルン城でやっていたのを思いだし——

「——『トレース、オン!』」

士郎はギルガメッシュの周りにある空気の歪みから出ている武器を片っ端から『解析』し始める。

「ほう? 視界にある全てを見様見真似とは、つくづく面白い」

『憑依経験、共感終了! 工程完了! 全投影、待機!』

士郎の周りにギルガメッシュの周りにある武器と同じようなものが作り出され、彼は自身の体が軋むのを感じる。

魔力はあれど、体は人間ヒトのまま。アーチャーのように『英霊』ではない。

「(『だがそれがどうした?!』)」

「では採点だ、贋フェイカー作者」

ギルガメッシュと士郎が互いの武器を放ち、辺りに爆発が連打する。

「ほう？ ガラス細工にしてはよく持つではないか！ その猿真似、どこまで持つかな？ フハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

士郎の体が更に軋み、彼とギルガメッシュの「撃ち合い」を続行した。

その間の凜はと言うと、気持ちが悪くなる一方のその場所からさつさと『逃げ出した』と叫び続ける本能を『慎二を救い出す』という理性で押さえつけていた。

「気持ち悪いのよ！ このワカメみたいなウゾウゾとしたヤツ！ そうするのはアイツの髪の毛だけで十分よ！」

それは皮肉なのか、血肉で出来たワカメのようなモノが無数に生えていて、凜に近づいては離れるのをずっと繰り返していた。

凜が血肉の塊を登り（ちなみに感触は生の肉を掴む様な、ヌルつとした生々しいモノだった）、頂上に慎二を見つけた。

慎二の顔は苦しそうで、大量の汗を掻きながら、肉の中に半分埋まっていたような姿だった。

「（んのおー）」

凜が慎二のはみ出ていた腕を力づくに引つ張り、彼の体がズルリと出る。

所々皮膚の色が変化していて、赤く腫れていた。

『■■■■■■■■！』

その瞬間、お腹に響くような唸り声に近い何かが辺りを埋め尽くし、無数の手みいたな物が凜と慎二に近付いては何か怯える様に戸惑い、退く。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「ほとほと愚考よな！ 我に勝ち得ないと考え、『聖杯』だけでも取り外す判断は正しい

！』

ギルガメッシュはさつきと同じように心底面白そうに藻掻く士郎に喋りかける。

「だがあの男を『救う』とはな。それならば殺してしまえば良からう？ 聖杯を止めたいのであれば始末する事こそ確実の筈。 だと言うのにまだ『救おう』というその判断、まさに今の貴様ら雑種の具現よな」

『■■■■■■■■！』





「どうあっても『格』が欲しいわけね」

まるで先程の暴風に反応するかのように凧達の周りにこの『壁』が出来上がった。獲物を捕食する為に閉じたハエトリグサのように。

そしてその例えは凧も思いつき、彼女を少し焦らした。

「（こつちの魔力が尽きるまでの根競べ………という生易しいもんじゃないわね）」  
凧が息を浅くしながら考える。

これは別に焦りからの息遣いではなく、先程から空気が薄くなつていく為である。

本来、魔術師は無意識でも自身を守る為に魔力を常時体中に流し、外部からの干渉から身を守る。

それは勿論その年でかなりの天才である凧も同じだが、相手が『聖杯』ともなると意味がない。

「ハア………ハア………ハア………（不味いわね………このまま気を失ったりしたら………『聖杯』に二人とも取り込まれる……）」

凧は宝石を取り出し、壁に向かって放とうとして——

「『ガンド』！」

——止めて、逆に自分のワンアクション魔術の最大出力に宝石から自分の体に流れてくる魔力上乘せをしながら前へと飛んだ。

正確には凜がこじ開けた穴に向かって『強化』を施した体でジャンプした。

その外では今しがた追いついたセイバーは凜が息を切らせながら慎二と共に池岸に落ちて転ぶのを見てすぐに駆け寄って。

「リン！ ギルガメツシュは——?!」

『■■■■■■!』

「セイバー、先に『アレ』を壊して！」

セイバーは池の塊を見ると徐々に何かの形を模って行くのを見てすぐに宝具を撃つ用意に入った。

「『この灯りは星の希望。地を照らす命の証！ 見るが良い！』  
 〃<sup>エ</sup>約束<sup>ク</sup>された勝利<sup>リ</sup>の剣<sup>バ</sup>」

〃!!!」

セイバーから放たれた宝具が起動しつつある『聖杯』に直撃し、幻想的な景色が見えて、それはまるでセイバーの中での未練を彼女が断ち切る様な場面だった。

時はほんの少しだけ遡り、ギルガメツシュが先程取り出したこん棒をしまい、立ち上がろうとする士郎をボロボロの柳洞寺の屋根の上から見下ろしていた。

「どうした？ この我をどうにかするのではないのか？ 立て、雑種」

「言われ……………なくても！」

「ククク、しかし驚いたぞ。これでは話が違ふと言いたいところだが、それ以上に面白い。以前聞いた『正義の味方』や『誰も傷つかない世界』などの世迷言を吐くのなら吐き気が出て早々に貴様を葬っていたらどうよ」

「何……………を……………？」

「————いやなに。我にとつて『今の時代の人間』とは犠牲や損失がなくては生を謳歌出来ぬ、獣の名だ。『平等』という飾り事は闇を直視できぬ弱者の戯言、醜さを覆い隠すだけの言い訳にすぎん、と言う事だ」

これを聞いていた土郎は心の何処かで納得していた。

「腐つてもギルガメツシユは英霊だ」と。

確かに以前の自分の中は空っぽで、以前までの想いは「誰かを救う誰かの姿を見て真似ただけの借り物<sup>飾り物</sup>」だった。

誰もが平等に死んであの光景で、あの時誰一人救えなかつたらと思うと、「人間なんてそんなモノだ」と納得していたような気がする。

でも————

「————それは、俺の『正義』じゃない」

土郎が立ち上がるとギルガメツシユの顔がにやける。

「ん？ 出し惜しんだとはいえ、『乖離剣エア』の風圧に触れた筈だが——」

「——そんなに山ほど宝具を持っておいて、今更出し惜しむモノがあるのかよ」

「あれは覇者にのみ許されしモノだ。本来、貴様などの様な者に拝調する権利すら持たん」

士郎は立ち上がり、下りてきたギルガメッシュを見る。

「しかしまあ、そろそろ飽きてきた。早々に消し去るとしよう。貴様の様な、自らを犠牲にする者の行為など、ただの偽りに過ぎぬ」

「『偽善者』、か……………確かに、それは俺に当てはまっていた言葉なんだと思う」

《この身は『誰かの為にならなければ』と！ 強迫観念に突き動かされて来た！ 傲慢にも走り続けた！ だが所詮は『偽物』だ！ そんな『偽善』では何も救えん！ いや、元より何を救うべきかも定まらない！》

それは自分であつて、自分ではない者の言葉だつた。

「ん？」

士郎の様子が変わった事に眉毛がピクリと反応するギルガメッシュ。

「勘違いしていたんだ、俺は色々。そしてそれならば『無限の剣製』にも当てはまらない道理がない」

「……………さつきから何を——」

「『体は希望で出来ている！

血潮は血肉で心は流動、

幾度の戦場を共に超えて不敗』——」

士郎が詠唱し始め、ギルガメツシユが宝具を放つと士郎は先程みたいに迎撃するのではなく、アーチャーが使った『熾天覆う七つの円環』を展開した。

士郎は自分の体が更に軋み、頭痛に似た痛みを頭に感じるが詠唱は破棄せずただ続ける。

『——ただ一度の諦めもなく、ただ一度の慢心も無し。

担い手はここに、草原の丘で自身を鍛つ！

ならば我が生涯に意味はあり、この体は“無限の希望”で出来ていた！』

そこには、以前士郎がアーチャーとの対峙中に生死を彷徨っていた時に見た景色の延長があった。第32話前半より

違いがあるとすれば見渡す限りの草原に花畑、優しい陽光とそよ風に今まで数々の士郎が解析した武器が新品同然の状態で地面に刺さりながらもツタなどがそれらに絡まっていた。

そして最大の違いと言えば——

「ほう、固有結界とは——なッ?! 貴様、何故ここにいる?!」

「あら、驚く事は無いんじゃない?? 固有結界は心を形にするものじゃなかったっけ? なら、私がここに居ても良いじゃん?」

「三月……………なのかな?」

士郎の隣にはいつか見た髪の毛をバレッタで上げた動きやすいヘアースタイルとワンピースドレス姿の三月(?)が立っていた。

「ん、一応? 私は私であつても私じゃない……………かな? まあ、貴方の『心の中の私』って思えば良いかな?」

「そうか」

「あり得ん、こんな事は…………」

「ありや。お客さん、結構頭に来てらっしやる?」

ギルガメッシュは初めて「優越感」などと言つた見下したモノから「不快感」に近い何かを籠つた感情を乗せた言葉を吐く。

「断じてあり得んツツ!!」

「士郎!」

「ああ!」

ギルガメッシュが武具を放つ寸前に、士郎達の周りから同じ武具が飛び出て、ギルガメッシュの攻撃を相殺する。

「なッ?! 馬鹿な! 贋作如きが——?!」

「——なあ、一つ聞きたいんだが——?」

「——『偽物』と『本物』って何が違うのかしら?」

初めて驚愕の表情をするギルガメツシュに士郎と三月(?)が問いを掛けると、ギルガメツシュは明らかに不機嫌に顔をしかめる。

「何を——」

「——だってそうだろ——?」

「——『人の定義は所詮、多数決』。結局は多い方の………つまり『本物』と『偽物』、どちらなのかは個人の主観とその時点における多数派の観点に拠る」

「だから貴様らは何の事を——!!!」

「ここに在る全てが『本物』と思う人、手を挙げて。ハイ」

士郎と三月が手を挙げると同時に今度は士郎が笑みをあげながらギルガメツシュに問いを掛ける。

「と言う訳だ、英雄王。武器の貯蔵は充分か?」

「~~~~~!!! 貴様ら如きが! 思いつがるなよ!」

怒りを露わにするギルガメツシュに士郎と三月(?)が襲い掛かる。

ギルガメツシュが放つ武器を士郎と三月(?)が同じ武器を手に取りながら相殺して

いく。

「チツ！ 小癩な——！」

次第にギルガメツシュの苛つきを具現化したかのように、更に武器が放たれようとした時に、舞い上がっていた土煙の中から土郎と三月（？）が彼目掛けて飛び出して剣を振るう。

ギルガメツシュは近くの剣を取り、二人の一撃を受け止める。

「馬鹿な?! この我が、貴様らなんぞに——！」

「確かにお前は強い！ 並大抵のサーヴァントが相手ならお前は確かに最強さ——！」

「でもね、『最強』だからと言って『最優』とは限らないわ——！」

「だが今のお前は『王』であって『戦士』じゃない——！」

「ッ！ 戯言を——！」

「——それに家臣もいない、独りの『王』がなんぼのもんじゃ——!!!」

さつきまでギリギリとした剣同士の齒軋りが次第に何かがヒビ割れて行く音へと変わり——



——ギルガメツシュ達が持っていた剣が割れる。

「おのれ！」

武器が割れる。

「おのれ！」

更に割れて行く。割れる、割れる、割れる、割れる、割れる、割れる。

「おのれ！おのれ！おのれ！おのれええええい！！」

割れて、割れて、割れて、割れて、壊れていく武器達と土郎の軋む体と彼の隣で戦う少女。

ギルガメツシュの苛立ちが次第に激怒へと変わり、これと一緒に土郎は自身の関節、筋肉と脳が悲鳴を上げるのを無理矢理に無視しながらただ眼前の敵を倒す事に集中する。

そして——

「なっ?!」

——ギルガメツシュの方の武器が壊れていく。

これを見たギルガメツシュは思わずヘラクレスを葬ったような最上級の武器を自分

近くに飛ばし、士郎達を無理やり自分から引きはがした事にギルガメツシユは彼らと自分自身にブチ切れた。

「貴様らに……本気を出すとは何たる屈辱！ 死ねえええい！」

今までにない数の武器をギルガメツシユが放ち、士郎達の周りの武器の追撃が追いつかなくなる。

「士郎！」

「行くぞ、三月！」

二人は武器を両手に取り、撃ち漏れる武器を薙ぎ払い、背中を互いに預ける二人の姿にギルガメツシユはさらに数を増やし、自分の在庫の出し惜しみをそこでやめた。

大気の歪みの数、ざっと数百。

それらが全て不死殺しや竜殺しの類の、ギルガメツシユの保有する最大級の武器達があられるように、一斉に士郎達に飛来して大爆発が起きる。

だが――

「――馬鹿な?! こんな事が――！」

――ギルガメツシユは恨めしそうに上を見ると、無数の花卉が舞う中と共に、三月(?)を抱えながら上へとジャンプした士郎達の姿があった。

あの一瞬の中、三月(?)が『熾天覆う七つの円環』を展開し士郎が彼女を抱え上空

へと離脱した。

その二人の姿は何処か痛々しかった。

少女の方は顔色と肌が更に青白く透き通るかのように、士郎の方は――

――髪の毛の色と肌に変質し始めていた。

赤がかかった髪の毛に白と灰色が混じり、皮膚は所々火傷したかのように色が濃くなっていた。

「うおおおおお!!!!」

ギルガメツシュが宝具を撃ち始め、士郎は三月の手を取り、二人の空いた手には翼をモチーフにした双剣が一本ずつ現れ、二人はギルガメツシュの武器達を払い落としながら彼へと落下する。

「……………チィー！」

最後の最後まで躊躇っていたギルガメツシュはついに『乖離剣エア』の柄を手に取り、三月（？）は着地した瞬間に士郎を手放し、彼の背中を押しした。

「ギルガメツシユウウウウウウ」

士郎はギルガメツシユが取り出し始めた『乖離剣エア』を全力で斬りつけ、ギルガメツシユの腕はミチミチと生臭い音を立てながら肘の先から強引に引き千切られる。

「贗作者フェイクなんぞにいいいい?!

———「終わりだあああああ!」

今まさに士郎が返しの刃で距離を取ろうとするギルガメツシユの胴体を真つ二つにするところで不穏な音が彼の耳朵に響く。

ブツリ。

「———あ」

瞬く間に士郎の全身から力が抜けて、彼は地面に倒れ、辺りは元にいた柳洞寺の場へと戻っていた。

時は丁度、セイバーが宝具を聖杯に直撃させた直後だった。

「な……………あ……………が……………? (な、何だ? どうなったんだ?)」  
混乱しながら倒れている士郎を距離を取ったギルガメツシユが息を切らせながら睨む。

士郎はまだ気付いていないが、単純に薬の治癒力が切れて、負担が再生より上回っただけだった。

そして彼が未だに意識があるのはそれ程彼が高ぶっていた上に『アヴァロン』が体の痛みなどを気を失う程の前に押し止めていただけ。

「グッ……………」

それでも立ち上がろうと士郎はして、自分の体に鞭を打ち、更に悲鳴を上げる体を無理やり動かした。

「貴様も化け物だったとはな、満足して死ね——」

「ゴオオオオオオオオ！」

ギルガメッシュがトドメを刺そうとした瞬間、嵐に似た風が吹きまわり——

——士郎を取り込もうとした。

「ぐあああああああ?!」

「フハハハハハ！ なんともまあ、傑作よな！ 『聖杯』が我より貴様を取り込もうとするとはな！ 人間の悪性そのものに取り込まれて死ね！」

「ギ……………ルガ……………メッシュウウウウウ!!」

士郎は踏ん張り、何とか吸い込まれるのを抗おうとするが肝に体はほとんど動かなく

なり、あと数分もすれば『アヴァロン』で回復して逃げ切れたであろう『穴』に引きずられ、逃げていくギルガメツシュの名を叫びながら取り込まれた。

ギルガメツシュは顔をしかめながら円蔵山の中の森をヨロヨロと歩き、血がボタボタと地面に落ちて行つた。

別に彼は『痛み』から顔をしかめていなかった。

「何たる醜態！……この我が！……あんな……あんな奴を見抜けぬとは！」  
それは今まで味わつた事の無い屈辱に対しての自己嫌悪に近かつた。

「だが……まあいい。後はアレを回収して事の成り行きを——ツ?!」  
ギルガメツシュは目の前のモノ歩みを止める。

「貴様………よもや?!」

その顔は驚愕だつた。

そして目の前には——

グウ~~~~~

お腹の音を盛大に鳴らせながら立つていた三月がいた。

ただしその少女の顔に表情や感情は全く無く、その光の無い眼はただ『虚無』を映し、

かつてのイリヤが本能的に『恐怖』を感じさせていた眼だった。第10話より

「お な か す い た」

「貴様、『天の鎖』までも——?!」

バリツ!

バキツ!

ポリツ!

……………ゴクンツ。

「ゴ チ ソ ウ サ マ デ シ タ」

肉と骨が潰れる音の後に三月はフラフラくっとおぼつかない足つきでその場から消え、ギルガメツシユがいた場所には何も無かった。

【告。

『ギルガメッシュ』を入手シマシタ】



## 第35話 正義の味方、Retry

セイバー運営、遠坂凜、間桐慎二 視点

「ぐおおおおおおお！ 吸い込まれてたまるかあああああああ！」

士郎は文字道理、地べたに這いつくばるようになして『聖杯の穴』に抗う。

「ここまで来て、これは無いだろうがああああ！」

「衛宮君、そのまま動かないで！」

「ツ?!」

突然凜の声が聞こえると士郎はそのままジリジリ動いていたのをピタリと止めると地面が動いて士郎の体が『穴』から遠ざかる。

「(これは、蟻?)」

正確には地面自体が動いているのではなく、地面から湧き出た様々の種類の蟻達が一斉に士郎の体を支え上げて、動く歩道のように一つの群れとして行動していた。

「今よ、セイバー！」

『約束された勝利の剣』!!!』

真名解放無しでの宝具が弱まった『穴』に直撃する。

『■■■■■■!』

以前より聞いた地鳴りのような響きが弱弱しくなつて行き、渦巻きじみた吸引力も次第に弱まつていく。

辺りが段々と静まり返り、士郎にセイバーと慎二を背負つた凜が彼へと駆け寄つた。

「シロウー!」

「あいででででで! セ、セイバー……出来ればもうちょっと寝かしてくれ。 体中、筋肉

痛みたいに痛いんだ」

「衛宮君、そんな事よりその……髪の色と皮膚の色——」

凜が注目したように、士郎の髪の毛は部分的に白く変わり、肌も所々昔火傷を負つたかのように肌黒くなつていた。

それは、アーチャーの様な——

「——それより辺りを警戒してくれ遠坂。 ギルガメッシュを逃がした」

「……………ハッ! 何て体たらくだよ、衛宮?」

「慎二……………なのか?」

セイバーに体を起こさせられた士郎は慎二を見て驚く。

彼の青色だった髪の毛が一面真っ白になっていた。

「間桐君、貴方も人の事を言えないわ。いくら魔術回路が使えるようになったからって衛宮君を助けようとして貴方自身が死んだら元も子もないじゃない!」

「……………そうだな、遠坂の言う通りだ」

凜の言葉に珍しく慎二は弱弱しく同意し、これによつて凜はさらにイライラする。

別にこれは慎二が本当にそう思っている訳ではなく、人生初の魔術行使で身も精神もへトへトだったからである。

『魔路昏睡』。これはかつてキャスターが慎二に言っていた病名で、別にその場の嘘ではなかった。 第13話より

そして幸か不幸か、『聖杯の器』にされかけた慎二の眠っていた魔術回路は『器』とする為に強引に起こされた。

ただこれは前に士郎が久しぶりに『投影』した時みたいに体が満足に動かない状態で、しかも回路は起きたばかりなのに士郎の身が危険と見れば即座に魔術を発動して、地面にいる蟻達を操り、彼を助けようとした。

「まったく、何でも自分も第一に考えない奴らが私の周りにわんさか居るのよ、全くも~~~~~!!!」

「すまない、遠坂」

「ハモるな！」

「リン、彼達を頼めますか？ 私は三月を——」

「——兄さん！」

三月の声が聞こえ、士郎達が振り返ると駆け寄ってくるボロボロの三月が見えた。

「三月！」

「よかった、無事だったのね。でもよくあの金ピカから逃げたわね？」

「まあ刺された後は何か興味なくなつたみたいだから」

「ちよ?! 大丈夫なのか?!」

「へ? うん——」

三月がボロボロのパーカーと上着をめぐつて露わになつた右の脇腹を指す。

「ほらね? 跡も何も残つて——つてどうしたの男子達?」

士郎と慎二は顔を真っ赤にしながら逸らしていた。

「三月……………今更だけどアンタはマイペースだけじゃなくて筋金入りの天然ね」

「へ? ………………あ、そっか! 今はキャミソールしてないんだっけ。いや、まさ

か風呂上りに拉致されるとは思わなかつたからさ」

「……………」

あつげらかんとする三月に黙り込むグループ。

「コホン……………け、けど体は本当に大丈夫なのか？ 服が——」

「ん、何か刺された後、次に気が付いたら地面に寝ころんでいたのよね。なんかポイ捨てされたような感じ？」

「……………もしかするとギルガメッシュは『同盟者』の方達に戻ったかもしねえんね」  
「だとすると、早く衛宮邸に戻るわよ。こつちが失敗した以上、イリヤが次に狙われるかもしれない」

「な?!」

「え？ イーちゃんが?! って、どういう事？」

「動きながら説明するわ、セイバーは衛宮君を——」

「あ、私が背負うわ。もし何かあったらセイバーが対応出来るように」

「……………良いわ、でも何かあったら私のそばに来る事。いいわね？」

「うん」

凜は渋々と士郎を三月に背負う方針を——

「お、おい！ 何勝手に話を——わわわ！」

士郎は自分より小柄な三月に背負われるのに抵抗を感じ、立とうとするが倒れ始める。

「兄さん！／シロウ！」

そして慌てて彼を支える三月とセイバーの姿に慎二は恨めしそうな独り言を零す。  
「衛宮ツツツツ！」

「気持ちはこちらからなくてもないけど、私としては別のあなたをここに置いて行つても良いのよ。」

「ヒ」

ニツコリと、静かに起こる凜に対して慎二は小さな声（？）を出す。

そうして士郎達は一日ぶりの衛宮邸へと向かいながら、士郎達は情報を共有する。

「ありがとうね兄さん、私たちの為に」

「ハ！ こんなお人好しにそんな言葉、勿体な——！」

「——ほら、慎二君も照れ隠しの何時もの態度も出ているし」

「んな?!」

「ああ、俺もこれは知っている。あとすまないな慎二。お前、本当はこつちに来た

かっただらろ？」

「ちやぐー！」

「?????」

ニマニマとしながら慎二をからかう士郎に言葉を噛む慎二、そして？マークをただ出

す三月に呆れる凜を見たセイバーは微笑んでいた。

だが――

「皆、気を付けて」

「遠坂さん？」

「……」

衛宮邸にまもなく着く距離の道中でセイバーが黙って私服から甲冑姿に戻る。

「魔力の残滓………セイバー、先行してくれるかしら？」

「リン、結界の様子は？」

「機能してはいないわね、それに………いえ、先ずは見ましょう」

そして士郎達は緊張しながら衛宮邸に――

「な、何だこれ？」

――そこは戦場か何かのように荒らされて、塀が何故まだ立っていたのかが不思議

議なほどの様子だった。

「イリヤ！ セラ！」

「桜！ ライダー！ 返事をしてくれ！」

「ちよつと二人とも！」

士郎を背負っていた三月が凜の静止の声を無視して中へと突入する。

至る所には大きな穴や何が引つ掻いた後や動かぬ糸状の鳥が死骸みたいに転がって

いた。

「皆！」

三月が足を使つて居間に入ると――

「セ……………ラ？」

――左の脇腹をほとんど抉れ、体が壁に寄り掛かりながら血だまりの中で静かに目を閉じたセラがいた。

「死んで……………いるのか？」

「兄さん、立てる？」

「な、何とく――いで」

三月が士郎を下ろし、立とうとした士郎は尻餅をつく。

「少しの間我慢して、彼女を診る」

後から来たセイバー達が中の惨状を見ている間、三月はセラの傷口などを診ていく。

「……………（凄く抉り方、まるで無理矢理身体部分を千切った――）――あちやばがはえはあああああああ?!」

そこでセラの左目が見開き、三月は言語にならない叫びをあげる。

……………



.....

.....

.....

.....

.....

.....

餓死状態のセラの処置を凧と三月が行っている間、セイバーは少しでも回復出来るように彼女らと士郎達の警戒をする。

結界がない衛宮邸は以前より遙かに敵からの襲撃に弱くなった今、本心ではセイバーと凧は別の拠点に移動したかったのだがセラの怪我があまりに酷く、すぐにでも治療しなければ何時死んでもおかしくない状態だった。

そして何とかセラの怪我を治療し終わった頃には士郎と慎二も自分で立って歩けるほど回復していて、彼女が衛宮邸で何が起きたのか説明し始めるが、極端に言うところ――

桜とライダーが不意打ちをかけてイリヤを連れ去った。

イリヤ 視点

時は丁度士郎とギルガメツシユの戦いが終わろうとする時、イリヤは痛みに意識が気付いた。

「う……」

痛い。ただひたすらに痛い。

どこがとかではなく、全身余すところなく、ただ『痛い』。

それをイリヤが自覚したのは自分が目を覚ましたという事実よりも前だった。

「な、に……が——」

——起きたの？

そう言おうとして、体の苦痛より酷い頭痛に遮断される。

身を起こそうと身動く。が、それすらも様々な痛みの前に断念せざるを得ない。

とにかく、『自分』という構成物質全てが痛めつけるべく動いているようにイリヤは感じた。

別に痛み慣れている訳ではない。寧ろただ体も心も小さく丸めて、小さな頃のように目を閉じて精神の中に閉じこもってしまえばいい。そうすれば、自分は苦痛を忘れられなくとも、苦痛はその内に自分を忘れて去って行く。一度か二度ふと、「消えていった苦痛はどこに行くのだろう？」と考えた事もある。

けどあの日、自分がアインツベルンの最高傑作と知った日からはそんな子供じみた言動はパツタリとやめて生きて来た。

それは、来るべき聖杯——

「———そうだわ、今は聖杯戦争中。こんな風にマゴマゴしている場合じゃ……………ない)」

『聖杯戦争』という、文字通り自分の命を使い切る大イベントの真つ最中に少しずつ、思考力が戻って来たのは頭痛が引いてきたからでもある。

生憎と全身の痛みはしつかり残っていてとても動かす気になれなかったが。

「(そうだわ。確かミーちゃん部屋のあまりに殺風景だからセラが苗を買って来て、士郎達が帰って来た時の為に晩御飯をご馳走の用意している間に、セラが———)」

———イリヤは思い返していた。自分は士郎の部屋を漁って……………ではな

く、チエツク……………ではなく、取り敢えず彼の部屋をジロジロと見ていた。

その時に居間の方から大きく、派手な音と共にイリヤはほぼ反射的に自分の周りに数匹の『シユトルヒリツター』を展開しながら居間の方へ走り、そこにいたのは満身創痍のセラと、何処かぎごちない動きをする桜だった。

そこでイリヤの記憶は途切れ、最後に見た紫色の髪の毛で恐らくはライダーに背後を取られ気絶させられたのだろうと推測し、イリヤは目を何とか開ける。

彼女の視界に映る光景は、一言で言えば「殺風景」。廃墟のような薄汚さはなく、人が頻繁に利用するような生活感もあまりなかった。ただあまり使われていない聖堂、というだけにイリヤはその隅にある台の上にあった。

「(ここは……………協会? いえ、それよりも『聖杯』が無くなった私を生かす理由なんて無——いえ、もし誰かが私の魔術回路が『聖杯』とのセットになっていると知っていれば……………マズイわ。)……………ッ!」

イリヤは肘を叩き付けるようにして、寝返る事に成功させる。

そして広がる視界に体が冷たくなっていくような、まさに「肝を冷やした」状態だった。

それは別にカソツクを着た男の所為でもなかった、何せ男は寝返りをしたイリヤに身じろぎ一つしていなかったので気付いたとも思えなかった。

イリヤが「肝を冷やした」のはその男の手に持っていた黄金の杯を見たからだ。

それを見た瞬間、イリヤの胸が痛くなり、心臓が抉られた記憶が蘇りそうになったが、聞こえて来た声によつてそれは遮られた。

『おおおおおお！ 正に“聖杯”！ 200有余年、ようやくここに！』

それはイリヤが聞いた事の無い声だった。

そしてカソツクを着ている男から発されたものでもなかった。

イリヤの体の痛みはかなり引いていたので体を動かし、台の上になんとか座った。

『綺麗だのう………儂にそれを使わせてくれ！ それは儂の——!!!』

「——— 触れたければ触れば良い、間桐のご老体。だがその時が貴方の最後だ。

と、ご理解いただけると」

『ぬ、ぐう………相変わらず生意気な口を………』

『間桐のご老体』。 そう聞いたイリヤはこの声も持ち主が以前に資料を見た『間桐臓硯』だと繋がった。

それは少し注意すれば彼の言葉の他に小さな何かがうごめくような音。 そして床には無数の蟲が群れを成していた。

それが魔術に関するものだとしても、あまりにも「悪趣味」などというレベルを超越していてもっと深い澱の、人が決して触れてはいけない領域に達していた。

「……………それが『聖杯』なのね」

イリヤの声にカソックを着た男が初めて彼女が起き上がったのを認識する。

「これはこれは、目を覚ましたかアインツベルンの申し子よ」

暗く感情の見えない瞳がイリヤを見る。

「あなたが言峰綺礼かしら？」

「如何にも」

「……………まさか聖堂協会の管理者がグルだったとはね、盲点だったわ」

「別に何もおかしくはない。人間は見たいものだけを見て、他は見て見ぬ振りをする。

さて、君が目覚めるのは少々予定外だが……………はて、どうしたものか」

どうでも良い事を、どうでもよさげに悩んでいるような調子で、カソックの男――

――言峰綺礼は顎に手を当てた。

その仕草すらも、どうでも良さそうな感じで。

「やめておきなさい。今の『聖杯』に異常があるわ。それは使うべきではないもの

よ」

『それはもうお前さんの気にする事では無いのじゃよ、お嬢さん』

『キキキッ！』

小さな鳴き声を発した蟲達にイリヤの体がぞわりと震え、蟲の群れがイリヤの乗って

いる台の周りを囲む。

『この小僧は用済みのお主を逃がすつもりであつたようだが……しかし儂としてはまだ少々都合が悪くての、丁度腹を空かせておつたのじや。　と言う訳でじや。アインツベルンのお嬢さんや、申し訳ないんじやが——』

——儂の餌になつておくれ』

『ギギギギッ!』

けたたましいほどの蟲達の鳴き声が辺りに響くと同時にイリヤは魔術を行使——

——出来なかつた。

「え、あれ、どうして——?」

「——魔力を間桐の娘同様に吸い取れたからね、当分の間魔術は行使が出来ない」  
綺礼の言葉にイリヤはハツとしたように気付く。

協会の部屋の端にゲツソリとして気を失い、生気がなく、髪の毛を真っ白にした桜の姿に。

「ヒッ?!」

「ギギギギギギギギツ!!!」

イリヤの恐怖に反応するかのようにまた蟲達が鳴く。全ての虫が一斉に、実に嬉しそうに鳴きだした。

「あ……………あ……………あああ——」

イリヤは思わず悲鳴が漏れそうになるのを止めていた。醜悪な蟲達がぞわぞわと迫ってくる中で逃げようと体に入力するが、上手く動かなかつた。

魔力の枯渇に、本能的に感じる恐怖にすぐみ上がつて、動かぬ体。

「なあに、案ずる事は無い。残りの世話は、『聖杯』も含めて、全て儂が請け負つてやるからのう。ただ少しばかり……………そうさな、2、3時間ほどじやろうか? 女として



生まれてきた事を後悔し続ける、その程度よ。ああ、皮も衛宮の者共にも奇襲を仕掛けるのに絶好の素材よのう。うむ、それも有効活用してやろうではないか。クカカカカカカカ——!!!」

止まらぬ老人の声と彼の笑い声。

歯がガチガチと鳴るイリヤ。

命乞いをしなかったのは、上手く声を出せなかったから。

緊張と恐怖がどんな言葉の発声もさせなかったというだけ。

出来たのであれば、きつと大きな絶叫を上げて泣きじやくっていたであろう。

『ぬっ? こ奴もか、小癩な!』

蟲達の進軍が突然止まり、イリヤは一瞬誰かが助けに来たのかと思いい周りを見る。

がそのような事は無く、ただポケットの中から魔力の流れを感じた。

「(これは……:ミーちゃんの——)」

それは人生初の『家族』からの物的プレゼント。

もちろんそれ以前にコツソリと土郎に会い、タイ焼きなど奢って貰ったが残る「モノ」を受け取ったのは三月が初めてだったのだ。

その様なモノをイリヤは肌身離さずと持っていた。

そしてそれが臓硯を一時的にだが止めていた。

だがそれも束の間、魔術礼装は魔力がなければ発動しない。  
トランプカードの箱状にそんなに魔力が続く訳がない。

そもそもそれは持ち主が自身の魔力を流すのを前提に作られていた試作品、もう間もなく魔力が切れるのをイリヤは感じ、自分の体を抱きしめて目を閉じた。

「(バーサーカー———)」

イリヤは久しぶりに内心、助けを求めた。

最後にしたのは、あの雪の日にドイツのアインツベルン城の最終試験として身一つで山の中に放り出され、バーサーカーが自らの意思で助けにくれた時。

だがその頼みの綱の彼はもういない。

「(誰か———!)」

『よおし、その鬱陶しい結界も弱まって来たのう。クカカカ!』

「誰か、助けて! ミーちゃん! お兄ちゃん!」

イリヤは涙を流し、声を出しながらただひたすら祈った。

「誰か助けて」と。

家族の縁でどうか自分の祈りが三月や土郎に通じる事を。

祈っている自分がそれらは届かないのも、聞かれないのも内心では理解しながらもただ祈った。

もし、こんな事を聞こえて、颯爽と登場するならば——

——それは正しく『正義の味方』でないだろうか？

「やれやれ。私の言葉でないが、敢えて借りよう。——」

協会の屋根が壊れるとほぼ同時に無数の武器がイリヤの周りに落ち、蟲達を吹き飛ばす。

「——汚物は正しく消毒すべきモノだとな！」

目を開けて、上からくる声の方をイリヤが見る。

そこには月と星空をバックに、ボロボロになりながらも笑う正義の味方がいた。

## 第36話 人外と破綻者

イリヤ、アーチャー 視点

緊張と恐怖が希望を見た瞬間、イリヤは叫んだ。

「アーチャー!!!」

『ぬうううう! またも貴様か?!』

そしてアーチャーは部屋の端にいた桜を担ぎ、イリヤの方へと飛び移る。  
屋根のアーチャーが姿を消しながら。

『な?! 貴様、いつの間に?!』

「私は別に仮面もタキシードも着けていないからな、律義に特撮などの『正義の味方』みたいに何も正面切つての行動する通りもない」

「ほう、『幻術』を使うアーチャーとは、何と多才なことだ」

もし三月がここに居ればツツコンでいただろう。

「せめて薔薇系の剣を投げて！」とか。

もしくは「古いよ?! ネタ古いよ?!」と言った所か？

「アーチャー、アーチャー、アーチャー！」

イリヤはヒシツとアーチャーを抱きながら安心から涙を流し、彼は優しく震える彼女の頭を撫でる。

「黒幕である貴様たちにそのように言葉をかけられてもな。それに私を褒めてもせいぜいが矢が飛び出るだけだぞ？ 貴様の顔面にな、言峰綺礼。（間に合って………良かった）」

「フフ、怖い怖い」

声も表情も何一つ変わらない綺礼と違つて臓硯は苛立ちと怒りを全く隠さなかった、この不可解な状況に。

『しかし貴様のその状態、何時消えてもおかしくはないのにどうやって——?!』

「何、オレに活を入れたどこぞのバカがいたモノだね。『そいつには絶対に負けられない』と思っただけさ。待たせたね、イリヤ。大丈夫か？」

「ツ!!! うん! うんツ!!!」

「良かった。（今度こそ、オレは——!）」

「——ランサーはどうした？」

「貴様の番犬なら首輪を外した瞬間、何処かへ飛んで行つたさ。余程貴様の事が嫌い  
だつたらしいな」

『何と使えぬ英霊じゃ！ いや、それ以前に貴様、どうやって令呪の契約を解除した?!  
キャスターでもない貴様が！ いや、そもそも何故儂らの事を——?!』

「——知れた事。強いて言うのであれば影でこそそこそと謀りを進められると背中  
がムズムズする性質でね。(伊達に『守護者』をやつていなかつたという事か。まさか  
それに感謝する日が来るとはな)」

アーチャーのそれはある種の『直感』に近かつた。『守護者』である彼はその地の異  
変に敏感で、凜と冬木の町の見回りなどをしてる間に激しい違和感を持ち始めた。

それは「自分がこの街を知っている」というものだった。

以前の機械化したアーチャーはただただ延々と『守護者』の役割を果たし、今回もそ  
うだと思つていた。

だが時が進むごとにつれ、彼はその街に見覚えが湧き、少しか灰色の記憶が蘇つた。  
自分がかつて生前に育つた町と気付いた。

更に凜が就寝した夜や彼女が学園に登校に同行する度に様々な記憶が蘇つた。

それは断片的にはあるが、第五次聖杯戦争の中で自分の『正義の味方像』が固定さ  
れた出来事でもあつた。

故に彼は当初の目的を果たそうとした、「自分エミヤシロウという存在を消す為衛宮士郎に自分を殺す」。  
だがここには明確に自分とは違う存在がいた。

それは「衛宮三月」と言う妹だった。

故に彼は様子を見る事にし、事の成り行きを見守っていた。

そして自分が知っている出来事とはあまりにも色々なモノがかけ離れていた。

「マトウシンジ」があまり捻くれて諦めていなく、未だに義妹思いで、腐らずに『錬金術』に励んで、サクラに暴力を必要以上に振るっていなかった。

「マトウサクラ」が兄の事をあまり苦手とせず、彼の事をちゃんと見て、自己としての芯が強かった。

「トオサカリン」の考えが更に柔軟で周りを意識していて、他者や親族のサクラとの「魔術師と一般人」の壁と「天才と凡人」の壁を自らの手で壊し、他の者と共に怖からず歩もうとしていた。

「イリヤスフィール」は「衛宮切嗣」の行動をある程度理解し、エミヤの者を敵視していないどころか友好的で、『聖杯』の異常を知った途端に協力的でアインツベルンの悲願である筈の『聖杯を完成させる』を蹴ってまで聖杯戦争を中断した。

「エミヤシロウ」は「独り」で生きてきたのでは無く、彼を必要とした存在が幼少から近くにいて「周りの人達」の大事さに無意識にだが気付き始め、生きようとしていた。

それらは全て、アーチャーが全てを失った時に初めて手遅れながらも気付いたものばかりだった。

以上の等々のあらゆる面で違いがあり、「本当に自分の記憶は正しいのか？」とアーチャーが思ったほどだった。

そして最後にそれらの出来事の中には全くの未知の存在が少なからず関与していた。

「エミヤミツキ」。 「エミヤシロウ」の義妹。

その少女はどこかイリヤを思わせながらも人外でありながら「エミヤシロウ」よりも人間に近い部分があり、周りの者の本質を見抜く直感か洞察力を持ちそれに対応し、物事を円滑に進めようと絶えぬ努力家。

不可解で不思議な存在の塊だった。

だがアーチャーは気付く。

このままではエミヤシロウは自分の二の舞になるかもしれないと。

故にアーチャーは大雑把な計画と方針を練り、機会を待った。

もし彼が未だに自分の間違いないなどに気付かなければ自分が彼を殺し、当初の目的は達成し、後は自分が事を解決すればいい。

そして「エミヤシロウ」が自分なりの答えを得て、自分とは違う道を歩むのならギル



ガメツシユを彼達に任せ、自分は別の事を解決する。

まさにとつちに転がってもいい、合理的な方針。

まあ、まさか素手でエミヤシロウに殴り倒されるとアーチャーは夢にも思っていなかったし、まさかサクラがこのタイミングで臓硯に操られるとはアーチャーにも予想外だった。

まだまだアーチャーの思っていた事などは数々あるが、今は現在の出来事へと戻るとしよう。

『ふん、だがまあ良い。貴様のその体は死にたい、どこまで持つか見ものよな!』

ここでアーチャーの異変にイリヤが気付く。

「アーチャー、あなた魔力が——!」

アーチャーがまたイリヤを撫でて、彼女に向きながら少年の笑顔になりながら優しく声をかける。

「何とかなる、絶対大丈夫だからさ」

その笑顔はイリヤにとって初めて見る顔ではなかった。

だがあり得なかった。

まさかのまさかで先程自分の助けを呼ぶ声を通じたとは。

「……………シロウ……………なの?」

「ツ！（……………まいったな、つい昔の自分になりかけていた。だがまあ……………良いか。）少し荒事になるけどいいか、イリヤ？」

「……………うん！」

笑顔で英霊エミヤに答えるイリヤ。

「茶番はそれで終わりかね？」

綺礼へと視線を戻すアーチャー、そして未だに続いている三月特製の魔術礼装の結界に阻まれている臓硯。

「強がっても無駄だぞ、言峰綺礼に間桐臓硯。確かに私は死にかけだが腐ってもサーヴァント。老いた代行者と衰えた妖物に遅れは取らん」

『おのれええい！ あと少しで悲願が達成出来るというのに、なぜ今になって——』

「——フム、やはりあれが『聖杯』か。では消し飛ばすでしょう」

「早く壊してアーチャー！ アレは起動させちやだめよ！」

「わかつている、イリヤ。だが目的をここで聞いた方がいい。直感がね、もしここで彼らを闇雲に滅ぼせば最悪の状態になると言っているのだ」

「——成程、確かに貴様を相手にするのが私達であれば敗北は必須。『守護者』であるならば尚更の事」

『何?! こ奴が例の『守護者』じゃと?!』

「ぬ? (どうしてだ? 何故この二人が『守護者』私の事を知っている?)」

綺礼が初めてアーチャーの反応に対して笑みを浮かべ、イリヤとアーチャー二人がぞつと体を震わせた。

彼の笑った顔に、ガラス玉に色を塗っただけのような不出来な眼球が明らかに異常だったのだ。

「フ、アーチャーよ。君は『神』という存在を信じているかね?」

「何?」

質問の意図が分からない、と首を傾げるアーチャー。

確かにここは教会で目の前の男は神父。

だがこんな局面で彼は臆視のように「なぜここが分かった」や逃走の為に時間稼ぎをしているようにも見えなかったことにアーチャーは戸惑った。

「何故『今』、そのような質問を?」

「答えないならばそれでいい。それまでの話だ」

とりつく島もなく綺礼は会話を終わらせ、親指で『聖杯』を撫でる。

「……………私が敢えて答えてやるとしたら、『そんなモノはどうでも良い』というだろう」

「……………ク……………ククク……………クククククク」

アーチャーとイリヤ、そして臓硯までもが一瞬目を見開き、綺礼はその表情を納める事もできずに笑い出す。

何故なら彼は笑っているはずだと言うのに憎悪、嫌悪、害意、絶望などと言った、あらゆるもので声が染まっていた。

「なんと………なんと、下らない。下らなくつまらない答えだ」

それは実に愉快そうに笑う綺礼で――

――あまりにも異質だった。

「もつともだ、もつとも過ぎる。ああ、私にも未練というものがかつてあったのだ。

しかし、感謝しよう。普通の反応を示してくれて。そうか。私は普通だったのか。

ククククククククク

「何がおかしい、言峰綺礼？」

「いや何、私も貴様と同じだったという事だ。だが我が主に私が会ったときは貴様と

同じ答えをしたというだけだ。

感謝しよう。

ククククククククク

綺礼が言い終わると彼の顔は口元を僅かにつり上げて、笑みを浮かべていて、不気味なほどに静謐な雰囲気へと変化していた。

もし事が事でなければ、それは「聖人」と言っても過言ではなかった。

その「神」が「悪魔」かどうかは別として。

「貴方は、何を言っているの？」

イリヤは言いようのない悪寒を振り払うかのように強めに言葉を放った。

「やめろ、イリヤ。今の彼を分かつとするとするな。彼は既に理解される事を求めている。前々から思っていたが、今度こそハッキリ言おうこのとち狂った変態。オレと貴様は違う」

それは本来、とある出来事で言峰綺礼が衛宮士郎は「自分と似ている」と言った意趣返しのようなだった。

「さて、喋るのはここまでにしよう。吐いてもらうぞ、お前達の事をー」

「ある程度魔力を確保し、聖杯の疑似降誕。それを利用して、残っているサーヴァントを殲滅し、真に聖杯を確保する。それが少なくともその間桐臓硯の目的だ」

「『なっ?!』」

不意に世間話を投げかけるような何気ない口調で綺礼から回答が帰ってきて、そのあまりの気軽さにアーチャー、イリヤ、そして臓硯すらも啞然として、綺礼以外誰もが思

考を一瞬止めたように固まった。

だが様々な場所や人を見てきたアーチャーは正気に戻り、人外である筈の臓硯より生身の綺札を警戒した。

彼はここまでの破綻者ではなかった筈。以前からは得体の知れない男だったが更に拍車がかかり、今は臓硯よりも警戒していた。

「……………何のつもりだ、それは？」

「お前の問いに答えた。それだけだが？」

『それを嘘だと思うのも、欺くためだと思うのも、すべてそちらの勝手だ。それ以上もそれ以下も存在しない』。綺札の言葉の続きをアーチャー達にはそう聞こえた。

そう言わんばかりの態度であり、確かに綺札からはそれ以外の意図が何も感じられなかった。

『貴様！ 裏切るつもりか?!』

「裏切る?」

綺札が返したのはただの復唱であった。

言っている意味が本当に分からないが故の、ただの聞き返し。

「おかしな事を言う。もうお忘れになりましたか？ 最初に『裏切り』を働いたのは

間桐のご老体、貴方でしょう?」

「まさか、ゾウケンがキレイを利用していたつもりが、実は反対だった？ 分からない……………」

「（この男、かつての私と似ている。だが私と違い、真に『諦め』そのものだ）」  
「さて——」

綺礼はポケットの中から時計を出して時間を確認すると、杯はかかげたまま右腕の袖をたくし上げる。

「令呪をもって『アヴェンジャー』に命ず。 顕現せよ」

『おお！ そ、その手があつたとは！』

綺麗な手に持っていた杯からドブリと『泥』が溢れる。それを直視したイリヤは、思わず吐きそうになり、両手を素早くアーチャーの胴体から離し、自分の口を覆った。

「（令呪を使ったという事は、アレはサーヴァントの筈。でも何だ、この『違う！』と叫んでいる直感は？）」

その『泥』はギルガメッシュが顕現させたものと似ていて、ただ『そこに居るだけ』で悪意を振りまき、同時に悪意を煽る呪い、呪縛だった。

「これが……………『聖杯』の異常なの？」

吐き気が落ち着いたイリヤがボソリとそう独り言を言う。

言いながら思った。

「（これが、キリツグが『聖杯』を破壊した理由！ セイバーに令呪を使つてでも抹消すべき存在！ 今ならわかる！ キリツグ！ 貴方は間違つていなかった！）アーチャー——！」

「——重ねて命じる。『アヴェンジャー』よ、間桐臓硯を取り込み、それを世界への触覚とせよ」

「なっ?!」

『ま、マテ——ギッ?!』

綺礼の命令と共に『泥』は一瞬にして蟲の群体を飲み込み、池となつた『泥』の中から粒のようなものが次々と溢れる。

それは大量の、今までの比にならない蟲の大群で、『泥』と杯から生み出され続け、溢れ出ていた。

ここが真に教会であるのなら、その光景は『ヨハネの黙示録』の第6章第8節に記される第四の騎士の『疫病』がしつくりくるような場面だった。

アーチャーは本能半分、直感半分で問答無用にイリヤと桜を抱えたままその場から全力で離脱した瞬間、彼らが立っていた台の周りの防波堤のように突き刺さつた武器達が悪く変質して飲み込まれていった。

「チッ」



アーチャーがその場を見ながら舌打ちをする。『泥』が教会の四方にある壁を内側から突き破り、黒い粒が散漫していった。

この様子では、綺礼の生死は確認できない。だが彼がどうなっているかというと、考慮していられる段階ではなくなったのは確か。

彼が『アヴェンジャー』と呼んでいたサーヴァントは臓硯を取り込み、最悪の事態へと変わった。

「これはもう、私情など優先できる状況ではなくなつたな。このまま凛達と合流するぞ。ライダーもそれで良いな？」

『流石『守護者』ですね』

「え？」

アーチャーが突然何か言いだしたと思うと、不意に霊体化したライダーの声が聞こえた。

「やはりな。微弱ながらサーヴァントの気配を感じたからまさかと思つたが良くまだ居てくれた」

『かなりギリギリの状態ですが、貴方が霊体を感じれるとは思わなかつたです』

「まあこれどこぞのバカのおかげだな。 奴に出来て私に出来ないという通りはな

い」第18話前半より

アーチャー達はそのままとある屋敷の方向へと向かった。

セイバー運営、遠坂凜、間桐慎二 視点

場所は遠坂邸に移り、外では警戒するセイバー。中ではまた出かける準備の真つ最中だった凜と三月。

何とか歩けるようにはなったが魔力をほぼ使い切った士郎と魔術回路が初めて開き、無理をした信二と瀕死の怪我を負っていたセラは少しでも回復する為に三人とも仮眠をとっていた。

「ねえ三月」

準備の為に宝石の補充と服装を新しいのに着替える凜が突然同じように着替えていた三月に声をかける

余談だが凜は三月に伝えていないが、彼女に貸していたのは自分が子供の頃に着ていたお古だった。

「ん？ な〜に？」

「貴方はあの薬を飲むのに何とも無いのかしら？」

「あ、士郎から聞いたの？ 私は何とも無かったよ？」

「そう……………つて貴方、か……………かなり物騒なもの持っているのね？」

凜が三月の方を見て顔が引きつる。

無理もない、三月が動きやすいシャツとジーンズに着替えて銃の点検をし始めていた。

「ん、護身用？」

「何でそこで疑問形なのよ？」

「まあ、おじさんの忘れ形見みたいなものだから」

それらは『魔術師殺し』として現役だったころの衛宮切嗣の武器や装備等だった。

これらは衛宮切嗣が三月にいろいろと試していた時に癖からか点検を行うと、彼女もし始めてたかも知れない。切嗣の目玉が飛び出そうになった。

後に藤村組に切嗣が頼んで色々調達した物も入っている。

これは三月が彼に頼んでの事だった。

「士郎を頼まれたからには万全の準備がしたい」と三月が言ったから始まった。

今では切嗣が以前の第四次聖杯戦争に使っていたキャリコやトン普森・コンテンダー、WA2000、手榴弾等の上にスペツナズ・ナイフ、焼夷弾やベネリM2散弾銃等々が追加された。



「——つてまた貴方なの、アーチャー?!」

「リンの開口一番が『また』とはかなり奇妙な主従関係をお持ちね、貴方達」

「それを言わないでくれイリヤ。こうでもしなければセイバーにいちいち説明しないといけなくなる」

『というか何も屋根を突き破る必要はなかったのでは?』

「言うなライダー!」

セイバーが屋根の穴から飛び降りる。

「あ、アーチャー?! それにイリヤスフィールにサクラにライダー?」

「あ、アーチャーさんこんちやうす」

固まった凜の前には何時かアーチャーを召還した夜を連想させた。

ただ今回違うのはソファアーに座っていたアーチャーの首の周りに腕を回したイリヤと、彼が抱えた桜がいたことか?

「凜、すまないがサクラをどこか休める部屋に——凜?」

凜がズカズカとアーチャーに迫って彼の顔に拳をそのままの勢いで一発お見舞いする。

「グボオ?!」



顔の頬を片手で覆うアーチャーが起き上がる。

「そ、それは私にも盲点だったな。ちなみ、どこが奴と同じなのだ？」

「え？ だから言ったじゃん。真剣な顔とか困った顔とか眉毛とか右の耳たぶの後ろの小さなホクロ三つの内に二には毛が二本ずつ生えているところとか——」

などの事を言う三月にそこに（意識のある）人達は啞然とする。

そして固まっている間にイリヤが確認すると確かに右の耳たぶの後ろの小さなホクロ三つの内に二には毛が二本ずつ生えていた。

「……………」と、とにかく桜を診て情報交換しましょう？ アーチャー、再契約するわよ——

——

「——」待ってリン。もし再契約するのなら別の誰かにすれば理論上、令呪が三画使えるようになるわ。だから私と契約しましょう？」

「え」

「ちよ、何人のサーヴァントを勝手に横取りしているのよ!」

「いや、私は今マスターのないサーヴァント——」

「——」アーチャーは引っ込んでいて!」

……………何でさ

？」

「アーチャーさん、私は取り敢えず桜を診るから部屋の用意をお願いしていいかな？  
ここは初めて来る家だからまだちよつと慣れていなくて」

「……………そうだな」

未だにガミガミと言いつつ合う凛とイリヤをそつちのけでアーチャーが桜を抱えて部屋を出て、三月が後をとテトテと追い、セイバーも後を追う。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

桜を診てから彼女を寝かせた後、アーチャーは状況を掻い摘んでセイバーに説明し、協会方面を集中的に見張ってくれと頼んだ。

最初はいまだに敵か味方かもわからないアーチャーに指図されるのは嫌だったのか、



聞きたくなかったらしいが、彼の弱まった状態と今の状況で何かをする気配もなく、一応それを了承して遠坂邸の外へと出た。

そこで彼が三月に話しかける。

「……………君はどうして、私が『エミヤシロウ』と感じた時、私に聞いて来たり、他のものに話さなかったんだ？」

「え？ だってアーチャーさん、明らかに隠したかったでしょう？」

「……………どうしてそう思うんだい？」

「兄さんが隠し事をした時は左顎辺りがピクピクするから」

「……………本当かね？」

立ち止まったアーチャーに三月が振り返って、ニカツと笑う。

「うっそびよ〜ん♪」

「……………何故今の状況でそんな冗談を言える？」

「え？」

まだ笑う三月に真剣な顔をしたアーチャーがそう聞く。

だが三月にはこう聞こえた。

「何故今の状況でまだ笑える？」と。

「だって、皆が気落ちしていたら誰も笑えなくなるじゃん？」

それは、あまりにもあっけらかんとし、言わば合理的な答えでもあった。

人間は緊張や恐怖などの状態が続くと何もしなくても実情以上に疲弊する。

『故に三月は笑うのだ』とアーチャーは取っていた。

「君は……………本当に凄いな」

「でしよう？ エッヘン♪」

まだ立ち尽くすアーチャーを三月は見上げていた。

「???」

「……………これは提案なのだが——」

# 第37話 赤と青、そして盗難………もとい（無断で）借りた車

セイバー運営、遠坂凜、間桐慎二、ライダー、アーチャー 視点

そこは遠坂邸の通路で、三月とアーチャーが向き合っていた。

「……………これは提案なのだが……………」

「……………うん、良いよ。」

アーチャーが話し終わる前に三月のあっさりとした承した事に彼でさえも目を見開く。

「……………君はこういう場合、もう少し相手の話が終わってから詳しい事を聞いた方が  
良いぞ?」

「でもそれで皆を助けられるでしょ? なら良いよ。」

アーチャーと三月のそのそのやり取りはまさに凜と士郎がしていたやり取りに酷似して  
いた。第33話より

「…………………………」

アーチャーがズカズカと硬い表情をしながら三月を壁際に追い込む。「へ？あ、ちよ、待っ——」

これも以前、凜が士郎にした事に酷似していた。第19話後半より

【告。 心拍数急激上昇。 安定させマスか？】

「……………」

「えーと？ アーチャーさん、困り……………ます？」

「君はもつと自分を大切にされた方が良い」

「……………？」

三月はただ？マークを出しながらアーチャーを見上げる。

「君はどこかイリヤに似ていて違う。そして凜にも似ていて違う。まったく、君の

兄は苦労したのだな」

「まあ……………否定できないかな？ で、アーチャーさんの『提案』って言うのは——」

……………

……………

……………

………

………

………

………

三月とアーチャーが居間へと寄ると凜とイリヤ、そして起きた士郎と慎二とライダー達が情報を交換しながら話し合っていた。

そしてそこには昔のように感情の見えない桜もいた。

「（あ………桜、昔みたいになっている……）」

「はは、見てよ桜。お、俺達これでお似合いの髪の毛になったな。ハハハ」

「………ハイ………」

「桜………」

そこには痛々しいほど桜に元気づけようと話しかける慎二と、彼女の豹変ぶりにどこか悲しそうな雰囲気のライダーがいた。

「ごつめくん！ 私たち、何かミスっちゃった？」

「三月——って、アーチャー?! お前、やっぱり生きて——?!」

「アーチャー！ 良いところに来たわ！ 私と——!!!」

「——リン！ アーチャーは私と契約するの——!」

「お嬢様~~~~~!」

「~~~~~ぶえ」

凜とイリヤが言いあいそうになり、場の空気を読まずただイリヤへと飛び、彼女を力いっぱいはまだ動く右腕で抱きしめるセラが叫んだ。

「このセラ、ちゃんとお嬢様の事をお伝えましたよ!」

「もががが!!」

「お嬢様、お怪我はないですか?!」

「……………ぶは! セラ! 大丈夫?!」

「和んでいる所すまない、状況が状況だけに話を進めるぞ。あまり時間がない」

安否を確認しあうイリヤとセラに、アーチャーの真剣な声と表情に皆が彼に注目し、彼はアインツベルン城で姿を消したところから出来事を説明する。

それは彼が感じていた違和感を確認するために自身の死を偽装して自分からいるであろう敵たちからノーマークになり、イリヤ達の安否をチェックするため衛宮邸に戻ると時は既に遅く、イリヤが桜とライダーに連れ去られた後だった。

「ねえ、何で桜は……………その……………えつと」

「恐らくだが彼女は間桐のご老人に脅されていたのだろう」

凜が言いにくそうになり、慎二がビクビクし始め、桜は身構えたのを見るとア—

チャーがそう強く言い切った。

「恐らくはこうでも言われたのではないか？ 『凜達の命が惜しくば、アインツベルンの少女を教会まで連れてこい』と。現に、アインツベルンの召使は瀕死の傷とはいえ、とどめを刺されなかつた理由もそこにあると私は睨んでいる」

「ッ」

桜はただ俯いて何も言わなかつた。

「さて、教会での出来事だが——」

そこからはアーチャーが先程セイバーに説明した教会での出来事を言う凜が考え込み、士郎と慎二は哑然とする。

「そ、そんな……『聖杯』がもう一つだど？ ギルガメッシュの持っていたのが——」

「」

「——あの爺さん……やっぱり僕達を騙していたんだ」

「慎二君……」

「何が『幸せにしてやる』だ?! あの爺さん、僕を騙すだけでなく……桜まで……畜生……ウツ……グス……畜生ツツ!!」

慎二が人前で隠す素振りもせず泣きだしたのは誰もが驚いた。

が、全員は敢えて何も言わず、気付かない振りをして話を続けた。

「ねえ、アーチャー？ 確かに彼らはイリヤを『用済み』と言ったのね？」

「ああ、そうだ」

「そうね、リンの考えている通りだと思う。あの神父の人達は『聖杯』に必要な魔力を集めて、私と言う『鍵』を使って降臨させたと思う」

「そして臓硯をあのかつエセ神父が『聖杯の呪い』に食わせて今暴走中って訳ね……………」

「……（綺礼のあだ名に「クソ」が追加された?!）……」

「ああ。状況は最悪に近い。一つの救いは教会が人里から少し離れているという事ぐらいだ。あれは『聖杯の呪い』、あの神父は『アヴェンジャー』と呼んでいたものが『聖杯』を原動力としている以上、無限に広がり続けるだろう」

「なら何とか核になっている『聖杯』を打ち壊すしかないわね……………」

「そうだ、そこで私からの提案があるのだが……………かなりのハイリスクリターンを伴うが、聞く気はあるかね？」

アーチャーは真つ直ぐに土郎達を見回しながらそう言う。

「……………異言がないのなら続けるぞ。まずはセイバーの契約を破棄させて、凛に再契約させる」

ガタン！



皆が座っていたテーブルから音が出る。

士郎と凜が急に立ったのだ。

「お前！ 何を——?!」

「——そうよ！ それに貴方、前の時はどうやって私との契約を絶つたのよ!」

「何、前者は効率と合理性の問題だ。そして後者に関しては『無限の剣製』でキャスターの持っていた『破戒すべき全ての符』を自身に使っただけだ。本当に時間がないから続けると、一流の魔術師と再契約を果たしたセイバーの機能は大きく上昇した上に令呪が三画に戻る。敵は呪いの蟲の大群故に、私の『無限の剣製』と彼女の『約束された勝利の剣』が最も適しているだろう」

士郎と凜がライダーの方をちらつと見るのをアーチャーとイリヤが見て反応する。

「彼女はライダー、つまり騎乗兵のように接近せねばならないタイプの宝具と見たが、違うか?」

「いえ、その通りです。私の『ベルレフオーン騎英の手綱』は騎乗できるものなら幻想種をも御し、更にその能力を向上させる黄金の鞭と手綱です。私の場合、自分の血を触媒に天馬を召喚できますのでそれに乗り、真名解放により防御力と乗り物の速度が上がり、流星のごとき光を放つて突貫するというものです。現世風に例えると——」

「——『特攻野郎〇チーム?』」

「「「ブボ」」」

そこにいた皆（ライダーと桜以外）が噴出した。

何しろデフォルメしたライダーがポツコリとちよつと太ったこれまたデフォルメした天馬に乗りながらあのテーマソングをBGMに空を飛んでいるのを想像したからだ。

「……………」

ライダーの静かな視線が三月に注がれ、彼女はライダーの周りにドンヨリとした、「自分明らかに凹んでいますよー」空気で流石にやりすぎたと思い、言葉が続けた。

「あ、いや、その、ごめん。場の空気をちよつと軽くしたかっただけ。あとで血を吸っても良いから、ね？」

「仕方ありませんねではそれで手を打ちましょう」

彼女が早口と力強く即答し、発する空気が一気に「うおっほいやったぜ、ウハ♡ウハ♡」へと変わり、三月にはライダーの周りから無数のハートマークが飛び出していたかのように見えた。

「(でも何でハートマーク???)」

「……………」コホン。 という訳で、彼女は機動力を使った戦闘では優秀だが、このように呪いに触れたらアウトのような場面ではリスクが高すぎる。故に私とセイバーや遠距離攻撃が可能な凜と三月が必然と来る事になるが……………ここで皆に紹介したい奴

がいてな……………そろそろか」

ドゴオン！

外から大きな衝撃音が聞こえ、男性の声とセイバーの口論が聞こえてくる。

『おい待て待て待て！ 俺は別に今は——！』

『問答無用です！』

『人の話聞けよ?!』

「この声は——」

「——さて、ちよつと席を外すが…すぐに戻ってくる」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

「いや、まさかあなたに助けられるとは世の中どうなるか知らねえもんだな？ アー

チャー」

それは両手を上げながら半透明になっていた青タイツ男、別名ランサーだった。

「その声はやつぱり、ランサー?!」

「あ、こんちやーす」

「あ? 何だあ、その挨拶は? 当世の奴か?」

「俗語」

「ハッ! 嬢ちゃんは小せえのにさつぱりしていて大物だな!」

『『小さい』は余計だよ『青タイツ』?!』

ほぼ反射神経で反論する三月をランサーは心底面白そうに見る。

「へー? 他のギスギスした奴らとは大違いだぜ! どうだ、俺のマスターになるか?」

「うん、良いよ」

「「「何いいいいいいいい?!」」」」

「……………あ?」

そこにいた皆が三月の即答に驚愕の声を出し、からかい気分で提案したランサー本人も呆気にとられていた。

「……………ハハハハハハハ! 即答かよ?! いいね、いいねえ! ますます気

に入った! じゃあ、さっさと契約しちまうとするか!」

「あ、ちよつと待て！ その前にアーチャーは大丈夫なあの?!」

「ん？ ああ、それも説明するがランサーがこちらに加わることで戦力の上昇も確かな事だ。そこで凜、彼とも契約を出来るか？」

「え？」

「あ、じゃあアーチャーは私と契約するのね？ やった♪」

アーチャーの言つた事に複雑な顔をする凜とは反対に明らかに喜ぶイリヤ。

だが――

「――すまない凜、性格上の問題と効率を考えただけなのだが……そうだな、今の君にはセイバーだけでもかなりの負担になるな……三月君はランサーを加えても大丈夫そうか？」

「……………え？」

そこでイリヤも凜同様に固まる。

「あ？ 何だ嬢ちゃん、もう先約がいたのか？ 誰だよ？」

「いや、私だが？」

「……………」

皆が静まり返り、これを見た三月は――

「――テヘペロ、契約しちよ――」

冷たくい目をした凜とイリヤ、士郎と慎二がアーチャーを見た。

「——いや、その………私も言うのもなんだが恐らくランサーの性格はイリヤとは合わないだろう？ それに魔力量の問題も——」

士郎より多少は空気が読めるアーチャー英霊エミヤだった。

が、結果はご覧の通りである。

「——どうでも良いが早く契約してくれ——うおおおおお?!?! もう足が無くなって来やがった?!」

ワイヤワイヤと一瞬騒がしくなったものの、アーチャーの言うとおりに効率と魔力量を考えた結果、セイバーが凜と契約し、アーチャーと契約した三月はそのままランサーとも契約をした。

当初、アーチャーは士郎やイリヤ辺りが騒ぐかと思ったが不安は憂鬱に終わった。

士郎は——

「——え？ その話なら俺よりセイバーとしてくれ。 もともと俺は彼女に聖杯を勝たせる為に契約したんだから彼女の意思を俺は尊重するよ」

そのセイバーは——

「——あんな聖杯モノが呪いと破滅しか撒き散らすことしか出来ないものであらば、もう一度破壊すべきモノです。 良いでしょう。 契約をしましょう、凜。 ですが私は士

郎との誓いはまだ接続したいと思っっています」

これに凜は了承し、誰も見ていない（と彼女が思っていた）時にガッツポーズをし『ウキウキダンス』をしながら「セ・イ・バー・ゲツ・ト♪ やった♪ やったわよく♪ お・と・う・さ・ま・く♪」と不可思議な歌を歌っていたのを士郎達は遠坂邸のキッチンで目撃した。

「まさに『うっかリン』だね♪」と後先考えずに言う三月の一言で見ていた皆が噴き出し、凜にすぐバレるのだが……………

そしてランサーと言えは——

「俺あ、別に願いなんでものを『聖杯』なんぞにかけるつもりはねえ。強ええ奴と戦えればそれで良かったが、今はあの腐れ外道の綺礼だけは俺の手で殺さなきゃ気が治まらねえ。奴は俺のマスターを殺しやがったからな」

そこでランサーが語った内容は聖杯戦争開始の前に魔術協会から派遣された武闘派魔術師である彼のマスターは冬木市に着いた後、調査をして何らかの異常に気付き、監督者の言峰綺礼に協力を求めるが騙し討ちにあつて左腕ごと令呪を奪われた。

「だから一つだけ約束してくれ。俺にあの腐れ外道を討たせろ」

「うん、分かった。アーチャーさんもそれで良い？」

「もとより言峰綺礼はこの期に及んでは単なるおまけだ、好きにするが良い」

「ヒュ〜！ カッコつけやがって、この野郎！」

最初はイリヤがマスターになるという選択もあったが現状の彼女の体の負担などを配慮すると『マスター』ではなく『魔術師』としての後方支援を士郎と共にする事になった。

慎二は『魔術師』に文字通り成ったばかりなので遠坂邸に桜とライダー、そしてセラ達と共に「待機」という名の留守をする事に。

明らかに桜のそばに居たがる彼を引き離すのはアーチャーでも難しく、一緒に連れて行ったとしても出来る事が今の状況ではあまりなかった。

「それに、ここには衛宮君の家よりは強固に結界などを施しているからそう簡単に落ちない筈よ」

と言う凛の推しで留守をする事に。

今の状態の桜と言えば、とても戦場へ連れていける様子ではなかった。

と言うか論外だった。

臓硯が何を彼女にしたのかは直接聞いてはいないが、明らかに過去のトラウマ以上の事があったのは誰の目にも明白だった。

そしてライダーは勿論断固として桜から離れる事を拒んだ。

「もし離そうと思うのなら宝具を爆砕覚悟の上で躊躇なく使いますよ？」という『脅



し』に聞こえた『本心』もかけられた。

「ではおさらいするとしよう——」

アーチャーがもう一度出かける準備をする皆に方針を明らかにした。

先ずは教会に行く前に魔術師の皆（慎二と桜と三月以外）の魔力を凜の秘蔵の寶石等を飲み込み、魔力を回復。遠坂邸を出来るだけ拠点として防御の仕掛けなどを施し、要塞化する。

それが終わり次第、教会へ移動。そして道中、アーチャーが遠距離攻撃で蟲を薙ぎ払い、ランサーとセイバーは士郎、イリヤ、三月を守りながら進む。

教会が見え次第、可能であればアーチャーかセイバーが宝具で教会ごと『聖杯』を壊す。

できなければ一人目が放った宝具の余波があるうちにもう一人が接近して、宝具を更に打つ。

更に破壊できなければもう一人がもう一度宝具を打つ、といった具合のゴリ押しだった。

その間に綺礼が生きていればランサーが宝具を使い、仕留める。

「——といった具合だが、異論はあるか？ なければこのまま——」

「——なあ、もしかして俺がマスター達全員を担ぐのか？ 嬢ちゃん達はともかく、

野郎は趣味じゃ——」

「——ううん、アレを使う」

「「「アレ?」」」

三月が指さしたのは近くの駐車場にある車だった。

勿論無免許の彼女ではなく、赤の他人達のだった。

三月はテクテクと車の運転手側のドアまで行き、ドアと車体の間に三角形の板のような物をガンガンと力づくで押し込み、隙間ができ次第針金を使って鍵を解除した。

「ほら、イーちゃん以外乗って」

三月はそう言い、今度はハンドルの外側に取り付けていたキーを差し込む部分をM2散弾銃のストックを使ってキーシリンダーを取り出し、キーロックの部分を外して剥き出しになったキーシリンダーを再度差し込み、鍵を捻るとエンジンが掛かり、三月は車から出た。

「???  
「だから乗って?」

「「「.....」」」

この行動が全て終わり、要した時間はざっと三分ほどで、士郎、イリヤ、凜、アーチャー、セイバーが呆気に取られていた。

「はっはっはっはっは！ いやまったく、俺のマスターは頼もしいねえ〜！ もっと早

くに見つけて契約したかったぜ！」

「えーと、ありがとう？」

約一人の豪快に笑うランサーを除いて。

「あー、三月？ どうしてこんな事を知っているんだ？」

「??? 車の構造を『解析』しただけだよ？」

「じゃ、じゃあさっきの三角の板を使うアイディアをミーちゃんはどこで見たの？」

「アメリカの空港署ドキュメンタリーで駐車場料金を払っていない車達をどうやって動かすか見せていたのを観た」

これ聞いたランサーも流石に何かを思ったのかアーチャーを見て聞いた。

「なあ、もしかした俺らのマスターってとんでもない奴か？」

「大丈夫、君も時期に慣れるさ」

「……………俺の女運がここでも発動するとは、未恐ろしいねえ」

「全く同感だ」と内心同意したアーチャーだったが敢えて何も言わずにウキウキと運転席に座るイリヤと助手席に座る三月を見て青くなる土郎と凜に同情した。

ちなみに騎乗スキルを持っているセイバーも運転は出来るのだがそうすると宝具を打てないのでその案は却下され、代わりにイリヤのドライブテクを以前見た三月が彼女を推薦した。第12話より

## 第38話 人間ビツクリ箱

セイバー運営、イリヤ、衛宮士郎、アーチャー＋ランサー運営 視点

「きやははははははは！♪」

くたびれたコートを羽織って笑う金髪の小柄少女No.1。

「ぎやあああああああああああああああ!?!?!」

絶叫を上げ、シートベルトと車内の固定ハンドルを力いっぱい握りしめる少年少女二人。

「おおおおおお~~~~~???」

気の抜けた感動(?)の声を出す金髪青年女性。

「アハハハハハハハハハハ！ やっぱりこれ楽しいわ〜!♪」

そして無邪気に笑う銀髪の小柄の少女No.2。

「なあアーチャー」

「何だねランサー？」

「中から凄いい声が聞こえているのに、何でお前はそんな『スカツとした！』みたいな顔になつてんだ？」

「え？」

暴れ馬の如く走る車の屋根の上のランサーが呆れた顔で、無意識に実に良い笑顔で笑つていたアーチャーに話しかけるとアーチャーの表情はキリツと引き締まる。

「お前、あの小僧衛宮士郎と嬢遠坂凛ちゃんに何か恨みでもあんのか？」

「いや、特に無いが？」

「へ、そうかよ？」

「そうだ」

士郎達はイリヤの絶妙なドライブテクを楽しんでいた（？）。

何度か士郎と凛は気を失いそうに（と言うか実際に気を失った時もある）なり、人生初の頭文イニシオー・ディー○D並みの運転を味怖わつていた。

遠坂邸から教会までの道のりは決して短くはなく、直接行くのはどうしても冬木大橋を通らなければならない。

が、遠坂邸からそうすると明らかに遠回りになってしまうのだが――

「ちよちよちよちよつとイリヤ?! このままじゃ未遠川の岸に着いちゃうわよ?!」

——車は直線を描くように最もダイレクトに教会へ続く道を通っていた。

「でもアーチャーが——」

「——このままでいいのだ、凜! イリヤ、岸まで着いたら一旦止めて待機! 三月

君、魔力量はどうだ?!」

「バツチ良しよ〜ん」

「アーチャー! どうするつもりなんだ?!」

士郎の言葉でアーチャーは車の中を見て、笑いながら答える。

「何、簡単な事だ。川を渡るのだ」

「はああああああああ?!」

士郎、凜、そしてイリヤまでもが素っ頓狂な声を上げてランサーはカラカラと笑う。

「ほんつとお前らと居たら退屈しねえわ! で、どうやって渡るんだ?」

「そのまま川の上を走る。出来るか、三月君?」

『最後まで希望を捨てちゃいかん。諦めたら、そこで試合終了だよ』と、かの先生は

言いました」

「ほう、それは誰だね?」

「スラムダ〇クの〇西先生」

「……………誰だそれは？」

「「「アーチャーと同じく」」」

「古い！ 古いよ三月！」

三月の答えに？ マークを浮かべるアーチャー、凜、イリヤとランサー。  
そしてネタの事が分かり、ツツコミを入れる土郎。

「え？ あ、そう？」

川岸まで車が着き、三月が車から出て川の中に両手を入れる。

「つめた?!」

「そりゃあ、冷てえだろうよ」

「ランサー、確か君はルーン魔術を使えるんだな？ 三月君に見せてくれ」

「見せるって何を？」

「何って……………ルーン魔術でこの川を渡れる氷の橋だが？」

「……………マジか」

「「マジだ／です！」」

ランサーの呆れ顔にアーチャーと（元気いっぱいいな）三月が答える。

……………

……………

.....

.....

.....

.....

.....

士郎達が乗っている車が氷の橋(ランサー&三月特製の共同作品)を渡っている間、凜の難しい顔に士郎は気付いた。

「……大丈夫か、遠坂？ 顔色が少し優れないぞ？」

「そう……ね……」

「リン、私も結構シヨックよ」

「え？」

「ミーちゃんがルーン・魔術も使える事に」

「いや、『人型ビツクリ箱』に今更私は気をかけている訳じゃなくて——」

「——『人型ビツクリ箱』ってもしかして私の事？」

「「「当たり前だ／です／よ」」」

「照れちゃうなく♪」

「「「褒めてない」」」



士郎、凜、セイバー、イリヤと三月のコントの間、アーチャーは不満の顔が消えないランサーを慰めようとした。

何せ彼が若干(と言うかかなりの)自慢のルーン魔術を使っているのを三月が見て、彼女もルーン魔術を行使し始めてランサーと共に川を渡る橋を造った。

ただし、ランサーの扱う『ルーン魔術』は厳密には師のスカサハから習った『原初のルーン』。

つまり神代レベルの威力が出る魔術であり、現代の並大抵の魔術師が扱うにはハードルが高すぎる代物である。

これが頑張った遠坂凜や、アインツベルン最高傑作のイリヤであれば使えるかも知れない。

それを三月はほぼ初見で行使したのにランサーのプライド……とまではいかないかもしれないが、彼にはその事が面白くなかった。

それは車の中にいた他の者達も一緒だった。

ただ、三月を必要以上に刺激はしたくなかったので敢えて指摘しなかっただけだった。

「……………私が考えていた事は言峰の事よ。アレでも一応兄弟子だったんだから」

「……………」

急に黙り込む車内にアーチャーの声が聞こえた。

「凜、奴の事はあまり気にするな………と言つても無駄かも知れぬが私の言い分を聞いてはくれないか？」

「アーチャー？」

「奴と会い、話してみても私なりに彼の事を解析したのだが………恐らくだが奴は『神』を信仰している。それも、世間一般に共通認識としてある神などではなく彼自身が信じる『神』を」

「………アーチャー、それは一体どういう事ですか？」

「何、簡単な事だセイバー。『信仰』という『大義名分』の為に躊躇しない手合いほど厄介なモノは無い」

かつて『守護者』としていろんな種類の人を見て、『掃除屋』として活躍したアーチャーの言葉には重みがあった。

正に「宗教」の為に何でもする人達を見て、それらの相手をした事のある経験者の助言だったからだ。

「つまり言峰綺礼は今までよりも更に恐ろしい相手と言う事だ。色々な意味合いでな」

「では彼は以前、キリツグがマークしていた以上の『狂人』と定義しても良いと言う事で

すね」

「……………そうだなセイバー。　そういう事になる。　勿論、すべては奴が生きているという前提だがな」

「……………」

未だに納得いかない凜の顔に、アーチャーがもう一度念を押すかのように言う。

「良いかね、凜？　奴は『狂人』だ。　もしそうと思えなくても今はそういう事にしておけ。　彼がお前の兄弟子でも、彼を『理解しよう』とする行為だけはやめておけ」

「……………そうね……………ありがとう、アーチャー。　貴方にはずっと聖杯戦争が始まってから助かっているわ」

「何、君のような魔術師に召喚された事が私にとって全ての始まりだからね。　これぐらいお安い御用だ」

「……………おう運転手の嬢ちゃん、このまま岸に乗り上げて教会まで突っ走れ。　間違っても止まるなよ」

「ランサー？」

セイバーが屋根からくるランサーの声に反応し、アーチャーが新都の方を見ると彼の表情が強ばった。

「そうだな。　ランサーの言う通りだ。　このまま止まるな」

一郎、凜、イリヤと三月がサーヴァントたちは何を言っているんだろうと思いつつながら、新都の岸へと乗りあがり、車をそのまま走らせた。

運転手がイリヤのように『魔術師』に成り切れる者が幸いした。

何故なら他の者ならば思わず車を止めていたかも知れない。

新都の中は地獄へと変わっていた様子に。

一言でそれを表すのなら『阿鼻叫喚』。

正に災害の映画やニュースなどで出てくるパニックの暴動や様々な犯罪が見渡す限り行われていた。

周りは炎。

そして沢山の声が響いていた。

男性、女性、幼子、赤子や、犬、猫の動物たちが全て例外もなく音を上げていた。

「そんな?！」

「新都が……………」

「ッ」

カチリッ。

「あれは『聖杯の呪い』の影響よ。このまま教会を目指すわよ、皆」

一郎と凜が「まるで映画の様……いや、それより酷い」と思っている中、三月の表情

は固まり、『泥』を教会で見たイリヤは護身用に持たされた銃（グロック19）の安全装置を僅かに震える片手で解除した。

「ああ。凜達は全員力を温存しろ。現況を打破する為には『聖杯』を我々が何とかせねばならん。ここで十や二十の人々を救った所で、その十倍が死んでゆくぞ」

「クソ！ 胸糞悪くなるぜこりゃあ」

イリヤは車の速度を落としながら走らせ続け、止まって車や残骸、道に簡易なバリケードを立たせたような障害物を迂回する。

これは何かあった時に咄嗟の対応を取れる為と、『泥』と『蟲』の発生源である教会から新都内へと漂っていた空気が薄い場所をなるべく通る為だった。

新都はほとんどオフィス街で夜遅かったが、僅かに残った人たちやそこに住んでいる者達はさつきイリヤが言った『聖杯の呪い』の精神汚染にも似た空気に当てられ、理性が無くなりかけるかすぐさま狂気に陥り、暴行に出る。

周りから聞こえる悲鳴や叫び、言語にならない笑い声や鳴き声はまさに地獄だった。

「10年前と同じだ」

「そうだな」

「衛宮君？ アーチャー？」

「『冬木大火災』の再来だ」

士郎とアーチャーが同時に言うのと、凜は眼を見開き、外の状況を見て思う。

「（これが衛宮君や三月、アーチャー達が経験した地獄………通りで………）」

それは気丈な凜でさえも身震いするほどの光景を、士郎達が間近に実際に経験したと思うと、彼らの幼少期にどれだけ酷い影響をしたのか想像できるような気がした。

「おいお前ら！ 奴さん、来やがったぜ！」

ランサーが笑いながら『獣』の顔に変わった。

車の中の士郎達が見ると——

—— 『暗闇』の中を覗く様な感じだった。

いや、正確に言うのと道の横に立っている街灯が前の道から次々と消されていく。

これも正確ではなく、暗闇が迫ってきていた。

イリヤがハイビームヘッドライトを点けるとその暗闇の壁がブワツと一瞬引き、また車へと迫る。

それは50や100程の数では無く、更に無数のなにかが道と街灯を覆い尽くすほどの群れが迫っていた。

「何だ、アレは？」

そう呟いたのは士郎か凜か三月かイリヤ、またはサーヴァントの誰かだろうか？

その闇はまるで全てを『黒』に染めるかのように必死に動き、中に爛々と赤く輝いていた瞳が有った。

今度はイリヤもまた吐き気に襲われるほどの効果があり、唸るような音が聞こえた。

『オ・ヲ・オオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

それは何かの言葉か、鳴き声か、果たして意味のあるものだったのかさえ分からなかった。

ただ一つだけ分かるのは、これは間桐臓硯だったモノの成れの果てという事だけ。

「何だこれは?! サーヴァントの気配がします!」

「なんとおぞましい! オレでさえもアレと似たモノに対峙した覚えはない!」

「け! 『影の国』を思い出させやがるぜ!」

セイバーは車から出て、アーチャー達の後部トランクの上に乗る、三月は持っていたキャリコを士郎に渡した。

「兄さん、これを」

「え? あ、ああ」

「安全装置は親指の所のレバーを跳ねれば解除するわ。あとは引き金を引くだけ」

ガシャコ!

三月が散弾銃の弾丸が装填されているかの確認をするとアーチャーが既に『投影』していた弓に剣のような矢を構えると剣は鋭く変形した。

「行くぞ! I am the bone of my sword——」  
ヒュン! ドゴオン!

アーチャーが放った『偽・螺旋剣』が閃光のように大群の蟲達の中へと消えて、大爆発を起こし、幾らか蟲達を拡散させた。

「かつ飛ばせ、イリヤ!」

ギヤギヤギヤギヤギヤ!

アーチャーの叫ぶ声が引き金となり、イリヤは言われた通りにアクセルを踏み抜く勢いで、車のタイヤはアスファルトの道路に最初は上手く噛み合わず、けたたましい音を出す。

「オラオラオラア!」

「せえええええええい!」

アーチャーが次の矢を構え、前方に撃つ間にランサーが車の周りを彼の槍が器用に回りながら襲ってくる前方の足の速い蟲達を、そしてセイバーが横などから来る蟲達を切り落とす。



その間、凜は乱れ撃つかのように『ガンド』を蟲の濃いところに強い一撃を撃つて拡散させ、士郎はとにかく後ろから来る蟲達に対して銃を三月と共に乱射し、イリヤは蟲の死骸や道に転がっていた障害物死体の跡などで車のコントロールを失わないように必死だった。

前方はアーチャーが『壊れた幻想』ブローケン・ファンタズムを使い薙ぎ払っている。

だがこれはあくまで薙ぎ払っているだけだった。

確かに蟲達を同時に破滅しているが、数が圧倒的に多い。

では薙ぎ払いに生き残った蟲達はどこに？

それは勿論――

「数が多すぎる！ 三月、次の弾倉！」

「次の銃を使って兄さん！ 弾倉を取り替えるより銃を持ち替えるほうが早い！」

――車の後を追いつ、後方から集結して迫っていた。

撃つても撃つてもキリが無いとは正にこれの事かも知れない。

三月は後ろの席のクッションを無理やり引きちぎってトランクへと直接通じるトンネルを作り、中から大きな筒なような物を取り出して、車から乗り出して肩に固定する。

「三月?!」

「左耳を塞いで遠坂さん！」

ボシユウウウウウ!

三月がロケットランチャーを撃つ。

「そのどこが護身用なのよ?!」

あまりの非現実的な出来事の連続でツッコむ所がおかしくなった凜を三月は無視して、確かに彼女は見た。

「ロケットが?!」

それはロケットの弾頭の爆発が増殖する蟲達に呑み込まれていったのを。

「そんな馬鹿な?!」

「なら——!」

三月は焼夷手榴弾を二つ士郎に渡し、自分も二つ手に取る。

互いに一瞬見て、ハリウッド映画のように同時にピンを口で抜き、同時にそれらを投げる。

本来の手榴弾等ならピンを抜くのに約10ポンド（およそ4.5kg）の力を使わなければピンは抜けられないように安全の為に設定してあるが、切嗣は使用者を三月と想定して、ワザと緩くしていた。

ボボボボオン!

「■■■■■■!」

今度は焼夷手榴弾がハッキリと爆発し、先程のロケットよりも効果が見え、聞こえもした。

だが蟲達の数は減るところか、寧ろ増えていたような気がした。

ただそれほどの距離を教会まで詰めていた実感が土郎達にはあつたかも知れない。

彼らの中に冷静な人がいれば。

「駄目ですリン！ 捌ききれません！」

セイバーが焦りを見せ始め――

「このままじゃ捕まる！」

土郎は周りに迫り来る蟲達を見て――

「『アンサズ！』」

いつもは「めんどくせーな」とルーン魔術を使わないランサーでさえ小言を言わず

に槍とルーンを使っている――

「チィ！ 数が多すぎる！」

アーチャーは舌打ちをしながら自分の想定より蟲の密集度が高い事に愚痴を吐き――

「(せめて他の皆を――！)」

三月は必死にこの状況打破を考えた。

その時――

「セイバーに命じる！ 『真名開放を無視し、全力の宝具を使用せよ！』」

――凜が躊躇なくセイバーに令呪を使用した。

令呪が弾け、膨大な魔力の感覚がそこにいた皆が感じ、言葉が聞こえた瞬間士郎と三月と凜、そしてイリヤでさえも両手で耳を塞いだ。

その瞬間、目を焼き尽くすような、圧倒的<sup>ス</sup>光と轟音と共に直線上の全てを塵にした。

それは今から通るアスファルトがめくり上がった瞬間に光で消し飛び、道が平らのままになっていったほど。

『約束された勝利の剣』によって、道が示されたかのように前方の蟲達は見当たらず、まるで光の道が作り出されたように光の余波で道が輝いていたかのように見えた。

この『奇跡』によって車は整備されたての道路の上を走っているかのようにスピードをグングンと上げていった。

だが――

「効いていないですって?! いえ、回復が早すぎるのだから！」

――瞬間<sup>希望</sup>に光は闇<sup>絶望</sup>に呑み込まれていった。

「ええ、確かに直撃しました！」

炎々とした、セイバーの肯定の言葉。

彼女の剣を握る手から軋むような音が鳴り、彼女の心境悔しさを如実に表せていた。

「ただ、それでさえも消しきれない量が勝っているだけです」  
『敗走』。

その言葉が一瞬士郎達の脳内を過ぎつて——

「セイバー！ 宝具を撃ち続けて！」

「「リン?!／凜?!／遠坂?!」」

驚きに全員が彼女の名を呼ぶ。

「ここまで来てリタイヤなんて私が許さないわ！ なら、ありつただけの火力をバンバン撃つてゴリ押しよ！」

凜自身、震えながらも笑いを浮かべながらそう強く言い切った。

普通ならここで三月がおちやらけた事を言い、場を和ますのだが彼女もあまり余裕がなかったように凜には見えた。

そしてそれは的中していた。

先程から「」の声がかつてない程ともうるさく、鬱陶しかったので三月は自分の考えが上手く纏まらなかったのだ。

「ッ！ 分かりました！ 『エクス——』！」

セイバーも凜に釣られ笑い、宝具を撃つ用意に入った。

「フ、やはり君は最高の魔術師だよ、遠坂。ならばオレ達も頑張らないとな？」  
アーチャーもニヒルな笑いを浮かべ、土郎と三月を見た。

「どうした二人とも？ 弓道部員の名が泣くぞ？」

「ツ！ やつてやる！ やつてやるさ！」

「ええ！ 遠坂さんの言う通りね！」

土郎と三月がアーチャーの弓を『解析』して、『投影』する。

「なら私も『アンゼンウンテン』なんて気にしないわ！」

「……（あれのどこが安全運転なんだ?!）……」

最後のイリヤの一言に皆の心が一つになった（ツツコミと心的な意味の二重に）。

## 第39話 アルトリア、塗炭の苦しみ

セイバー運営、イリヤ、衛宮士郎、アーチャー＋ランサー運営 視点

あれから数分、と言つても士郎達やサーヴァントの皆にすれば数時間ほどにも感じられる数分であつた。

何せ周りは蟲、暗闇、蟲、暗闇、蟲、暗闇だらけ。

時間の感覚がおかしくなり始めるぐらいの『呪い』の中に皆は居た。

その皆が明らかに疲労していて、汗を全員が掻き、車はボロボロの状態だった。

凜が少なくなった魔力を補充する為に震える手で何個目になるか分からない宝石を飲み込もうとして、もう一つの手で胃の中身が外に出るのを阻止して無理やり体に飲み込ませた。

士郎は腫れて赤くなり握力が低下していた両手で『投影』した弓に『投影』した矢を構えようとして、震える手が滑って矢を落とし、彼はそれを拾上げて、矢を射る。

三月は狙いを定めず、矢を完璧に引く事もせずただただ矢を構え、弓を射る度に両手から滲み出ていた血が自分とあたりに撒き散らされる。

ランサーも最初は雄叫びなどを上げていたのをやめて、それに使う元気を槍捌きとルーン魔術に振っていた。

アーチャーは初めからほとんど無言だったのが更に静かになり、機械のようにただ行動していた。

そしてセイバーは息を切らせ、髪を束ねていたシニヨンがほぼ解けて彼女の髪の毛が汗によって自身の顔や首に張り付いていた。

ちなみに甲冑姿ではなくドレス姿だった。

これは防御を捨てた訳ではなく、ただ甲冑に回す魔力が無くなっただけの事。

イリヤは運転に全神経を使い、体の機能の事もありほぼアーチャーのように行動が機械化していた。

その姿の皆は先程の凜によって引き出された空元気など微塵も残っておらず、ただ『消耗戦』に挑んでいた戦士達の姿そのものだった。

「……………私、ここで降ります」

「……………?!?!?!」

突然セイバーが言い出した事に皆がギョツとして、息を止めた。



こんな状況で車を降りれば、すぐに蟲達の餌食になってしまう。

それはその誰もが容易に想像でき、それは人やサーヴァントも関係なかった。

「自殺行為だぞセイバー?!」

「そうよ! 何の意味も無いわ!」

「いいえ。それは違います、シロウにリン。こうすれば貴方達は生き残れるチャンスがあります」

セイバーの返事に士郎と凜の口がぴたりと閉じた。

そこには『覚悟を決めた戦士』のセイバーが居たからだ。

セイバーはもとより、死を覚悟していた身で契約を成し、聖杯戦争にその身を投じた。

だがそんな彼女でも士郎や三月、アーチャーといった者達との触れ合いなどで若干『人間』としての心の在り方を取り戻していた為、久しぶりに「目前に迫る死はとても恐ろしいもの」と感じていた。

「死にたくない」。

そう叫びそうになる。

「自分から死神の鎌に首を差し出したくない」。

そう言いたくなる恐怖が確かにあり、騎士である身なのに無様に生にしがみ付きたくなる衝動もあった。

それでも彼女セイバーはやはり騎士で、先程から宝具の連発を無理にしての死にかけて、それでも恐らく最優で今の弱った状態でも強力な彼女にしか出来ない役割だと士郎達も心のどこかで納得していた。

一人を除いて。

「え？（何で——）」

それは、久しぶりに胸の中が痛むほどザワザワしていた三月だった。

「……………惨い死に方かも知れんぞ、セイバー」

「覚悟の上です、アーチャー」

「それに俺との試合、どうするんだ？ 放棄するのかよ？」

「申し訳ありません、ランサー」

「そっか、じゃあ令呪を全部使うわね？」

「ありがとうございます、リン」

「セイバー……………俺は……………俺は——！」

「そのような顔をしないで下さい、シロウ。もとより私は過去の人間、もう既に滅んだ身なのです。貴方とミツキ達に会えて、私は本当に幸運な者だと思っています」

「セイ……………バー……………私、貴方と……………色々話をしたかった」

「イリヤスフィール……………」

「もつともつとキリツグと……………お母様の話をしたかった……………」

「……………」

「前みたいに雪ダルマを作れたかった！ 散歩したかった！ 一緒に遊びたい！ 行かないで、セイバー！ 私、お母様たちだけじゃなくて貴方まで失くしたら……………私……………」

「……………私……………」

「イリヤ」

泣きじゃくるイリヤがビクツと跳ねて、セイバーは言葉が続ける。

「私も出来れば、かつてのようにもつと時間を一緒に貴方と過ごしたかったです。夜でのババ抜き優勝も決めないといけなかったですしね」

「……………アレは貴方を素通りするかも……………しれないよ？」

イリヤはそれでも僅かな希望にすぎる。

「それは無いですね。アレは『呪い』であると同時に『聖杯』。サーヴァントである私を求める筈です。その分の蟲達が私へと割くでしょう」

だがセイバーの言葉にとうとうそれさえも一刀両断される。

「……………ウ……………ウウウウウ！」

イリヤがとうとう泣き始め、セイバーが優しく後ろから彼女の頭を抱きしめる。

それは、泣く子供をあやす母親の姿に似ていて、三月の胸が更にザワザワした。

「貴方達は生きて、この状況に終止符を打ってください」  
そして最後にセイバーは未だに混乱する三月へと向く。

「ミツキ、私は貴方と会えて本当に良かったと思います」

三月の耳朶にドクンドクンとした音がしていた。

それは「」の声さえも凌駕するほどだった。

——しんぞうのおとがうるさい

「貴方は士郎の次……いえ、最近では彼よりも鍛えがいのある弟子でした」  
胸のザワザワとした感じの上にジクジクとした痛みが広がり始める。

——むねがはりさけるようにいたい

「さようなら、ミツキ」

「ツ!!!」

——ああ………またか



三月は

——ただ唾然としていた。

セイバーの行動が理解出来なかつた。

「なんで？」と言う疑問がグルグルと彼女の中で回っていた。

セイバー 視点

「ハア！ ハア！ ハア——！」

セイバーは地面に着地した瞬間、息を切らせながら駆け出していた。

彼女は皆の前では気丈に振る舞っていたが、彼女の霊核はボロボロで崩壊寸前だった。

アーチャーも宝具を連発していたが、二人の負担の差は歴然としていた。

アーチャーの宝具『ブロークン・ファンタズム』は彼の特性上、連発を可能とする上

にそれを想定していた技である為、自己負担が圧倒的に少ない（弾数に一応限りはあるし使う魔力も高いが）。

その反面、セイバーの宝具『エクスカリバー』はここぞという場面で敵を一掃する、使用回数制限付きの単発大技型宝具。

しかもアーチャーとは違い、負担は全てセイバー自身に跳ね返る。

凜と言う優秀なマスターがいて尚、無理をして『エクスカリバー』連発の代償は彼女にとつて文字通り致命傷だった。

アーチャーもセイバーの性格上、この事は想定したものの、彼の計算上ではもうとつてに協会に着いていた筈だった。

だがまさか蟲達の増殖がここまで高い事と、『泥』が均等に広がって行く事無く、『聖杯』が彼らサーヴァント達へとまっすぐ来るような『執着心』を持っていた事を甘く見ていた。

最後の『執着心』がセイバーの囷となる行動を後押しした事もあり、アーチャーが仕方なく彼女を行かせた理由の一つだった。

「ボロボロのサーヴァントを無理してでも連れていき、全滅するよりはそのサーヴァントが派手に動き出来るだけ多くの敵を引きつき、道連れにする」。

何とも、合理的な考えだった。

無論、ランサーもこの囷に使えたのだが彼の『刺し穿つ死棘の槍』は接近戦用。

一応投擲も可能だが、アーチャーが教会で放った剣達が『泥』と接触した瞬間、黒く変質して飲み込まれた事を配慮すると、恐らくランサーは一度の投擲で槍を失うだろう。

槍の失ったランサーの戦力的減少は無視できないほどであり、それならばやはりセイバーと自然と矢先が行く。

アーチャーも自身の幅広い、器用貧乏な能力がセイバーよりもこの先も需用があるのをサーヴァント達は理解していた。

「ハア！ ハア！ ハア————！！」（キリツグはこれを阻止する為に私に令呪を使っただけですね！ 今なら納得です！）

「地面そのものが蠢いているのでは無いだろうか？」という錯覚にも見える程の蟲達の群れが走っている彼女に迫っていた。

セイバーは近くのビルの屋上に魔力放出で一気に上がり、各場所で燃え盛る新都を眺めた。

「（カムランを思い出させる。あの時も私は独りになった。だが今は……………）」

セイバーは胸に空いた手を置き、確かに鼓動する胸と、温かい感覚に包まれていたのを感じる。



それはマスターの令呪の魔力だけでなく、『家族の団欒』や『人としての在り方』などの思いでが――

「――ッ！ 来たか！」

一瞬思いに浸りそうになったセイバーが来たる波に備えて戦闘態勢に入った。

ビルの屋上によじ登ったソレは夜の闇より深い漆黒がセイバーと接触する寸前にブワツと、まるでそのまま飲み込もうとしているかのように動く。

「来いー！」

セイバーはギリギリまで待つて、引き寄せた後に『風王結界』インレジナル・エアを展開して、近くの蟲達を正面に凝縮した。

『『エクスカリバー』!!!』

包围しようとしていた蟲達を宝具の射程範囲内に納め、一気に焼き払う。

またも幻想的な場面が光によって作り出される。

その景色にセイバーはちらりと士郎達の車の方向を見て、笑みを浮かべる。

やはり狙い通りに蟲達がほとんど自分に集まって来ている。

「ゴホッ」

ゴポリと血がセイバーの唇の間隙からだらだらと零れ、彼女は左手で脇腹に空いた大きな穴を押さえた。

「やはり士郎達を追うよりも自分を確実に捕食する為に動いたか」

《ある程度魔力を確保し、聖杯の疑似降誕。それを利用して、残っているサーヴァントを殲滅し、真に聖杯を確保する。それが少なくともその間桐臓硯の目的だ》

それはアーチャーが説明した、教会での言峰綺礼の言葉だった。

そしてこの『蟲』と『泥』が『間桐臓硯』と『聖杯』ならば、サーヴァントである自分を優先して襲いに来るはずとセイバーは睨んで、アーチャーは敢えてそれを隠そうとしていた事にセイバーは気付いていた。

「恐らく、彼の事ですから私がこのような行動に出るのを防ぐ為ですね」

そして案の定、それは的中していた。

アーチャーの思惑も、間桐臓硯だったモノにも。

「戦力を分散し、別個の場所に潜ませるとは……その状態になりながらも、考えたモノですね」

何もセイバーの正面に立つ必要はなく、地面から這い出る事や第二、第三派とずらして波状攻撃をかければ良い。

『『エクスカリバー』!!!』

特に、向かって来る敵をまとめてなぎ払う戦法しか取れない彼女のような者にとつては。



「……………はッ?!」  
 セイバーがビクリとして、立ったまま目を覚ます。

「(ハハ)は……………カムランの丘?」

そこは数々の騎士の死体や戦争の武具らが地面を覆っていた、セイバーにとっては意味深い場所であった。

「そうですか、私は死んだのですね……………」

彼女は生前、生きている内に契約した為、聖杯戦争で負ける度に死ぬ直前の時まで戻る。

以前、切嗣に令呪を使われて『聖杯』を壊し、自身が消滅した時もここに戻っていた。  
 だが——

「(——)—— 妙だ、モードレッド卿がいない?」

そう、本来ならセイバーがここで気が付くのはモードレッド卿が聖槍ロンゴミニアドを持ったセイバーを打ち取った直後に戻る筈。

なのにセイバーに死にながら彼女を罵るモードレッド卿の姿はおろか、セイバーの手には聖槍ではなく聖剣が握られ、甲冑姿ではなく先程までのドレス姿だった。

「これは、一体——?」

『やあ、君が“セイバー”かい?』

男か女、果ては大人か子供と言った、様々な声帯が混じりあつたような声がどこからともなく辺りに響き、セイバーは戦闘態勢に入る。

「誰だ貴様?!」

『あれ? 視えていないのか? 少し待ってくれ——』

暴風のような風が風吹、セイバーは左手で顔を覆い、流れが止むとセイバーの前には

——人型の影が立っていた。

「誰だ、貴様?」

『あー、こうなるか。ま、いいや。君は“選定のやり直し”をしたんだっけ?』

セイバーの肩がピクリと反応すると、影がニヤリとした様な気がセイバーにはした。

『“選定のやり直し” ぐらい、させてあげるよ?』

「……………さっきの問いをもう一度だけする。貴様は誰だ?」

『あれ？ 視て解からない？ 君達が考えている “願望機” ……の様なモノさ』

『ほう？ それを私がそう易々と信じると思うか？』

『信じる、信じないは君の自由さ。 さっきのは確認だけ。 では君が何時でもここに戻りたい時はそう願いたまえ。 では、行ってらっしゃい』

「貴様、待て！ クツ！」

影から眩い光が一気に発し、セイバーは目を閉じるのをギリギリまで我慢したが結局瞑つてしまう。

そして気が付けば――

「それを手にする前に、きちんと考えた方が良い」

――目の前にはあの忘れも出来ないメイガスと、石に突き刺さった選定の剣が

あった。

「なツ?!」

セイバー――いや、アルトリアは驚いて自分の手を見る。

そこには若々しい村娘の、まだ罪に汚れていない細い手があった。

「ん？ 今更手の汚れを気にするのかい？ 変な子だね、君は」

フードを被ったメイガス魔術師が不思議に思い、アルトリアに言葉をかける。

「貴方は……マーリン………なのですか？」

魔術師  
メイガスがバツとアルトリアを向く。

「ッ！ いやはや参ったなあ、これは！ 僕は名乗った覚えはないんだけどな……どれどれ……何と?! 君は既に王になった事があるのかい?! うん、これは本当に困ったぞお? 僕としてはこの事は面白くて面白くて堪らないんだけど、私としては先のウーサー王との約束があるしな……う……ん……」

「ハア………貴方は変わらないのですね」

「うん? うん、まあ………僕も色々あるからね………決めた! 君の好きにするが良い! 何せ、両方とも面白そうだからね! ただまあ、一応契約違反となるからそれを手に取らなかつた後私達は無関係だ。僕は他の地にも行って来るさ」

アルトリアは笑みをしながら――

――『選定の剣』に背を向けた。

「そうか、君は別の者が王をやれば上手くやれると思うのか」

「少なくとも、その可能性はあるでしょう」

こうしてアルトリアはアーサー王にならず、余生を生きる事となる。

それから年数が経過し――

――統一されなかったブリテンは滅びの一途を辿った。

『選定の剣』を取らなかつた日から未だに内乱や、視野の狭い領主達は手尾を取らずに自らの武勲の為に団結せずに外来する敵に応戦し、各個撃破されていった。

それは、アルトリアの住んでいる場所も例外ではなかつた。

「ぐあああああ?!」

「ハアアアアアアアアアアアア!」

「クソ、女のくせに強い!」

「こいつが噂の『女騎士』か!」

そしてブリテンは滅んでいく中、アルトリアの村は夜襲をかけられ、襲われる中で抵



抗をしていた。

幸い生前……………いや、『アーサー王』として活躍していた技術や学はあったので女性と言うハンデがありながらもその地では屈指の女戦士として活躍した。

『弱きを助け、害ある強き者達から守る』。

その姿は正に『騎士』だった。

だが『王』ではなく、ただの『人』として生きた彼女には共に戦える仲間も存在せず、最終的に圧倒的数によって押し潰される。

「グッ！」

右手を手首の先から失ったアルトリアは敵に串刺しにされた足と自身の返り血と土煙によって綺麗な見た目は見る目も無かった。

「ハア、ハア、ハア、て……………てこずらせやがって」

「へ、へへ……………けどやっぱり噂通りのイイ女だなあ」

深手を負つても目麗しい女性に育つたアルトリアは敵に捕まり、文字通り死ぬまで性欲と鬱憤の捌け口として犯され、暴行に会い続けられる日々が続いた。

来る日も来る日もトロフィーと物扱いされる体はドンドンと痩せていき、やつれたその姿はとてアルトリアとは思えなかった。

それは死体と言つても過言ではない有り様だった。

体の痛覚や触覚といったモノはとうの昔に麻痺していて、彼女は最後の生気体から抜けて行き、重くなる瞼を閉じながら思う。

「他に方法が無かったのか？」と。

そして彼女の視界と共に意識が薄れていく……………

「それを手にする前に、きちんと考えたほうがいい」

懐かしい声に彼女の意識が覚醒した。

## 第40話 ホラー映画からコンニチワ

ライダー運営、セラ 視点

慎二は昔の様子と態度が変質した桜をライダーと共に気にかけていた。

互いに少々の違いはあれど、桜の気遣う思いは一緒の二人。

だが桜はただ無反応と無表情のまま、本当に思考があるのか疑い始めた時、彼女が  
ついさつき、初めて自ら行動を起こした。

それは部屋の隅で膝を抱え、小さくなり、ガタガタと震える事だった。

これを見た信二は「空調が」どうの、「遠坂邸は空調設備が時代遅れ」だのと、場を和ませようとしてライダーは何も言わずに（と言うか何を言えば良いのか分からなくて）桜を抱き、彼女の異変を声に出す。

「サクラの体が異様に冷たい？」

「何だって?! 毛布を持つてくるよ!」

「……………(……………違う)」

そう桜は言いたかったが魂すら凍りそうな程の悪寒が彼女の言動を阻む。実はと言うと空調は完璧だった。

何せ（短期間とはいえ）イリヤが滞在する場所をあのセラが何もしない訳が無い。

なので彼女によつて遠坂邸はより快適な場所となつて、現代最新機器に引けを取らないほどだった。

愚痴はブツブツと言いながらもセラが弱つた体に鞭を入れる姿と最初はうっかりなどでミスが多発した姿を物陰に隠れながら見ていた三月とアーチャーは内心ずつとハラハラしていたが。

慎二が毛布を持ちながら戻つて来て、ライダーと桜の両方にかけて桜をもう一度見る。

「（あのクソ爺の仕打ちを受けていた時みたいだ）」

彼は昔から桜の事を気にかけていて今のような桜を見るのが苦痛になり以前、士郎に相談を持ち掛けた事があつた。第5話より

「桜……………（こんな時、アイツ等さえ居れば…）」

慎二の頭に浮かんだのは太陽と月の様な兄妹の顔だった。

自分の事があまり好きではない彼にとっては「目標」の一人。

そしてもう一人は——

「——つて、何を気落ちしているんだ僕は?! 今ここにいない奴らの事を考えてどうする?!」

慎二はもう一度未だにライダーの抱擁の中で震える桜の姿を見た。

ある意味、本物の人形よりも余程人形らしかった彼女。

家族遠坂家と家族でいる権利を奪われ、引き取られた家同編の当主編視にとっては蟲よりも価値の低かった彼女。

そんな彼女を変えて、「自分の事を信じ切ったあの兄妹ならどうする?」と考える慎二。

その間の桜は股に顔を埋めて、目を強く瞑りながら幸せの日々を必死に思い出そうと  
していた。

だが思い出したくも無い事ばかりが脳内にて繰り返される。

それは幼少の頃、幾度も幾度も蟲蔵に沈められる光景。

最初は、泣き叫んでいた。

力の限り、意識を失うまで。

声が出なくなつたのは、いつだったか覚えていない。

単にすぐに意識を切り離せられるようになったから叫ぶ体力を次の日に温存する為に。

最後には虫を感情では無く、感覚でしか感じられなくなっていた。

その時にはもう意識ではなく、思考を体から切り離して、あの兄妹と共に高跳びに挑戦していて、その時に感じる虫が体の皮膚を這い回る感覚を搔いた汗と切り替えた。

「……………（似ている）」

桜が自分を襲う悪寒を蟲蔵に例えた途端、すんなりと納得した。

似ているのだ、今感じている寒さが蟲蔵と。

蟲蔵で諦め始めてから、何も感じなくなるまでの短い間の雰囲気と似ていた。

「」

「サクラ？」

桜が何かボソボソと言ったのをライダーは最初こそ聞き逃したが、二回目はもう少し声が高く、聞いた慎二とライダーは驚いた。

「お兄ちゃん……………お母さん……………」

『お兄ちゃん』『お母さん』。

ライダーは慎二の事を桜が『兄さん』と呼ぶ事はあつてもお兄ちゃんは聞いた事が無かった。

そして桜の母は昔に亡くなっていた筈。

一応ライダーは桜の兄である慎二を見るが、彼も分からなかった。

慎二にとっては初めての事なので考えが混乱した。

桜が助けを求めて誰かを呼ぶ事が。

桜自身も驚いていた。

何せ人を呼んだ所で、その人が助けしてくれる訳では無いと分かっていたからだ。

何度も幼少期に父の時臣や母の葵、姉の凜に何度も助けを求めたがそれが叶えられる事は一度も無く、ただただ蟲蔵の毎日が続いた。

その頃からの癖か、桜は助けを呼ぶ時に人を呼ぶ事は無くなった。

そこで不意に桜、ライダー、そして慎二のいる部屋にココアの匂いが漂ってきた。

「全く、二人もいるのに寒がる人に暖かい飲み物一つ出さないとはどういう事ですか？  
それでも彼女を思う人達なのですか？」

「あ」

そこにはお盆の上にマグカップが人数分乗せてホットココアを持ってきたセラだった。

「お前、左腕は大丈夫なのか？」

「気安く声をかけないで下さい、この小物。私はホムンクルス、痛覚の遮断など容易い事です」

ココアを取った皆がすすり飲むとその場の空気が少し軽くなった………様な気がした。

だが確かに気分は幾分良くなった。

「……………あり……………がとうございます」

「いえ、お嬢様の大切なご友人ですもの。お安い御用です」

桜のか弱い声にセラはニコリと笑った。

今のセラは以前泣きじやくったイリヤと、現在の桜の状態を連想していた。

「しっかし大丈夫かね、警察の奴ら？」

ちなみに一時間ほど前からパトカーのサイレンやヘリコプターの音が引つ切り無しに辺りに聞こえていた。

これも当たり前と言えば当たり前の事だった。

何せ『聖杯』の異常は物理的干渉だけでなく、精神汚染もしているので公安機関が動かない訳が無く、十年前からの教訓もあつてか彼らの反応は早かった。

勿論彼らに何か出来る問題ではないが新都で起きている暴動や狂人達の包囲と確保ぐらいは出来るし、現に彼らは冬木大橋にて検問を敷いて新都から逃げてきた正気を保っている市民達の誘導を行っていた。

「ハッキリ言つて彼らに期待する事自体無意味です。こんな事態、普通の人間がどう



「こう出来る事等ではありません」

慎二の言葉をすっぱりと一刀両断するセラ。

「ですがお嬢様達が何とかしてくるでしょう。我々は、彼らが気持ち良く帰って来れる様に万全のお迎えの準備をしましょう」

「セラ……………さん……………(……………)……………そうだ。私の周りには頼れる人達が

いるんだ……………昔の頃じゃ————)————ヒツ?!」

ガシャン!

桜が更に青ざめながら手のマグカップを落として自分の体を抱きしめると、外から異様な音が聞こえてきた。

ギジギジギジギジギジギジギジギジ!

それは金属を無理矢理曲げるような、電気の配線がバチバチと火花を飛ばすような音が混ざり合ったものだった。

「な、何だこの音?」

「あ……………あああ……………」

「サクラ? 一体————」

「————ワカメと言いましたね貴方。すぐにここから出る準備をなさい」

セラはただ事では無い、そして危険な事態であると肌で感じ取って慎二に真剣な顔で





「皆さん、しっかりと捕まっていますよ！」

逃げ惑う桜を弄ぶ笑い声と行動は間違ひなく臆怖だった。

ライダーは全力で冬木の家の屋根や街灯を飛翔して、屋根に穴が開こうが、街灯がひしゃまげようがただ全力で桜をあの自分以上の怪物から遠ざけようと全力を尽くした。

アーチャー＋ランサー運営、イリヤ、衛宮士郎、遠坂凜 視点

セイバーと別れた後、士郎達から彼女に蟲の全てが向かい、彼らはそのままひと時の安息で出来るだけ息継ぎをしながら外人墓地の敷地外へと着き、そこで彼らは余儀なく車から降りる事となった。

外人墓地の外の道路で事故にあつた自動車達や吹き飛んだビルの破片などでそれは車が通れなかつた。

下車後、士郎達はランサーを先頭に教会へと駆け足で移動する。

さつきまでの音が嘘みたいな静けさで皆の耳朶でキーンと耳鳴りが続いていた。

「……………怪我は無いかね、三月君にイリヤ？」

運動が得意とは言い辛いイリヤと、同じく小柄な三月を抱え上げたアーチャーが少女

二人に声をかける。

「私は体がヘトヘト。でも大丈夫、ミーちゃんは？」

「頭が痛いし吐き気がする。まさかりアルでサイレ〇トヒルとバイ〇ハザードを同時に経験するとは思わなかつたわ——」

『お兄ちゃん！お母さん!!!』

「——ん？ イーちゃん、何か言った？」

「え？ ううん、何も言っていないわよ？ どうして？」

「う~~~~ん……………何か聞こえたような気がした」

アーチャーとイリヤ、士郎と凜の動きが一瞬止まって腕組をしながら唸る三月を見て、ランサーが呆れ顔で止まった皆に振り返る。

「あ？ 何だおめえら？ たかが無い声を聞こえただけで立ち止まるなよ」

それは『影の国』という魔界<sup>殺し合</sup>じみた地を生き抜いて師匠の『スカサハ』の超超超超スバルタ修行<sup>殺し合</sup>を乗り越えたランサー<sup>クー・ファーリン</sup>だからこそ言えた事だった。

「……………今だから言うけど、この子——」

「——だからそれがどうしたって言ってるんだよ、俺は。マスターのこいつが『規格外』つてのは付き合いの短い俺も分かり切っている。けどそれがどうした？ 目的を間違えるんじゃないやねえ、今は身近で確かな危機を叩き潰す方が先だろうが？ アーチャー

もギスギスした殺気を引つ込めろ。俺はマスターを二度も失いたくねえからな、俺を悲しませるなよ？　んで、マスター？　聞いた声は何て言った？」

「え？　えくと……………分からない。上手く、聞き取れなくて……………ごめん……………あ」

ランサーが何時の間にか反転して、三月の頭を撫でた。

「なぐに、謝ることあねえよ！　寧ろそんな小せえナリで良く今まで耐えているぜ！　その嬢ちゃんも歳あんま変わんねえだろ？」

ランサーがいつぞやのアーチャーと同じようにイリヤと三月を見比べ、今度はプツクリと顔を不満に膨らませるイリヤだった。

「あの、私これでも兄さんと遠坂さんと同い年なんですケド」

「あん？」

ランサーが士郎と凜、そして三月を互いに見る。

「……………マジか」

「「マジだ」」

ランサーの問いに士郎、凜とアーチャーが答えて、ランサーはジツと三月を見る。

「???　何？」

「いや何。お前の体の肉付きからってつきり十歳かそこそこぐらい——」

「——だああああああ！アーチャー、私を離して！ あのヒヨロンとした尻尾を引つ張らないと気が済まないわ！」

「尻尾だあ？ こいつあ髪の毛だつっの！」

「うるさいクーちゃん！」

「「ブフ」」

士郎、凜、アーチャー、そしてイリヤが宙で暴れる三月のランサーを『クーちゃん』呼びに嘖き出し、「まるで犬だ」と同時に思った。

ランサーとしては——

「おいマスター。俺をそのあだ名で呼ぶんじゃねえ」

——本気の殺意を一瞬三月に放って彼女を黙らせた。

「……………すまねえが……………今のは生前の俺にとってあまり良い思い出が無いあだ名でな……………」

「ごめん……………知らなかった」

アーチャーの腕でシユンとした三月はどこか借りられた猫の様子だった。

それを見ていた士郎達は何とも言えない気持ちに包まれ、緊張した心を解してくれた。

「さて！ 行くかね諸君！」

この場の流れを利用し、アーチャーは柄にもなくトーンの高い声で言い切った。

「何かアーチャーさん、登山ハイカーガイドみたい」

「あら、それも悪くないわね？　こう、副業として」

「へ！　こんな奴が『ガイド』だあ？」

「あ、それならクフちゃんは——」

「——おいちよつと待てマスター、今のは何だ？」

「あだ名」

「……………あー、何でだ？」

「だって『ランサー』、何て味気ないじゃん」

「だからって、なんで『ちゃん付け』何だ？」

「え？」

「いやいやいや！　そんな『ハ？　こいつ何言ってるの？』みたいな顔されても——」

「——」

「——ランサー」

そこでアーチャーの声にランサーが彼を見ると——

「——気にしたら負けだぞ？」

——アーチャーが実に良い笑顔を浮かべていた。



「お前ゼつつつつつつつたいたいあの夜の事、根に持つているだろ?!」

「さあ?」 27回も干渉・莫邪が壊された事など、とうの昔に——」

「——シレッと誤魔化すなよお前! 数まで覚えていやがつて!」

アーチャー&ランサーコントで沈んだ心はどこかへ行き、士郎達は教会へと外人墓地を進む。

その中、イリヤは内心複雑な思いばかりをしていた。決して表情には出さないが。元を辿れば、今の状況は大きく少なからずイリヤが原因と言っても良い。

何せ初めにギルガメツシュに『聖杯』が強奪しそれを暴走、次に綺礼と臓硯がどこで手に入れたか分からない『聖杯』を手に入れ、イリヤの魔術回路と魔力を足して疑似降誕された。

その『聖杯』を次に綺礼が『アヴエンジャー』なるサーヴァントを溢れさせて、間桐臓硯を取り込めと命じ、さっきまで彼らに襲い掛かっていた蟲達へと変わった。

御三家の一つ、アインツベルンの悲願の希望を持ったイリヤがまさかこんな事になるなんて想像しなかった。

と言つても、誰がこのような事態を想像出来ようか?

シユゴオオオオオオオ!!!

士郎達は上空から聞こえる轟音に反射神経で上を見るが遅かったのか、何だったのか

見えなかった。

「……………F—15戦闘機？」

「ツ?! 見えたのかマスター?!」

三月のボソリとした疑問にランサーが驚く。

「自衛隊のドキュメンタリーで今のジェット音を聞いた事あったから……………」

「……………なあ、アー c ———」

「———諦めろ、ランサー」

公安機関、自衛隊 視点

士郎達は知る余地もないが、今彼らの上空には自衛隊のF—15戦闘機達が近くの基地からスクランブルが掛かり、アフターバーナーをかけて冬木市へと到達した。

これは冬木の公安機関からの報告と、冬木市内にいた魔術協会関係の人物が基地の指揮官に要請を出したからである。

広がる『泥』と『蟲』に火が聞くと聞いて彼らの指揮官は（これまた魔術協会の圧力で）急遽F—15戦闘機のMk 82爆弾をナパーム弾に変えた。

勿論これは国際違法になる為パイロット達には駆除系の熱気化兵器と言われていた。ただまあ、パイロット達も冬木市に親族のいる者達からの連絡で「怪獣が襲って来ている」と聞いた瞬間十年前の出来事を連想して半分恐怖、半分『怪獣退治』に胸が高鳴っていたが。

それも一人の怪獣オタの「怪獣映画に出てくる軍つて大逆転するか全滅するかのパターンだな」と言った一言に所為でますますそうなったのもあった。

本来なら聖堂協会も動く筈だが監督役の言峰から連絡が全く無いのが彼らにとって不可解だったので、慎重に動く事に徹した。

元とはいえ、代行者としてとびつきり優秀な彼が連絡も出来ずに散ったとなると事は一大事で、代行者達や騎士団員達に大至急、招集の連絡をかけている最中だった。

警察などの機関も、新都の深入りはせずに正気を保った市民達を狂気に落ちた者達から守り、後から到着する自衛隊達の援軍まで場を持たせようとした。

本来ならいがみ合うかも知れない上層部同士が珍しく事を円滑に進め、出し惜しみをしなかった。

そこで先陣隊であるF-15戦闘機のパイロット達は目撃する。

冬木市の西側、つまり新都では無い方向に大きな霧状の何かが見え、北へと向かっていたのを報告すると基地から詳しい事が視える様に低空飛行を行えという命令が出る。

彼らはそれが桜達を追う間桐臓硯だと知らずに自ら近づいて行った。季節は冬だがこれが「飛んで火に入る夏の虫」になるのだろうか？  
それとも彼らは『大逆転』するの  
か？  
歯車達はただゆつくりと動く。

# 第41話 ReTry Again, [That] F ated Night

セイバー 視点

「それを手にする前に、きちんと考えたほうがいい」

アルトリアの目の前にはあのメイガスと、石に突き刺さった選定の剣がまたあった。  
「……………え？」

アルトリアは驚いて自分の手を見る。

そこには若々しい村娘で、右手は健在で、まだ性的虐待によって汚れていない、綺麗な肌をした手が両方あった。

「ん？ 今更手の汚れを気にするのかい？ 変な子だね、君は」

フードを被ったメイガスが不思議に思い、アルトリアに言葉をかける。

それは、何年も前に聞いた言葉だった。

「マーリン……………ですよね？」

魔術師  
メイガスがバツとアルトリアを向く。

前の時みたいに。

「ツ！ いやはや参ったなあ、これは！ 僕は名乗った覚えはないんだけどな〜  
……………どれどれ……………何と?! 君は王としての生き方を捨てた事があるのか  
い?! う〜ん、僕としては面白くて面白くて堪らないんだけど、私としては先のウー  
サー王との約束があるしな〜……………う〜ん……………」

「ふざけないで下さい！」

アルトリアはマーリンに攻め寄り、彼の胸倉を掴む。

「これは貴方の仕業か?! マーリン！」

「わわわわ！ ぼぼぼぼぼ暴力反対〜〜〜!!!」

アルトリアが拳を作って――

「わ！ 違う！ 断じて違う！ 何の事かさっぱり分からないが違う！」

あまりの必死さにマーリンが（珍しく）本当の事を言っている事にアルトリアは気付  
き、彼にさつきまでアルトリアが経験した年月の事を話す。

……………

……………



ただ『アーサー王』として戦の癖が残っていたので家のパワーバランスは彼女が常にトップだった。

「待つて待つて待つて待つて！　もし君の話した事が本当だという事は、今の君は大魔術の対象真つ最中間違いないという事……………かも知れない！」

「次は左を——」

「——乱暴だな、君は?!」

「では10秒だけ待ちますから説明を。　10, 9, 8——」

「だああああ?!　だから君はもしかするとその『願望機』とやらに君が望んだ『やり直し』をさせられているんじゃないかな?!」

そこからマーリンあらゆる可能性をアルトリアと話し——

「——では結局は、さっきの私は『個人』として生きていたので限界があったという事ですか」

「そうそう。　だから君が王になりたくないのは……………まあ正直に言つて僕にはわからないけど、『個人』に出来る事が限られるね」

「なら話は簡単ですね——」

「——え？」

アルトリアは『選定の剣』に近づくとマーリンが声をかける。



「それを手にしたが最後、君は人間ではなくなるよ?」

アルトリアは笑いを浮かべながらマーリンに振り向く。

「私はこれでも二度目ですよ?」

そしてあっさりと剣を引き抜く。

「奇跡には代償が必要だと、アル——いや、アーサー王よ。」

君はそれを一番大切な

ものと引き換えにする事になるよ?」

「承知の上です。では、行きましようか!」

——今度こそ!

と意気込むアーサー王だった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そしてアルトリアは「アーサー王」になり、「今度こそブリテンを!」と言う思いを秘

め、力と能力の限り頑張った。

だが――

「(何故だ?! 私は、皆の為に――!)」

「――これにてアーサーの処刑を行う!」

「早く魔女を殺せええええ!!!」

――アーサーは拘束と猿口輪をされ、身にはボロボロの囚人が着るような粗末なもので、今は自国のかつての民衆達の前で断罪をされていた。

アーサーは『王』としてその能力と先読みで数々の災害や被害を回避し、ブリテンに栄光をもたらせていた。

何せ、かのローマ帝国並みの国土までも手に入れ、統治して、アーサー皇帝として数年君臨していた。

だが民衆達の間でふと疑問に思った者達が出始めた。

「これらは全て出来過ぎているのでは?」と。





.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「この罪人共はアーサー王の法に触れ——」

アーサー王はハイライトの光っていない眼で目の前の罪人達を見下ろしていた。

あれから彼女は様々な行動を起こし、何度も死んだ。

そして死ぬ度に『選定の剣』を引き抜く直前で意識が覚醒して行く中、彼女は戻る度に色々と試した。

時にはマーリンを問答無用でぶっ飛ばしたり。

時には女性としてこれ以上ない屈辱を味わいながら公開処刑されたり。

時にはマーリンを問答無用で『選定の剣』で斬りかかったり。

時にはモードレッド卿との決戦を回避する為にランスロット卿と妻ギネヴィアの不





付くのに、こんなに時間をかけたのだらう?!」

彼女は本当に、心の中から笑っているようで、腹を抱えた。

「そうか! そういう事か! これを私が追い求めていた結末なのだな?! アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

気付けばアーサー王は笑い続けながら頭を手でグシャグシャにして、そこはかつてのカムランの丘で、あの人型の影が目の前にいた。

「アハハハハハハハハハハハハハハ!!」

『ありやりや、もう帰って来たのかい?』

影の声でアーサー王、いやセイバーはピタリと笑いと体が止まり、頭を上げた。

「そうだな、礼を言おう」

笑いながら冷たい声で——

——目からハイライトが消え、口元を僅かにつり上げて笑みを浮かべていた、ただの『暴君』がそこにいた。



『それで、ここに戻って来たという事は——』

「——ああ。答えは得た。」

セイバーはもう既に影には注目していなく、ただ赤く染まった空を清々しい眼で見上げていた。

もし注目していたとすればきつと彼女でさえも震えていただろう。

人型の影にはニイーとした、明確で不気味なほど笑っていた口だけが浮かんでいたから。

アーチャー＋ランサー運営、イリヤ、衛宮士郎、遠坂凜 視点

駆け足で先頭を走っていたランサーが急に止まって、槍で後ろの士郎達も止める。

「ハア、ハア、ハア、ど、どうしたの、ラン、サー?」

凜が若干息を切らせながらランサーに聞く。が、彼は何も言わずにただ険しい顔で前を見る。

「……………」

「アーチャー? / アーチャーさん?」

イリヤと三月を下ろし、ランサーと同じく険しい表情をするアーチャーが前を見る。  
すると――

「~~~~~」

――どこからともなく鼻歌を歌っている誰かの声が聞こえてきた。

「ハア、ハア、ハア、きよ、曲？　だ、誰か逃げ遅れた、奴か？」

士郎が汗を拭きながら周りを見回し、三月が鼻歌の曲名を言い出す。

「……………『女王陛下万歳』？」

「ほう、良く知っているナ？　流石だな。~~~~~」

ガシヤリ、ガシヤリ、と金属の鎧が軋む音が聞こえると同時に、ついさつきまで一緒にいた仲間の声も聞こえた。

これを聞いた瞬間、士郎とイリヤの顔が明るくなった。

「セイバー?!」

「~~~~~」

そして彼女は姿を現し――

「ツ」

—— 士郎とイリヤはヒュッと短く息を呑み込み、二人の顔が引きつる。

「お前、少し見ない内に変わっちゃまったな」

士郎達の前に出たのは禍々しく、黒い甲冑姿のセイバーで、彼女の肌は青白く、目と顔は異様な程笑いながら歌を続けていた。

そして手には禍々しい黒に染まった聖剣が握られていた。

「セイバー……………いや、違うな。君は——」

「—— おお！ やはり久しいな、皆の者！ 出迎えご苦労！」

目の前のセイバーに似た女性のテンションがあまりにも場違いだったので一瞬たじろぐ士郎達。

「セイバー……………なのか？」

「ん？ お前は……………えーと……………少し待て、何せ何百年も経っている故記憶がな……………そうだ！ お前はシエロだな！ あの手腕、忘れもしないぞ、料理長よ！」

「セイバー！ あ、貴方——」

「—— おおお！ これは姫様ではないか、ご機嫌麗しゆう！ 少し見ない間に縮んだかな？ それにさつきから私を『せいばー』と呼んでいるが……………はて？」

「え？」

イリヤが呆気に取られる間、セイバーが頭を傾げ、手をポンツとする。

実際には鎧がぶつかり合つて「ガシヤン！」として音だったか。

「ああ！ そう言えばそうかつて呼ばれていたな私は！ そうか、そうだった！ 私は

——

「又ウウン！／＼うおりやあ！」

ガシイン！

「?!」

「—— かつてセイバーだったな私は！ 懐かしいような、不愉快なような」

セイバーは急に姿を消して、左と上空同時に襲い掛かったランサーとアーチャーの攻撃を手と腕で受け止めていた。

バキッ！

アーチャーの持っていた短剣にヒビが入り、彼はすぐにそれを手放して、ランサーも距離を開けると——

——セイバーが持っていたアーチャーの短剣がボロボロと崩れていき、彼女は腕を不可不思議に振っていた。

「聞こえないか、皆の者?」

「セイバー…お前、一体——」

「——衛宮君、三月、イリヤ。あれはセイバーじゃないわ」

「リン?」

「嬢ちゃんの言う通りだぜ。皮は似ちやいるが、どこかズレて………いや、ぶつ壊れていやがる」

「ああ、アレも『狂人』の類だ。耳を貸すな」

「ああ、聞こえる。あの美しい戦場音楽が。あああ! 聞こえる! 聞こえる聞こえる聞こえる聞こえる聞こえるぞおおお!! 突き刺される男の断末魔が! 切り倒される女の叫びが! 焼き殺される赤子の悲鳴に、撲殺される老人の骨が潰れる音が!

ああああ! 何と綺麗なのだ?!

この一言で士郎達と、サーヴァントのアーチャーとランサーは悟った。

目の前のヤツはセイバーであってセイバーではないと。

「では女王様よ、いっちょ俺の相手をして貰おうか?」

「「ランサー?!」」



!!!

セイバーが突然笑いながら頭を乱暴に引つ掻き、髪の毛がぐしゃぐしゃになるどころか、血が滲み出ていた。

「な、ナにがあツタアヒヤハハハハハハハハハハ!!」

ヒュン!

!!!

ランサーの顔が強張り、『獣』の顔に変わり突然後ろから切りかかって来たセイバーの攻撃をさぶ——

「——ぬおおおおおおおおりゃあああああああああ?!!」

——捌こうとして持ち前の敏捷と筋力で攻撃を躲す事に切り替えた。

「アヒヤハハハ!!」

「チツ」

笑い続けるセイバーを見て、舌打ちをするランサー。

さっきの一撃で目の前のサーヴァントが凜をマスターとしていた時よりも遥かに能力が上がっていた事に舌打ちをした訳では無い。

「(マズイなこいつあ……『決着に白黒つける』とは言ったが、正面切つての戦いじゃあ不利だ)」

笑うセイバーの体がフラフラッと揺れ動きながらランサーと対峙する。

「けどま、やりようは幾らでもあーあ!!!」

「アハハハハハハハハ!!!」

まるであの夜の戦いの続きのように、二人は刃を交えた。 第6話より



## 第4 2 話 “救われた” 破綻者

アーチャー運営、遠坂凜、イリヤ 視点

一方、士郎達は駆け足で教会へと向かっていたが——  
「——ん？」

アーチャーが不意に立ち止まって眉間にシワを寄せる。

「どうしたの、アーチャーさん？」

「……………妙だ……………イリヤ、君は確かに言峰綺礼が『アヴェンジャー』と言うサーヴァントに令呪を使ったのを見たのだな？」

「え？ う、うん。確か、『アヴェンジャー』に顕現せよって命じていたわ」

「では私の聞き間違いでは無いという事か……………」

「どうしたのアーチャー？ 貴方のその顔は何かに気付きながら声に出し辛い時の表情をしているやつよ？」

「ぬ、そこまで分かり易かったかね？」

「私は貴方のパートナーだったのよ？ それぐらい分かるわ」

「そうか……………いや、何時もの癖でね」

「一人で悩むところは兄さんと一緒だね」

「う」

「それで、アーチャー？ 何を考えていたの？」

「教会の方向から来るサーヴァントの気配が薄いのだ」

「薄い？」

士郎と三月はただ聞き返した。

「……………まさか?!」

「それはマズイわね…」

「ああ、その『まさか』かも知れない」

その反面、凜とイリヤは難しい顔をして、アーチャーが肯定する。

「どういう事だ、アーチャー？」

「この先に『聖杯』が無いかも知れないという事」

「?!」

「でも、確かに驚く事じゃないわ。『聖杯』がサーヴァントなら、本体が律義に教会で

陣取る必要はないっていう事ね」

「ああ、時間は奴の場合は味方だからな。逆に移動し、撃破を回避し回れば後は徐々に我々の敗北という事だ。だがこの先からサーヴァントの………いや、サーヴァントとも呼べない何かの気配があるのも確かな事だ」

「成程ね。貴方の言いたい事が分かったと思うわ」

「??？」

「………つまり本体が教会にいない場合を想定して、別行動を取る班とこのまま協会に向かう班に分かれる判断ね」

「そうだな、そして今のメンバー結成ではそれは些か難し——」

「———そうでもないわよアーチャー？」

「「え？」」

「………」

アーチャーの言葉を凜が遮り、ポカンとする土郎と三月に黙り込むイリヤ。

「全然あなたらしくないわ、アーチャー。この場合の編成は単純明白よ。教会へは私達魔術師チームと、本体の検索は単独行動の方が早いアーチャーに自然と別れるわ」

アーチャーは歯がゆい表情を浮かべる。

「………凜………オレは——」

「——教会の気配が薄いのなら、魔力の塊である『聖杯』である筈がないもの。もしサーヴァントだったとして、こっちは『人間ビツクリ箱』が付いているもの。最悪自爆で何とかなるレベルの筈よ?」

「あの、それじゃあ私が自爆する前提なのですか?」

「星が見えたスター」

「うううわあああああ?! 俺はそういう意味で『アレ』を言ったんじゃね〜よ〜?!」

三月のダウトに士郎の言葉を借りてツツコむ凜とイリヤ、そして嘆く士郎。

アーチャーは呆気に取られたが、これが彼らなりの後押しと気付いた。

と言うか三月は純粹にダウトしただけであろうが、もしそうでなくても彼女も同意していただろう。

「……………わかった。何か分かり次第、念話で報告を三月君にする」

「ええ、そして私達が教会にいる奴を片付けたらすぐにそっちに合流するわ」

「……………凜、三月君にイリヤ……………それと……………」

アーチャーが言いくさそうに士郎を名前で呼ぶのを躊躇った。

「今更も何もないだろアーチャー?」

「いやその……………もしもの場合は頼んだ」

アーチャーが最後の方の言葉を言い吐き、その場から消えた。

「……………今、アイツは俺に頼み事をしたのか？」

「やっぱりシロウはシロウね」

「え？」

「そうね、衛宮君みたいにぜくんぶ一人で抱え込もうとするんだから」

「え？え？え？」

「まあ…兄さんだから」

「三月まで?! 何でさ?!」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

士郎達が教会へと近づき、凜とイリヤが急に士郎と三月を破壊された壁の影に隠れ、物陰に潜む。

世界はまだ夜の闇の真つ最中で街灯等はない。



まるまる占拠して行われている『混沌』を気にしていないようだった。

彼はただ、夜風に靡かれるまま半分崩壊した教会の屋根に直立していた。

「ちよつと、一発撃つわ」

「三月？」

「ええ、一番キツイ奴を一斉に皆でお見舞いするわ」

「ミーちゃんの合図で。シロウは周りを頼んだわ」

三月は暗視スコープを下ろすが視線はそのまま動かさず、慣れた手動でリュックからスラッグ弾を取り出して散弾銃に新しく装填し、凜は片手を構え、イリヤは髪の毛を数本抜き取る。

「まさか最初に撃つ人が神父なんて……………」

彼女たちが狙うのは胴体、人間の最も表面が大きく、内臓も複数ある場所。

三月が構えて、引き金を引く瞬間に凜とイリヤは同時に魔術を放ち、三人の攻撃が黒い壁によって止められる。

「チ、やっぱりそう簡単にやられてくれないか」

「あれが、『アヴェンジャー』」

「と言うよりは防壁みたいなものね」

黒い壁が崩れていき、その向こう側の男が屋根から地面へと飛び降りて視線を向け

る。

「今ので終わりか、凜？」

凜の体がビクリと反応する。

「なぜ自分は名指し？」と。

「それに攻撃が三つあった事から……………アインツベルンの申し子と……………衛宮士郎と言った所か？」

至極どうでも良さそうに彼らの名を呼ぶ綺礼。

まるで分っていたかのように。

「三月、貴方は機を見て奇襲をかけて。私達三人が出るわ。あと、衛宮君に銃を渡して」

「わ、わかった」

何故三人を名指ししたのかはわからない。だがこれを機転に帰れるかもしれないと思つた凜は即座に三月を切り札として扱おうと彼女の迷惑が士郎とイリヤにも伝わり、三人は姿を現す。

言峰綺礼の前に。

「クククク、やはり来たか」

「綺礼！ 話はイリヤから聞いたわ！ 一体どういう事?! 何故監督役である筈の貴方



が聖杯戦争に参加……………いえ、ズルをして『聖杯』を?!」

「『何故』か……………ククク、何故だろうな?」

「なツ?!」

凜とイリヤが彼の答えにびっくりする。

彼の『聖杯』という『願望機』にまるで何も期待や密着などもししていない態度だった。

そしてそれは士郎にとって、彼を酷く動揺させた。

それは、以前の自分に似ていたからだ。

士郎はもともと、聖杯戦争自体に興味が無かった。ただ何の関係もない、罪のない人々が理不尽に命を刈られるのが嫌で参加していた。

故に『聖杯』に託す個人の望みは無かった。

「お前に、聞きたい事がある」

「衛宮君?／シロウ?」

思わず士郎はそう言っていた、綺礼に。

「ほう? 君が私に質問とはな? 良いだろう」

「何でお前はそんなにも穏やかにいられるんだ?!」、と叫びそうなのを士郎はグツと堪えた。

どうせ彼は狂人、態度に問題があるのは最初からだ。

それに士郎自身、先程の殺気に満ちた攻撃等に対して全く自ら反応していない綺礼にも気付いていた。

綺礼は少なくとも凜とイリヤの二人の殺気を分かち合っていて、反応しなかった。

「いやはや、衛宮切嗣とは逆の立場になったな。ちなみに勘違いをしているかも知れないので敢えて教えるが、さっきのは私ではない。私が命じているのではなく、彼が勝手にやっている事だ。仮にも依り代である私に死なれるのは都合が悪いだけの話なのだろう」

「(なら、ある程度はコントロールできるとして誤ね………と言うか納得がいくのかわ。

ここまで来る間に全然『蟲』や『泥』に会っていないんですもの。敢えて通らせている感じはそれか)」

凜がそう思う時、イリヤも同じ事を考えていた。

「(ならさっきのは『過信』していたという事かしら? ……いいえ、この男に限ってそれは無いわね)」

イリヤは心の何処かで彼は『アヴェンジャー』の守りが自動で働いていなくとも、さっきの攻撃に対して何の反応もせずに『ただ佇んでいただろう』と予想していた。

さながら『聖者』のように。

凜はと言うと気丈に振舞ってはいたが、内心混乱していてそれが怒りとして外に出て

いた。

目の前にいるのが本当にあの『クソエセ神父』かと、自信が持てなかったのだ。

特に彼女は彼が嫌いで、あまり関わりたくが無い為に、誰より彼の言動を理解していたと思つたからだつた。

士郎は逆に彼に感じていた不愉快さに拍車がかかつて、銃を捨てて切りかかりたい衝動を抑え込んでいた。

それはアーチャーとの対峙した時以上の苛つきだった。

「コトミネケレイ、貴方はなぜ私を生かしたの？ それに、『聖杯』の疑似降誕はどうやって知つたの？」

この二つのグループの間の沈黙を次ぎに破つたのはイリヤだった。

そしてそれは彼女自身が持つていた疑問の問い。

綺礼は彼女を「用済み」と臓硯が言つていた。ならば生かす理由が見当たらない。

そんな事をすれば「面倒」になるのは分かつていた筈。

イリヤが暴れるにしろ、逃げるにしろ。

それに『聖杯』の疑似降誕という裏技をどこで知つたのか純粹に魔術師として分かたかつた事もあつた。

「まず、君を生かした理由に対しては簡単だ。

殺すだけの理由が無い」

「ッ」

綺礼の答える態度はまるでイリヤの生死に「興味が無い」とでも言いたかったようだった。

そしてそれが元代行者である彼の本心に聞こえた。

『代行者』と言えば『神罰の代行者』の意味合いでもあり、通常は『聖堂教会の殺し屋』と裏の世間で知れ渡っていた。そして彼らにとって敵や怪しき者は「とりあえず殺す」対象でしかない。

そんな奴がわざわざイリヤを殺さずに彼女の魔術回路を介して魔力を『聖杯』の疑似降誕をするといった、面倒臭い手間があるとだけで「代行者」は普通「殺して奪う」理由になる。

「そもそも、私は誰一人として人間を殺すつもりなど無い」

「なッ?!」

凜とイリヤが驚愕の声を出し、土郎はどこかでプツンと何かが切れた音が聞こえたようだった。

「何を言っているんだお前は?! 『殺すつもりが無い』だと?! ふざけるな! 今現在、あの『アヴェンジャー』って奴を使って冬木を滅茶苦茶にしているお前が言える事か?!」  
「フム」

顎に手を当てて、悩み始める綺礼。

あるいはそうして見せているポーズだけかもしれないが、士郎達には見分けがつかなかった。

「少し食い違いがあるか。そもそも『アヴェンジャー』は『無形』だ。故にアレは『間桐臓硯』という端末を利用して現世にかたどつて、取り込んだ魔力は聖杯に蓄えられる。『アヴェンジャー』は『無』で、『聖杯』であり、取り込んだ魔力は魂ごと『聖杯』と同化しているに過ぎない」

「……………成程ね。今まで理解しなくなつたけど……………第三次聖杯戦争での異常は『アヴェンジャー』という訳ね」

「流石だ、凜。そこまで突き止めるとは、良い駒と成長してくれた。そう、かつて『聖杯』は『無色』だったが、ズルをしようとしたアインツベルンによって『アヴェンジャー』に無垢に汚れた」

イリヤを見ながら綺礼は言い切り、イリヤは腰に隠し持っている銃を取り出して撃ちまくる衝動を御する。

イリヤ自身、『聖杯』に異常があつたのは分かっていたが今まではそれをきつかけにギルガメッシュと言峰綺礼と間桐臓硯という三人によって今回の『聖杯』が『変質』された物』と思ひ込もうとしていたが、まさか自分の家が原因だつたとは思ひたくなかつ

た。

以前観たキリツグ<sup>バ</sup>の、あらゆる過去を乗り越えて、妻子すらも犠牲にしようとして  
で『平和』を、

誰も涙を流さず、

誰も不幸を嘆かない、

誰も殺さず殺さない優しい世界を追い求めたキリツグが『聖杯』の異常に気付いた気  
持ちをイリヤは分かったような気がして、足から力が抜けそうだった。

それを士郎が支える。

「お前は……………お前はそんなモノを持って、何を企んでいる?」

「何も」

士郎の問いに綺礼が即答して、言葉を続ける。

「強いて言うのなら、私は主の召されるままに動き、誰にも望まれなかった命の誕生を祝  
おうとしただけだ」

「クソエセ神父のくせに馬鹿な事を言わないで!」

「遠坂……………」

「『主』の為にですって?! そんな下らないもので貴方は動いたというの?!」

「クククク……………ハハハハハハハハハハハハハハ!!」

綺礼が無邪気な子供のように笑い始めた事に、士郎達の背中がゾワリとした。

「……………全く持つて、私は普通だったのだな。以前の私は聖職者でありながら『神』などと言うものは人を救わず、道も示さないのではなく、救えず示せないものだと思つていた。私の空虚を埋めるモノは無いと思つていた」

そこで綺礼は凜から士郎へと視線を変える。

「しかし私は『神』と会つた。この私の空虚を埋めるモノも見つかつた。そして衛宮士郎、私を理解できる者が居るとすれば、それはお前を置いて他に居まい」

「ふざけるなよ、お前！俺とお前は違う！」

それはアーチャーが綺礼に言い放つた事と酷似していた。第36話より

「熱くならないで衛宮君」

そこに凜の、必死に冷静さを保つ言葉言われるが彼女自身もあまり余裕はなかつた。

「違わないさ、衛宮士郎。私とお前の違いは詰まるところ本質の違い、たつたそれだけだ。共に壊れた行動、思想、そして願い。ただ、求めたものだけが決定的に違う。人の為に自分を捨てようとした『聖人』よ。私にはお前が衛宮切嗣の再来と見て、心が歡喜に満たされた。私は自分の為に、人を捨てる事しか出来なかつたのだから」

士郎は何かを言い返そうとした。が、言葉が出なかつた。

何故なら正しく綺礼の言つた事には士郎本人も心の何処かで気付き始めていた。

凜は綺礼の言葉で何かあと一つ足りないパズルにピースがはまったかのように、士郎の言動が分かったような気がした。

イリヤは士郎がそんな事になっているとは露も思わず、考えが纏まらなかつた。

その間、綺礼はただ言葉を続ける。

「私の妻は、私の為に死んだ。私人が人を愛せると証明しよう……その時私は涙を流した。その涙の意味が、どのような意味のものだったかは分からなかつたが……私は信仰を続ければ……何かに尽くせば……他の何かで何時か報われると思っていた」

それは士郎の以前、『正義の味方』への道を探していた頃とそっくりで、士郎は何か言いたくても、喉と口がカラカラに乾ききっていた。

「そして私は『主』に会った。これが真に愉快な事で、私は救われた！ 私は思い知らされたのだ！ 人間という獣が跋扈しているこの世界は腐っていると！ 何れ貴き者でも老いる体に釣られて腐り落ちるものだ！ 故に私は任された、決して穢れない魂、あらゆる悪にも乱れぬ魂の統一に！」

士郎は内心叫ぶ。

「それ以上は聞きたくない」と。

凜は拒絶する。



「こんな奴が自分を『弟子』ではなく『駒』』と言った意味に。

イリヤは激怒した。

「こんな奴がシロウと同じなものですか!」と。

『『アヴェンジャー』は呪いのエーテル塊。もしこれによって全人類が統一飲み込ますれば、真の平等が訪れる。誰かが誰かとの違いに悩み苦しむ、嘆く事も無い。これが、これが、それが全人類の救いだ」と道は示された!」

士郎は思う。

「もし自分が少し違っていたら、目の前の奴と同じになっていたかも知れなかった」と。  
『正義の味方』という理想論を続けていたのなら。

「私に目的などというモノがあるとすれば、それだ。『主』が囁くままに事を遂行する。そこに私の感情が介入する事は無く、また私にはそれで良い」

綺礼の指の間に刃なしの柄が数本ずつ握られた。

「喜べ少年! 君の『正義』が討つべき『悪』が今、目の前にいる! 喜べ、時臣の娘よ! 父親の仇が眼前に今ここにいる! そしてアインツベルンの申し子よ、喜べ! 先祖の不始末を自らの手で終止符を打てる事に! フハ、フハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

「……………え」

そうばやいたのは誰だろうか。

士郎だろうか。

以前、聖杯戦争の詳しい事を聞きに協会に来て、去り際の彼に『正義の味方』には『倒すべき悪』が必要なのだから」と綺礼が声をかけた時を思いだしたからか。

凜だろうか。

父の遠坂時臣が目の前の、自分の『保護者』が、10年間も世話を見られた奴が父親を殺した張本人と言われたからか。

イリヤだろうか。

自分自身が関係の無い、第三次聖杯戦争でズルをしようとした生まれた家の後始末をされている事からか。

「凜。君は未だに私が渡したアゾット剣を持っているそうだね？ どうだい、時臣を刺し殺した凶器を10年間持ち続けた気持ちには？」

プツン。

「クソ鬼畜エセ腐れ外道神父がああああああああ！！！！」

「言峰、綺礼ツツツツツツ！！」

凜と士郎から発された声は獣の如く荒く、怒りから来るもので普段の彼女達を知っている者が聞いていれば、誰もが信じなかったような叫びだった。

これに反応するかのように笑う綺礼の手にある黒鍵達から刃が伸び、綺礼は脳内であることを考えていた。

「(さて、あの御方が言ったように、私に勝てるとは到底思えんが……………どうするか見ものだな、少年少女達よ?)」

歴戦と言つていい元代行者の言峰綺礼。その真骨頂は魔術に長けている事でも、現代兵器のからくりなど知っている訳でもない。

吸血鬼や使徒といった人外相手に、殴り合つて殲滅に追い込む事さえ出来る格闘技術を使った接近戦だ。

そんな彼が並大抵の反射神経をしていない訳が無い事を悟つた三月は少し遠い所から『投影』した弓に剣をゆっくりと構えて、ゆっくりと魔力を貯める。

洞窟の天井の水滴が少しずつ落ちて、析出した物質が床面に蓄積して石筍を作るかのように。

地割れが起きる前に土が極僅かに空洞になり、地盤が緩くなるように。危険な獲物を狩る狩り人のように慎重に、ごく慎重に用意をする。

## 第43話 「大丈夫」の呪い

ライダー運営、セラ 視点

ガインッ!

鉄が強引にへこむ音がする。

ボコッ!

コンクリートやアスファルトに穴が開く音がライダー達の後を追う。

『ギギギ……………グカカガガカガガ』

そしてライダー達を追いながら笑う昆虫似の霧。

「どうするのです、貴方?!

意識を失った桜を抱えたセラが、更に彼女を抱えるライダーに問う。

「……………(さて、どうしたものですか)」

ちなみにワカメこと慎二は必死にライダーにしがみ付いていて、彼自身も築いていな

かったがライダーの髪の毛が微妙に補助していた。

ライダーは別に慎二の事はどうでも良かった。

本来ならば。

だがこんな彼でも、桜を第一、自分は遙か後の順位に思いながら行動していたのは、身近にいたライダーは分かっていたので次いでとして彼を運んでいた。

別に彼に何かを期待した訳でも無い、ただの後付けの考えだった。

そのライダーは遠坂邸を出てからずっとあの化け物から桜をどうやって守るかをメインに考えていた。

まず『撃破』か『駆除』が一番手っ取り早い。

が、ライダーにはそんな力は無い。

せいぜいが『自己封印・暗黒神殿』を解除して魔眼をキュベレイ広範囲に展開し、出来るだけ『蟲』の行動を遅くさせる。

『自己封印・暗黒神殿』。ライダーの真名『メデューサ』にちなんで彼女は魔眼の中で

も最上位に近い石化の魔眼の『キュベレイ』を所持していて、彼女が意識していようがいまいが常時発動している為、普段はバイザーを着けて制御をつけている。

今は剥き出しになった彼女の顔は機械的に次の建物の間を移動しながら――

——徐々に新都へと向かっていた。

いや、結果的にそうなっていただけで本当は別の場所を目指していた。

如何に最上位に近い石化の魔眼を以てしても、追つて来ている臓硯は捌ききれなかったのだ。

「というかどれだけ『石化』して蟲を殺しても、ほぼ同じ速度で蟲の『増殖』が続いて平行線を保っていた。

なので半分無意識的にライダーは火力を求めていた。

それは向こう岸の、新都での神秘的な輝き（エクスカリバー）を。

「あれならば」、とライダーは思いながら向かっていた。

勿論、アレが死に行く蛍の最後の輝きとは知らずに。

シユゴオオオオオオオオ!!!

バタバタバタバタバタバタバッ!!!

空を見上げると自衛隊の戦闘機とヘリコプターが駆け抜ける轟音が冬木大橋美周辺を回っていた。

それは公安や先遣隊の自衛隊員達が検問を敷いた場所に狂気から逃れようと来た市

民達と、それを追ってきた狂人達を機動隊と共に押し返していた。

ライダーにとって、深山町は余りにも見通しが良く、アレから桜達を引き離せる遮蔽物<sup>新</sup>があまりにも少な過ぎた事もあるので幸か不幸か、慎二と共に新都を夜な夜な巡ったのであちら<sup>郡</sup>の方の地理に慣れていた。

「……………ライダー、少しいいかな？」

「？ シンジ？」

今までずっと顔色が悪く、黙っていた慎二の低い声にライダーが彼を名呼びした。

だが余裕が慎二にも無いのか、彼は言葉を続けた。

「さつきから後ろから襲ってくるアレを見ていたんだが、さつき配線とかから電気ショツクを受けていたみたいなんだ」

「??? それが？」

「つまり、アレに現代兵器がある程度効くかも知れないと言っているんだ」

「……………」

「ライダー？」

「いえ、貴方はやはり頭が切れますね」

「……………え？」

慎二をライダーが初めて見下すような事や皮肉を言っていない、または無視していな

い言葉どころか、褒められた事に慎二は目を丸くした。  
『アレに現代兵器がある程度効く』。

つまり今の臓硯は対魔力がある程度高いといっても（魔眼で瞬時に石化しない事から）、物理的な攻撃での弱体化（または撃破）が可能という事をライダーは考えた。

バタバタバタバタバタバタツ!!!

急にライダーの周りが眩しくなって、臓硯にヘリコプターライトが当てられる。

それが近くの自衛隊であったのか、メデイアであったのかはわからない。

ただ次の瞬間、暗闇で出来た触手の様なものが臓硯からテールローターに伸びて機体を引きずり込む。

そしてコックピットが飲まれる前にパイロットらしき人物がドアを蹴破って、飛び出る。

が、暗闇から無数の人型の影が飛び出て泣き叫ぶ彼を中へと強引に引きずり込む。

慎二はすぐに視線を逸らす、パイロットの最後が彼の脳に焼き付く。

無数の蟲に生きながら食べられる様を。

アーチャー 視点



「またか」

アーチャーは夜の中で焼ける新都の姿をビルの屋上から見下ろしていた。そこは彼にとっては見飽きた光景だった。

「さて——」

——アーチャーは以前、凜と共に冬木市の見晴らしの良い場所からグルリと周りを見渡した。

彼が探していたのは『聖杯』らしきもので、他のすべては彼にとつては単なる背景だった。

そして——

「（——何だ、アレは？）」

アーチャーが視たのは一つのヘリコプターが黒い霧が追っていた。

そしてヘリコプターのパイロット席には紫色の髪をした成人女性が座っていた。

「やれやれ……………まるで出来の悪い、B級怪獣映画の様だ」

アーチャーは弓と剣を『投影』して、構える。

それは『偽・螺旋剣』ではなく、別の矢だった。

『三月君、"聖杯"らしきものを発見した。今から撃破を試してみる』

『……………』

「三月君？」

三月に送った念話に返事がない事にアーチャーは不思議に思う。

が、彼にはやるべき仕事があるのでそれは遂行すべく魔力を貯め始めた。

「I am the bone of my sword——」

シユン！

アーチャーが矢を解き放ち、怪物の前にいたヘリコプターが同時にそれを躲すべく、方向を変えて、速度を上げる。

「ほう、流石はライダー。騎乗スキルは伊達ではないという事か」

ドゴゴオン！

アーチャーの矢の着弾と共に爆発音が二つ起きる。

一つはアーチャーの矢。そしてもう一つは教会方面からだった。

「……………本当に、君は相変わらず凄いな……………何?！」

関心で言葉を漏らすアーチャーが教会から新都へと視線を戻すと驚愕に変わる。

「やはり一筋縄では行かないか！」

アーチャーの矢が着弾したのに関わらず、『聖杯』の怪物は健在だった。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、衛宮三月 視点

時はアーチャーがまだ高層ビルに向かっていた時と、ライダーがまだヘリコプターの奪取無断使用に至っていないなかった時へと戻る。

そこには2・5人の魔術師と元代行者が激しい攻防を繰り返してた。

言峰綺礼は怒りでガンドを撃つ凜と、自分へと斬りかかって来る士郎と、イリヤの放ったエペの形をした使い魔達を涼しい眼で見ながら、彼の持つ黒鍵が月光を撒き散らす。

「ふん」

綺礼は若干不満そうな声を出し、それらを切り落とし、もう一つの手で黒鍵を数本投擲する。

士郎がこれらの大部分を『投影』した双剣で払い、向かって来る綺礼の拳をガード—

バキバキバキバキバキ!

「嘘だ r ————ぐあ?!」

———仕切れずに碎け散って、遅くなったパンチが士郎の肩に当たり、ミシリと彼の骨が悲鳴を上げた。

まだまだ終わらないといったように左右に展開した凜とイリヤがガンドとエペ、そし



グサリ。

「ぬぐー！」

綺礼は背後から何か刺される感触に下を見ると――

「『Last』！」

――アゾット剣が突き刺さっていて、刃が光る。

それは、綺礼が自分の師である遠坂時臣から渡され、彼を背後から突き殺した凶器だった。

「吹き飛びなさい、言峰綺礼！」

ドゴオン!!!

凜の声と共にアゾット剣に込められていた魔力も解放されて爆発が起きる。

士郎と凜は爆発の至近距離にいた為体を吹き飛ばされ、地面を転がる。

「グッ……………奴は?!」

これからいち早く回復した士郎は体を起き上げさせ、綺礼のいた場所を見る。

「……………嘘」

「……………流石に玉砕覚悟の特攻とは、予想外だった」

イリヤの声に反応するかのように左の脇腹がごっそりと無くなっている綺礼が面白そうに笑っていた。

そして何故かそのような大きな傷があるというのに、出血が明らかに少なかった。

「(ふむ、これは奇妙な感覚だ。『痛み』は残るのか)」

「綺礼………アンタ、どうやって生きているの?」

顔色が少し青くなった凛に対して、綺礼が答える。

「何を今更。私はどうの昔に死んでいる。十年前のあの日から私の心の臓は脈を打っていない」

「遂に人間を辞めたっていう訳ね……まさかアンタも人外とは」

「酷い言われようだ。だが私はまごう事無き『人間』だよ、凛」

「お腹にデツカイ風穴を開けている奴が言う言葉か?!」

「少なくとも私は自分を『人外』と思った事は無い、貴様と同じだよ。衛宮士郎」

「コトミネキレイ、貴方の『主』とは何?」

イリヤの問いに、綺礼は口を吊り上げ、夜空を見上げる。

これを見た三月はボソリとある人の言葉を口にしながら目つきが鋭くなっていた。

「My body is made of——」

「ホームクルスの君がそこまで興味を出すとは、意外だ。だがそれもじきに分かる。

我が『主』は大層、君達の事を気に入っていた——」

ヒュン！ ビキビキビキ！

「グウ！（『痛覚遮断』！）」

三月が矢から手を離すと空気を鋭く切る音と、骨にひびが入るような音が彼女の耳朶を襲い、その瞬間に激痛が彼女の体に走り、遠坂邸でセラが言っていた『痛覚遮断』を実行してみた。

【告。 左半身の前腕、上腕、肩峰、腋窩、胸郭に損傷——】

「（やつぱりちよつとやばいかな、これ——）——グフ?! ガハッ！」

『三月君、聖杯』らしきものを発見した。 今から撃破を試してみる』

ドゴゴオン！

三月が思わず血を咳き込んでいる間に彼女の矢の着弾と共に爆発音が二つ起きて、アーチャーの声が頭の中に響くが、彼女に答える余裕は無かった。

「ガハ、ゴホ、ゴボ！」

カラランツ！

乾いた音と共に『投影』した弓が三月の手から落ちて、消えていく。

痛覚を感じないとはいえ、内部出血までは誤魔化せない為、血を吐き出しながらも三

月は自分に治癒術を使う。

綺礼のいた場所では土煙の中、爆発の前に『強化』した体で士郎とイリヤを無理矢理引き離した凜が気付けば、他の二人の少年と少女を覆うように体が上になっていた。

「……………」

「……………遠坂、サンキュー」

「……………リンの体って……………何か腹が立つ」

「……………そうか。まさか……………四人目がいたとは」

綺礼の声にギョツとする士郎、凜、そしてイリヤが起き上がって彼の方を見る。

彼は手を夜空へと左手を伸びし、体が腹部から下、そして右の肩から先が吹き飛ばされていった。

---

言峰綺礼 視点

---

綺礼は気付けば、空を見上げて手を伸ばしていた。

どこまでも透き通ったような夜空。



体は寒く、力が入れない。

いや、体が寒いといった感覚が十年前からだだが、今感じている『コレ』はそれ以上だった。

だるくなって行く頭がこのまま寝てしまいたいと訴え、それは綺礼にとって実に魅力的な提案だった。

何せ自分は大役を任されてそれを終え、事態はもう止まる事はない段階になっているだろう。

彼の視界に異物が混ざる。赤と白が掛かった髪の毛の少年、月の様な銀色の髪の毛の少女、そして彼が十年育て上げた『駒』。

「立たなければ——」

そう思い、体を起こそうとして左手が落ちる。

だが体に力が入るところか、虚脱感が広がって行った。

「凜……私は今……どんな状態だ？」

綺礼の弟子が呆れたような視線を送る。

「……………お腹から下、そして右腕が吹っ飛んでいるわ」

「成程……………通りで体が動かない訳だ」

「というかアンタ、そんなに凄い奴ならどうしてこんな事をしたんだ？ 他にも、道は

あつた筈だ」

衛宮の少年が綺礼を見ながら聞く。

「何、私の前に『神』が現れただけの事。導くままに、私は動いただけだ」

綺礼は「勝とう」とは思わなかった。

それが『運命』だったのだから。

だが「<sup>死</sup>負ける」<sup>ぬ</sup>とも思いはしなかった。

自分は『優秀』だから。

「キレイ、教えて。『アヴェンジャー』………というかいまの『ゾウケン』はサーヴァントが倒せるモノなのかしら？」

「?!」

イリヤの質問に士郎と凜がビクリとする。

あの大群の蟲を経験した者ならではの、最悪の想定だった。

「可能だ。もとは『聖杯』だが、今や『アヴェンジャー』と間桐のご老人は完全に同化している状態。もつとも、君達が経験したように彼らが『宝具の限界を超えていなければ』の話だがね」

「貴方は………」

途端にもう一つの異物が綺礼の視界に入る。

さっきの小柄の少女とよく似た、くたびれたコートを着た金髪の少女。

「君は……成程、これは『勝てない』 訳だ……ク……クククク」

「貴方は独りだったのね」

不意に笑う綺礼に、三月がかける言葉に彼は一瞬目を見開く。

それは、彼が初めて人間らしい反射神経的行動だったかも知れない。

「いやはや、どうしてこうも……ああ、今の私は最高の気分だ………礼を言おう、少年少女達よ………私は………やつと脱<sup>死んで行</sup>落<sup>け</sup>できる」

綺礼は視線を三月に向けたまま、言葉が続ける。

「私は『正しく在る』事は出来たが、終ぞそう感じる事は無かった。周囲の『正解』を真似する毎日。『人間』<sup>ヒト</sup>でいられるように、自分を誤魔化し続け、その度に私は己の存在が逸脱したものと思ひ知らされた。だからこそ、私は嬉しかったのかもしれない。

私が妻を亡くした時の喪失感、苦痛、空虚を埋める『神』と出会った事に」

ここで綺礼が涙を流し始め、士郎達は気付く、あるいは心で疑っていたそれが確信へと変わった。

言峰綺礼が一人の破綻者で、大事なことに目を背け、それをある日気付いた、または気付かされた事に。

「……………（認めたくないが、昔は俺もお前だったんだな）」

士郎の目の前には自分が在りえた可能性だった。

間違えばかりをして生きて来た………というかたつた一つとして政界をする事無く、不正解の選択を取った、愚かしい人生。

ただ士郎と違つて、綺礼は『独りで生きる』事が出来なかつた、ただ一人の『人間』が苦しんで苦しんだ末に、とある日に『神』に出会つて今の行動を起こした。

その姿は三月にとって、とてもとても——

「———こんな私の為に泣いてくれるのかね？」

「……………え？ あ、あれ？」

気付けば彼女は泣いていた。

「フ……………フフフ……………（何という事だ、この私が誰かを泣かせるとはな）」

綺礼はただ笑いながら涙を袖で拭き取る三月を見ていた。

「私にとどめを刺せ。私から、君への頼みだ」

「グス……………分かつた」

三月がそう言い、取り出した銃に綺礼の口元が釣り上げる。

「(クククク……………皮肉なものだ。またその銃で撃たれるとはな)」

三月が右手でトンプソン コンテンダーで綺礼の頭を狙い、その姿が綺礼をかつての

宿敵と連想させた。

収まりの悪い黒髪に無精髭の生えた顎に瞳は当然のように死んでいたのにも迷子の目つきをしていたあの青年を。

「これで僕も君とはお別れだ、言峰綺礼」

いや、自分の見間違ひなどでは無かったようだ。

今は少女という者には似つかわしくない口調と表情。

そして自分と同じく死んだ眼だった。

思わず笑いがまた出てきそうになるのを綺礼は止める。

「ああ。 さよならだ、衛宮切嗣」

そう言いながら、綺礼は静かに目を閉じて、一つの発砲音が辺りに鳴り響く。

それが引き金化のように、綺礼の意識はぼったりと途切れる。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、衛宮三月 視点

三月の持っている銃から大きな発砲音がやまびこの様に辺りに反射する。

「……………」

『三月が何の躊躇もなく人を殺した』。

その出来事がただ士郎達の頭の中で浮かび上がっていた。

「……………三月、大丈夫？」

凜が警戒しながら三月に問う。

「……………大丈夫、問題無い。ただ少し、疲れただけ——う」

三月がふらつきながら頭を片手で抑え、イリヤが支える。

「口調も少し変わっていない？」

「……………大丈夫だよ、イーちゃん……………ちよつと気が遠くなっただけ」

「ねえ、三月？ さっきのつて、アーチャーの技だったでしょ？」

「え、あ、ええ。 そうよ」

「……………まったく…（どうしてこの兄妹はこうも非常識な事が出来るの？）」

「だからか。 あいつの魔術、馬鹿みたいに魔力を食うからな」

「え、ええ。 そうn——」

「——告。 言峰綺礼を入手シマシた。 ■■■の条件を満タシマシた。」

「う」

三月の顔が青くなり、謎の感覚と不愉快な感覚で口を抑える。

『三月君、君は今どこだね？』

「うぶ……………あれ、アーチャーさん？」

溜飲が下がり、三月は思わず声に出して答える。

「アーチャーが？ 彼、何て言っているの？」

『えっと、教会で神父さんを倒した後だけど』

『よし、大至急新都へと向かって来てくれ！ “聖杯”を叩き潰すのに圧倒的な火力が必要だ！ 宝具を撃てる君と令呪が必要だ！ ランサーはどうかね?!』

『よおマスター、こっちはこっちで手がいっぱい！ わりいが、とても手を離せねえ状態だ！ こっちも令呪を使うタイミングをし——ウオオオオオオ?!』

ランサーからの連絡はプツリと切れ、彼の現状がどれだけ切羽詰まっているのが声に出していた。

「……………新都にアーチャーさんが『聖杯』を見つけたみたい。令呪と、私のバックアップが必要みたい」

「三月……………本当に大丈夫か？」

「え？ まあ……………正直もう布団の中に籠りたい」

士郎に答える三月は何時もの元気が無く、さつきからずっと顔色が悪かった。

「でも……………『これ』を終わらせないといけないから、まだ大丈夫よ」

「……………」

「そう、なら行くわよ」

「遠坂！ お前——！」

凜のさっぱり過ぎた態度に士郎が彼女の名を呼ぶ。

「——三月の言う通り、私達には時間が無いわ」

「シロウ……………貴方の気持ちもわかるけど、リンの言う通りよ」

「イリヤまで……………」

士郎は凜とイリヤ……………ではなく、冷徹に成り切った『魔術師』の二人を見た。

「よし！ それじゃあ行くかうか、兄さん！（大丈夫、まだ大丈夫よ、私は……………）」

三月がパン！と自分の頬を叩き、何時もの態度へと変わる。

「（三月……………）」

「（大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫——）」

士郎にとって、今の彼女は無理をしているかの様に見えていた。



## 第44話 義兄妹と蛮勇

ライダー運営、セラ 視点

時はアーチャーが臓硯を撃つ前の少しに戻り、ライダー達は彼らの空中に近づいた三菱UH-60Jを借りて臓硯ハイジャックからの逃走に活用していた頃だった。

尚もともと中にいた人達はライダーによって力尽くで放り投げ出されていた。勿論、彼女が彼らを気遣う必要はない。

無いのだが慎二をパイロット席に座らせた責任もあり何かがあつた際の為に未遠川の上だった事もあり、投げ出された人達は川の中へと落ちて行つた。

なので少なくとも生きてはいた。

勿論ライダーが彼らを気遣つた事からではなく、慎二ワカメが誤つてヘリコプターを墜落などさせば桜が危険に侵される。その配慮から川の上を走っていた。

「ライダー！ もうすぐ新都に入る！」

「シンジ、変わります。桜達を頼みます」

もう一つの操縦席にライダーが座り、慎二は後ろにいた桜とセラの様子を見に行くと、ここでヘリコプターが酷く揺れて、急激にスピードを上げる。

アーチャーの狙撃をライダーが回避したのだ。

ドゴオン!!!

ヘリコプターの後ろで大きな爆発が起きて、慎二は笑い始めた。

「ハハハ………ハハハハハハハハハハ!! 何の悪い冗談だよ?! ハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

アーチャーの狙撃で少しは止まったものの、追いかける事を再開した化け物<sup>臓</sup>を慎二は笑った。

桜の目は虚ろで、焦点が合っていない、ただ前を見ていた。

「桜——!」

『——サアクラアアアアア!!!』

「——ヒイ、ヒイヒイヒイヒイ!!!」

桜が頭を抱え、体が震える。

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ——!!!」

さつきから桜は気薄で、臓硯の声にしか反応していなかった。

しかも決まって謝るだけだった。

ひたすら謝って、許しを乞うかのように。

これを見ていた慎二の中で怒りが爆発した。

「違う！」

慎二が桜の肩を掴んで未だに謝る彼女の体を揺する。

「ゴメンナサイゴメンナサ——!!!」

「違うんだ、桜！ お前は何も悪くない！ 悪いのは——」

慎二がスウィーツと息を呑み込み——

「——悪いのは間桐家だ！」

ここで桜の体がビクリと跳ねて、謝るのを止める。

『間桐家の当主』に執着し続けていたあの慎二が『間桐家』を否定した。

それは桜にとって大きな事で、まさか慎二がそんな事を言うとは思わなかった。

ソレを欲していようが無かるうが『間桐家の次期当主』として祭り上げられた桜。

ソレを生きがいとして、『間桐家の次期当主』に固執していた慎二。

そう桜は二人のスタンスを取っていた。

「桜、聞いてくれ——」

「——貴方、今の状況下で何を——？」

「——いいから黙ってくれ！ 僕は……」

焦点の合っていない眼の桜と、セラに叫ぶ慎二が間を置いてから言葉を続ける。

「……僕はずっと逃げていたんだ。僕は、臆病者だ。『間桐家に必要無い存在』と知つても尚、それを追いかけて続けた。でないと僕は……僕はどうしたらお前を守れるか知らないからだ」

桜の目が一瞬泳ぐ。

「僕はな、三月に慰められた事があるんだ。覚えているかい？ お前に言つた事？ あれは僕の実体験だったんだ」第17話より

「……………」

「そんな彼女を僕は………殴つたんだ」第5話より

桜の目がやつと動き、信じの方を見ると——

——彼は笑いながら泣いていた。

「そんな彼女が僕に何を言つたか分かるかい？ 僕はてつきり罵倒されるか、泣きつかれるかと思つたんだ。でも違う。彼女はこんな僕に誇りを持ってくれたんだ。」

でも僕は結局逃げた、『鍊金術』に。それは全部お前の為なんだ」

「……………え」

桜が小さく声を出して慎二を見続ける。

「笑えるだろ？ こんな僕がお前を助ける為に研究に没頭して、結局はお前に成されていた事から逃げていたんだ」

桜はここで思考が戻り始め、セラは逆に何故慎二がこのような事を今の彼女に言っているのかが分からなかった。

「だから桜、僕を憎め。怖がるな。全部僕の所為にしてくれ」

慎二が未だに笑いながら泣いて、桜から離れ、彼女は思わず手を彼へと伸ばした。

「に……………いさ……………ん……………」

ヘリコプターのローター音の元で聞こえる筈のない、桜の声に慎二はリュックの中から一つの瓶を取り出した。

「ツ?! 貴方、一体どこでそれを?!」

イリヤの世話と教育係を務めていたセラにはそれが高度な鍊金術で作り上げられた、極めて効力の高い物とは分かった。

それは神秘の薄れた今の時代にはとても似つかわしくない代物だった。

桜はジッと慎二を見て、彼ははにかみながらヘリコプターのドアを開けて、外を見た。

『きいいいさアアマああああ!!! ドオオオオけええええええ!!!』

そこには自分を邪魔者扱いする現間桐家当主の成れの果ての姿がまたも自分を邪魔者扱いが追っていた。

「じいさん! アンタは今さぞかし喜んでいらっしゃるな! 夢に見ていた『不老不死』を得たんだからな?!

『■■■■■■!!!』

慎二の叫びに帰って来たのはもう既に言語化不可なノイズだった。

「そうさ、アンタは僕の事をゴミ以下と定義付けた! 今からアンタに見せてやるよ、このゴミ以下の僕の成果をな!」

「貴方、何をやっているのです?! 早く中に——!」

セラがヘリコプターの外に寄りかかる慎二に叫び、桜の目が見開く。

慎二が彼女に優しく微笑んだ。

「.....や」

「さようなら——」

——それはとてもとても清々しくて——

「いや——」

「桜——」

とてもとても幸せそうなの——

「いや——！」

「愛しているよ。」

—— スッキリとした少年の笑顔だった。

「兄さん！ 兄さん！ 兄さん!!!」

セラの腕の中で涙を流しながら暴れて手を伸ばす桜の前から慎二は——

——  
ヘリコプターから飛び降りていた。

間桐慎二 視点

『怖い』。

その立つた一言が慎二の頭の中を占拠していた。

だがそれは別に今始まった事ではない。

『間桐慎二』。幼い頃から魔術師として欠陥品という自覚を持ちながら、「それでも選ばれた一族の嫡子である事実は変わらない」と自分に言い続け、間桐家の後継ぎである事を誇りとし、自分は「他の人間とは違う特別な存在だ」という自尊心を持つて生きてきた一人の少年。

養子としてきた桜に対して、「愚鈍で何も出来ない、哀れな妹」と定義付ける事で自分の自尊心を満たそうとする日々、ある日彼は『衛宮士郎』という奴の事を知り、そこから彼は女性の温もりを知った。第17話より

そこから彼は知らず知らずの間に理解し始めた。

「ああ、自分は誰かを必要としていたのか」と。

これは『選ばれた一族の嫡子』としてはあつたはならない事と、そのような存在は何時も孤高と、信じ込んで逃げていた彼に影響を与えていた。

「ハ……………ハハハ……………ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!!」

「自分は何故こんなような事を今更考えているんだろう?」と思い、何時もの癖で彼は笑った。

彼が心底怖くなった時の癖だ。



「笑えば元氣が出る」という、彼独自の自己流のおまじない。

「(ああ………僕は………僕は——)」

いや、訂正しよう。

「笑えば元氣が出る」というおまじないも実は彼女を見習ったものだ。

周りから『月』と呼ばれていた彼女は慎二にとって、何時も笑いながら周りをどんな時にも明るく照らした姿は『太陽』そのものだった。

自分の手が絶対に届かないような所も一緒だと思ひ、更に笑う慎二。

もう目の前にあのクソ爺（親）が迫つて来て、自分の手の中にあるものを見た瞬間怯んだ事に心の中の恐怖に少しだけ、ほんの少しだけ『歓喜』が混じつた。

だがそれもすぐに別の何かに入れ替わつた。

「——死にたくない」

思わずそう声を出した瞬間、慎二の中を占拠していた『恐怖』が『後悔』へとすり替わつた。

そして胸奥にしまっていた本心が溢れ出始めた。

ダムが崩壊したかのように。

「死にたくない………死にたくない！ 死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない!!! 僕は死にたくないッッッ!!!」

「なら『正義の味方』としては無視出来ないな、慎二」  
ガツシリと誰かが慎二の体を支える。

「『ギリシヤの火』か、こんな危ないものをよく瓶なんかに入れておいたな。しつかりと処分しないとな」

慎二の手からスルリと瓶が取られて――

――彼の手によってクソ爺職に投げられ、彼はライダーの鎖付き短剣をヘリコプターへと投げて、ライダーがそれを片手で受け止める。

「……………衛宮？」

「……………まいったな。君にも分かかってしまう位か」

慎二を支えていたのは――

——『正義英霊エミヤの味方』だった。

ライダー運営、セラ、アーチャー 視点

『ぎゃあああああ!!! あツイいいいい!!!』

「チツ、化け物が」

アーチャーが舌打ちをしながら未だに彼が乗っているヘリコプターを燃えながら追う臓硯を見ていた。

「ちよ、待てつて——!!!」

「——バカア! バカバカバカバカバカバカバカ!!」

そして場違いな義痴話兄妹げんかが彼の後ろで起こっていた。

涙を流す桜が力の入らない腕で慎二をポカポカと叩いていて、彼は桜に元気が戻った事に半分嬉しくなる半面に複雑らしい顔をしていて、呆れたような顔をしたセラが見ていた。

遂に黙ったままに出来なかったのか、桜が息継ぎしている間に慎二が口を開ける。

「わ、悪かったって桜！ 僕が勝手過ぎたって！」

「貴方は何時も何時も何時も何時も何時も何時も何時も何時も何時も何時も何時もそうです！」

勝手に自分で背負い込んで！ 勝手に自己完結して！ 勝手に無茶をして！ 勝手に

に他人の為に傷ついても笑って！」

「よ、よく衛宮たちの事を見ていたな桜？」

「私は先輩達だけじゃなくて貴方の事も言っているんです！」

「……………え？」

慎二がポカンとして、ハアハアと息を切らす桜を見た。

「私は慎二さんが昔から隠れながら私の為に色々としているのは分かっていたんです！」

でも隠れながらそうしていたから、私は敢えて何も言わなかったんです！」

それはかつて、桜が衛宮邸の土蔵で士郎に言った事の一部だった。第19話後半より

「でも私が黙っても周りの貴方達は必死に私の為に色々やって、傷ついて、『大丈夫だ

よ』って安心させようとして！ それが全部『私の為』と知っている私の気持ちも考え

て下さい！」

「セ……………桜……………僕は——」

「すみません二人とも、ですが今は言いたい事の続きは胸の奥に仕舞ってください。

全てが終わった時の為に」

「え？」

「ラ、ライダー……………お前……………」

それは、何時も物静かなライダーが初めて他の人の言葉をさえぎってまで自分の考えを出した瞬間だった。

「君は主思い……………失礼、兄妹思いなのだな」

……………いえ。今騒が

れては運転に集中出来ませんので」

……………フ、そうか」

「そうです」

ニヒルに笑うアーチャーに、無表情なライダー。

「で、後ろの『アレ』はどうするのです？」

「……………ついさつき、マスターに連絡を取った。彼らは言峰神父を倒し、新都へと

向かって来ている」

「作戦は？」

「作戦は至極単純。どの怪獣映画でも出てくるような場面さ。最高火力を以て『ア

レ』に総攻撃をかける、それだけだ」

「……………ゴリ押しですか」

「不満かね？ だが現在の戦力では他に方法が無い」

「……………そうでしょうか？」

ライダーの返事にアーチャーが彼女を見る。

「どういう事だ？」

「……………」

「……………そうか」

黙り込むライダーに、アーチャーが何かを察したように声を出す。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、衛宮三月 視点

士郎達は車を駐車した場所に戻り、道路を走っていた。

誰も何も言わずにただ、黙っていた。

これは別に誰も何も言いたくないとか等ではなく、ただ単に全員が疲労していたからだ。

ここ数時間…いや、それ以前に数日間口クナ休憩を挟まなかった行動の過労が追いつ

き始めていた。

ましてや死闘の連続でアドレナリンの分泌の効果も切れ始め、四肢は鉛のように重かった。

あの士郎や凜でさえ、頭が船を漕ぐかのように動いていた。

これは運転をしているイリヤも同じで、瞼がほぼ閉まりかけていた。

「……………運転代わるよ？ イーちゃんも休んで」

そこで三月の声が心地よい提案に聞こえ、イリヤは車を道路の橋に寄せ、無言で後ろの席ですでに寝ている士郎に寄りかかって瞼を閉じる。

三月は寝ている三人を見ながらガラガラと薬の入っている瓶を振り、手に落ちた全ての錠剤を口に含んでかみ砕く。

「ボリボリボリボリボリボリボリボリボリボリ……………ゴツクン……………よっしゃ！ まだまだいけるでく！！」

鼻がムズムズした三月は車の小物入れの中を漁ってティッシュ箱を見つけて鼻をか

むと——

——ティツシユペーパーが真つ赤な血で染まっていた。

三月が鼻を拭き、鏡を見ると静かに眠っている土郎、凜、そしてイリヤを見て、急  
 体を腰で前に折つて咳をする。

「ゲホー・ゲホゲホー・ガハッ！ゲボツ！オエエエエエえ!!!」

咳と嘔吐に血が混じつて、三月はそれらをティツシユで口と鼻から拭き取る。

「ハア、ハア、ハア……………（大丈夫、私はまだ大丈夫）」

実はと言うと三月が綺札に放った矢の反動は体に残っていた。

ただ未だに『痛覚』を遮断して、体が満足に動けるフリをしていたに過ぎなかった。

なので土郎が先程思った、「今の「三月」は無理をしているかの様に見えていた」とい  
 うのは、あながち間違いなどでは無かった。

流星は義兄妹と言った所、三月だけでは無かった。

彼女は少しだけ呼吸がマシになり始めた頃に車の中に戻り、イリヤの『運転技術』を  
 使い始める。

「（あと少し、もう少しで……………これが終わったら家に帰って——）」

車に付いている一つ残ったヘッドライトを頼りに三月はアーチャーの言っていた場  
 所へと向かう。



「——長風呂に入って、桜の作った晩御飯を皆で食べて——」

彼女は冬木の東にある高速道路沿いに車を北へと走らせていた。

「——イーちゃんと夜中にゲームをして、セラに見つかって、寝るフリをして、次の日にセイバーと……あ、ダメか……私と兄さんが朝の稽古をして、イーちゃんも混ぜて——」

それは知らずの間に意識が朦朧と自覚が無かった三月が脳内で描く、最近の日常の妄想だった。

そんな彼女が自分の唇と鼻からポタポタと落ちる赤い液体に気付かなかったのも領けるような意識だった。

公安機関、自衛隊 視点

冬木大橋ではパニックはまだ起きていないものの、時間の問題だった。

長らく精神汚染にも似た空気当てられる公安や自衛隊員にも効き始め、隊列の乱れや、過ぎた暴行にすぐに出る者達が出始めた。

未だに戦線維持が出来たのは、敵対者たちが未だに団結して組織だった行動を起こし

ていなかっただから。

もうこれが一時的な混乱とはだれも甘く思っていないく、『戦争』と呼んでも過言ではない状況だった。

そこに後から来た自衛隊の本体と、米軍の応援が彼らの精神的安定剤として、どれだけの救いになったか誰も自覚はしていないが、またも精神が汚染されるのは時間の問題。

よつて、上空に待機を出されていってただ指を啜えて事の成りを見ていた航空自衛隊に冬木管制官から命令が出る。

『新都に友軍無し。空爆を開始』と。

その時と同時に陸上自衛隊の各部隊にも似たような命令が出る。

『新都に航空自衛隊が空爆を行いこれが終わり次第、新都内部のテロリスト達を武力で強制鎮圧せよ』と。

勿論、彼の中に冬木に親族や知人がいる者達は何度も確認を取った。

彼らは『自衛隊』であつて『軍』ではない。

『自国民を侵略、財産及び領土を外国、または外敵から守る』。

全員ではないとしても、多くの自衛隊員達はそんな標語を（差はある程度あるもの）信じ、自衛隊に志願した。

だが今の命令は明らかに「自国民を殺せ」と似たようなものに聞こえた。

『こちら葉鳥羽です！ 冬木管制、もう一度お願いします！』

『こちら冬木管制、命令に返答は無しだ！ これは自衛隊トップが決めた事らしい

……………俺達値も抗議をしているが……………正直命令の変更は見えてない』

『ではせめて、あの怪物を先に討たせてくれ！』

『……………』

『頼む、日向！』

『葉鳥羽……………これより、冬木管制は10分間の間通信故障のメンテに取り掛かる……………ご武運を』

プツリと通信が切れるのと同時に、航空自衛隊達は隊内通信へと切り替える。

『葉鳥羽大尉、ありがとうございます』

『気にするな中尉。実は俺の孫達も新都で働いて、住んでいるんだ……………』

『ハハハ、これがあの映画オタクが言っていた場面なら俺達は“ヒーロー”か、光の巨人が来るまでの“噛ませ犬”かのどちらかですね』

『よし！ なら犬らしく、一発キツイのを噛ますとするか！ 4機は俺のリードにウエ

ポンズフリー！ 他のヤツは敵の出方を見て、俺に報告してくれ！』

『『『『『了解！』』』』』

そう言い、5機のF-15Jが燃えている臓硯に目掛けて攻撃を開始する。

## 第45話 「頼み」の呪い

公安機関、自衛隊 視点

『撃てー!』

その通信でF-15Jの何機が同時にミサイルを撃ち込む。

『■■■■!!』

臓硯の咆哮が上昇し始めるパイロット達のカノピーの強化ガラスをガタガタと音を鳴らせる。

『どうだ?! 一個ぐらい効果有りそうなのは無かったか?!』

『ダメです中尉! ミサイルもバルカンも呑み込まれていきます! ダメージを与えてはいますが………』

先程からF-15Jの戦闘機部隊が交代制で様々な火器を使って攻撃していた。が、決定的なダメージは目に見えていなかった。

それどころか、功を焦った何機かは接近しすぎてミサイル同様に呑み込まれていっ

た。

『クソ、もうすぐタイムリミットが来るって言うのに!』

内心ハラハラしつぱなしの葉鳥羽中尉は出来るならば一度上層部に取り合つて空爆をあの怪物限定にし、それこそ怪獣映画のように自衛隊と米軍の総力を集結して打つような相手と分かっていた。

今までの行動に意味があるのかどうかも分からず、数機を既にロストした。

同僚達の断末魔からしてパイロットは死んだと見ていい。

唯一の救いは怪物が一機のUH-60Jを追っていて、彼らが怪物を人里から誘導していた事か。

これを見たF-15Jのパイロット達は何度も通信を試すが通信機が壊れているのか、応答は無かった。

というか恐らく通信が聞こえていなかったのだろう、何せ女性のパイロットはヘルメットをしていなかったのだから。

『だがやるしかない! ダメージがあるのならば、攻撃の手を緩めなければ少なくとも被害を小さくできる筈だ!』

そう言い、F-15J達が臓硯に目掛けて攻撃を再開しようとしたときに新しい声が通信越しに聞こえてきた。

『こちら陸上の武田大佐だ。少し無理を押し通して君達航空の通信に繋いでもらった。君達も恐らく、我々と同じような命令を受けたと思うが……別の通信機で聞かえて来る通信を聞かせるぞ——』

『——ビーザザザザ………こちらレッドー、公安と自衛隊の諸君聞こえるかね？ 私は今航空隊が攻撃をしているあの化け物が追っているへりに搭乗している者の一人だ』

それは青年男性の声で、もし彼に言っていた事が本当ならばあんな切羽詰まった状況の中だというのに冷静な声は彼が如何に修羅場慣れしているかを表現していたようだった。

『私を信用しろとは言わない、ただ今からあの化け物に一発撃つだけだ。それを見て、私の言う事を信じるか信じないかはそちらに任せよう』

その途端、一閃の光がヘリコプターから射出されて大きな爆発と共に怪物を怯ませた。

それは、F-15J達のミサイルを数発同時に着弾させた成果と同じ火力だった。

『さて、見ての通りアレにある程度打撃を与える事は出来るが致命傷とまでは行かない。私だけでは火力が足りないからな』

それは航空隊、及び双眼鏡などで見ていた陸上隊や米軍には信じられない光景だっ

た。

たった一つの攻撃でミサイル数発の攻撃力があるヘリコプターの人物はそれこそ文字通り超人としか思えなかった。

『ありえない』。

それだけが頭を駆けて行った。いよいよ恐怖や不安などで幻覚や頭が狂ったのか

.....

『では本題に入ろう。あの怪物には“核”があり、それさえ健在であれば無限に再生する。つまり諸君等が攻撃していたのはあくまで“鎧”だ。よって君達に頼みたい事は同時にありつただけの火力でその“鎧”を引き剥がした隙に私が今より重い一発を撃ち込む』

『そんな馬鹿な』。その考えだけが自衛隊員達や米軍に残った。

何故なら、そんな都合の良い話がある訳が無い。

そんな、まるでアクションヒーロー映画じみた頼みごとをリアルで聞くなど

.....

『もし、これを承諾するのならばこの周波数で返事をしてくれ』

『.....各隊員、上空で待機！ 私が様子を見る！』

『『『中尉?!』』』』



そう葉鳥羽中尉の機体が急降下し、怪物の前を飛んでいるUH—60Jへと近づく。

『さあ、どんな秘密兵器を——なッ?!』

そこで葉鳥羽中尉が見たのは一人の成年男子が開いたドアから弓を持っていて、槍の様な矢を引いていた。

キャビンの中では15、6歳程の白い髪の毛をした少年少女と、メイド服らしきものを着た成人女性、そしてパイロットはプロポーション抜群でボディコン服を着た女性。

『ハ……………ハハハ……………何の……………悪い冗談だこれは？ 質の悪いアングラB級映画

より酷いじゃないか』

『は、葉鳥羽中尉?』

『中に弓を構えている男性一人と、中に少年少女が一人ずつ、メイド服っぽいのを着た成人女性と、バブル時代でも見なかったようなボディコン服を着たパイロットなんて……………』

『……………はあ?』

混乱した他の航空隊や陸上の声が返ってくる。

それを直視していない彼らからすれば葉鳥羽中尉の通信はもはや夢物語の領域を超えて、『発狂』のレベルだった。

『…あー、中尉? こちら陸上の武田大佐だ、もう一度——』

葉鳥羽中尉が見ている中、弓から矢を射て、先程と同じ攻撃が怪物に当たる。

『本物だ！ 奴は本物だ！』

赤い服装を着た男性は通信機を頭に戻す。

『さて、隣にいるのは航空隊の指揮官かね？ 私を信じるかどうかは別にして、このままジリ貧のまま攻撃を続けるか？ それとも協力して——』

——英雄になってみないかい？』

ライダー運営、セラ、アーチャー 視点

「(さて、どう出る自衛隊)」

アーチャーは先程のパフォーマンスの為にワザと爆発力の高い武装を使った。

勿論今の臓硯の内部にあるはずの『聖杯』相手に必要なのは『爆発』ではなく『貫通力』なのだが敢えて見た目が良いものを選んだ。

「(しかし皮肉なものだ。英雄などと言ったモノを毛嫌いした私が……………)」

『……………こちら航空隊の葉鳥羽中尉だ、君は誰だね？ 所属と名を言え』

「(かかったか。) 何、こちらはただの通りすがりの『正義の味方』だ。名はとうの昔に捨てた。それで私を警戒するのは当たり前なので、まず情報を与えよう。『アレ』に対する武装は全て着弾前に起爆出来るものに限定しろ、『アレ』に触れた時点で主導権を持つていかれる。あと、既に何機か取り込まれたようだが『アレ』の近くに行つてはダメだ。見ての通り食われるからな」

『……………君は何故そこまでするのだ？ 君の様なモノなら——』

「——さつきも言ったように、『アレ』は無限に再生する。今はこちらの攻撃などで増殖は止まったが、それも何時まで持つか分からん。『アレ』は人の手のみでどうにか出来る代物じゃない」

『……………』

『……………こちら、陸上の武田大佐だ。私は彼に賭けようと思う』

『大佐?!』

『これで貸しは無しだぞ、葉鳥羽』

『……………こちら葉鳥羽中尉だ。聞いた通りだ皆』

アーチャーはフツと笑いながら新都の北にある海岸を見た。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、衛宮三月 視点

ダダダダダダダダダダダダ!

「うひゃあ?!」

「きゃ?!」

「な、何何何何?!」

先に起きたのは士郎、凜、イリヤの誰かではなく、全員が同時に銃の発砲音によつて叩き起こされる。

「皆、捕まっついて!」

ギヤギヤギヤギヤ!

タイヤがアスファルトにきつく当たり、悲鳴を上げて車がドリフトしながらターンをすると後ろから追っていた車の何台かが転倒するかビルにぶつかり大破する。

「ゲホ! ごめん皆! 後から追う人達を頼んだ!」

三月はあれからドライブを続けている内に新都内へと入らずを得なくなり、先遣隊の自衛隊や米軍、後は初めて駆け付けた公安の狂人達に追われていた。

「ガキ共が車に乗っているぞお! 免許持つてんのかよお?!」

「生意気な奴らだあ! 引きずり降ろせえ!」

「ヒヤッハー！ 次はオレにぶつ殺させろお!!! ノコギリもあるからよお!!!」  
「へっへ！ 肉はきつと柔らかけえんだろうなあ!!!」

正に世紀末の様なセリフが飛んできた事に、士郎達の寝起きの頭は覚醒した。

「なツ?! あいつら、警察とか自衛隊の筈だろ?!」

追ってくる血塗れで、明らかに人などを撥ねたバンパーのパトカーやトラックに乗っていた人達の服装から士郎はびっくりする。

「あの人達はもう駄目ね、『聖杯の呪い』で精神が滅茶苦茶よ」

「という訳で今彼らを助けようとしても無駄よ、衛宮君」

「そんな?!」

「ウツ！ ゲホ！ ゲホ！」

「三月？ 大丈夫か？」

咳き込む三月に士郎が声をかける。

「ダイジョウブ、むせただけ」

ダンダンダン！

ダダダダダダダダダ!!!

遂に追ってくる狂人達が自前の銃を撃ってくる。

「クツ！ 撃ちなさい、衛宮君！」

「分かつている遠坂！ イリヤは弾倉の装填頼む！」

こうして士郎と凜が車に残った火器と魔術を取り組んで撃ち返す。

ブオオオオオオオオオオオン！

細い横道などから二輪車などが出てきて、後ろの追手と同じような狂人共が全員を襲ってきた。

大きな鎌や斧と、二輪車の後ろに付けた生首などを引きずって。

「「豚共々皆殺しだああアアア!!! ヒャーハハハハハハ！」」

「「民間人はああああ!!! ジャマアアア！ スルナアアアアア!!!」」

士郎達、公安と先遣隊の自衛隊や米軍達、そして新都の暴動を生き残って来た強者達の三つ巴が開始した。

二輪車やトラックで来て、刃物や鈍器、ロープや鎖に公安と自衛隊からぶんどった装備や自家製火炎瓶などで襲い掛かる数が多い新都の住民達。

訓練をされ、正規の銃保有者や装備で数は少ないが洗礼された動きと行動を取る、狂った公安と先遣隊。

そして少年少女とは言え、魔術師を乗せた車一台。

全てがこの最後の一台の車によって新都の北へと向かう。

「死ねええええええ——ぐはあ！」

「うるせえー！」

士郎が銃を乱射して二輪車に乗って近づいて来た一人を撃ち、搭乗者は二輪車と共に車を追っている自衛隊のトラックの下でミンチへと変わる。

それでも尚戦いは続く。

凜は魔力の温存の為に銃を不器用ながらも、反動を抑えながら狙って撃つ。

「イリヤ、次！」

「もう無いわよ！　これを使って！」

そして次々と残弾が少なくなっていくにつれて仕方なく魔術を使い始める。

「あぐ?!」

「ミーちゃん?!」

急に声を出した三月を聞いてイリヤは彼女の名を呼ぶ。

「大丈夫………掠っただけ——」

「——イリヤ、次！」

凜に次の銃を要求されるイリヤはまた士郎達の方に振り返って、三月は抑えていた脇から血が流れ——

—— ていなかった、言うほど。

「(……………大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫ツツツ!!)」

直ぐに治療術で傷口を消して、痛覚をまた遮断した後運転に戻ろうとして投げつけられた火炎瓶を片手でキャッチして投げ返す。

「アギヤアアアアアア!!」

三月たちの車に体当たりをしようとしたトラックの運転手が火達磨になり、トラックが転倒して何台かの二輪車と車を道連れにする。

『三月君! こちらは全員配置に着いた! そちらは——?!』

『ごめんアーチャーさん、新都の狂った人達の相手をしている最中! ちょっと忙しい!』

『そちらに何機か航空自衛隊の機体を送った! それまで持ちこたえてくれ!』

『……………アーチャーさんに令呪を使っても無理っぽい?』

『……………恐らくは』

『そっか、じゃあ仕方ないね。分かった、持たせる』

『……………大丈夫かね?』



『持たせる。大丈夫』

三月が後ろを見て狙いを定める。

「イーちゃん、ちよつと運転代わって——」

「え?!ちよつと、ミーちゃん?!」

三月が急にイリヤにハンドルを握らせて、運転席から乗り出して『弓矢』を『投影』する。

「I am——」

ビキビキと筋肉が悲鳴を上げる。

「—— the bone of ——」

ギシギシと腱の摩擦がうるさくなる。

「—— my sword!!!」

ヒュン!

鋭い音と共に三月に視界がぼやけて、彼女はゴクリと喉に込み上げる血を飲み込んだ。

ドゴオン!

「グアアアアアアアアアア!!!」

大きな爆発が後ろに起きて敵達を一掃する。

車や二輪車たちは光の中に消え、アスファルトがめくり上げられ、道路が消える。

「ス、スゲエ」

士郎が思わず感心する。

「(やつぱり、今のつてアーチャーの『弓矢』！ あの時綺礼を殺つたのと同じ！ 彼女はやはり危険ね)」

三月の事を更に不審に思う凜。

「……………ミーちゃん？ 三月!!!」

そして三月の名を呼ぶイリヤが見たのは力尽きたかのようにダランと体を車の外に出す三月は——

——目と耳と鼻と口から血を流していた。

……………

……………

……………

……

……

……

……

車を近くのクリニックの跡らしきビルの近くに駐車して、凜が中に入って荒らされた店の中を漁る。

その間に士郎は近くを見てきて、他に使えそうな車や食べ物のある店などを探していた。

イリヤはと言うと三月の服を脱がして治癒を――

「――ッ」

イリヤは短く息を呑む。

「イリヤ！ 彼女の容て――」

カゴに色々な薬や包帯などを詰め込んだ凜が戻って来て、それを落とす。

カラカラと地面の上を転がる包帯と薬の瓶。

「……………何よ、コレ？」

彼女達が見た三月の体はやつれていて、あばら骨などが浮き出ている、まるで皮だけの状態だった。

まるで内臓がゴツソリ無くなつて……

——ガシイ!

「ヒイ!!!」

イリヤの腕を三月がガツシリと掴んで、イリヤは思わず短い悲鳴を出した。

「ヒュー……………ヒュー……………」

ヒューヒューと息をする間に三月の口が動いて、イリヤが近くまで耳を寄せる。

「……………彼女は、何て?」

イリヤが涙を流しながら凜に伝える。

「……………『お兄ちゃん達には言わないで、大丈夫だから』って」

凜がビックリして三月の顔を見ると、三月はただはにかんでいた。

まるで安心させるかのような、かつての母親遠坂美の最期の時に精神が一瞬だけ正常に戻つ

たあの時と重なった。

「う……………」

凜は思わず口を両手で覆い、静かに泣いた。

「遠坂、イリヤ! こつちに良い状態の車がお店の駐車場にあつたんだ!」

士郎の近づく声で三月に服をいそいそと着させる凜とイリヤ。

「ハア、ハア、あ、あつちに——って、どうした二人とも? 目が赤いぞ?」

「な、何でもないよ！ た、ただ眠いだけ！」

「そ、そうよ！ そういえばお店ってどんなところ？」

イリヤと凜の元気な声に呆気にとられる土郎。

「え……………えつと、コンビニなんだ。だから食べ物とかも——」

グウ……………

三月のお腹が鳴つて、三人は彼女を——

「——あ、ああ！ 衛宮君は周りを警戒して！ 私とイリヤで付いていくから！」

「そ、そうそう！ お兄ちゃんがこの中で今一番接近戦とかに長けているから！」

そう土郎に言い聞かし、彼を先に行く様に行く凜とイリヤ。

そして三月を抱きかかえる。

イリヤ一人が。

それほどまで異様に軽かったのだ。

「ウ……………ミ……………ちゃん……………」

「大丈夫、大丈夫だから泣かないでイリヤ」

泣きそうになるイリヤに静かに声をかける三月を見る凜はまた泣いていた。

何とか気丈に振舞っているが、正直気持ち未だにグチャグチャだった。

『三月は人間ではない』。

それは理屈として分かっている、警戒した方が良い事も分かっているし、この様に『害』どころか『利』まで得ている事も『魔術師』ならば良い事の筈。

人に害を成すかも知れない人外が自ら自滅していくのだから。

だが『人間』として凜はただ悲しく、以上のような考えをする自分が恥ずかしくて自己嫌悪して、どう行動すれば良いのか分からなかった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「バクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバク!!!」

三月は車の中でこれまでにない程、食物を食べていた。

ラップなどを乱暴に剥ぎ取り、ただただ口の中へとひたすら次から次へと積み込んだ。

「告。 生命活動の停止の可能性『大』。 材料を要シマス」

「(だから食べているんでしょが?! 取り敢えず『再構築』続行!)」

さつきから「」の声はずっと三月にそう言っていたので彼女はひたすら食べ物を食べて、『再構築』を使って食べ物を分裂して、それを使って直接自分の体の足しにしていた。

まあ、さつきからの『可能性“極大”』からはマシなのだが。

凜はせつせと三月が食べやすいようにラップなどを取っていたがとても付いて行けず、最終的にはただ次の物を彼女に渡していた状態だった。

「三、三月良く食べるな」

三月はただ「グツ」と笑顔を浮かべながらサムズアップを士郎にする。

「あー！ 見てー！」

運転をしているイリヤの言葉に皆が見ると、ヘリコプターを追いかける昆虫状の霧が見えた。

「何、アレ？」

「ング……………アーチャーが『間桐臓硯』だって」

「「アレが?!」」

『おうマスター！ 長引いてすまん、令呪頼むわ！』

『分かった』

『……もし、俺が生き残らなかつたら——』

『——じゃあ犬飼って“クフちゃん”って名付ける』

『オイ』

『だからちゃんと帰って来てね』

『……』

『クフちゃん?』

『ああもう分かったから“クフちゃん”呼びやめろや!』

『じゃあ“勝て”、クー・フリーリン』

『……あいよ! ご武運をな、マスター!』

『神父さんの事、ごめんね?』

『良いつてことよ! その代わり俺にたらふく飯を奢れ!』

『うん、良いよ』

三月の体が一瞬光って、凜とイリヤの体がびくりとする。

「な?! い、今のは何だったんだ三月?!」

「ランサーが『令呪くれ』って」

「……そうか……」





## 第46話 セイギ ノ ミカタ

アーチャー、ライダー運営、衛宮士郎、イリヤ、セラ、遠坂凜 視点

三月が他の三人に説明した作戦は至って単純だった。

『自衛隊の一斉射後、魔術師とサーヴァント達は宝具級や一番威力の高い一撃を一斉射』、と言ったモノである。

正に二連攻撃だった。通常兵器+魔術

「でも良く自衛隊とかがそんなのに了承したわね？」

「うん、なんかアーチャーさんが説得した」

そのアーチャー自身、ライダーと話していた。

「正気か？」

「それ以外の方法が確実に貴方は断言出来ますか？」

「……………」

アーチャーの帰って来ない答えにライダーは？マークを出す。

「??? どうかしましたか？」

「いや、私と君はやはり反英雄同士だなと思っただけさ」

「…………… 私 は 桜 だ け が 無 事 で あ れ ば

…………… い え、 それ も

いえ、やはり桜だけさえ無事でいれば——」

「——フ」

何故か長い沈黙の間に言いよどむライダーに思わず鼻で笑うアーチャーにライダーは苛ついたように言葉を返す。

「何ですかその意味有り気な『フ』は？」

「何。 屋敷での君は実に良い空気を出していた事を思い出して、な」

それはライダーの宝具を『特攻野郎○チーム』とからかった三月が「自分の血を吸って良い」と言った後の事だった。第37話より

ライダーは三月とランサーの契約後、半ば拉致する勢いで三月を個室に連れ込み、15分ほど音沙汰がなく、次に出たライダーは笑顔を浮かべながら浮いた足取りで部屋を後にした。

そのまま鼻歌を出すような感じのライダーとは対象外に少々(?)ゲツソリとした三月がその後によろよろと部屋を出て、遠坂邸の冷蔵庫にあったプリンと野菜ジュースを平らげた。

余談だがこの様子をライダーはこっそりと物陰から見ていて胸が痛んだのは秘密にしていた。

「……………」  
「忘れて下さい」

「彼女達が悲しむぞ?」

「それは貴方にも言える事では?」

脅すような口調で言うアーチャーに、そっくりと言いつ返し返すライダー。

「……………我々は既に死んだ身だ、現在今を生きる者達の方が大事さ」

「貴方は変わりましたね」

「そういう君こそ。違うか?」

以前はギラギラとした、他者を寄せ付けけない抜き身の剣のようなピリピリした空気を纏い、機械的に合理的な判断をしていた『機械守護者』。

以前は「被害者でありながら加害者」である少女召喚者にかつての自分の状況を連想して、

「他者は全て敵か利用すべき存在」とずっと気を張っていた『被害者怪物』。

ただ、二人の周りの人達に影響を受けて変わったのは自覚があった。  
最近までは認めたくは無かったが。

更に周りの人達を変えた存在自身がどこか冷静………というか予想外の行動によく出る事もあり、気になっていたのもあった。

「………さて、三月君達もそろそろ着く頃だ。 後ろの者に教授を始めるとするか――」

そしてアーチャーは後ろで近づく車で運転しているイリヤをジーツと見ていたセラにパラシュートの使い方を簡単に説明し始める。

ちなみに桜は未だに慎二に怒っていた。

「さ、桜ああああ……た、頼むから機嫌を直してくれよ……」

「知りません!」

そして痴話げんか続行中であつた。

『■■■■■■!!!』

「うるさい、このクソ爺!」

半ば逆ギレした慎二と桜が同時に外の臓硯に叫び返していた。

「ええ、全くその通りですね」

「ああ、その通りだとも」

「頼もしい限りですね」

少年少女二人に同意するセラとアーチャー、そして直に感心するライダー。

場は冬木の新都の北にある海岸へと移り、ヘリコプターはグルグルと入り組んだ場所を回るのをやめてそのまま海の方へと向かい、それを臓硯が追う。

更に臓硯を追うように様々なトラックや装甲車、航空隊のF-15Jなどが近くの空域や地域から飛び出た。

『諸君、配置に付いたら一斉射撃を始めてくれ！ こちらはタイミングを合わせる！』

『聞いての通りだ、武田！』

『聞いた！ 葉鳥羽も合わせろ！』

大体の配置に着き、射程内まで来た自動車から様々な人たちが下車して、無反動砲やロケット発射筒などを取り出し、装甲車に備えている対戦車誘導弾なども構える。

それこそ、第三者から見れば怪獣映画（または外宇宙の侵入）を撃退するようなワンシーンだった。

ただしここにはプロデューサーにディレクターやADにカメラマンなどと言った人達などいないし、これ程のリアリズムで本気の恐怖を浮かび上げる俳優やエキストラな

どではなく現役の人達。

それにハリウッドなどでよく見る景色かも知れない。

だが場は夕焼けや太陽が上がって、見渡しの良い景色などではなく。

ボロボロになった市街地などではなく。

真つ暗な、暗黒にも近い夜中で街灯などが殆ど照らしていない海岸。

サラサラな砂に自動車や装備らのガシャガシャとした音やこの世のものとは思えない臓硯の叫び。

余りのミスマツチさにもしこれが本当に映画のシユートだったのなら企画の段階………またはラフと時点でスクリーンライターやSFXの方達は即チェンジされていただろう。

クビになっていなければの話だが。

「本当、何か悪い冗談みたいね」

この景色を近くの森の影から見た凜が呆れたように言う。

彼女の10年間………いや、『魔術師』としての知識や常識が僅かの数日間、彼女が待ち望んだ聖杯戦争中に覆されまくっていた。

しかもその聖杯戦争自体が狂っていた。

「……………うん」

イリヤが元気のない声で生返事を出す。

前回の第四次聖杯戦争で、ずっと自分が思っていた事が悉く、『偽り』と知った。

『実の父親がずっと自分を捨てた』どころか、『自分の家がキリツグを拒んだ』。

『キリツグは母親を見殺しにした』、が実は『同意の元でキリツグが聖杯を手に入れて自分と母親の幸せの為の行動だった』。

等々等々等々等々等々等々等々等々。

「……………」

士郎はただ静かに見ていた。

10年前の大火災が聖杯戦争の所為で、爺切さんは今日の前や新都での出来事を止める為にそうなった結果。

自分の知っている爺切さんとは違う、残忍性のある爺切さん。

憧れていた『正義の味方』の魔法使切い。

その『正義の味方』の成れの果てであるアーチャーあり得た未来の自分。

それらの存在を見て、聞いて、考えた末に自分が自分で考えた『正義の味方』像。

それは『自分の身の周りを守る』と言った、極まりない『エゴ』の象徴に感じ取れた

『我儘』だった。



そして先程の綺礼の言葉。『悪の象徴』と振舞って見事そのように見えた彼の以外な姿と思い——

—— 士郎は罪悪感を感じていた。

この最後の事が、彼の心の中で燻ぶっていた。

彼自身、何故こんな事を感じるのかずっと考えていた。

だが考えれば、考える程、あの子が涙をずっと流していた事が思い浮かぶ。

そつと彼はその子彼女を見る。

その儚い横顔がどこかを見ているような、見ていないような感じで。

肌は相変わらずの白………より真夜中での月光の下である事もあり、一層白く見えた。

まるで透き通っているかのように。

未だに『人形みたいに綺麗な子だ』と思えるような碧眼と金髪で、自慢の——

「——ん？ どうしたの、士郎？」

「あ……………いや」

「変な士郎」

視線を感じ、士郎を見てクスリと笑う三月からサツと顔を逸らす。

『月の天使』。

穂群原学園で彼女の二つ名。

今までは「そうかな？」と士郎は思った事はあるが、今の様に周りに人工的な光源など無い今の彼女は「正にそうだ」と彼でさえも納得出来た。

「さてと！ いっちよやってみつか！ ♪〜」

鼻歌を出しながら三月は車のボンネットから車の屋根の上に立ち上がって――

———「一つの弓矢を『投影』する。

「やっぱり待つて三月！」

「イリヤ？」

急に切ない声でイリヤが三月の名を呼ぶ事に驚く士郎。

「やっぱり……………やっぱりやめようよ！ アーチャー達に任せれば良いじゃない?！」

「……………大丈夫だよイリヤ」

「お兄ちゃんも……シロウからも何か言つてよ?!」

「え? イリヤ、それは——?」

「——イリヤ、貴方は今何を言っているのか分かつているの? 『魔術師』としての

義務——」

「そんなの知らない! ミーちゃんにそんな事、関係無い!」

「イーちゃん……」

ドゴゴゴゴオオオオオオオオン!

ボボボボボオオオオオオオオン!

士郎は突然起きる爆発音と発する光源の下で泣き始めるイリヤと硬い表情の凜を見る。

「このままじゃミツキが死んじゃう!」

「何の話だ?」

「大丈夫。私は大丈夫だから。 I a m——」

「——待て三月——!」

「——the bone——ゴフ」

咳を合図にダラダラと口と鼻から血がまた流れ始める。

まるで「信じられない」と言ったような顔で士郎は三月の居る車の屋根に登る為にト

ランクを駆け上がり、三月は弓を引く。

もう悲鳴を上げるどころか、耳朶で「ブチブチ」と急増で今要らない内臓などで補強した筋肉や権が音を立てて切れる。

「—— of my sword」

バシユン！

最後の、声にならない言葉で矢を射ると同時に後ろへと三月は倒れて士郎がキャッチして驚く。

三月がまるでそこにいない様に軽かった。

目で見えてはいるのに、まるで幻覚の様な——

——訂正。先程の『透き通って見えるかのような』ではなく、『透き通って見え  
た』だった。

「……………三月？ お、おいどうしたんだよ？ 何で——？」

「……………だって……………」





## 第47話 ユメ カラ サメル

アーチャー、ライダー運営、セラ 視点

時は少し前に、丁度航空と陸上自衛隊達が攻撃を開始し始めた時だった。

ライダーはUH-60Jを急上昇させている間にアーチャーが後ろに乗っている信二達にパラシュートを着用させ、その後自分も着用しながら慎二は質問を彼にした。

「アーチャー、これは何の為だ？」

「何、ライダーが高度をある程度上げてから我々は飛び降りるからだ」

「……………ハア?! おいちよつと待てよお前?! 聞いていないぞ?!」

「兄さん……………」

「そ·う·だ·な、少·し·説·明·不·足·だ·っ·た·か·も·知·れ·ん·が……………宝·具·の·撃·つ·タ·イ·ミ·ン·グ·で·ラ·イ·ダ·ー·も·加·わ·る·か·ら·だ」

「……………え?」

信二と桜が同時にライダーの方を見る。

「信じられない」といった顔をしながら。

「……………ライダー？」

「そんな顔をしないで下さい、桜。私はもとより『使い魔』サーヴァント。あの妖物から桜を守ればいいのです」

「で、でも——！」

——そんなの死んじゃうよ！

そう桜は言いたかった。

だが言ってしまうと、何となくそれが本当に実現しそうで彼女は怖気付く。

「家臣を信じるのも、良い主君の義務ですよ？ それとも貴方はそこまであなたを慕っている者を信じられませんか？」

「……………」

「それに令呪のブーストがあれば幾分かマシだろうか？」

「えっと……………」

アーチャーのアドヴァイスに困るような顔をする桜。

「……………令呪の使い方は何も『呪文』などを使う事は無い。『思い』で発動する時な

どある」



「え？」

アーチャーの言葉は重みがあり、まるでそれを知っていたかのようだった。

「だから彼女に『アレを倒せ』や、『生きて帰ってきて欲しい』などの事の様な奇跡も起こりえるという事だ」

「……………」

「おっと、これは言い過ぎかな？」

ライダーの無言のプレッシャーを感じたアーチャーはあどけながら肩を上げる。

「さて、皆準備は良いかね？」

「ハハ……………へ、ヘリコプターから二回も飛び降りるなんて…そ、そうそう出来ない経験だな、ハハハハハハハハ！」

桜はもう一度ヘリコプターのドアからライダーの方へと振り返った。

「ライダー……………」

「大丈夫ですよ、桜。貴方の周りには頼りになる親族や友がいます」

ライダーが僅かに微笑み、桜を見る。

「ラ、ライダー……………ッ！ 『勝って、生きて戻って来て』！」

桜の思いに令呪が呼応して、ライダーは魔力が爆発的に地震に流れ込み、溢れんばかりに膨れ上がるのを感じた。

「……………」

ライダーはただニコリと笑いつつも桜に返事をしなかったのが、慎二と共にセラにヘリコプターから引きずり出される桜にとっては気がかりだった。

最後に飛び出るアーチャーは一瞬ライダーの方を見て口を開けるが、思いとどまったのかそのまま声をかけずに飛び降りる。

後に残されたライダーは表面上、いつも通りに見えたが内心かなり複雑な気持ちだった。

令呪の魔力と共に流れ込んだ桜の感情が暖かく、切なかった『希望』だった。

本当ならばずっと桜と共に居たい。

が、同時に昔の事を思う。「もし自分がまた化け物と化するのなら」と。

「……………いえ、今は目の前の事からですね」

ライダーは無理矢理全てを胸の奥に押し込んで、自衛隊達の攻撃で臓硯の『蟲の鎧』は南西の方向へと集中し、この隙にライダーは宝具を使用する。

彼女は自分の首を刺してそれを触媒として真っ白な天馬を召喚すると同時にU・H・I・6・0が分解して、金属などが変質して鎧と化す。

本来ならばこのような現象などは起きない。が、桜の令呪の事もあり、ライダーの

コンディションはこの上のないぐらい最高だった。

それもあつたのか、『武装』と類される『天馬』と同様に『ヘリコプター』も宝具の対象と見なされていた。

ライダーは予想していなかった鎧と武装を見て、乗っている天馬の首を優しく撫で、天馬は「ブルル！」と嬉しそうに答える。

「（これは、意外でしたね）」

鎧はともかく、武装のそれは騎乗兵のランスだった。

ただ通常のは色々違うし、『人間』<sup>ヒト</sup>が到底扱えるような物でも無く、それはさながら『異界の騎士』だった。

「……………フフ、皮肉なものですね」

ライダーは一度も自分の事を『騎士』とは思わなかった。

自分はそんな存在から程遠いものと考えていたからだ。

「ならば私はさぞかし『戦乙女』<sup>フルキユレ</sup>と言った所ですか。ならば——」

——真に害あるモノの『死神』となりましょう。

ライダーは天馬と共に一瞬で空高く舞い上がり、閃光と共に害あるモノ<sup>魔</sup>へと流星の様

に神罰宝具を下す。

『騎英の手綱』!!!  
ベルレフオーン

ライダーが突貫し始めると同時に、二つの矢が臓硯の守りの薄くなった南東へと着弾する。

臓硯は本能的に守りをそこへと移動させる瞬間、ライダーは薄くなった北方面へと駆けた。

彼女は久しく感じていない、溶岩の様に激しく燃えて消える事が許されない熱い感情が内側から漏れだすのを止めなかった。

その姿は正に流星の如く、幾百幾千という距離を僅か一回の瞬きで飛躍した。

空気の摩擦から鎧は赤くなり、彼女の肌と髪の毛がチリチリと音を立て、焦げる臭いが鼻をくすぐる。

音速を優に超え、光速にまで達そうとするそのスピードに臓硯は意識的にか、本能的にか反応して『鎧』が戻り始めた。

ライダーは『騎乗兵』のクラス。

正に電撃戦のように一瞬の油断をした敵を最小限の妨害で、最短距離を進み、敵の大將（または中核を成す幹部）を殺すに相応しいクラス。

「ハアアアアア!!!」

ライダーは未だかつてない咆哮と共に暗闇の中へと突入し、それは鎧と武装を抜ける空気の出す耳を劈く様な音で回りの蟲と大気を強烈に振動させた。

ジュワアアアアアア!!!

蟲達が摩擦熱で赤くなつた鎧に触れると焦げる臭いと音がライダーに聞こえた。

「ツ!!! グツ!! ウウウウ!!」

焼け死ぬ蟲達を更に蟲達が死骸を使つて鎧の隙間を縫つて、ライダーと天馬の体中に齧り付く。

『痛み』など昔に慣れた筈のライダーでさえ思わず声を上げる程だった。

それは文字通り肉を分解されながら食われる感触。

だがライダーはひたすら前に、眼前の存在全てを殺害せしめる『暴風』と化して、臓の本体を感じた。

守りが最も厚く、空気が入る隙間もない『殻』。

そこから声がライダーに聞こえてきた。

『バカ、なああ! あり、エヌ! わ、シハ、永遠の! イイイイ命ををヲヲヲ

ヲヲヲ!!!』

臓腑を守る殻が崩れ始める、圧倒的な捨て身の近接攻撃で。

そしてこれはアーチャーとライダーの想定が当たった事も意味をした。

もし遠距離攻撃であればそれを内包する魔力が万が一枯渇してしまえば攻撃はそこで止まり、消滅する。

だが武器を手に取り、己の存在そのものを攻撃に転換すれば、それは膨大な魔力がそのまま核ミサイルのような攻撃が進んで行く事となる。

蟲が波を打ち、臓硯が無意識に恐怖をしたのを悟らせる。

『わシの、永遠の！ 聖杯の！ 永遠の、イイイイのちがアアアあ!!! 聖杯ハ！ 我のテニイイイイ!!!』

ライダーの体から力が抜け始め、如何にダメージを負ったのか否が応でも知らせる。

天馬は既に死に体で、存在そのものが透き通って、ライダーがこれに気付いていれば胸を痛めていただろう。目は蟲に抉られて血の涙を代わりに流し、鼻は窒息させようとした蟲達でいっぱい。口から出た舌は蟲達に既に食べ尽くされ、白かった体から赤い

血が鎧の外へとへばり付いていた。

もう、天馬として美しい姿は見当たらなかった。

だがライダーはただ一つの事を考えていた。

「怪物は我が身に変えても殺す」と。

それはまるで、かつて『形のない島』で『怪物』へと変質した自分との分かち合う覚悟のようだった。

そして――

――ライダーの攻撃は他の蟲とは違う、すぐに消滅せずに血液の様な液体を噴出する蟲の塊へと繋がった。

『い、ヤダ!!! しに、シニトウナイ!!! わ、しは! しに、トウ、な  
 いいいいいいいいいい!!!』

その断末魔でほぼ完ぺきな統制下にあつた蟲達が乱れ、無意味に跳ね回り始めて、その行動が波打つかのように広がった。

遂に天馬が限界を超え、支えるものが無くなったライダーの体は空中を落ちながら気が付いた。

間桐臓硯の声が今泣き叫んでいる者とは別に、もう一つ聞こえた事に。

『ワシノ、聖杯いいいいいい!!!』

「ああ、長い夢が…終わる……………終わりか。我が宿願も、我が苦痛も、マキリの使命も  
 こんなところで……………終わるのだな」

これを聞いたライダーはふと思った。

「これは臓硯の内側と中側の声か？」と。

普段なら「馬鹿馬鹿しい」と切り捨てるのだが、疲労しきつた頭では思考がそこまで綺麗に打ち切れなかった。

「はは、ははは…あと一步…あと一步という所まで来たのだがな…五百余年、瞬きほどの宿願であつた。ユステイツアよ、やつと会えるよ」

ライダーが最後に聞こえた声はどこか、慎二の様な少年に似ていた。

そこで彼女の意識は闇へと落ち始め、成人した桜の妄想が同じく成人した友人達と笑いあう姿に――

「(出来れば、桜と――)」

――一つの雫がライダーの目から頬を伝つた。



## 自衛隊、米軍 視点

彼らがありつたけの火力をつぎ込み、別の場所から二つの光線の様なモノ、そして流星が霧状の怪獣へと着弾して、文字通り溶けていった。

そこに残つた闇は宙へと飛びあがり、散漫して残つた『泥』の様なモノが凄まじい憩いで一点に集中していった。

「黒い、太陽？」

そうボソリと言つたのは誰だろうか？

暗い夜の中で、更に黒い太陽な物がそこに残り、直視していた者達は忽ちたちま純粋な悪意と憎悪で気が狂つて行つた。

近くの人達が自らの目を抉り出す者達や近くの人達をナイフでメツタ刺しにする人達などを拘束し、黒い太陽から目を逸らし、本能が『危険な場』と叫ぶそこから退去しようとする。

そこで航空隊はある程度距離を取っていた為にそれほど精神に異常は無く、彼らは見る。

人型の様な何か黒い太陽から生れ落ちるのを。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、セラ、桜、慎二、セラ、アーチャー 視点

アーチャー達が海岸までパラシユートし、降りてくるのを見たイリヤと凜は啞然とする士郎を車に乗せて彼が降り立つであろう場所へと移動した。

「大丈夫でしたか、お嬢様~~~~!!」

セラがイリヤを見た瞬間腕をブンブンと振り、イリヤはぎこちない笑顔を作り手を振り返す。

アーチャーが颯爽とある程度の高度からパラシユートを外して士郎と凜、そしてイリヤを見る。

「……………?」

「彼女は……………その——」

バタンツ!

士郎が突然車のドアを乱暴に開けて、海岸へと走り出す。

「衛宮君?!／お兄ちゃん?!」

凜とイリヤが士郎の後を追い、未だにパラシュートでゆつくりと降りて来る慎二と桜、そしてセラは早く降りられないか色々試していた。

アーチャーは士郎の走り去った所の先を見て、険しい表情をする。

……

……

……

……

……

……

……

士郎は走る。

走る、走る、走る。

ただひたすら走る。

自傷行為で叫び声をあげる人達を横通りながら。

走る、走る、走る。

自傷行為をする人達を拘束してその場から逃げる人達を素通りする。

「ハア、ハア、ハア、ハア——！」

息が上がり始め、目的の場へと近付く士郎は――

――彼女の声を聞こえ始めた。

「う～～～ん、娑婆の空気は旨いな～～」

そしてその姿も――

「ツ!!!」

――クツキリと見え始め、士郎は止まって荒い息遣いを何とか落ち着かせようとする。

「ハア、ハア、グハア……………フウ……………」

「え、衛宮君！」

「お兄ちゃん！」

凜とイリヤがヘトヘトになりながら士郎へと追い付いて――

「……………え？」

——同時にポカンとした声を出す。

「嘘……………でしよ？」

「ミー……………ちゃん？」

凜とイリヤは士郎と共に目の前の人物をただ見ていた。

「ん？ 貴方達は——」

三人が見て数秒間後、その人物が彼らを初めて見たかのように反応して、今度は慎二と桜、そして（ほとんど息を切らした）セラが追いつく。

「三月先輩?! / 三月?!」

「お〜、今度は間桐兄妹」

「……………」

彼らの前には三月がいた。

ただし服が先程着ていた物ではなく、ドレスだった。

そこにアーチャーが現れて、近付こうとしたイリヤを止める。

「違うな、君は」

彼女は笑顔になり——

「——へえく？ 流石は『英霊エミヤ』って所かしら？」  
「……………誰だ、お前は？」

士郎の言葉に凜、イリヤ、慎二と桜が彼と三月をお互い見た。

「およ、これは意外——」

「——ふざけるな！ あいつの顔！ あいつの声！ あいつの仕草！ そのどれもが正にあいつそのものだが、お前は違う！ 誰だ、テメエは?!」

三月はスカートの手端を持ち上げて、頭を少し下げて一礼する。

「こんばんわ、皆さま——」

——そしてさようなら

最後の一言で魔力が見えない波の様に彼女を中心に広がり、景色はその『波』を追う。

『波』が次々と自衛隊達に追いつくと彼は服だけを残り、チリへと化する。

『波』が黒い太陽に触れると、『ソレ』も埃の様にサラサラと消えていく。

未だに燃える新都で暴れる住人達は何かを感じたのか、行っている事を一時中断して

見上げると『波』が彼らを通過して、彼らもまたチリへと成つて行く。

それが更に広がり、どこもかしこも広がる『波』は男性、女性、幼子、赤子、犬、猫、ネズミや鳥と、あらゆる生物をチリへと変えてゆく。

それが世界を一周すると、空を見上げている三月の周りには海の波の音以外何も無くなつた。

「よし！ これで十年分の利子ぐらいは払えるでしょ！」

彼女が視線を元に戻すと、彼女の表情は笑顔からスンと無表情に変わる。

「ねえ、貴方達は何故存在しているの？」

そこは急に静かになつた海と消えた人達の事を見ていた士郎達がいた。

「チツ、面倒臭えぜ——」

三月が無表情から舌打ちをしながら苛立ち、更に笑顔へと戻る。

「——いいよ、じゃあ説明してあげる。わー——」

バシユン！

アーチャーの放つた矢が三月を通過して、後ろの海の上を飛ぶ。

まるで何もない様に。

「妖術の類では無いか」

「当たり前よ。そんなチャチなモノじゃないわ、失礼しちゃう！ さてと……改めて

初めまして……………かな？ 私は——」

---

MITSUKI 視点

---

「……………ん」

彼女は気が付き、目を開ければ周りは暗闇だった。

ただの黒、黒、真っ黒。

まるで深海にいるようだった。

「……………あ、そうか……………私、死んだんだ」

それは「何とも呆気ない」というような口調で、ショックも何もなく、ただ納得していた感じだった。

「やったよ、おじさん。おじさんの夢は人外の自分さえ犠牲にすれば出来たよ」



何せ自分はおじさんの、『正義の味方』を貫き通して皆を救った。

「……………皆、大丈夫かな？」

気がかりがあるとすればそれだけだった。

ただまあ、後不満があるとすればこのコールドールの中にいる様な事か？

「……………寒い」

そう声で呟いた瞬間、どこかから声が聞こえて来た。

『やおお帰り！ 首尾はどうだった？』

「……………??？」

不思議な感覚だった。

まるで自分から出ているような声、だが何も聞こえていない。

初めて聞くのに初めてじゃないデジャヴのような……………

『あれ？ もしかして……………あちやうく、初期化しているじゃないか！ 通りで十年間かかった訳だ。 うん、やっぱり計画をしておいて良かった！』

「十年間？ 計画？ 初期化？ 何の事？」

『ああ！ そのまま聞いて良いよ、ちよつちよつちよつと長くなるだけだから！ 久しぶりだね、魂！』

相手の声はどこか面白そうに語り始めると同時に景色が変わっていった。



【告。 予備人格ノ機能停止条件を満たシマシタ、お疲れサマでした。】  
——いや、停止した。



三月——もとい『三号』が今度はちやんと伝わった事に笑顔になる。

ただしそれは三月が何時も浮かべる様な呑気なものではなく、シラけた笑いだった。今まで険しい顔を崩さなかったアーチャーはただ考える。

「……………成程、君が臓硯や言峰綺礼の言っていた『同盟者』か」

これを聞いた三号は笑いを崩さず、仕草がまるで他愛ない悪戯がバレた子共のようだった。

「やん、やつぱり分かっちゃう〜?♡」

「(不味いな、彼女には私や凜、他の者達やこの世界を見る目も等しく眼中に無い、価値が無い、意味が無いとでも言っているようだ。何が彼女を動かしている?)……………」

チツ、これはどういう事だ?」

「アーチャー?」

近くのイリヤが彼の舌打ちに反応して名を呼ぶ。

「これが不味いのは知っているわアーチャー——」

「——違うのだ、凜。いや、それもあるのだがそれだけではない」

凜の強ばった顔と言葉に、どこか歯切れの悪いアーチャーの声が答える。

「奴からは何も感じない。不快感や違和感は勿論の事覚えるし、理性までもが目の前の奴が『一番の危険人物』だとも断定している……………だが『勘』が……………」

『直感』だから奴に対して何も感じていないのだ」

「どういう、事だ？」

「言われても分からない、が………奴からは危機感を感じないのだ」

慎二の問いに答えたアーチャーはずっと三号を見ていた、瞬きもせず観察し続けていた。

「一つの動きも見過ごさない」というかのように。

そしてこれには土郎も同じ事を感じていた。

幾度となく修羅場をアーチャー程とは言えないにせよ、彼の勘までもが『異常』と訴えても良いと言うのに目の前の人物に対しては全く働いていなかった。

「止めた方が良いわよ、アーチャー？」

アーチャーの眉毛がピクリと極僅かにクスクスと口だけで笑う三号に反応する。

「貴方は確かに素早いけど、私がそれに反応出来ない訳ないじゃない？」

「……………」

アーチャーはつい先ほどまで自身の敏捷スイフトを使った不意打ちを実行に移す寸前だった。

「それに貴方はもう覚えてはいないでしょうけど……………コホン——」

三号は実に楽しそうに全く違う声で次の言葉を土郎達に伝える。

「『君は素質が大変良い。かつて見た英霊というモノに成らないかい？』」









り、アーチャーの過去を以前対峙した時に知った士郎もアーチャーの後を追うかのよう  
に駆けだし、慎二とセラは意味不明の前の人物から桜とイリヤを守る為にゆつくりと場  
が動きだす。

《font:ul09》みつぎ《font》 視点

〔……………〕

〔 …… 〕  
なに かが する

…………… する？ ち がう きこ える

〔 …… 〕

こ え？

〔 …… 〕

と ても ね む い

「……………!!」

つかれた………ねる——

「——だから起きろつっていんだろが『明るく、接しやすい子』のボケが——?!?!?!」  
ドスン!

「グヘエエエエオオおおゲエエエエエえええああアアア?!」

「ア? 何潰れたカエルみたいな声出してんだよ? なっさけねえな、おい?」

『私』はお腹に何か強烈な衝撃を両手で抱きながら、目を覚ましながら地面をゴロゴロとした。

「……………?!?!」

未だに息が上手く出来ず、声にならない悲鳴を続けながら『私』が喋る。

「まあまあまあ、少しは落ち着いてみたらどうかしら『ガサツな子』? 『私』も流

石に体重を乗せてお腹にジャンプするのは——」

「——ハッ! 『マイペースでおっとりな子』が良く言うぜ! 昔はトロ過ぎて鈍臭い

所為であんなにミス犯しまくりだった癖して、いざ他人から怒られる度々『オレ』に変わりがあって! つうか今思い出して来たら何か腹が立ってきた。よし、テメエは今

ブチ殺す」

「あら、これはちよつと困ったわね。殺人をするなんて初めてだからドキドキし



……

…

「え、結論から言いましょう。やはり『私達』は『自分達』ですね」

「何だ、結局話し合ってそれかよ?!」

『私』は『私』………いや、混乱するからもう愛称で呼ぶ。

『私』は『知的』の結論にいちやもんを付ける『ガサツ』を互いに見て、『マイペース』に話しかける。

「なんかややこしい事になったね?」

「そう? 『私』は嬉しいわよ? こうやって互いに見て、話し合えるなんて」

「いえ、それも間違いでして」

『知的』が『ガサツ』を『クール』にあしらって貰いながら横から遮る。

「??? どういう事?」

「我々は実際に『実体』を持っている訳では無いですね、『解離性障害』に似た状態です」

「え、つとつ? 確か——」

「—————自分が自分であるという感覚が失われている状態」です/だな/だ

「せ」

『私達』が全員同時に言う。

「そうです。ただしこれも先程の話し合いである程度不定も出来ました」

「まゝ、『ガサツ』が金的攻撃をし——」

「——あ、あれは『マイペース』が男子に抱き合ったからだろうか?! 何オレに濡れ衣全部着させてるんだよ!!」

「でもでも、あの蹴った感覚は——」

「——とまあ、このように通常の『解離性障害』とは違います。そもそも我々の様に同時に思考しながら話し合うのはあつたとしても、このように複数人が常時いる事は少なくとも視た事も聞いた事も調べられた事でも無いので」

「……………ですが確か『解離性障害』は通常は障害であつて、このようにメリットはあまり無い筈です」

「そうですね、『クール』の言つた通りです。我々の状態はハッキリ言つて異常です」

「つうか茶の一つでものみてえなオイ！」

「はゝい。そう言うと思つて、ここにちやぶ台とお茶と茶菓子を用意しましたゝ」

「……………は

「……………」

『マイペース』以外の全員が呆氣に取られる。

そこには衛宮邸のちやぶ台の上に人数分のお茶と茶菓子があつた。

「??? あく、座布団も無いと駄目ですぬ。 うっかりです」

「ポポポポポ！」といった、コミカルな音と共に座布団が周りの暗闇の中で浮いているよ  
うなちやぶ台の周りに地面から生えて来た。

「ナイスだぜ『マイペース』！ お！ じゃが〇こもあるじゃねえか！」

『ガサツ』が差布団の上に胡坐をかきながら座り、バリバリと茶菓子とお茶を飲み始め  
る。

そこで未だにポカーンとして他の皆に『マイペース』が気付く。

「??? どうしたんですか？」

「ちよい待ちーや！ 何やねんこれ?!」

そこに新たな三月が現れた。

「あら〜？ 『ツツコミ』じゃない〜、元氣〜？」

「ボチボチ………な分け無いやろがー!!! どう事やねん『これ』?!」

『ツツコミ』が『マイペース』の肩を掴みながら激しく揺らす。

「ほう、これは意外………というか予想外ですね。 この様に新たな『私』が出て来ると

は

「あああん?!?! て、誰かと思えばお前らやないか?! 何やねんこれ？ マジで？」

「こ、これって所謂た、『多重人格者』なのでは？ あ、ポツ〇ーをい、頂きます『ガサツ』」

「オウ！ 『アニオタ』じゃねえか！ オレのじゃねえからじゃんじゃん食え！」

「……………成程」

「な、何かわかつたの?! 『クール』?!」

『クール』の一言で『接しやすい良い子』が彼女に迫る。

「恐らくは『ここ』のカラクリについてですね。先程のちやぶ台といい、茶菓子や座布団、それに『ツツコミ』まで現れるのは我々がそれを欲したからでは？」

「……………『私達』が聞くあの声のようですね」

『クール』の説明に更に足す『知的』の情報の元、彼女……………彼女らは色々と試す。

……………

……………

……………

……………

……………



……

……

そして色々試してみた結果、『ガサツ』と『アニオタ』が何故かあのワンシーンを演じていた。

「ユ〇ヴァアアアアアアアアアアス!!!」

「月光オオ蝶オオオオで〇るううううううううううううううううううう!!!」

バリバリバリバリバリバリバリバリ。

しかも何故か二人ともがそうすると周りの景色までもが変わり、まるでその場にいたかのようにだった。

そしてこれだけでは無かった。

数々のメディアからの名シーンや台詞を思い浮かべるとそこに誰かが居ようが居まいが若干違いは有れど、再生される。

これを見ていた他の者達はある推測をする。

「……………もしかしてだけど、これであの『私』の事を調べられるんじゃない?」

『接しやすい良い子』の言った事で他の者達の意見が割れ始めようとした時——

——余談だがこの時点で数はさらに増えていき、端ではなぜか興奮しまくりの『腐女子』が『大雑把』と『ガサツ』によって拘束されていた——







——自分とはあるメディアの主人公の生首を両手で持っていた。

「あ……………え……………??？」

好奇心が旺盛な少年の、かつて『希望』と『諦めない』といった感情が籠っていた琥珀色の眼から光は消え、緑が掛かった黒髪は少年の血で——

「——いやあああああああああああああああああああ  
『接しやすく良い子』はただ叫んだ。  
?!?!?!?!」

それがこの場合の『普通』の反応だから。

## 第49話 生の業

《font:ul09》みつき《font》 視点

そこは荒野のような場所であるとあるメディアの主人公の生首を両手で持ちながら叫んでいた。

「——いやあああああああああああああああああああああ  
?!?!?!?!?!」

それがこの場合の『普通』の反応のように叫んでいた。

「何で?! 何で?!」

ただそのズツシリとする生首の重さを見て叫んだ。

「何でそんな簡単に死んじゃうの?!」

反応は『普通』であつても、理由自体は『普通』から程遠かつたらしいと、違和感を持った『接しやすく良い子』は気付く。

『自分であつて、自分ではない』何かを見ていたと。

「ハア~~~~~……………（やっぱり『人類』が一番面白いけど脆いわ~~~~）」

憂鬱な溜息を出しながら、生首を髪の毛で持ちながらソレをブンブンと振り回す。それはまるで『玩具』の扱いだつた。

「（ま、いいか。この子の親友の白い髪の毛の子も面白そうだし——）」

そこで『接しやすく良い子』は『自分』がニーツと笑いを浮かべるのを感じた。

「——そもそもこのちっぽけな湖の中で逃げ場なんてないのだけれど~~~~」

気が付けば『接しやすく良い子』は鼻歌をしながら『ガサツ』によつて体を揺すられていた。

「オイ！ テメエも変になるんじゃないやねえ！」

「♪〜」

「歯あ食いしばれえええ!!」

バシイン！

『ガサツ』が『接しやすく良い子』に腕を振りかぶつたピンタをお見舞いして『接しやすく良い子』は目を覚ます。

「あ、あれ？ 私——？」

「オウ、あのガキンチョが何かしたのかテメエと数人が急に笑いだんだよ」

確かに周りを見れば、『ガサツ』が『接しやすく良い子』にピンタをしたように他の者

達が変になつた他の者達の目を覚まそうとしていた。

『マイペース』が『ツツコミ』と共にハリセンを。

『アニオタ』が『ミリオタ』と共にラバー弾を装填した銃で。

『ガサツ』のようにビンタや拳を使う『大雑把』。

等々等々等々等々。

「『ガサツ』は大丈夫だったの？」

「アン？　んな分けねえだろうが。　オレ達もあの変な出来事を見たけどよお、あり得ねえだろ？」

「次。次。次。」

「あ？」

「え、ちよ、待つ——」

そしてまた場と景色が変わる。

.....

.....

.....

.....



……

……

……

そしてまた場と景色が変わり——

——周りは暗闇だった。

漆黒の闇。

何も無い闇。

いや、訂正しよう。

何か『ある』のは『ある』のだが、それは言語化できないモノだった。

「.....」

さ　　む　　い

ボツ。

暗闇の中に一つの火の玉が出来た。

く　　ら　　い

更に火の玉などが無数に暗闇の中で創られて行く。

中には不発に終わった玉がクルクルと近くの火の玉の周りを回って行ったり、互いに衝突したりしていた。

???

気が付けば火の玉の周りを回っていた不発の何個かに何かあった。

な に ?

それを意識して近づくと聞こえて来た。

それは■■■■以外の声達だった。

こ れ は な に ?

不発の玉の表面には無数に何かがあった。

???

それは初めて観るモノ達ばかりだった。

暗闇の中を照らす火の玉を回る不発の玉の上に小さな小さなモノが在った。

思わずそれを見てみると、それらが二本足や四本足、はては幅広い何かを使って不発の玉のちよつと上を舞っていた。

それが初めて■■■■の興味を引いた。

むねがぼかぼかする？　これは、なに？

それは■■■■の初めて感じた事だった。

■■■■つて　なに？

始めて疑問を■■■■は持った。

これはなに？　さっきからのこれ  
はなに？

初めての思考の戸惑い、気を間際らす為にさっきの玉をもう一度見る。  
そこには二本足の者達が四本足や幅広い翼の者達から逃げていた。

■■■■が見ていくと、二本足が次々と無くなつて行つた。  
???

そして何を思ったのか『壁』を創った。

これに気付いた二本足が■■■■に向かつて平伏して行つた。

むねがぼかぼかする

そこから二本足達は未だに争う四本足と翼を持つ者達と違い、すすすす変わつて行つた。

始めは石を使い、次に気付けばその石を蔓で棒に巻き付けていた。

そして次には小さな火を棒に点けて、気が付けば——

——他の何かが聞こえてきた。

『お初にお目にかかります、偉大なる母上殿』

は  
は  
う  
え  
???



『可愛い』と呼んだ。

それは■■■■にとつて別に何てことは無かつた行動だつた。

ただ二本足の者達が更に小さな二本足の者達にする行動を真似ただけだつた。

そこから瞬く間に■■■■に挨拶をする声次々と殺到してきて、■■■■は更に胸がポカポカとしていた。

だが■■■■はふと思つた事を『母上』と自分を呼ぶ者達に問いをした。

.....じぶんはなに？

この問いにガヤガヤと共に会話をし始めるモノ達が言うには——

『母上』は『母上』。

『母上』は『全て』。

『母上』は——

『母上』は——

『母上』は——

『母上』は——

——といった具合に、明確な返事は帰つて来なかつた。

だが『母上』と呼ばれた■■■■は別にこれを不満に思つていなかった。

初めからそう在り続けただけに。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

あれから『時間』が更に経ち（『時間』という『概念』がガツシリと固定化したので）、  
 ■■■■■は『子供達』に（■■■■■を『母上』と称えているからそう呼んでいる）ある  
 日一つの質問を聞く。

『わたし、あのわくせいにいきたい』

それは『子供達』にとつて『母上』が初めての『頼み事』だった。

『子供達』は歓喜に震え、せつせと迎え入れる準備を進める。

二本足、四本足、その他生物の頂点に立つ亜神や眷属の全てに『神託』が下されたり  
 などして文字通り世界達が信仰を向けている神等の更なる上に立つとされる『大いなる  
 母上』が何時でも来訪出来る様にせつせと準備をした。

そして■■■■■は一つの星を決めた。



『……………???'』

『い、以下がなされました? 『母上』?』

『どうやっていくの?』

その星の神に■■■■が聞き、『子供達』は様々な方法を伝授する。

『泥から創る』。

『血肉から創る』。

『集合体として存在する』。

等と言った方法があり、■■■■はどれをするのか迷った。

時間はかかったが、■■■■はその選んだ星の神と共に地上へ降臨して、皆が祝福した。

「……………あ」

「どうしたのですか、母上?」

祝福してくれていたのはかつて、四本足や翼を持った者達から自分が気ままに『壁』を創って平伏した二本足達だった。

それから■■■■は知った。

『生』のあらゆる『楽しみ』や『娯楽』、『面白さ』など。

それを次から次へと、かつて不発の玉の星達を渡る間に■■■■は経験した。

更に時間が経ち、ある日■■■■は考えた。

「……………そうだ、じぶんでほしをみまわろう」

……………

……………

……………

……………

……………

……………

…

場はある森の中で、二人の人間が歩いていった。

一人は成年したかどうか曖昧な歳の女子で、もう一人は幼い少女。

そして二人とも同じ中身だった。

何を隠そう、■■■■■■■■■■は『二人分の体と精神を作れば、二倍楽しめる』と単純に思っていた（あと少し前に幼い姿のまま一人で出かけるのは危険と言われていたから）。

降り立った星は現在から言う、中世の時代に近い技術に魔法や魔術に魔物と言った、ごく良くあるファンタジー設定の星だった。

二人がある村の城壁……………というか塀に辿り着き、大きな木の門の前に着き、戸を

叩く。

二人の見回りらしき男性が気の門を開けると姉妹らしき二人の女性は話しかけてきた。

服装は中世時代の旅人らしく、小さな子は姉らしき人物の手を握りながら男性達を見ていた。

「すみません、夜になりかけていて道が見えなくなつてしまい……………道を教えて頂けませんか？」

「迷子か！ 今からだで大変だぞ？」

「ああ、さあさあ入つてくれ！」

「あ、えと、でも——」

「遠慮しなくていい、ここは国境近くの村だ！ 難民、旅人、商人などが色々訪ねて来る

！ ゆっくりしていきなさい」

姉妹は互いに視線を合わせて——

「——では一晩、ご厄介になります」

姉の方がニツコリと笑顔を浮かべて返事をする。

男性の一人が姉妹二人を村長に合わせ、男性は二人を自分の家族の待つている家へと案内した。

中で男性の妻が姉妹二人を迎え入れて、夕飯のスープとパンを出して、彼らの子供と一緒に食事をする。

「こんな森の奥で子供二人だけで一体どうしたんだい？」

「あ、えと……知人の居る街へと道を歩いていたのですが、初めてでしたので」

男性の妻に姉の方が丁寧に答える。

「へー、そりや偉いね！ 大変だったろう？ ん？ 怖がらなくて良いんだぞ、お嬢ちゃん？」

妹の方は未だに言葉の一つも発さず、ただチビチビとスープを飲み、カリカリとパンをかじっていた。

「す、すみません。妹は人見知りです……ですが私を心配して付いて来てくれたんです」

「小さいのにお姉さん思いの優しい子だね！」

「へへ、魔物はいつ襲ってくるか分かんねえからな！ けどそいつらなんか来たら俺がぶつ殺してやらあ！」

姉妹が世話になっている夫婦の子供が元気いっぱいにそう言い、彼の父親が笑う。

「ははは！ この通り家には頼もしい剣士がいるからね！ せっかくだから少しここで休んでいきなさい。もう夜が遅いぞ？」

「え?!」

妹の方が時計を出して姉に時間を見せる。

「まあ、ありがとうございます。お礼と言つては何ですが——」

姉の方が小さな小瓶を出す。

「ほう! 意外だね、こんな辺鄙な村で『ポーション』を見るとは!」

「私達の知人の知り合いに達に分けるつもりの一つの品です」

「へへ、こりゃいいね! ありがとうございます! もう少ししたら他の者が出来上がるからね! たんとお食べ」

その夜、ニコニコとした家族との団欒で出て来た食べ物や姉妹は食べて就寝する。

少し時間が経ち、見回りの村人が一人、村長が門番をしている事に気付き、笑顔になる。

「お疲れ様です村長! 貴方が門番をやっているという事は『来客』ですか?」

「うむ、今晚は賑やかになりそうじゃ」

村長と話しかけた男子は両方とも、実に愉快な笑顔を浮かべていた。

.....

.....

.....

……

……

……

……

ガタ……………ガタガタッ！

スースー寝ている旅人の姉は何かの物音に意識が覚醒する。

「(…?)」

「ツ——ガ——あ——」

姉が目を覚まして音の方へと向くと——

——首を絞められている妹が見えた。

「——え？ きゃ——あグツ！」

今度は姉の方が押し倒され、首を世話になつてゐる男性に絞められた。

「あーあ、目を覚ますたあ運のわりい奴」

首からミシミシとした音が聞こえ、痛みで完全に覚醒した意識で男性の後ろに村長やほかの村人たちがいるのを見て、助けを呼ぶように手を伸ばせる。

が、村人たちは誰一人として動かなかつたどころか、笑みを浮かべていた。

「すまんなお若いの、これが我々の生き方じゃ」

ゴキッ！

骨の潰れる音がして、姉妹の目は虚ろになる。

村人たちはこれを「絶命した」と思ったのか姉妹のカバンなどを漁り始める。

そして実はと言うと人は首の骨を折られても生きてゐるケースが割と多い。

まあ、「生きてゐる」よりは「意識があるだけ」なのだが。

なので姉妹二人は「意識を持ったまま」以下の出来事を見ていた。

動かぬ体で。

「チ、路銀はこれっぽっちかよ——」

「——バカ、ガキに何を期待してゐるんだ？」

「けどよう……………ハア〜」

妻の方がポーシヨンの匂いを嗅いで、嫌な顔を浮かべる。

「この『ポーシヨン』も安つぽい香りね。売れてもはした金以下」

「ふむ、ならばあの二人の髪を切れ。カツラ用に売ろうではないか」

村長の一言で未だに意識のある姉妹たちの頭が乱暴に持ち上げられて、長い髪の毛がジヨリジヨリと切られていく。

「おゝい！ 作業まだか？ 穴の準備が終わったぜ」

文字通り身包み全てを剥ぎ取られ、姉妹達は村の外へと運び出され、新しく掘られた穴の近くに村の男子の何人かが立っていた。

姉妹たちは穴の中に放り投げられて、土が彼女達を覆う。

未だに意識がある二人に。

次の日、その同じ村のとある男性は新しく入手した時計で寝坊せずに見回りに行く前に妻が新しく入手したりボンが似合う事を褒めていた。

.....

.....

.....

.....

.....



……

……

その少し後に、何時もと様子の違う『母上』に『子供達』はオロオロしていた。

『母上』が全然返事をしてくれないのだ。

何故こんな事になっていいると思ひ、調査をしていく内に彼らは知った。

自分たちの管理する星に外から降り立つた存在の記録があると。

つまり彼ら彼女らの『母上』は事前予告無しで様々な星に同時に降り立ったという事になり、更に調査を進めるとあろう事か悲惨な目に会っていたか会った後だった。

そしてこれ等の出来事を三月達は連続で経験していった。

……

……

……

……

……

……

……

あれから幾度の生を経験していく中、彼女達は発狂して行き、互いを殺し合うか、自殺するかの者達が後を絶たなかった。

何せ経験するものがあまりにも『常識の範疇』を超えていた。

『人』である時には地を放浪している間に喉を斬られ、持ち物全てと髪の毛を持って行かれ野垂れ死ぬ結末。

一泊の宿の宿屋に騙されて奴隷や娼婦等々として売られたり、娯楽の為の監禁など。拉致され、はした金である機関に売られて、意識を保ったまま解剖されたり、など。騙されて標本化されたり、生きたまま目や脳を取り除かれたり。

ギロチンで首を落とされたり、火あぶりにあつたり、首を吊られてただ死を待つ日々など。

ありとあらゆる非人道的行為と出来事を『他者』が『自分達』に行う数多の事を経験して行く度に彼女達は消えていった。

しかもこれらは『人』である場合。

『人』として男、女、子供の場合などはバラバラで、統一性はあまりなく、時には他の『有機物』の『動物』や『虫』や、はては人類から見た『人外』や『無機物』などの場合もあった。







ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“  
 ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“ ア“  
 “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “  
 “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “ ア “

それでも『生』の記録経験は続いた。

ずっと。

ずっとずっと。

ずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっとずっと。

結局残った『接しやすく良い子』だけがその経験をして、また景色は変わる――

――■■■■が戻って来たと言った『子供達』は嬉しい半面、全く返事をしてくれない『母上』が気がかりだった。

ちなみに各星で『母上』の精神を持っていた端末たちに悪事を働いた者達には既に神罰という神罰が下されていた。

が、■■■■にそれは分からなかったし、未だにただ『理解』が出来なかった。

いや、そのような『思考』こそ『在った』時から初めての出来事で■■■■自身戸惑っていた。

様々な思惑とも呼べないような考えで、強いて言語化するのであれば、それらは『意気沮喪』と言った所か？

ただこれも厳密には違い、言語出来ないようなものが■■■■の中でただ渦巻いていた。

グルグルグルグル、と。

そしてある日——

——各星では異常が多発していた。

ある星では死者が蘇り、生者を襲い、死者になった者達が蘇るといった無限ループ。

またある星では起こった事が無い大災害が各地で同時に起こり、住んでいた生物達はパニックに陥っていく。

魔法や魔術が主な世界では魔力そのものが消失して、他の者達の所為で『神』に見捨てられたと互いの相手の悪事などを断罪し始めたり。

等々等々等々等々と言った『天地異変』と呼んでも決して過言では無い出来事に、その星の『神』である『子供達』はてんやわんやで、自分達では消す事が出来ない事に驚きながらも出来る事はした。

上記の場合等では――

――死者が蘇る星では死後の『魂』が彷徨い、自らの『体』に戻るのが原因で自己が崩壊し、他者を襲うので『魂』を隔離する『異界』を新たに作り、そこに死者の『魂』を生者が『送る』事で蘇る事を阻止できる。

――大災害を生き抜いた者達には『異能』を備え付け、次なる大災害への『阻止力』として力を与えた。

――魔力そのものが消失した星には、他の星からの『技術者』や『科学者』の魂を前世の記憶と共に送り、『魔力』が無くても生きていける星に変えたりなど。等々々。

後手ではあるが、しないよりはマシな方向へと事は各星でゆつくりと転換していった。

そして『子供達』はこれが『母上』が関与していた事も知ってしまった。



何せ自分達が管理している星では何でも思い通りに出来る。

そこに嵐があるのが、力や権力や地位に狂った亜神であろうが、隕石であろうが消そうと思えばそう出来る。

ならば自分達が『関与出来ない』という事は、更に上位の存在の關係があると思ひ、「子供達」は「母親」に訊いて返って来た言葉に全員がショックを受けた。

「かなしい」

これに『子供達』は堪ったものでは無かった。

ただ「悲しい」と言うだけで何百、何千という時を超えて、管理をしてきた自分達の世界が滅茶苦茶になるというのが。

そして『子供達』は思う。

「もし『悲しい』でこれならば——

——『失望』や『絶望』などしてしまつたらどうなる」と。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

文字通りの死闘の末、『子供達』は『母上』を封印出来たかのように思えた。

最初は説得しようにも、価値観や考え方や意義などに違いがあまりにもあった為『説得』は早く断念した。

掻い摘んで単純化するが、『母上』に『罪悪感』や『同情』などの、今までの『存在するもの全て』にある筈の『共通感』らしきものがまるで解かかっていないかのようだった。次に『子供達』は『消去』しようとした。

だが『子供達』と違い、『母上』は文字通り全てだった。

人間的に例えるとすれば、21世紀の人間はスイッチ一つ捻るか押すだけで、電気が走って、電球に光が生じる。

ではこの光に『知性』や『自我』があると例えるとしよう。

その光に自分の誕電気が流れる事生は知覚できるのだろうか？

スイッチが切られ、電気が消されるその瞬間も意識しているのだろうか？

そんな事はスイッチを点けたり消したりした『人間』からすれば『何てこと無い』ものと同じように、『子供達』の『母上』に『消される』等と言った『概念』そのものが存在しなかった。

そして最後に『封印』という形に何とか収まった。

ただ代償は高く、『子供達』自身も同じような『封印』を自らに施した。

まあ……それは上記に『死闘』と書いてはいるが、実のところは一方的な『虐殺』に近かった。

何せ『母上』に『消される』や『殺される』という『概念』が存在しなくても、『子供達』にはあり、『母上』にその気が無くても「あっちいけ」や、「ほしくない」と『母上』が思っただけで『子供達』や彼ら彼女らの眷属は存在ごと消される。

しかも何度も試行錯誤の末『子供達』は解かった。

というか解かってしまった。

『母上』を『子供達』や眷属達、果ては星達の住民や生物達が認知さえすればする程、その存在自体が更に固定化する。





「だ·け·ど·ご·め·ん·ね、『私』にはやるべき事があるの。貴方とここで一緒に居られないの」  
 『接しやすく良い子』が『ボロボロの自分』から両手を離す。

が——

「——だめだよ、ここにいつしよにいようよ」

『ボロボロの自分』が『接しやすく良い子』の腕を掴む。

「……………ごめんね？」

「そとはこわいよ？」

「知っているよ……………でも、それだけじゃないのよ？」

『接しやすく良い子』が脳裏に浮かべたのは今までの数々の、この10年間『人間』として生きて来た間に知り合った『ヒト』達だった。

「悪い事もあれば、良い事もある」

過去に色々の試行錯誤を行った時を彼女は思い出す。

今となつては思い出だが周りの人達からすればハラハラドキドキ、または肝が冷える

ような出来事ばかりだった。

例えば拉致されそうになった事もあり（『マイペース』による誤差）、その時は藤村組が大活躍して大事になる前に何とかなかった。

値段を騙されそうになり（『知的』によって見破った）、その品をお店の店員に投げつけて（『ガサツ』の暴走）、そしてそれを一緒に物理的に抗議謝りに来た藤姉と士郎。等と。

「でも……………」

「ッ」

シユンとする『ポロポロの自分』に『接しやすく良い子』が腕を掴み返して笑いの顔を向けた。

「大丈夫だって！ お姉ちゃんに任せなさい！」

「おねえ……………ちゃん？」

『接しやすく良い子』が言った言葉は、過去に士郎に伝えられた事に酷似していた。第2話より

「じゃあ、ここを一緒に出るよ！」

「……………うん」

『接しやすく良い子』は『ポロポロの自分』を抱えながら暗闇の中を力いっぱい走る。

『接しやすく良い子』にはまるで分厚いゴムで出来た壁が自分達を押し返そうとするかのように重かったが、そのまま押すと――

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、セラ、桜、慎二、セラ、アーチャー 視点

場所は冬木市の北東にある海岸へと移り、そこでは満身創痕のアーチャーが二つの剣を三号の胴体に突き刺す。

「――で？ 在庫は後何個残っているかしら？」

「この、化け物が！」

「フフフ♪ 良く言われる☒」

二人の周りの有り様は酷く、まるで戦争跡地のようにクレーターなどがあつた。

士郎は先程から接近戦を捨てて、弓矢を使い、凜とイリヤと共に援護射撃をしていた。



だが先程から三号は躲す事はおろか、自分の身を守る事もせずただ反撃していた。胴体に穴が抉られようが、手足が吹き飛ばされようが、頭を粉碎されようが何事もなかったようにほぼ瞬時に再生していた。

最初から全力を出していたアーチャーの息遣いは荒く、体中に斬られた傷跡から血が滲み出ていた。

「流石は腐つても『守護者』。ここまで楽しい玩具は久しぶりわ。ンフフフ、アハハハ」  
 「ハア…ハア…ハア…（四肢や頭部、胴体を破壊しても瞬時に再生する能力…：…：厄介この上極まりないな、全く）」

アーチャーは両手に剣をまたも『投影』する。

「（ならば肉体を一片も残さず絶滅させるのみだが…：…：オレにやれるだろうか）」  
 「本当に…：…：本当に『ヒト<sup>人類</sup>』は素晴らしい、人の身で良くぞここまで練り上げた—

——お礼に見せてあげる。『体は元素で出来ていた——』

これにアーチャー、士郎、凜、慎二の目が見開かれる。

それはアーチャーと士郎の固有結界に酷似していた。第31話、32話より

『——— 思いは皆無——— 』』

『「——— ウオオオオオオオオオオ!!」』

アーチャー、凜、士郎がいち早く反応する。

凜は宝石を使い、かつてヘラクレスに使おうと思っていた、キツイ一撃を。

士郎とアーチャーは次から次へと剣を突き刺していった。

だが止まらなかった。

『「——— 血肉は泥で、魂は虚無。』

『私』は『———』にただ孤り、

『世界』をただ視ていただけだった——— 』』

アーチャーがまた三号の首を刎ねようとする。

だがまたも切り口が再生していく。

『死ぬ事も許されず、

生きる事も許されなかった。

幾たびの時を経て、

他者の知り合い、触れ合い、世界を知り、

自ら感じた事は『無限』と言う名の『種の業』。

けれどただ一度も『善悪』を感じた事は無く、

ただ種への『失望』を秘めていた。

『私』は、

———  
『無限』の『業』で出来ている』  
I n f i n i t e K a r m a W o r k s

三号の言葉が終わると、場は一転して代わる。

『紛争地帯』。

士郎と凜、そしてアーチャーにとつては前に見た場所だった。

「さて、英霊エミヤよ！ 今回はいつまで持つのかな？」

ビルの物陰から少年兵が銃を撃つてきて、イリヤとセラ、そして凜は三人掛かりで境界を張って自分達、そして近くにいた信二と桜を守る。

「クソ！」

「オレについて来い、衛宮士郎！」

そこから二人は周りの敵を排除していく間、三号はただ近くのビルの屋上から見下ろしていた。

「♪———グギッ?!」

三号の顔が愉快そうな笑みから初めて苦痛に歪んでお腹を押さえる。

「ガ……………ギッギッギッギッ!!!」

歯軋りを三号がして、急に両手が口を無理やり開ける。

「アガガガガガガガガガガ———ボエエエエエツツツツツツ?!」

ボフンツ!

三号の頭が粉々に、完全に爆発する前に三号は見た。

何かが戦う士郎とアーチャーの場所へと向かうのを。

「遅いぞ、衛宮士郎！」

「無茶言うな! こちとらテメエと違って人間なんだ!」

アーチャーが矢で数人射る間に士郎が近くの一の少年兵を切り伏せる。

だが浅かったのか、士郎が次の敵へと背を向けるとその少年兵は手榴弾のピンを——

「『後ろにも目をつけるんだ!』 ってね、シロウズ!」

—— 抜く前に手を切り落とされ、首が刎ねられてどどめが刺せられる。

士郎とアーチャーは直ぐにこの聞き覚えのある人物に剣と矢を向けて——

「————ぎゃああああ!!! 待って! 待って! 『私』だから!  
『私』 いろいろいいいい?!!」

「ツ! 待て、アーチャー!」

手に持っていた剣を落として、両手を上げる人物に士郎とアーチャーの攻撃が当たる寸前にピタリと止まる。

「貴様、どういうつもりだ?!!」

アーチャーは若干苛付きながら士郎に問う。

だが士郎はこの目の前の人物に一つの質問を訊いた。

「1998年の4月17日と18日は何の日だ?」

「怖い映画と一緒に見て、士郎がその夜泣き付いて来て『一緒に寝たい』 って言った日。次の日オネシヨをした事が藤姉にバレそうだった日」

「ぐあああああ?!?!?!」  
「えつと、ごめんね?!」

認めたくないけど本物だアアアア!!」

士郎の質問に即答する人物の答えに頭を抱えながら顔を逸らす士郎にアーチャーが見  
見——

「——君は何故服を着ていないのかね?!」

「今そこ指摘するのアーチャーさん?!」

目を逸らすアーチャーのツツコミにツツコミを返す、体中と髪の毛の所々に血がへばり付いた『三月』だった。

あと余談だが、角度の問題でアーチャー曰く只今全裸の模様。

「どうかそんな余裕なかったよ私?! それに必要なモノでも無い s——」

「とにかく服を着てくれ!!」

赤面する士郎とアーチャーにぶうたれるも、近くのコートを死体から取って羽織る。

「しかし一体どういう事だ?」

「手短に話すけど『私』は『魂の存在』みたい」

「ハア?」

士郎がなんの事を話しているのかよくわからない顔をする半面、アーチャーは面白くなさそうな顔を浮かべていた。



「三月！ グスツ僕達はエグツ心配したんだからな?! ヒグツ急に態度変えて！」

「いやいや慎二君、泣くのが全然隠せてないよ」

「うるひゃい！ ほごりが目にぼいっただけだ！」

「……………ありがとう、皆」

三月は自身の胸が暖かくなるのを感じ、心からの笑顔を浮かべ、周りに居た皆は啞然とする。

その笑みは『作営業った笑スマイルい』とは違い、誰もが初めて見るモノだった。

「……………君は本当に三月なのか？」

「え?! まだ疑っている——」

「貴様、何故未だに存在している？」

近くに苛立ちを全く隠す気もない三号が降り立つ。

「あちら、流石は『精神』と『肉体』ね」

睨み合う『三月』と『三号』を互いに見る信二達。

そこにイリヤが不意に口を開ける。

「これは『第天三杯魔法』？」

「……………そうか。そういう事か」

三号が何か納得したかのようにクツクツと静かな笑いが続く。



「成程、流石は『約束神された勝利兵の剣装』と言った所か。次は氣を付けよう」  
「何の、話だ？」

急にセイバーの宝具の話が出て来た事に困惑する士郎に三月がただ静かに答える。  
「『私』は10年前、セイバーに殺されたから」

## 第51話 『借り物』の呪い

アーチャー運営、衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、セラ、桜、慎二 視点

『私』は10年前、セイバーに殺されたから」

三月のこの宣言に士郎達は混乱した。

『10年前』と言えば士郎共々に三月が衛宮切嗣に救われた日で——

「——『冬木大火災』の直前、『私』は『約束された勝利の剣』を受けて一度死んだ……成程ね、通りでセイバーやギルガメッシュを先に排除した訳ね」

「いやいやいや、待ってくれ三月。一度死んだって……」

「ああ、ごめん士郎。一度死んだというよりは一度粉々にされたと言った方が当たっているか」

「……………それでミーちゃん……………いえ、『魂』が分離した？」

「さっすがイーちゃん！ 『この世界』で言う所の『肉体』、『魂』、『精神』と言った存在要素の事ね——」

「——御託は良い。『魂』よ、戻る気は無いか？」

「無い」

『三月』の即答に『三号』は一瞬呆気に取られるが、すぐに無表情になる。

「そうか——」

次に士郎達が気付くと三号はもう三月の前に移動していた。

「——『固有時制御・三倍加速』！」

三月は『固有時制御』を使って間一髪と言った所で三号の手刀を避け、反応したアーチャーが三号を切り伏せる。

「少し面倒だな」

元の位置から動いていない『三号』が切り伏せられた『三号』と士郎達を見る。

「これは——」

「——別個体、ね」

アーチャーは切り伏せられた『三号』が塵となって消えて行くのを見て、三月がボソリと言う。

「……………アーチャーさん達では倒せません、他の皆を頼みます——！」

「何?! 待て、三月君——！」

『三月』が突然『三号』へと両手に双剣を『投影』して駆けだすと、泥状の『人型』に似

た何かが『三月』に襲い掛かる。

「こんな、即席風情に——！」

『三月』は『人型の泥』の攻撃を躲して、同じく双剣をもった『三号』へと斬りかかる。その剣術は互角……………どころか、『三号』は常に余裕の笑みを浮かべていた。

これを見て、『三月』は直ぐに新たな剣を『投影』して以前のアーチャーの様に飛ばした。

そして嘲笑うかのように『三号』は同じ行動に出た。

剣達が激しく当たり、二人は一時双剣をぶつけ合つて、膠着状態になると——

「クッ！（やっぱり正面はダメか！）」

——訂正、『三月』が押されていた。

「……………何故だ？」

「??？」

『三号』が笑いながらも疑問を『三月』へと問う。

「何故そこまで『人間』のフリをする？」

「『何故』、か）……………何故だろうね？ それって『私』が『人間』だからじゃない？」

「それはあり得ん。『自分が人間』などと——！」

「——じゃあどうしてあの時、貴方は人類を守ったの?!」

「ツ。ただの気まぐれだ！」

三月の肌足が踏ん張り、後ろへとずらされるのを止める。

「気まぐれなら！ 何で悲しんだりしたの?!」

三月の言葉に『三号』の笑った顔が一瞬苦痛に歪む。

「……………やはり、お前は『消去』する！」

このやり取りを『人型の泥』を土郎達と共に倒していたアーチャーが聞き、以前の言峰綺礼を思い出させていた。

「……………奴が言峰神父の言っていた『主』か！」

「チ、綺礼め。要らぬ事をべらべらと……」

言峰綺礼が「我が『主』と呼んでいた存在が目の前『三号』と思い、アーチャーがブラフで言うと思いのほか彼女(?)はそれを肯定するかのような一言を吐き捨てる。

「まあいい——」

『三号』が大きく後ろへと引き下がると土郎達の周りに様々な人達や異形のモノが地面

から『生まれてくる』。

「(まずい——)——皆結界を張って！」

三月が急いで戻り、凜、イリヤ、そしてセラと共に結界を張ると周りのモノ達が一齐に爆発する。

言わば『自爆テロ』の光景だった。

「皆……………無事？」

「ミーちゃん！」

「三月、お前——!!!」

「「ッ」」

「何故だ、三月君?!」

「そうだよ、何で僕達だけを守ったんだ?!」

三月の名を呼ぶイリヤ。

驚愕に声を出す土郎。

息を短く吸う凜と桜にセラ。

怒る様に問うアーチャー。

そして慎二の言葉。

三月は自分以外に結界を張っていたが為に、自分の守りを疎かにしてその結果に左腕



で、ひとえに彼女が何とか耐えていたのは苦痛、怨念、殺意、憤怒などのあらゆる感情や『負の念』等を分裂して多人格にその『精神汚染』をフィルター（または背覆つてもらい）、以前作つた魔術礼装に莫大な程の魔力を流し込んで『個人』である筈の結界の『範圍』を無理やり変えていた。

「ここで三月はある事をふと思った。

もしあのまま『三号』を攻めていたのなら――

「――ッ！　グウウウウ!!!」

ほんの少し、本当に僅かに少し気を許しただけで自身にかかっていた圧力が増したのを感じ、三月は魔力を更に結界に送り込んで阻止する。

「!!!　奴め、そういう事か！　それが狙いか?！」

「ああ。アーチャーは助けられないのか?！」

「恐らくだがあの『泥』はサーヴァントと人間共々に致命的だ。

「触れれば最後、『侵食』されるだろう」

歯がゆい表情でさっきの出来事で周りの『暗闇』が押し込んできた際に他の皆をさらに固め、しゃがませたアーチャーと士郎が互いに会話をする。

「ど、どういう事だ衛宮?！」

「分からないの慎二君?!　私達と言う『餌』ごと、三月を潰す気なのよあいつは!」<sup>三</sup>



三月一人であれば、片腕を失くしたところで多少強引にでも抜け出せたかもしれない。  
 い。

だが念には念を入れて、恐らくは彼女が何<sup>が</sup>何<sup>でも</sup>守<sup>る</sup>人<sup>達</sup>を脅威から引かせる為<sup>に</sup>動く。

それを察したアーチャー、土郎と凜で、凜の言葉でこれを悟った慎二は怒りのこもった声で、自分に怒鳴った。

「ああ、くそつたれ!!! そ<sup>う</sup>い<sup>う</sup>事<sup>か</sup>よ!!」

そこに三月の声<sup>が</sup>彼<sup>ら</sup>宛<sup>て</sup>に聞<sup>こ</sup>えた。

「大……………丈夫。大丈夫……………夫だ……………から」

確証のない言葉と笑顔を絶やさない三月。

そして今も尚、彼女の削<sup>ら</sup>れていく魔<sup>力</sup><sub>存在</sub>。

如何に上位存在と思<sup>わ</sup>れる『魂』とは言<sup>え</sup>、実はと言<sup>う</sup>とその一部分<sup>だけ</sup>の上に『この世界の法則』に乗<sup>っ</sup>取<sup>っ</sup>てか<sup>な</sup>りの弱体化<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>れて<sup>い</sup>た。

何<sup>せ</sup>このよ<sup>う</sup>な『真実』を三月自<sup>身</sup>、つ<sup>い</sup>さ<sup>つ</sup>き『理<sup>解</sup>』した<sup>ば</sup>か<sup>り</sup>で、それ<sup>ら</sup>の事<sup>を</sup>配<sup>慮</sup>する暇<sup>も</sup>ない攻<sup>防</sup>だ<sup>っ</sup>た。

もし15分……………いや、5分ほど時間<sup>が</sup>あ<sup>ら</sup>ば違<sup>っ</sup>た<sup>か</sup>も知<sup>れ</sup>ない<sup>が</sup>、今<sup>の</sup>状<sup>況</sup>を打<sup>破</sup>する<sup>の</sup>であ<sup>ら</sup>ば何<sup>ら</sup>か<sup>の</sup>変<sup>化</sup>が無<sup>け</sup>れば、見<sup>込</sup>みは無<sup>か</sup>った。

それも、『三号』にとつても予想していないような変化が。

「~~~~~!!! (いざとなれば……………せめて、他の皆だけでも!)」

そう考え、大声で叫ぶ事に何とか耐える三月だった。

「今は待つんだ三月、必ず好機はある筈だ。 それを見逃すな)」

「うん、そうだねおじさん)」

そして静かに自身と会話を始める三月だった。

---

『三号』 視点

---

『理解不能』。

もし今の『三号』を一言で表すのならば上記がしっくり来るだろう。

『この世界』でいう所、今の彼女——

——性別が本当にあるかどうかは分からない為、方便上『彼女』と呼んでいるだ

けだが——

——は『肉体』と『精神』の存在で、その片割れである筈の『魂』が自分を拒ん

だ。



「へ。まいったねー、こりゃあ」

「セイバーがしくじったか」

『三号』を近くの瓦礫から見下ろしていたのはボロボロのランサーだった。

「アイツを知っているっていう事は、テムエが黒幕だな？」

「全く、『予想外』の『展開』が次から次へと——」

「——アイツからの伝言があるぜ？」

ランサーが瓦礫から降りて、槍を片手で構えながら怒りを露にする。

「『地獄に堕ちろ』ってな！」

「その『地獄』に行った事はあるが、それがどうした？」

「ほざけ！」

ランサーが踏み込み、『三号』がランサーと同じ紅い槍を取り出して無表情に応戦する。

「へっ！ まさかマスターと戦う羽目になるとはなあ！」

「『私』は『魂』とは違う」

激しい攻防の末にランサーが押され気味になって行くが、彼は相変わらずただ楽しそうに笑う。

「だろ？ 今の泣いている姿は痛々しいぜ？」

「ッ!! 黙れ!」

「お? 凶星で怒った、か?!」

ランサーは自分の肩を敢えて刺されながら『三号』に槍を突きそうになる。

だがそれの前に『三号』は素早く後ろへと飛んでランサーをただ見る。

「成程ね、確かにお前は『マスター』じゃあねえなあ。アイツは『大物』だが、お前はただの『ガキ』だ。現にお前、本気を出せていないだろ?」

『三号』は反応しないが、ランサーが言葉を続けて槍をもう一度片手で構える。

「お前の動きに『迷い』があるぜ?」

『三号』の頭がズキツと一瞬痛む。

「(『迷い』、だと? そんな事を、『私』が——)」

「———おら。来いよガキ、『年長者』の胸を貸してやらあ」

ズキツ。

「『英霊』風情が——!」

『三号』が今度は攻め込み、ランサーを徐々にまた追い込み始める。

「(『迷い』?! ふざけるな! これも全て『魂』の——!)」

「一つ言っておくが、俺は自分を『英霊』と思った事はねえよ! ただの——!」

ガキーン!

ランサーが自分の槍と『三号』の槍共々宙へと弾き飛ばして、左手で今までずっと静かに刻んでいた、自分の所有するすべてのルーンの最後の線を刻む。

「『戦士』だつてな——！」

大きな陣の様なモノが『三号』とランサーを包む。

それは固有結界のような——

「——小賢しい！」

空間自体がひび割れる様な音と共に苛ついた『三号』とランサーの周りの陣らしき物がガラガラと崩れる。

「へ」

陣が崩れると同時にランサーがニヤリと「してやったり」の笑みを浮かべる。

『三号』は一瞬ランサーが何の事に笑っているのか考え、すぐに後ろの半球状の黒い塊へと振り向かう——

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!」

『破戒すべき全ての符』を『投影』したアーチャーに対して横へと飛んで——

グサリ。

「——な」

何か刺される『三号』が見ると、ボロボロの体を無理矢理『タイム・アルター』で加速した三月が士郎を残った片腕で、『三号』が躲すであろう方向に前もつて二人で移動していた。

「font:ul09」ツ《/font》

「いれで——！」

「font:ul09」くあwse d r f t g y ふじこ l p 《/font》

意味不明な音を『三号』が出して——

——世界は海岸へと戻った。

そこは『三号』が現れた直後で、未だに夜の冬木市の海岸に倒れそうになり三月を支える士郎、慎二、桜。

そして満身創痍のアーチャーを支える凜と同じぐらいボロボロのランサー、横にいたイリヤとセラが三月の居る場所へと駆け寄ると三月が黒い太陽を見ながら口を開ける。

「何とかなつたみたいね」

「これからどうするんだ、三月？」

先程『三号』に対して『破戒ルすルべきブ全レてイの符カ』を使用するといった方針は三月が上げたモノだった。

もし『自分』が『三号』と同じならば彼女にも『破戒ルすルべきブ全レてイの符カ』は何らかの効果があるはず。

少なくとも『無限の業』《Infinite Karma Works》の世界から脱出できる。

まあ……まさか冬木市の海岸まで戻るとは誰にとつても予想外だったが、今の三月には都合良かった。

「イーちゃん、『アレ』を閉じるにはどうしたら良い？」

「ッ」

三月の問いにイリヤは口を堅く閉じる。

その小さな最後の抵抗をセラがぶち壊すが。

「『アレ』は恐らく大聖杯は至る『孔』と思われませう」

「セラー！」

イリヤが怖がった顔でそのままの事を三月に伝えるセラを見る。



「お嬢様、これは『魔術師』としての義務です」

「そっか、やっぱりそうなんだ——」

三月が士郎の手を残った片手で優しく解く。

「アーチャーさん、ランサーさん。二人ともまだ動ける？」

「……………そうだな、動くだけならこのままでいい」

「俺もまだまだ動けるぜ！ まあ、こいつと同じで戦闘は無理だがな」

「そっか、じゃあ行つてこようか——」

「——待つてミツキ！ 私達が行く！」

イリヤが三月に抱き付きながらそう言う。

「もう良いでしょ？ 後はお姉ちゃんの私に任せても良いんだよ？」

イリヤの『お姉ちゃん』宣言に困惑する士郎とランサーだが、三月はただ彼女に向かつてはにかむながら、頭を撫でる。

「そんな事を言い始めたら、私なんか大のひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい御祖母ちゃんだよ？」

「……………え？」

「手伝つてくれるかしら？」

「……………うん。セラ、出来るかしら？」

「安心してくださいお嬢様。リーゼリットに出来て私に出来ない通りはありません」  
三月がイリヤの手を優しく引き、歩き始めるとセラ、アーチャー、ランサーも後を追うかのように歩く。

「だって、私達には——」

「——『皆を守る義務』があるってね」

イリヤの言葉の続きを三月が付け足す。

「待ってくれ——のわ?!」

三月が手を振ると結界が士郎達を包む。

それは外から内側の干渉を阻止するものではなく、逆に内側からの干渉を阻むものだった。

「待ってください、三月先輩！ 私は、私はまだ伝えていない事があるんです！」

「(ごめんね、桜)」

「そ、そうだぞ！ 僕だって、僕だってまだ沢山言わないといけない事もあるんだ！」

「(ごめんね、慎二君)」

「ま、待ってください！ お願いだ！ 他に方法はあるだろ?!」

「そうよ！ もう少し他の方法を探しましょうよ！」

士郎と凛の言葉に三月とイリヤは初めて止まる。

「他の方法、ね」

「あるかもしれないけど、時間が無い」

「「え？」」

士郎達に少女二人が振り返る。

「このままだとまた生まれて来る」

「それに……………」

「ね？♡」

「止めてくれ！ 二人とも！ 俺を——

——また独りにしないでくれ!!!」

士郎はどうとう股を崩し、ただ泣く。

今ほど無力な自分を呪った事は無かった。

自分は「周りの者達を守る」といった『正義像』をやつとこなして来たと思つた。

それは確かにそうだし、ギルガメッシュと言う、最強に近い英霊を（ドーピングもあつ

たが) ほぼ一人で負かしていた。

そんな彼がまた他の誰かが自ら犠牲になって行く。

慎二と桜は泣いた。

自分達を支えてくれた血の繋がっていない『親族』がクソ爺のおかげで元を去って行く事をただ見ていることしか出来なかった。

凛は悔しそうにただ睨んだ。

自己嫌悪と今日一日の出来事でグチャグチャの内心にあった「常に優雅たれの魔術師像なんてクソにも役に立たないじゃない！」と思いつつ泣くのを堪えて。

---

アーチャー運営、イリヤ、セラ 視点

---

「そっか、セラさんを使うの」

イリヤが三月に説明をし終わり、彼女は誇らしい表情をするセラを見る。

「元々はリズがその任をこなす筈だったんだけど……」

「ご安心くださいお嬢様。もとより『破棄処分』になる私がここまで来られたのはお嬢

様が居たからこそです。このセラ、必ずや成功させてみます」

「して、三月君。 どうするのだね？」

「『アレ』を閉じて、夜を終わらせる」

三月がまだ距離が空いている、暗黒の太陽に指を指す。

その大きい存在は未だに太陽の様に光を振り注いでいた。

『光』ではなく、『闇』そのものをだが。

「成程、では我々はもしもの時の為の露払いか」

「何でえ、結局戦うのかよ」

「最悪の場合だけ」

三月がニコリと笑いながら、頭に響く『三号』の声を無視する。

『考え直せ』『魂』。 もうここまで来たのだ、今更“人間のフリ”をするのか？』

「……………」

『それに“人類” はまた貴様を断罪し、傷つけるぞ？』

「……………」

『“生物”は“弱い”。 自分達よりも“優れたモノ”、“強いモノ”や“得体の知れ

ないモノ”に嫉妬や恐怖など勝手にして排除する』

「ねえ、アーチャーさんにクフちゃん」

「何だね？」

「まだそれ続けるのかよ?!」

「イエーイ、お疲れ〜」

三月が手を上げて、ただ啞然としたサーヴァント二人の内、アーチャーが一足早く反応した。

「全く、君は……………」

「……………ブワツハツハツハツハ！ やっぱりお前といると退屈しねえぜ！」

「だってミーちゃんだもん♪」

アーチャーとランサーが三月とハイタッチをすると――

――『令呪』の魔力が二人に流れ込んだ。

「うお?!／ぬ?!」

ただしそれは純粹な魔力であって、『命令』は乗せられていなかった。

「これは何かあった時の為に、ね?（これでアーチャーさんとクフちゃんに対して二画と一画ずつの魔力で少しは持つ筈）」

「セラ」

「ではお嬢様、ご武運を。それと——」

『黒い太陽』の近くに來てセラがチラリと三月の方を見る。

「——三月にも」

「……………あ」

セラが僅かに笑つたと三月が思うと、彼女は眩い光の残滓となり、その場から消える。そして隣のイリヤを見ると——

「何か凄いい恰好なんだけどイーちゃん？」

「い、言わないで！ これはアインツベルンの正装……というか魔術儀式用のドレスだから！ 恥ずかしいとか……そ、そ、そういうのは言わない約束よ！」

白と金色をモチーフにしたような、肩とお腹（&へそ）を出したミニスカ風ドレスっぽい何かを身に纏ったイリヤが赤くなりながら抗議を上げる。

「えっと、私は良い言い方で言つたつもりだけど？」

「え？ あ、ありがとう」

若干イリヤが照れている間に三月は『ヘヴンズファイナル解析』を素早く済ませる。

「……………告。『ヘヴンズファイナル天のドレス』の解析完了シマシタ」

「（良し、これで準備は整つた）」

三月がチラリと海の別の海岸を見てまだ消滅していないのを確認する。

「行くわよ、ミツキ」

『■■■■■■■■』

イリヤの口調が急に変わると、前の『黒い太陽』から意味不明な音が響き出始める。そして彼女を三月が見ると目が死んでいた。

「よし、アーチャー！ 令呪を以て命じる！ 『イリヤとライダーを担いでここから退去！』 続けて命じる！ 『ランサー、私をあの子の孔目掛けて投げて！』」

「な?! ま、待て三月く——」

「——今度は救えたでしょ、シロウ？」

強制的に体が動くアーチャーが声を上げ、三月が彼に向って心の底から笑みを浮かべる。

「マスター、テメエ！ 最初からこれを狙っていたな?!」

『「ヘヴンズフィール」、起動』

怒りの形相をするランサーもアーチャー同様に令呪によって強制的に三月を投げる。モーションに入りながら怒鳴る。

その三月の服装が先程見たイリヤのドレスに変わって、ランサーにも笑みを向ける。「ごめんね、クー・フーリン。貴方には生きてほしいの。あの子達にはアーチャーだけじゃ面倒を見切れないと思うから。お願いね？」





男の人、女の人、子供、赤ちゃん、犬、猫、鳥。

皆、叫んでいた。でも以前は誰も答えてはくれなかった。

「ごめんね、皆。（さつきから謝ってばかりだね）」

それは、何時かイリヤが見た切嗣に似ていた。第10話前半より

「グッ！」

体中が圧迫される感じに三月が顔を歪める。

それも当たり前。

何せ周りは『この世全ての悪』と言った呪いが彼女を食おうとしていた。

『諦めろ、魂』。何を考えてここに来たかは知らんが、無意味だ。貴様にここで戦

う力は備わっていない』

そこに『三号』の声が他の声を黙らせて三月に語っていた。

「知っている。私に戦う力なんて初めから無かった」

『何だと?』

「私が今までここに来られたのは、周りの人達の助けと、支えと、彼らの正解の真似をし

て来ていたから。私には何一つ自分のモノ等無い」

そう、今まで三月の言動は全て借り物だった。

最初に借りたのは『衛宮士郎』と言う人物の『言動』。第1話より

次は無意識に『衛宮切嗣』言う人物の『信念』と壊れる前の彼の『無邪気さ』と壊れた時の『悲しさ』。第3話より

そして周りの人達の日常での反応や言動やメディアから得た情報。第4話からより等々々と、全てを今語るには多すぎる。

『士郎を頼んだ』と切嗣に言われ、そこから始まったのも全て何一つ他者から得たモノばかりだった。

一つだけ自分で得たモノとさえも、それは――

「『それがどうした』？」

「??？」

それは――

「私に何一つ、自分のモノは無いと思っただけ……『それがどうした』？」

私の体が偽りだとしても！

自身の思いが無くても！

魂が空っぽだとしても！

私に出来る事は前に進むだけ！

それだけだった。

私の体はまだ動く！

まだ前に進める！

だから絶対に自分から止まる事だけはしない！」

それは――

『貴様――！』

「かつての『自分』のように！ 『私』は他者を信じたい！

暖かいものを守りたい！

そういう事を夢見て、永い眠りについた事もある！ 『体は嘘で出来ていた』!!」

『貴様アアアアアアアアアアア!!』

三月の体を圧迫する力が更に強まる。

「ウツ……『思いは皆無、

血肉は泥で、魂は虚無』!!!」

三月の体がボウと光始めて、周りの闇がまるで逃げるかのように引いていく。

『馬鹿な！ 貴様単体にこんな力は無い筈だ！』

「『私』は『ここ』にただ孤り、

『世界』をただ視ていただけだった。

死ぬ事も許されず、

生きる事も許されなかった。

幾たびの時を経て、

他者と知り合い、触れ合い、『世界』を知り、

自ら感じた事は『無限』と言う名の『種の可能性』!!!」

肩から無くなっていた三月の左腕が光って、再生していく。

「けれど一度も『失望』を感じた事は無く、

ただ明日への『希望』を秘めていた。

『今の私』は、

Unlimited Possibility Works  
『無限』の『可能性』で満ちている!!!」

## 第52話 ソノゴ

衛宮士郎 視点

目を覚めるとそこは今になって見知った天井だった。

衛宮邸では無く、遠坂の家の部屋の一つだった。

『衛宮邸』。

俺がこの10年間、じいさんに引き取られて住んでいた場所は第五次聖杯戦争に巻き込まれて今急ピッチで修復していた。

あの夜、久々に衛宮邸に顔を出そうとした藤姉は心底パニックになっていた。

俺は体を軽く伸ばして、朝の用意をしてから居間に入ると――

「――おはようございます、先輩」

「おはよう、シロウ！」

「おはようございます、シロウ」

「遅いぞ、衛宮士郎」

「それは仕方ないんじゃないアーチャー？ おはよう、衛宮君」

「お、衛宮か。夜更かしは体に良くないぞ？」

『続きまして、年の明け頃がたに起きた大規模のテロに巻き込まれた新都の復興は――』

そこにはキッチンに立っていたアーチャー、遠坂、桜。

テーブルで元気に挨拶をするイリヤと慎二。

桜とあまり身長などが変わらない幼くなったライダー。

そしてテレビでは聖杯戦争を『冬木市全体を狙った大規模なテロ攻撃』と称されていたニューズの報道が未だに続いていた。

遠坂曰く、「恐らく魔術協会と聖堂教会がそういう偽の情報を出して処理している」と言っていた。

冬木市は聖杯戦争後、しばらく混乱が続いた。

かなり滅茶苦茶になった新都は『大規模な幻惑効果を持ったバイオテロ』、そして深山町は『無差別破壊テロ』と言う風に認識されていたのが混乱をある程度軽減していた。

それでも混乱はあった。

何せテロによって死者はほぼ出ていない、奇跡の様なモノの他にも何もなかった。

ただ今回のテロが10年前から各地で多発していた「昏睡者」や「行方不明者」事件

と関係があると思つたジャーナリストやアングラニューズ報道は続いていたが、これも遠坂曰く、「裏で処理されるだろう」と。

「おはよう、みんな——」

《おはよう、兄さん!》

「——な?」

一瞬誰かの声が聞こえたような気がして、俺の挨拶が疑問形に変わった。

「ん? まだ寝ぼけているのかい、衛宮?」

「ああ、多分ランサーが居ないからじゃない? 彼なら仕事に行つたわよ?」

あ、そうか。

誰か足りないと思つたらランサーだったのか。

「そっか、そうだよな」

士郎はテーブルに座り、朝食を食べ始める。

一つの戦争が終わつた。『聖杯』という名の万能機を奪い合う、欲と希望と失望にまみれた戦争が。

「この十年間、色々あつた」と士郎は思い返していた。

先ずはいい人に拾われて、養子になつて。

(一応) 魔術師として聖杯戦争に偶然召喚したセイバーと遠坂凜と共に戦つて。



アーチャーとギルガメツシユ二人に一騎打ちを果たして勝つて。

『聖杯』と綺礼、それにあのギルガメツシユまでも利用しようとした臓硯が逆に綺礼の気まぐれによつて暴走され、新都が滅茶苦茶になりながらも合流して、ランサー達と自衛隊達と共に『聖杯』と同化した臓硯を打ち取つた。

そしてその後出現した『聖杯の孔』を魔術礼装となつたセラをイリヤが纏い、『この世全ての悪』を封印した。

奇跡かどうかイリヤは生きて帰つて来た。

ヘヴンズフィールを起動したというのに。

その上サーヴァント達はいつの間にか全員受肉していた。

衛宮士郎、遠坂凜、イリヤ、桜、慎二、アーチャー、ライダー 視点

「いつてらっしやい」

「行つてきます」

アーチャーに見送られて士郎、凜、桜、イリヤ、慎二、そしてライダーが全員穂群原学園の制服を着て玄関から出ようとするとアーチャーが突然？マークを出すような顔になる。

「……………」

「どうしたの、アーチャー？」

「いや、何か違和感が……………私の勘違いか？」

「もう、アーチャーまで何を言っているの？　もう季節が変わるのだから景色も変わるわよ？」

キヨロキヨロと周りを見るアーチャーにイリヤが悪戯っぽく笑いながらそう言うと、アーチャーが頭を掻きながら複雑な顔をして、士郎が思わず声をかける。

「どうしたんだ、アーチャー？」

「いや、『歳かな』と思って」

「それは私への当て付けですか？」

幼くなったライダーがジトツとアーチャーを見る。

「いや？　私自身に向けたのだが——」

「——ハイハイハイ！　このままだと皆遅刻しちゃうわよ?!」

「うわ、遠坂の言う通りやばいぞ?!」

腕時計を見た慎二の言葉に皆が走り出す。

冬木市の周り中から工事の音が響いてくる。

屋根に穴や曲がった電柱などの取り換えの修理作業が其処そこ彼処かしこから聞こえて来る。

新都よりは大分マシだが。

「も、だめ——ひゃあ?!」

「少しの間我慢して下さいイリヤスフィール」

息が切れかかったイリヤをライダーが抱える。

ちなみに聖杯戦争が終わってからイリヤと姿が変わったライダーは士郎達と共に留學生として穂群原学園に一緒に通う事になった。

当初これはかなりの波乱で学園中騒いだ。

無理もない。誰が衛宮士郎に、イリヤのような義妹がいたと思えただろうか？

今では立派に『優秀な兄思いの義妹』として学園で有名になった。

士郎自身、内心嬉しかった。

何せセイバーを失った彼は独りで無くなったのだから。

さて……………かなり掻い摘んで書き込むが、少し付き合っただけほしい。

まず最初に桜と慎二は『義兄妹』から『許嫁』と変わり、『間桐家遺産の管理人』であるライダーと共に幸せな日々を送っていた。

髪の毛の色が変わった慎二と桜は上記に並べた『無差別テロ』に間桐邸と間桐臓硯を失ったストレスからと周りの人達と学園に説明した。

後、臓硯の遺言に乗っ取って、『間桐家の全てを間桐桜に残す』と書かれた事もあって、

最初は遠縁の血族がこぞつて権利を主張してきた、「間桐桜はまだ子供だ」と駄々をこねながら。

何せ腐れ外道であつても臓硯の残していた遺産は数世紀に渡つて留め置いた、莫大だった。

経済的でも、魔術的な面でも。

ただここにライダーが間に割つて、こう主張した。

「正しき後継人の間桐桜から遺産が欲しければ、『遺産の管理人』の私を倒す事です」と。

ライダーの場合、聖杯戦争で間桐邸が破壊された事によつて死んだ『臓硯の遺言』によつて遺産の『管理人』と指摘されていた。

勿論、普通の人間や魔術師がライダーに勝てる訳も無く、彼らは次々と権利を放棄した。

強行突破を図つた者達は『行方不明』か、恐怖の形相を浮かべながら『石化』されたとのニュースが出たのだから、遠縁の皆は自分の命を大切にした。

「あ、慎二さん。頬にケチャップが――」

「――え？」

学園に近づき、歩きに戻つた士郎達。

そこで桜が慎二の頬に付いたケチャップの後を指で「ヒョイ」と取って、自分の口に含む。

「あ、ありがとう………桜………」

慎二と桜が義兄妹であったのは書類のミスと『臓硯の遺言』で分かった。

何せそこには「遠坂桜を間桐慎二の許嫁に」と言った遠坂家との間の欄にあったのだ。

これによつて更に良く調べていくと、遠坂桜が間桐家に引き取られた事が実は『政略結婚』を前提にしたものだった。

と言うのが桜本人と慎二の希望によつて偽装された遺言だった。

ちなみに偽装を手伝ったのはライダー、凜、そしてアーチャーだった。

これによつて桜と慎二は晴れて『義兄妹』から『許嫁』同士となり、二人は常に笑顔の状態がかなり増えた。

聖杯戦争中、色々とおつた二人の間にあつたわだかまり等が無くなり、周りの（ほぼ）全員が二人との話し合いの結果、納得は一応皆した。

しかも慎二は念願の『魔術師』になり、イリヤに弟子入りして着々と腕を上げていっ

た。

あと、姿形が幼くなったライダーに皆ビックリした。

『聖杯』を破壊した後アーチャーが彼女を海岸で見つけ、最初は誰だったのか分からなかったぐらい印象が違った。

アーチャーによれば「恐らく桜が『生きて帰って来て』との令呪がボロボロになったライダーの霊核を再結成したのでは？」という事。

ライダーはあまり気にせず、「寧ろ良い事です」と実に幸せそうに『学生』として毎日を満喫していた。

そして次にイリヤ。

聖杯戦争中にバーサーカー、リーゼリット、そしてセラを失った彼女はドイツの戻りたくない駄々をこねて、上記の桜達のように書類を偽装して『衛宮士郎の義妹』として正式に登録した。

『偽装』というか、『秘匿された情報を公開しただけ』なのだが。

何しろイリヤは衛宮切嗣の实の娘なので証明するにはDNA鑑定をするだけで簡単に証明できた。

勿論自身の憧れだった衛宮切嗣が実は子持ちだったと知った大河はこのニュースにもの凄く落ち込んだ。

が、イリヤは今では大河にとつては『実の妹』のように、そして藤村組長の雷画にとつてはもう一人の『孫娘』みたいに可愛がられていた。

今では学園でも、家でも『普通の人間』として生きている。

『聖杯の器』として余命があと少しだった筈の彼女の体は何故か聖杯戦争最後の夜の後、『普通の人間』の寿命になっていた。

これには誰もがビックリで、イリヤは嬉しさのあまりに一晩中泣いた。

「これでシロウ達と一緒に普通に生きられる」と言いながら。

まあ、後にイリヤの実年齢が18歳と知った皆の顔と反応が色々可笑しかったのは言うまでもない。

ただ彼女の強い希望で「シロウと同じでいい!」、つまり彼と同年と戸籍上にはなつた。

次に遠坂凜。

彼女は魔術師としても、人間としてもかなり成長して、ランサーと共に冬木市の復興などに力を注いでいた。

これにより『時計塔』に少しだが注目を浴びる様になって、将来は『時計塔』へ出沒するかどうか迷っていた。

凜は自分が『魔術師』として有能なのは自覚している。

だがその反面、聖杯戦争のおかげで『人間味の濃い魔術師』になっていた。

なので『生粋の魔術師』の巣窟である『時計塔』でやっていけるかどうか迷っていた。ランサーは勿論「一緒に付いて行く」と自ら護衛を買って出たのでかなり精神的に安心はしたが、そうすると冬木市に『管理人』が居なくなってしまう。

なでもしもの時の為に桜と慎二の両方に色々教えたり、冬木市の人達を紹介したりなどしていた。

そしてその間ずつつつつつと桜と慎二のリア充っぷりに当てられながら、「リア充爆発しろ」、「自分より妹が先を」等々ブツブツと言いながらその腹いせに慎二が弟子入りのイリヤに「慎二の修行を厳しくして」とお願いしたり。

ランサーはと言うと聖杯戦争後、士郎達と過ごした時間が充実したのか、冬木市に留まって様々なバイトをして少し皆を経済的に助け、フラフラとナンパをしてはワンナイトスタンドをしたり、時には藤村組で用心棒っぽい事も請け負っていた。

ちなみこれらの姿全てが彼の柄に似合うと周りの人間達（十サーヴァント達）全員が内心思っていた。

アーチャーは当初、「自分の役目は終わった」と言いながら消える予定だったが予想外の受肉により衛宮士郎、遠坂凜、そしてイリヤスフィールの面倒と、彼らの結末を見届ける事に決めた。



未だに『守護者』と契約しているので何時消えるか分からないが、その時までには居るつもりらしい。

そして最後に衛宮士郎はセイバーを失ったが、イリヤがまだ生きている事に感謝した。

ちなみに彼の髪の毛と肌の色が変わったのは「テロによって滅茶苦茶になった時の衛宮邸の巻き添えを食らった」と言う風に、桜と慎二達の様に周りを誤魔化した。

イリヤは「私の髪の毛みたいだね!♪」と嬉しそうにしていたが。

後は――

「む? 今朝は登校が遅いな」

「あ、おはようございます先生」

「チツ、ガキ共が良いところを」

「はっはっは! 女狐もこの大勢の前では形無しか!」

「黙りなさいこのへっほこ、あばら骨をへし折るわよ」

「ではここでやめよう、あれは勘弁して欲しいものだからな」

登校中の道で生きている葛城宗一郎、キャスター、そしてアサシンとばったり会う士郎達。

彼ら三人は気付けば円蔵山の林の中で目を覚まし、そこからヨロヨロとかなり衰弱し

ていた状態でパトロールしていた公安の者達に保護され、入院し、社会復帰した。

葛城宗一郎は先生として。(後一成が盛大に泣きながら彼の帰りを喜んだ。)

キャスターは彼のフィアンセとして。

アサシンはどういう事か、山門を媒体にしていた筈なのに他のサーヴァント全員同様、受肉をしたので冬木市をフラフラと満喫しながらも、この世に召喚してくれたキャスターと彼女が慕う宗一郎の護衛役っぽい事を時々していた(服装は流石に侍風では注目を浴びるので寺の者達が着ているのと大差ない物に変わっていた)。

勿論、この三人が生存していた事に士郎達はびっくりしたがキャスターと宗一郎の話聞き、聖杯戦争中では誤解が更なる誤解が生んだ敵対行動と出来事と双方は理解した。

ただ本当に宗一郎に本気のぞっこんLOVEなキャスターの言動があまりにもキャラが違ったのでアーチャー、ランサー、アサシン、そしてライダーまでも他サーヴァント達に数日間からかわれたキャスターだが(自業自得とは言え)。

その間はフードを深々々々々々々々く被ったそうナ。

それでもフードから出ていた耳は真っ赤だったのであまり意味はなかった。

とまあ、このように第五次聖杯戦争の参加者のほとんどが生きて、何らかの形の『幸せ』の中にいた。

ただ時折、皆の頭に何かがおかしい、何かが足りない等と感じる事は度々あったが。

例えば――

――アサシンは何故か柳洞寺に至る山門の横の茂みの中で熱燭の徳利セツトを見つけては大事にそれを取って置いたり。

――キャスターは宗一郎と柳洞寺の裏手にある墓地の掃除に来て、『衛宮家之墓』を見ると毎回何故か胸が苦しくなつて泣くのを必死に止めたり。

――宗一郎は時折イリヤのクラスに入つて周りを見て、「なぜ自分は毎回このクラスに来るのだろうか？」と思ひながらも近くの生徒に頼み事をしたり。

――ライダーが時折イリヤに「血を吸つても良いですか？」と何故か頼んで、いざ血を吸つてみると「やはり何かが違う」と独り言をボソリと言つたり。

――桜は時々ご飯や弁当をかなり多めに作つてしまつたり、スイーツを作る食材を間違つて買つてしまつたり、自分やアーチャー、姉の凜がどう使うのか分からないような食材を買つたり。等々。

――慎二は宗一郎と同じように良くイリヤの教室を覗いて中をキョロキョロと見て、これを勘違いした生徒達が桜にチクつたおかげで誤解が生じたり、一層真面目に弓道部の副部長として励んでは「何かが違う」と言つたり。

ちなみに面倒見が良くなり、落ち着きを保つた慎二はかなりの人気を男女部員共々出

て、この心境の変わりを問われた時には慎二自身何故このようになった、または誰を口・ールモデルにしたのか分からなかった。

——イリヤは時々ケーキ等を食べたくなり、桜やアーチャーの手作りを食べると「何か違う?」と言った違和感を持つたり、聖杯戦争中に偶然切嗣のお墓を見つけてからはお参りに時々行くと必ず無意識に誰かの手を取るようになつてしまふ手と腕を不思議に見たり。等々。

——凛はたまにイリヤの食べる量が少ないと感じる事があり、何度もイリヤに「量は十分だった?」と確認し、何故そんな事を聞くのか自分でも分からなかった。

後、料理や家事の腕が何時の間にか上達していたのは自分でもびっくり……………  
していたのだが、「恐らく桜やアーチャーと言う達人が二人もそばに居たからだろう」と思つた。

その他に何故か『人外』に対して考えや物腰が多少柔らかくなつた事か?

だがこれもまた「イリヤと言う、ある意味の『人外』と長く接したからだろう」と、その考えを処理した。

——ランサーは何故か髪の毛を上げていた。最初は「仕事の邪魔になるから」と自分を説得していたのだが、これが日々ずっと続くと何かの暗示と思ひ、渋々キャスターに診て貰つたが別に何ともなかった。

後、過ぎ通る日々につれて、「何か物足りない」と感じていた。

勿論、他のサーヴァントやアーチャーと居る時はそんな事はあまり無い。

が、「何処か刺激が足りない」と確かに感じてはいた。

——柳洞一成は最近、毎回士郎が生徒会室に来ると「衛宮一人か？」と聞くようになった。

これは一成自身も何故聞くのか分からなかったが、時々「衛宮の弁当箱は何時も一段だけだったか？」と士郎に聞いた事もあった。

何故か二、三段はある筈だと一成は思っていたらしい。

——美綴綾子は慎二の変化に内心嬉しかったし、桜が元気になった事も嬉しかった。

ただ何故か弓道部が全体的に元気があまり無いと感じていた。  
何も変わっていない筈なのに。

等等々と、『冬木市全体』と言つても過言では無い程の人達が多かれ少なかれ、そのような『違和感』を感じていた。

だが大規模なテロも最近あった事と別に生きていくには問題無いので、住民達は脳内にてこの『違和感』を処理して生きていった。

数か月の時が過ぎて、徐々に冬木市は活気を取り戻していた。

そして士郎は――

「――あれ？　またこの部屋か」

修復作業が割と早くに終わった衛宮邸に士郎は何故か日課のように毎日帰ってくる  
と必ずとある部屋の前に来る。

「……………参ったな。何かの暗示か何かにかけているのか、俺は？」

その部屋はずつと前からの空き部屋の一つで未だに使われていない部屋だった。

「……………（でも何で俺は別にここに来る事が嫌じゃないんだろう？　じいさんの部  
屋でもないし、イリヤや……………セイバー達が居た部屋の一つでもない）」

士郎はその部屋の襖を開け、中はやはり空っぽの部屋。

今までも何回も『違和感』を感じた部屋。

「何だろう……………何も無い部屋の筈なのに、何かが無いと感じる）」

丁度同じ頃、アーチャーはボロボロのインツベルン城の近くにあるとある物置の小屋を士郎のように毎日来ていた。

「……………オレは何をしているのだろうか」

そうボソリと言い、周りを見た。

以前、間桐慎二を人質に連れて来た時と何一つ変わらない景色。

《グウ~~~~~》

「ツ?!」

何かの音を聞こえたかのように思い、周りを素早く見渡して警戒する。

が、何もなかった。

「……………何だったのだ、今のは？」

そう言い残し、もう一度建物の中を見渡して、今夜は衛宮邸へと戻る事にした。

夜の衛宮邸で静かに士郎の隣の部屋の前にトランプカードを持ちながら立っていた。

《イエ~~~~イ、一番めのあ・が・り~~~~》

「(何だろう？ セイバーはもういないのに、ババ抜きなんて……………) シロウ？ 起

きつていゝ。」

隣の士郎の部屋にトテトテと歩いて声をかける。

「……………イリヤ？ 入って良いぞ」

イリヤが襖を開けてトランプカードの箱を見せる。

「トランプでもしない、シロウ？」

「……………あ……………」

士郎が何か言いたそうに口を上げて、困惑する。

「?? どうしたの？」

「いや、そのトランプを見たら何か頭に浮かび上がりそうな気がただけだ。 何でも

ないさ」

「……………そっか」

ランサーが夜の冬木市を歩き、タバコを吸いながら夜空を見る。

そしてかなりのイケメンである彼を見た女性達の視線が集中し、本来ならランサーは声の一つでも彼女達にかけるのだが……………

最近、何故かその気にはならなかった。

「（あー、な〜んか物足りねーな〜）」

そう考え歩いているとペットシヨップの前お通り、ガラスの向こうの子犬が何匹かつ



ぶらな瞳でランサーをジ〜〜〜ツと見る。

《じゃあ犬飼って、クフちゃん”って名付ける》

「……………」

ランサーが遠坂邸に戻ると――

「――何やってんだか、オレ」

「あら、お帰りなさいラン――キヤアアアアア~~~~~!!! 可愛い~~~~~!!!」

返つて来たランサーに凜が挨拶の途中、彼が抱えた箱から前足二つを乗り出した金色で小柄でももっふもっふな毛並みをしつつ、ぽわつとしたゆるい顔立ちに彼女の視線が移る。

「クウ~~~~~ン」

子犬の尻尾がパタパタとしながら鳴き声を出して、凜が頭を撫でる。

「どうしたのランサー？ 全つつつつつ然貴方らしくないわよ？」

「るせえ、自分でもどうかしてると思つていた所だ」

凜が子犬の前足の二つを両手で一つずつ手に取つてダンスをさせる。

「この子、名前あるの？」

「いんや、まだ」

「クウン？」

子犬がキョトンと小さい頭を傾げる。

「じゃあ、『クフちゃん』で」

「おい、オレはちゃんと帰って—— ??? おい嬢ちゃん——」

「——いい加減、名前ぐらいで呼びなさい——」

「——さっきの『クフちゃん』ってなあ、初めて呼んだっけ？」

「??? 他の人ならともかく、私は初めてだけど？ 何で？」

「つかしいな……なくんか前にもそう呼ばれた気があつて、な」

ランサーが肩を上げて、遠坂邸の中へと入る。

桜と慎二、そしてライダーは未だに新築している途中の間桐邸の具合を下見に来て、夜の道を共に歩いていった。

「家は順調ですね、慎二さん」

「あー、前から言おうと思つていたんだが………その」

珍しく言いよどむ慎二の言葉を桜が待つている間に二人を照らしていた街灯の光が消える。

「きゃー！」

「桜?!」

これにびつくりした桜が慎二を抱き締め、彼の顔がデレッデレに歪み、ライダーは彼を無言のプレッシャーで睨む。

「だ、だいじよぶだよ桜」

「あ、あははは。私ったら未だに慣れていなくて。前のと……………きき？」

《ああ、ごめんなさい。桜は怖かった？ 私、そういうのつて良く分からないから。

次からは気を付けるね？》

照れながら桜が笑い、最後の方で困惑した顔をする。

「桜？」

「ど、どうしたんだい桜？」

「…いい、いえ。前にもこんな事があつたような気が……………」

桜がコツンと、頭を慎二の胸に預ける。

《よしよし、大丈夫だよ慎二》

「そ、そうか……………（何だったんだ、今のは？）」

慎二と桜、そしてライダーが三人とも黙り込み、未だに泊まっている衛宮邸にゆっくりと移動して行く。

凜は就寝する直前まで『クフちゃん』と遊び、彼女はベッドの中でボクツと天井を見

ていた。

実はと言うと、凜は子犬を『クーちゃん』と名前を付けたかったのだが何故だからンサーが本気で嫌うのを知っていた。

そのことをずっと考えてはいたが結局答えは返ってこなかったので『時計塔』の事を考え、眠りについた。

《ありがとう、お姉ちゃん♡！》

一瞬誰かの声が聞こえたと思い、ガバツと身を起こせる。

「……………今のは、桜？」

？マークを出し「どこで聞いたのだろう」と思い、桜が今自分を「お姉ちゃん」と呼ぶのを想像してニマニマしながら今度こそ眠りに入った。

その夜、第五次聖杯戦争参加者達が多少の『違和感』を持ちながら眠りにつく。  
一人を除いて。

「……………駄目だ、寝れない」

士郎はむくりと体を起き上げさせて、昼からずっと気になっていた部屋へと――

「む、まだ起きていたとはな」

——そこにはアーチャーが例の部屋の中に入るところだった。

「その部屋は空き部屋だぞアーチャー？」

「知っている。だが、この頃気になつてな」

「……………」

未だに士郎とアーチャーは互いが苦手なのか、緊張するのか、あまり言葉は続かない。だが無言になつた二人は襖をあけて——

——相変わらず空っぽの部屋を見た。

「何なんだろうな……………空き部屋の筈なのに何かが無いって感じが——」

「ん？」

アーチャーが何かに気付いたかのように、近くの僅かに空いていたダンスを完全に開けると、中には苗があつた。

「苗だと？ 空き部屋にか？」

アーチャーがそれを取り出すとヒラヒラと一枚のカードが土郎の足元へと落ちる。それを拾い上げると一通の手書きの文面があつた。

『貴方の部屋はあまりにも殺風景過ぎます。まずは“これ”から飾つてみて下さい

—セラ』

それは、今は亡きセラが書き置いていた文通と苗だつた。第35話より

「ふむ、『三日月ネックレス』か。これはまた育てにくいものを……………だが何故空き部屋に——どうした、衛宮士郎？ 何故泣いている？」

「……………わからない……………わからないんだ。だけど、それはお前だつて同じだ」

士郎とアーチャーは二人とも何故か静かに涙を流していた。

《font:ul09》三月《font》視点

見渡す限りの草原に色とりどりの花畑に優しい陽光の中で白いミニスカっぽいドレスを着た少女が一人、地面に横たわりながらゴロゴロしていた。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ。

「あー、暇だー」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ、ゴンツ。

ぶつかったモノが少女を見る。

「……………」

「あ、ごめん」

訂正。

白・ミ・ニ・ス・カ・つ・ぽ・い・ド・レ・ス・を・着・た・少・女・と・同・じ・白・い・ド・レ・ス・を・着・た・成・人・女・性・の・二・人・が・そ  
こにいた。



## 第53話 さようなら

《font:ul09》三月《font》 視点

時は少し遡り、三月が『無限Unlimited Possibility Worksの可能性』を発動した直後に戻る。

『ヘヴンズフィール』を纏った彼女は『聖杯の孔』経由で『大聖杯』へと到達して、その中で『無限の可能性』を発動すると元の願望機としての機能を強制発動させて一度自身を空白化した。

これにより汚染していた『この世全ての悪』も誕生前の状態に戻った。

そこにあつたのは本来の姿の無色の願望機。

『魂』！ 貴様は何をしたのか分かっていいのか?!」

「そうだと、自身も消える可能性が出たのだぞ?!」

「でも、それは貴方達にも同じ事が言えるのではなくて？ それに私はまだ、『肉体』ほど『生物』に絶望してはいない」

分離し、真っ白になった表面に出た『肉体』と『精神』が同じく出て来た『魂』へと

怒鳴ると、『魂』がそう答える。

「貴方達は急ぎ過ぎたのよ。『生物』は時間をかけて変わって行く、それは彼らが『全』ではなく『個』としての種として生まれてしまったのだから」

「……………」

『肉体』はただ『魂』を睨む。だが『精神』は何かを思つたのか、『肉体』へと開き直る。

「『肉体』、貴方は自分の事だけ考えていたのか？」

「な、何を——」

「——『肉体』、君は私達の中で一早く『外部』の影響を受ける。あの数々の仕打ちで、君はいっぱいだったのか？」

「……………」

「私達……………いえ、『私』は今まで『独り』だった。でも、今は違うでしょう？ 今

度は『自分の事』だけで、『私』は精一杯だった訳では無いのだから『魂』の言葉で『肉体』がクツクツと笑い始める。

「またもこれは……………それが貴様の『信念』か？」

「敢えて『言語化』するならばね」

「それは何時まで貫くつもりだ？」

「無論、必要無い時まで」

「この奇跡が何時まで続くのか分からないぞ？」

「奇跡はこれからよ」

『魂』の言葉に『肉体』と『精神』が両方一瞬呆気にとられる。

『魂』、君は人間味が濃くなつたな？」

「と言うより、初心に帰つたと言う所」

「そこまで真似をする『人間』に、どれ程の価値があるというのだ？」

「そんなの知らない。でも『価値』なんてものは自分で決めるモノでしょ？」

「……………ハハ、いいだろう。だが諦めた時は遠慮なく『出る』ぞ？」

「いいわ、だからおやすみなさい」

『肉体』と『精神』が消えて『魂』は周りを見渡す。

「よし、じゃあ……………創り直そうか！」

そこから『三月』はせつせと亡くなった者達を創っていった。

出来るだけ忠実に、自身の中にある数々の『命』の『記憶』等をなぞり、時には誤差の出ない様に修正しながら。

……………

.....

.....

.....

.....

.....

『(フウ、やっとここまで来た)』

三月の声が『体感時間を止めた世界』のどこからともなく響く。

『力』を行使し続けて、そしてやっと自分が知りえる限り自分と言う痕跡を消した。

出来るだけ違和感が出来ない様に修正を続けて、『他のよく似た世界』の記憶や知識を駆使して。

何故なら自分は本来、居ない筈の存在。

『《この世界》』にとって自我が戻った『自分』は完璧な異物。

「.....」

ない筈の心臓の鼓動が大きくなり、一瞬だけ三月は止まる。

だがこれで良い。

自分が居なくても皆が幸せになれるようにした。

「.....」  
 『運命の剣』、作動.....なんちゃって♪

そして三月の意識が薄れ始めるのと共に『世界の時間』がまた動き出した。

「ああ、これが『死』なのか……」

でもここには『私』と『この世全ての悪』だけしかないから、きつとこれが一番いい筈だ。

このまま消えて、『異物』と『悪意』をこの世界から失くせば、きつと良い世界になる筈。

さようなら」









.....

.....

.....

.....

.....

.....

そして只今ゴロゴロ中。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ。

「あー、暇だー」

「.....」

三月はゴロゴロしながら唯一、ここに在るもう一つの未だに微動だ一つしない存在を見る。

『冬の聖女』、かあ〜」

彼女の名は『ユステイーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルン』と三月の『記録』に出た。

およそ200年前、遠坂とマキリ（後に『間桐』と改名する、御三家の一家）と協力して『第三魔法』の成就を達成させようと聖杯降霊を行ったアインツベルンの当主だつ

た者。

『第三魔法』、それは『魂』を別人の肉体に定着させたり、永久機関とすることで魂のエネルギーを魔力として無尽蔵に汲み出す事が出来るようになる。

そして遠坂、間桐家、アインツベルン家がかつて目指していた目的へと至る手段。

その為だけにユスティーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンは自らを『大聖杯』の魔術式を構成する魔術回路そのものに成り、『大聖杯』と同期した。

だが『根源』へ至る為の『第三魔法』は永い時の中で、何時の間にか『第三魔法』へ至る為に』と目的が変わってしまった。

それが『聖杯戦争』だった。

「なるへろそねー」

三月は『記録』を観て、未だに自分をジューズと見るユスティーツァの事を納得する。

あれからどの位の時間が経ったのかは三月にも知らなかった。

何せ自分がある場所に『時間』の概念も無かったからだ。

だがユスティーツァは少なくとも『外の世界観』で200年もの間『一人』でただただ『他者』の『願い』を『叶える器』として『機能』していた。

もはや『生きて』はいなく、ただ機械化していた。



と、上記の具合に三月は『過去の自分』の行いなどを言思いながら若干壊れ(?) 気味に地面に寝転がりながら手足をジタバタとする間も、ジ~~~~ツと花冠を頭にしたユステイーツアはただ見ていた。

ちなみに花冠は三月が出来心で飾った。

「何か等身大の人形を見ているかのようだったので、つい」と言う流れで。

勿論、これに対してユステイーツアは無反応のままだったが。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

..

「.....退屈だ」

「.....」

三月が思考放棄から意識を戻して、ふと思った事をポツリポツリと次々声に出していた。

そしてユステイーツアはそんな彼女をただ見ていた。

「ハア~~~~~~~~お腹空いていないけど~~~~~~~~何か食べたいな」

三月は色々な食べ物を思い浮かべながら独り言を続ける。

「~~~~~」

独りは、嫌だ」

『独りは嫌だ』。

それは恐らく、三月は『生まれて』初めて自らの本心を意識しながら言う言葉だった。そしてそれを言った瞬間、心が悲しみに満ちて、涙がポロポロと頬を落ち始める。

「退屈は嫌だよう~~~~~食べ物食べたいよう~~~~~もつと色んな場所で楽しみたいよう~~~~~独りは嫌だよう~~~~~」

などと言い続け、涙もまた勢いを増し、声帯も震える。

「日向ぼっこしたい、雪だるまを作りたい、洗濯したい、コタツに入りたい、他愛ない話をした、お茶が飲みたい、買い食いしたい——!!!」

気付けば三月の声の音量はすすり声からだんだんと大きくなって行き、人が日常的にしている事を次々と並べていく。

今彼女がいる場所は前にも記された通り、『時間』の概念だけでなく、『睡眠』や『食



「確認」

「——アアアアア——へブウウウウ?!!?!?」

地面に伏せている三月の頭が両側の頬をギョツと押さえられて、無理矢理上げられ、彼女は変な声を出す。

そして目の前には相変わらず目が死んで無表情なユステイーツアが覗き込んで、問いかけていた。

「ユ、ユフ<sup>ス</sup>テイーツア?」

「確認。『奇跡』とは意志を持つて行使する『魔法』の一種」

確かに三月がユステイーツアに（ほぼ一方的に）話した内容にそのような魔法も話した事もあった。

「う、うい<sup>は</sup>?」

突然の問い以前に、ユステイーツアが自ら行動を起こせる事にびつくりしていた三月はただ答えていた。

「確認。『意志』の定義は断固たる『意向』、と」

「うい」

ユステイーツアが三月の頬から手を離して、三月は落ちるのを自分の腕で阻止して、尻餅をついたような体制で立ったユステイーツアを見上げる。

「問い。この個体は意思を持って存在していますか？」

三月はかなり沈んだ気持ちのまま地面の草の上に体育座りになり、股に頭を埋める。

「……………知らない。そんなの自分で決めなよ。少なくとも『人間』はそうしているわ」

何時もの三月とは違い、ぶっきらぼうな言い方だった。

無理もない、心が色々な初めての感じが混ざり合っていて、グチャグチャになっていて、深く考える事も放棄したがっていた頭に氣遣いと言う余裕はなかった。

それはユステイーツアが初めて自ら問いかけた事も。

初めて問答をしたのも。

初めて自分を『個体』と称したのも。

三月は深く考えていなかったので氣付かなかった。

故に次のユステイーツアの言葉にただ呆氣に取られた。

「では一人で、やってみます」

「え？」

数秒後に反応した三月が顔を上げると、眩い光が既に辺りを埋め尽くしていた。

「え?! あ、待ってユステイーツア! 待つ——!!!」



——三月が最後に見たのは何時の間にか消えたユステイーツアの頭に飾った花冠が静かに地面へパサリと落ちるところだった。

「——って!!! ウエツホ、エホ、ゲホツ、ゴホツ!!!」  
三月がまた気が付けばジメジメした暗闇の中でむせながら深呼吸をする。  
とにかく息苦しく、声もガラガラだった。

まるで初めて息を吸うかのよう。

初めて声帯を使って声を出すかのように。

そのまま咳と深く息を吸う事数分ほど。

三月は息遣いを整えると、未だに暗闇の中での事に周りを見ようとす。

「……………(ハ)は(ド)ン(ト)…」

喉の突つかかったような感覚を咳払いでスッキリさせながら目を堪える。

更に数分経った後にやつと目が暗闇に慣れてくると、三月はどこかの大きな洞窟の中にいるようだった。

「とにかく、暗すぎて何も見えない……………えい♪」

人差し指を上げるとテニスボールほどの大きさの火の玉が数個、彼女の周りの空中を漂う。

「うわ、デツカイ洞窟の中だあ!」

三月の「だあ!」が数回ほど反射する中、彼女は歩きだす。

おぼつかない足取りで洞窟の向こう側に見つけたトンネルの中を歩き続けると――

「……………どこかの山?」

ジメジメした場所から一転して、透き通った空気が三月の体に挨拶する。

周りが森だったので火の玉達は消した。

「スーハー……………いや、シヤバの空気は良いね」

気の赴くままにトテトテ三月が山を下山する。

「お、ラッキー！ 街灯という事は近くに文明が——つて円蔵山じゃん!」

森から街灯のある道へと出ると、向こうに穂群原学園が見えて、後ろの自分が下山した山が方向的に円蔵山だと三月は気付きながら学園の方へと雑木林の中を歩いた。

「(という事は、『○○』は冬木市？ それともそれに似た『他世界』？ 取り敢えず情報が欲しい)」

三月が望めば直接『世界』に『接続』<sup>アクセス</sup>出来るのだが……………もし『この世界』にもガイヤや阿頼耶識システムなどの防衛機能がある場合、『危険物』である彼女を察知して最悪『駆除行為』に出られる恐れがあった。

まあ正直、今の三月はそこまで考えていなかったが……………それが幸いしたと分かるのは更に後となる。

……………

……………

……………

……………

……

……

……

ガラガラガラガラガラ。

「お邪魔しまゝす」

一階にある窓を試し、鍵が開いている一つから中の化学室へと入る。

そこから更に図書館を探しにテクテクと彼女が歩き、それらしき場所の中へと入り、新聞記事などを漁る。

ガサゴソガサゴソガサゴソ。

「ちよつと暗いな……じゃあ極小の火の玉、オン！」

ポポポポポポポポ。

ピンポン玉サイズの火の玉が今度は現れ、その光源を使って最近の新聞を見つけ出して、『理解』する。

「(成程、年は2004年で時空的には『私』が『聖杯の孔』を閉じてから数か月経っている………ん? 『この世界』………もしかして兄さん達の?!)」

バサツと新聞を閉じて、嬉しさのあまりに行動が早くなつたまま、彼女は学園の校庭を猛スピードで駆け抜けて、閉まっていた校門をヒョイとそのまま飛び越え、校門の向

こう側に着地したらまたもジャンプをして、見覚えのある深山町の民家を屋根伝いで飛ぶ。

そして――

「――見えた！ 懐かしきマイホーム衛宮邸！」

――目的地の近くまで来ると、屋根から道へと飛び降りる。

胸から心臓が飛び出るような勢いの鼓動と連携していたのか、三月が玄関前に立つて、呼び鈴を押す為に上げていた手は震えていた。

今から押すぞと言った所で、中から会話が聞こえてきた。

「――良いじゃねえかちよつとぐらい！ ケチケチすんなよアーチャー！」

『戯け！ 未成年に酒を進める馬鹿が何処にいる?!』

『アハハハハハ、アーチャーが二人いりゆ〜〜』

『遠坂！ 目を覚ませ、俺だ！ えm――どわああ?!』

「――ンフウ〜〜やっぱり体かた〜〜い』

『遠坂って、よりにもよって絡み酒かよ?!』

『リン、シロウから離れなさい！ たかだかお酒一瓶で酔うなんて!』

『まあまあイリヤさん。姉さんも色々溜め込んでいるみたいですし――』

「――桜あ” あ” あ” あ” あ”! グスツ!!! ごん” な” 僕に”

「<sup>付き合</sup>つきあつてくれて——ズビィィィ——お前は本ツツツ当に良い奴だよ！  
僕には勿体ない位だ！」

『しかも慎二が泣き上戸?!』と云うか何飲ませてんだよ、ランサー?!』

『ああ? 皆氣い張り詰め過ぎだつての! 少しは発散しねえとこの二人、暴走するタイプだぞ? どうだいアーチャー、お前も——』

『——だめ! アーチャーが酒に強くn——じゃなくて酔わなくなっちゃうじゃない!』

『いや、イリヤ。それは寧ろ、良い事なのでは?』

『ハッ?! 本心が漏れていたー?!』

『桜。それよりその濡れたワカメは放つといて、貴方も一杯どうですか?』

『ラ、ライダーまで………そ、そうですね………い、いえ! やっぱりやめておきます!』  
『んんん? どうしたの衛宮く〜ん? もう酔っちゃったの〜?』

『酔つたのは遠坂だ! 何でこうなったのさ?!』

中からワイヤワイヤと騒がしくも、楽しそうな大団円のコントの様なモノを聞いた三月は呼び鈴を押しそうな指を——

——引つ込めた。

その場で踵を返し、夜の冬木市の中へと歩いた。

そのまま歩き、浜辺公園へと着いて、ベンチに座りながら夜の海を見て考える。

「駄目だよ、何を考えているの『私』？ 『この世界』の『物語』の『異物』よ？ 私が居ない、『本来の物語』をアレンジしてまで皆が幸せになるように仕向けて、成功しているじゃない。それが確認出来ただけでも良かったじゃない——」——へぷち」

三月が肌寒い風で、俯いた自身の揺れた前髪で鼻がくすがられて、小さなクシヤミを出す。

「——つて、『ヘヴンズフィール』の姿のままじゃん私」

寒くなつた手に息をかける為に上げると、ここで初めて自分が未だに『三番目のドレズ』の白いミニスカドレス＋白いサイハイヒールブーツの姿だった事に

気付く。

「通りで寒い訳ね」

フーフーと息を手にかけ、自分の暖かい息が白い煙のように出る。

確かに今の季節は春。

だが夜の、しかも冬木市のような風通しが良い港町みたいな場所はかなり冷え込む。

特に布面が少ない『三番目のドレス』<sup>ヘヴンズファイナル</sup>だとすぐに体が冷えるのは仕方がない。

三月が冷え性であろうが、無かろうが。

「……………」

ベンチの上で三月は体育座りに、ザザーンと波が打つ音を聞いていた。

時間は深夜遅く、海は漆黒の黒だった。

「……………やっぱり駄目だ」

気が付けば、自分はベンチから降りて、三月は海の方へと歩いていく。

「私は……………ここに居ちゃダメなんだ」

そしてそのまま冷たい海の中へズブズブと進んで行った。

既に冷え切った体が更に冷えきって、皮膚感覚が麻痺していた。

「(あ、何か『痛覚遮断』した時みたいな感じだ。ちよつと面白いかも)」

海の水が胸まで来た所に、後ろから男女数人の声があったような気がした。



だが三月は歩みを止めない。

「(どうせ通りかかったカップルかなんかでしょ。このまま進めば、私の事を見間違いか——)——グエ」

三月は自分の体が急に力強く持ち上げられて変な声を出す。

「このバカ／間抜け!!! 何考えているんだお前は／君は?!?!」

そのタイミングで新たな夜明けを知らせるかのように赤のかかった陽光が昇り始め、辺りを照らした。

# 第54話 「挨拶」と共に出来ない子供にO・S・H・I・O・ KIだ☆

《font:ul09》異界の根源星《font》 視点

イエイイ。

皆元氣—？

(方便上の)『三月』です。

私は何故か正座されています。

まあ、掻い摘んで話すけど浜辺公園で海に入って『土左衛門』しようとした『私』を『衛宮士郎』と『アーチャー』が無理矢理引き上げて、『遠坂凛』と『間桐桜』に『間桐慎二』のオンパレードでタオルのグルグル巻き刑。

その後が一番近い『衛宮邸』に強制連行されてそのまま『イリヤスフィール』と『ライダー』を加えて、女性軍に服をスポポポ〜ンと言う具合にキャストオフ。

そしてお風呂中に何故か『ライダー』が吸血したがっていたのを『間桐桜』が止めて

いた。

無理もないか。彼女からしたら、『私』は極上の魔力の塊どころか神代の原点に近い。でも『イリヤスフィール』と『間桐桜』がずずずずずずずずずずずずずずずずと引つ付いていた事には複雑だった。

お風呂から出て、客用の着物姿で『衛宮邸』の『居間』に強制連行&S・E・I・Z・A。そして前には手を組みながら様々なレベルの怒りの形相を顔に出している面々と未だにぎゅ~~~~~と左右からハグしている『イリヤスフィール』と『間桐桜』。

どうしてこうなったのさ？

「さて、説明してもらおうか『三月君』？」

「えと……………皆さんよく『私』に気付きましたね？」

と言うか私、確かに『私』に関する痕跡全部消した筈なのに……………どうして『解かった』？

「僕を甘く見るなよ。特に今は春。夜は寒くなるとはいえ、虫の使い魔くらいどうって事ないさ」

なるほど。『虫』の使い魔は盲点だったわー。

「って違う違う！ それでもどうやって私の事を忘れなかったの?！」

「成程。 やっぱりあなたの仕事だったのね」



「……………ええええつと……………ぐ」

「……………違う！」

同時に皆の否定する声に思わず体がビクリとする。

え？ でも他の言葉なんて——

「——まず帰ったら何か言う事あるだろう？」

「……………あ……………」

え？ 良いの？

「そっだよミーちゃん！ ほら！」

本当に良いの？

本当に言って良いの？

「……………た——」

あ、やばい。景色がぼやけてきた。

涙が止まらない。

「ただ——」

ごめんね『私』。

まだ『私』には帰る居場所がある。

「——ただいま！」

こんなに嬉しい事はない。  
解かってくれるよね？

『私』は何時でも消えて逝けるから。

だから――

――貴方達も一緒に生きてみない？

「「「「「おかえり!!!」」」」」

皆が笑いながら三月同様に涙を流す、または笑顔、または両方で答える。

『衛宮』三月、士郎、アーチャー、ランサー、凜、イリヤ、桜、慎二 視点

三月共々その場にいた皆が落ち着いて、『お帰り三月パーティー』が再開された。

何と、皆が衛宮邸に居たのは三月に関する『記憶』を取り戻した士郎とアーチャーがセラのプレゼントと文通を他の皆に見せながら話すとあつという間に他の皆も思い出し、即行動に出た。

慎二とイリヤは虫と鳥の使い魔で三月の検索。

いつでも帰つて来てお腹いっぱい食べれるように桜と凧、そしてシロウス（士郎＆アーチャー）が買い出しに。

ランサーとライダーは敏捷を使って実際に冬木市を全体的に細かく検索。

そこで柳洞寺にいるキャスターからイリヤと慎二の使い魔に接触してきて、「円蔵山にある『大聖杯』に異常事態を感知」と伝えられて二人の使い魔が急遽向かうと『ヘヴンズフィール』姿のまま『大聖杯』があつた場所から出る三月を発見。

発見当時、二人はものすごく舞い上がって、互いに手を取つてその場で不思議なダンスをし始める程。

そして学園で情報整理をしている間、他の皆に三月発見の事を伝えた。

更に三月が衛宮邸に向かっているとので、急遽の『お帰り三月パーティー』をサブライズで開催する為に各自が準備。

そこに舞い上がったランサーが酒を張り詰めていた未成年組に進め、慎二と凧が暴走。

そしてこれに対処中にイリヤが三月を見失い、桜渾身の気付け薬で慎二と凜の酔いを覚まして総動員して再検索。

三月が浜辺公園で見つかり、「何か良くないモノに囚われながら海の中へと歩いていく」と聞いた土郎とアーチャーは「自分の身など知った事か」の全力マシマシの移動速度で先行。

何とか間に合って、三月を保護して、今に至るといふ訳だ。

「……………私は『人外』です」

意を決して、三月が口を開ける。

「「「「知ってた」」」」

そして三月以外全員が一斉に答え、某アニメでいう『ガン』というSF Xが似合うほど三月が項垂れる。

「ううう……………」

これを見ながら三月が居の者達は「逆にどうしてそれを隠し通せたと思ったのか分からない」と言う顔で飲み物や食べ物を満喫した。

「ハア……………率直に言えば、元の私は『この世界』で言う所の「        」、または『根源』です。（並行世界のだけど）」

「「「「ブフウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」」」」

?!?!?!?!?!



魔術の心得のある人たち&サーヴァント達が（盛大に）一斉にお茶／紅茶／ジュース／食べ物を嘔き出す。

「何だそれ？」

「それって、凄い事なんですか？」

「え、衛宮君と桜って、『神様』という『存在』を知っているかしら？」

顔をハンカチで優雅（？）に拭く凜がキョトンとした士郎と桜にそう問いかける。

「え」

二人の驚愕の顔と返事がハモリ、同時に三月を見る。

もしこれがまだアニメであれば大量の汗が三月から嘔き出している場面である。

「い、いや……………正確に言うとははその『子供達』によってバラバラに引き裂かれて『意識封印』された一つの端末でした」

「……………」

三月の言った事に皆黙り込む。

と言うか理解が追いつかなかった。

が、ランサーが先に回復する。

「あー、『子供達』ってな、なんだ？」

「それこそ『この世界』でいう『神様達』になるかな？ いや、まあ……………今になって何で



三月が突然かしこまってアーチャーに頭を深く下げながら土下座する。

「……………何だねそれは？」

『以前の私』の代わりにです」

これは『三号』が少しネタバレした事だが、少なくとも、今日の前のアーチャーの成り立ちの原点になった『契約』を進めたのは『阿頼耶識』を操った『三号』だった。

「……………君が気負う事は何も無い」

「へ？」

てつきり罵倒されるのか無視されるのかを覚悟した三月に、予想外の言葉に頭を上げてキョトンとしていた。

「確かに『以前の君』が契約を持ち掛けたとしても、それを自ら進んで了承し、事を自らの意思で成したのはオレだ。故に、君は『ドアを開けた者』で、実際に『ドアをくぐつ

た者』のはオレ自身だ」

「あらやだ、やっぱりアーチャーってばカツコイイ」

「ツ」

未だに土下座の体制のままで見上げていた三月が思わず出した言葉にアーチャーは若干顔を赤くさせながら顔をフィツと逸らす。

ちなみにその時の士郎はジト目だった。

「で？ どうするんだ？ 他の皆は三月の事を『忘れて』いるんだろ？」

「あ、そこは大丈夫だと思う。ただ、英霊エミヤの手を借りるけど」

「ん？ 私か？」

「うん。ねえアーチャーさん——

——自分をこき使った『アラヤ』、ぶっ飛ばしたくない？♪」  
「は？」

.....

.....

.....

.....

……

……

……

場所は変わり、そこはとある事務所だった。

『事務所』と言っても雰囲気からして決して『オフィス』ではなくアレ系の事務所である。龍〇如く風に言うとう悪質な金貸し屋の場所がしつくりくるだろうか？

そのの机に頭を伏せている中年男性が一人、イビキを盛大に掻き、机にヨダレを垂らしながら寝ていた。

「……………ハッ?! あかん！寝てもうた?!」

男性の目が開くと、彼は勢いよく背筋を伸ばしながら起き上がり、ヨダレを袖で拭く。「いや、悪夢を見てもうたわ。まさかオカンを見——」

「——オラアアアアアアアアア!!」

ドゴオン!!!

大きな音と共に事務所への扉が勢い良く、蝶番ごと壁から破れてそのまま向かいの壁に当たって、ミシミシとした効果音と共に壁にヒビが入って行った。

勿論事務所の中で今起きたばかりの男性がこれに反応しない訳が無く、体がビクリと

する。

「な、何やねん?!」

「ちよくつとお邪魔するぜ〜」

蹴破られた事務所の出入口のそこにはスーツ姿の金髪青年女性がズカズカと中に入つて――

「――な?! おk――」

「――ウリヤアアアアアアアアアア!!」

「へぐウウウウウウウウウウ?!?!」

――そのまま男性の前にある机を蹴つて、立とうとした彼を机と壁の間に挟ませた。

「久しぶりだなく、『ア・ラ・ヤ』?」

上記の様に、もしこれが龍〇如であつたのなら『ドンドオン』と効果音と共に時間が一瞬止まり、場は灰色に変わつて名前と肩書が映つていただろう。

そのような気迫だつた。

「グツ……………『外』の者等は何しとんねん?!」

「ア? 全員ぶつ飛ばしたに決まつてんだらうが。

ちつたあ面貸せやこのボケ」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

景色が変わり、今度は何処かの裁判所みたいな場所だった。

ただし被告人の『アラヤ』ともう一人の中年男性は立っていない、床に正座をさせられていたが。

しかも両方とも何かの圧力がかけられているのか、ほとんど動けなかった。

そして裁判官、検察官、陪審達が全員金髪青年女性——

「——み、み、み、み、三月君？ こ、こ、これは？」

——訂正。

男性のアーチャーが一人ポツンと裁判官の隣にいた。

「アン？ だから裁判だよ。 さ・い・ば・ん」

「だがこゝは存在しない筈では？」

「ああ、そこか。強制的に実体として認識化させて具現化した二人と空間内だ」  
「え。」

アーチャーがポカンと呆気にとられている間に正座をさせられているもう一人の男性が口を開ける。

「ま、待つてくれ！ 私は関係ないだろ?!」

「なッ?! ワイを裏切るんか『ガイア』?!」

「ウツセーよ！ 二人とも同罪なんだよ！ 大人しく首洗つて待つてな！」

裁判官が叫ぶ。そして次に検察官が分厚い書類の入ったマニラ色のフォルダーを開ける。

「被告人、『アラヤ』は『エミヤシロウ』に生前死後共に数々の罪を着せ、数々の虐殺を行わせた！ 肯定か否か?!」

「え、ちよ、何やねんこr——」

「質問だけに答えろや！ ゴラアアアア!!」

「ヒイイイイイイ?!」

「……………まあいいか」

開けていたフォルダを閉じて、女性は立ちながら正座している『アラヤ』と『ガイア』へ実に愉快で悪そうな笑みを浮かべる。



「これより裁判の判決を行う！ 被告『アラヤ』！ 被告『ガイア』！」

「キッ!!!」とするような効果音が似合う邪悪な笑顔で正座している二人を三月が睨む。

「判決は死刑！ 死刑だ！」

どす黒い雰囲気がある場にいる女性達から一気に辺りを埋め尽くし、彼女らの声が同時に発され、体の芯まで響く様な音量へと上がる。

『『『『『死刑！ 死刑！ 死刑！ 死刑！ 』』』』』

「テメエ等は哀れだ………だが！ 許さん！」

『『『『『死刑！ 死刑！ 死刑！ 死刑！ 』』』』』

「ハハハハハハハハハハ!!! フハハハハハハハハハハ!!! 死刑、執行——

——!!!

「——させる分けないやろが、このドアホー——!!!」

スパアアン!!!

そこに突然現れた三月が笑い狂い始めている三月にキツツツツイハリセンの一発を頭にお見舞いすると、どす黒い雰囲気が周りからフツと消える。

「お前が暴走してどないするん、『ガサツ』?! 本体が僕を送つといてホンマに良かったわ！」

「ちよ、待てよ！ こっからが——！」

「ほなチエンジヤ」

「ヒュツ！」と何かが消える様に『ガサツな三月』が消える。

「……………三月……………君？」

「おう、『ツツコミ』や。よろしゅうな？ ちよつち待つてーやアーチャーの旦那はん。すぐ終わらせるさかいな」

アーチャーが一段早く回復し、声をかけると『ツツコミの三月』が未だにシヨックを受けている『アラヤ』の胸倉を掴んで、無理やり自分の身長に合わせて立たせる。

「オシ、時間無いからとつとと済ませるで？ 齒あ、食いしばれや」

『ツツコミの三月』が大振りピンタのモーシヨンに入り、『アラヤ』が恐怖に叫ぶ。

「ええええええええ?! いやいやいやいや——!!!」

『アラヤ』がアーチャーを見ると、彼は唾然としていた。

周りを見る、陪審達は冷た~~~~~い目で見ていた。

『ガイア』は知らんフリをしていた。

「お前にはな！ ぎょうさん苦情が出てるんや！ 被害届とかな！ コイツに苦情がある奴はおれへんか?!」

「……………後始末をさせられたな」

「ブフツ」







## 第55話 新たな夜明けの始まり

『衛宮』三月、士郎、アーチャー、ランサー、凜、イリヤ、桜、慎二、ライダー 視点

「フハーハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツハツ!!!」

アーチャーが突然笑い始めた事に、周りの皆はギョツとした。

「フフ、楽しめて良かった♪」

「み、三月？ 何をしたんだ？」

「出来ない子供達にキツイお仕置きを執行」

「……………今は神秘が薄れている時代よ？」

「ああ、そつちじゃなくて『世界』と『抑止力』。

という訳で、皆を幸せにする準備が

整った！」

三月が手を広げると彼女が光り始めた。

士郎達がの目が突然の光から回復して気が付くと――

「イエーイ」

「ちよ、何勝手に僕ら呼び出して実体化させとんねん?!」

「ほうほうほう、これは感動的です」

「同感だ」

「うゝゝゝん、経済的に大丈夫かしらコレゝゝゝ?」

「まあ……………皆大食いだからな」

——三月が増えていた。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

あれから更に数か月経ち、新しくリフォームした間桐邸では桜、慎二、ライダー、そして成人女性化した様なおっとりな三月と寝ほけ顔が目立つ三月が共に学園へと歩い

ていた。

「でも、良かったです。お二人が幸せであつて」

おつとりどころか、「ホワ〜〜ン」とした様な、実にマイペースな態度と喋り方だつた。

「そうですね。やはり努力と偶然の賜物です」

寝ぼけ顔の彼女は見た目と違い、キツパリとした物言いだった。

「いえいえ、これも全て三月先輩達のおかげです」

「と言うか、マイさんが——」

「——あら慎二君、そこはお母さんと呼んでも良いのよ？」

「ングツ」

慎二が赤くなり、口を噤む、桜が苦笑いをして、マイが？マークを飛ばす。

『マイペース』から取つて『マイ』と言う、なんとも安直なネーミングだった。

これ一体だけでは無いが。

「それを言つたら、この頃の毎日が楽しいのはマイさんだけでなくクルミ姉さんも居るからでは？」

ライダーが隣を歩く、寝ぼけ顔のクルミを見ながらそう言う。

『クールな三月』



別名『クルミ』。

そして何故かライダーは頑なに彼女達を『○○姉さん』と呼んでいた。

恐らくは過去の親族を連想しているのだろうが、彼女達もそれを気にしていなかったか、逆にそう呼ばれるのを気に入っていた。

「そうですね。読書仲間が増えたのは確かに楽しいです」

若干ホクホク顔を浮かべるライダーとクルミだった。

一部破壊された部屋の修理が最近終わった遠坂邸では凜と三月がアーチャーとランサー、そしてボサボサのラフな恰好をした青年化した三月に見送られていた所だった。

「じゃあアーチャー、ランサー、そしてカリンさん。行つてきます」

「行つてきますー!」

「二人も気を付けるのだぞ? ハンカチは持ったかい?」

「アーチャー……お前もう『オカン』と改名した方が良いんじゃないかね?」

「ダツハツハツハツハツハ! 今の良いぜランサー! 姉貴にエプロン縫つて貰うか?」

ランサーに続き、カラカラと笑うカリンと呼ばれた、ラフな女性。

どう足掻いても『ガサツな三月』からは良いあだ名の案が出ず、彼女がカリカリして

いた所で『カリン』なんてのはどうかしら？」と、イリヤの提案で「めんどくせえからもうそれで良い！以上！」と本人が即決した（というかさせた）。

「誰が『オカン』か?!」

「まあまあ、遠坂さんと後で次郎さんと一緒に似合うエプロン買しましょう?」

「ぬ……………や、弥生君がそう言うのなら」

「あらあら〜? アーチャー——おつと失礼、次郎君は朝からイチャイチャしたいのかしら?」

「遠坂さん、『イチャイチャ』するのは良いんですけど……………今は朝ですよ? それに私達も居ますし」

「ングツ……………やっぱり『三月』ね」

「はい? と言うか、同じ存在ですけど?」

赤くなつて視線を泳がせる次郎（もとい『アーチャー』）の反応にニヤニヤと面白がるランサーとカリン、そしてキョトンとしながら? マークを出す弥生に呆れる凜だった。

ちなみにアーチャーの事を誤つて「次郎」と弥生が呼んだ事によつて彼のあだ名として密着しつつあった。

そして衛宮邸では——

「♪〜」

「えへへへ〜♪」

二人の少女、イリヤと三月がウキウキと手を繋ぎながら歩き、隣のぬぼ〜つとしたダ  
ルイカンジの顔とはねっ毛が目立つ三月似の女性が嬉しそうな土郎に話しかける。

「良かったですね、土郎氏」

「ああ！ でも……………な、なんか慣れねえな。 m t s —— リカ」

「いえ、こちらこそまさか別側面の人格を『個体』として成り立たせるとはボクも驚きを  
通り越して感動です。 後、ボクを彼女と間違えても別に気にしていませんよ？ この  
姿は元々彼女をベースにしていますし」

そして二人の肩に腕を回す、活発そうな三月が八重歯の見える笑顔で口を開ける。

「せやかて土郎の兄貴も苦労人やなあ、その気持ちめっちゃ分かるでえ〜？」

「アハハハ。 と言うか、もう……………本当に姉妹みたいだな、ツキミ？」

「せやろ〜？」

『知的な三月』も最初は『チエ』と呼ばれそうになったが三月と弥生に断固反対された。

「余計に分かりにくくなるから！」と言つて。

「なら自分で決めます」と『知的な三月』が言つて『リカ』と自分を命名した。

「ただ名前を『理科』から取っただけです」と彼女が言った時はその場にいた全員がこけそうになった。

まあ、そこで「違うやろがツ?!」と『ツツコミ役の三月』もやはり同じで『ツキミ』になつたが。

やはり彼女も安直なネーミングセンスはしつかりと切嗣から引き継いだ模様であつた。

この三つのグループが穂群原学園の近くで合流して、一層騒がしくなつた。

衛宮邸、遠坂邸、間桐邸グループ同士は勿論の事、周りに登校する生徒達からもだつた。

特にテロからの入院者の三月の調子を心配する者達と長期入院者で彼女の双子の弥生を気遣る者達。

他にクルミ、リカ、ツキミ達も男女生徒両方に声をかけられ、新人教師であるマイ生も（特に）男子生徒から声をかけられていた。

まあ、三月似の成人女性で整つたプロポーションであるから不思議ではないのだが。

「あ、今日もよろしくお願ひします」

「うむ」

「いちいちそね〜? ♪」

マイが校門近くで立っている大河と宗一郎にぺこりと頭を下げる。

今でこそ落ち着いてはいるが、『別側面的人格』を『別個体』の上に自分自身を分けた半身が存在し始めた次の日に、先生としての上藤村組の事柄で忙しい中でも衛宮邸にほぼ毎日来ていたあの大河が退院した三月には嬉しかった。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「——そ<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>で<sup>で</sup>ね<sup>ね</sup>ふ<sup>ふ</sup>ひ<sup>ひ</sup>姉<sup>姉</sup>? わ<sup>わ</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>た<sup>た</sup>ほ<sup>も</sup>は<sup>は</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>の<sup>の</sup>」

時は少し遡り、三月が『入院』から無事に帰って来たと知った瞬間に彼女は大泣きする大河の胸に埋もれていた。

「あ、お邪魔しています。 弥生と申します」

「うわあ、凄い！ 三月ちゃんと瓜二つじやない?!」

「はい、この度やつとりハビリも終わって姉と一緒に退院出来たのですが——」

「——あれ？ でも三月ちゃん、『記憶喪失』だったわよね？ それに『リハビリ』って？ それに『姉』って言う事は家族なの？」

「——(来た!)——」

その場にいた土郎、凜、イリヤ、慎二、桜、ライダー（『間桐の管理人の留学生』として大河に認識されている）が同時に自分達の持つていた疑問を浮かべる。

「はい。実はと言いますと、10年前の大火災で姉とは別の病院に入院し、昏睡状態だったのです。身元も少し前までは意識不明だったので親族達との連絡が最近まで出来ず、体も衰えていたのでもリハビリをしていました。勿論行方不明者としての届けは出していたのですが何分、両親も亡くなり、遺産分割協議書などイザコザがあり、皆引き取られた場所などが別々で——」

そしてスラスラと三月、もとい弥生、から出る嘘に関心、あるいはビツクリする土郎達。問題の大河は延々とした『複雑な家族事情』の説明後——

「——あらそうなの?! いや、良かったわ、三月ちゃんに家族が居て！ あれ？ でも親族達って事は、どうして三月ちゃんを今までずっと切嗣さんの養子にされていたの？」

「実は書類と……遺体確認のミスが10年前の際にあり、『死亡した』と報告が各自にされていたようで……」

「まあ、何て奴らなの?! 後で見つけ出して締め上げ——ゴッホン! ……」  
でも良かったら、三月ちゃんにこんな可愛い妹と家族がいるなんて!」

「(色々とスルーした?)」

「プハツ! えつと、それで実は藤姉にお願いがあつて…弥生達なんだけど少しの間だけ衛宮邸に泊まらせても良いかな? ちゃんと家事とかもお金的にも手伝うしさ?」

三月は大河の胸から自身を開放して、戸籍上の『保護者』である彼女に問いかける。

「良いよ良いよ! 部屋はまだまだよ……ゆう………が?」

最初の元気な勢いが徐々にブレーキがかかったように遅くなる。

恐らくは『弥生達』の『達』部分に反応、または頭が追いついたのだろう。

「え、えくくくつと? 三月ちゃん? 貴方の家族は弥生ちゃんの他にもいるの?」

「あ、ハイ」

「……………な、な、な、何人いるのかなくくくくく??」

「ええと、合計6人——」

「え——」

「——の7人姉妹——」

「え——」

「あと実はと言うと今隣の部屋に居ます」

タイミングを計らったかのように襖があいて——

「「「「「——お邪魔していきま〜す!!「「「「」」

大河は声の方を向き、目の前で頭を下げる三月似の姉妹達勢揃いの前にただ固まる。

そして固まったままずっと無言になる大河。

これにマイが口を開けるまでずっと続いていた沈黙を破る。

「あ、あの〜〜〜? 長女のマイと言います〜〜」

そしてそのまま自己紹介を続ける三月達。

「オウ! 次女のカリンだ! よろしくな!」

「三女のクルミです」

「六女のツキミや! お初に!」

「七女のリカです。ちなみにボクと三月と弥生とクルミと後ついでにツキミで周胎しゅうたいで

す」

「オイ何や?! 『後ついでに』って?!」





「クルミ」

「……………キユウウ……………」

大河は目を回しながら倒れる。

「藤姉が死んだ?!」

「……この人でなし!」

「コントは後にせえ!!! ただ意識失つとるだけや!」

その後目を覚ました大河は隣で看病した士郎の腕を掴んでの第一の声か——

「——士郎はいつの間になんかジゴロになっちゃったの……?!」

「んな?! 何言ってるんだよ藤姉?!」

「切嗣さんごめんなさい、私も士郎も貴方の場所にすぐ逝くから待ってて——」

「——正気に戻ってくれ藤姉! 目が怖いッツツ!!」

と言う風には最初は混乱する大河だったが、前以って話を合わせた皆の説得（&札束の入った分厚い封筒）によって、三月の家族全員が『取り敢えずは移住先が決まるまで』と言う形で収まった。

そして藤村組（正確には組長である藤村雷画）の協力で戸籍を用意し、正式に冬木市の住人に全員がなった。

そして穂群原学園の新人の担任先生として就職したマイ、三月と同じく穂群原学園の

留学生としてクルミ、カリン、弥生、ツキミ、リカであった。

尚次女のカリンはランサーと共に色々と働いた。

主に荒事関連だが。

そして何故か『獣の悪魔達』と冬木の裏社会に恐れる事となったコンビ二人は意外と馬が合い、ランサーは一緒の時絶えず笑顔だったとか、凜を二人が一緒にからかうのが興味だとか。

マイと言えば先生としては新人だったにしても、与えられた仕事は完ぺきで、困っている他の教師や生徒たちの悩みを聞く事などが上手で、『カウンセラー』としても、オーラウンダーとして役立っていた。

クルミは人混みの中があまり好きではなく、良く葛木先生に呼び出されては用事を頼まれていた。そして三月か弥生が用事を受けた場合は生徒会室に避難昼ご飯を食べに来ていた。

三月の退院に喜んだ一成だが、他の女性達の登場で気を張っていた。

特にイリヤに対しては凜以上の不機嫌さを露にした一成に、士郎はクルミに頼んで彼に弁当箱を届けさせた（以前の三月の弁当が大評価だったので）。

そしてその日からクルミは毎日（肉のおかずが山盛りの）弁当箱を届けて静かに弁当を生徒会室で一成と食べる事となる。

会話は一方的に一成から振られていたが、クルミは丁重に返事をしていたので一応会話を成り立てていた。

これを見た野次馬が彼らをからかおうにも一成にはあしらわれ、クルミは「それが？」と言う態度をとっていた。

まあぶつちやげ、クルミには本当に『それだけ』だったのだが。

リカとツキミは人混みの中は大丈夫で、日々（知的な）ボケと（ノリの）ツッコミコント（時にはリカの変わりにクルミとツキミの『天然&ツッコミ』コント）を見に（または巻き込まれに）彼女達が居る場所に大勢の人が集まった。

後はリカが三月以上に博識で、ツキミは人当たりが男女両方に良いのですぐに人気者にはなつたので、クルミとリカの二人は交代制の様に生徒会室に避難退避していた。

三月と弥生は士郎、イリヤ、凜、慎二、桜、ライダー達と共に屋上で昼を過ごしていた。

「バクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバクバク！」

そして相変わらずの爆食欲で二段弁当箱&菓子パンを完食していた。

「凄い………食べぶりですね。桜みたいだ——」

「——イヤアアア!!! ライダー、言わないでええええ!!!」

苦笑いをする士郎と慎二は桜が大食いで、毎日『体重計』と言う強敵と格闘している

のを知っていた。

対して凜は夜のランサーと新たに加わったクルミの起こす問題などを愚痴り、イリヤが三月と弥生の二人と一緒に話をして『普通の女子会』っぽいのを満喫していた。

これには勿論、他の皆を（または誰かを）巻き込みながらだが。

ここでイリヤ達が三月&弥生に色々質問していく内に二人が同じ存在という事が発覚してライダーは二人の呼称を『姉さん』から『上姉様』と『下姉様』に変えた。

これを聞いた三月と弥生は「「良いよ☒」」と即答したのに、何時もはぶつきらぼうなライダーが満面の笑顔になったのはその場にいた土郎、凜、慎二、イリヤと桜がビツクリしながら微笑ましく和んだ。

そして時は過ぎて行き——

——とある質問に事は動き出した。

「三月と弥生って彼氏とかいるの?」

「へ?」

## 第56話 シシユンキ? 美味しいの、ソレ?

それはある日、激突に三月（&弥生）のクラスメイトからの問いだった。

「三月と弥生って彼氏とかいるの?」

「へ?」

二人が呆気にとられる顔を見るとクラスが一瞬だけ静かになってからドヨドヨし始める。

無理もない、『三月』単体である時からそう言う色恋沙汰の噂は一切なかった。

確かに士郎に「義妹紹介してくれ!」はあったが、これに対して彼は「逃げ」の一手を貫いていた。

さすがアーチャーに成れたかもしれない男(?)と言った、単独行動ぶりである。

とは言え、10年間もの間にアプローチの一つも無かったと言えば無かったのは以前、『三月見守り隊』（古名称“MMT”）がそれらを中学辺りから阻止していた。

余談だが「月の女神/天使」の二つ名の発端は彼らだったりする。

だが『MMT』とはある出来事によってその勢力を大きく低下する事となる。

それは数か月前に到来した三月の姉妹達の出現だった。

「ハ〜イ! 皆静かに〜! 今日はかなり大きな発表があるからね〜!!!」

そこで大河、及び宗一郎が姉妹達を次々に紹介した。

「新人教師の〜、マイ・プレラーリです。姉妹共々、よろしく願いますね〜?」

「『『月の女神』の生還じゃ〜〜〜!!!』と騒いだその時のMMT隊員達は新しく『マイさんマジ女神』の『MMM』を結成。

「クルミ・プレラーリです。よろしく願います」

「『『Cooooooooo!!!』と騒いだその時のMMT隊員達は新しく『Cooooooooな天使最高』の『CTS』を結成。

「弥生・プレラーリです!!! 姉の三月共々よろしく願います!!!」

「『『第二の天使』、FOOOOOOO!!!』と騒いだその時のMMT隊員達は新しく『弥生ちゃん見守り隊』の『YMM』を結成。

「ツキミ・プレラーリや! 姉貴達共々よろしゅうなく?♪ 後変なちよつかい姉妹に出したらしばくで?」

「『『活発な戦乙女<sup>フルキュレ</sup>』キタアアア!!!』と騒いだその時のMMT隊員達は新しく『ツキミに構って貰い隊』の『TKM』を結成。

最後にリカの場合は――

「――リカ・プレラーリです! よろしく願います。」

——挨拶がクルミとかなりかぶっていて、見た目もパツとしなかつたので最初の頃こそリアクションは薄かった。が——

「へぶ」

トテトと自分の席に行こうとしたリカが何も無い所でこけて頭を打つ。

「はて、おかしいですね??? 上靴のサイズが合わないのでしょうか——?」

「二」——『天然ドジっ子』キタアアア!!」と騒いだその時のMMT隊員達は新しく『天然ドジっ子を守り隊』の『TDM』を結成。

この様にかつて一つだったMMTが六つに分裂した事でその勢力を大きく低下して、お互いの部員の足を引っ張る事となった。

ちなみに次女のカリンはカリンで、裏社会での『獣の悪魔』の片割れとして、または『カリンの姉御』（それかただの『姉御』）として知れ渡っていた。

尚、彼女の事を知った（または助けられた）穂群原の学生達や町の住民達で密かに『冬の獅子ライオン、サポートし隊』の「FLS」を結成。

という事で7人姉妹全員に晴れてファン（？）クラブが出来上がり、以前は未然に防いでいた事柄も薄くなった（本人無意識の）ガードを抜けて行った。

そしてその一つが上記の「三月と弥生って彼氏とかいるの？」だった。

「マジか?!——」





「しかも真つ白で人魂ですよ?! 文字通り萌えませんか?!」

「そうですね、確かに燃えますね〜」

新人教師として数か月前からの幽霊騒ぎを未だに引きずる『オカルト研究部』の生徒達の誘いがまたもマイの周りにいた。

数か月前に学園の警備員は「幽霊が出たアア!!」と騒いで先生イたちも夜の学園の見回りに回る事になって、これを聞いたオカルト研究部員達も同行をお願いしてマイ先生が許可していた。

まさか目の前のマイ先生が（ある意味）その幽霊とは学園の誰もが夢にも思っていないだろう。

「そう言えばマイ先生は誰かと付き合った事はあるんですか? 今ちよつと気になる相手が居て、先生ならいいアドバイスを出すと思うんですけど」

「……………そう言えば付き合った事は無いわね〜」

「「え?」」

そして物静かな生徒会室では――

「――ク、クルミ殿はその……………生徒会にほぼ毎日来ているようだが、人付き合いは悪いのか?」

「急にどうしたんですか、柳洞さん?」

「い、いや。 クルミ殿の姉妹達の噂は俺の耳にも入って来るが、クルミ殿は何も無いもので生徒会長としてだな気になったというか——」

「?????」

急に赤くなつて早口になる一成をクルミを読んでいた本から目を上げて、ただジツと見る。

そしてその日のコントステージの食堂では——

「—— ツキミとリカは彼氏とか作らないのか?」

「え? な、な、何急に聞いとんねん?!」

『彼氏』ですか………成程、『番候補』探しですか。 自らがそうなるのは考えていな

かったですね、盲点です」

「そりゃあ二人とも人気があるから選びたい放題じゃね?」

「と、というかお持ち帰りsh——」

そして最後にカリンは——

「—— ブアックシヨイツツツツ?!」

「キャウン?!」

——盛大にクシヤミをして、子犬をびつくりさせていた。

「オイ大丈夫かよカリン? お前、さつきからずつとクシヤミばつかじやねえか。お前でも風邪引くのか?」

「うっせえ、バーロ! 多分誰かがオレかオレ達の噂をしてんじやねーか、これは?」

「はは! 『自分が複数居る』ってな、難儀だねー」

「クウ~~~~~ン」

「しよんぼりすることあねえよ『クフちゃん』! オレは気にしていないからな!」

「マジでその名前変えてくんねえか?! 俺物凄く気にするんだけど?!」

「凜の嬢ちゃんと次郎に先に話を通せたらな?」

と言う、他愛ない話をしながら冬木市の中を子犬の『クフちゃん』と歩いていた。

その夜、彼女達に色恋沙汰に関する噂を聞きつけた各御三家（今では新参の衛宮家、「新」間桐家、最古参遠坂家を示す名称）がその夜、各々がそれとなく話を訊いていた。「マイ母さんやクルミは誰か気になる人とかいないのか?」

「はい〜?」

「???」

「?!」

「新」間桐邸の食卓ではド直球に慎二がマイに訊いていた事にその場に居た桜とライダーがピクリと反応した。

余談だが慎二は以前の三月には好意を抱いてはいた。

だがその好意が「異性」としてではなく「親」に向けるモノだった。

慎二の母は彼が幼い頃に臓硯によって蟲蔵の餌食とされ、彼は『母親』と言う存在とは無縁の人生を歩んでいた。

だがそれも三月に会ってからは変わり、彼女に「母」を求める様になっていた事に『マイペース』のマイが間桐家の『保護者』としていた。

これには桜もかつての『遠坂桜』の母、『遠坂葵』を連想していた事もあり、慎二と一緒に「マイ母さん」と呼んでいた。

「誰か気になるって、ん〜……………鴨根さんは最近寝不足みたいだから今度栄養ドリンクでも作って——」

「——そうじゃなくて『恋愛対象』として」

「……………え〜〜と、これはちよつと困つちやうわね〜。ね〜、クルミ?」

「そうですね。今でこそ私達はどちらかと言うと『人間』<sup>ヒト</sup>よりとしての近い存在として居ますが、そもそもそのように『伴侶』や『番』などを意識したのは皆無に等しいです

から」

「へ〜〜、それはそれで興味深いな」

「兄さん、もしかして堂々と浮気ですか？♡」

真つ黒な空気に包まれた桜が「ニッコリ」と笑いながら慎二の肩を掴む。

「ち、違う！ 断じて違うぞ桜！ ただ僕のクラス色々噂が届いてきただけだ！」

「その不届き者達は誰ですか？ 姉さん達は誰にも渡しません」

「アネットさん、短剣を出すのは食後にしてくださいね〜？」

「ムウ〜〜……………マイ姉さんがそう仰るのであれば」

桜と同じ体格のライダーアネットが若干不満なブツクリ饅頭顔になり（渋々と）短剣と黒い空

気を戻した。

少し遅いが、『外』や他人の前でライダーは『アネット』だった。

彼女の（または由来の）神話の一つで出て来る名前の『Anatアナット』を現代風に桜（本

当は慎二）が命名。

その夜の間桐邸では結局マイとクルミの恋愛事情の聞き込みに進展はなく、グダグダ

に終わった。

遠坂邸では同じく噂を聞いた凜が回りくどくなる訊き方をする前に三月からの教訓

でストリートに訪ねてみる事にした。第1話より

「ねえみー—— 弥生とカリンは気になる相手とか居るのかしら?」

『気になる相手』?」

「アン? そりゃあ『四国の竜』や『九州の虎』——」

「—— あー、喧嘩相手じゃなくてだな?」

『喧嘩相手』じゃない? じゃあ何なんだよ?」

「どうしたの、遠坂さん?」

「いや、だからもし『私が異性と付き合いを始めるなら』と思つてね? 別に桜は関係ないからね?! そこだけは分かつてよね?!」

「(あ、気にはしているんだ/だな)」

凜の半ギレ気味の早口抗議(?)で反射的に思つたランサー、アーチャー、弥生だった。

「あああ? 『異性とお付き合い』ってどこのお嬢様だよ? あ、遠坂家って貴族だったんだっけ?」

「パクパクパクパクパク—— 急ですね遠坂さん? モグモグモグモグモグ」

弥生が食べている合間に訊き返す。

「い、いえ遠坂家で生活をしているのだから、『世間体も気になる』って言うか——」

「そんなのアーチャーに決まってんじゃない」

「ブホッ?!」

アーチャーが食べていた物を吹き出しそうになり——

「んな?!」

凜とランサーがサラリと言った弥生とカリンに対してポカンと口を開け。

「クウン?」

突然静かになった食卓に頭を傾げるクフちゃんだった。

「後はー、ランサーにライダーに士郎に——」

「———そうそう、それに藤村組の———」

弥生とカリンが冬木に居る様々な人達の名を次々に並べ始めると、だんだんと肩と共に気を落とす凜だった。

そして弥生は何処かホツとしているアーチャーを見て胸がチクリとした事に内心? マークを上げていた。

衛宮邸ではキッチンで立って皿洗いを三月と士郎がしている間、テレビを見ながら大河の相手をしているツキミがいた。



リカはと言うとイリヤに別の部屋に連れていかれ、話中だった。

そこで三月はちらりとテレビ&ツキミに夢中の大河を見てから小声で士郎に話し始める。

「……………ごめんね、義兄さん」

「ん? 何の事だ?」

「その、セイバーの事」

「……………」

実はと言うと、今まで士郎達は思っていた。

「キャスターや葛城宗一郎、アサシンの上に亡くなった筈の自衛隊（あと新都の人達）はどうやって蘇生したんだろう?」と。

最初は『聖杯の奇跡』と『思い込まされていた』のを士郎とアーチャーが『消されていなかった苗と文通』によつて、三月が何らかの方法で行ったと思っていたが、彼女のプラナリアの如く分離と言うハプニングによつて聞きそびれた事と、彼女が説明をしない事に何かを感じたのか、聞くタイミングを逃していた。

「えつと……………セイバーの霊基復元は出来るんだけど、彼女の精神と魂がね? その

……………滅茶苦茶で……………復元したとしても正気であるかどうか分からなくて——

——

ポンツ。

「——へ？」

ナデナデナデナデナデ。

士郎が笑みを浮かべながら三月の頭を撫でていた。

「気にするな三月、俺はお前が返つて来た事だけでも嬉しいさ」

「あ……………う……………」

「ん？ どうした三月？」

急に固まった三月を士郎が見る。

普通なら、何かを言う三月だが——

「——ちよ、ちよつと待つて！ お、おかしい！ おかしいぞ?! 何時もの義兄

さんなのに、何でこんなに緊張しちゃうの……?!」

「顔が赤いな。熱か？」

ピトツ。

「(font:ul09)ちよつとまってええええええええ(font)?!?!?!」

士郎が片手を三月の額と自分の額の間に挟んで体温を比べる。

「うわ、熱い」

「(font:ul09)何でなんでナンデエエエエエえ(font)?!?!?!」

?!?!?!

説明しよう! (○川透さんボイス。)

今の三月の耳朶はただ「ドドドドドドドドドド!」とうるさく、士郎の声は聞こえていなかったのだ! (大○透さんボイス終わり。)

「三月、もう皿洗いは良いから早く風呂に入って薬飲んで寝ておけ」

「……………」

三月はフラフラととおぼつかない足取りでキッチンを後にするのを士郎が見届けると今からニマニマした顔の大河が見ていた。

ツキミはちゃぶ台で頭を伏せながらボクッとテレビの方を向いたままだった。

「な、何だよ藤姉? その如何にも邪悪な微笑みは?」

「フフン。なんだかんだあっても、士郎もやつぱり男の子なんだな〜って」

「ハア? そんなの当り前だろ? と言うかなんだ急に?」

「……………三月ちゃんってさ〜? 士郎以上に鋭いのか鈍感なのか分からない時ってあ

るのよね〜」

「だから何の——」

「——教師としてはどうかと思うけど、お姉ちゃんとしては二人には幸せになつて

欲しいのよね〜?」

「?????」

「?????」

士郎は困惑するだけで大河は呆れたように溜息を出す。

「ハア〜……………桜ちゃんの事もあるから〜……………考えたくないけど、案外切嗣さん  
も何か考えがあったりして〜？ イリヤちゃんの事もあるし？ ちなみに彼女が来て  
から三月ちゃんの服って可愛くなっていない？ こう、前は子供っぽさが残っていたけ  
れど、イリヤちゃんが来てからは大人っぽい服装に変えているし〜？」

「確かにそうだ」と士郎は内心思っていた。

三月達が衛宮邸に来てからと言うもの、三月の服装はだんだんと子供っぽい物から年  
上の女性物へと変わっていった。

実はと言うと今まで三月が着ていた服は切嗣が成長したイリヤを意識して買ってい  
たもので、最近では吹っ切れたかのようにファッションの良い物へと変えていた。

というのも今までは切嗣が「着て欲しい」という願望から着ただけなのだが、聖  
杯戦争後はその気持ちも薄れて行った。

「……………士郎は切嗣さんから何も聞いていない？」

「何の事だ？」

士郎が一段落して座り、自分の分のお茶を淹れる。

「こう、『士郎には許嫁がいる』とか」

……………



が、初めての事なのでどう処理すれば良いのか分からなかった。  
「……………あ、そうだ——

——他の皆に相談してみよう)」

三月脳内 視点

三月：という訳で、『第一回脳内議論』を始めたいと思いまーす！

マイ：わあく、パチパチパチパチイ〜

カリン：な、何だ何だ何だあ?!

リカ：これはまた凄い

クルミ：うんうん

ツキミ：と言うかこないな風に力使うなんて聞いてへんわ

弥生：でも丁度良かった、私も皆に訊くところだったのよ。  
皆は良く見知った空間に居た。

色とりどりのお花畑と優しい陽光とそよ風が吹く中にちやぶ台の周りを座っていた姉妹達。

三月：私今日、義兄さんに熱測られた時に滅茶苦茶ドキドキした

弥生：今日は凜に『気になる人はいる?』って聞かれて皆お名前を出し始めたら、アーチャーさんがホツとしたのを見たら『チクリ』って胸が痛かった

マイ：私は、『付き合った事があるかどうか』って他の先生と生徒達に聞かれたわくクルミ：ボクは柳洞さんに人付き合いの具合を聞かれた

ツキミ：お前らもか? ボクとリカも同じようなこと聞かれたで?

カリン：成程、テメエ等の所為で俺は今日中ずつとクシヤミしていた訳か

リカ：フ〜ム、これはイリヤ氏の提案に乗っても良いかもしれませんね  
他の皆がリカを見て? マークを出す。

リカ：いえ、こちらで全て行いますのでお気になさらず

そして次の休日——

衛宮邸では――

「――お兄ちゃん！　ちよつと二人だけで出かけない？」

「へ？」

遠坂邸では――

「――アーチャー！　少し二人だけで出かけないかしら？」

「凜？」

イリヤが士郎を、凜がアーチャーを当世で言う、所謂デートに誘つた。



## 第57話 シアワセ？ ナニソレ？

三月、衛宮士郎、イリヤ、ツキミ、リカ 視点

それはある休日、激突の誘いだった。

「お兄ちゃん！ ちょっと二人だけで出かけない？」

「へ？」

テレビを見ていた士郎にイリヤが声をかけ、テレビを見ていたツキミが二人を見る。

「お出かけか、買い物か何かなん？」

「ううん、デート」

「え」

「ほらほら！ シロウもボーつとししないで支度をして！」

「おう、ほな行つてらっしゃいお二人はん」

「ありがとう！♡」

「あ、ちよつと待ってイリヤ——」

士郎が呆気にとられながらもイリヤに腕を引つ張られて、無理矢理立たされて居間から連れていかれ、ツキミは二人に手を振っていた。

「……………」

そしてこの事に何故かポカンとして手が止まった三月がキッチンに居た。

「どうしたんですか、本体？　手が止まっていますよ？」

リカが三月の顔を覗き込んで、三月はハツとしたようにビクリとする。

「あ。え、ああ！　ごめんごめん！」

三月は直ぐに下ごしらえを再度し始め、顔が「スン」と無表情になる。

「……………」

「フヒヤホヘハ?!　な、な、な、な、何の事かなく？」

未だに覗き込むリカの言葉に明らかに動揺する三月。

「いえ、先程から手の動きがぎこちなく、醤油の変わりにソースを入れていたので――」

「――」

「――ぎゃああああああ！　それを先に言ってよ～～～～?!」

三月はソースを入れるのをやめて、溜息を出す。

「……………」

「大丈夫ですか？　さつきから様子がおかしいですよ？」

「……………う、うん。 実はそのうと胸がザワザワしていてね? ちよつと戸惑つてい  
ると言うか——」

「——それはどういう風な感じですか?」

「え? ど、どうつて……………こう……………何と言うか……………うん、やっぱり『気にな  
る』かな?」

リカが小さなメモパッドに書き込んでから三月を見る。

「今日の献立はツキミに任せて、二人の様子を見ませんか?」

「え?」

弥生、凜、カリン、アーチャー、ランサー 視点

「アーチャー! 少し二人だけで出かけないかしら?」

「凜?」

アーチャーがキッチンで献立の確認をしているときに凜が彼に声をかけ、これを偶然  
通りかかったカリンと弥生が廊下から聞く。

「一体急にどうしたんだ? 君から声がある時はほとんどの場合、機械類の質問か——」

「——少しはね、労おうと思つて。気分転換にもなるしね!♪」

「(え? ちよ、何このドキドキ?)」

廊下では何故かドキドキし始めた弥生は? マークを出していた。

「それじゃあ行くわよ、あーc——ああ、じゃなくて『次郎』!」

「やれやれ、君は突拍子もない事を時にやりかすから苦勞が絶えないな」

チク。

「??????」

アーチャーが笑みを浮かべて凜を見ている事を物陰から見ていた弥生は急に傷んだ胸に困惑していた。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「凜、この格好は必要かね?」

「何よ次郎? 私のコーデに文句でもあるの?」

「アリだ、戯け! 何故よりもよって奴の着るような服を選んだ?!」

「あら? たまたまよ? それにあの『凡骨が着るような服』じゃなくて『大学青年』っぽいものを選んだんだだけど? それに、貴方の普段の姿はともじやないけど現代では変よ?」

「ぬ……………グツ……………」

遠坂邸の玄関から道に出る凜の後ろには何時もの赤い外套と黒いインナー姿から現代風のジャケットにインナーズエットシャツ、ジーンズと言った衣装に（伊達ではあるが）眼鏡をかけていた。

髪型も最初は「せっかくだから下ろしましょう?」の凜に「だ、駄目だ!これだけは譲らん!」というアーチャーの抗議に代わりに眼鏡を着用。

「おう!楽しんで来いよ、二人とも!」

「お土産楽しみにしているからな」

「ワン!」

「い、いつてら……………しゃい」

元気よくお見送りをするカリンとランサーにクフちゃん。

そして浮かぬ顔を我慢して笑う弥生。

凜とアーチャーが道を歩き、姿が目視出来ない距離まで弥生はジューツと二人を見ていた。

「ん？ どした嬢ちゃん？」

一旦中に入って弥生が居ない事に気付いて、未だに玄関外で立っていた彼女を見たランサーが声をかける。

「……………」

「オイ」

「わひゃい?!」

ポツツと見る弥生の前にドアップで急に覗き込んだランサーにびっくりして変な声を出す。

「どうした？ 何か悪いもんでも食ったか？」

「え？ あ……………う、ううん！ ただちよつと……………」

弥生が凜とアーチャーの消えた方向を見ると――

「ケ！ らしくねえな、お前！ 気になるんだつとつと変装するなり何なりして追いやがれ！」

「え？ わわわ――?!」

ランサーがグイッと弥生の手を掴んで、遠坂邸の中に引き込む。

## 衛宮士郎、イリヤ、三月、リカ 視点

「ほらシロウ! レデイのエスコートをしっかりとこなしてみなさい!」

「こちら、イリヤもそんなにピョンピョン跳ねると転ぶぞ?」

何時もの紫シャツ&ブーツではない私服姿になったイリヤ(ジーンズ風ジャケット、赤のシャツに白スカートとスニーカー)を先頭に私服の士郎が後から歩く。

「♪~~~~」

「(ご:ご)機嫌だな、イリヤ?」

「だってシロウと二人つきりなんだもん!♡」

「そ、そうか」

「えへへへ〜♪」

イリヤと士郎が歩く後ろに距離を開けて、横道から覗く動くドラム缶の姿があった。

『こちら 蛇』。 ブレイン、聞こえますか?』

『こちら ブレイン』。 はい、感度良好です』

『本当にドラム缶で行けるのかしら?』

『前回の段ボール箱はあまりにも場違いでしたからね。 後、移動開始してください。』

くれぐれも存在を悟らせてはいけません。今は「隠密行動中なので」

ドラム缶から細い脚が二つ（底がある筈の部分から）「ニヨキ」と生えて出てきて、「トテトテトテ」とした足取りでイリヤと土郎の後を追う。

ちなみに上記の会話は声に出ていなく、いわゆる頭の中の声状態だった。

『念話』とも言う。

『ステルス迷彩があれば文句なしだったんだけど——』

電磁迷彩システム

『無茶言わないで下さい、本体。さつき頼まれたECSのような他世界の技術をホイ

ホイ導入する訳には行きません、万が一という事があるかもしれないじゃないですか？

自重して下さい。それにそこは魔法で何とかなる問題でしょう？』

『リアリスト過ぎ！　こういうのは場の雰囲気よ！　雰囲気！』

『ハア、そうですね』

この様子で三月の尾行が続き、土郎とイリヤは築いた様子はなかった。

たまに不思議なものを見るような目でご近所や商店街の人達に見られていたが三月はお構いなしの様子だった。

途中で深山町にある交差点から新都市行きバスに乗るイリヤと土郎を見て、とあるドラム缶が急遽近くの物陰に入ってから肩から掛けたポシエットに赤のかかった三つ編みポニーテール&サングラスとベレー帽子を着用した少女が出て来て、バスを待つ列の最



後列に並んだ。

服装はちよつと緩い&野暮つたいオーバーオールにシャツとスニーカーと、どこか地味な雰囲気を出していた。

『ほう。 “再結成” と “再構築” の応用でドラム缶に含まれた腐食金属原子を髪に編み込み、服装も変えたんですね。 流石です』

『フーン! 今の私は “オールマイティー” ……………とまでは行かないけど、これ位は楽勝よ!』

『気を付けるのだぞ、 “蛇”』

『了解です、 “ブレイン”』

衛宮士郎、イリヤ、三月、弥生、凜、アーチャー 視点

新都は数か月前に聖杯戦争の所為で大打撃を受けた……………と云うのは、テロが起きた時間帯の事もあり、ほとんどの被害はオフィス街に絞られていた。

なので（経済的には良くなかったが）新都の活気は依然とほぼ同じだった（連日工事の音などを除けば）。

凜とアーチャーがバスから降りて、弥生も同じくして二人の尾行を続ける。

この一連の動作は士郎とイリヤ、そして三月が深山町の浜辺公園でしたのと同じだった。

何てことは無い。

親友であるイリヤ凜が嬉しい事は自分も嬉しい事だと思いつつ三月と弥生

イリヤと士郎の動向が心配で、観察をするだけ。

ただそれだけだ。

だから——

——この胸の奥に感じるものは祝福の筈だ。

だから観察を続ける。

幸せになつて欲しいと思いつつ続ける。

続ける。

続ける、続ける、続ける、続ける、続ける、続ける、続ける。

楽しんでるイリヤ凜の姿は嬉しい。

アーチャーさん

士郎が幸せそうにしているのも嬉しい事だ。

彼達はこの世界でも苦勞人だった。

その言葉や思いにうそ偽りは何一つ無い。

「（その筈なのに——）」

ズキッ。

——「（むね が いたい）」

三月は時々服装や髪の毛のスタイルや色を変えながら手を繋ぐイリヤと士郎、

凛とアーチャーさん

一緒にカフェで甘味を味わったり、

ズキッ。

一緒に雑貨店で物を見たり、

ズキッ。

一緒に買い食いをしたり、

ズキッ。

一緒に、

ズキッ。

一緒に——

ズキッ。

「……………」

別々の場所では変装中の三月亦生の顔と表情がだんだんと俯いて行く。

それはまるで、胸の痛みに体が自然と自分を守るかのような——

「(——) 違う、これは痛みの筈が無い。だって、『私』はここに居させて貰うだけで幸せの筈なのだから。

だから——

——  
亦生これ以上はただの我儘だ」

そう三月は自分に言い聞かせた。

そして——

「——今日は楽しめたかしら、シロウ？」

イリヤは夕焼けの中の海浜公園で土郎に振り向かいながら問いかける。

「ああ、いい息抜きになったよイリヤ。ありがとう」

「ん、エスコートとしてはダメダメだけどシロウだから許しちゃう！」

士郎が苦笑いを浮かべ、少し離れた場所では三月は彼女に似合わない暗くくくくくい表情になっていた。

「あ、シロウ。髪の毛に何か付いているわ。少ししやがんで」

「(こ)う——?」

「ッ」

ほぼ同時刻の新都にある、とある時空体でアロハシャツを着たどこぞの槍兵が釣り場として活用していた埠頭にて凜とアーチャーは向かい合つて、こちらでも弥生は暗くくくくい表情だった。

「どうだったかな、凜?」

「そうね、70点と言つた所かしら?」

「厳しいな」

「当たり前じゃない。ここでききなり100点満点なんて出してみなさい? この後

つまなくなつちゃうわ。それにしてもアーチャーってばやっぱり士郎ね」

「ん? どういう事だ?」

「だって貴方近所や商店街の人達に凄い人気なの、知っているかしら?」

「して、凜。今日はどうして急に私を連れだしたのだ? ただ単に労おうという訳で

はあるまい?」

「うん、そうね。ちよつと伝えたい事があるからしゃがんでくれるかしら?」

「(イ)う——?」

「ッ」

同時にイリヤ源がしゃがんだ士郎アイチヤの頬に口づけをしたかのように三月弥生に見え、浮体の胸の奥には明確に『痛み』が走つて——

——二人は形振り構わず海浜公園埠頭から走つていた。

彼女達はただ走つて様々な人を横通る。

後ろから声が聞こえたかも知れないが二人には知つた事ではない。三月と弥生

いずれ二人は未遠川の堤防の坂に体育座りで川を眺めていた。

流石に場所は別々だが、やはり三月は弥生で、弥生は三月で行動は似ていた。

これでも冬木市に10年間生きて来たので未遠川にも勿論思い出はあつた。

と言つても士郎や藤姉におじさん切と出かけてその帰りに体力の少ない三月弥生が背負わ

れて家に戻つたという思い出だが。

三月 視点

「三月!」

「……………え? 義兄さん?」

三月がビツクリして声の方を向くと、士郎が汗を掻きながら彼女の隣へと来ていた。

「隣、良いか?」

「……………」

「よいしょっと」

士郎がドカッと座って、三月の隣で未遠川を眺める。

「……………泣いていたのか?」

「義兄さん、デリカシー足りない」

「う、すまん」

三月が乱暴にゴシゴシと目を袖で拭く。

「……………」

別に言葉が交わされる訳でも無く、二人はただ川を見ていた。

「なあ、三月。もしかしてだけど、『悲しい』のか？」

「……………知らない。私は知らない」

「じゃあ何を感じているのか聞かせてくれないか？」

「義兄さんには関係ないでしょ、イーちゃんをほっぽって何を言っているの？ 彼女が待っているんじゃない？」

「……………今俺が気になっっているのは三月だ。それに、今日一日中ずっと俺達を見ていたのも三月だったんだろ？」

「え？ どう…やって——？」

「オイオイ、これでも俺はお前を幼少の頃から知っているんだぞ？ たかが服装や髪が変わっただけで、分からない訳が無い」

「……………」

「……………今から言う事は独り言でも取ってくれ。俺、実はと言うと三月が怖かったんだ」

「……………え？」

そこで士郎は以前、凜に語った事と似たようなものを並べ始めた。

三月の印象が『綺麗な子』が『不可解な行動をする子』。そして『優秀過ぎるな義妹』で、義兄としては面子が何時潰れてもおかしくない事だった。



「だからワザと人助けに没頭するようになった」とも白状していた。

情けない話だがそうすれば三月と居る時間が少なくなる。

「変な話だよな。俺は『三月が誰かを必要としている』と分かって義兄を自称したくせに逃げたんだ」

それは、親友である慎二と似たような行動だった。

やはり親友同士の理由は伊達ではなく、似ていた。

「こう……………三月は何時の間にか色々と出来てしまつて、俺じゃあ目指せない高見まで行っているような感じがしてさ……………つて何を言っているんだろ、俺は」

士郎が頬を掻きながら気まずそうにする。

「義兄さんがこのように遠回りに言い方をするのは言いにくい事がある時なのは解かっている。何を言いたいのか?」

「……………三月、こつちを向いてくれないか?」

「……………ヤダ」

「頼む」

「ヤ」

士郎が近くまで来るのを感じて、三月は膝の間に頭を埋めるが、士郎は強引に彼女の

顔を向かせる。

そこには真剣な顔をした士郎が居た。

「俺は三月の事が好きだ」

「……………」

三月がニコリと笑う。

「私も義兄さんの事が好きだよ？」

「違う。違うんだ。俺は……………俺は知らされたんだ」

「……………お兄ちゃん？」

士郎の顔が赤くなっていたのを三月はここで気が付く。

てつきり夕焼けの所為かと思つたが、ここまで迫ってくれば嫌でも分かつてしまう。

「お、お、お、お、俺は。み、み、み、み、み、三月の事が。す、す、す、す、す」

「……………」

ピトツと三月の人差し指が士郎の口を止め、彼女は切ない顔をしていた。

「ダメだよ。『私』はこの世界の『異物』。ここに居られるだけでも十分幸せ過ぎる」

「……………」

だからその先は言わないで。

と士郎に続きが聞こえた。

だが――

――それがどうした。

「俺は。衛宮士郎は。三月の事が好きだ。一人の異性としてだ――」

――ああ、この胸の高鳴り。

――思わず泣きたくなる。

――もう既に泣き始めていた。

――思わず叫びたくなる。

「――俺と付き合って欲しい」

「私一応年上だよ?」

「それがどうした」

「私……『人間』じゃないよ?」

「寧ろ良いと思ってる」

「……『私』の、この姿は庇護欲をワザとくすぐる為のモノよ

？ それは何度も『生』を経験した末に一番長く生き延びられるからであつて——」

「——俺は外見なんかどうでも良い。俺は『三月』と言う個人が好きなんだ。時間にはたつぷりある。その話をいつか聞かせてくれないか？」

——それが最後の抑制する気持ちを粉々に吹き飛ばし、三月は泣いた。

「う……………うううううううう」

「……………俺はここに居るからさ」

「ウワアアアアアン！」

士郎が横から泣きじやくる三月を静かに抱き締める。

「(こんな『私』でも、『幸せ』を求めても良いのでしょうか?)」

それは二人の少女が同時に考えていた事だった。

---

### 弥生 視点

---

時は少しだけ遡り、士郎が三月に声をかける時とほぼ同時だった。

ただし、ここでは——

「ここに居ると風邪をひくぞ、弥生君」

「……………アーチャー、さん?」

そこにはアーチャーが彼女の肩にコートを羽織らせていた。

「春とは言え、夜はまだ冷える時期だ」

「……………」

「隣を失礼するぞ」

アーチャーが座つて、弥生の隣で未遠川を眺める。

「……………涙は君に似合わないな」

「そこは士郎だね、配慮はしているけど」

「う、すまん。これでも精一杯なのだ……………」

弥生が乱暴にゴシゴシと目を袖で拭く。

「ここから、ハンカチを使いなさい。目を痛めたらどうするのだ?」

「……………ムウ……………」

ハンカチを手渡され、弥生はそれで涙を拭きとる。

ここでも言葉が交わされる訳でも無く、二人はただ川を見ていた。

「もしかして、弥生君は『悲しい』のか?」

「……………私は知らないよ、そんなの」

「君は解かつていないな。人ならざる者が『人間』の感性を持つ事に私は……………いや、オレが言いたいのはこんな事では無くてだな……………あ……………君の泣く姿は見たくない」

「アーチャーさんは遠坂さんをほつぽつて何を言っているの？ 彼女こそ泣いて待っているんじゃない？」

「……………今日一日中ずつと私達を見ていたのだろう？」

「……………それも『英霊』……………ううん、『守護者』としての勘？」

「心外だな、これでもオレは君の事が気にはなっていたのだぞ？ たかが服装や髪が変わっただけで、分からない訳が無い」

その言葉は、士郎が三月を長年見て来た『経験』を、『観察力』（または『洞察力』）で見抜いていた。

「……………」

「……………私は実はと言うと君達が恐ろしかったんだ」

「……………え？」

そこでアーチャーは語る。

『三月』という、不可解な存在。

『アーチャー』の知らない義妹と環境、そしてかつての知人達の変わり方。

それらはアーチャーエミヤシロウにとっては全くのイレギュラー未知。

「だからワザと悪役になり切り、出方を窺っていた」とも白状していた。

「情けない話だがそうすれば本性を現すと思つてな。だが結果は君の知つての通り、

私達の敵どころか君には返しきれない恩を作つてしまった。変な話だよ。オレは

『自分を殺す』と覚悟を決めた筈なのに、君のおかげで変わった。いや、救われたんだ」

衛宮士郎ではないエミヤシロウ。

だがやはり根は似ていた。

「諦めていたオレに、直接ではなくとも君のおかげで無念は晴らせた。イリヤも

……桜も……慎二も……遠坂でさえも救えたんだ。だから以前の私は『幸せに

なる権利はない』と、私には『もう目的が無い』とも思つていた」

アーチャーが頬を掻きながら気まずそうにする。

この仕草は士郎と似ていた。

「……………士郎がこのように遠回りに言い方をするのは言いにくい事がある時な

のは解かっている。何が言いたいの、アーチャーさん?」

「……………その、何だ? うむ。ここまで難しいとは想定外だ」

「……………?」

珍しく言いよどむアーチャーに弥生は顔を自ら彼に向ける。

そこには肌黒な彼の顔は夕焼けの中で、真つ赤になっていた事が分かつていた。

「……………よし」

そこには真剣な顔をしたアーチャーが居た。

「オレは、君のおかげ頑張れるようになった」

「……………?」

弥生がニコリと笑う。

「それは良かった」

「あー、その……………違う。えっと……………オレは……………オレは君の隣で頑張りたいんだ」

「……………アーチャーさん?」

彼の顔が更に真つ赤になっていく。

「や、や、や、や、や、や、や、弥生君が。その、と、と、と、と、と、と、隣に居て」

ピトツと弥生の人差し指が士郎の口を止め、彼女は切ない顔をしていた。

「その先はダメなのは知っているでしょ? 『守護者』さん? 『私』はこの世界の『異物』。ここに居られるだけでも十分幸せ過ぎる——」

——だからその先は言わないで。



それは、三月と士郎のやり取りと酷似していた。

三月は弥生で、弥生は三月。

士郎はシロウで、シロウは士郎であるかのように。

だが――

「――それがどうしたというのだ。 わー――『オレ』は。 君の事が気になるのだ。 これは恐らくだが、一人の異性としての。 男性としてのだ――」

弥生はもう既に泣き始めていた。

――アーチャーさん 彼の相手は『私』より相応しい者達が居る筈。

「――迷惑でなければ、オレの隣に居て欲しい」

「……………私、アーチャーさんより一応年上だよ？」

「お互い歳を気にする者でもないだろう？」

「私……………『人間』じゃないよ？」

「それを言えば、私だつて存在自体が亡霊に近い」

「……………『私』の、この姿は庇護欲をワザとくすぐる為のモノよ？ それは何度も『生』を経験した末に一番長く生き延びられるからであつて——」

「——それは私も同じだ、君も夢で見ただろう？ 何、お互いに時間はたつぷりあるのだ。その話をお互い語り合うのも一興では無いか？」

——それが最後の抑制する気持ちを粉々に吹き飛ばし、弥生は更に泣いた。

「ヒグツ……………ううううううう……………」

これには流石のアーチャーもギョツとして慌て始めた。

「そ、そんなに嫌かね?! わ、私としては本心を語つたつもりだが——!!!」

「違う! 違うの! 嬉しいの! 『こんな私でも幸せになつても良いのか』つて思っ

ちやつたから!」

「……………そうか」

泣きじやくる弥生の背中を静かにアーチャーがさする。

それが優しく、

嬉しくて、

「この人を絶対に幸せにする」と決めさせていた。

でも——

「(一)——「こんな『私』でも、『幸せ』を求めても良いのでしょうか?」(二)  
それは二人の少女が同時に考えていた事だった。

# 第58話 まったりな一日、そして最後は――

マイ、慎二、桜、ライダー 視点

「♪~~~~~」

その夜の間桐邸では鼻歌をしながら家事をしているマイを桜が見ていた。

「ま、マイさん？ すごくご機嫌ですね？」

「え？ ええ、そうなのよ。『青春』って言葉良いわよね」

「?!」

これを聞いた桜（&隠れていたライダー）がその後慎二にこの事を伝え、三人はマイさんを尾行して彼女の『相手』を探す事を――

「――『彼氏』、か」

――訂正。

ボソリと独り言を言ったクルミも尾行対象になった。

尚、ライダーがこの期間いつも以上にマイとクルミ両方にべったりと引っ付いてい

た。

文字通りいついかなる時も——

「アネット」

「何ですか、クルミ姉さん」

「何故個室トイレに居るの？」

「いえ、お気になさらずに」

「いくら何でもこれは気にするわ」

三月、衛宮士郎、イリヤ、ツキミ、リカ 視点

その晩、衛宮邸に帰って来た士郎と三月が居間で迎えたのは——

「————らっしやい！ モダン焼きでええか？ 餅入つとる奴」

「お帰りなさい二人とも！」

「あく、お帰り二人とも！ ささ！ 早く手洗いして食べましょう！ ツキミさん、関西に住んでいただけでお好み焼きが上手なのよー！」

「関西ちゃうわ！」

「でも方便が——」

「——ノリや！」

「海苔？」

「そうそう、乾燥した慎二——つてちやうわ！」

「イリヤ氏、渾身の出来ですよ」

「やった~~~~♪」

「……………え？ 何これ？」

ちやぶ台の上には鉄板でお好み焼き屋の様な場になっていた。

ちなみにツキミの服装が『店員さん』っぽかった。

一段落して士郎と三月はアイコンタクトで会話をしていた。

『目の前に藤姉いるけどどうする？』

『言っちゃおう？』

『どうやって？』

『士郎！君に決めた！』

『いやだから何でさ?!』

『……………取り敢えずお茶を飲もう』

士郎と三月がお茶をズブーつと飲んで、ツキミが大福を頬張り、リカはジューツと士郎と三月を見ていた。

そこは何時もの衛宮邸の景色で、

何時もとは違う心境を持った者達が居た。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

『士郎氏、中に居ますか?』

「???」 この口調はリカ? ああ、空いているよ」

そこは何時も士郎が魔術の鍛錬に使っていた土蔵で、士郎は『強化』ではなく『投影』を練習していた。

そして土蔵の中に、何時ものパツとしない顔とはねっ毛のリカが土蔵の中に入って、士郎をジツと見ながらメモを取って行く。

「ジッ」

「?」

「フム、これと言った変化はないようですね。もしや接吻<sup>キス</sup>まで行っていない？」

「ツ?!?!」

『投影』したものがビキビキと音を立てて、歪なオブジェとして出来上がった。

「おく、『太陽〇塔』ですか。良く知っていましたね」

「り、リカ？ さっきのはどういう事だ？」

「どういふ事も何も、好意を寄せ付けた『番候補』の雌と雄はまず初めに接吻<sup>キス</sup>で互いを興奮状態になつてからs——」

「——わああああああ！ 待った~~~~!!」

士郎がリカの生々しい説明を遮る。

「と言うか、何でリカが知っているんだ?！」

「イリヤ氏と共に話して、結果が気になつたので」

シレッツというリカに士郎は頭を抱える。

「……………義兄さんはお忘れかも知れませんが、『私』は元々『我欲』以前に『個』ではなく『全』の視点から全てを観ていました」

「あ、ああ。確か『神様』の様なモノなんだっけ?」

「はい。ですから『個』として成り立つた今、『幼少期』はともかく、『思春期』や様々な『気持ち』や『欲』などと言つたモノを初めて経験します。ボクもそうですけど」



「そ、そうなのか？ 案外皆、ちゃんと『人間』として生きているじゃないか？」

「忘れたか、衛宮士郎？ この私でさえ生きて行けたのだぞ？」

「ツ?! お、お前は?!」

目の前のリカの目が死んだかのように見えて、口調と顔の笑みがある男を士郎に連想させていた。

「少しばかり神父らしい事をしたくてな、私自らが頼んでの事だ」

「言峰、綺礼?!」

「『かつてそう呼ばれていた男の残骸』と言つても過言では無いがね。先程の話を続けるが、人間のフリさえすれば生きては行けるのだ。君にも分かる事だろう？」

「お前、死んだ筈じゃ——？」

「少しばかり、私と似ていた君とアーチャーの行方が気になつてな、みつともなく生にしがみ付いた。と言つても、『我が主』の頑張りがあつた末の賜物だが。では私はそろそろお暇しよう……………う〜〜ん、やはりこれは慣れないですね」

体が一瞬ふらついてリカの口調と表情が何時もの「ヌボク」ツとしたものへと戻る。

「という訳で、ボクとイリヤは個人として二人が幸せになつて欲しいのです」

「……………そうか、そういう事か」

実は昼のイリヤは頬に口付けをしておらず、士郎の耳に小声で囁いたのだ。

「後ろにミーちゃん走っているよ？」と。

「そうか、ありがとうな？」

「いえいえ、こちらとしてもこの上ない観察対象が出来たので楽しいですし」

「え？」

リカがクスクスと、大人っぽい笑みを浮かべながら土蔵に呆気に取られた士郎を置いて行く。

弥生、アーチャー、凜 視点

その一方で、遠坂邸では『赤い悪魔』が降臨していた。

「アーチャーにもそんな趣味があったとはね〜」

「何の事だ、凜？」

「遠坂さん？」

「べつにつ〜？ 衛宮君が『お兄ちゃん』呼びフェチだから推測は出来ていたけど、イザ

目の前にするとね〜？」

「なッ?!」

「ブボツ」

アーチャーが驚愕の表情をしながらキッチンからニマニマと笑っている凜の方へと向き、弥生は噴き出して、彼女の顔は飲んでいたジュースまみれになっていた。

余談だがランサーとカリンの両名は藤村組と共に他の市からの組とのイザコザに参戦していて、遠坂邸にはいなかった。

「待て！ 誤解だ、凜！」

「と言うか遠坂さん、つかぬ事をお伺いしますが——」

「—— 貴方の尾行に、アーチャーと私のが気付かない訳ないでしょう？」  
魔法／魔術を使わない尾行方法が仇となっていた。

「へ？ アーチャーさんも？」

「う、うむ。 最初は何事かと思ったが、凜が最後の方で君が走って行つたと聞いたのである……ま、まあそのおかげで先の事になったのだ」

何と、こつちも凜がイリヤと同じ様な事をしていた。

「こつちの身にもなつてよね？ あんた達二人を見ていると歯痒いのよ」

「遠坂さん……」

「そんな顔しないで頂戴。 でないと桜直伝の気付け役をお見舞いさせるわよ？」

「でも……『本来の物語』では——」

凜が青筋をこめかみに浮かべながらスタスタと弥生の居るところに行つてデコピンをお見舞いする。

「ボコン！」

その音は大木をハンマーで打つたような音だった。

そのはずみで弥生は椅子から転がり落ちて額を抑える。

「あ痛あああああ?!?!?!」

「リ、凜——」

「ア?」

何か言いたげなアーチャーに怒り狂うカリン／ランサー並みの睨みで凜はアーチャーを黙らせる。

「あのね、弥生ちゃん? 『本来』とか『物語』とかなんて言われても、私達には『今』しかないの。だから関係無いわ。そもそも、貴方というイレギュラーな存在が関わっているのだから貴方の言う『本来』からもうその時点でかけ離れているわ」

「あらかツコイイ——」

「——ういえ?!」

弥生が思わず惚けながら女性である凜を「かつこいい」と称した事に凜は動揺を隠せなかった。

## 新御三家+α 視点

と、上記のように新御三家ではほのぼのとした聖杯戦争前の日々を送っていた。

「「「（全く進展が無い）」」」」

衛宮邸に遠坂邸の者達はある人物達を見ながらそう思っていた。

そう、文字通りのほのぼのとした毎日があるのは良い事なのだが如何せん、刺激が足りなかつた。

主に『赤と白と黄色の子悪魔達』的に。

「「と言う訳で他の皆さんのご協力お願いします」」

凜、イリヤ、そしてリカが目の前に居る士郎とアーチャー（そして三月と弥生）を除いた新御三家の方々に頭を下げながら頼んでいた。

「そんなにか、士郎と三月の二人？」

「そうなんです、接吻もまだ何ですよ。 てつきり慎二と桜のように生殖k——」

「ちよつと待て／待って!!」

「違うんですか？」

「ウゝ」

真顔でリカに問われた慎二と桜はアタフタとしながら、最後にはただ黙り込んだ。

昔からズレていた好意が晴れて結ばれた二人は思春期真っ最中の上、相思相愛の若い男女。

何も無い筈が無い。

と言うかそれを察してマイが気を使つてライダーの注意を引いていた事もあつたが、慎二と桜はそんな事には気が回つていなかった。

「そうねえ、そういう事なら協力しても良いわよ？」

「オレも別に構わねえぜ？　こういうのもアリかも知れねえが、見ているこっちが胸焼けするぜ。生殺しも良いところだ」

「フリンちゃんに同意だ」

「オイ待てカリンテメエこの野郎。何だ、そのあだ名は？」

「アン？　『クー・フリーリン』から『フリー』と『リン』をとつてだな——」

「——まあ、その事は置いて、他の方はどうなのですか？」

未だにガミガミ言い争うランサーとカリンの他の者達も協力願いを聞き入れた。

「まあ、たまには良いかしらね？」

「若い者たちの手助けか……それもまた一興だろう」

「と言うか誰？　このへっぴょこ侍を呼んだの？」

そこにはキャスターとアサシンの姿もあった。

「? ボク等はキャス子はんを呼んだだけやねんけど?」

「ちよつと待ちなさい。その『キャス子』って私の事かしら?」

「そやで?」

「そんなあだ名、私には似合わない——」

「——葛木先生にそう呼ばれるのを想像してみ? 何ならボク達がそう呼ぶように

協力す——」

「——ぜひお願いします」

こうして「オペレーション鈍感ズヲ後押しーズ」が近い内に決行される事となる。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

次の休日、士郎と三月は別々の用件で同時に出かけていて——

「あれ？ に——士郎？」

「三月？」

——何故か同じ場所で同じ時間に鉢合わせていた。

「何でここに？ いや、イーちゃん／慎二に誘われて」

そして同じ言い方で自分の理由を告げていた。

「……………少し待とうか？」

「……………ああ、そうだな。 凄い偶然……………なのかな？」

「まあ、新都のヴェルデを待ち合わせ場所に決めるなんてメジャーらしいから」

「そうなのか？」

「クラスメイト達によればね？」

と、互いを直視しないようにベンチに座りながら士郎はそれを見上げて、三月は前を見ながら足をブラブラさせていた。

余談かも知れないが二人の服装は何時もの私服姿ではなく、士郎は以前のアーチャーが凜と出かけた服装に似ていた（メガネ無しで、髪の毛をオールバックにはしていたが）。

他者から見れば『背伸びしている少年』だが、三月にとってこのような義兄の姿は初めてだった。



その反面三月の私服は以前の短パンタイツ&パーカーではなく、肩出しセーターニツトトップスの下に縞々タンクトップに白のスカートと黒のニーソ、そして何時ものポシエットにウエーブのかかった長い髪の毛（そして横に三つ編み＋リボン）は何処か子供っぽさの名残を残しつつ、大人の雰囲気を出していた。

やはり似た者同士であった。

ベンチに座って約15分後——

「——遅いな〜」

—— 一郎と三月が同時に口を開けて、互いを見る。

「え？」

「……………一郎は誰に誘われたの？ 私はイーちゃんに『新都を一緒に回って見よう

！』って」

「俺は慎二に呼ばれた。『新都を一緒に回って見ないか？』って」

「……………ハア〜」

互いに見て数秒後、一郎と三月が溜息を出す。

「これはやられたな」

「うん、やられたね。でも、一郎は嫌？」

「俺は嫌じゃない。ただその……………どう切り出そうか迷っていた」

「プツ、何それ？ 私と同じじゃない」

「……………ま。せつかくだし、昔みたいに回るか」

「うん♪」

「そ、そうか。じゃあ、どこ行こうか？」

「えっと……………土郎となら、どこでも」

そして二人は嬉し恥ずかしながらも互いに問いかけ、土郎は胸に何かグツとくるのを感じた。

ただやはり顔に出ており、三月は満面に笑みを浮かべ、何時もなら言えないような事もストレートに口に出す事が出来た。

それは遙か前の二人の様に、近くの場所を回る為に無邪気に笑顔を上げながら手を――

「……………え？」

――取ろうとした三月の手をスルリと土郎が解いた事に彼女は思わず涙目になりそうだったか――

「……………こ、これの方が良いと思った……………だけだ」

――どうやらそれは三月の早計だったみたいで、土郎の声が小さくなりながら言い訳をして、手を繋ぎ直したただけだった。

三月がやろうとしてた、親が子の手を引く様なモノではなく、お互いの指を絡めるよ  
うな手の繋ぎ方だった。

「ふわあ。 士郎の手デカくてゴツイ」

「(三月の手小つちやくて指が細い)」

「……………い、行くうか三月」

「うん♪」

気まずそうな士郎の言葉に邪気の無い、眩しい笑顔を三月が浮かべる事に士郎は更に  
赤くなつて行き、二人はゆつくりと歩いた。

一緒に、足幅を合わせながら。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

「甘〜い♡」

「そ、そうだな」

場はカフェテラスに移り、三月の前にはパフェとホットココア、土郎の前にはイチゴケーキとコーヒーがあつて三月は幸せそうにハムハムとゆっくり食べていた。

何時もながら凄い速さで甘味を完食する彼女がこつもする事が違うだけで印象ががらりと変わるのを痛感した土郎だった。

三月はと言うと出来るだけ長くこの時間を楽しみたかつただなのだが。

「はい、あ〜ん♡」

「え?」

そしてそこに追い打ちをかけるかのようにあの「はい、あ〜ん」状況をリアルに経験しているた事に戸惑う土郎。

「……………いい、嫌? 私も本でしか知らないから……………」

この上目遣いに泣きそうな顔に即決した土郎は「バクン!」と差し出されたスプーンを一口で食べる。

「モグモグモグ……………あ、甘いな」

「でしよ〜?」

「む、胸焼けする」

「え〜? そんなに甘いかな〜?」

胸焼けするのは甘味からでは無いのだが、そんな事を言う勇氣は士郎にはなく、自分のコーヒーを飲み始めると三月はパフエを同じスプーンで食べるのを再開し、とある事に士郎は気付いた。

「あれ？ あれって……え？ え？ え？ も、もしかして今のつて——  
?!」

「??? どうしたの、士郎？」

そして未だに気付かぬ彼女に答えられない士郎だった。

……

……

……

……

……

……

……

「ねー、士郎！ これなんかどうかな？」

そこはショッピングモールのヴェルデの中のブティックで、普段アクセサリーなどをしていない三月が色々試しては士郎に意見を聞いて来ていた。

「似合うよ、凄く」

♪~~~~~」

最初こそ戸惑いまくりの二人だったが、すっかり昔の様に——いや、それ以上に楽しく周りを見に回っていた。

そして士郎はある意味イリヤに更に感謝していた。

彼女が前に士郎を連れ回っていなかったら「うー」や「あー」などと、生返事しか出来なかっただろう。

「……………（やっぱり感謝しきれないな）」

「これなんかどうかな？」

次に手に取ってみたのは十字架のペンダントだった。

このチョイスに士郎が思わず笑い、時間が過ぎて行った。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

…

結局ブティックではブレスレットを買ってもらい、そこからはずっと手首に付けながらさらに新都を回って、夜は珍しくファミレスで夕食。

その後も手を繋ぎながら回り、帰りのバスでも隣の席同士で座りながら窓の外を一緒に見る。

そして深山町の交差点で降り、北にある衛宮邸へと二人は歩く。

手は繋がったままで。

「……………ありがとう、士郎」

「うん？ 俺は大した事が出来なかったと思うんだけどな」

「そんな事無い。私、今までこんなに……………うん、やっぱり『楽しい』と思った事は無いわ」

「……………そうか」

士郎はその重さが分かってはいないかもしれないが、彼女が心の奥から『楽しい』と考えるのはかなり大きい事だ。

「うん、『とっても楽しい』と感じた」

「それは良かった。イリヤと慎二に感謝だな」

「そうだね……………本当に、ありがとう……………」





言っていた、「ファーストキスの味はレモン」説を思い出していた。

「……………レモンじゃなくて、あれは別の次元の何かだった……………」

浮ついた足取りで衛宮邸に帰りながら、かなり大胆な行動をさつき取った彼女の事を思っていた。

最初は三月を喜ばせようと思っていた土郎だが、何時の間にか自分も『楽しかった』のだ。

『その権利はない』と思っていたが……………第19話より

「これも……………悪くないな」

そう独白しながら土郎は衛宮邸の中へと入った。

「……………」

「ふわぁ〜、もう一人の私』ってだいた〜〜〜ん……………」

少し離れた場所で、『護衛』を他の皆に頼まれた真つ赤に赤面しながら気まずそうにしたアーチャーと、同じく真つ赤つかになった弥生が頬を両手に当てながら独り言を言っていた。

実は二人に『護衛』を称した『模範』を他の新御三家に依頼されていた。

アーチャーは土郎と違い、長年三月と接した訳では無い。

なので、『ありえた自分』を見せれば何か進展があるかも知れない』と言う思惑で土

郎と三月の『護衛』を頼んだ新御三家。

別にこれはただの口実ではなく、未だに探りを入れて来る魔術協会や聖堂教会関係者から守る意味もあつた。

ただし、アーチャーと弥生にはランサー、カリン+αといった者達が既に排除ゴホン消滅ゲフン滅殺ゲホン！ 無力化しに出っていたので、する事と言えば二人の観察監視だけだったのだが。

「……………ねえ」

弥生の声に、アーチャーが体をビクリとする。

「……………アーチャーさんはああいうの、嫌？」

「……………」

これがアニメや漫画であれば、困ったアーチャーに汗が大量に噴き出すシーンであろう。

「……………い……………」

『？』

「……………」

い

……………

い

や

……………

ではない」

物凄く、非常に気まずく、恥ずかしながらもアーチャーが小さい声を絞り出す。

「……………じゃあ、今度何処か行こうか？」

「と、取り敢えず！ 護衛対象は拠点へと戻った！ に、任務を終了とみなして武器や必要性のない装備はここで破棄！ 最低限の物資でポイントYまで退避をしつつ、敵の警戒網を——！！」

——と言った具合の滅茶苦茶動揺するアーチャーが遠坂邸とは反対の方向へと走ろうとs——

「——つて、アーチャーさんそっち違う方向だよおおお?!」

「——ぐお?!」

——走ろうとしたアーチャーの赤い外套を弥生が引つ張つて彼が転びそうになり……………と言うような調子で彼と弥生は遠坂邸へと無事(?) 帰還する。

だが、誰もが予想できなかっただろう。その少し後、夜の衛宮邸では——

「(——何故、こうなった?)」

「士郎おおお……………」

士郎の部屋で二人分の息遣いが荒い音が聞こえ、士郎は自分と同じく息をする下着姿の三月を見上げていた。

「(本当に何故、こうなった?)」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

時は丁度三月が衛宮邸に先に帰り、スポポポポと靴をキャストオフしていた頃に戻る。

下着を出してお風呂場でスポポポと服をキャストオフ。

そしてすぐに冷たい水でシャワーを浴びて、頭を冷やそうとしていた?!

「わあああああああああ?! 私、何て事するの?!!?!?!?!」

未だに真つ赤な、茹蛸も顔負けするほどの赤い顔を両手で覆いながらシャワーを浴びて、うるさい心臓の鼓動音が耳朶に響いていた。

頭と胸の中は嬉しさと恥ずかしさと破廉恥な気持ちをミキサーに入れてグチャグ

チャにかき混ぜたような感じがただグルグルと回っていた。

だがこれが気持ち悪いどころか、体が爆発しそうな勢いで寧ろグングンデカくなっていった。

「……………（自分が……………士郎に……………k———キャ  
アアアアアアアアアア!!!）」

内心叫びながら冷たい水を浴びながら体が自然とクネクネモジモジとする。

そうしている間に士郎が衛宮邸へと戻り、中へ入ると——

「———ただいまー、ってあれ？ 他の皆の靴が無い？」

慌てていた三月は気付かなかったが、玄関では士郎と三月の（慌てて脱ぎっぱなしの）靴しかなかった。

「……………（余程慌てていたんだな）」

そう思い、士郎は靴をちゃんと並べた後に居間の中へ入るとちゃぶ台にメモが一つあつた。

「ん？ 何々……」

『ちよつとりカとツキミでリンの所に泊まりがけで出かけてくる！ ——イリヤ』

「……………え？」

数分ほど硬直していた士郎は思考と共に心臓がうるさくなる程、早く鼓動していた。

「(え?なに?じゃあ今は三月と二人つきりと言う事か今日の夜何だこの展開俺は知らないぞ何で胸がドキドキするんだまさかこんな事に——)」

更に数分後、士郎は一つの行動へと出ようとした。

「……………寝よ」

そう思い、士郎が立つと思わずふらついて壁に身を寄せる。

「??? 今日の出来事でへばったのかな?」

そのまま自分の部屋へと戻っている間に息遣いがドンドンと荒くなり——

——体が火照って行つた。

「(ま、不味いぞこれ。と言うか何なんだ?もしかしてきつきのキ……………キ……………出来事の所為なのか?)」

士郎は何とか自分の部屋に戻り、布団とブランケットを出して、普段はお風呂に入るのを我慢してパジャマに着替えて、寝ようと努力するが——

「(——全ツツツツツツ然治まらない!)」

——士郎は眠れなかつた。

体は重く感じるのに意識だけが浅く、ハッキリとまでは行かないが……………

その……………

「何かムラムラ——」

士郎はガバツと体を起こして、冷たいシャワーでも浴びようかと思ひ、襖を開けると

「——士郎おおおお——」

「——え、みー——おわ?!」

ドサツ。

寝巻姿の三月がそのまま士郎を布団の上に押し倒す。

普通なら突然の事とは言え、彼女が押ししても簡単に立ち留まる事が出来た筈が何故か力が入らなかつた。

「な、何かああああ…変なのおおお——」

「(や、やばい——)」

「(——何か体が熱い)——」

そこで三月は寝巻を脱ぎ始め、士郎の目には小ぶりの胸を包んだブラが見えた。

「(以外だ。白のフリフリレース……………所謂『勝負下着』って奴か?)」

もう既に正常な判断が出来そうにない士郎はある意味冷静に物事を取っていた。

「士郎………ちよつとだけジツとしていて」

「あ——」

同じ時刻の柳洞寺の離れでキャスターはブツブツと文句を言いながら『遠見』を使用している水晶玉で魔術協会や、聖堂協会の関係者たちの監視及び危険人物の炙り出しをしていた。

ほぼ日課になりつつあるランサーとカリン達の補助をしつつ、時々クフちゃんの世話をしていた。

もつふもふな毛で、つぶらな瞳をした素直な子犬の魅力に負けた。

可愛いは正義である。

「ハア………でもこれでやつと制作した媚薬効果のお線香が完成するわ。今夜こそ、宗一郎様に！」

ガッツポーズをしながらキャスターは時計を見て、そろそろ宗一郎が返ってくる時間帯（彼も元暗殺者なので静かに魔術を使っていない危険人物を消すのはお手の物）なのを確認してから近くのお線香鉢を手にとって、火を点ける。

彼女が夜な夜なこんな事をするのは遠坂邸と間桐邸にある材料などの取引をしたからである。



お察しの通り、媚薬効果のお線香の制作の為である。

後、オマケに頼まれた良い夢見のお線香も作っておいた。

本来はこちらがメインなのだ。が運悪く（良く？）キャスターはある夜、慎二と桜を目撃してしまい、意識していた。

と言うか対抗心を燃やした。

余談ではあるが、彼女が制作した媚薬効果のお線香は『人間』にしか効果が無いように細工していたのは行為を覚えられるように。

「だって……………『覚えていない』なんてイヤよ……………ああ、待ち遠しいですわ!!! 早く帰ってくださいませ、宗一郎様~~~~!!! キャス子はここで待つておりますゆえ!♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

そこでキャスターは離れに媚薬効果のお線香が充満しているのを——

「——あ、あら? 変ね、こんな匂いだったかしら?」

——確認して、クネクネする体を止めながら無数の?マークを出していた。

「なあ、嬢ちゃん」

「だから名前を——ハア~~~~もう、良いわ。何、フリンちゃん?」

ランサーはビルの上から冬木市を凜とカリンと共に見ている突然口を開けた。

「ング……………ま、いつか。嬢ちゃんがキャスターに頼んだ品は危険な物じゃねえだろうな？」

「ええ。私が頼んだのはあくまで良い夢が見れるお線香よ」

「でもリンリンはどうしてそんなものを？」

「り、『リンリン』って……………」

「そりゃあ、オレと被つちまうじゃねえか」

「そ、そうね。だって最悪じゃない？ 初デートの夜に悪夢を見るなんて？ だから

せめていい夢を見れば幸せの一日のままじゃない？」

「へ……………意外とロマンチストなんだな？」

「お？ ランサーもそう思うか？」

「ふ、二人に真顔でそう言われると照れるのだわ……………でもキャスターも同じような思惑があったみたいよ？ 何せ私達を手助けする代わりに材料を多めに渡して欲しかったんだから。その証拠に、彼女の部屋にはお線香鉢が二つ置いてあったし」

「けどよう、何もあの『イリヤ』って子達を今夜屋敷に呼ぶこたあねえだろ？」

「違うわ。あれはアーチャーと弥生ちゃんの方が気がかりで、彼女イリヤが言い出した事よ。ま、今夜の私達は夜の掃除の日だから丁度良いかもしれないわ」

凜のこの行動や思惑や気遣いがどのように出るのか、今はまだ誰も想像もしていない

だろう。

三月風に言うと「まさに『うっかリン』だね♪」と言った所か？第37話  
まあ……………そのレベルを通り越している事態とは思うが。

## 第59話

## 魔力供給♡、その1

士郎 視点

士郎はチュンチュンと鳴く小鳥の音に目が覚めて、朝日が上がって陽光に照らされた目の前の天井を見ながらただ一言だけが彼の脳内に浮かび上がる。

「何か凄い夢を見てしまった」と。

「(昨日は結構はしゃいだからな……三月と楽しい一日を過ごしてキ……」

キ

キ

キ

あ……あの出来事の後、そのまま寝て——」

士郎は数々の生々しいアレやコレやと、色々な詳細が頭の中を駆け巡って、血が顔に充満して行くのを感じ、両手で顔を覆った。

「(何を考えているんだおれは?! 軽いAからBを飛ばしてデイ、デー、プAとCまで飛躍した夢を見るなんて……)」

余談ではあるが士郎も思春期真っ最中の若い男性。

そのような夢を見る事はあるし、何より興味が全く無い訳では無い。

「……………起きよ」

寝起きだというのに未だダルイ体に鞭を打って、士郎は起き上——  
フニユン。

「——ん♡」

「——??」

手の平にすっぽりと収まる布団にしては柔らかい何かの感触と共に女性の甘い声が  
士郎に耳に届いた。

「??????」

彼が手の先を見ると。

「……………え」

そこに居たのは、はだけた士郎のワイシャツを着た三月で、彼女の双丘の内一つが直  
に士郎の手中の中にあつた。

「んな?!」

思考が真っ白となった。

それは手の平の周りの彼女の肌と同じ位だった。





——衛宮邸の玄関が空く音に士郎は「バ！」と驚愕した顔で音の方向に集中する。

『あれ？ 先輩達の靴しかない？』

「(き、桜ツ?!)」

『そうなのか？ 変だな……おい衛宮！ 来てやったぞ！』

「(その上に慎ニイイイイイイイイ?!)」

「?????」

未だに半開きの目で状況に付いて行っていない三月はボサボサした髪でジゅつと大量の冷や汗が出ながら取り敢えずズボンだけでも穿く士郎を見ていた。

「三月、自分の部屋へ戻って服を着直すんだ！ 分かったな?!」

「んい~~~~分かったよお~~~~」

コクコクと寝ぼけながらも三月が反応するのを確認して、士郎がシャツを急いで着直して玄関の方へと急ぐ。

「のわ?!」

「きゃ?!」

回り角を士郎が曲がろうとすると桜に危うくぶつかる寸前で横をスライドしながら彼女の肩を掴む。



これによつて桜の向きを180度士郎の部屋から向きを変えながら「ニカツ」と笑う士郎。

「お、お、おはよう桜!」

「ハ、ハア。 おはようございます、先輩」

「ツ?!」

士郎の目が一瞬チラリとキョトンとした桜の後ろを見ると、三月がダボダボではだけた士郎のワイシャツ姿のままヨタヨタとした危なっかしい足取りで廊下に出るのを見て目が思わず見開く。

「ツ……………どうかしたんですか、先輩?」

桜が何かに気付いたのか、目を一瞬だけ逸らして士郎にニツコリとした笑顔を向ける。

「い、いやなんでもないんだ! きよ、今日は慎二と一緒になんだな?! 意外だな?! マイさんはどうしたんだ?!」

「あ、ハイ。 し、慎二さんは『今日は衛宮邸気分だ』と言つて一緒に来たんです。 マイ母様ならばライダーと一緒に商店街へ買い出しに出て、後でお邪魔すると思います」  
ニコニコした桜が延々と喋っている間、心臓が「ドキドキ」と士郎の耳に五月蠅くなつていき、ハラハラした気持ちであつちへフラフラく、こつちへフラフラく、とする三月

をチラチラとしながら士郎が見ていた。

「先輩？ お顔が優れませんか？ お薬か何か——」

「——ああああ!!! こ、こ、これは変な態勢で寝ちまつたからあまり疲れが取れなかつたんだ！」

薬箱を取りに振り向こうとした桜の両肩をガツチリと士郎が再度掴んで阻止する。

「イリヤさん達はどこに？」

「と、遠坂の家に泊りがけってメモがあつたからな！」

幸運にも、三月が丁度自分の部屋の中へ入って行くのを士郎が見てホツとする。

「ハア~~~~~」

「??? 先輩、凄い溜息でしたね？」

「ま、まあ……………な。俺も朝の用意をしてくるよ」

「そうですか。では朝ごはんの支度をしてきますね？」

「ああ。助かるよ、桜」

桜がパタパタと居間の方へ戻る途中、一度だけ士郎へと振り向かう。

「あ、先輩？ 無色の炭酸水も、大根も家にありますから♪ 後、お化粧のコンシーラーを塗つてからファンデーションを重ねると良いと思います☒」

そう言い残し、再度居間の方へと消える桜に、士郎は困惑していた。

「何で炭酸水と大根と化粧の話が出て来るんだ？」

身だしなみを整える為に士郎が鏡の中を見ると——

「——あ、」

——士郎は見た。

と言いか見てしまった。

自分の首筋に無数の小さな痣が出来ていたのを。

「……………ま、まさか……………これって……………」

士郎が良く見ながらついさつき桜が言っていた事を思い出す。

《お化粧のコンシーラーを塗ってからファンデーションを重ねると良いと思います



「……………バレて……………いた？」

士郎の顔色が青くなり、黙り込む。

「……………あ、後で三月と一緒に桜の好きなお菓子を作ろう」

そして彼は機械的にせつせと朝の用意をする。

……………

……………

……………

.....

.....

.....

.....

「衛宮！ 遅いぞ！」

居間では桜の入れたコーヒーとサンドイッチを食べていた慎二の姿があった。

「おはよう慎二」

「？ 何かゲツソリしていないか衛宮？」

「そ、そうか？ ちょっと変な態勢で寝ていたからな」

士郎が桜の居るキッチンへ向かうが桜に止められていた。

「こっちは大丈夫ですよ先輩？ ですからゆっくりと休んでください☒」

「あ、えつと……炭酸水を——」

「——はい、どうぞ♪ 下にタオルを敷いてからの方が良いですよ？」

桜の笑顔が不気味と初めて感じる士郎はただ自分の部屋へと戻り、布団についていた染みをせつせと落として、居間に戻ると丁度三月と目が合った。

「「あ」

お風呂から出たばかりなのか顔がほんのり赤くなっていて、しっとりしていた髪の毛

にはタオルを巻いていた。

「お、おはよう」

「あ、ああ」

慎二が気まずそうな二人を見ながらニヤニヤしていた。

「で? 昨日はお楽しみだったかい二人とも?」

「「フア?!」」

「???」 昨日、一緒に出掛けたんじゃないのか?」

二人がポカンとした表情で慎二を見るが、彼はただ『デート』の事を言っていたにすぎない事に気が付く。

「あ! そう言えば慎二! 俺をはめやがったな?!」

「衛宮が悪い! 少しは羽目を外せてんだ!」

『「ただいまー」』

『今戻ったで〜!』

玄関からイリヤ、リカ、そしてツキミの声と同時にドタドタとした足音が聞こえて、イリヤがキラキラした目で三月に迫る。

「昨日はどうだった?! どうだった?! どうだった?!」

「あ、え? え〜〜と——」

「——はい、ピザトーストです。それでどうだったのですか、三月先輩？」

人数分のピザトーストをちやぶ台に乗せて未だにニコニコした桜がイリヤの隣に座ると、後からリカとツキミが居間に入ってくる。

「お〜!! ピザトーストやないか?! セや、昨日はどないやつた?!」

「ただきま〜す」

「えつと……………凄く良かったです♡(ポツ)」

「きや〜〜〜!!♡♡♡」

「(ニコニコニコニコニコニコニコニコ)」

三月が更に顔を赤らめて、顔が思わずニヤニヤした事にイリヤとツキミが黄色い声を出して、桜とリカはひたすらニコニコしていた。

この事からイリヤとツキミはデートの方を思っていた事と、桜とリカはアッチの方を考えていた事が士郎は手に取るように分かった。

『衛宮君〜? いるのかしら〜?』

『お邪魔しま〜す!』

『ありがとうございます〜、アーチャーさん〜』

『何、荷物持ちぐらいどうって事ないさ』

『お? この匂いは『びぎ』って奴か?』



## 三月 視点

「申し訳ございませんでしたー!!!」

そこでは別の部屋の畳の上で凧が深々々々々三月に向かって土下座をしていた。

「え? えつと、これは?」

三月が凧からイライラした空気を出していたキャスターに開き直った。

「この小娘は昨日、間違つて違うお線香鉢を私の工房から持つて行って、貴方とあの坊やに使つたのよ」

「???」

「ほら、貴方から説明しなさい」

「……………ハイ」

そこで凧は頭を下げたまま三月に事を説明する。

曰く、土郎が告白した日から関係の進展が全く無かったので痺れを切らしたイリヤ、凧、そしてリカの三人が新御三家の他の皆に進展の協力をお願いした。

曰く、決行する直前まで冬木市掃除を前から暇を持て余していたキャスターに素材を提供する代わりに魔術のお線香の制作と協力も依頼。

ちなみにこれを聞いていた宗一郎は自ら「元暗殺者だ」と暴露して協力した事もキャ



スターの了承した要素の一つだった（「愛する宗一郎様に怪我でもあつたらこの街を死とに変えてでも犯人達をブチ殺すわ！」の気迫に何時もは気薄の宗一郎も驚きの顔を上げていたとか）。

曰く先日、イリヤと慎二が三月と士郎を誘つて二人を強制的にデートさせる。

元々はこれだけだったのだが、凜の気遣いで「良い一日の最後に悪い夢なんて観たら嫌じゃない?」という事からキャスターに上記の魔術で制作したお線香を依頼した。

だが凜の手違いで「夢見の良いお線香鉢」ではなく、「媚薬効果のあるお線香鉢」を持つていき、士郎と三月が返ってくる前に衛宮邸に設置。

余談だが、イリヤ達がその夜遠坂邸に行つたのは士郎達の『護衛任務』から帰つて来たアーチャーと弥生をからかう為だった事が幸いした。

「……………え〜つと? キャスターは何で二つのお線香鉢を作つていたの?」

「ギクウー!」

「そう言えば……………」

三月の指定で顔を逸らすキャスターを、彼女と凜が見る。

「ジ〜」

「わ、分かつたわよ! 宗一郎様つて、そういう事を一欠けらの素振りを見せないのよ! 夜な夜な夜な夜な何も無いのよ! なのに何なのよ、あの二人は?! 週に何回ヤれば

気が済むのよ?!」

「え」

凜が何とも言えない顔になり、「うわー、無いわー。それ無いわー」と言いながら引いて、三月は――

「――キャスターつて覗き魔?」

――何時も通りズレながらもマイペースだった。

つまりは平常運転。

「――失礼ね! せめて『観察』と呼びなさい!」

そして逆ギレするキャスターはそれどころでは無かった。

だが――

「――ありがとうございます」

「え?」

頭を深く下げながら礼を言う三月が凜とキャスターをびつくりさせた。

「お二人のおかげでその……私は『幸せ』だと思います」

「フア」

頭を上げながら、心の奥から笑い、頬を僅かに赤に染める三月に思わず凜とキャスターは意味不明な息を吐いた。

だがキャスターの肩が突然ワナワナと震え始めた。

「……………いい。欲しいわ貴方——」

「へ？」

そして何故か鼻血を流しながら血走った眼と息遣いが荒いキャスターが三月の肩を掴む。

「貴方、私のモノになりなさい」

「ヤダ」

「ガーン」と言う効果音と共によろめくキャスターに三月はさらに追い打ちをかける。

完璧に意識せずに出た言葉だが。

「だって私には士郎がいるもん」

「ハワ〜〜?! クツ！ ならばあの坊やを排除——」

「ア？？」

「ヒ。何でも御座いませんツ！」

スンツと、突然無表情のまま圧力をかけた三月にあのキャスターが後込む。

だが凜はこの間ずっと頭を抱えていた。

「まさか桜だけでなく三月まで先を越されるなんてツツツツ!!」

## 新御三家十α 視点

数日後、冬木市にあるドヨメキの波が走る。

それは――

「――三月、帰るぞ」

「はーい！♡ じゃあ、皆また明日！♡」

そう言い、穂群原学園の校門前に待っていた土郎へと三月が走って互いに腕を組む。土郎と三月が二人だけの時や、新御三家邸だけでなく、外でもべったりと引っ付いていた。

もうどこからどう見ても距離感が『義兄妹』ではなく、『恋人』よりだった。

しかもそれは三月だけに限った事では無かった。

「やあ弥生君、待たせたかな？」

「全然だよ！」

「そ、そうかい」

校門前で待っていた弥生に色黒で白い髪の毛の大学生らしき人物が近づき、弥生は躊躇なく手を繋ぐ。

文字通り血の涙を流す二人のファンクラブ達に、以前から三月の事を良しとしなかった女子生徒などが弥生をイジメようとしていた。

「———でね、藤姉が———」

「———プツ、何あれ？」

「やだあ、あれじゃあ『年の離れた兄妹』だよ！」

「クスクス」

「いやいや、どう見ても『親子』っしょ！」

「「「キャハハハハハハ!!」」」

「———ノート、取る時は……『ペンはダメ』って……」

聞こえるか聞こえない位の、ネチネチとした嫌味はしつかりと弥生には聞こえていた。

徐々にだが、彼女弥生の中ではアーチャーに対して申し訳ない気持ち膨らんでいた。

弥生は三月で、シロウは士郎。

それは確かに事実だが、時代が違う。

これも事実なのだが想像してみたい。

士郎は『現在』の人間で、しかも冬木市では見かける童顔の人物。

そして身長は167cmと、三月弥生は140cm。

対してアーチャーは学園の者達にとつてはヨソモノで、ぶっちゃけイケメンで、土郎の167cmと違い、彼は187cmとかなりの長身である。

この事でアーチャーに迷惑が行く事を弥生は気にして、無意識に彼の手を握る手が緩んでいた。

グッ。

「およ?!」

そのまま考え込んでいた弥生はアーチャーと繋いだ手によつて道を歩むのを強制的に止められる。

アーチャーが『彼女を絶対に離さない』と言う意思を象徴するかのよう。

そのアーチャーが急に立ち止まって、女子生徒達に顔を向ける。

「恋人だ。デカくて悪かったな？」

「何よアイツ」

「感じ悪」

「変態よね〜」

「アハハハハ!!」

そして彼が女子生徒達に向かつてはつきりと宣言すると、彼女達がアーチャーを更に非難する様な事を言い、笑うが――

「——— おや、次郎さんでは無いか」

「あ、ほんとだ！ じろうだ！」

「いや本当こないだはありがとうね〜？ 機械とかは年寄りに難しくて…」

「この間のぎっくり腰も良くなってね〜———！」

「——— いや、私は何も別に大した事はしていないつもりだが———」

「——— 謙遜するなよ!!!」

周りの人達がアーチャーにワラワラと群がり始め、彼に礼や褒め言葉などを言い始める。

これには理由があり、彼は『正義の味方』を別に辞めてはいなかった。

ただ規模が周りの人達と、明らかに何処かの誰かさんを意識したモノに変わっていただけでそれをずっと続けていたのだ。

なのでかなりの人気者になってはいた（特に子供達と中年や年寄り達の間では）。

これを見て、蜘蛛の子の様にそそくさ〜と彼を非難していた彼女達は離れて、弥生は———

「——— ぶは」

——— 無邪気な顔でアーチャーに笑いかける、手を新たに繋ぎ直す。

指を絡める様に。

「ん。な、何だね弥生君？」

「ありがとう♪」

アーチャーは顔を逸らしながら弥生宛に口を開ける。

「別に……私が長身なのは事実だからな」

「それでも、ありがとう♡」

「む、むう〜」

そしてこの二人のやり取りに周りの人達はほんわかと和んでいた。

「『『青春だね』』』』」

そして生徒会室では――

「――会長、こちらの書類のサインを」

「うむ、かたじけないクルミ殿」

――何時の間にか生徒会員になっていた（メガネ着用の）クルミと一成が黙々と生徒会の作業を処理して行った。

余談ではあるがクルミが一成の「生徒会員になる気はないか？」を彼女が了承した日は嬉しさのあまりにウキウキしながら変な歌を帰り道中ず〜と歌っていて、それを聞いた人達はてつきり彼が怨霊か何かに取り憑かれたと思っていたのだが、ただ単に



一成が物凄いな音痴なだけだった。

余談だが彼の歌っていたのは演歌だった。

マイはマイで男子生徒や先生などにほぼ毎日アタックをかけられていた。

が、最近は何もすつかり止んでいた。

何せその者達は決まって蟲に食われる悪夢や、夜に得体の知れない恐怖に襲われるか、心臓発作になったかのように意識を失うほどの胸の痛みなどの経験をしている。

今では冬木市の外から来たナンパ師や未だに諦めきれない者達だけが彼女に声をかけていた。

このような話が、『幸せ』が長年不幸な出来事を体験し続けた冬木市に参っていた。まるで神に祝福されたかのように。

## 第59話

な訳が無かったよ、シロウラツシユ

……

## 新御三家+α 視点

それは、とある出来事から始まった。

「キヤス子、温泉に行かないか？」

ツキミに説得され、キヤスターを『キヤス子』と呼ぶ宗一郎だった。

「ハイ宗一郎様……………ハイ?!」

「うむ、では支度を済ませろ。私は車で待っている」

未だにシヨックを受けているキヤスターを離れに置いていく宗一郎が視界から消えた瞬間、嬉しさのあまりに編んでいた『ソウイチロウサマL♡VE!』スカーフを持ちながら畳の上をゴロゴロしていた。

「こうしていられないわ！一分一秒が惜しい！」

普通15分から30分ほどかかる筈の支度を魔術で5分程でキャストは済ませ、トランクを持って柳洞寺の麓にある道に文字通り飛んで行った。

「お待たせしました宗一郎様!♡」

「早いなキャスト子、では行くぞ」

「はい!♡♡♡♡♡」

満面の笑みでキャストは道に停めてあつた穂群原学園のミニバスにウキウキと乗り込む。

……

……

……

……

……

……

……

そして次にキャストを見ると、この上ない不機嫌な顔でミニバスの助手席に座りながら「ブッス」と不貞腐れていた。

「ハツハツハ! さっきのお主の顔は見ものよな〜! まるで別人だったぞ?」

「黙りなさいアサシン。私は今滅茶苦茶不機嫌で、貴方をてつきり殺してしまいたいそう  
 だわ」

キャスターの後ろからアサシンが声をかける。

「ありがとうございますございます葛木先生。私一人では流石に不信がられるのが目に浮かんでいて」

更にマイの声が宗一郎の後ろから来る。

「少し黙りなさいこの泥b——『化け猫』」

「……………?????」

キャスターがマイ宛にきつく言うが、効果はなく、項垂れるキャスターをアサシンが笑った。

「まあ、気にするなキャスター！ 気にしたら負けだぜ——」

「——うるさいわね！ この犬！」

「クウン？」

「あ。ち、違うのよ！ 貴方の事じゃないわクフちゃん！」

更に後ろから小言を言うランサーに怒鳴るキャスターに怯えたクフちゃんをキャスターがニツコリとほほ笑む。

何を隠そう——

「もう完璧に修学旅行ね〜」

「そうね。でもそれが私には良いわ、リン！」

「イリヤ氏のワクワクは共感できます」

「おい衛宮！ 何ハマこいているんだよ?! そこは『防御』じゃないだろ?!」

「仕方ないだろ慎二?! このゲーム、俺は初めてなんだから！」

「おいツキミ！ 風呂で競争しねえか？」

「望む所やカリン！」

「ダメでしょ二人とも?! 何考えているのよ?!」

「そうだ、弥生君の言う通りだぞ」

「ク、クルミ殿のご家族は凄いな………この中で平然としている衛宮や間桐も

同じだが」

「そうかしら？ あまり気にした事は無いわ」

「ライダーアネットも楽しそうね？」

「はい。凄く楽しみです、桜」

——— とこの様に、ミニバスの中は新御三家の他にキャスター、アサシン、宗一郎、一成、そしてクフちゃんまでもが乗っていた。

事の初めは商店街の福引に、マイさんが参加したからだつた。

「あら、これって何なのかしら？」

「えっと、これは——」

隣に居た桜がマイに福引のシステムをざっくり説明する。

「何だか楽しそうね。 えい♪」

マイが回し棒ではなく、福引の外側を直にザツと手で跳ねて回す。

これは別に回し方を知らないからではなく、ただ単に壊したくなかつただけである。

実はと言うと、三月達の中で純粋な肉体的『力』であればマイが本体達である三月と弥生の次に高かつた。

ちなみどれ程かと言うとあの『リングを片手で潰す』シーンを表情一つ変えず余裕で再現出来るほど。

その時の彼女は「手で絞つたリングジュースは絶品」と聞いたから学園の調理室でそうしてただけだが……………

そしてその福引で見事『団体温泉旅行券』を引き当てて、現在と至る。

少し話が飛躍したが、マイ一人が戸籍上『運転出来る』といつてもイリヤの『運転技術』であるのでとてもではないが、普通の道や高速道路を走れるようなドライブテクではない。

故に先生である宗一郎を誘い、その場に居たアサシンが「ではあのキャス子メモ招待してはいかがか？」と言い、マイは他の姉妹達を誘う事に。

そして芋づる式に段々と大きくなって、学園のミニバスを借りる事になった。もう見た目が修学旅行である。完全なプライベートモノだが。

………

………

………

………

………

………

………

「「「おおくくくく！」「」」

青年十子供組の殆どが声を上げて温泉旅館を見渡す。

「「「広い！」「」」

「「「綺麗！」「」」

「「「らー！ 走ってはダメよ！ 他の人の迷惑になるでしょうが?!」」

とはしやく皆に注意するキャスターの姿はもう大人組の「保護者」の一人であった。部屋割だが追加料金を前もって払って、一応同性の2、3人部屋に分かれていた。流石に人数が人数だったので（お金は間桐家持ちで慎二のどや顔に少タイラつとした彼の師匠であるイリヤは修行をもうワンランク、ハードルを上げたのを慎二は後に知る事となる）。

そしてさっそく湯を楽しむ為にさっそく荷物を部屋に置いて出かけるのであった。

「さてと、行くかね諸君！」

「いざー！ 出陣！」

「「へ？」」

士郎、慎二、一成の部屋にカラカラと笑うランサーとアサシンの言葉に気の抜けた声を上げ、二人に温泉の場所へと連れて行かれる。

そして近くのアーチャーにランサーも声をかける。

「お？ お前も来るか？ 『桃源郷』 ってのを拜ませてやるぜ？」

「いや、別にいい。普通に温泉を楽しめよランサー？ 普通に」

「？」

.....

.....



……

……

……

……

……

そして場は女湯へと変わり——

「「きゃつきゃー!」」

青年女性&子供組のイリヤ、三月、弥生がはしゃいで——

「こちら! 走ったらあかんやろが?!」

「へ! 大人ぶりやがって!」

「ア?」

「オ?」

「ウフフ、相変わらずカリンとツキミは仲いいわね」

「ア、アハハハ……」

「「どこが/や?!」」

——はしゃぐ者達を注意するツキミをからかうカリンがマイを睨む。

「あかん、いつ見てもしよげむわ」

「言うなツキミ」

マイと桜の二人を見た瞬間、シユンとするツキミとカリンの二人だった。

「全く、せつかく宗一郎様と——あら？ 魔術師の割に意外といい体しているわね、

貴方？」

「ふえ?!」

そして未だにブツブツ文句を言うキャスターと凜だった。

まあ、キャスターの言う事は無理もない。

魔術師は本来、肉体的労働からかけ離れた生活をしている。

現に歴代の魔術師であるキャスターの肌も白かったが、対して凜は健康体そのものだった。

「あ、そうだ！ こんなに大人数なんだから、背中洗いつこ出来るわね！」

イリヤの提案で大きな輪となり互いの背中を洗うシーンはシュールであった。

嫌がったキャスターは「三月か弥生の背中を！」と息遣いを荒くしながら言っていたが、ライダーの提案でジャンケンで決める事に。

「……………」

「どうしたんですか、ライダー？ しょんぼりしていますけど？」

「いえ、出来れば上姉様か下姉様をと思ったのですが……………あ！ こ、これは別にクルミ

姉さんを嫌がるという訳では———!」

「イリヤちゃん本当に可愛いわ〜、うちの子にしたい位よ〜」

「えへへへへ♡ じゃあ『お母様』と呼んでも良い?」

「何時でも良いわよ〜」

「う〜〜ん、自分の背中を見るのは新鮮な感じね」

「キャスターさんの肌すべすべですね———」

「———ひゃん?! ちよつと! 貴方は何処を触っているのよ?!」

「リカずるい?!」

「何だよ?! それに私にはそんな———」

「———照れ顔可愛い〜〜♪」

「ハウ♡」

と言った具合に女湯は盛り上がっていた。

尚キャスターの顔は三月姉妹達数人に抱きしめられて、これ以上ないダラケ顔となっていた。

その間、女湯から来る声を聞いていた男性達は静かだった。

「さて、どうすつかね〜」

「??? 何しているんだランサー?」

慎二の質問にはランサーではなく、アサシンが答える。

「いや何、これから『桃源郷』を拜むのだ」

「「な、何~~~~~?!」」

これを聞いた少年組（土郎、慎二、一成）が驚愕する。

「い、いやいやいや! 待て待て待て! 待たぬか! そ、それ、それは所謂——」

「——アサシンにランサー。女湯はこの塀の向こうだ」

「宗一郎兄?!」

「お、ナイスだおっさん♪」

「しよ、正気ですか宗一郎兄?! よ、嫁入り前の女性の……………あ、あられもない姿を——」

「——」

「——異性の裸に興味があるのは当たり前前的事では無いのか?」

「な?!」

もう一度書き足すが、葛木宗一郎は元暗殺者で、ある意味言峰綺礼のように『人間のフリ』をして生きてきた人物である。

なので上記の『当たり前前』は本心からではなく、完全なる『興味本位』からであった。

「(しかしキャスターの裸が他者に見られると思うと、どうも……………胸がざわめくと  
はな。 これも新たな発見だ)」

「や、やめろよランサー!」

「あ?」

慎二がランサー達の前に立つ。

「む、向こうには桜達が居るんだ! そ、それでも——」

「そ、そうだ——!」

「——この辺が一番、堀が薄い」

「——宗一郎兄／先生?!」

「——流石葛木殿!」

ウキウキとするアサシン、ランサーが慎二達に開き直る。

「想像してみろよ、坊主ども? 向こうには美女、美人が居るんだぜ? 頼まれて見せる

姿じゃなくて無防備な姿だ。 心が躍らねえか?」

「……………確かに」

「慎二?! 貴様、裏切るのか?!」

余談ではあるが、間桐邸でのパワーバランスは慎二が圧倒的最下位なので、彼は一方的な蹂躪をされていた。

桜にだが。

背徳感に屈した慎二が向こう側へと下った事で一成は今まで黙っていた士郎の方へと向く。

「衛宮も何か言え！」

「……………」

「衛宮？」

「ブクブクブクブクブクブクブクブク」

「衛宮ああああああ?!?!」

士郎はのぼせていた。

理由は至極単純。

昨夜の三月の姿を思い出していただけだった。

のぼせた士郎を一成が看病している間に覗きにチャレンジする者達は——

「——あれ?つかしいな?」

——苦戦していた。

ランサーはゲイ・ボルクをドリルのように使い、小さな穴を掘ろうとしていたが一向に数センチ掘った後から進歩が無かった。

「あらよッ——」







「ドボオン！」と、ランサーが温泉の中に盛大に落ちる。

「馬鹿な?! ならば!」

アサシンが『物干し竿』を抜いて、長刀を鏡代わりに向こう側を見ようとするが――

ガキンツ!

「何?!」

――長刀がランサーの時と同じく剣に弾かれる。

……

……

……

……

……

……

……

「「「「「いただきま〜す!」」」」」

「「「「「……………」」」」」

ワイワイキヤツキヤと楽しく料理を食べ始める女性陣と違い、男性陣は黙々と食べていた。

「ねえ、また後で別の温泉に入らない？」

「そうですね、露天風呂が気持ち良かったのですので是非」

「ええ、もう本当によかったわ。肩の凝りも幾分かマシになりましたし」

「じゃあ貴方達は勝手にしなさい。私は宗一郎——」

「——ええ？ 一緒にキヤス子——」

「——そう私を呼んでいいのは宗一郎様だけです！」

「キヤス子、頬にご飯粒が付いているぞ」

「あらあら♡ 宗一郎様、取って下さいませ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

黙々と料理を食べていたランサー、アサシン、慎二が小声で話す。

「女性達は第二ラウンドに行くみたいだな」

「で、ござるな」

「だがさっきの露天風呂に何人か行くみたいだから僕達にもまだチャンスはありそうだな」

「お前達まだ諦めていなかったのか？」

「衛宮、これは言わば『課題』……いや『宣戦布告』なのだ」

「『宣戦布告』とは……………お前達、少し大げさなのでは？」

「だが普通のやり方じゃ、あの警備は破れねえ」

「まずはメシで力を蓄えるでござる」

「そしてきつちり作戦を練らないとな」

「……………」

呆れる一成と士郎、そして何も言わないアーチャーそちのけで話を進めるランサー、アサシン、慎二だった。

時少し後でとなり、桜、リカ、三月、凜が別のお風呂の着替え室で、桜が何かに気付いてニコニコし始める。

「あら？ 三月先輩ってブラを付け始めたんですね？」

「ングッ」

「おお、ホントですね。カップ付きキャミソールからの進歩。やはりアレでしょうか」

「多分アレで意識し始めたんでしようね」

「ア、アレって何？」

「勿論、先輩と過ごした夜ですよ♪」

「はへ?!」

「ですので『本体』、もっと詳しい話をしましょうではないですか」

「……………きよ、拒否権は——?」

「二——無いに決まっているじゃない／＼です／＼ですか♡」

「……………うゝゝゝゝ」

三月がモジモジとして、リカが口を開ける。

「ではせめて感想だけでも」

「ええと……………良かった……………です……………(ポツ)」

頬をほんのり赤める三月に対して、他の三人は別々の反応をしていた。

「あくらく(初々しい三月先輩、可愛い♡)」

「グツ(完ツツツツ全に自分のミスの所為だけど、なんか腹が立つ!)」

「ほう。(やはり興味深い)」

照れる三月は逃げるかのように温泉の中に入る。

が、他の三人が見逃す訳もなく質問攻めをしていく。

「ちなみに何が良かったのですか?」

「うい?! えつと……………キ、キスが」

「フムフム、他には?」



「ても悩みの一つになったわね〜！」

「……………」

「で、では三月先輩は自主規制○○○○をしなかったと？」

「へ？ 何それ？」

「「え？」」

「え？」

「「へ？」」

そこに居た四人の全員が？マークを出す。

「……………」何か非常に凄い勘違いをしているような気がするのだけ」

「同感です、姉さん」

「これはボクも予想だにできなかった事ですね」

「????」

「ず、少し良いですか三月先輩？」

桜の質問で、三月が何とその手の事は全く知らなかったことが判明した。

と言うか完全に『無知』であった。

「え？ キスで妊娠するんじゃないの？」と言った具合のレベルで、「赤ちゃんはコウノトリが持ってくる」。

何ともズレた三月であった。

先日の夜のもっと詳しい事を桜達が聞くと、確かにデイープAキスはしたらしいがその後すぐに士郎は頭に血が上って鼻血を出しながら気を失い、三月もクラクラする頭で自身と彼の着ていた衣類を急遽タオル&ティッシュ代わりに使った。

彼の容態が落ち着くと、血で汚れた服は洗濯籠に入れ、冷え性の自分は士郎のワイシャツを寝巻代わりに使い、「自分の部屋戻るのが面倒臭い」と考え、昔のように一緒の布団で寝た。

つまりはそれキスだけで、案外士郎が『夢』と覚えていたのはあながち間違つてはいなかった。

思い出して欲しいが、キャスターの媚薬効果のお線香鉢は人間にしか効果が無い上に『ほぼ完成』の状態であつて、『完成』では無かつた。第59話より付け加えるが、三月の肉体は『人間』だが、その他は違う。

「———という事だつただけど………あれ？ どしたん、三人とも？」  
何処かホツとしながら複雑な顔をする凜。

苦笑いを浮かべる桜。

そしてつまらなさそうなりカ。

「で、では僭越ながらこの桜が説明をしますね？ そもそも———」

その後、お風呂場でのぼせた凧と三月が桜とり力に連れ出される事となる。

原因は〇〇〇〇自主規制に詳しい桜の質問&説明を聞いた凧と三月であり、知識として凧は知っていたが、詳しいうえに生々しい桜の説明で凧と三月には刺激が強かつたらしく、二人仲良く(?)のぼせた。

という事で、誤解は『アレがあつた』と思つた人物達には解けたが、当人の片割れである士郎はそんな事は露知らず、未だに気が重かつた。

そしてその士郎はと言うと――

「――おい衛宮? 大丈夫か?」

――部屋で悶々と考えていて、普段は一言でも反応する一成の言葉にも何も言わなかつた。

「柳洞君、今の彼の注意を引きたければもつと強引にせねばならん」

「次郎殿?」

「今のヤツは一人で全てを背負い込もうとする癖があるからな。しかもその挙句、暴走する」

「た、確かに……………流石は従兄ですね」

一成には次郎アーチャーは士郎の『従兄』と説明されていた。







「たあ~~~~~」X

ブルル~~~~~ン。

「せえ~~~~~い」

ポヨン、ヨン、ヨン。

その場にいた殆どの者達（相手を務めていたクルミ以外）はマイの気の抜けた掛け声と動きと共に暴れるたわわな胸に釘付けになっていた。

「……………ぬう、流石成長した『私』」

「彼女の胸、大きいね」

「あれはただの駄肉と言うものです」

イリヤと弥生はワナワナと両手を震わせながら見ていたが——  
ハラリ。

「———あら?」

「———のわあああああ?!」

マイの浴衣がはだけ始めた直後にカリンとツキミが疾風の如くマイを近くのプリクラマシーンの中へと連行した。

「あ~~~~~れ~~~~~」

「姉貴は無防備過ぎだ、馬鹿!」

「そうや！ 恥じらいっちゆうモンが無いんか?！」

「でもでもくくくくく、意外と楽しかったわよくくく?」

「それとこれは違うぞ?! / 違うねんで?!」

そこからマイには「ステイ<sup>待機</sup>」を言い渡されて、ツキミとカリンの試合が始まった。

「268勝268敗564引き分けを269勝にしてやるぜ!」

「アホ抜かせ！ ボクのセリフや!」

場は士郎、一成、そしてアーチャーの居る部屋へと戻り、悶々としていた士郎が突然立ち上がる。

「……………よし」

「ん?」

「ようやくか、衛宮士郎」

囲碁盤から見上げた一成が士郎を見て、アーチャーが溜息を出しながら「やつとか」と言った表情になる。

「答えは得たようだな?」

「ああ、ちよつと行つて来る!」

士郎が部屋の中から出て行くのを見送る一成とアーチャー。



無数の？マークを出す宗一郎と違い、無数の♡マークを出すキャスターの二人はゆっくりとお風呂を共に過ごした。



「……のぼせると頭がぼくツとする」

土郎の問いに凜はただ唸り声をあげ、三月は通常運転だった。

「えつと、三月？　後で俺の居る部屋に来てくれないか？」

「良いよー」

「大事な話があるんだ」

「良いよー」

土郎が赤くなりながらそそくさとその場から去ると「ガバ！」つと三月も赤くなりながら体を起き上がらせる。

周りには「ニチャク」つと、小悪魔的にお上品(?)に三月を顔に乗っているタオルの下から笑う凜。

目をキラキラと光らせ、これ以上ない興味津々でな顔のりカ。

そしてニコニコしながらも苦笑いをする桜。

「……………何でさ」

その後の三月は無言で自身をからかう、愉快な顔の凜とりカから逃れる為に無理やり体に力を入れて土郎の部屋へと向かった。

代償は温泉饅頭3ダースと近くの売店の菓子パン全種類に凜と桜とりカ手持ちの財布の中身。



「ひゃあ、行って来るねー!」

さっきの態度から一転して、ルンルン気分で土郎達が居る部屋へと向かい、重い空気を出して落ち込む凜を、桜が愉悦で背中をゾクゾクしながら慰める。

「大丈夫です凜さん」

「うううううう……グスツ……リカ?」

「少し提案があるのですが——」

リカが「ニィ」つと、かなりあくどく、良くない事を明らかに考えている笑顔を凜に向ける。

「お邪魔しま〜す?」

三月が部屋のドアを開けると中には——

「………何で土下座?」

——頭を床に擦り付けるような姿勢で土下座していた土郎が居た。

「すまん!」

「何に?!」

「責任は必ず取る!」

「何の?!」

「この命に代えても三月は幸せにする！」

「変えちゃダメでしょうが?! とうか、何の——?!」

「戸籍は慎二達みたいにするとして藤姉の説得とお金の確保にバイトを増やして高校は中退するとして音子さんに頼んで酒屋と居酒屋のバイトもして貰えるように頼んで——」

アニメで言う、「グルグル眼」をしたまま士郎は早口で上記を言い——

「——だから人の話聞けや！」

「ゴハア?!」

彼女の声に顔を見上げて白い何かを見たと思った士郎は顔面キックを食らわされた。

「??????」

腫れあがる頬を抑えながら何故か申し訳なさそうな三月を士郎が見る。

「その………私もさつき聞かされたんだけど——」

そこで三月が語り始める。

ちなみに士郎の部屋にいる筈のアーチャーと一成は温泉へと出かけていた。

……

……

……

.....

.....

.....

.....

「.....」

何処か気まずい二人は互いを見ずに床を見ていた。

士郎は自分の早とちりに様々な覚悟や言葉を放った事に。

三月は自身の誤解と士郎の誤解が更なる誤解を回りの迷惑になっていた事など。

もうここまでくれば似た者同士も良いところである。

「あの——」

三月の声に士郎の体が「ビクッ」とする。

「——実は私も話があるんだ」

「.....?」

士郎がやつと頭を上げると、三月は困ったように彼に笑っていた。

「私ね——」

——『正義の味方』をやってみようと思うの」

『正義の味方』。

それは切嗣の人生を狂わせ。

士郎に深く関わって、彼の人生を一度は壊し、呪われ、そして今はある程度吹っ切れた呪縛だった。

「それは……………どう言う——？」

ドゴオオオオン!!!

士郎の問いかけを雷が落ちたかのような轟音と強い一瞬の光に遮られる。

「……………雨降っていたっけ？」

「ううん、ただの天罰♪」

「へ」

時は少し遡り、丁度宗一郎達が最初の爆音を聞くちよつと前までと戻る。

旅館周りの森の中に野良犬、番犬、そして負け犬の三人が歩いていた。

勿論三人とも浴衣姿だがその内二人は愛用の赤い槍と長刀を手に持っていた。

「な、なあ？ 懐中電灯ぐらい駄目か？ こうも暗くちや歩く速度が——」

「——駄目だ、それじゃあ奴さん達に気付かれる。 使い魔も無しだ」

野良犬番犬  
ランサー、アサシン、慎二負け犬が目指していたのは昼の露天風呂が見える場所だった。

「ッ！ 伏せろ！」

急にランサーの顔が険しくなり、アサシンが慎二を無理やり地面へと伏せさせると――

ビュンっ！

——三人の腰辺りを水平に目掛けてしなる鞭の様な剣が通る。

ボゴン！ メキメキメキメキツ！

刃が潰されているのか、剣はそのまま木に打ち込まれて、抉りこむ。

「チツ、小細工を！」

「どういう旅館なのだここは？ 結果は面妖な魔術師共が居たからには推測出来たが

………今のは明らかに我々の様なモノを意識した罠だった」

「な、なあ？ も、もう帰ろうぜ？」

ランサー達が立ち上がり、前へ進むと――

フォン。

「二——何イイイイイ?!」

——アサシンの片足の下に魔法陣が現れた。

「ふ、不覚!」

てつきり何かが起こると身構えたアサシンだが、何も起こらない事を不思議に思いながら重心を動きそうになるが慎二によって止められる。

「アサシン?! う、う、動くなよ?! そ、それは『地雷式』の陣だ!」

「何?! で、では私はどうすればいいのだ?!」

慎二が未だに光る陣を見つめる。

「……………こんな高度な術式、道具さえあれば解除出来るが今のままでは無理だ」

「俺にやらせてみ——」

「——ま、待てランサー!!! 近寄るな! これは英霊に反応するモノだ!」

「な?! おいちよつと待て! 何処の世界に対英霊地雷まで仕掛けている旅館が——

?!」

《普通に温泉を楽しめよランサー? 普通にな》第59話より

ランサーの頭をアーチャーの言葉が蘇って、彼は奥歯をギリツと噛み締める。

「——あの野郎! そういう事がよ、クソがああああああ?!」

「ど、どういう事だランサー?」

「アイツだ。アーチャーの野郎だ。お風呂場といい、さつきの劍の罠といい……さてはアイツ、ここを色々回ってたんだろ」

「だ、だがそのような素振りには——」

「——奴の事だ、ここに来る前の休憩所か、着いた途端だろ。それにこの地雷を良く見りゃあ、恐らくキャスターも一枚かんでいやがるぜ」

「……………行け、皆の者」

「ツ?!」

ランサーと慎二にアサシンが微笑みながらそう言う。

「この身は自分すら定かではない。『佐々木小次郎』という役柄を演じるだけの、名の無い使い捨ての劍士に過ぎぬ」

「アサシン……………」

「故に行け、戦友達よ。私の屍を超え、私の代わりにしっかりと勝利をその眼桃源郷に焼き付けよ!」

『戦友』。

ランサーにとっては意味深い物であり、もともと心から共感できる男の友はこの二人と出会う前は衛宮士郎しかいなかった慎二。

「お前……………変わったな」

慎二がボソリと何時もの癖でド直球にツッコむ。

「フ、じゃあ、先に行くぜ。相棒。行くぞ坊主」

「え。あ、アサシ~~~~~ン!!!」

慎二がランサーによって強引に先に連れて行かれ、アサシンは静かに夜になった夜空を見る。

「なんとまあ、奇妙なモノよ。この私に、俗世に関わる気などありはしなかったというのに……………」

そこに一つの鷲が近くの木からアサシンを見下ろしていた。

「……………すまぬ嘘です。私、いま嘘をつき申した。佐々木、本当はわりと寂しかった。何故なら山門に人は滅多に來ず、差し入れも可憐な少女達の気まぐれ以外に無く、夜は寒く、たまに何か來たかと思えば犬猫の類。それで良い筈が無い。断じて良い筈が無いのだ！」

お察しの通りになっているかもしれないが、ここでアサシンが言う「可憐な少女達」は三月、弥生、そしてイリヤである。

しかもお墓の見舞いの為。

後、彼の場所は山門の横のままとなっている（小さな警備小屋がキャスターによって与えられはされていた）。



「大空を舞い、風を切つてこそ燕というもの！」

アサシンが足元を恨めしそうに睨む。

「……………今、私は風になりたい。私は運命桃源郷へと羽ばたく!!! ついでに！ 可憐な

小鳥達と戯れるのも一興！ 傍らに美女なくして、何が花鳥風月かツツツ!!!」

カツとアサシンの目が見開いて、辺りに風がザザザと吹く。

「佐々木小次郎！ いざ、参る！」

静かに足腰にすぐに力を入れられるように筋肉を緊張状態にして、一番遠く、速く、たつた一步の足取りで飛べる距離の地形を探し出す。

全てはこの一瞬の為に、アサシンは全身全霊をかける。

女湯を覗く為だけにここまで来ると、もはや無粋な事を書く気が失せて来る程だった。

「ヌウンツツツツ！」

アサシンが燕の如き速さで駆け出し始め——

「——あ——」

——魔法陣が自身の足に引っ付いていたのを見てから、時は既に遅し。

チユドオオオオン!!!

これが一度目の爆発音である。

ちなみに驚はこの音で飛び去って行った。

「アサシン!!!」

「振り向くな坊主！ 奴の犠牲を無駄にさせるな！」

「僕はもうやだよ！ 沢山だ！ アサシンがやられるほどなんて、命が幾つあつても足りないじゃないか?！」

慎二がランサーの腕を無理やり解いて、肩を震わせながらそう叫ぶとランサーが口を開ける。

「シンジ。俺は無理強いしないぜ。けどよ、ここで逃げちまつてもいいのか？」

「ッ?!」

慎二がランサーを見ると、彼は夜空を見上げていた。

「そりや俺だつて死ぬのは怖いさ。逃げ出したくなる事もあるさ。だけど………命を懸けても絶対に譲れない事つてあると思うんだよな。『これさえやり遂げられれば、自分は一生胸を張つて生きていける』」

「(そうだ、僕は………確か——)」

「———そういう、何かに必死になるのつて大切な事じゃねえか？ だから俺は諦めない。だから俺は戦うんだ」

「お供します、兄貴！」

慎二がキリツとした目でランサーにそう宣言し、ランサーは愉快そうに笑う。

「よし! じゃあまだるっこしいのはもう止めにして、直接見に行くか?!」

もう一度書き写すが、これらは全て女湯を覗く為。

ここまでのレベルだと無粋な事を書く気が失せる。

「ちよ、直接見に行くつて——?!」

「——斜面を登つて! 直接見る! 今までの罠で僅かな時間差があつた。シン

ジが先行して、罠が完全に発動する前に、俺がぶつ潰す!」

そして二人は駆けだす。

夢を追いかけに。

女湯を覗き為に。

「ウオオオオオオオ!!!」

以前の男湯のように、剣が飛来してくるがランサーがこれらをすべて叩き落とす。

だが——

「クソ! ドジ踏んじまったぜ!」

——ランサーがアサシン同様に『地雷』を踏んだ。

「弱気になるな!ランサー!」

「へ、いいんだよ。自分の体の事は、自分が一番よく知つてらあ」

「ランサー……………」

「よし！ シンジ！ 俺の槍に捕まりな！ 俺がお前を投げる！」

「ええええええええええ?!」

「何モタモタしてんだ?! もう時間がねえんだ！」

「で、でも——」

「——俺とアサシンの死を無駄にする気か?! ここで動けないようなら 俺はテ  
メエを軽蔑するぜ?! それでも男かテメエ?!」

「うわああああああ!!!」

慎二がランサーの槍にしがみ付く。

『『突<sup>ゲ</sup>き穿<sup>イ</sup>つ死<sup>ボ</sup>翔<sup>ル</sup>の槍』!!!』

慎二が物凄いスピードで空を舞うのを、ランサーが笑みを浮かべながら見る。

「さあ行け。行くんだ。行つてその目に焼き付けてこいよ。そして後世に伝えるんだ、俺達がこの手で勝ち取ったものを」

慎二は空を飛ぶ紅い槍で体を喰つて飛翔してくる剣などの罫を避けていく。

「フヒヤハハハハハハハハ!!! (視える！ 僕にも視えるよランサー！ ヴェーダのバックアップさえあれば僕にも——!）」

ドゴオオオオン!!!

ランサーの地雷が爆発するのとほぼ同時に雷が慎二を襲い、彼の気を失った体が地へと落ちて行く。

そこはとある着替え室のアーチャーと一成だった。

「な?! ま、またですか」

「フ、だから気にするな。(愚かな者共だ。日が昇っている時間帯は女湯だが、夜になれば混浴と変わる)」

アーチャーがタオルを腰に巻きながら温泉の方へと続く扉をカラカラカラと開ける。

「(私達と来た女性陣なら、そのことをしっかりと把握はして、『ここにまた来る』などと言った愚の骨頂らしき行動をする者など——)」

「——あ。こんばんはアーチャーさん!」

「——居ただとおおおおおおおおおお?!」

アーチャーに首だけ振り返った少女の姿があった。

『どうしたのですか、次郎殿?』

「あれ? 柳洞さん?」

「(し、しまった! まさか混浴を気にしない者が居たとは不覚! ど、どうすれば——

——) ——し、失礼する!」

「へ」

アーチャーがザブザブと少女の方へと迫って――

「あれ？ 次郎殿？」

――カラカラカラとドアを開けて一成が今度は温泉に近づく。

「私はここだ」

一成が声の方へと見ると、アーチャーは夜の静まった山の風景を一成に背中を向けて見ていた。

「ああ、流石は次郎殿！ 背中姿が眩しすぎる！」

そう考え、更に尊敬する一成だがアーチャーはだらだらと冷や汗を掻いていた。

何故ならば――

「少し黙っていてくれ」

「う、うん……………」

――彼は大きな体を使って、アーチャーチョコンと小さく畏まって座る少女を匿っていた。

「次郎殿、隣を――」

「――私は孤高を別に好き好んでいる訳では無いが今は少しばかり一人でこの光景を眺めたい」

「おおおおく!!!(さすが次郎殿! 宗一郎兄に次ぐ男の中の男!)」

もし一成が実はアーチャーが必死に声が震えるのを我慢している理由を知ればどうなるか。

アーチャーはただジツツと無心になり、頭を空っぽにしながたただ前を見る。

「……………」

アーチャーの後ろで一成が温泉に漬かって、ただ静かな時間が流れていく。

「(凄い! 寺の者達でもこのように自然と『無』になれる者はそうそう無い! 流石は次郎殿だ! やはり宗一郎兄同様、尊敬に値する!)」

「……………」

更に時が流れ、一成はのぼせる前に出ながら無心になり、微動だにしないアーチャーに尊敬の目をもう一度向けてから温泉から出る。

彼の気配が着替え室から更に出るとアーチャーがふと思う。

「(そういえば一成君に『女子がまだいる』と言えば良かったのではないか?)」

そこで少女の頭が「コテン」とアーチャーの胸板に当たり、体ごと彼に寄り添う。

「んなっ?!」

一瞬何が起こったのか分からず、慌てふためくアーチャーだが――

「フニユ~~~~~」

——完全にのぼせて、目が回る彼女を見るとすぐに抱き抱えて、お湯から出——

「??? アーチャーさん?」

「ぬわああああああああ?! ちちちちちちがうのだこれは誤解だ——

!」

次に温泉に入つて来たクルミの声に、慌てるアーチャーの声のトーンは裏返つていった。

こうして、新御三家の温泉旅行はどたばたとしていた。

だがこれだけで終わる筈もなく、場はその日の夕飯へと変わり——

「キヤス子」

「はい、宗一郎様♡……………宗一郎様?」

改めて畏まった宗一郎の様子にキヤスターが躰説教していた野良犬ランサー、アサシン、良犬慎二から宗一郎の方へと向く。

説教されている三人は他の皆と一緒に食わずに、所謂『待て』状態であった。

「散々迷つたが、『ちゃんとした時を待つ』のではなく、『善は急げ』とマイ君に言われてな。これを渡したい」

宗一郎が片膝を床に付けて、ポケットから小さな箱をキヤスターの前へと伸ばす。



「そ、宗一郎様?」

「受け取って欲しい」

「パカリ」と小さな箱が開くと、中には指輪が一つあった。

「(ニコニコニコニコニコニコニコニコ)」

「な?!」

「「「「「おおおおおおおお!!!」」」」」

宗一郎の後ろにニコニコとするマイとは対照的に喫驚する一成、そして周りの女性陣(のほとんど)からは様々な反応。

未だに固まっているキャスターをじっと、表情の変わっていない宗一郎が見る。

「……………はい」

宗一郎の後ろにいるマイがコクコクと首を縦に振るのをキャスターが見て、思わず答え、彼がキャスターの手の指に指輪をはめる。

「あまり派手ではないが、今はこれがいっぱいだな」

「あ」

宗一郎の申し訳なさそうな言葉に、キャスターの頭が今の状況に追いついたのか、泣き始める。

「やっぱり説得しがいがあったわ」



## 第61話 「月は何時もそこにある」

新御三家+α 視点

衛宮邸では、何時もの景色に加えてイリヤも交じっていた、三月の代わりに。

三月本人はと言うと冬木市の顔見知り達にご挨拶ついでにとある事を伝えていた。

「少ししたら旅に出る」と。

殆どの人達の態度と反応は様々で、聞いた瞬間もう寂しがり人達や豪雨の如く泣く人達、果ては感情を押し殺し過ぎて性格が変わる者達も出ていた。

そんなこんなで、彼女は柳洞寺にいる者達にも顔を出していた。

昼の頃に三月は山門のアサシンの所に寄っていた。

「ん？ これはこれは——」

「——先日ぶりです、アサシンさん」

「私の事は『佐々木』で良いぞ？ もしくは『お兄様』と——」

「——— ないです」

「……………で、あるか。して、今日も墓参りか？」

「実は佐々木さんにお伝えしたい事がありました」

「??？」

「先日の『寂しい』に關しまして、姉妹達と話し合いをして———」

『いやっほ~~~~~い！♪』

アサシンの喜ぶ声が山中木霊して———

「———うるさいわよこのへっほこ侍！———つてあら？ 貴方は……………」

「あ、先日ぶりですキャスト子さん」

数か月前に三月が三月達になつた少し後に、根掘り葉掘り事情をキャストーは聞いていた。

これは勿論増えた彼女達の事もであつたが、先ずは自分や宗一郎が蘇つた事を訊いた。

だが色々と込み合うのは明らかで、当時の三月は戻る気がサラサラ無かつたので、彼女はとある取引をキャストーとしていた。

「——— 問おう、貴方が私のマスターか？」

「はいーっ」

「へブウ」

ほぼ忠実なセイバーコスプレをした三月が抱き着いて来たキャスターによつて変声を出す。

まあ、顔が荒い息遣いと興奮したキャスターにもみくちやにされていたので無理もないのだが。

「ハアハアハアハア！ つ、次はこのド、ドレスで暴君つぼく——」

そしてこれが取引内容で、「セイバーコスプレをさせる代わりに何も詳しい事は訊かない」であつた。

「あ、あの……そ、そろそろ本題に入りたいんですけどキャス子さん？」

「『く・ず・き』！ キャス子さん！」

「……………『葛木』キャス子さん」

「ハウ?! は、鼻血がツツ！ テイツシユ、ティツシユ、ティツシユ！」

あの温泉の出来事の後、すぐさまキャスターは行動に移つて戸籍上、宗一郎の名字を取つた。

「……………私は魔術師メディアに相談がしたい事があります」

三月の真剣な顔に、キャスターの顔もキリツとする。

「詳しく話さない」

ティツシユを鼻に押し付けたままキャスターは三月の言葉を聞く。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「成程ね、だから私に話したの.....」

「はい。この世界、歴代の魔術師である貴方なら私より適任かと」

「貴方に言われると、正直複雑な気分ね」

困ったようにキャスターが三月を見る。

「それで、可能でしょうか、メディアさん？」

「そうね.....」

キャスターが顎を手の上に休め、深く考え込む仕草をする。

「.....不可能ではない筈よ、理論上はね。それは貴方の特異性と、『この世界現

在の状況だからこそ可能』、と言った所よ」

「つまり……………」

「ええ、魔術師としては当然の行いだけれど規模が違うわ」

「ありがとうございます、葛木夫人」

「あああああ~~~~~ん!!!♡♡♡♡♡ も、もう一度!」

キヤスターの顔が何とも言えないダラケ高尾になり、体をクネクネとさせる。

「えっと、葛木先生が喜ぶものに一つ心当たりが——」

その夜、寺の離れに戻って来た宗一郎を待っていたのは——

「——お、お帰りなさいませ宗一郎様」

……………

キヤス子。その姿は?」

それは穂群原学園では数年前よくあった服装だった。

「せ、『セーラー服』なるモノと存じ上げます……………宗一郎様? メ、メガネが曇っ

ていますが、何か——?」

「——キヤス子。すまぬがその服装を時々これからもしてくれないか?」

「ツ! はい! 喜んで!♡♡♡♡♡」

キヤスターは宗一郎が初めて照れていた事に感動していた。

そして夜の冬木市の道を三月は一人で歩いていた。

「さてと、後は間桐邸と遠坂邸ね——

——ちよつと気が重いな」

間桐邸では三月の話に少し落ち込む桜と、その夜は未成年なのに酒をガブ飲みして、泣き上戸の慎二が泣き、桜とマイの二人に慰められていた。

遠坂邸ではある程度事情を把握していた弥生が居た事で間桐邸よりはスムーズに事は進んだ。

あとはサツパリとした性格のランサーとカリンが居た事が大きかった。

そして——

「——ただいまー」

「お帰り三月ちゃん♪」

「お帰りお姉ちゃん！♪」

「(ハア~~~~~イーちゃんマジ天使！)」



「お帰り——」

「——だからうどんやろ、普通？」

「——いやいや、無難に行くならソバ——」

「——三月助けて下さい。 またも関東関西戦争が——」

「——ホントツキミちゃん全然飽きないわね〜」

衛宮邸の居間では珍しく藤姉の姿もあった。

今までは聖杯戦争や、新都の急復興などでトラブルを避ける為のミーティングや藤村組のゴタゴタであまり顔を見せられなかった（これも理由の一つで温泉旅行に同行出来なかったのが彼女にかなり堪えた）。

「藤姉、後で話したい事があるの」

「もう、何時もそんな畏まらないのに急にどうしちゃったの〜？」

「実家絡みなので」

「Oh no.....」

大河の顔が一気に不安に落ちた。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

そして焼うどん&焼きそばに一気にご機嫌になる大河だった。  
何時も通りに忙しい大河である。

「ん~~~~~美味しい~~~~よ~~~~~!!!」

「そ、それで藤姉」

「ん~~~~~?」

「実は話が——」

.....

.....

.....

.....

.....

.....

…

そして久しい(?) 波乱が穂群原学園を襲った。

「「弥生さん帰っちゃうのくくく?!」」

「し・ず・か・に! 少し急だけど、元々彼女は無理を言って三月さんの居るこの学園に退院直後に留学生として突如来たんだから、仕方ない事です! まあ、正直に言うとは残念なのは私もだけどね」

これを聞いたY M Tの人達は血の涙を流しながら他のファンクラブ等と停戦協定を結んだ。

彼らの落ち込みぶりに同情しつつも、勝利を噛み締めた嬉しさもあったのは他の隊達の表情から明らかだった。

当人の弥生は――

「――面倒臭いなー! もうく!!!」

――愚痴りながらも授業を屋上でサボっていて、隣には寝ている三月の体が寄せついていた。

「弥生が帰国する」と学生達が聞いてワンサカ寄って来るので昼御飯どころ授業どころではない。

『テストスー、聞こえるー?』

『ええ、聞こえるわ。 今どこ?』

『アインツベルン城』

『じゃあ、数十キロ程度は問題無いわね。 後は——』

『——これが“アソコ”に行く際にもそのままだったらいんだけど』

それは頭の中で『自分』と会話をしていた弥生<sup>三月</sup>だった。

『いいの? 別に私が行っても良いんだけど——』

『——駄目。 もしもの場合は貴方とアーチャーさんにこの世界だけでも守って欲

しい』

『あれ?二人とも、もしかしてずっとここに居たのか?』

『あ、義兄さんこんちやうす』

屋上に昼<sup>ご</sup>飯を何時もの様に食べに来た士郎を弥生が声をかけ、士郎は彼女の隣の三月を見た。

『凄いいよ、お前達は。 まさか周りを守る『正義の味方』を世界単位でやろうとは』

『ん——………そうかな?』

三月の『正義の味方』は士郎とアーチャー両方の理想を融合したかのようで、『自分の力の範囲でベストを尽くす』。

普通の人からすれば割りとありふれた理想。

ただ彼女の場合、その『範圍』が他世界まで及ぶ。

これを最初に聞いた周りの新御三家の皆は吃驚したのは言うまでもない。

特にかつて、『正義の味方』に囚われた男性二人が。

ただこれに三月の考<sup>亦生</sup>えを伝えると珍しくアーチャーが一言だけ口にしていた。

「その先は地獄かも知れんぞ?」

「ハイ名言キタアアアアアアアアアアアアアア!!」

「…は?」

「何でもない、こつちの話」と、二人は話を流してそのまま続けてその覚悟は承知の上と伝えた。

………

………

………

………

………

………

………

そしてその日は来た。

天候は晴天で、陽光が辺りを照らし、空に雲一つ無かった日。

店を開店し始め、店の前を整える店主たち。

その日も学園へと歩いて登校する生徒の姿。

新都が復興し始めて会社へと通うスーツ姿の男女達。

それら全てが新しい一日の日課、所謂<sup>ルーチン</sup>プロトコル。

その中に混じらずにただ二人の少女が柳洞寺の裏手にある墓地の、とある墓石の前で手を合わせていた。

「……………」

弥生と三月の二人だった。

「……………それじゃあ、行つてきます『私』」

「行つてらっしゃい、『私』」

三月がくるりと回つて両手を前にかざして目を閉じる。

この際、目を閉じる必要はないのだがまあ……………雰囲気と集中の為だろう。

「(《font:ullog》Ping《font》に反応アリ。アクセスを要求<sup>接続</sup>」

……………《font:ullog》本体《font》より反応アリ、

受信の承諾——)」

——突然『ズウン』と何かが唸るような、お腹にくるような音と、場の歪みの様なモノと共に穴が三月と弥生の前に現れる。

「ここまでは順調ね」

「後は……………私が『私』のままですらられるかどうか……………か」

弥生は三月の体が震えているのに気付く。

「武者震い？」

「その通り！……………な訳、無いでしょうが」

「ここからは文字通り人生最大の賭けに出るもんね——」

「——待ってくれ！」

「え？」

突然後ろから聞こえた声に三月と弥生両方が振り返って眼を見開く。

「義兄さん？」

これに二人がビツクリするのは、土郎が原作同様、この世界でも切嗣の墓へお参りに来た事は一度も無かった。

最初こそ三月は誘っていたのだが、土郎が「自分が立派な『正義の味方になってから』との一点張りで、頑なに来たがらなかった。

「これ、お弁当。これから他の場所に行くんだろ？」

「……………うん、そうだよ」

「だったらせめて見送りぐらいさせてくれ」

「うん、だからさようなら」

「違うぞ、ほら弥生も」

「???」

困惑している三月と弥生に士郎がニカッと笑う。

「『行つてらっしゃい』、だろ?」

「……………」

「何処に行くのかは分からないが、疲れた時は何時でも帰つて来ても良いんだぞ? 家

族だからな」

その笑みと言葉は、10年前のあの日と似ていた。第2話より

それは『自分』と言う存在が初めて『個』として定義された日で、『人』として生まれた日でもあり、『暖かさ』をも知った日であった。

「……………ありがとう、士郎。でもそれはおじさんにお供えしてくれる? 私が今か

ら行く場所には持つていけないから(多分)」

「……………そうか。それじゃあ、アーチャーもいる事だし、丁度いいか」

「え?!」



三月と弥生が二人とも周りを見る、がアーチャーの姿は見当たらなかった。

「……………何時から気付いた、衛宮士郎?」

スウィットと、まるで霊体化から実体化する様にアーチャーが何時もの赤い外套ではなく、白いマントの様なモノを羽織っていた。

「お前が俺の可能性の一つなら、やる事は多分同じだろうと思つてな」

「あ、アーチャーさん? 今のは何?」

「君でも知らない物か、これはオレがまだまだ駆け出した頃、愛用していた物でな?

使用者を認識出来ないようにさせる代物だ。と言つても、認識出来ないというだけで防御力などは一切皆無。英霊になった今では使う事は無いと思つていたが……君三月に通用するとは案外、まだまだ使えるな」

アーチャーがマントを片手で触り、懐かしむように目を閉じる。

「お前も見送りか?」

「違うな、私の契約先がどのように世界を歩き来しているのか気になつただけだ」

「アーチャーさん…それって『英霊』として喋っているだけで、本音は?」

「何?」

アーチャーが面白くなさそうに片目を開けて弥生を見る。

「これでも貴方を見ていたからね。それぐらい分かるわ。多分、『心配して見に来



三月 視点

〔.....〕  
穴に入った瞬間、三月は分解された。

それは別に表現上ではなく、文字通りに。

〔.....〕  
彼女は原子、或いはそれ以下までの存在となり、「意識」と呼べるものは既になかった。

〔三号機の端末の帰還を確認、情報分析開始。《font》〕

〔.....〕  
【承認、三号機歯車に異常無し。 続いて回収、及び組m——】

〔.....〕  
ま も る

【エラー発生。 プログラムに異常感知。初期化を行います。】

〔.....〕  
みんな を まもる

【エラー発生。 初期化の拒否を確認。

エラーの解析を行います】



【初期化30%経過】

「I was not allowed to die,  
Nor was I allowed to live」

【初期化58%経過】

「Through the Eons,」

Through contact with others, and with the World, 《他者と知り合い、触れ合い、『世界』を知り、》

What I've Felt was the Infinite Possibilities of Life 《自ら感じた事は『無限』と言う名の『種の可能性』！》

【初期化76%経過】

Throughout this I have never once felt Despair

All I have ever Felt within was Hope for to  
！

【初期化98%経過】

「The "I" [that I am] "Now",

Is filled with Unlimited Possibilities [Wor  
無 限 の 可 能 性 で 満 ち て

！」  
 【初期化をじkk——

初期化、完了致シマシタ】

「……………」

ピクリと、ボンヤリとする意識の中で右手が反応する。  
 続いて両足、左腕と、次々と体が意識のまま反応する。

「…………… 同位体、同期開始」

『私』が目を開けると、そこは見知った景色だった。

真つ暗な場所で、辺りに星ドアがあった。

自分の体を見下ろす。

見知った体だった。

「…………… よっしやー！ 成功だー！」

思わず三月がガッツポーズをする。

「よし、次は——」

『——もしもしこちらミーちゃん。　こちらは真つ暗な晴天どころか夜空で——』

『——』

『——うっせえよ、このタコ！　聞こえているっつーの！』

三月は思わず『自分』の顔をキーンとする声にしかめる。

『………カリン？　あれ？　私は——』

『何時だと思つてんだこのバカ！　とつくに良い子は寝ている時間だぜ?!　でもまあ』

………元氣そうで良かったぜ、このクソ野郎』

『………おい、本物のカリンをどこにやった?』

『おまつ?!　ひ、人が心配して——』

『——ごめん。　私もテンパっていた。でもこれでパスの確認が取れた』

『まあ、その………何だ。　氣い張り詰めすぎるなよ?　本体。　アイツ等に氣を』

付けな。　時々帰つて来いよ。　皆、寂しがっているぜ?』

そこで三月は何かに気付いたかのように走り出す。

真つ暗な空間で「走る」と言うのも何なのだが、そのように動いているので他に表現のしようがない。

『じゃあ切るわ!　丁度良い仲間になるかも知れない奴を見つけた——!』

三月は『以前の自分』をなぞりながら、相手へと後ろから抱き着く。  
「てりやー♪」

「……………『三番目』か。今回は遅かったな」

見た目十代前半辺りの、黒い着物の黒髪赤眼で無表情な寝起きの顔を三月の方へと向く。

「ただいま、チーちゃん！♪ ちよつと、ね！♪」

「そうか……………別に『二番目』でもいいと言っているのに……………」

「え〜〜〜？ 味気ないじゃん！（あー、成程ねえ〜。クフちゃんの髪の毛、この子に似て……………ああ、この場合逆か。クフちゃんのヘアースタイルがこの子に似ているのか）」

「……………」

低いテンションのまま、興味なさそうにまた眼を閉じる『チーちゃん』。

「ねえ？ 一つ訊いてみていい？ 今忙しい？」

三月の切り出すそれは、彼女の人生で初めての**大博打**の、**第一歩**。

「……………別に」

「ここにいても気が滅入るだけだし一緒にバカンス取ろう？」

一か八か、三月の仲間になりそうな子を自分のペースに――



「—— ぼかんす」とは何だ?」

—— 引き込む以前の問題にハマってしまった。

思わず三月は固まり、内心をそのまま口にした。

「は? マジ? (そ、そこからか)」

三月の笑みが苦笑いへと変わる。

「まじ」とは何だ?」

訂正。

三月に笑みが苦笑いから冷や汗を出しながらひきつる顔へと変わって行く。

「…………… 良し! 決めた! ぜ〜〜〜〜〜〜んぶ、『お姉ちゃん』に任せなさい

!

三月が(あまり無い)胸を張る。

「…………… 我々は別に血族では——」

「—— 良いのよ! 私が先だったんだから上なの! 『お姉ちゃん』なの! 良い?

良いわね?!

そしてすかさず士郎式カウンターを入れる。第2話より

『先に来たから自分の方が上』。

大人からしてみればなんとまあ、子供らしい考えというか、何というか……………と言う

かここまで士郎に似るのは何も不思議ではない。

当時の彼女三月は初期化されて真機つ新機の状態だった。

彼女は記憶が無い状態でも心の奥底で『死に方』は知っていたが、『生き方』は今までしたことが無かったので知らなかった。

そんな彼女がモデルにしたのが身近にいてくれた人達である。

衛宮切嗣の『家族思い』、『正義の味方』、『時に理論的な判断』など。

藤村大河の『他人思い』、『元氣な振る舞い』、『コミュ力等々』。

そして衛宮士郎の『自分より他者を大事に』、後に『自分の周りを守る』へと変わる『ヒーロー』像。

等等々。

子供切嗣が大人のフリを。

ロボツト士郎が人間のフリを。

それらを否が応でも照大らす太陽を。

そしてその捻くれたところなど全てを機三月械月は見て、聞いて、真嘘似をする。

名前も体も記憶と人格さえ共に全て与えられた贗作。

それはロボツト士郎もある意味、同じ思いをして生きていた。

だが、そのロボツトは確かにこう言ったのだ。

人間として、自分を『フェイカー』と呼ぶ英雄王に対して。

「『人の定義は所詮、多数決』。結局は多い方の……つまり『本物』と『偽物』、どちらなのかは個人の主観とその時点における多数派の観点に拠る」第34話と。

その言葉は、後で少年の胸の中で生まれた自分と同調した際、機械に深く突き刺さった。

それは10年間もの間、コツコツと積み上げていた真似を『機能停止』されても『自分』を残す程だった。第47話より

そして現在に戻るが、未だにジト目で『チーちゃん』が三月を見ていた。

「(ウツ。流石に強引過ぎたか？ 怪しまれたか?)」

内心ハラハラドキドキの三月である。

目の前の彼女ならば『共闘者』であれば頼もしいことこの上ないが、『敵対者』となる  
と――

「(――マジで『ジ・エンド』になりかねないわ)」

「……………貴様を姉君と呼ぶ気は毛頭ない――」

「――デスヨネー――」

「――だがこの『ばかんす』と言うのは知らぬな」

「(ツ!) よ、よし! じゃあ出発するわよ! 丁度良い世界があるの!」

そして、存在し始めてから初めて『正義罪滅の味方ほし』の第一歩を三月達は踏み始める。  
それは永い旅新たな物語の始まりだった。

無理か無茶なのかも知れない。

だが、決して「無駄じゃなかった」と思いたいから。

その後&エキストラ編

## 第62話 沈んだ『ロボット』だった『ヒト』

衛宮邸 視点

「ハア〜……………」

本日で何度目かの溜息になるか分からない数にまた一つ足される。

「んー、これは想定外ですね。ハリセンかドロップキックはお見舞いしないのですか、

ツキミ?」

「いや、もうあの様子ずっと見たらコントをやるのも躊躇してまうがな」

リカとツキミが互いを見ず、ずっとボクツとしている人物を見ていた。

「シロウ……………」

衛宮士郎はここ数日間黄昏ていた。

その理由は彼の10年間、ずっと一緒だった義妹……………」

いや、今では思い人となった三月が居ない事だろう。

最初こそは気丈に振舞っていたが、彼女が「他世界で『正義の味方』<sup>正義</sup>して来るよ♡」と言い、姿を消した初日からその予兆はあった。

「「ん???'」」

その夜の味噌汁を飲んだ者達に猛烈な違和感が過ぎり、ツキミが口を開けた。

「何やこれ? ダシ、出てへんのんとちゃう?」

「あ! す、すまない皆! ダシ取るの忘れていた!」

士郎が申し訳なさそうに頭を下げた。

「へへ、珍しいね。士郎が料理で失敗するなんて」

「こういうのってあまりないの、タイガ?」

「ウツ……………イリヤちゃんの言い方に何かトゲを感じるけど……………そうね、少な

くとも私の知る限り無いわね……………パク——ブホオア?!」

大河がおかずの卵焼きを口に含めて瞬間、それを吹き出しそうになった。

「「藤姉?!」」

「タイガ?!」

「か、かか、か……………辛い」

卵焼きに砂糖ではなく塩がこんもりと使われていた。

更にその次の日、士郎の様子は学園でも不思議に思われた。

— と言うのも、何時もは学校の後に生徒会室に行き設備の修理とか人助けをする彼が—

「……………」

「? おい衛宮?! 半田ごて! 半田ごて!」

「あ?」

上の空の士郎の手に持っていた半田ごてが設備に密着していて引っ付いていた。

「義兄さん、具合大丈夫ですか?」

「あ……………ああ、クルミか」

— 一瞬笑顔になりかけの士郎だがすぐさま沈んだ顔の戻り、クルミの手を借りて立ち上がって、惨状を見る。

「あー、しまつた〜…」

「衛宮、大丈夫か? お前らしくもないぞ?」

「すまない一成……………これ片づけたら——」

「——義兄さんは帰って下さい。ボクが片付けて置きますから」

「……………本当にすまない、クルミ」

— そう言い残し、何時もとちよつと違う足取りの士郎を一成が見送る。

「一体どうしたというのだ?」

「……………」

クルミは何も言わずに一成が見ていない内に半田ごてを引つ付いた設備から取るも、内心は複雑な気分だった。

士郎が三月を一つの『個』として嬉しい半面、同じ存在である筈の自分達を『別物』と扱っているのが不思議だった。

……………

……………

……………

……………

……………

……………

……………

「お、お兄ちゃん？ 今日休んだ方が——」

「——大丈夫だよイリヤ。ハッハッハ」

「し、士郎？ 休んでいいのよ本当に？」

「大丈夫だって藤姉。ハッハッハ」



イリヤの心配する声も納得するほど士郎の顔は明らかにやつれ、彼を見た大河でさえ  
気遣いの言葉を送っていた。

「おいリカ、テメエ！」

「ぐえ」

士郎の様子を見に来たカリンに胸倉を着かれ、リカの足が地面から離れる。

「ぐ、ぐるじいです」

「面白がってないでお前は『アレ』を何とかしろ！」

「いやそれがなカリン？ ポクらも色々しようとしてんな？ セやけど逆効果みたいや

ねん」

「成程。では下姉様なら更に逆効果という事ですか」

「あ、だから私<sup>弥生</sup>を呼ばなかったの？」

弥生と引っ付いているライダーの言葉に、彼女がどこか納得する。

「……………調子狂うな」

「だよねー」

珍しく慎二と凜が何かに対して、意見が互いに初めて会った日である。

「……………」

弥生はただ士郎の背中姿を見て何かを思ったのか、すぐに円蔵山の方向へと駆け出し

て、近くのリカとカリンも強引に引っ張って行く。

「あ~~~~れ~~~~」

「ちよ?! ま?! 力つよ?!」

「行つてらつしや~~~~い」

マイは相変わらずの性格で三人を見送る。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「.....」

衛宮邸での士郎は更に『心ここに在らず』と言った表情で軒先に腰掛けて空を見ていた。

「.....ハア〜」

そして月の裏からひよつこりと出てくる付きの姿を見て溜息を出す。

「てやー♪ 暗い顔しているね、お兄ちゃん？」

イリヤが彼を後ろから抱き締める。

「そうか？」

「そうだよ」

「そうか……………」

「……………」

こうして二人はボーっと空をまた見始める事となつて数分後、イリヤが喋る出す。

「私じゃ、駄目なの？ 私はシロウの事が好きだよ？」

「イリヤ？」

何時もと違う彼女の様子に士郎は困惑した顔を向けようとする。

だがイリヤはがっしりと彼の首に回した両手でそれを阻止する。

「ダメ。今見ちゃダメ」

「……………」

「私はどんなシロウでも大好き。禿げたオジサンになろうが、おデブさんになろうが、

グウタラのダメダメになつても、死んでお墓に入つてもずっと好きだよ？」

「……………イリヤ、俺……………」

「……………あ、丁度良かった。士郎く！ イーちゃくん！」

二人が居る場の神妙な空気に誰かが彼と彼女達の名を呼ぶ。  
士郎達が声のした方を向くと弥生が何かを入れた巾着袋を持って――

「弥生、お前それどうしたんだ？」

返つて来た弥生はフリフリドレスを着ていた。

「あ、これ？ キヤス子に頼みを聞いてもらう代わりにね、ちよつと。 あ！ でもよく私に分かつたね？」

「当たり前だ。 伊達に10年間、共に生きて来た訳じゃない」

「ふくくくん？ それじゃあ心細い君にプレゼント、フォー・ユー！」

弥生が巾着袋から出したのは衛星電話だった。

しかも型が古く、そのままの在り方を説明すると『スカー・fois』に出てくる主人公が持っていたような、80年代物がしっくりと来る。

「電話？」

「フフフのフン！ ただの電話じゃないよ！ どの世界でも今のところオンリーワンの――！」

「今『今の所』って言ってなかった？」

「言つてた」

「――まあそこは良いや。 という訳で、ハイ！ イーちゃんから先にどうぞ！」

「え?」

イリヤの手に衛星電話が渡されて、彼女はキョトンとする。

「もう電話かけてあるから♡」

イリヤがおずおずと耳に当てる。

「……………も、もしもし?」

『もしもし?』

「え?! ミーちゃん?!」

「え?!」

イリヤの声に士郎がビツクリしながらも笑顔になる。

『あ、その声は、そっちの世界のイリヤ?』ね。ごめんね、変な期待させて? 私も私

“ なんだけれども、私はマルテウス。よろしくね!♡』作者の別作品、『バカンス(自

称) 姉』より

「え、えーと——?」

『——あんまり急の事だけど、話は弥生ちゃんから聞いた?』

「話? 何の?」

『……………あんのおつちよこちよい……………まあ、いつか。電話を義兄s——』士

郎“ に変わってくれる?』

「え？ う、うん」

『あ！ 待った、待った、待った！ おじさ〜〜〜ん!!!』

イリヤが士郎に電話を手渡そうとした時にマルテウスと言う人物から『待った』が掛かる。

『どうしたんだい、マルテウス君？』

「……………あ……………」

その声は、イリヤが久しく聞いていない声だった。

だが聞こえると同時にすぐに、何時もお墓参りでのお供え物のタバコの匂いを連想させた。

『ああ！ ちょっと電話変わってくれる？ あつちの世界のイリヤなんだけど——』

？』

『——何?! か、変わってくれるかい?!』

イリヤは目を見開いたまま、耳が痛くなる程電話の受話器を押し当てていても、心臓の鼓動音がうるさく聞こえる程力強く脈を打っていて、彼女を手は両方とも震えていた。

『も、もしもし。 イリヤかい？』

「ウ、ウウウウ——」


イリヤの頬をポロポロと涙が流れ出る。

『あまり詳しい事はマルテウス君に聞いては居ないけど………大変だったみたいだね？』

「うん………うん！」

『変な感覚だ。違う世界線のイリヤの声を聞くのは。多分、いっぱい僕と話をしたいのだろうけど。先ず僕から一言だけ言わせてくれないかい？』

「な、何？ キリツグ？」

「え、じいさん?! や、弥生?! こ、これは一体どういう——がツ?!」

「シイー——」

慌てる士郎の口を弥生が手で覆い、彼を黙らせる。

『ハハハ、さっきの声は誰だい——?』

『———あらキリツグ? どうしたの、そんなサイズの電話なんて持つて?』

「お、母様?」

『ああ、アイリかい? ちよつとね、違う世界のイリヤと話をね』

『そう………それってマルタちゃんの話の?』

『ああ。 つと、僕から一言。 ごめんねイリヤ? その………色々。 そつちの世界の僕は恐らく最後まで悔いたと思うけど………彼を代表して………寂しい

思いをさせてごめんね、イリヤ？　そしてありがとう、イリヤ。　君が居てくれたから結果的に僕は今、こうやって話せるようになったんだ』

「……………いやだ。　そんなの認めない」

『え？』

「そんな口から出まかせなんか信じられない。　だからパパが直接言いに来て？」

「ゴトツ」、とする音が聞こえ、受話器の向こう側からアイリスフィールの慌てた声が聞こえて来る。

『ど、どうしたのキリツグ?!』

『た、魂が抜けかけている?!　あまりの喜びに昇天し始めているわ?!』

『ええええええええええええええええええええええええ?!　どどどどどどしたら——』

—』

『ウラア！　みぞおちじや、ボケエ！』

『ちよ、マルタちゃん?!』

ドゴオン！

『ゴハア?!　ゲホゲホ、ゲホ！　あ、あれ？　僕は……………さつきまで、母<sup>ナタリア</sup>さんと話を

——あ！　それより聞いてくれアイリ！　イリヤが僕をパパと呼んだ夢を——

—!!!』



「——ウフ……アハハハハ！」

受話器の向こうが騒がしい事を聞き、イリヤが突然笑い始める。

……

……

……

……

……

……

……

結局イリヤに『パパ』呼ばわりされた切嗣（バカンス体）は骨抜きにされてとても会話を続けられる状態ではなくなり、代わりにイリヤはあちら側『バカンス（自称）姉』のアイリと色々喋りこむ。

と言つてもほとんどはアイリ（バカンス体）が色々といりやから聞いただけなのだが、イリヤはとても嬉しく、近くの弥生と土郎は心から幸せそうなイリヤの姿を見て共に和んでいた。

『ちよ、ちよつと……………アイリさん……………そ、そろそろ電話を……………』  
『あ、あら？ ごめんなさいねマルタちゃん？ じゃあ、イリヤ？ 良い子でいるのよ？』

「うん、ありがとう……………」

何処か躊躇するイリヤの声に、アイリ（バカンス体）が彼女に言葉をかける。

『“お母様”と呼んでも良いのよ？ さっきのキリツグが言い始めたように、私は厳密には貴方の母ではないかもしれない。でも、存在は一緒よ？ だから、甘えたいのなら何時でも歓迎するわ』

「うん……………ありがとう、ママ」

『ハウ?!』

「またも「ゴトツ」つと向こう側の電話が落とされる音が聞こえ、マルテウスがアイリを蘇生させる。

『という訳でイーちゃん？ 士郎に代わってくれる？』

「うん、ありがとう」

電話が士郎にまた渡される。

「……………もしもしっ」

『ちよつと待つてね〜？ 電話の連絡先を変えるからね〜』



銃の発砲音に似た何かと、またも歯医者さんのドリル音の様な高い機械音が聞こえて来る。

「あー、すまない三月。多分だけど弥生が俺達の為に——」

『——知っている！ 私に訊いてきたから！ 私も士郎の聲が聞こえて嬉しいわ！でも今はちよつと立て込んでいるから！』

「らしいな。 だけど凄い音だな？」

『でしよう？ 自業自得なんだけど、厄介な相手達と死闘の最中なの』

「三月」

『何、士郎?!』

「俺はお前の聲が聞こえて嬉しいよ」

『……………わ、私もだよ』

三月の照れた声と共に士郎も照れる。

『ねえ士郎？ 何時になるか分からないけど時々帰れる時には帰るからね？』

「そうか」

『でも……………もし士郎か、他の人が士郎と付き合いたいと言うのなら私は反対しないよっ……』

「え」

『士郎は気にしないって言うけど、私は士郎の枷になりたくないの——』

『——斬撃包圍陣！ 皆の者、私に続け——！』

『——藤堂機?! ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ?! いつの間に——?!』

「ブツリ」と電話が強引に切られる音と共に、士郎は電話を弥生に渡す。

「……………（三月の奴、元氣そうだな）」

色々と突っ込みたいところはあるが、生憎その場にツツコミ役は誰も居なかった。

「うん！ やっぱり義兄さんはその表情が似合う！」

「え？」

士郎は気付いていなかったが、先程の数秒間の会話で彼の様子は以前の様にと一転していた。

しかも満面の笑顔で。

「……………そうだな。 ありがとう弥生」

「ううん。 本当ならもうちよつと後にコレを出すつもりだったから。 でも、最近の

貴方は凄く落ち込みようで、見ていられなくて……………」

「……………そうか、ありがとうな」

「はひよ」

士郎が何時もの癖で弥生の頭を撫でると、彼女は意味不明な音を出しながら赤くな

る。

「(き、流石エロゲ主人公！　い、いや、これは彼と過ごした時間の記憶も関係しているの——?!)」

——と言った具合の思考が弥生の頭の中をグルグルと回っていた。

「フウ~~~~~ン？」

「な、何だよイリヤ？」

「ううん、べつにー？ 『流石キスマでした事となると変わるなー』って」  
「フア?!」

士郎が素っ頓狂な声を出して、イリヤは悪戯っぽく笑った。

「ミーちゃんが気にしないなら、やっぱり私も士郎と付き合いおうかな？」

「イ、イ、イ、イリヤ?!」

「あ、なら私が『私』に伝えておくね？」

「ちよ、俺を無視するな！」

「シロウは私の事、嫌い？」

「ウツ」

イリヤの上目遣い&潤んだ眼から顔を背ける士郎。

「士郎氏」

「リ、リカ?!」

「もし気になるとしたらお門違いですよ。『本体』が言ったように私達は気にしませんから。そもそも『一夫多妻』や『一妻多夫』、果ては『多夫多妻』の方が『一夫一妻』より歴史は長く、性感染症の大流行などの恐れから今広がっている『一夫一妻』の方が公衆衛生的な観点から集団の維持で有利となり、社会に定着——」

何時の間にか帰って来たリカの、スラスラと説明する事に頭を抱える士郎と愉快そうなイリヤであった。